(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第248集

北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ
建設に伴う埋蔵文化財調査報告第1集

下植木壱町田遺跡

中世館跡とその周辺の調査

1999

建　　設　　省
群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料
99-
No.1831
(財)群馬県埋蔵文化財
調査事業団保管
平成11年7月1日
01-353
702
1(5)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第248集

北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ
建設に伴う埋蔵文化財調査報告第1集

下植木壱町田遺跡

中世館跡とその周辺の調査

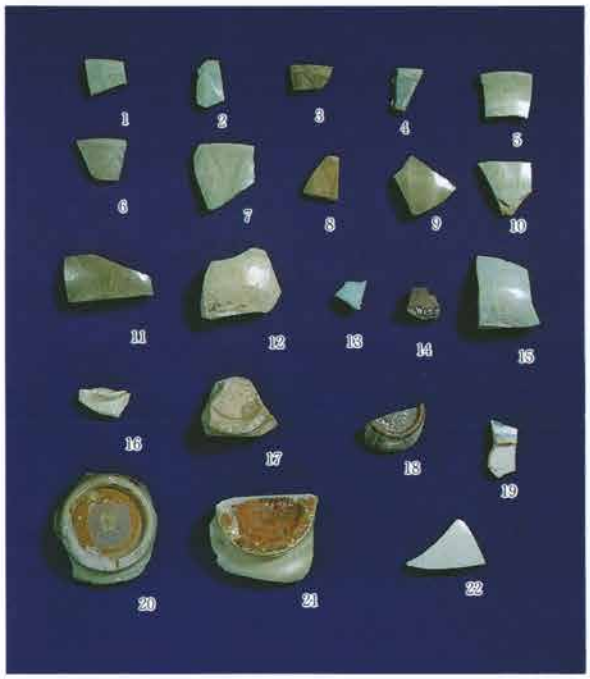
1999

建設省
群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

口絵　1

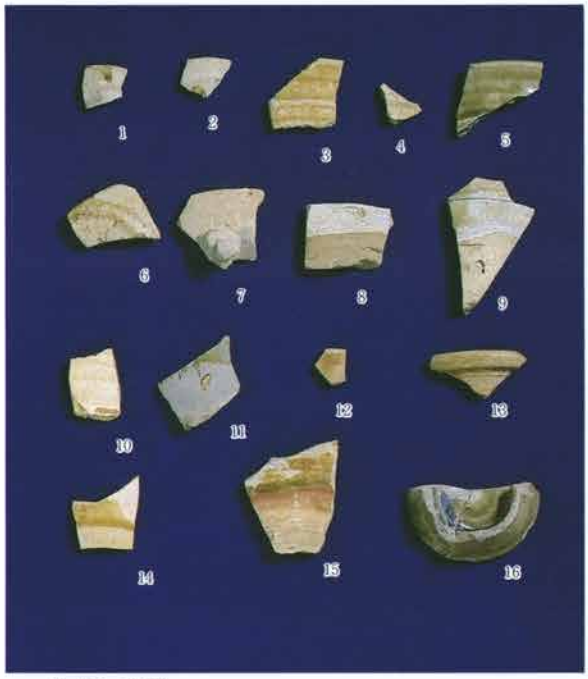
1区南堀内部分　中世面全景

口絵　2



中国陶磁器

1．遺構外－1　2．同－3　3．同－2　4．4－28土－1　5．遺構外－11　6．1－855土－1　7．遺構外－4　8．同－5　9．1－1堀－31　10．遺構外－6　11．同－7　12．同－10　13．1－1堀－32　14．遺構外－14　15．1－1堀－29　16．遺構外－13　17．同－8　18．1－1堀－33　19．遺構外－12　20．1－1堀－30　21．遺構外－9　22．1－1堀－28



国産陶磁器

1．1－1掘立－1　2．1－256土－1　3．1－1堀－24　4．1－10掘立－1　5．1－1堀－26　6．遺構外－3　7．同－4　8．1－1堀－25　9．同－27　10．1－255土－1　11．1－515土－1　12．遺構外－1　13．1－325土－2　14．1－1堀－23　15．遺構外－2　16．同－5

口絵　3

漆　器

1－1堀－49

1－2入口－1

1－5井－5

1－1井－1

1－1井－2

序

本書は、伊勢崎市の西部、三和町を中心とした地域に所在する『下植木壱町田』遺跡に関し、建設省が伊勢崎インターチェンジ建設に伴う事前発掘調査を県教育委員会に委託し、県から再委託を受けた群馬県埋蔵文化財調査事業団が、平成８年から同９年にかけて実施した発掘調査およびその整理結果に関する報告書です。

遺跡周辺は一見平坦に見えますが、実際には丘有り、谷有り、川有り、湧き水有りと起伏に富み、土地改良や工業団地造成に起因する伊勢崎市教育委員会の発掘や、北関東自動車道建設に起因する当埋文事業団の発掘等で、これまでに、旧石器時代から縄文時代、古墳時代、歴史時代と、きわめて重要な遺跡の発見が相継ぎ、埋もれていた歴史が次々と明らになりつつあります。

この地域は、上武道路が完成する以前にさほど注目されることはなく、西に隣接する前橋市や伊勢崎市の中心地に比較して、のどかな風景が広がっていました。しかし、上武道路の開通にあわせて周辺に物流基盤が整備され、さらに、東関東と結ぶ本県三本目の高速道路となる北関東自動車道が完成すると、二つの基幹道路にアクセス可能な地として、周辺の重要性は倍加されることになります。建設省はこのような事情を背景に、北関東自動車道の伊勢崎インターチェンジ建設を計画し、事前に広範な範囲で埋蔵文化財の発掘調査が必要となった次第です。

本書の刊行が、この地域に居住する人々に知られざる土地の歴史を広め、また、末長く基本的な資料として活用され、ひいては県民の郷土愛を育む礎となることを念願いたします。最後になりましたが、建設省高崎工事事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には大変な御盡力を賜りました。銘記して、心から感謝申し上げます。

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　菅野　清

例　　言

1．本書は、北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ建設に伴う事前調査である。また、本遺跡は昭和59・60年度に一般国道17号（上武道路）改築に伴い事前調査され、同63年３月に報告された『上植木壱町田遺跡』の南北に隣接するが、同書が諸般の事情から『下植木壱町田遺跡』の名称を使用しなかったことから、遺跡名として通番を付していない。なお、『上植木壱町田遺跡』部分と遺構が連続し、合成その他引用する必要が生じた場合には、その都度「上植木調査区」と明記して掲載することとした。

2．遺跡所在地　伊勢崎市三和町2703番地ほか

3．事 業 主 体　群馬県教育委員会（建設省）

4．調 査 主 体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間及び担当者

（1）発掘調査　調査期間　1996(平成８)年４月１日～1997(平成９)年７月31日

担当課長　平成８年度　岸田治男

平成９年度　能登　健

調査担当　平成８年度　石塚久則　角田芳昭　飯森康広

平成９年度　中沢　悟　角田芳昭

（2）整　　理　調査期間　1998(平成10)年４月１日～1999(平成11)年３月31日

担当課長　平野進一

整理担当　飯森康広

新井悦子　今井サチ子　渡辺フサ枝　小池　縁　白井和子　矢野純子

新井加寿恵

（3）事　　務　常務理事　菅野　清　赤山容造　　事務局長　原田恒弘　赤山容造

管理部長　蜂巣　実　渡辺　健　　調査研究部長　赤山容造　神保侑史

総 務 課　小渕　淳　坂本敏夫　国定　均　笠原秀樹　井上　剛　小山建夫　須田朋子

吉田有光　柳岡良宏　岡嶋伸昌　宮崎忠司　大澤友治

吉田恵子　松井美智代　内山佳子　星野美智子　羽鳥京子　菅原淑子

若田　誠　山口陽子　佐藤美佐子　本間久美子　北原かおり　本地友美

狩野真子

6．報告書作成関係者

編　　集　飯森康広

本文執筆　第１章第１節　神保侑史、　第４章第１節　津島秀章

上記以外　飯森康広

縄文土器観察　関根慎二

古墳・平安時代遺物の年代比定　坂口　一

墨書土器文字判読・瓦観察　木津博明

上記以外の遺物観察　飯森康広

遺構写真撮影　発掘調査担当者　技研測量設計株式会社(航空写真)

遺物写真撮影　　佐藤元彦

金属器・動物遺存体保存処理　　関　邦一　土橋まり子　小材浩一　高橋初美

木器・植物遺存体保存処理および実測・樹種同定プレパラート作成　　高橋真樹子　田中富子
田中のぶ子

分析・委託　　火葬人骨・馬歯鑑定　　宮崎重雄（群馬県大間々高校教諭）
石材鑑定　　飯島静男（群馬地質研究会）
樹種同定・種実分析　　株式会社　パレオ・ラボ
自然科学分析　　株式会社　古環境研究所
鉄滓分析　　赤沼英男（岩手県立博物館）
遺構遺物図測量トレース　　株式会社　測研

7．中世陶磁器の選定・観察については、当事業団職員木津博明、大西雅広、坂井　隆にご指導をいただいた。

8．発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）。

建設省、伊勢崎市教育委員会、山田昌久（東京都立大学）、星野正明、平田貴正
坂爪久純（境町教育委員会）、大江正行ほか当事業団職員諸氏。

9．調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センター及び(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

10．発掘調査にあっては、地元伊勢崎市をはじめとし、前橋市、東村等から多くの方々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

参考文献

中世遺構

- 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ－』　（財）富山県文化振興財団　1994年
- 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－総論編』長野県教育委員会他　1990年

中国陶磁器

- 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について　－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』　1978年
- 森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.２』日本貿易陶磁研究会　1982年
- 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.２』日本貿易陶磁研究会　1982年

中世遺物

- 「古瀬戸編年表」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第５輯』1997年
- 赤羽一郎・中野晴久「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』永原慶二編　小学館　1995年
- 『新編　高崎市史資料編３　中世Ⅰ』
- 木津博明「上野国に於ける在地生産土器に就いて　－上野国分僧寺・尼寺中間地域を中心にして－」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』　日本中世土器研究会　1989年
- 星野守弘「中世内耳鍋類について」『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書』高崎市遺跡調査会他　1994年

凡　　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2．遺構図については、下記の縮尺で掲載したが、一部縮尺の異なるものがあるので各挿図中にスケールを貼付してあるので参照されたい。

住居跡	1：60	住居跡のカマド	1：30	掘立柱建物跡・柱列	1：80
土坑	1：40・60・80	鍛冶遺構・土壙墓	1：40	火葬跡	1：30
堀・溝	1：60・80・100	井戸跡	1：60		

3．遺構図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。

As－B・FA・Hr－HP　砂礫　粘土　砂

焼土　灰　柱痕　攪乱

4．遺物図の縮尺は下記のとおりであるが、それ以外のものは各挿図中にスケールを明記してある。

古銭・石鏃・臼玉　1：1　　鉄器　1：2

土器　坏・椀・皿類・鍋類・鉢・破片、漆器椀・皿、瓦、鉄滓、砥石、石斧　1：3

土器　壺・甕類、木器製品、くぼみ石、敲石、石皿、石鉢　1：4

木杭・柱材、板碑、石臼・茶臼　1：6

5．遺物図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。

遺物　施釉　黒色処理　摩滅部分　ケイ化物付着部分

羽口　酸化部分　還元部分　ケイ化部分

なお、テフラについては記号を用い、Hr－FAのみ略称としてFAを用いた。正式名称と給源、降下年代は下記のとおりである。

Hr－HP　榛名八崎テフラ　4.0～4.2万年前　　AT　姶良Tnテフラ 2.2～2.5万年前

As－BP　浅間板鼻褐色（群）テフラ　1.7～2.1万年前

As－YP　浅間板鼻黄色テフラ　1.3～1.4万年前　　As－C 浅間Cテフラ　4世紀中葉

Hr－FA　榛名二ツ岳渋川テフラ　6世紀初頭　　As－B 浅間Bテフラ　西暦1108年

As－A　浅間Cテフラ　西暦1783年

参考文献　町田洋・新井房夫　著　『火山灰アトラス』[日本列島とその周辺] 1992

6．遺物写真は、遺物図とほぼ同じ縮尺で掲載してある。

7．本書で使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院　1：50,000　「前橋」・「大胡」・「高崎」・「深谷」

伊勢崎市都市計画区域図　1：2,500

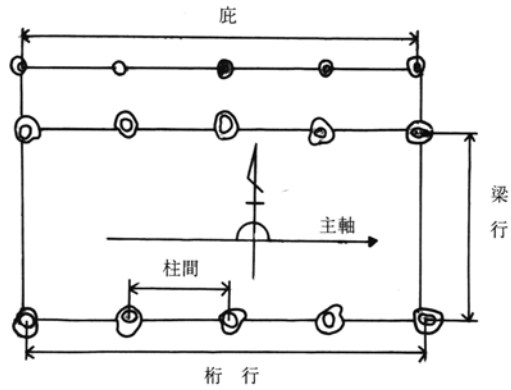
8．遺物観察表（土器）の法量は、口径を口、底径を底、器高を高と略し、また高杯・台付甕の杯部口径・脚部底径・台部底径は各々杯・脚・台と略した。なお、推定径には全て（ ）を付すこととした。

遺物観察表（石器・鉄器類）の規模は、欠損品の数値は（ ）を付して完形品と区別し、別に推定径が求められるものについては、その都度推定径等と記載した。

9．遺物観察表（土器）の色調は、農林水産省農林水産技術会議　監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修「新版標準土色帖」に拠った。

10. 竪穴住居跡の主軸方位については、カマドを有する辺に対して直交方向を主軸として計測を行った。カマドを有しないものについては、北辺に対して直交方向を主軸として計測を行った。土坑の主軸方位は長辺を基準とし、火葬跡は張り出しを有する辺を基準として直交方向を主軸方位とした。

11. 掘立柱建物跡の各部の名称及び各計測値は、以下に図示したとおりである。全体規模については梁行×桁行の順で、庇を伴う場合は＋を付すこととし、下図の例は（１＋１）×４間と表した。また、全体規模の計測値はメートルと尺表記を併記したが、尺は30.3㎝を基準として使用した。掘立柱建物跡の認定は平面測量図（１：50）を方眼図（尺基準）に載せて抽出し、現地で柱穴の形状及び埋土と総合判断して認定した。このため、計画寸法は総長寸法が優先するが、柱間寸法は現地で各柱穴の芯々をスチールテープで計測した数値を使用した。ただし、１区18・24・25号掘立柱建物跡、３区１号掘立柱建物跡は整理段階で認定したため、柱間寸法も図上計測値である。柱痕跡も、現地で平面又は断面確認できたものについて認定し、現地で計測した数値のみを採用した。庇は、柱穴の規模・形状及び柱間が、身舎部分と異なることを基準として認知したため、廊下である可能性も含んだ名称である。



目　　次

口絵
序
例言
凡例
本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
第２章　調査の方法 …… 3
　第１節　調査の方法 …… 3
　第２節　調査区の設定 …… 3
　第３節　基本土層 …… 5
第３章　地理的環境と歴史的環境 …… 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 9
第４章　検出された遺構と遺物 ……14
　第１節　旧石器時代 ……16
　第２節　古墳時代 ……18
　　第１項　竪穴住居跡 ……18
　　第２項　溝 ……32
　　第３項　まとめ ……32
　第３節　平安時代 ……34
　　第１項　竪穴住居跡 ……34
　　第２項　鍛冶遺構 ……44
　　第３項　溝 ……47
　　第４項　As－B下水田跡 ……47
　　第５項　まとめ ……48
　第４節　中世 ……49
　　第１項　１区 ……52
　　１．掘立柱建物跡・柱穴列 ……52
　　(1)堀内部分 ……52
　　(2)堀外部分 ……78
　　２．方形竪穴建物跡 ……86
　　３．土坑・柱穴 ……86
　　(1)堀内部分 ……86

(2)堀外部分 ……96
4．土壙墓 ……100
5．火葬跡 ……101
6．堀・溝 ……103
7．入口遺構 ……116
8．井戸跡 ……124
第2項　2区～4区 ……138
1．掘立柱建物跡・柱穴列 ……138
2．土坑・柱穴 ……142
3．土壙墓 ……146
4．火葬跡 ……147
5．井戸跡 ……147
第3項　まとめと問題点 ……155
1．遺構の変遷と特徴 ……155
(1)館跡とその周辺　(2)掘立柱建物跡　(3)土坑　(4)土壙墓・火葬跡　(5)1号堀　(6)井戸跡
2．遺物 ……181
(1)在地土器　(2)国産施釉陶器　(3)中国陶磁器　(4)石鉢・石臼・茶臼
第5節　近世以降 ……186
第1項　溝 ……186
第2項　馬蹄痕 ……188
第3項　集水遺構 ……189
第4項　まとめ ……190
第6節　時期不明及び遺構外遺物 ……191
第1項　土坑・土坑群・粘土採掘坑 ……191
第2項　遺構外遺物 ……194
第5章　自然科学分析 ……202
1．群馬県、下植木壱町田遺跡の自然科学分析（1）……（株）古環境研究所 202
2．群馬県、下植木壱町田遺跡の自然科学分析（2）……（株）古環境研究所 213
3．群馬県、下植木壱町田遺跡の自然科学分析（3）……（株）古環境研究所 223
4．下植木壱町田遺跡出土炭化材の樹種同定 …… 植田弥生（株）パレオ・ラボ 238
5．下植木壱町田遺跡出土木材の樹種同定 …… 松葉礼子（株）パレオ・ラボ 241
6．下植木壱町田遺跡の樹種同定 …… 松葉礼子（株）パレオ・ラボ 245
7．下植木壱町田遺跡から出土した大型植物化石（1）…… 新山雅広（株）パレオ・ラボ 250
8．下植木壱町田遺跡から出土した大型植物化石（2）…… 新山雅広（株）パレオ・ラボ 251
9．下植木壱町田遺跡の岩石について …… 飯島静男 252
10．遺物の自然科学調査からみた下植木壱町田遺跡における鉄生産活動 …… 赤沼英男 253

挿図目次

第 1 図　調査範囲図 …… 2
第 2 図　調査区設定図 …… 4
第 3 図　基本土層位置図 …… 5
第 4 図　基本土層図 …… 6
第 5 図　遺跡周辺の地形分類図 …… 8
第 6 図　周辺の遺跡（1） …… 10
第 7 図　周辺の遺跡（2） …… 11
第 8 図　全体図 …… 15
第 9 図　旧石器時代出土遺物と出土地点土層断面図 …… 16
第10図　旧石器時代遺物出土地点と試掘トレンチ位置図 …… 17
第11図　1区1号住居跡 …… 18
第12図　1区1号住居跡出土遺物（1） …… 19
第13図　1区1号住居跡出土遺物（2） …… 20
第14図　1区2号住居跡 …… 21
第15図　1区2号住居跡出土遺物 …… 22
第16図　1区3号住居跡 …… 23
第17図　1区4号住居跡 …… 24
第18図　1区6号住居跡・出土遺物 …… 25
第19図　1区6号住居跡掘り方 …… 26
第20図　1区7号住居跡・出土遺物（1） …… 26
第21図　1区7号住居跡・出土遺物（2） …… 27
第22図　1区9号住居跡 …… 28
第23図　1区10号住居跡・出土遺物 …… 29
第24図　1区11号住居跡・出土遺物 …… 30
第25図　1区12号住居跡・出土遺物 …… 31
第26図　1区13号住居跡・出土遺物 …… 31
第27図　1区14号住居跡 …… 32
第28図　3区14号溝土層断面 …… 32
第29図　4区14号溝 …… 33
第30図　1区5A号住居跡 …… 34
第31図　1区5A号住居跡出土遺物 …… 35
第32図　1区5B号住居跡・カマド …… 36
第33図　1区5B号住居跡掘り方 …… 37
第34図　1区5B号住居跡出土遺物（1） …… 38
第35図　1区5B号住居跡出土遺物（2） …… 39
第36図　1区5B号住居跡出土遺物（3） …… 40
第37図　1区8号住居跡出土遺物（1） …… 41
第38図　1区8号住居跡・カマド・出土遺物（2） …… 43
第39図　1区1号鍛冶遺構・出土遺物 …… 44
第40図　1区2号鍛冶遺構・出土遺物 …… 45
第41図　1区3号鍛冶遺構・出土遺物 …… 46
第42図　3区1号鍛冶遺構・出土遺物 …… 47
第43図　4区4号溝 …… 48
第44図　3区As－B下水田跡エレベーション・南壁・畦部土層断面 …… 48
第45図　1区・4区・「上植木調査区」中世面全体図 …… 50
第46図　1区南堀内部分全体図 …… 51
第47図　1区11号掘立柱建物跡・433号土坑 …… 52
第48図　1区12号掘立柱建物跡 …… 54
第49図　1区13号掘立柱建物跡・294号土坑 …… 55
第50図　1区14号掘立柱建物跡 …… 56
第51図　1区15号掘立柱建物跡・363号土坑・30号掘立柱建物跡 …… 57
第52図　1区31号掘立柱建物跡 …… 58
第53図　1区33号掘立柱建物跡 …… 59
第54図　1区1号柱穴列 …… 59
第55図　1区2・4・16・28号柱穴列 …… 60
第56図　1区7号掘立柱建物跡・246号土坑 …… 61
第57図　1区8号掘立柱建物跡 …… 62
第58図　1区9号掘立柱建物跡 …… 63
第59図　1区10号掘立柱建物跡・出土遺物 …… 64
第60図　1区20号掘立柱建物跡 …… 65
第61図　1区34号掘立柱建物跡・6号柱穴列 …… 66
第62図　1区17・8・22号柱穴列 …… 67
第63図　1区1号掘立柱建物跡・出土遺物 …… 68
第64図　1区2号掘立柱建物跡・45号土坑 …… 69
第65図　1区3号掘立柱建物跡 …… 70
第66図　1区4号掘立柱建物跡 …… 71
第67図　1区5号掘立柱建物跡 …… 72
第68図　1区6号掘立柱建物跡 …… 73
第69図　1区16・17号掘立柱建物跡 …… 74
第70図　1区29号掘立柱建物跡・出土遺物 …… 75
第71図　1区3・25号柱穴列 …… 76
第72図　1区15号柱穴列 …… 77
第73図　1区19号掘立柱建物跡 …… 77
第74図　1区18・25号掘立柱建物跡 …… 78
第75図　1区27号掘立柱建物跡 …… 79
第76図　1区10・14号柱穴列 …… 80
第77図　1区23号掘立柱建物跡・12号柱穴列 …… 81
第78図　1区24号柱穴列 …… 82
第79図　1区21号掘立柱建物跡 …… 82
第80図　1区22号掘立柱建物跡 …… 83
第81図　1区24号掘立柱建物跡 …… 84
第82図　1区26号掘立柱建物跡・11号柱穴列 …… 85
第83図　1区1号方形竪穴建物跡 …… 86
第84図　1区44・129・211号土坑・出土遺物 …… 87
第85図　1区47・55・64～68・70・71号土坑 …… 88
第86図　1区72A・72B・75・78・90・488・1075号土坑・出土遺物 …… 89
第87図　1区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物（1） …… 91
第88図　1区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物（2） …… 93
第89図　1区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物（3） …… 95
第90図　1区堀外部分土坑・出土遺物（1） …… 97
第91図　1区堀外部分土坑・出土遺物（2） …… 98
第92図　1区1021号土坑・792号柱穴・出土遺物 …… 99
第93図　1区1・2号土壙墓・出土遺物 …… 100
第94図　1区火葬跡（1） …… 102
第95図　1区火葬跡（2） …… 103
第96図　1区1号堀土層断面・遺物出土状況・調査区画割配置図 …… 105
第97図　1区1号堀出土遺物（1） …… 106
第98図　1区1号堀出土遺物（2） …… 107
第99図　1区1号堀出土遺物（3） …… 108
第100図　1区1号堀出土遺物（4） …… 109
第101図　1区1号堀出土遺物（5） …… 110
第102図　1区1号堀出土遺物（6） …… 111
第103図　1区2号溝 …… 111
第104図　1区2号溝出土遺物 …… 112
第105図　1区3号溝出土遺物 …… 112
第106図　1区6・7号溝・出土遺物 …… 113
第107図　1区8・9号溝・出土遺物 …… 114
第108図　1区10・14号溝 …… 115
第109図　1区1号入口遺構 …… 116
第110図　1区1号入口遺構遺物出土状況 …… 117
第111図　1区1号入口遺構出土遺物（1） …… 118
第112図　1区1号入口遺構出土遺物（2） …… 119
第113図　1区1号入口遺構出土遺物（3） …… 120
第114図　1区1号入口遺構出土遺物（4） …… 121

第115図　1区2号入口遺構・出土遺物（1）…… 122
第116図　1区2号入口遺構・出土遺物（2）…… 123
第117図　1区4号入口遺構 …… 124
第118図　1区3号入口遺構・20・21号柱穴列・出土遺物 …… 125
第119図　1区1号井戸跡・出土遺物 …… 127
第120図　1区2号井戸跡・出土遺物（1）…… 128
第121図　1区2号井戸跡・出土遺物（2）…… 129
第122図　1区3号井戸跡・出土遺物 …… 130
第123図　1区4号井戸跡・出土遺物 …… 131
第124図　1区5号井戸跡・出土遺物 …… 132
第125図　1区7号井戸跡・出土遺物 …… 133
第126図　1区8・9号井戸跡・出土遺物 …… 134
第127図　1区10号井戸跡・出土遺物 …… 135
第128図　1区11号井戸跡 …… 137
第129図　3区1号掘立柱建物跡 …… 138
第130図　4区1・2号掘立柱建物跡・6・10号土坑 …… 139
第131図　4区3号掘立柱建物跡・7・8号土坑・4号掘立柱建物跡 …… 140
第132図　4区1号柱穴列 …… 141
第133図　4区土坑・出土遺物（1）…… 142
第134図　4区土坑・出土遺物（2）…… 143
第135図　4区土坑・出土遺物（3）…… 144
第136図　4区土坑・出土遺物（4）…… 145
第137図　4区1・2号土壙墓・出土遺物 …… 146
第138図　3区1号火葬跡 …… 147
第139図　2区4・5・7号井戸跡・出土遺物 …… 148
第140図　2区6号井戸跡・出土遺物 …… 149
第141図　4区1号井戸跡・出土遺物（1）…… 150
第142図　4区1号井戸跡・出土遺物（2）…… 151
第143図　4区1号井戸跡・出土遺物（3）…… 152
第144図　4区2・3号井戸跡・出土遺物 …… 152
第145図　4区4号井戸跡・出土遺物（1）…… 153
第146図　4区4号井戸跡・出土遺物（2）…… 154
第147図　掘立柱建物跡・柱穴列主軸方位別分布グラフ …… 156
第148図　1区堀内部分遺構新旧関係模式図 …… 156
第149図　1区堀内部分主軸分類別配置図（1）…… 157
第150図　1区堀内部分主軸分類別配置図（2）…… 158
第151図　1区堀内部分柱穴分布図 …… 159
第152図　1区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類別配置図（1）…… 162
第153図　1区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類別配置図（2）…… 163
第154図　掘立柱建物跡規模別分類図（1）…… 165
第155図　掘立柱建物跡規模別分類図（2）…… 166
第156図　掘立柱建物跡規模分類別柱穴規模一覧 …… 169
第157図　1区土坑主軸別分布グラフ …… 170
第158図　4区・「上植木調査区」土坑主軸方位別分布グラフ …… 171
第159図　1区堀内部分・4区土坑主軸方位別分布図 …… 171
第160図　1区土坑主軸方位別分布図 …… 172
第161図　「上植木調査区」土坑主軸方位別分布図 …… 173
第162図　在地土器カワラケ形態分類図 …… 181
第163図　在地土器鍋・内耳鍋形態分類図 …… 183
第164図　3区溝群土層断面 …… 187
第165図　4区2号溝 …… 188
第166図　3区馬蹄痕・出土遺物 …… 188
第167図　4区1・2号集水遺構・出土遺物 …… 189
第168図　1区1号粘土採掘坑 …… 191
第169図　1区2号粘土採掘坑・1147・1148号土坑 …… 192
第170図　3区1号土坑群 …… 193
第171図　3区7・8号土坑 …… 194
第172図　遺構外出土　縄文時代遺物（1）…… 194
第173図　遺構外出土　縄文時代遺物（2）…… 195
第174図　遺構外出土　古墳時代遺物 …… 195
第175図　遺構外出土　古代土器・瓦（1）…… 195
第176図　遺構外出土　古代瓦（2）…… 196
第177図　遺構外出土　古代瓦（3）…… 197
第178図　遺構外出土　古代瓦（4）…… 198
第179図　遺構外出土　古代瓦（5）…… 199
第180図　遺構外出土　中世在地土器 …… 200
第181図　遺構外出土　中世国産施釉陶器 …… 200
第182図　遺構外出土　中世焼締陶器 …… 200
第183図　遺構外出土　中国産陶磁器 …… 201
第184図　遺構外出土　銅銭 …… 201
第185図　遺構外出土　石鉢・石臼 …… 201
第186図　遺構外出土　鉄砲玉 …… 201
第187図　自然科学分析図（1）…… 206
第188図　自然科学分析図（2）…… 210
第189図　自然科学分析図（3）…… 215
第190図　自然科学分析図（4）…… 218
第191図　自然科学分析図（5）…… 222
第192図　自然科学分析図（6）…… 225
第193図　自然科学分析図（7）…… 231
第194図　自然科学分析図（8）…… 232
第195図　自然科学分析図（9）…… 237
第196図　3区41号溝杭列 …… 247

付図1　全体図
付図2　中世面全体図
付図3　1区南堀内部分全体図
付図4　3区全体図

表　目　次

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 12・13
第2表　掘立柱建物跡・柱穴列主軸方位一覧表 …… 49
第3表　1区1号堀出土土器・石器一覧表 …… 104
第4表　1区堀内部分遺構新旧関係基礎資料 …… 156
第5表　1区掘立柱建物跡柱間尺数（桁行）…… 167
第6表　1区掘立柱建物跡柱間尺数（梁行）…… 168
第7表　3・4区掘立柱建物跡柱間尺数（桁行・梁行）…… 169
第8表　下植木壱町田遺跡形態別中世土坑計測値分析表 …… 175～177
第9表　「上植木調査区」形態別中世土坑計測値分析表 …… 177・178
第10表　中世在地土器カワラケ遺物観察表 …… 181・182
第11表　中世在地土器鍋・内耳鍋遺物観察表 …… 183・184
第12表　中世在地土器鉢・茶釜・火鉢遺物観察表 …… 184・185
遺構計測表 …… 260～271
遺物観察表 …… 272～287

写真図版目次

口絵１　１区南堀内部分中世面全景
口絵２　中国陶磁器・国産陶磁器
口絵３　漆器

遺構写真

ＰＬ１　１．遺跡の周辺地形（北方面）
　　２．遺跡の周辺地形（南方面）
ＰＬ２　１．１区南堀内部分全景（１）
ＰＬ３　１．１区中世面全景
　　２．１区南堀内部分全景（２）
ＰＬ４　１．１区中世面堀外部分
　　２．１区中世面１号堀北部分周辺
　　３．１区中世面北堀内部分
　　４．２区全景
　　５．５区全景
ＰＬ５　１．３区北部分
　　２．３区南部分
　　３．４区全景
ＰＬ６　１．２区旧石器出土地点
　　２．３区旧石器出土地点土層断面
　　３．１区１号住居跡全景
　　４．１区２号住居跡全景
　　５．１区３号住居跡全景
　　６．１区４号住居跡全景
　　７．１区６号住居跡全景
　　８．１区７号住居跡全景
ＰＬ７　１．１区９号住居跡全景
　　２．１区９号住居跡柱穴１
　　３．１区９号住居跡柱穴２
　　４．１区９号住居跡柱穴４
　　５．１区10号住居跡全景
　　６．１区10号住居跡遺物出土状態
　　７．１区10号住居跡柱穴２
　　８．１区10号住居跡柱穴３
ＰＬ８　１．１区11号住居跡全景
　　２．１区12号住居跡全景
　　３．１区13号住居跡全景
　　４．１区13号住居跡掘り方
　　５．１区14号住居跡全景
　　６．３区14号溝全景
　　７．４区14号溝全景
ＰＬ９　１．１区５Ａ号住居跡遺物出土状態（１）
　　２．１区５Ａ号住居跡遺物出土状態（２）
　　３．１区５Ａ号住居跡遺物出土状態（３）
　　４．１区５Ａ号住居跡遺物出土状態（４）
　　５．１区５Ａ号住居跡土層断面
ＰＬ10　１．１区５Ｂ号住居跡全景
　　２．１区５Ｂ号住居跡掘り方
　　３．１区５Ｂ号住居跡カマド
　　４．１区５Ｂ号住居跡内土坑１
　　５．１区５Ｂ号住居跡内土坑２
ＰＬ11　１．１区８号住居跡全景
　　２．１区８号住居跡遺物出土状態
　　３．１区８号住居跡カマド
　　４．１区８号住居跡土層断面
　　５．１区８号住居跡貯蔵穴
ＰＬ12　１．１区１号鍛冶遺構全景
　　２．１区１号鍛冶遺構遺物出土状態
　　３．１区２号鍛冶遺構全景
　　４．１区２号鍛冶遺構土層断面
　　５．１区３号鍛冶遺構土坑１全景
　　６．１区３号鍛冶遺構土坑１土層断面
　　７．３区１号鍛冶遺構土坑１
　　８．３区１号鍛冶遺構土坑４
ＰＬ13　１．３区１号鍛冶遺構土坑３
　　２．３区１号鍛冶遺構土坑３
　　３．４区４号溝全景
　　４．４区４号溝Ａｓ－Ｂ堆積状況
　　５．３区Ａｓ－Ｂ下水田跡北部分
　　６．３区Ａｓ－Ｂ下水田跡南部分
　　７．３区Ａｓ－Ｂ下水田跡南部分畦
　　８．３区Ａｓ－Ｂ下水田跡南部分畦土層断面
ＰＬ14　１．１区南堀内部分北側
ＰＬ15　１．１区南堀内部分南側
ＰＬ16　１．１区11・12号掘立柱建物跡全景
　　２．１区12号掘立柱建物跡Ｐ５土層断面
　　３．１区４・13・16号掘立柱建物跡全景
　　４．１区13号掘立柱建物跡内294号土坑全景
　　５．１区16号掘立柱建物跡内287号土坑全景
ＰＬ17　１．１区４・13・16号掘立柱建物跡全景
　　２．１区６・14・15号掘立柱建物跡全景
ＰＬ18　１．１区30号掘立柱建物跡全景
　　２．１区17号掘立柱建物跡内15号土坑全景
　　３．１区３・９号掘立柱建物跡全景
　　４．１区５・７・８・10・17号掘立柱建物跡全景
ＰＬ19　１．１区20号掘立柱建物跡全景
　　２．１区１・２号掘立柱建物跡全景
　　３．１区２号掘立柱建物跡Ｐ６
　　４．１区１号掘立柱建物跡Ｐ１
　　５．１区１号掘立柱建物跡Ｐ４
　　６．１区１号掘立柱建物跡Ｐ５
　　７．１区１号掘立柱建物跡Ｐ９
ＰＬ20　１．１区19号掘立柱建物跡全景
　　２．１区27号掘立柱建物跡全景
　　３．１区14号柱穴列全景
　　４．１区15・16号柱穴列全景
　　５．１区23号掘立柱建物跡全景
　　６．１区12号柱穴列全景
　　７．１区21・22号掘立柱建物跡・10号柱穴列全景
　　８．１区21号掘立柱建物跡全景
ＰＬ21　１．１区22号掘立柱建物跡全景
　　２．１区21号掘立柱建物跡・24号柱穴列全景
　　３．１区26号掘立柱建物跡全景
　　４．１区11号柱穴列全景
　　５．１区１号方形竪穴建物跡全景
　　６．１区１号方形竪穴建物跡土層断面
　　７．１区１号方形竪穴建物跡Ｐ２
　　８．１区１号方形竪穴建物跡Ｐ３
ＰＬ22　１．１区66号土坑全景
　　２．１区55・64～68・70～72Ａ・Ｂ・75・90号土坑全景
　　３．１区282号土坑全景
　　４．１区325号土坑全景
　　５．１区514～516号土坑全景
　　６．１区655・656号土坑全景
　　７．１区671～674号土坑全景
　　８．１区854・855号土坑全景

ＰＬ23　1．1区962号土坑全景
2．1区1021号土坑全景
3．1区1号火葬跡炭出土状態
4．1区1号火葬跡土層断面
5．1区2号火葬跡全景
6．1区2号火葬跡土層断面
7．1区3号火葬跡全景
8．1区3号火葬跡土層断面
ＰＬ24　1．1区4号火葬跡全景
2．1区5号火葬跡全景
3．1区5号火葬跡土層断面
4．1区6号火葬跡全景
5．1区1号堀Ａ断面
6．1区1号堀Ｂ断面
7．1区1号堀Ｃ断面
8．1区1号堀Ｄ断面
ＰＬ25　1．1区1号堀Ｈ区画手杵出土状態
2．1区1号堀Ｈ区画内耳鍋出土状態
3．1区1号堀Ｘ区画漆器皿出土状態
4．1区1号堀Ｙ区画漆器椀出土状態
5．1区2号溝Ａ断面
6．1区6号溝全景
7．1区7号溝遺物出土状態
8．1区10号溝全景
ＰＬ26　1．1区1号入口遺構全景
2．1区1号入口遺構遺物出土状態（1）
3．1区1号入口遺構遺物出土状態（2）
4．1区1号入口遺構杭1
ＰＬ27　1．1区1号入口遺構杭2
2．1区1号入口遺構杭3
3．1区1号入口遺構杭4
4．1区2号入口遺構全景（1）
5．1区2号入口遺構全景（2）
6．1区2号入口遺構杭1
7．1区2号入口遺構杭2
8．1区2号入口遺構杭3
ＰＬ28　1．1区3号入口遺構全景
2．1区3号入口遺構遺物出土状態（1）
3．1区3号入口遺構遺物出土状態（2）
4．1区3号入口遺構馬歯出土状態
5．1区1号井戸跡全景
ＰＬ29　1．1区2号井戸跡全景
2．1区2号井戸跡土層断面
3．1区3号井戸跡全景
4．1区3号井戸跡土層断面
5．1区4号井戸跡土層断面
6．1区5号井戸跡全景
7．1区5号井戸跡土層断面
8．1区7号井戸跡全景
ＰＬ30　1．1区8号井戸跡全景
2．1区8号井戸跡土層断面
3．1区9号井戸跡全景
4．1区9号井戸跡土層断面
5．1区10号井戸跡全景
6．1区10号井戸跡土層断面
7．1区11号井戸跡全景
8．1区11号井戸跡土層断面
ＰＬ31　1．3区1号掘立柱建物跡全景
2．4区1～4号掘立柱建物跡全景
3．4区1号掘立柱建物跡全景
4．4区2号掘立柱建物跡全景
5．4区2号掘立柱建物跡内6号土坑全景
6．4区3号掘立柱建物跡全景
7．4区3号掘立柱建物跡内7・8号土坑全景
8．4区2号土坑全景
ＰＬ32　1．4区14号土坑全景
2．4区15号土坑全景
3．4区17～23・39号土坑全景
4．4区26・40号土坑全景
5．4区27号土坑全景
ＰＬ33　1．4区1号土壙墓全景
2．4区2号土壙墓全景
3．3区1号火葬跡全景
4．2区5号井戸跡全景
5．4区1号井戸跡全景
6．4区1号井戸跡土層断面
7．4区2号井戸跡全景
8．4区2号井戸跡土層断面
ＰＬ34　1．4区3号井戸跡全景
2．4区3号井戸跡土層断面
3．4区4号井戸跡全景
4．4区4号井戸跡遺物出土状態
5．4区4号井戸跡土層断面
ＰＬ35　1．3区1号溝全景
2．3区41号溝東半分
3．3区41号溝西半分
4．3区41号溝木杭出土状態
5．3区65号溝全景
6．3区81号溝全景
7．4区2号溝全景
8．3区馬蹄痕検出状態
ＰＬ36　1．4区1号集水遺構全景
2．4区1号集水遺構土層断面
3．4区2号集水遺構全景
4．1区1号粘土採掘坑土層断面
5．1区2号粘土採掘坑全景
6．1区1147・1148号土坑全景
7．3区1号土坑群全景
8．3区8号土坑全景

出土遺物写真

ＰＬ37　第1節　旧石器時代
ＰＬ37～ＰＬ40　第2節　古墳時代
竪穴住居跡（ＰＬ37～40）
ＰＬ40～ＰＬ44　第3節　奈良・平安時代
竪穴住居跡（ＰＬ40～43）
鍛冶遺構（ＰＬ43・44）
ＰＬ44～ＰＬ53　第4節　中世　1区
土坑・柱穴・土壙墓（ＰＬ44）
火葬跡（ＰＬ45）　堀（ＰＬ45・46）
溝（ＰＬ46・47）　入口遺構（ＰＬ47～50）
井戸跡（ＰＬ50～53）
ＰＬ53～ＰＬ56　第4節　中世　2～4区
4区土坑・土壙墓（ＰＬ53・54）
2・4区井戸跡（ＰＬ54～56）
ＰＬ56　第5節　近世
馬蹄痕（ＰＬ56）　集水遺構（ＰＬ56）
ＰＬ57～ＰＬ59　第6節　時期不明及び遺構外遺物
縄文時代（ＰＬ57）　古墳時代（ＰＬ57）
古代（ＰＬ57・58）
中世在地土器（ＰＬ58）　銅銭（ＰＬ59）
石鉢・石臼（ＰＬ59）　鉄砲玉（ＰＬ59）
ＰＬ60～ＰＬ72　第5章　自然科学分析

報告書抄録

フリガナ	シモウエキイッチョウダイセキ
書名	下植木壱町田遺跡
副書名	北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第２４８集
編著者名	飯森康広
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	群馬県勢多郡北橘村下箱田784-2
発行年月日	西暦１９９９年3月２５日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下植木壱町田 シモウエキ イッチョウダ	伊勢崎市三和町 イセサキシ サンワチョウ	10204		36°20′50″	139°13′15″	19960401～19970731	27,696	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下植木壱町田		旧石器時代		石器	
	集落	古墳時代	竪穴住居　12軒 溝　2条	土師器	
	集落 生産	奈良・平安時代	竪穴住居　3軒 鍛冶遺構　4基 溝 水田	土師器・須恵器・瓦・鉄滓	9世紀後半～10世紀前半にわたる小鍛冶に関連する竪穴住居跡と土坑を検出。
	館跡 集落	中世	掘立柱建物　37棟 柱穴列　20列 方形竪穴建物　1基 土坑　124基 土壙墓　4基 火葬跡　7基 堀　1条 溝　8条 入口遺構　4ヶ所 井戸跡　18基	中国青磁・染付・古瀬戸・在地土器・木器・漆器・石鉢・石臼	南北の長さ約120mの堀で区画された館跡と堀外部分に配置された掘立柱建物群。(14世紀後半～16世紀前半)
		近世	溝 馬蹄痕 集水遺構　2基		
		時期不明	粘土採掘坑　2基 土坑　4基 土坑群		

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

茨城、栃木、群馬の３県を結ぶ北関東自動車道は平成５年11月に施工命令が初めて出され、既に本県の高崎市から茨城県ひたちなか市に至る約150㎞全線が事業化されている。本県でも高崎ＪＣと伊勢崎ＩＣ間約15㎞の工事が平成７年度より行われている。北関東自動車道の建設工事は、日本道路公団が行っているが、伊勢崎ＩＣと一般国道17号の上武道路を接続する道路については、建設省と日本道路公団の協議の結果、建設省が行うこととなった。

伊勢崎ＩＣと上武道路を接続する伊勢崎市三和町字壱町田の地域は、既に上武道路建設工事の際、上植木壱町田遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を行っている。本遺跡は、接続道路内にも広がっていることが事前に明らかになっていたため、関係機関の協議の結果、工事実施前に同遺跡の記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成８年度、９年度の２ヶ年で行うことになり、(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団が建設省より発掘調査の委託を受けた群馬県教育委員会より再委託を受けて実施した。　　(神保)

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成８年４月12日から平成９年７月31日まで15か月間で調査対象面積27,696㎡を実施した。調査区は、中央部を東西に走向する一般国道17号線（上武道路）によって南北に分断されることから、北側に位置する２・３・４区を先行して調査終了した後、南側１・５区に事務所を移設して調査を行う計画のもと調査を開始した。このため、南側調査時の事務所用地とするため、６月24日から１区表土掘削を開始したところ、予測以上の遺構数を確認し、特に南堀内部分では中世の掘立柱建物跡などが複雑に重複することから、随時検討する期間を確保しながら調査を進めるため、10数名程度の調査班を分班して先行調査することに計画変更した。なお、12月に入り急遽１区調査区内の工事行程として、橋脚用地の早期引き渡しが要請されたことから、１月末から全班体制に切り換えて調査することとなり、年度末には東側低地部を残して調査を完了した。

調査第２か年目となる平成９年度は、前年度の計画変更によって中途となってしまった３区南・４区北と、１区一部・４区南（８年度事務所用地）・５区の調査を行った。遺構量としては、４区中世面を除けば少なく、特に面積8,600㎡を持つ５区において遺構が検出されなかったため、当初予定よりも大幅な調査期間短縮となった。

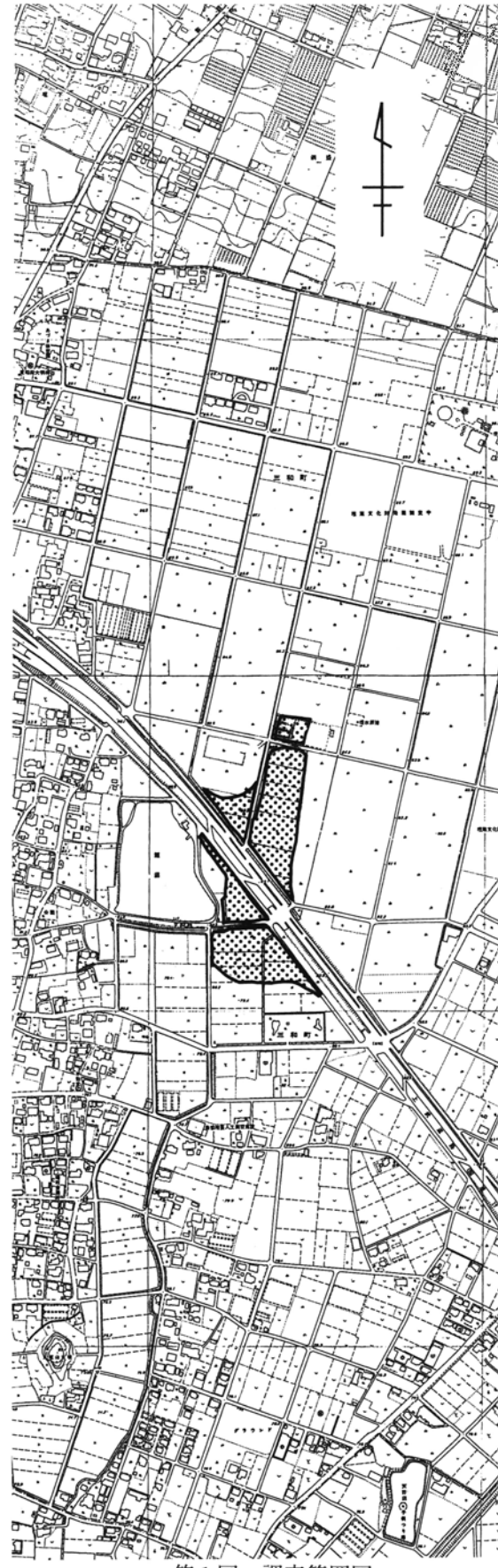
日誌抄録

平成８年度

1996年 4.12　発掘調査事務所の設置、調査準備。
17　３区グリッド発掘調査開始。
5．1　１区グリッド発掘調査開始。
15　３区北　表土掘削。
6．4　３区北　近世以降溝群調査開始。
24　１区表土掘削及び中世面調査開始。
7．4　３区近現代面をバルーンにより航空写真撮影。
30　３区Ａs－Ｂ下水田跡の調査開始。１区１号堀の調査開始。
8．8　１区南堀内部分掘立柱建物跡・土坑調査開始。
29　３区全景をバルーンにより航空写真撮影。
9．3　３区全景を高所作業車で写真撮影。
11　３区旧石器時代試掘調査開始。
24　２区表土掘削。
10.11　栃木県埋蔵文化財センター職員研修(40数名)のため来跡見学。
15　２区近世以降面調査開始。
23　４区北　表土掘削。
11.初　殖蓮公民館公開講座受講者（館長ほか10数名）研修のため来跡見学。
15　１区堀外部分調査開始。
19　２区旧石器時代試掘調査開始。
26　２・４区全景を高所作業車で写真撮影。
12．5　３区南　Ａs－Ｂ下水田跡調査開始。
10　３区北調査終了。
12　１区南堀内部分全景を高所作業車で写真撮影。
1997年 1．9　１区北堀内部分中世面・４区北Ａs－Ｂ下面調査開始。
13　２区調査終了、埋め戻し。
2.12　１区堀外部分の竪穴住居跡・旧石器時代試掘調査開始。
20　１区中世面をバルーンにより航空撮影及び南堀内部分航空測量。
24　１区堀内部分の竪穴住居跡の旧石器時代試掘調査開始。
3.26　１区東側低地部を残し調査終了。

平成９年度

1997年 4.14　１区東側低地部及び周辺竪穴住居跡・西側農道際、３区南、４区南調査開始。
30　１区東側低地部、３区南、４区南Ａs－Ｂ下面を高所作業車で写真撮影。
5．1　１区低地部トレンチ、３区南溝・土坑、４区南溝調査開始。
23　伊勢崎市小学校の教員40名来跡見学。
26　５区試掘トレンチ調査開始。
6.16　１区南土坑・井戸など調査開始。
23　３区南旧石器時代試掘調査開始。
7．8　４区南中世面を高所作業車で写真撮影。
11　５区調査終了、埋め戻し。
31　１・３・４区調査終了、埋め戻し。



第１図　調査範囲図

第２章　調査の方法

第１節　調査の方法

発掘調査にあたっては、便宜上調査区内を通る国道・市道によって、１～５区の調査区に分け実施したが、５区では遺構が検出されなかった。調査は下記によって行った。

①掘削機（バックホー）による表土（現耕作土およびAs－B混土層）の掘削。

②遺構確認作業の結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸跡、水田跡などを検出した(第1面)が、１区では竪穴住居跡と中世遺構が重複することから、中世面終了後竪穴住居跡の調査を行った。

③埋没土層堆積状況の観察用ベルトを任意に設定して、移植ゴテほかにより遺構を掘削した。

④遺構断面（縮尺１／20）測量および写真撮影。

⑤遺構平面測量にあたっては、平板を使用し任意に縮尺１／10、１／20、１／40、１／100を選択して行った。但し、広範囲に及ぶ測量及び精度を要求される堀内部分の測量は、技研測量株式会社に航空測量委託した。

⑥記録写真の撮影には、基本的に６×７・35㎜の白黒フィルムとリバーサルフィルムを使用し、全体写真の撮影は、高所作業車、気球を用いて行った。

⑦第１面調査終了後、旧石器時代の遺構・遺物確認のため試掘調査を行った。ただし、１区では１面調査終了後、竪穴住居跡の調査を③～⑥の作業で行った後、旧石器時代の遺構・遺物確認のため試掘調査を行った。

第２節　調査区の設定

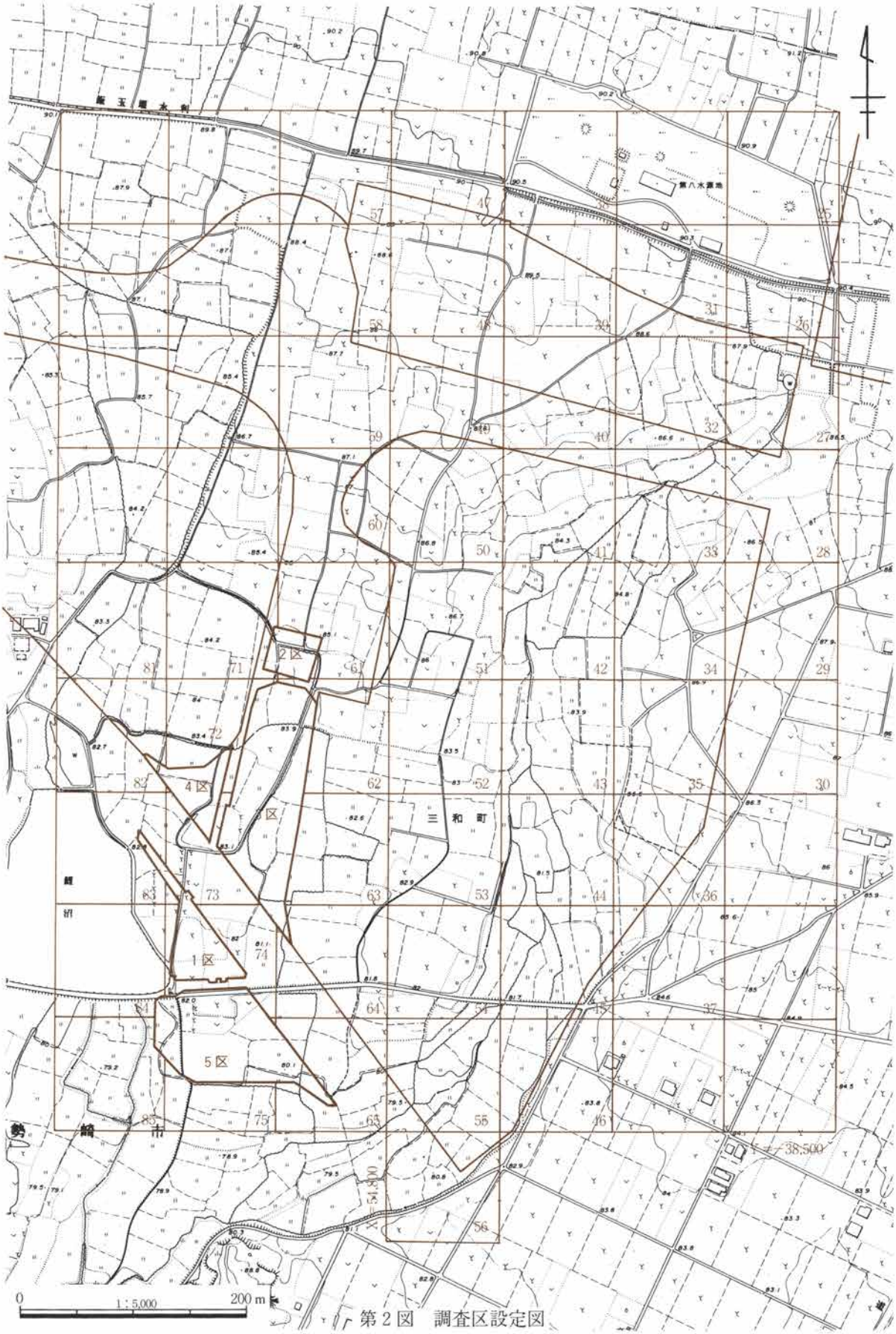
調査区の設定は、下記によって行った。

(1) 調査区の設定は、平成６年より本遺跡に隣接して発掘調査中の三和工業団地遺跡（伊勢崎市教委調査）が使用した方法に準拠し、群馬県を網羅している国家座標第Ⅸ系を利用して行い、グリッドがのちに国家座標と置き換えられるように設定した。

(2) 調査区の最小単位は、10メートル四方とし、その設定は国家座標第Ⅸ系と同様に座標軸の第２象限にあてはめ、西方向をＸ軸（国家座標Ｙ軸）、北方向をＹ軸（国家座標Ｘ軸）とした。

(3) グリッドの呼称は、100ｍ四方を大グリッドとし、隣接する前記三和工業団地遺跡の呼称をそのまま使用した。大グリッド内では南東隅を基準点Ａ－０と称し、頭文字に大グリッド名を冠して、例えば74Ａ－０と呼称した。アルファベットはＹ軸方向（北方向）に10ｍ進むごとにＢ、Ｃと順次変化させ、またＸ軸方向（西方向）に10ｍ進むごとに数字を１、２と順次増加させていき、アルファベットと数字の組み合わせによって各グリッドを呼称した。

(4) 方眼杭の設定は、技研測量株式会社に委託した。



第２図　調査区設定図

第３節　基本土層

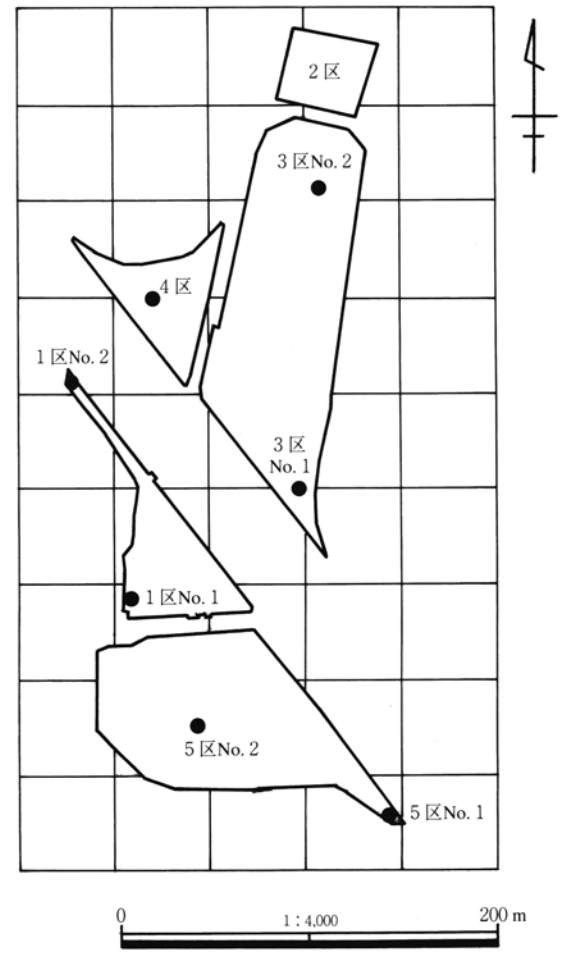
本遺跡は大間々扇状地の扇央部に位置し、谷底平野が樹枝状に延びる起伏に富んだ地形を形成している。調査区では、２区から１区方向へ帯状に微高地が延びる形となることから、１区両端、３区東半、４区西半が谷地への変換点にあたり、５区が谷地部となっている。

Ⅲ（As－B）は、１区東端・西端（１区No.２）、３区東半（３区No.１）、４区西半で最大10㎝程堆積しており、谷地形に集積した状況を示すものと見られるが、５区は谷地部のため流失したものと考える。特に３区東半ではAs－B下水田跡を検出することができた。

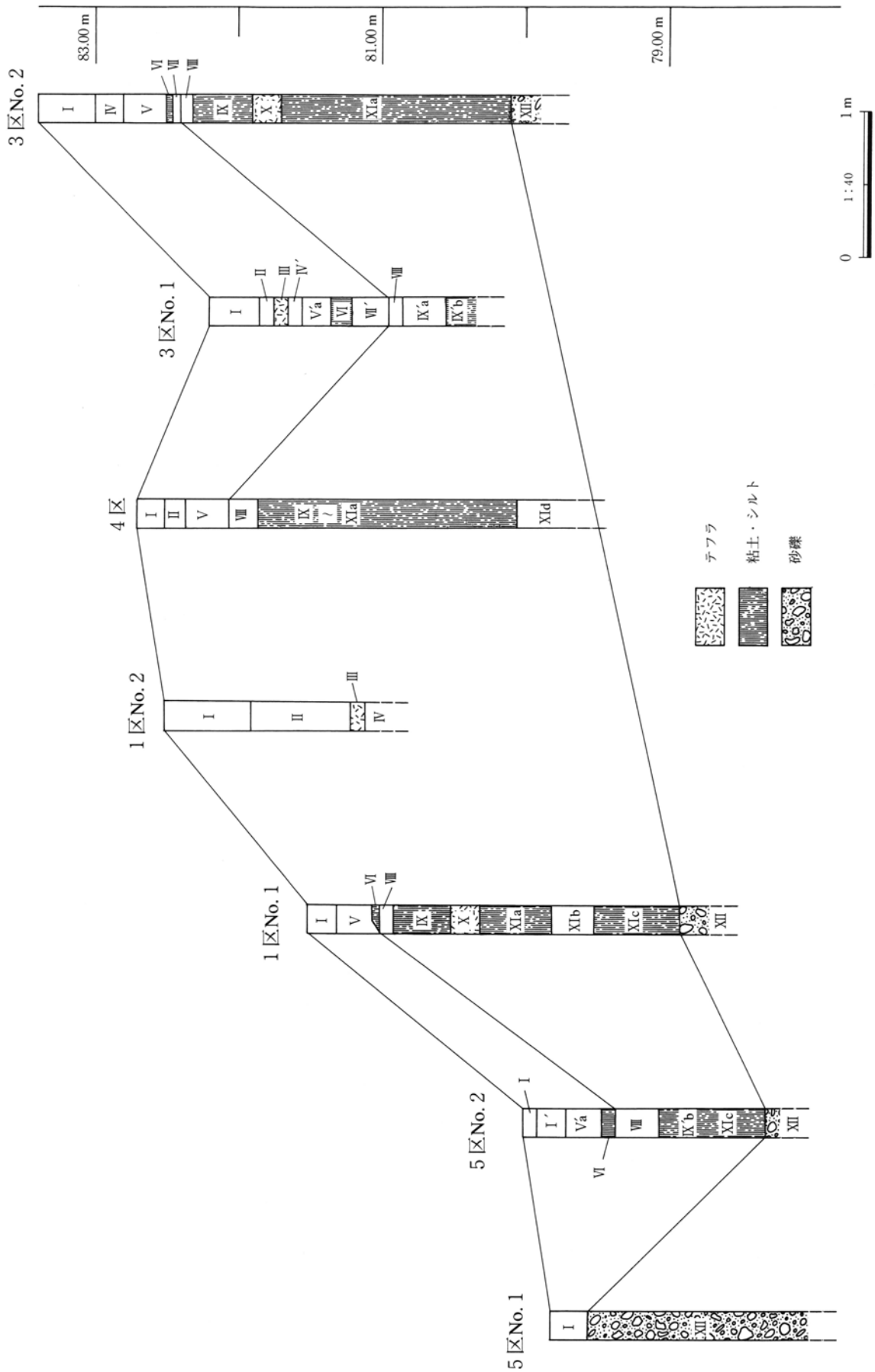
Ⅵ（ATを含む黄灰～灰白色粘土）は、４区で未確認だが調査区のほぼ全域に堆積しており、ATは所々で純堆積に近い状況も見られる。ATは旧石器時代の指標テフラであり、２区ではその下層から、３区ではその上層から旧石器１点ずつが出土した。

Ⅷ以下では各調査区ともに水成堆積の様相を示し、基盤である砂礫層に達している。特に５区東端（５区No.１）では、砂礫層の標高が高くなっている。

Ⅰ　暗褐色粘質土　表土。現水田耕作土。
Ⅰ′　盛土
Ⅱ　暗褐～褐色粘質土　As－Bが所々で見られる。
Ⅲ　As－B
Ⅳ　黒～黒褐色粘質土　As－Cが所々で見られる。
Ⅳ′　黒色粘質土　As－B下水田耕作土。
Ⅴ　明黄褐色粘質土　As－YP、As－BPが混在する。
Ⅴ′　黒灰～灰白粘質土　As－YP、As－BPが混在する。
Ⅵ　黄灰～灰白シルト　ATを含む。
Ⅶ　明褐色粘質土
Ⅷ　灰褐色砂質土
Ⅸ　明褐～灰白色粘土・シルト
Ⅸ′a　灰褐～暗褐色砂質土
Ⅸ′b　黒～暗褐色粘土
Ⅹ　As－HP
Ⅺa　褐～灰白色粘土～シルト
Ⅺb　黄色砂質土
Ⅺc　褐～灰白色粘土～シルト
Ⅺd　青灰色砂質土
Ⅻ　砂礫



第３図　基本土層位置図


83.00 m
81.00 m
79.00 m
3 区No. 2
3 区No. 1
4 区
1 区No. 2
1 区No. 1
5 区No. 2
5 区No. 1
0
1:40
1 m
テフラ
粘土・シルト
砂礫

第４図　基本土層図

第３章　地理的環境と歴史的環境

第１節　地理的環境

本遺跡は、赤城山南麓に形成された大間々扇状地上に所在する。赤城山の火山活動の始まりは、約40～50万年前と言われ、古い方から古期成層火山形成期、新期成層火山形成期、中央火口丘形成期の３つの時期に区分される。古期成層火山形成期は、およそ13万年前頃まで続いたが、中でも特筆すべき事件として、約20～30万年前の梨木泥流の発生がある。梨木泥流は山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれで、波志江町から豊城町にかけて多くの泥流丘（流れ山）を形成させた。波志江町の稲岡、豊城町（八寸）の権現山や華蔵寺公園の小丘はその代表的なものであり、現在の伊勢崎を構成する地形の中で、最も古い地形である。

渡良瀬川は、今からおよそ５～６万年前まで、大間々町で流路を南西方向にとり、赤城山の裾野と新田郡笠懸村の鹿田山との間に河道を開削して伊勢崎方向に向かい、豊城町（八寸）の権現山の西側に流れ、その流路に扇状地を形成した。この大間々扇状地は新旧２つの扇状地から成り立つとされるが、伊勢崎市に見られるものは古期扇状地（桐原面）とされ、この扇状地礫層上には関東ローム層が粘土化した状態で覆っている。このため、比較的水利に恵まれ、三和町書上付近の等高線85～90ｍの間には、大井戸、掛矢清水、鯉沼、そして佐波郡東村との境には尼ヶ池などの湧水池が分布し、これら湧水の南方には細長い谷底平野の発達が見られる。結果として、上植木本町から南部にかけては水田がよく開かれることとなった。

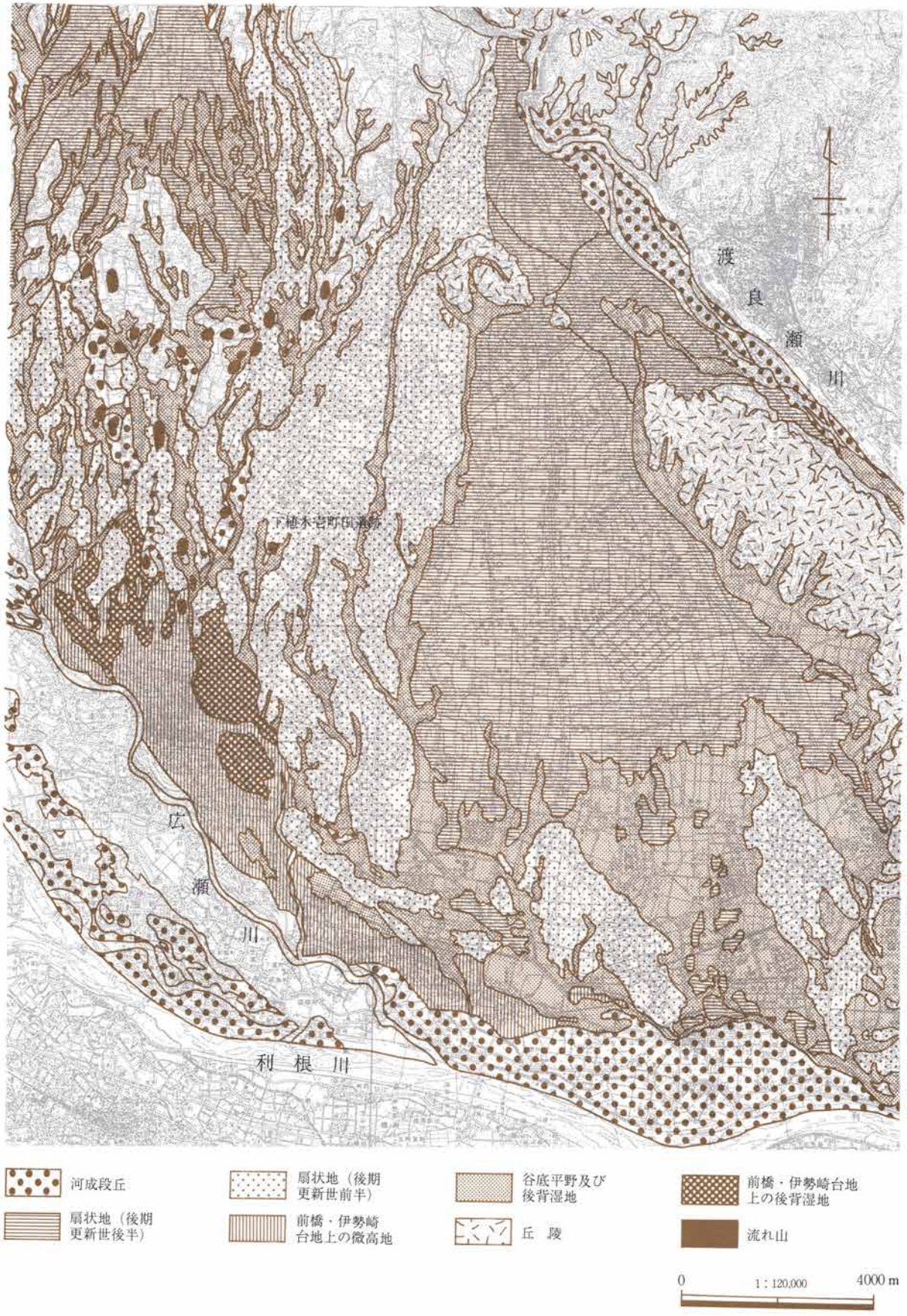
大間々扇状地の西限である粕川と、西方の神沢川・広瀬川に挟まれた比較的広範囲を伊勢崎台地と呼ぶ。その成因は赤城山斜面からの大量の砂質物質が、比較的短時間に流出し堆積したものと見られる。形成時期は、洪積世最末期に当たる今からおよそ１万年前のことと推定される。

本遺跡は、まさしく古期大間々扇状地面に立地しており、５区は湧水池大井戸によって形成された谷底平野部分に当たる。なお、本遺跡は湧水池と近接していることから、同様な湧水を起源とする埋没谷が樹枝状に存在する複雑な地形を形成する。３区の東側及び４区の西側は、各々大井戸、掛矢清水に起因する谷地形に向かって傾斜することとなるが、３・４区ともにそれとは別に分岐する形で埋没谷が存在している。こうした状況は離水時期の時期差として現れ、本遺跡調査区内でもＡＴその他テフラの堆積状況に微妙な違いを生じている。

以上のやや複雑な地形形成の中、１区は早くから安定した微高地として島状に出現したことから、古墳から平安時代を通して居住域として土地利用され、中世に至っては島状の地形を更に区画堀で分離する手段によって、隔離された空間を形成することに成功することとなったのである。

慶長18年（1613）に構築された鯉沼は、周辺で最も多い水量を持っていたであろう大井戸流路から微高地をカットして掛矢清水の流路へ導水する画期的な土木工事であったが、用水確保の努力はその後も続き、新たな溜め池の構築や粕川からの直接的な導水へと発展するが、扇状地地形から来る用水不足の問題は昭和期の大正用水整備まで解消されることはなかったのである。

参考文献
- 『群馬県史』通史編１　原始古代１　1990
- 『伊勢崎市史』通史編１　原始古代中世 1987



第５図　遺跡周辺の地形分類図（群馬県史通史編より）

第２節　歴史的環境

赤城山南麓地域では、岩宿遺跡に端を発して日本の旧石器研究をリードする発見がなされた。昭和49年から63年にわたる上武国道建設に伴う発掘調査では書上本山遺跡（10)、堀下八幡遺跡など８か所で旧石器時代遺跡が確認されている。近くでは、４つの文化層を持ち、石器1776点が出土した三和工業団地遺跡（４）がある。

縄文時代の遺跡は、広瀬側低地帯の東側に当たる赤城火山斜面、大間々扇状地、伊勢崎台地上に多くの遺跡が分布している。主な集落遺跡としては前期を主体とする129軒が調査された草期後半～後期の三和工業団地遺跡（５）がある。

弥生時代の遺跡は、沖積平野である広瀬川低地帯に望む伊勢崎台地の西縁辺部に所在する中期後半の西太田遺跡・中組遺跡があるが、集落としては貧弱で、十分な発達は見られない。

古墳では、県内最古の古墳の一つとされる華蔵寺裏山古墳（18)、５世紀中頃には長持形石棺を有し首長墓と見られる御富士山古墳（19）が現れる。

古墳から平安時代の集落遺跡の分布は、広瀬川以東の地域に集中しており、中でも伊勢崎市の北部地域に当たる殖蓮・三郷地区は特に分布密度が高い地域である。この集落遺跡の集中傾向は、古墳の分布や上植木廃寺（17）や東山道（21）の存在などを加味して考えたとき、伊勢崎及び周辺地域でも中心的位置を占めていたことを示すものと考えられる。

本遺跡が所在する粕川以東の地域は、大間々扇状地の古期扇状地（桐原面）の西端部に位置し、伏流水が湧出する地帯であり、尼ヶ池（27)・大井戸（24)・鯉沼（23)・掛矢清水（25）などの湧水点が点在する。尼ヶ池からのびる浸食谷の右岸台地上には、天ヶ堤遺跡、園芸試験場第二遺跡、下吉祥寺遺跡、八寸Ｂ遺跡、原之城遺跡（16）と続く。原之城遺跡は中期の豪族居館に比定され、この地域で中心的位置を占めていたものとされる。また、これら遺跡群のさらに南で佐波郡境町域に入るが、佐位郡衙に推定されている十三宝塚遺跡（20）がある。

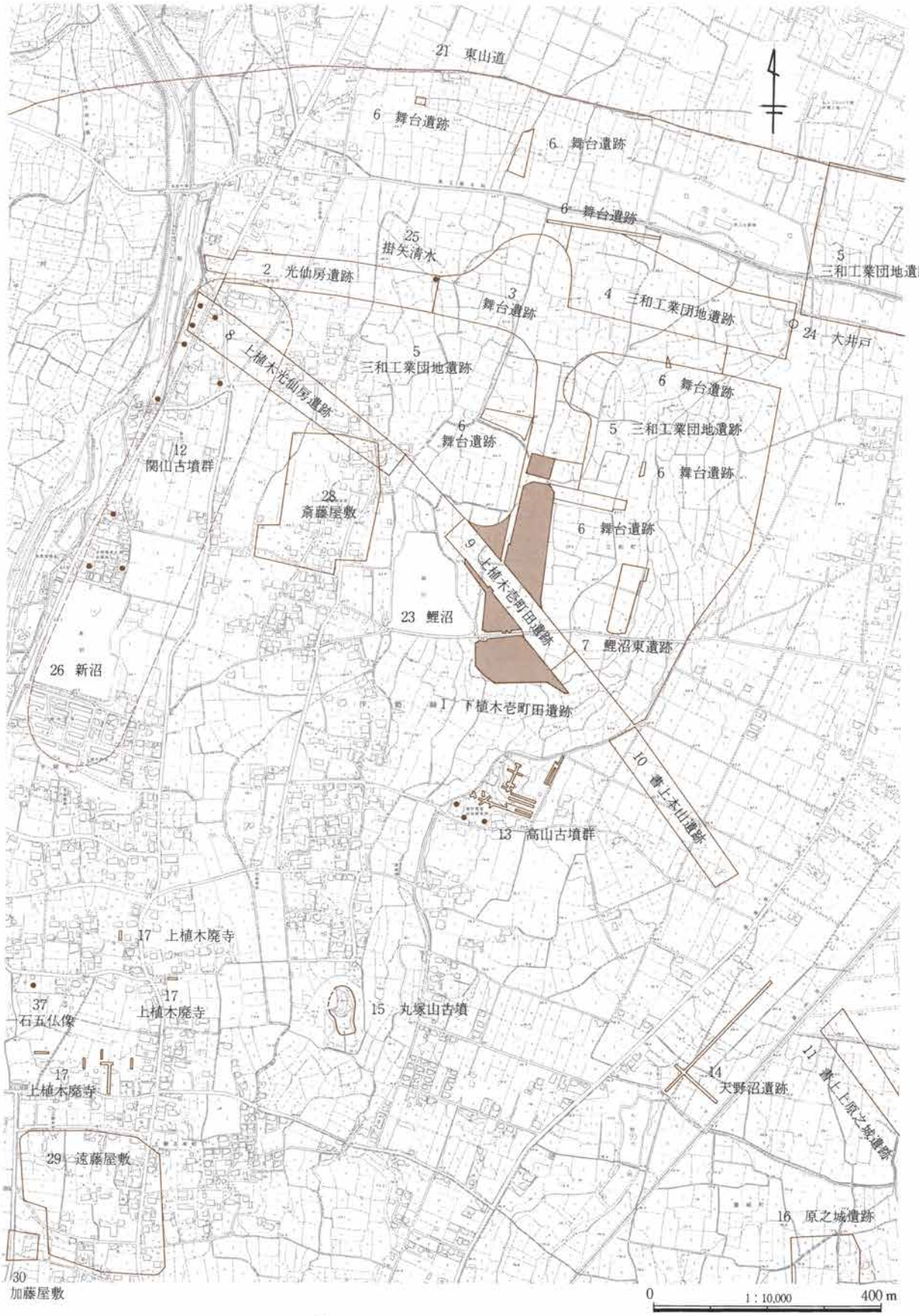
尼ヶ池からのびる浸食谷の左岸台地上は、行政区分では佐波郡東村域に入るが、右岸台地上と同様に集落遺跡が分布している。

大井戸および鯉沼からのびる浸食谷に臨む左岸台地上には、三和工業団地遺跡（４・５)、舞台遺跡（３・６)、鯉沼東遺跡（７)、上植木壱町田遺跡（９)、恵下遺跡など、左岸台地上には書上本山遺跡、天野沼遺跡（14）があり、本遺跡は前者に属する。このほか粕川左岸には上植木光仙房遺跡（８）がある。

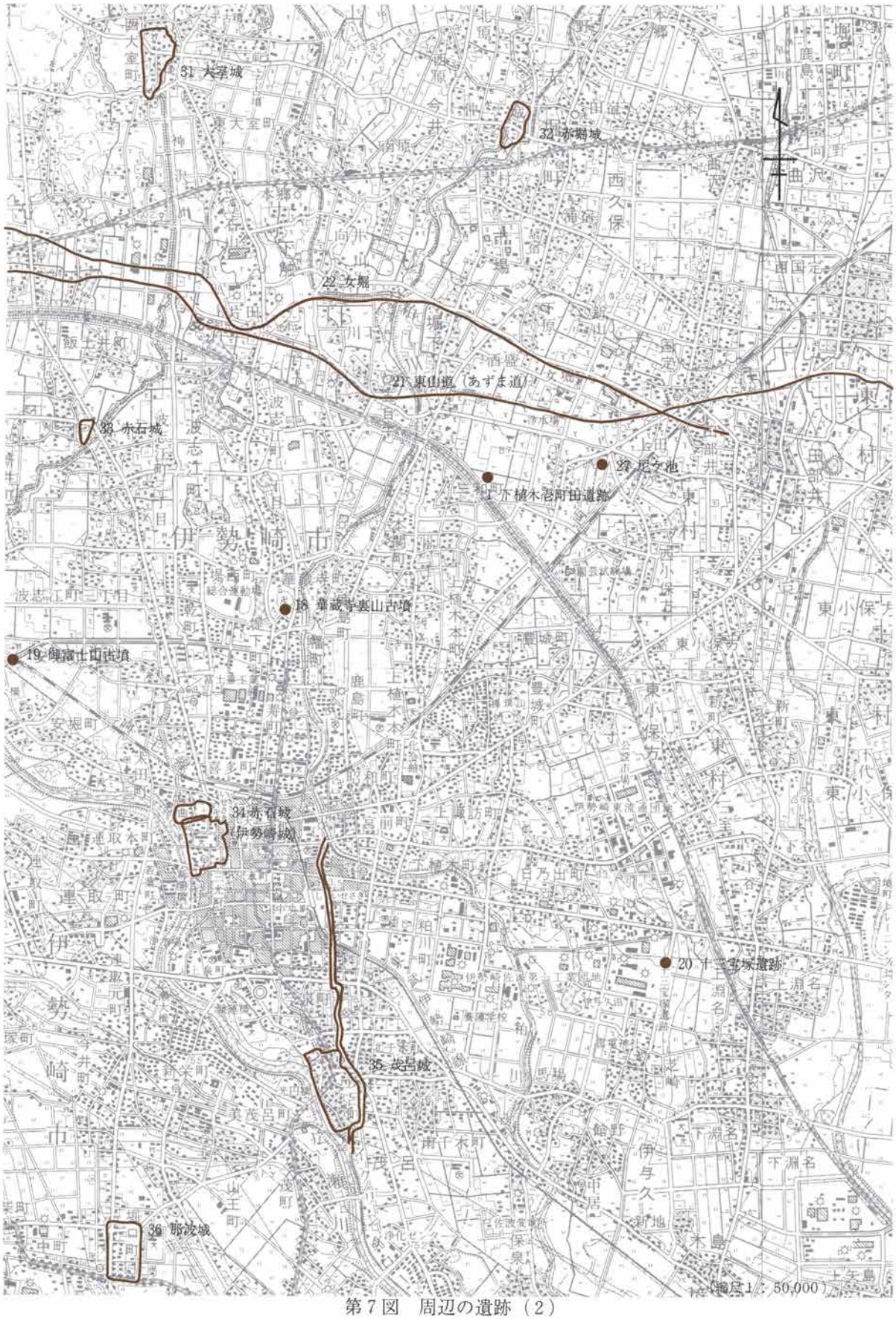
中世前期では、本地域を含む佐位郡全域を荘域として仁和寺法金剛院領渕名荘が開発される。その開発に際して、灌漑用水として計画されたものが女堀（22）であると言われる。本遺跡周辺では、建長３年（1251）に樹（うえき）市があったことが知られており、東山道上の要衝としての位置を窺うことができる。その後渕名荘は、那波氏と赤堀氏の勢力下となり、本県の戦国期の幕開けとも言うべき享徳の乱では、古河公方足利成氏方の赤堀氏が植木・赤石（伊勢崎市）で敵対する関東管領上杉氏方と合戦に及んでいる。戦国期には赤石城（34）を拠点とした那波氏が勢力を持つが、後北条氏方であったため、永禄３年（1560）越山した上杉謙信に攻め落とされる。この折、在地の百姓が方々へ逃散したことを「茂呂村申伝え書上帳」は記している。天正18年（1590）後北条氏滅亡によって徳川氏が関東に入部すると、松平家乗が１万石を宛行われて那波城（36）に入り、酒井氏を経て、慶長６年（1601）稲垣長茂が１万石を領して伊勢崎に入り伊勢崎藩が成立する。鯉沼の構築は、この稲垣長茂に依るものとされ、以後江戸期には溜め池が数カ所で造られることとなった。そうした中で、本遺跡地は水田化されたものと解される。

参考文献

・『伊勢崎市史』通史編１　原始古代中世 1987年


21 東山道
6 舞台遺跡
6 舞台遺跡
6 舞台遺跡
25 掛矢清水
2 光仙房遺跡
3 舞台遺跡
4 三和工業団地遺跡
5 三和工業団地遺跡
24 大井戸
5 三和工業団地遺跡
8 上植木光仙房遺跡
6 舞台遺跡
6 舞台遺跡
5 三和工業団地遺跡
12 関山古墳群
6 舞台遺跡
28 斎藤屋敷
6 舞台遺跡
9 上植木壱町田遺跡
23 鯉沼
7 鯉沼東遺跡
26 新沼
1 下植木壱町田遺跡
10 書上本山遺跡
13 高山古墳群
17 上植木廃寺
37 石五仏像
17 上植木廃寺
15 丸塚山古墳
17 上植木廃寺
14 天野沼遺跡
11 書上原之城遺跡
29 遠藤屋敷
16 原之城遺跡
30 加藤屋敷
0
1：10,000
400 m

第６図　周辺の遺跡（１）


31 大学城
32 赤塚城
22 女堀
21 東山道（あずま道）
33 赤石城
27 尼ケ池
1 下植木宮町田遺跡
18 華蔵寺裏山古墳
19 観音山古墳
34 赤石城
（伊勢崎城）
20 十三宝塚遺跡
35 茂呂城
36 那波城
（縮尺1／50,000）

第７図　周辺の遺跡（２）

第１表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	概　　要	文　献　等
1	下植木壱町田遺跡	本報告書	
2	光仙房遺跡	古墳時代中期を主体とする粘土採掘坑約200基を検出し、一木平鋤、曲柄平鋤が出土した。	『年報17』　群埋文 1998
3	舞台遺跡	縄文時代竪穴住居４軒、古墳時代前期竪穴住居53軒・方形周溝墓10基、中後期竪穴住居76軒、奈良・平安時代竪穴住居12軒などを検出した。特に平安時代の須恵器窯跡11基は地下式・半地下式登窯構造で、規模は３～６ｍと小規模であるなど、須恵器生産の研究に重要な資料である。	『年報16』　群埋文 1997
4	三和工業団地遺跡	旧石器時代の時期の異なる４つの文化層から旧石器1776点出土。縄文時代前期竪穴住居３軒、古墳時代竪穴住居140軒弱、平安時代竪穴住居20軒、中世の方形区画遺構などを検出した。	『年報15・16』　群埋文 1996・1997
5	三和工業団地遺跡	旧石器時代石核・剥片石器ほか、縄文時代前期竪穴住居129軒、古墳時代竪穴住居７軒・方形周溝墓17基、平安時代竪穴住居８軒ほかを検出した。	『年報15・16』　群埋文 1996・1997　伊勢崎三和工業団地遺跡埋蔵文化財発掘調査団
6	舞台遺跡	古墳時代前期～奈良時代の住居跡、溝を検出した。井戸からは14世紀代の板碑５基が出土した。	中澤貞治・村田喜久夫　『鯉沼東遺跡・舞台遺跡』　伊勢崎市教育委員会 1977
7	鯉沼東遺跡	大井戸湧水池による開析谷右岸の台地上に位置する。古墳時代～平安時代の住居跡、土坑、火葬跡等を検出した。	中澤貞治・村田喜久夫　『鯉沼東遺跡・舞台遺跡』　伊勢崎市教育委員会 1977
8	上植木光仙房遺跡	５世紀末～７世紀の古墳10基、平安時代の小鍛冶跡等を検出。	飯塚誠　『上植木光仙房遺跡』群埋文 1989
9	上植木壱町田遺跡	縄文時代中期～平安時代の住居跡が検出された。井戸からは板碑が出土している。	飯塚誠　『書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木壱町田遺跡』群埋文 1988
10	書上本山遺跡	旧石器時代のユニット２、古墳時代の住居跡４軒、平安時代の溝、掘立柱建物跡等を検出した。瓦塔片、石櫃骨蔵品が出土している。	『書上本山遺跡』　群埋文 1985
11	書上上原之城遺跡	掘立柱建物跡の在り方及び多数の墨書土器などの出土等から、調査地は集落の中枢部分と思われる。	飯塚誠　『書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木壱町田遺跡』群埋文 1988
12	関山古墳群	粕川左岸の洪積台地上に位置する７世紀～８世紀初頭にかかる古墳群。	中澤貞治「関山古墳群」『伊勢崎市史　通史編１』伊勢崎市 1987
13	高山古墳群	高山と呼ばれる独立丘陵の裾部に構築された古墳群。竪穴式石室を持つもの１基、横穴式石室のもの２基、計３基を調査した。７世紀初頭と考えられる。鞆形埴輪出土。	中澤貞治『高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡』伊勢崎市教育委員会 1977
14	天野沼遺跡	天野沼を中心として北から東西に囲むように形成されている台地の基部に位置する。古墳時代末期の竪穴住居跡５軒が検出された。	中澤貞治　『高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡』伊勢崎市教育委員会 1977
15	丸塚山古墳	後円部墳頂に箱式棺状竪穴式石室３室を持つ全長81ｍの帆立貝式前方後円墳。５世紀後半の構築。	桜場一寿「丸塚山古墳」『伊勢崎市史　通史編１』伊勢崎市 1987
16	原之城遺跡	長方形区画の巡りに濠を持つ古墳時代中期の環濠居館跡。竪穴住居跡・掘立柱建物跡・祭祀跡・内部区画の溝等が検出されている。	中澤貞治　『原之城遺跡発掘調査報告書』伊勢崎市教育委員会 1988
17	上植木廃寺	1982(昭57)年からの調査で南北と西辺を画する溝、柵列が確認される。７世紀後半に創建され約300年間存続したものと推定。	早川隆弘・松村一美・須長泰一　『上植木廃寺－昭和62年度発掘調査概報－』伊勢崎市教育委員会 1988
18	華蔵寺裏山古墳	主軸長40ｍ前後とされる前方後円墳で主体部は粘土槨の可能性高い。伊勢崎地域の初現期のもので５世紀初頭と考えられる。	桜場一寿「華蔵寺裏山古墳」『伊勢崎市史　通史編１』　伊勢崎市 1987
19	御富士山古墳	墳丘長は約125ｍで三段築成と見られ、幅約30ｍで盾形の周堀を持つ。後円部頂上には典型的な長持形石棺を持ち、墳丘の表面には川原石積みの葺石を施す。５世紀中葉の首長墓の可能性が高い。	中沢貞治「御富士山古墳」『伊勢崎市史　通史編１』　伊勢崎市 1987
20	十三宝塚遺跡	８世紀末～10世紀にかけて機能していた施設で、佐位郡衙または官人の居宅か寺院と見られる。３棟の基壇建物を柵列で台形に囲んだ中枢部と付随する３群の掘立柱建物跡、外郭を区画する溝、及び多数の竪穴住居跡からなる。出土遺物は奈良三彩陶、瓦塔などがある。	須田　茂「十三宝塚遺跡」『伊勢崎市史　通史編１』　伊勢崎市 1987　大江正行『史跡十三宝塚遺跡』　群埋文 1992

No.	遺　跡　名	概　　要	文　献　等
21	東山道 （あずま道）	律令国家の整備に伴い官道として各国国府への命令使の下達と、各国からの上申使等や租庸調の京進運脚道等として整備された。上植木地内の酒盛・火生石・舞台付近は佐位駅の所在地に比定される。	峰岸純夫「東山道と佐位駅」『伊勢崎市史 通史編１』 伊勢崎市 1987　歴史の道調査報告書『東山道』群馬県教育委員会 1983
22	女堀	前橋市上泉町付近の旧利根川を起点に終点の佐波郡東村西国定まで、赤城山南麓から大間々扇状地Ⅰ面にかけて幅15～30ｍ、深さ３～４ｍの規模で12.75㎞にわたって開削された用水遺構であると言われる。	鹿田雄三『女堀』　群埋文 1984
23	鯉沼	慶長18年（1613）伊勢崎藩主稲垣長茂によって築造されたと伝える。規模は南北約130ｍ東西約147ｍ面積19,988㎡で灌漑面積は４町５反６畝６歩（御領分石高覚）。水源は湧水大井戸。	篠木弘明「溜池」『伊勢崎市史 通史編２』伊勢崎市 1993
24	大井戸	上植木と下植木の両者に含まれ、前者では大井戸、後者では男井戸と呼ぶ。湧水点は幾つかに分岐する。近年埋め立てられ消滅した。	星野正明「伊勢崎の地名由来」『群馬地名だより』７号 群馬地名研究会 1990
25	掛矢清水	弁慶掛矢清水または角弥清水とも呼ぶ。義経に水を求められた弁慶が掛矢にて地面を叩いたところ水が湧き出したとも、田部井角弥の屋敷があったとも言われる。近年埋め立てられ消滅した。	同上
26	新沼（八幡沼）	宝永７年（1710）完成で大井戸を水源とした溜池新沼（三和郵便局の前）の堀底が高く貯水量が小さいことから、それに代わるものとして文久２年（1861）開削された。八幡宮が在ったことから八幡沼とも呼ばれる。計画面積19,390㎡。粕川に取水堰を設ける。	菊池誠一「上植木村」『伊勢崎市史 通史編２』伊勢崎市 1993
27	尼ケ池	伊勢崎市と東村境で、村指定史跡「六道の道標」の南に位置し、保存整備されている。直径７ｍ程を成す。柳田国男『日本の伝説』の中に「おどろきの清水」の一つとして紹介される。	星野正明前傾書
中世城館・石造物			
28	斎藤屋敷	鯉沼の西側に位置する。本郭に土塁を残す。戦国期武蔵国から移住した斉藤氏の居館と伝える。現在でも居住者は下植木壱町田遺跡１区を所有し元屋敷と呼んでいたという。	『群馬県の中世城館跡』 群馬県教育委員会 1988　その他、星野正明氏ご教授による。
29	遠藤屋敷	字堀之内に存し、堀・土塁を残存する。	同上
30	加藤屋敷	加藤玄蕃の居所と伝える。	同上
31	大室城	本丸跡には現在大室神社が建つ。天正期は白井長尾氏の家臣牧氏の居城であった。	山崎　一『群馬県古城塁址の研究』上巻 1978
32	赤堀城	粕川とその支流鏑木川との間に築かれ、東西170ｍ南北350ｍで、本丸には高さ４ｍの高土居を残す。	同上
33	赤石城	荒砥川と神沢川の合流点北に選地する崖端城。赤石左衛門尉の築城といわれ、後伊勢崎に移ったという。最南端の郭部分が発掘調査され、上幅５～６ｍの堀切とピット検出。	藤巻幸男『荒砥前原遺跡・赤石城址』群馬県教育委員会・群埋文 1985
34	赤石城（伊勢崎城）	戦国期には早くから後北条氏方として勢力を有した地域的領主那波氏の居城。永禄３年上杉謙信に攻略され、以後由良氏支配となる。その折伊勢崎城と改名。江戸期には伊勢崎藩の陣屋となる。	山崎　一『群馬県古城塁址の研究』上巻 1978
35	茂呂城	広瀬川左岸に立地する崖端城。那波城と共に天正期の那波氏の拠点である。	峰岸純夫「佐位・那波の城と館」『伊勢崎市史 通史編１』 伊勢崎市 1987
36	那波城	鎌倉時代以来の那波氏の館跡が城郭化したもので、近世には松平家乗が居城とした。	同上
37	一石五仏像	一石に一如来四菩薩の像容あり。総高60㎝幅37㎝厚さ22㎝。半肉彫。裏面銘文「建長三年大才辛亥閏□月　日」。	橋田友治「伊勢崎地方の中世石造物一覧」『伊勢崎市史 通史編１』 伊勢崎市 1987

略称　群埋文：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第４章　検出された遺構と遺物

概要　本遺跡は東西の谷地に接する微高地に立地することから、居住及び生産遺構が重層し、検出された遺構は旧石器時代から近世以降までにわたる。以下にその概要を示す。

旧石器時代遺物は、２区で石刃１点、３区で尖頭器１点が出土した。

古墳時代の竪穴住居跡は、１区のみに分布し12軒を検出した。また、３区から４区にかけて北東－南西方向に走向する14号溝は、ＦＡに被覆された導水路であり、生産域が想定される西側の谷地への関連性が強い。

平安時代の竪穴住居跡は、１区のみに分布し３軒を検出した。５Ｂ号住居跡は埋土中に鉄滓を多数含んでいたほか、床面の円形土坑内にチップを多く含んだ小鍛冶の住居跡に位置付けられ、同じく５Ｂ号住居跡埋没後の窪みを利用した５Ａ号住居跡も鍛冶との関連が想定される。同時期では周辺において、４基の鍛冶遺構が屋外に分布し、鉄精錬を想定させることから当時の小鍛冶工人の様子を知る資料として注目される。

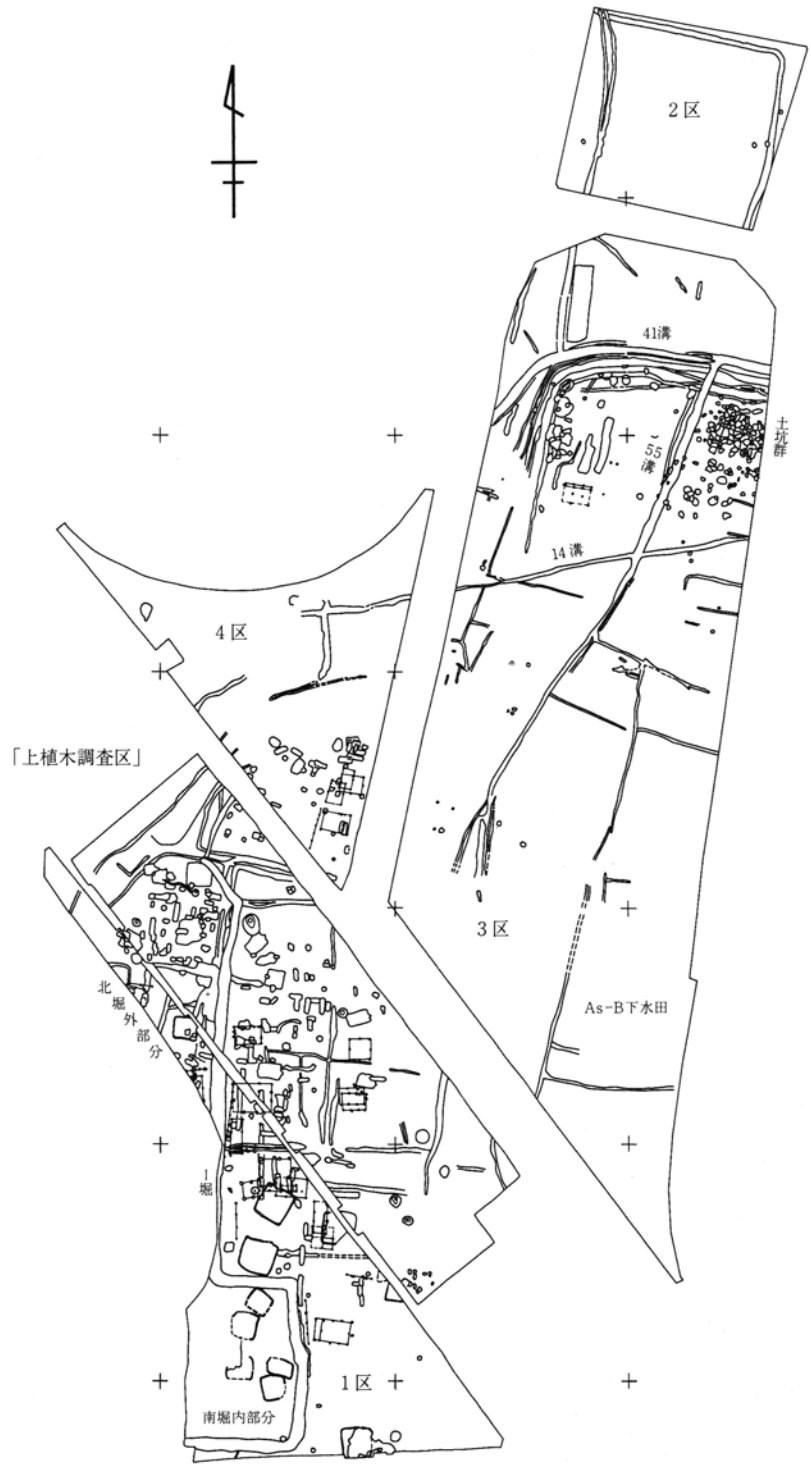
中世の遺構は、１～４区で検出できた。１区では南北に走向する１号堀に区画された館跡が存在し、その内側である堀内部分及び外側の堀外部分で、主軸方位から第１～３類・その他の４つに分類できる掘立柱建物跡群ほかを検出した。なお、堀内部分は調査範囲の事情で南北に分断されたことから、便宜的に北堀内部分、南堀内部分として区別した。詳細な遺構数量は、堀内部分で掘立柱建物跡24棟、井戸跡６基、土壙墓２基、火葬跡１基、土坑多数、堀外部分では掘立柱建物跡８棟、井戸跡３基、火葬跡５基、土坑多数である。特に掘立柱建物跡は、南堀内部分で複雑に重複しており、同一分類内においても重複関係から第１類でＡ・Ｂの２群に、第２・３類で各々Ａ・Ｂ・Ｃ群ずつの３群に細分することができた。その詳細な検討はまとめに譲るが、複数の掘立柱建物跡を配置して長期間存続したことが判明した。また、こうした主軸方位による分類は堀外部分にも適用でき、第３類の時期に遺構数の最大値を持つ。館跡は「上植木調査区」で１号堀が立ち上がってしまうことから、完全に閉鎖されていないが、１区内で４か所の入口遺構を検出した。１～３号入口遺構は杭や柱材のほか、やや多くの木器が遺存していた。

２区では中世の井戸跡４基を検出したが、掘立柱建物跡などの遺構は伴わない。関連する遺構としては、後代まで存続した１・２号溝が想定されるが、東隣する三和工業団地遺跡（伊勢崎市調査分）でも当期の堀及び井戸跡群が検出されており、一連の遺構として捉えられる。

３区では掘立柱建物跡１棟が検出されたが、主軸方位から中世とした。

４区では掘立柱建物跡４棟、井戸跡４基、土壙墓２基、土坑31基が検出された。掘立柱建物跡の主軸方位は全て同じ第４類に分類でき、１区の掘立柱建物跡群とは一致しないことから、時期的な違い或いは性格的な違いを表すものとして検討される。

近世以降では明確な年代比定はできないものの、埋土及び出土遺物から近世以降であるものを掲載した。溝は近世当初に本地域が開田された状況を示しており、特に41号溝とそれに並走する溝は、「大井戸」から導水する本流として、慶長18年（1613）伊勢崎藩主稲垣長茂時代に構築された鯉沼へ引水した本流である可能性が高い。



第8図　全体図（1：1,600）

第１節　旧石器時代

石器No.１（PL６-１、37）

黒色頁岩製の石刃。打面の一部に自然面を残し、石器の先端部に折断痕が認められる。

Ａ地点より出土。Ａ地点では、後期旧石器時代を通しての水成堆積層が認められた。石器出土層のⅧ層も水成堆積層である。Ⅵ層がＡＴを含む層であり、Ⅷ層はいわゆるＡＴ下の暗色帯部分に相当する層と考えられる。

石器No.２（PL６-２、37）

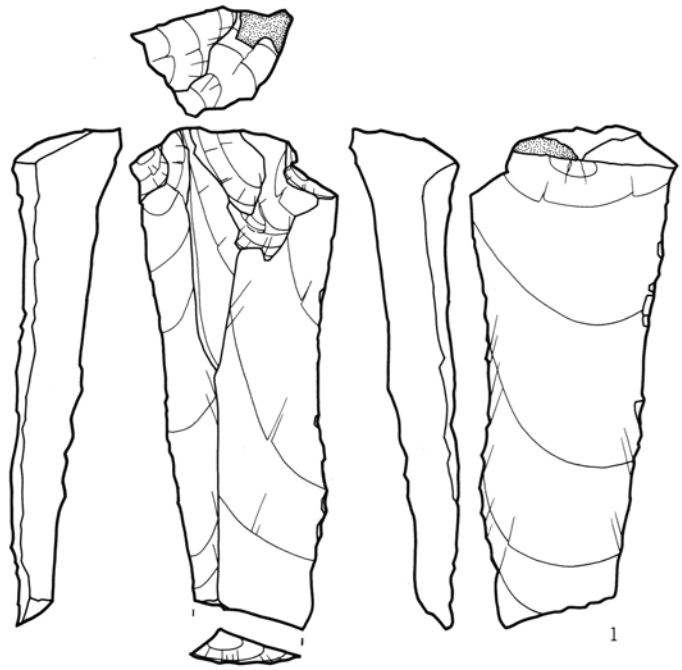
チャート製の尖頭器。Ｂ地点より出土。Ｂ地点でも、後期旧石器時代を通しての水成堆積層が認められる。石器出土層のＶ層も水成堆積層である。Ｖ層は、As－ＢＰの一次堆積層の直上層に位置し、As－ＢＰが混在する層である。

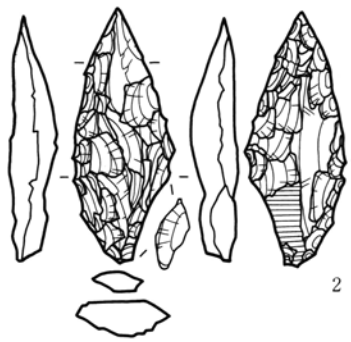
地形的特質と石器群について

石器検出地の周辺は、三和工業団地Ｉ遺跡をはじめとして後期旧石器時代の石器群が数多く発見されている。そして、遺跡地周辺の当時の地理的環境も復元されている（津島 1999 P10）。

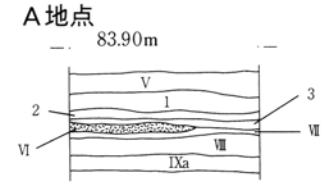
本遺跡からは２点の石器が確認されたにすぎない。しかし、それは低地域と想定される地点から出土しており、同地域における旧石器時代の人の活動を考える上では重要な石器群である。　　（津島）

津島秀章 1999『三和工業団地Ｉ遺跡－旧石器時代編－』



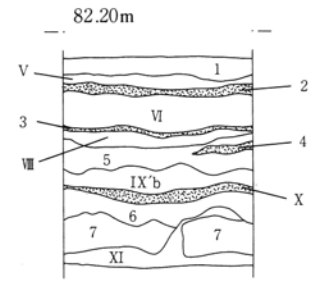


Ａ地点



1　灰色砂質土
2　黄灰色砂質土
3　にぶい橙色砂質土　鉄分の凝集斑紋あり。

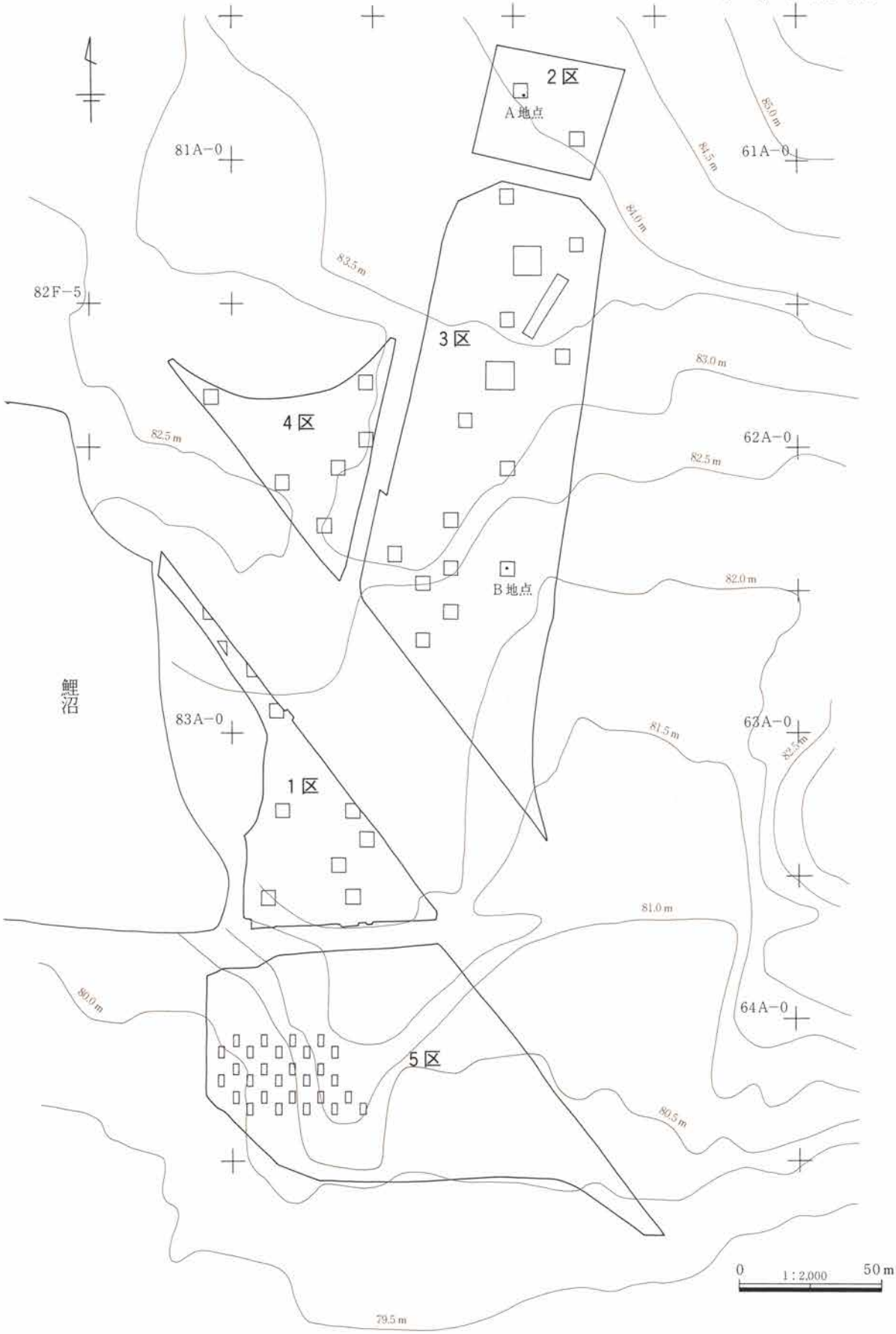
Ｂ地点



1　黒褐色土（Ⅳに似る）　粗粒軽石（As－ＯＫ$_1$）含む。
2　As－ＢＰグループ
3　ＡＴ
4　Hr－ＨＡ
5　黄灰色粘質土と黄灰色軽石（Ｈｒ－ＨＡ）の混土
6　黒色粘質土
7　オリーブ褐色粘質土

0　1：80　2 m

第９図　旧石器時代出土遺物と出土地点土層断面図

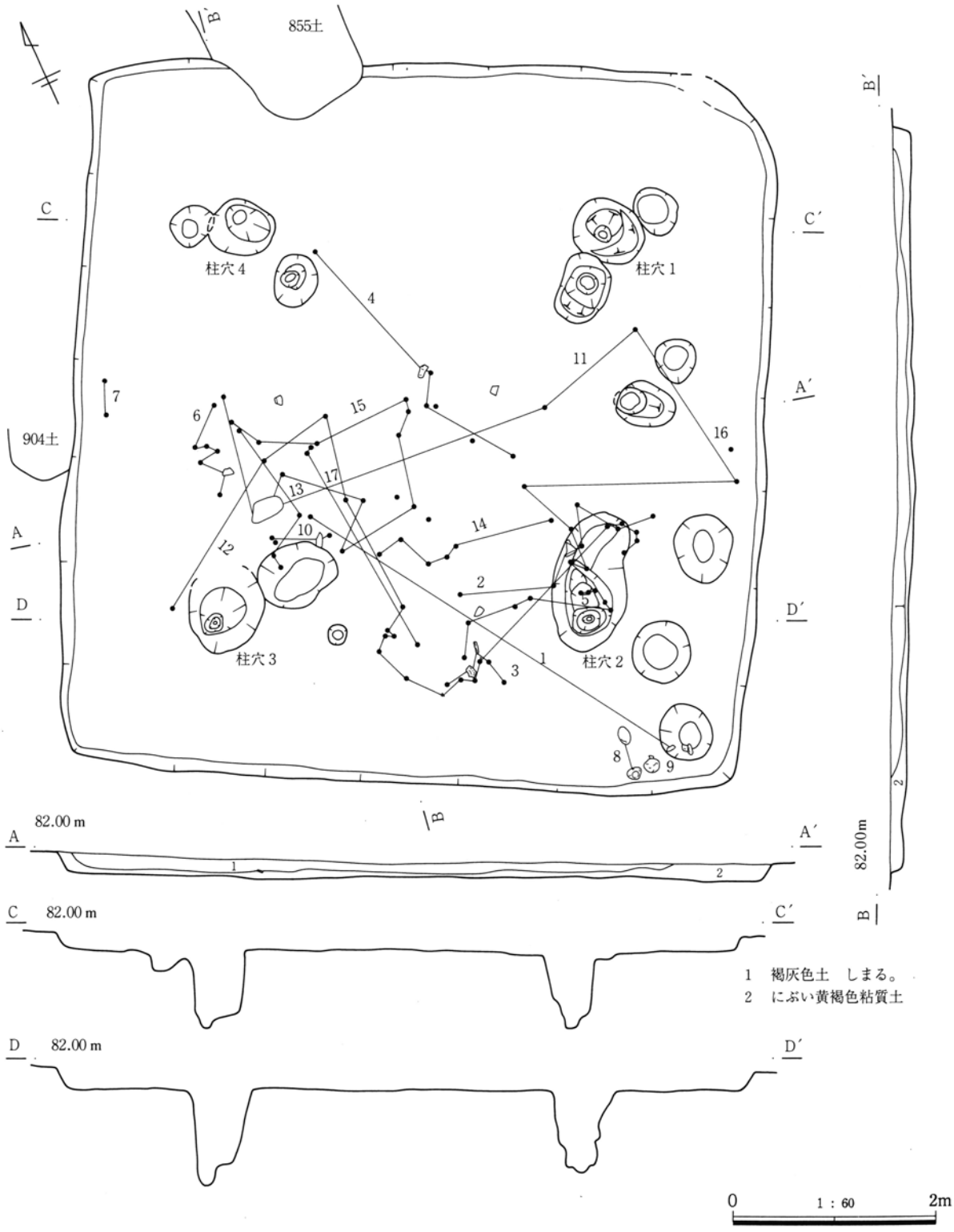


第10図　旧石器時代遺物出土地点と試掘トレンチ位置図

第２節　古墳時代

第１項　竪穴住居跡

１区１号住居跡（PL 6-3、37、38）



第11図　１区１号住居跡

位置　74Ｉ・Ｊ－７グリッド

重複　855・904号土坑より古い。

形態　ほぼ正方形

主軸方位　Ｎ－27°－Ｅ

規模　南北7.07ｍ、東西6.86ｍ

壁　壁高は北辺12～17㎝、東辺12～17㎝、南辺16～20㎝、西辺14～21㎝で平均16.1㎝である。

カマド・炉　なし

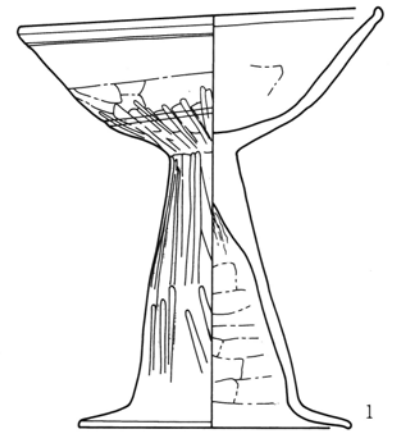
内部施設　柱穴１の規模は径72×58㎝、深さ74㎝、柱穴２の規模は径139×74㎝、深さ83㎝、柱穴３の規模は径(77)×75㎝、深さ73㎝、柱穴４の規模は径61×52㎝、深さ78㎝で、全て楕円形を呈する。その他、径19～79㎝のほぼ円形の小穴10基が検出された。

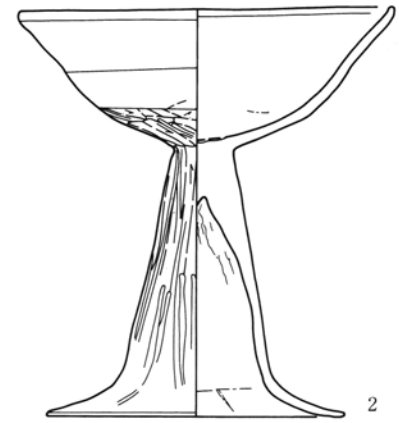
床　本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

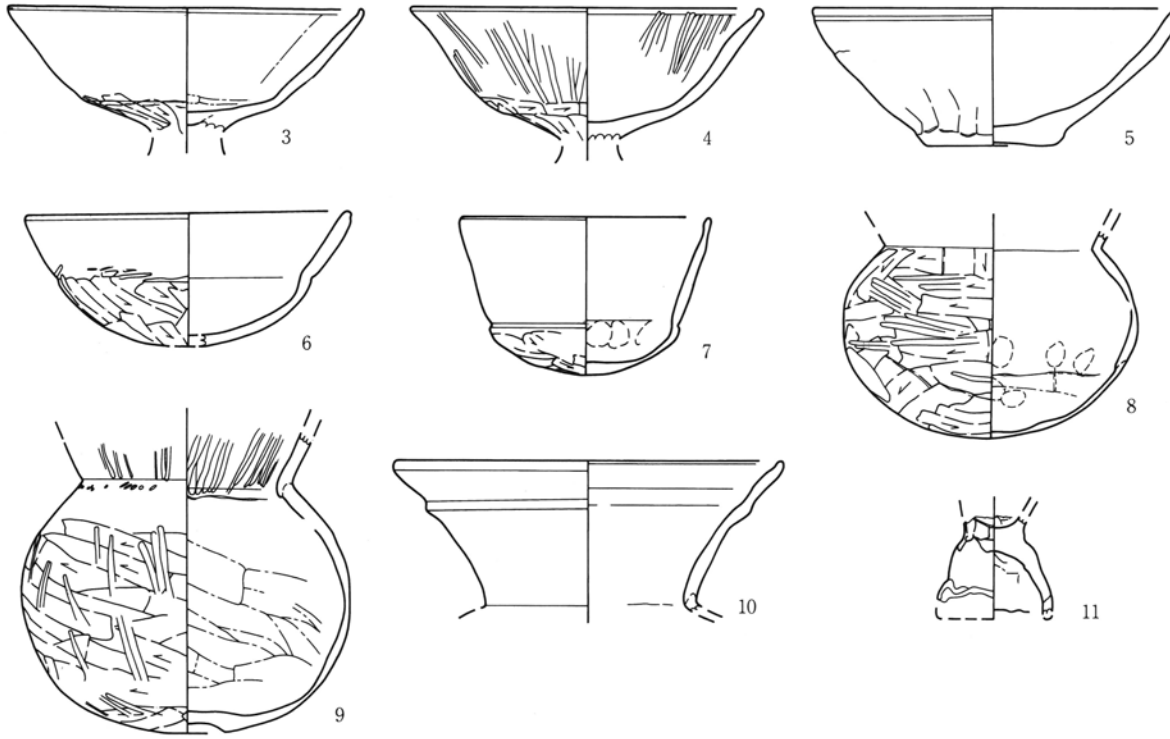
埋没状況　壁際から三角堆積しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態　中央部南寄りの柱穴２・３周辺にほぼ集中する。また南東隅にほぼ完形の土師器坩（７・８）が置かれていた。

時期　出土遺物から４世紀後半に比定される。







第12図　１区１号住居跡出土遺物（１）

第13図　１区１号住居跡出土遺物（２）

１区２号住居跡（PL 6-4、38）

位置　74H・I－７・８グリッド

重複　なし

形態　ほぼ正方形

主軸方位　N－13°－E

規模　南北6.82ｍ、東西7.10ｍ

壁　壁高は北辺13～18㎝、東辺４～16㎝、南辺５～12㎝、西辺６～12㎝で平均10.8㎝である。

カマド・炉　なし

内部施設　柱穴１の規模は径60×57㎝、深さ128㎝、柱穴２の規模は径65×50㎝、深さ90㎝、柱穴３の規模は径65×56㎝、深さ127㎝、柱穴４の規模は径55×54㎝、深さ123㎝で、全て円形を呈する。南西隅に径170×142㎝、深さ16㎝の円形の土坑と、径(213)×80㎝、深さ17㎝の長楕円形の土坑、中央部にも径208×65㎝、深さ５㎝で、同じく長楕円形の土坑が検出された。その他、径62～98㎝のほぼ円形の小穴６基が検出された。

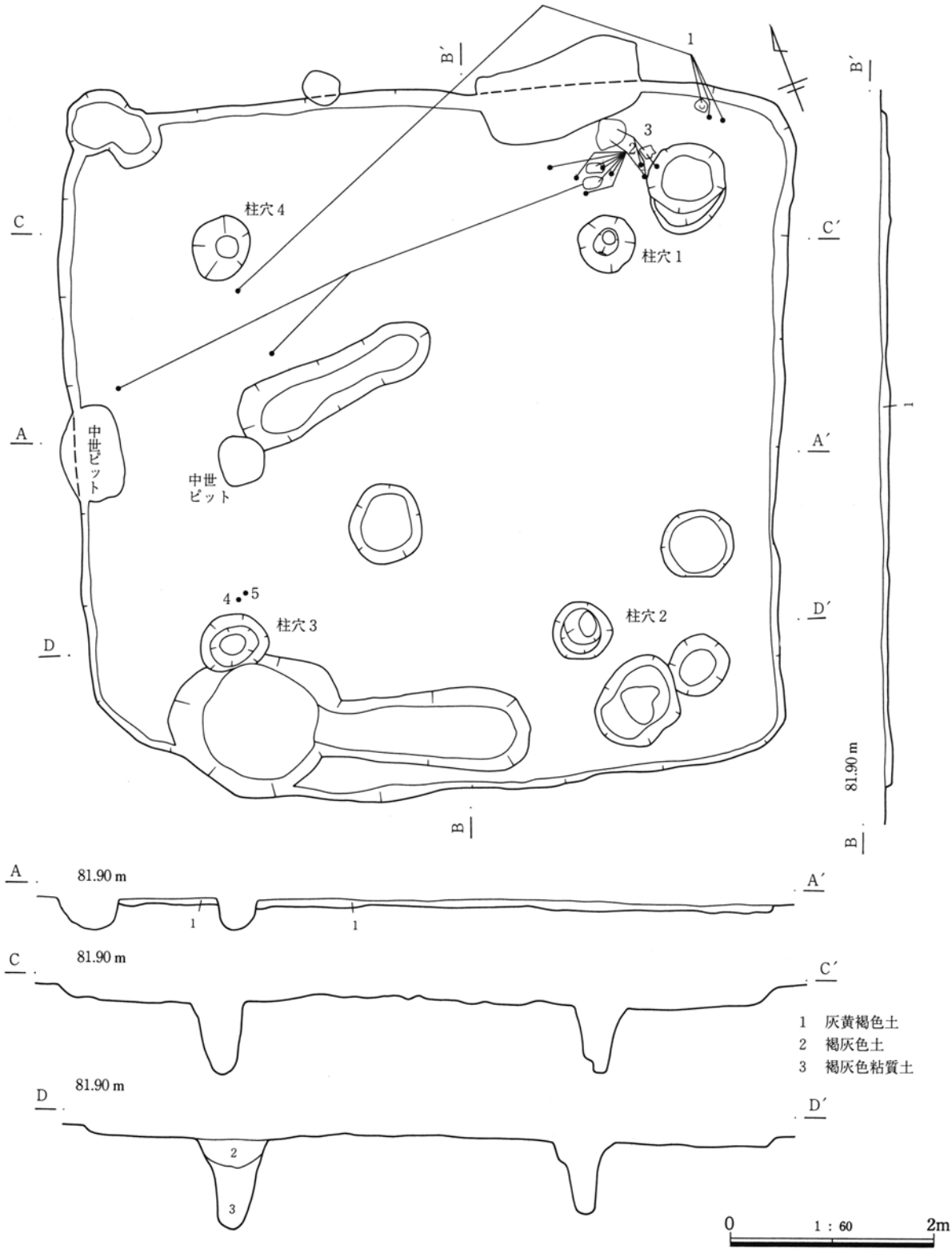
床　本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平さ

れていたものと見られる。

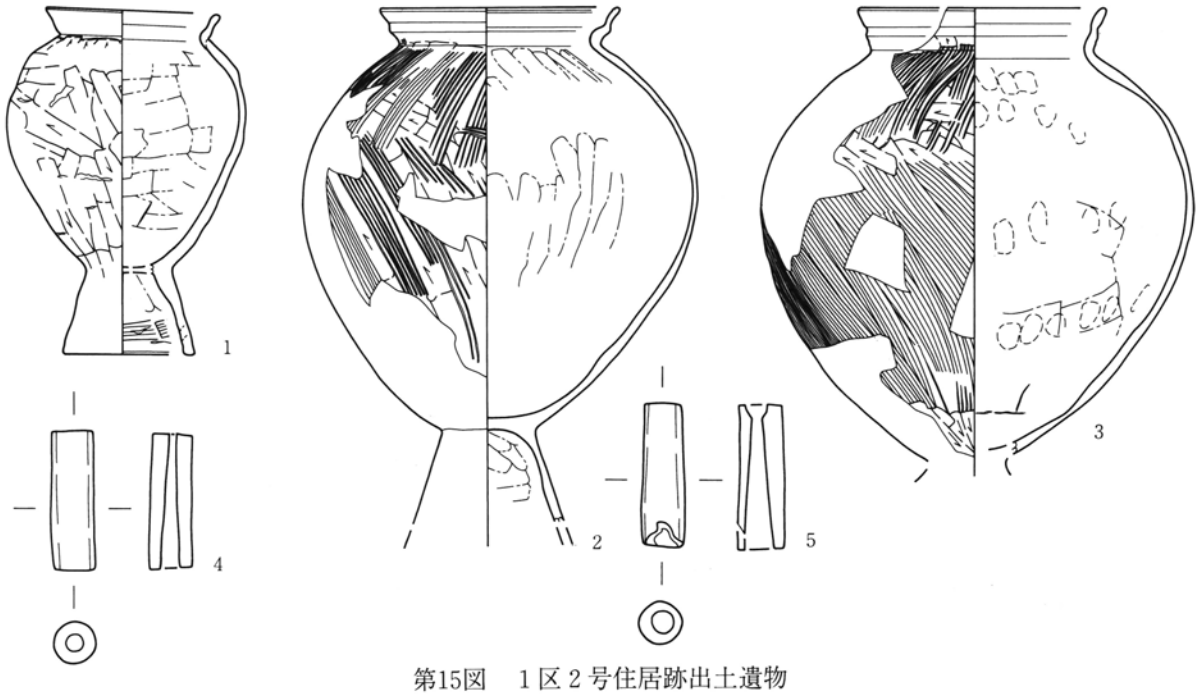
埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態　出土遺物は多くない。北東隅円形土坑の西側で土師器台付甕（１・２・３）、柱穴３付近で管玉（４・５）が出土している。

時期　出土遺物から４世紀後半に比定される。



第14図　１区２号住居跡



第15図　１区２号住居跡出土遺物

１区３号住居跡（PL 6-5）

本住居跡の北東隅は、上植木壱町田遺跡で12号住居跡として調査されていたものである。

位置　74H・Ｉ－５・６グリッド

重複　なし

形態　ほぼ半分が調査区域外となるが、方形を呈するものと考えられる。　**主軸方位**　Ｎ－11°－Ｅ

規模　南北6.68ｍ、東西6.82ｍ

壁　壁高は北辺16～20㎝、東辺14～17.5㎝、南辺０～１㎝、西辺２～６㎝で平均9.6㎝である。

カマド・炉　なし

内部施設　柱穴１の規模は径90×66㎝、深さ48㎝、柱穴２の規模は径80×56㎝、深さ46㎝で、ともに不整円形を呈する。その他、径18～51㎝のほぼ円形の小穴６が検出された。

床　本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態　出土遺物は縄文前期土器片（諸磯式）１片が混入するのみである。

時期　「上植木調査区」を検討の結果、４世紀後半に比定する。

１区４号住居跡（PL 6-6）

位置　74Ｉ－７・８グリッド

重複　75・90・96・1075号土坑よりも古い。

形態　横長方形

主軸方位　Ｎ－41°－Ｅ

規模　南北(4.74)ｍ、東西5.00ｍ

壁　壁高は北辺２～７㎝、東辺３～８㎝、南辺３㎝、西辺３～６㎝で平均4.6㎝である。

カマド　検出できなかったが、南辺やや東寄りに焼土が多く分布しており、75号土坑によって破壊され消滅した可能性がある。

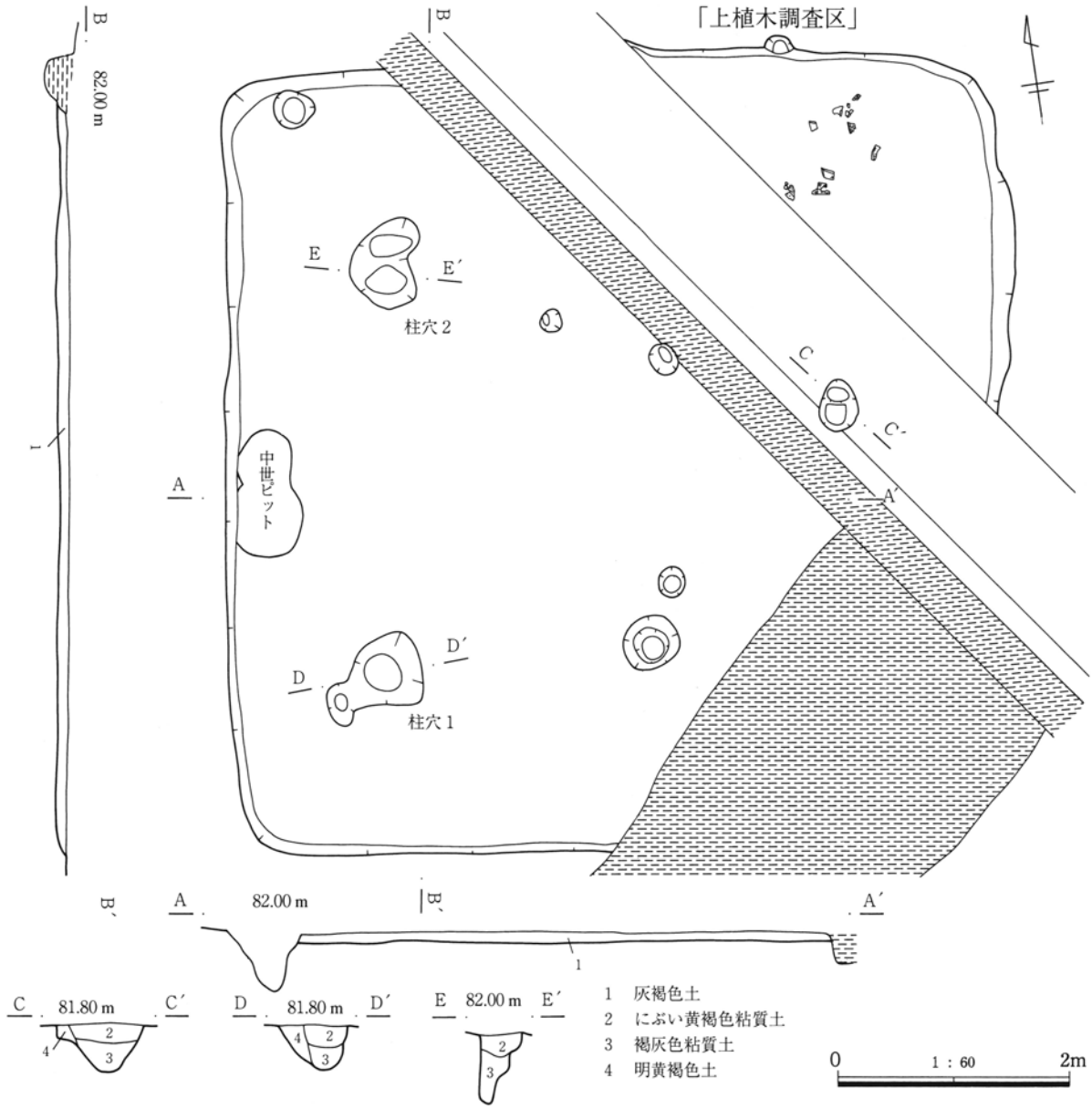
内部施設　貯蔵穴は南東隅に位置し円形を呈する。規模は径73×71㎝、深さ39㎝である。その他、北東隅に径(70)×57㎝、深さ12㎝の円形の土坑が検出された。

床　本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態　出土遺物は土師器高杯・甕片等わずかである。

時期　出土遺物から４世紀後半に比定される。



第16図　１区３号住居跡

１区６号住居跡（PL 6-7、39）

位置　74Ｅ・Ｆ－７グリッド

重複　５Ａ・５Ｂ号住居跡より古い。

形態　ほぼ正方形

主軸方位　Ｎ－12°－Ｗ

規模　南北5.32ｍ、東西(5.27)ｍ

壁　壁高は北辺３～13㎝、東辺16～21㎝、南辺４～10㎝、西辺９～11㎝で平均10.9㎝である。

カマド・炉　なし

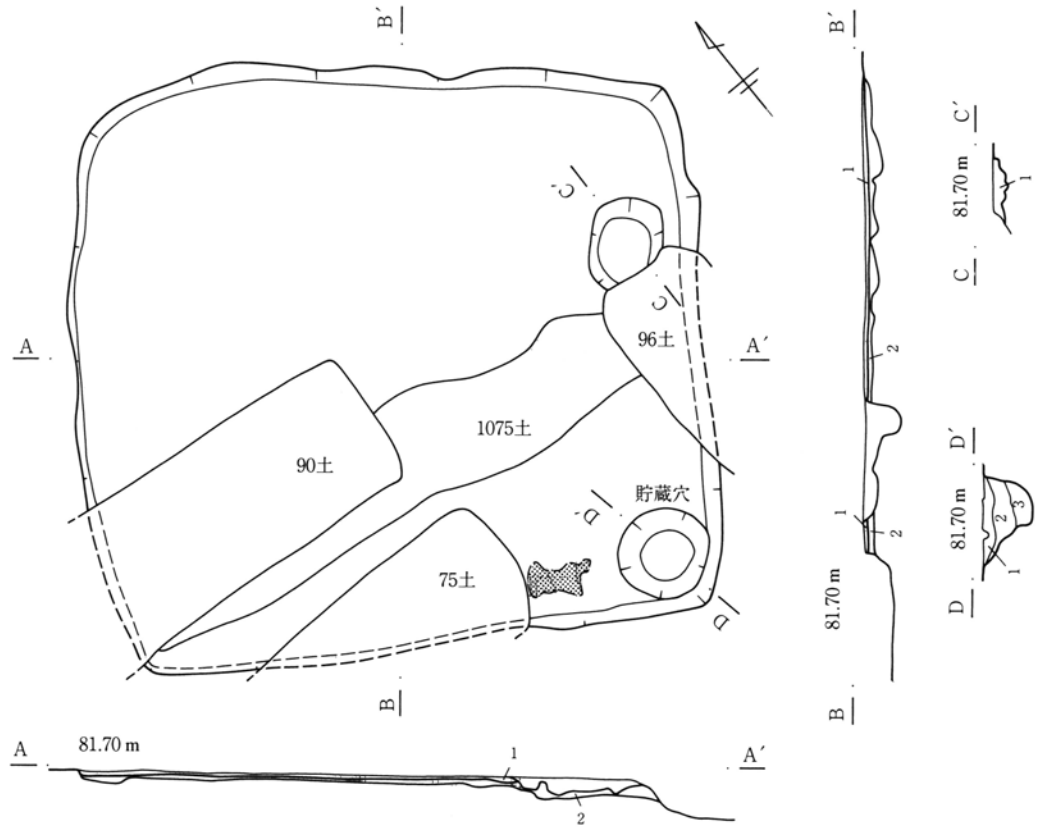
内部施設　柱穴１の規模は径(42)×32㎝、深さ34㎝、柱穴２の規模は径18×16㎝、深さ36㎝、柱穴３の規模は径32×28㎝、深さ42㎝、柱穴４の規模は径30×26㎝、深さ48㎝で、全て円形を呈する。

床　ほぼ平坦で、貼床は見られない。掘り方面より15㎝程オリーブ褐色土を盛り、やや堅く踏みしめる。

掘り方　明確な床下土坑等は存在しないが、浅い不整形な落込みが多く見られる。

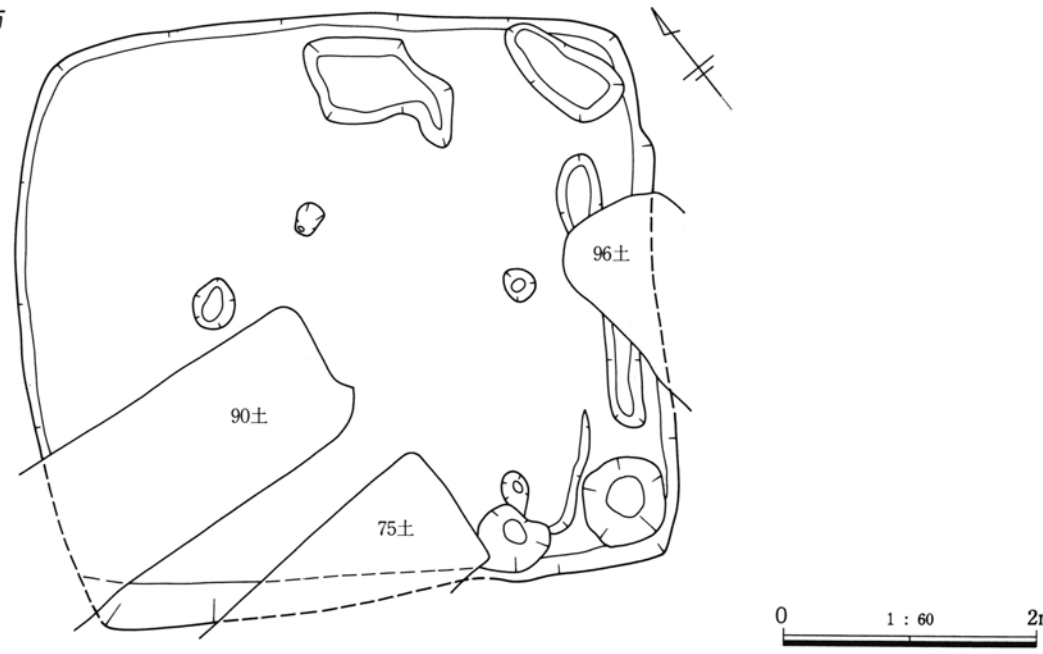
埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態　出土遺物は少なく、土師器杯（１・２）、甕（３）が壁寄りに散在する。埋土中から臼玉



1　オリーブ褐色土　黄褐色土大ブロック10％、白色軽石粒１％含む。
2　黒褐色土　オリーブ褐色土大ブロック10％、白色軽石粒１％含む。
3　オリーブ褐色土

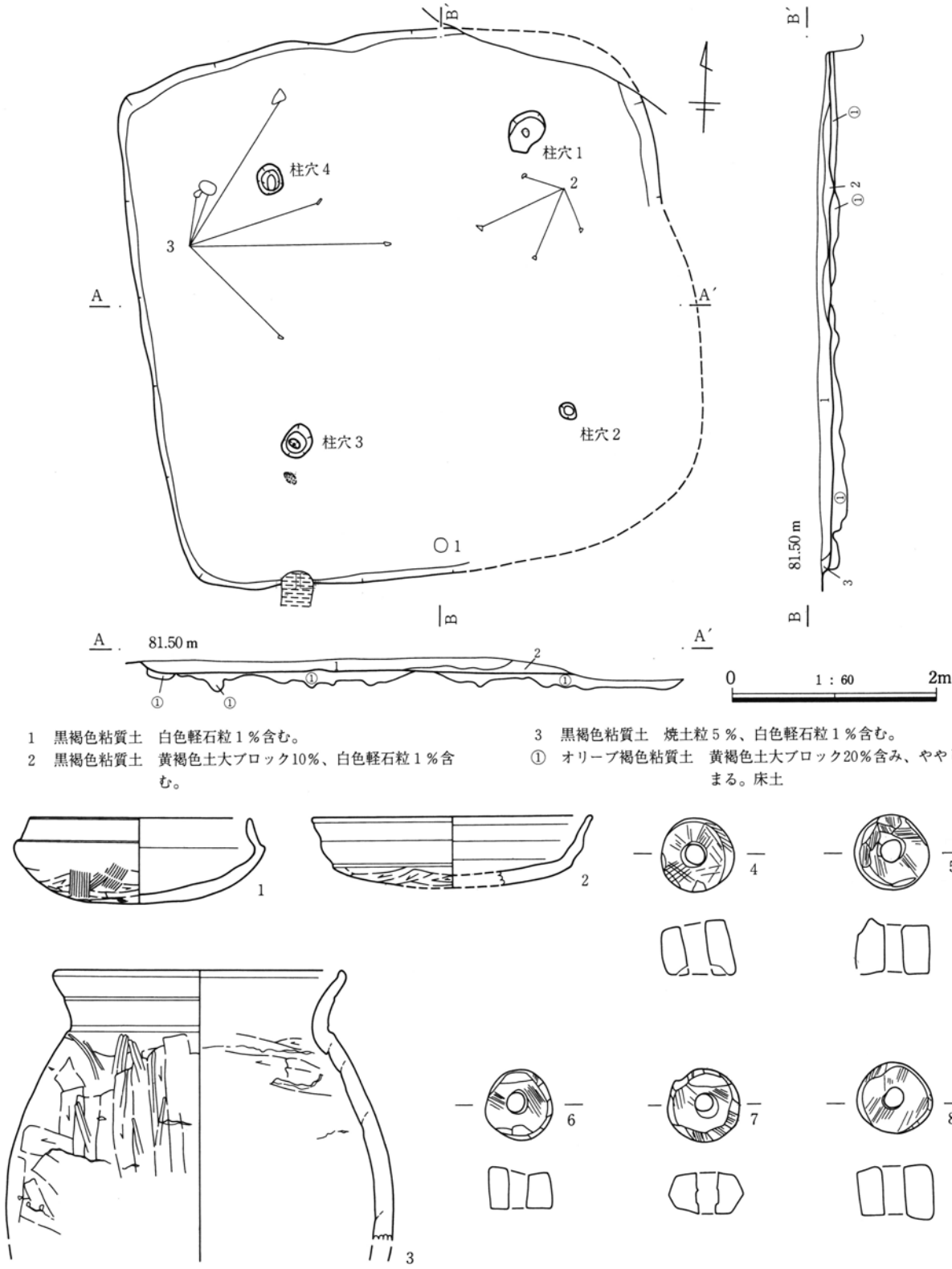
掘り方



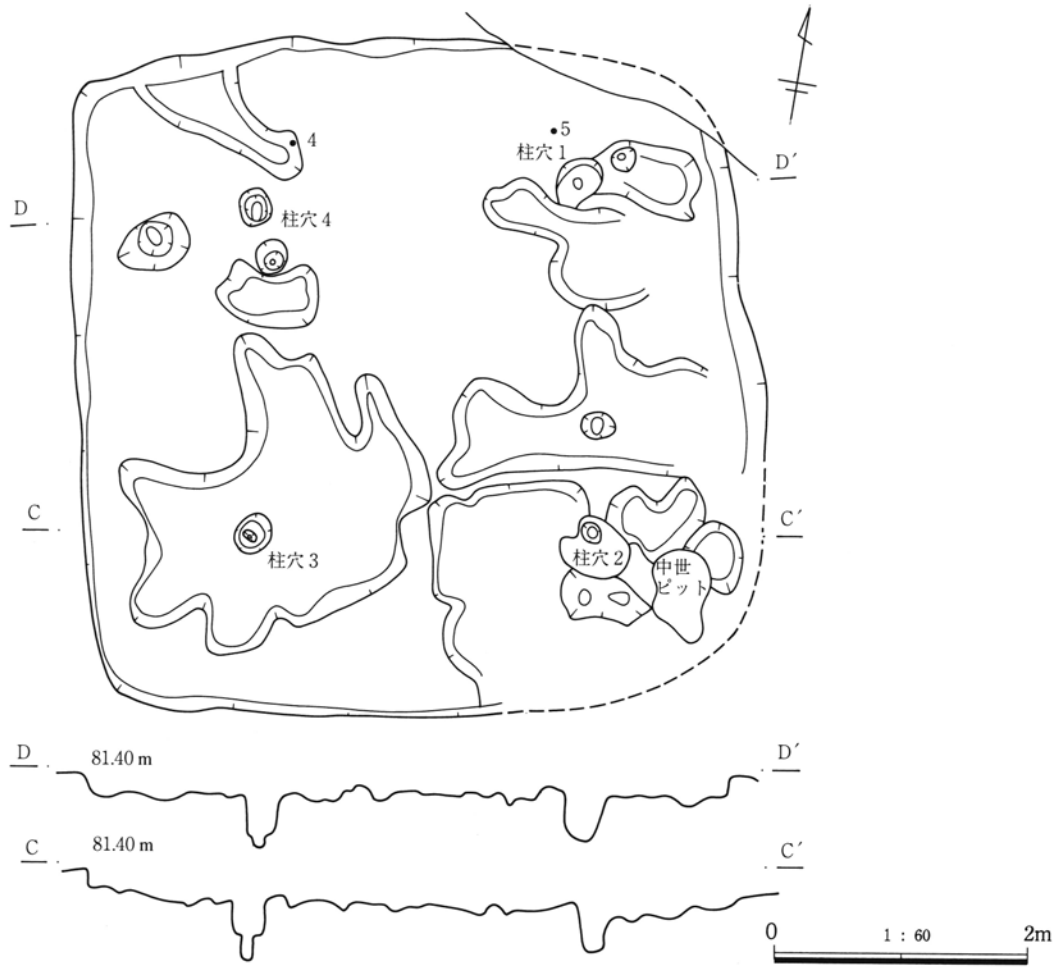
第17図　１区４号住居跡

（４～８）が出土している。

時期　出土遺物から６世紀中葉に比定される。



第18図　１区６号住居跡・出土遺物



第19図　１区６号住居跡掘り方

１区７号住居跡（PL 6-8、39）

位置　74Ｄ・Ｅ－５・６グリッド

重複　１号粘土採掘坑より古い。

形態　ほぼ正方形

主軸方位　Ｎ－０°

規模　南北(6.72)ｍ、東西(6.30)ｍ

壁　壁高は北辺11～17㎝、東辺22～25㎝、南辺11～15㎝、西辺７～20㎝で平均16.8㎝である。

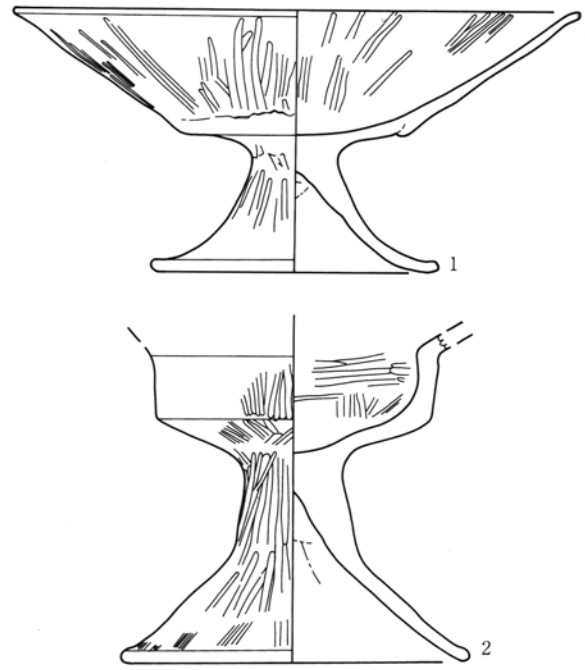
カマド・炉　なし　　**内部施設**　なし

床　本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

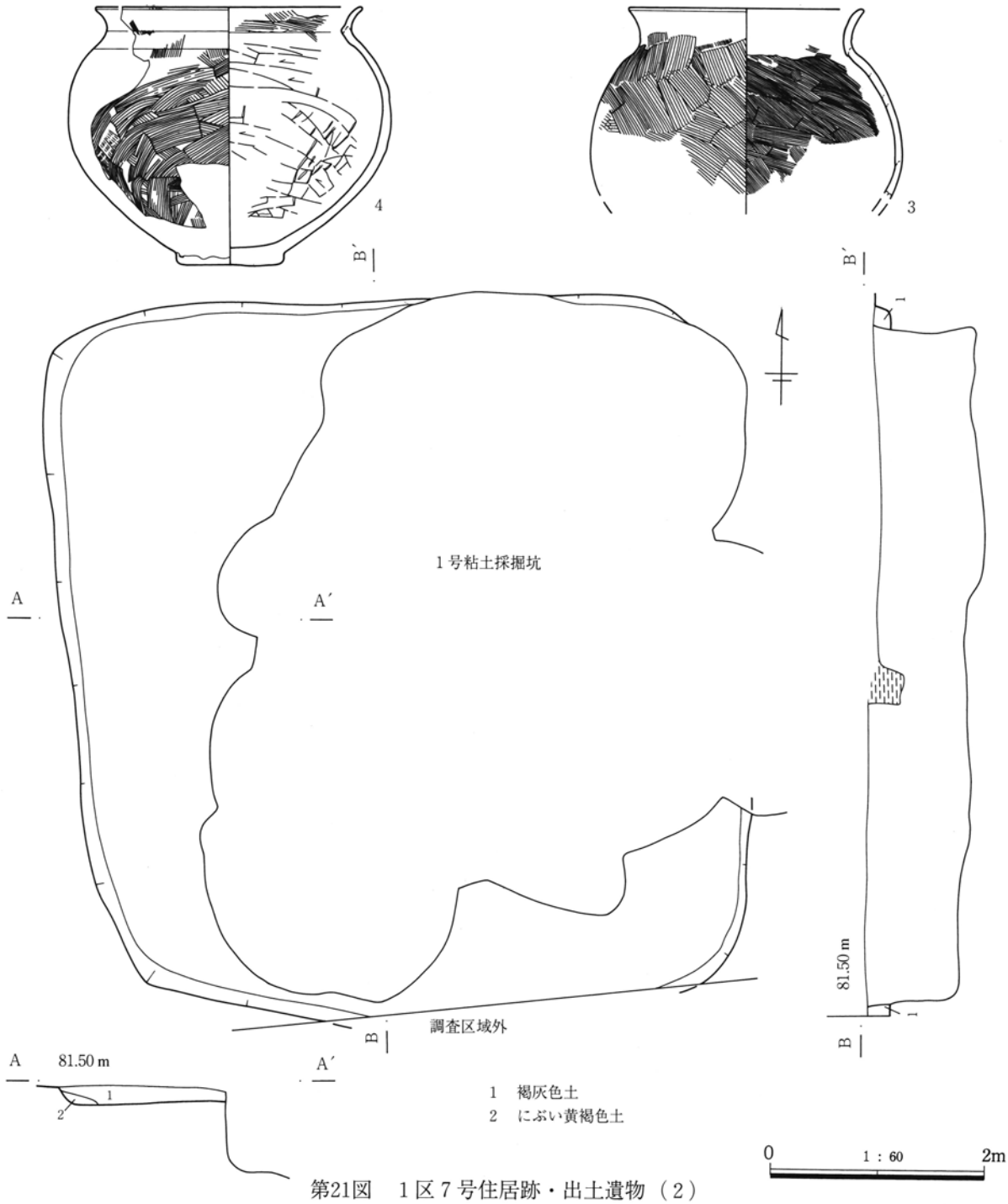
埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態　出土遺物は少ない。１号粘土採掘坑による攪拌が著しく、出土位置は不明。

時期　出土遺物から４世紀前半に比定される。



第20図　１区７号住居跡出土遺物（１）



第21図　１区７号住居跡・出土遺物（２）

１区９号住居跡（PL 7-1～4）

位置　74Ｆ・Ｇ－７・８グリッド

重複　64～68・70・72Ｂ・75号土坑より古い。

形態　ほぼ正方形

主軸方位　Ｎ－15°－Ｅ

規模　南北(5.57)ｍ、東西(5.86)ｍ

壁　壁高は北辺９～12㎝、東辺３～10㎝、南辺４～16㎝、西辺４～６㎝で平均8.0㎝である。

カマド・炉　なし

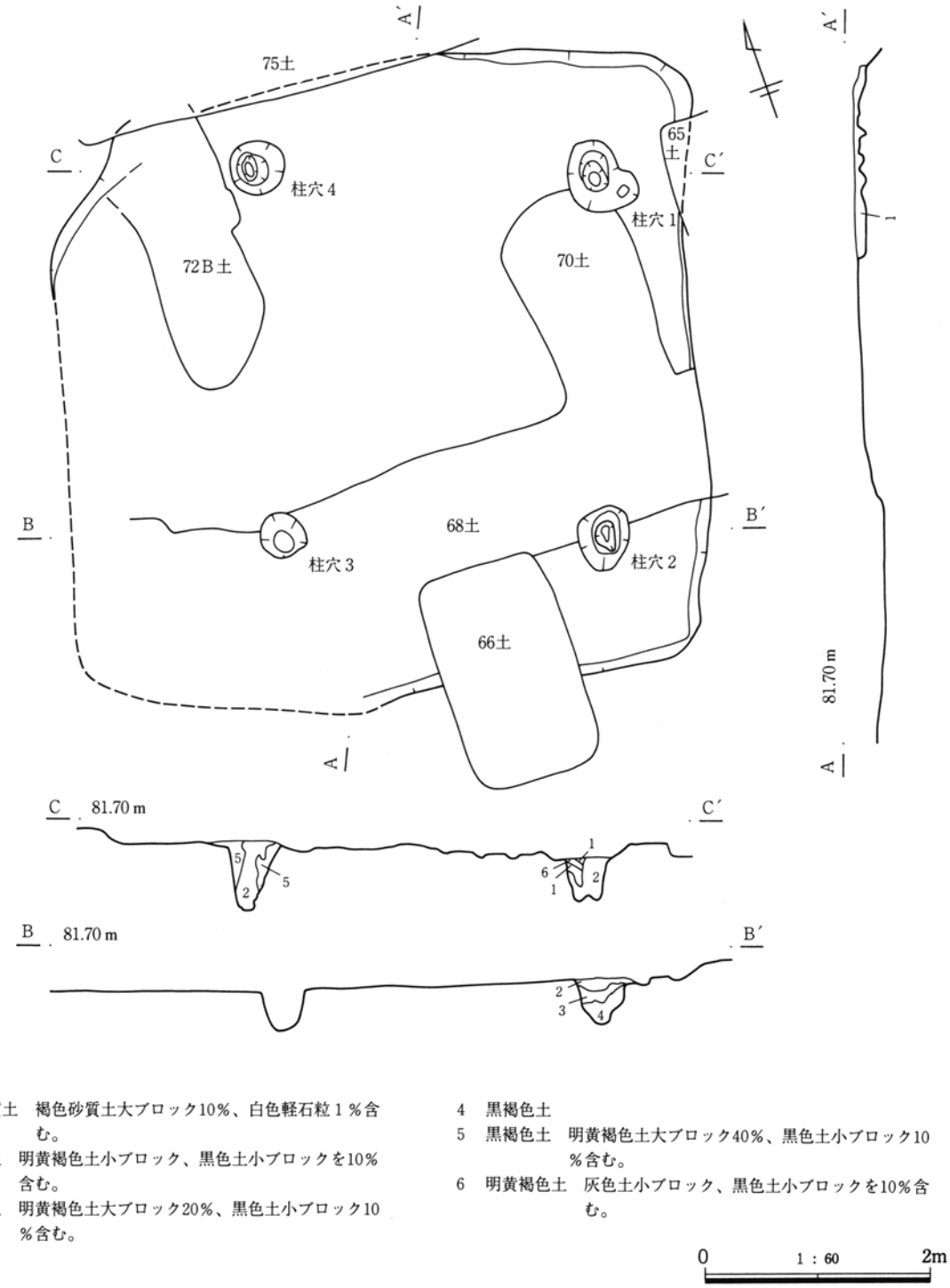
内部施設　柱穴１の規模は径68×58㎝、深さ38㎝、柱穴２の規模は径58×44㎝、深さ40㎝、柱穴３の規模は径40×38㎝、深さ34㎝、柱穴４の規模は径48×46㎝、深さ60㎝で、全て円形を呈する。

床　本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態　出土遺物は非常に少なく、土師器甕片３片のみである。

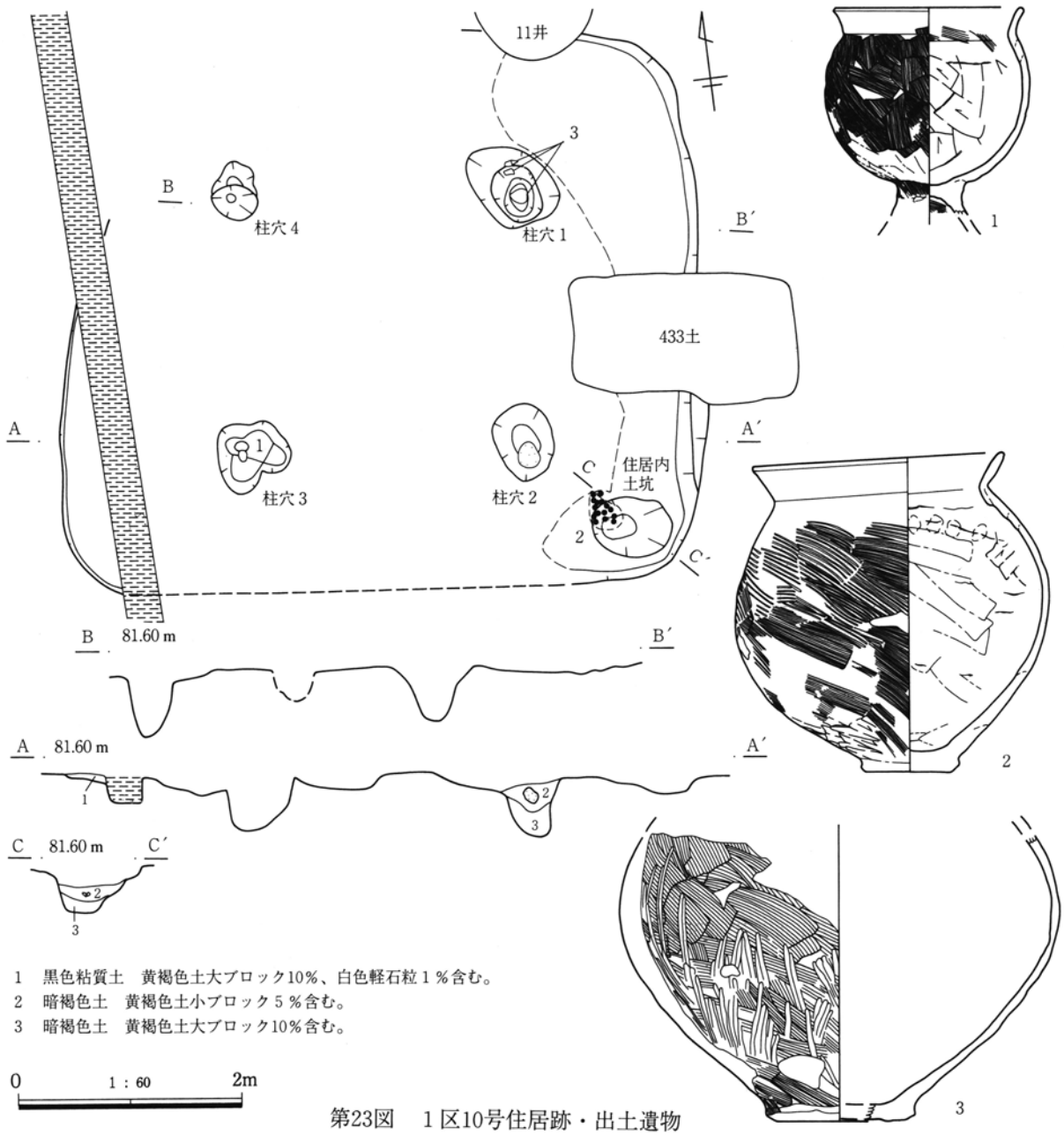
時期　出土遺物から４世紀代に比定される。



1　黒色粘質土　褐色砂質土大ブロック10％、白色軽石粒１％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
4　黒褐色土
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
6　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

第22図　１区９号住居跡

１区10号住居跡（PL 7-5～8、39）



第23図　１区10号住居跡・出土遺物

位置　74Ｆ－８グリッド

重複　なし

形態　残存する面積が狭く詳細は不明だが、ほぼ正方形と考える。

主軸方位　Ｎ－８°－Ｅ

規模　南北(4.88)ｍ、東西(5.80)ｍ

壁　壁高は北辺9.5㎝、東辺０～10.5㎝、南辺2.5～8.5㎝、西辺2.0～5.5㎝で平均5.5㎝である。

カマド・炉　なし

内部施設　柱穴１の規模は径90×64㎝、深さ48㎝、柱穴２の規模は径68×51㎝、深さ50㎝、柱穴３の規模は径70×67㎝、深さ40㎝、柱穴４の規模は径50×42㎝、深さ49㎝で、全て不整円形を呈する。その他、南東隅に径70×50㎝、深さ40㎝の住居内土坑が検出された。

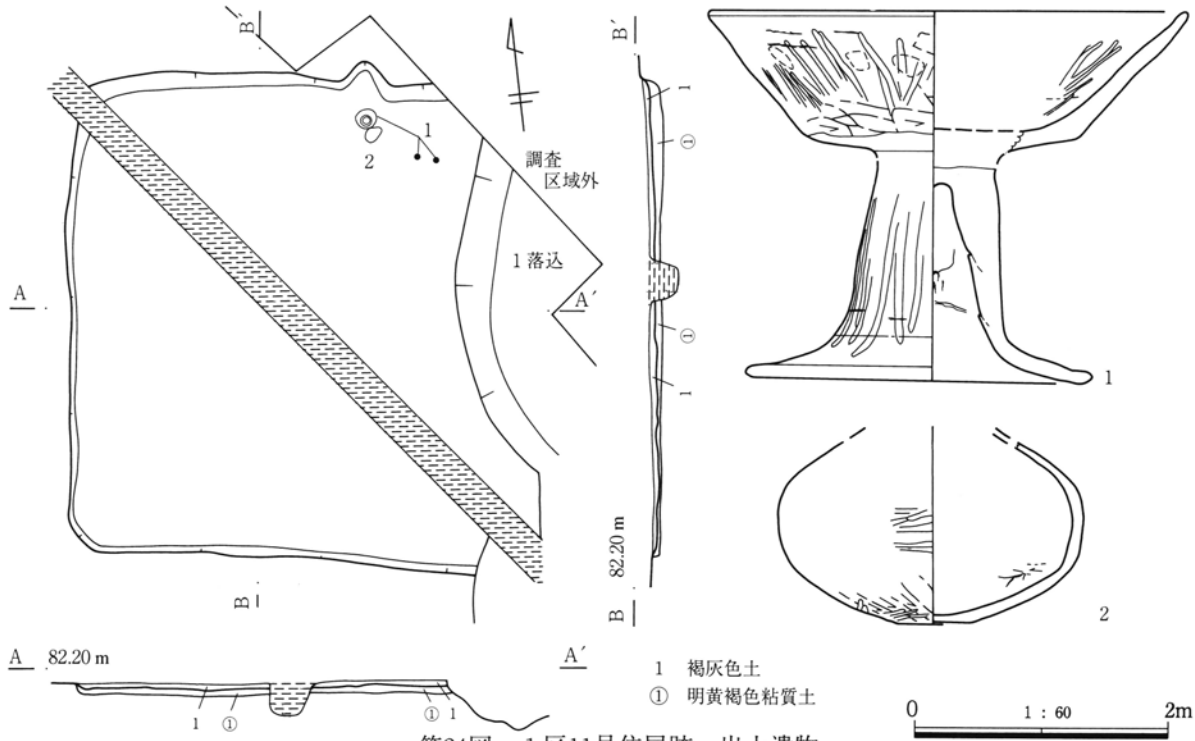
床・埋没状況　柱穴以外ほとんど残存せず不明。

遺物出土状態　出土遺物は非常に少ない。住居内土坑から土師器甕(２)、柱穴３から小型台付甕(１)が

出土している。

時期　出土遺物から４世紀前半に比定される。

１区11号住居跡（PL８-1、39、40）



第24図　１区11号住居跡・出土遺物

位置　73Ｃ－９グリッド

重複　２号土壙墓、１号落込より古い。

形態　一部調査区域外となるが方形を呈する。

主軸方位　Ｎ－８°－Ｅ

規模　南北3.82ｍ、東西(3.74)ｍ

壁　壁高は北辺２～16㎝、南辺５～７㎝、西辺４～14㎝で平均8.0㎝である。

カマド　北辺に位置し、住居内に燃焼部を持つ。天井部・両袖部とも崩壊して残存しない。規模は、焚口～煙道が0.38ｍ、袖焚口幅が0.26ｍである。火床面は床面とほぼ同レベルで、２㎝程焼土が堆積している。掘り方は火床面から７㎝程を測る。

内部施設　なし

床　ほぼ平坦で貼床及び硬化面は見られない。掘り方面より９㎝程黄褐色土を盛る。

掘り方　ほぼ平坦で、明確な床下土坑等は存在しない。

埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態　出土遺物は少ないが、カマドから土師器高杯(１)・壺底部(２)が出土している。

時期　出土遺物から５世紀後半に比定される。

１区12号住居跡（PL８-2、40）

位置　73Ｂ・Ｃ－９グリッド

重複　670号土坑、２号落込より古い。

形態　残存する面積が極めて狭く不明。

主軸方位　不明

規模　南北(2.44)ｍ、東西(2.70)ｍ

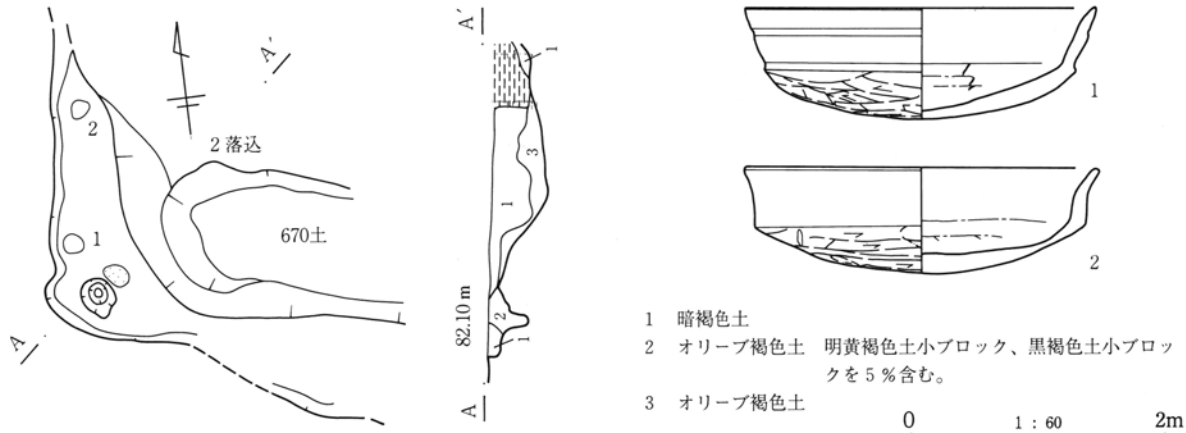
壁　壁高は南辺10～14.5㎝、西辺8.5～12㎝で平均11.3㎝である。　**カマド・炉**　なし

内部施設　南西隅に径33×26㎝、深さ32㎝の落ち込みが検出された。

床・埋没状況　南西隅以外残存しておらず不明。

遺物出土状態　ほぼ完形の土師器杯２個(１・２)が転置されていた。

時期　出土遺物から６世紀後半に比定される。



第25図　１区12号住居跡・出土遺物

１区13号住居跡（PL 8-3・4、40）

位置　74Ｇ・Ｈ－４・５グリッド

重複　なし

形態　ほぼ半分が調査区域外となり不明。

主軸方位　不明

規模　南北(3.90)ｍ、東西(4.00)ｍ

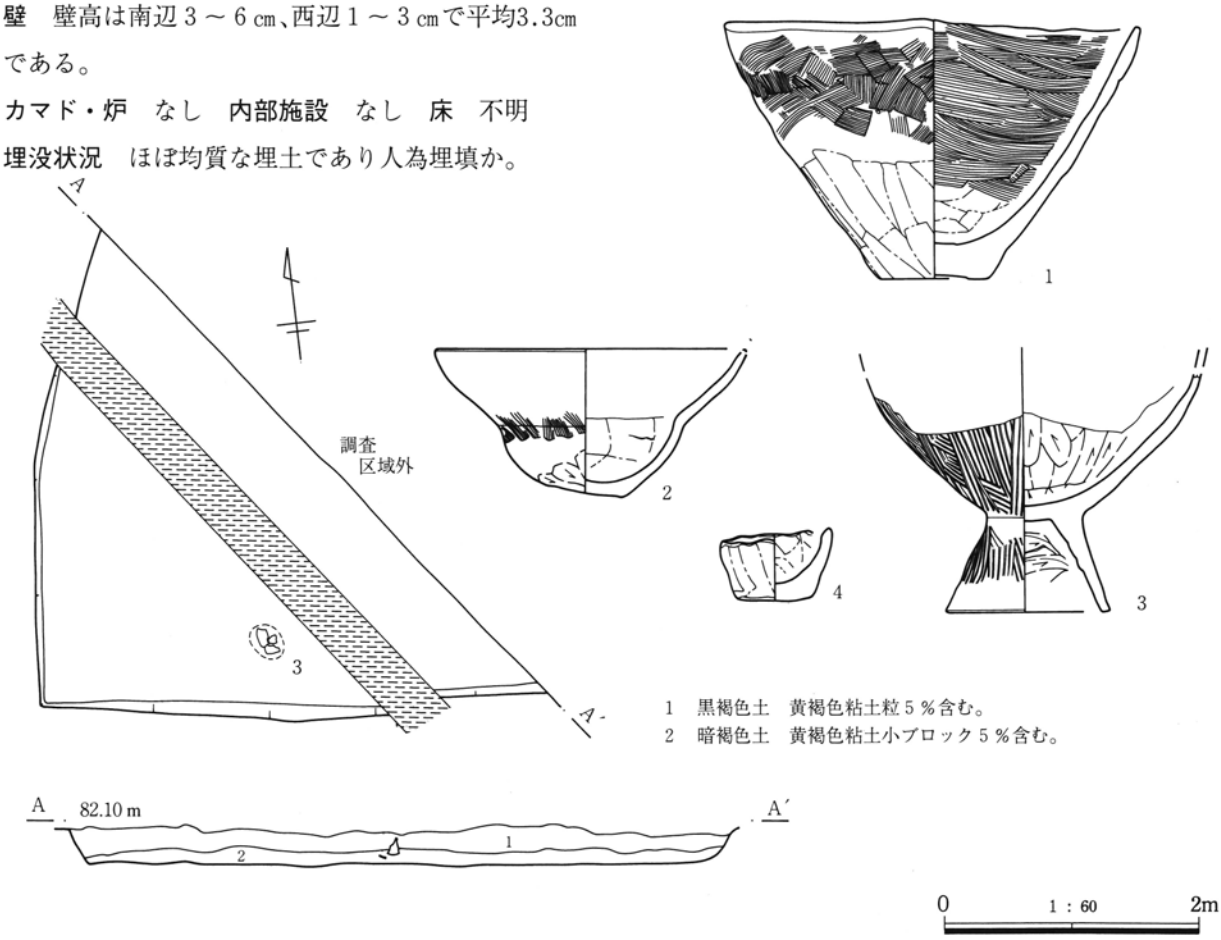
壁　壁高は南辺３～６㎝、西辺１～３㎝で平均3.3㎝である。

カマド・炉　なし　**内部施設**　なし　**床**　不明

埋没状況　ほぼ均質な埋土であり人為埋填か。

遺物出土状態　出土遺物は少なく土師器台付甕(３)以外埋土中である。埋土からミニチュア土器(４)が出土している。

時期　出土遺物から４世紀前半に比定される。



第26図　１区13号住居跡・出土遺物

１区14号住居跡（PL 8-5）

位置　74Ｈ－５グリッド

重複　なし　**形態**　残存状況悪く不明。

主軸方位　不明　**規模**　不明　**壁**　不明

カマド・炉　なし　**内部施設**　なし

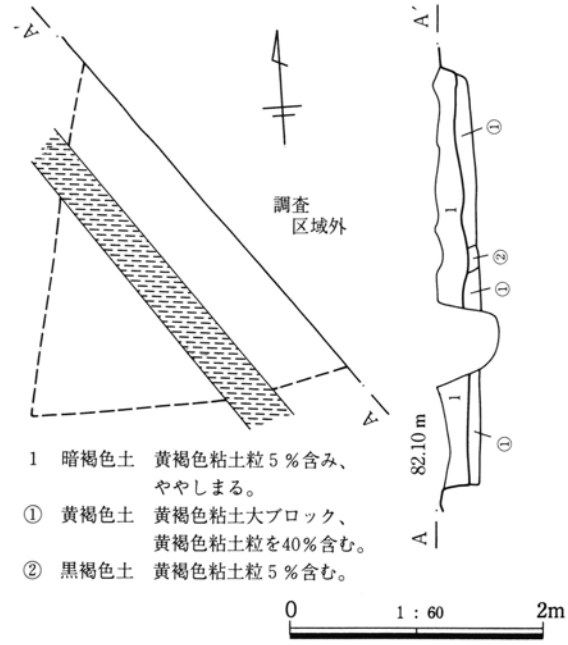
床　表土掘削時に誤って削平してしまったが、断面観察ではほぼ平坦。掘り方面から15㎝ほど黄褐色土を盛る。

掘り方　ほぼ平坦で明確な床下土坑等は存在しない。

埋没状況　ほぼ均質な埋土であり人為埋填か。

遺物出土状態　出土遺物は非常に少なく土師器杯・台付甕片２片のみである。

時期　出土遺物から４世紀代に比定される。



第27図　１区14号住居跡

第２項　溝

３区14号溝・４区14号溝（付図４　PL 8-6・7）

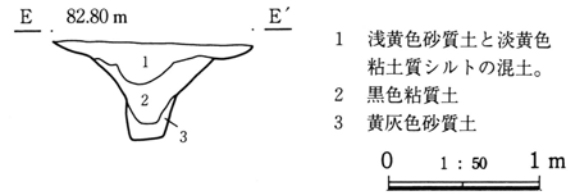
位置　３区中央部を東西に横断して、市道を挟んで４区につながり中央部で不明となる。

重複　３区55号溝、４区２号溝より古い。

形態　ほぼ直線状。規模は３区14号溝が長さ64.72ｍ、最大幅1.26ｍ、深さは断面観察部で66㎝、４区14号溝が長さ(24.60)ｍ、最大幅1.62ｍ、深さは断面観察部で74㎝である。走向方位はＮ－78°－Ｅであり、傾斜に対して直交方向に設ける。断面はＶ字に近い逆台形を呈する。底面近くに砂質土が堆積しており流水の存在を認める。４区では埋土中位に５㎝程度ＦＡの堆積が見られ(第５章３参照)、ＦＡ降下時には既に廃棄されていたものと考える。形態及び周辺の状況から北東500ｍに位置する湧水点「大井戸」流路からの導水を目的とした用水路である可能性が高い。

出土遺物　なし

時期　ＦＡ降下（６世紀初頭）以前である。



第28図　３区14号溝土層断面

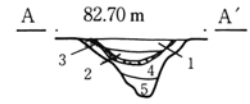
第３項　まとめ

本遺跡検出の竪穴住居跡の年代は以下のとおりである。

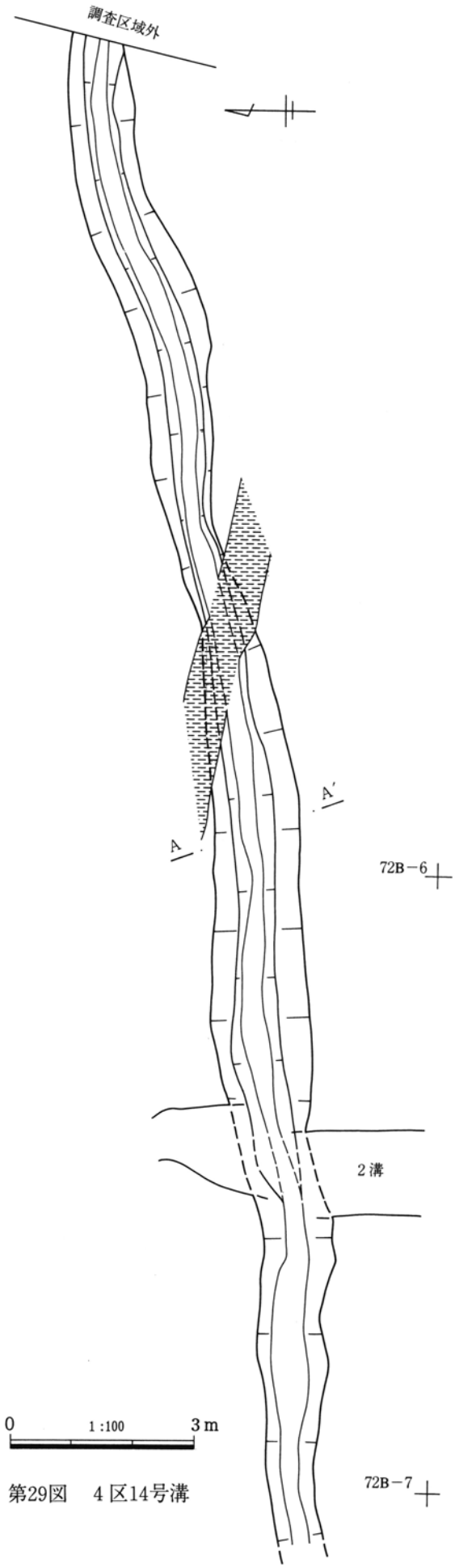
４世紀前半　１区７・10・13号住居跡
４世紀後半　１区１・２・３・４号住居跡
（４世紀代）　１区９・14号住居跡
５世紀後半　１区11号住居跡
６世紀中葉　１区６号住居跡
６世紀後半　１区12号住居跡

以上から住居跡の変遷を概観すると、４世紀前半から数軒程度のまとまりとして出現し、５世紀前半には消滅するが、再び１軒程度が現れ、その後消滅したこととなる。また、５世紀代については「上植木調査区」で５世紀中葉の竪穴住居跡が２軒（３・７号住居跡）、５世紀後半の竪穴住居跡が１軒（１号住居跡）検出されており、本遺跡に含めて考えれば、本遺跡区域では４世紀前半から６世紀後半まで

ほぼ継続的に居住するが、徐々に減少してゆく傾向が見える。なお、北方に近接する三和工業団地遺跡（当団調査）では、３世紀末から４世紀前半の竪穴住居跡が140軒弱存在し、また同時期の墓域として舞台遺跡（当団調査）、三和工業団地遺跡（伊勢崎市調査）で周溝墓群が調査されており、そうした領域の南端に本遺跡は位置づけられる。一方水田等の生産域は、北東の湧水点「大井戸」流域である本遺跡東及び南側の谷地と、西側の谷地が想定されるが、３区から４区を北東－南西方向に横断する14号溝は、この西側谷地に「大井戸」から導水する用水路として機能したものと考える。なお、３区14号溝に連続すると見られる溝が、北東側の三和工業団地遺跡（伊勢崎市教委調査）で検出され、北東方向（大井戸方向）の低地部へ向かって、軸を北東－南西方向に変えて、やがて不分明となることが確認されている。



1　黄灰色粘質土
2　灰色粘質土　ＦＡ１％含む。
3　ＦＡ
4　黄灰色粘質土
5　黄灰色砂質土



第29図　４区14号溝

第３節　平安時代

第１項　竪穴住居跡

１区５Ａ号住居跡（PL 9-1～5、40、41）

遺構確認面において埋土中に炭化材が散見され焼失住居跡と判断された。炭化材及び炭・灰層は、埋土の深さ約10㎝下において面的に広がっており、炭化材面として調査を行った。その後、その下層の５Ｂ号住居跡出土遺物との比較結果から、炭・灰層下面を５Ａ号住居跡、その下層を５Ｂ号住居跡とする２軒の住居跡の重複であることが判明した。

位置　74Ｆ－７グリッド

重複　５Ｂ・６号住居跡より新しい。

形態　横長方形　**主軸方位**　Ｎ－17°－Ｅ

規模　南北3.64ｍ、東西5.96ｍ

壁　不明　**カマド**　なし

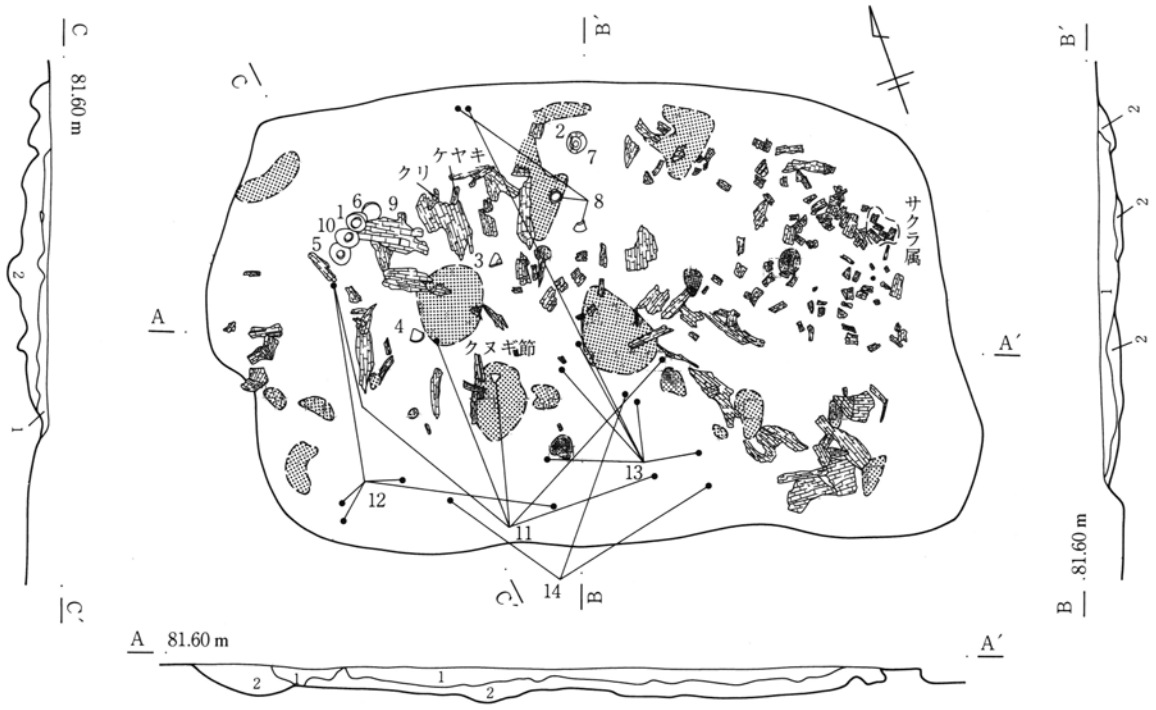
内部施設　炭・灰層下面を面的に調査したが、柱穴等を精査しておらず、内部施設は未検出である。

床　詳細は不明だが断面観察の結果ほぼ平坦である。

埋没状況　ほぼ均質な埋土であり、焼失後人為埋填したものと考える。

遺物出土状態　北西部に完形の土師器椀（３・４・６）、須恵器杯（９）・椀(10)が、また北壁際中央寄りで土師器椀（２）・須恵器杯（７）が転置されており、状況から見て伏せられていたものと見られる。その他は須恵器甕(12～14)等が細片となって散在していたが、全体として出土遺物量は少ない。炭化材はクリやケヤキ等が混在し（第５章参照）、住居の柱材ほかの用材と考えられるが、分布を見るとほぼ南西部分が空白となる一方、南東隅から中央部へ向かって連続する炭化材が出土している。こうした状況から見て、上屋が北側へ焼け落ちた状態を示すものと考える。

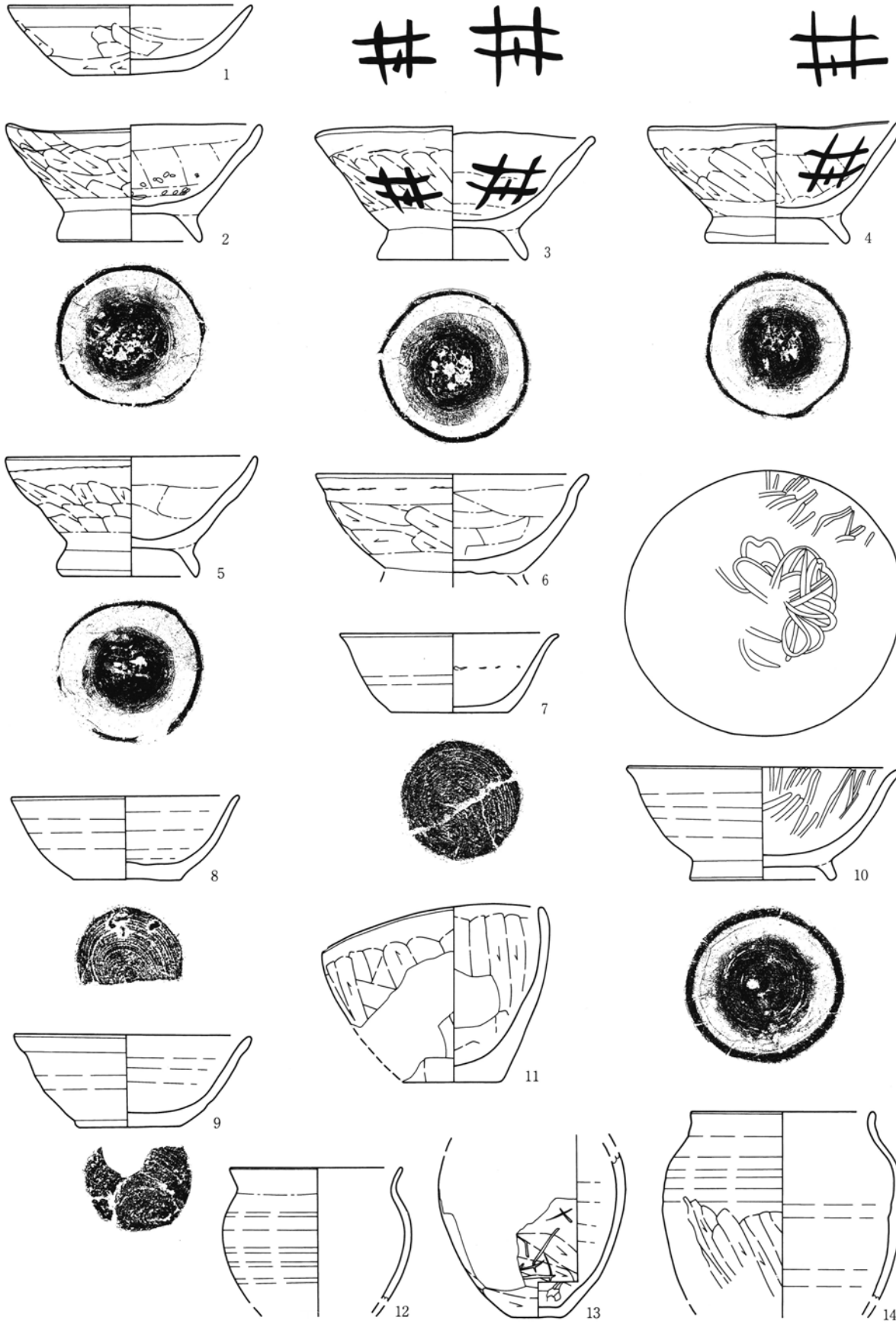
時期　出土遺物から10世紀前半に比定される。



1　黒褐色粘質土　黄褐色土小ブロック１％含む。
2　黒褐色粘質土と焼土塊、炭化材の混土。

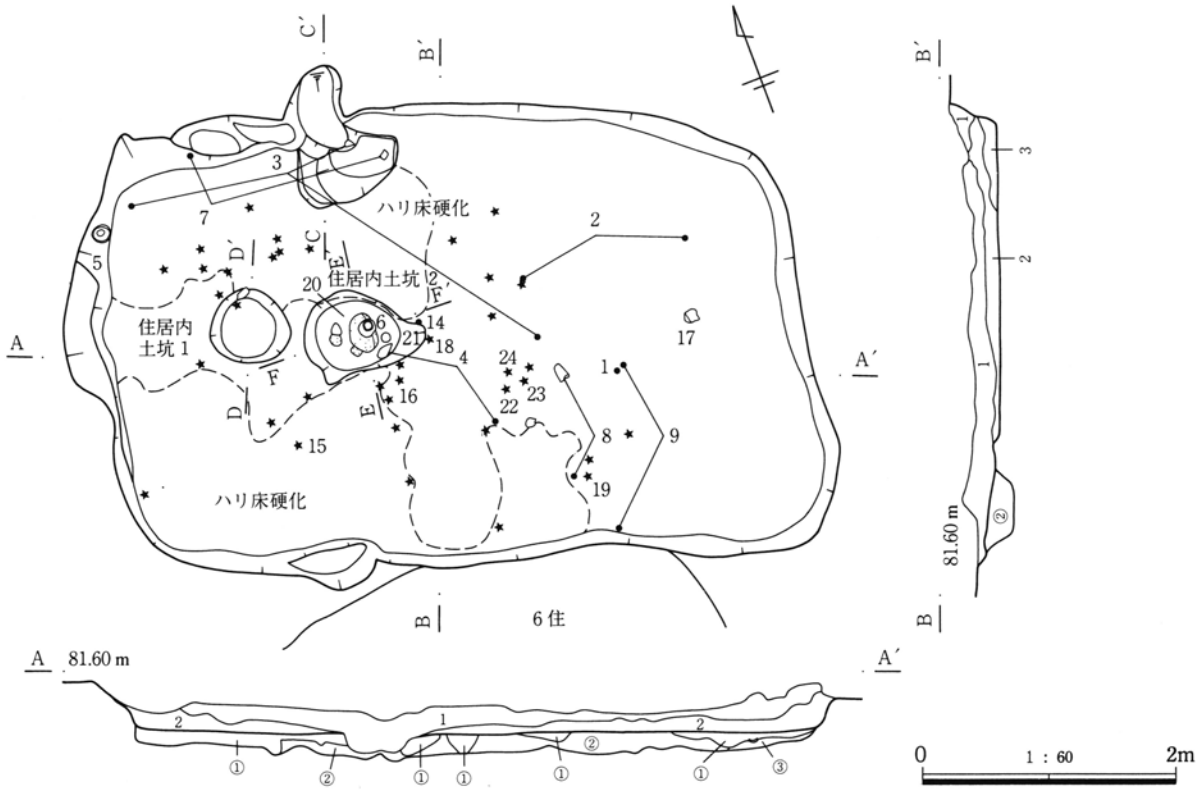
0　1：60　2m

第30図　１区５Ａ号住居跡



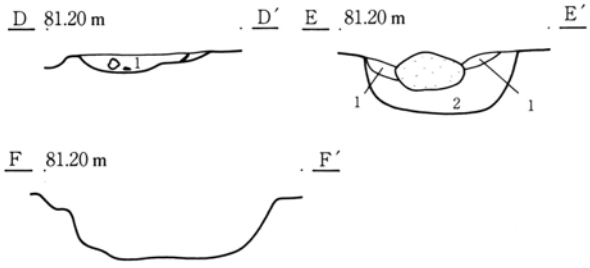
第31図　１区５Ａ号住居跡出土遺物

１区５Ｂ号住居跡（PL 10-1～5、41、42）



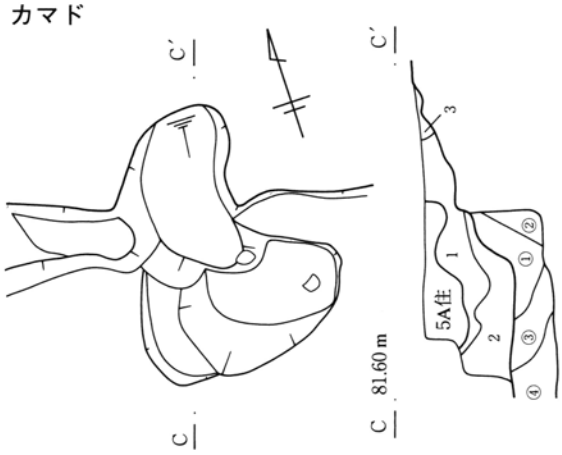
1　灰褐色粘質土　黄褐色土小ブロック、焼土粒を１％含む。
2　灰褐色粘質土　黄褐色土大ブロック40％含む。
3　黒色粘質土　黄褐色土大ブロック20％含み、ややしまる。

①　暗褐色粘質土　ややしまる。床土
②　黒褐色粘質土　黄褐色土小ブロック20％含む。
③　黒色粘質土



住居内土坑１・２
1　暗褐色粘質土　径１～３㎝大の鉄滓20％含み、しまらない。
2　暗褐色粘質土　灰色粘土小ブロック20％含み、しまらない。
チップを含む。

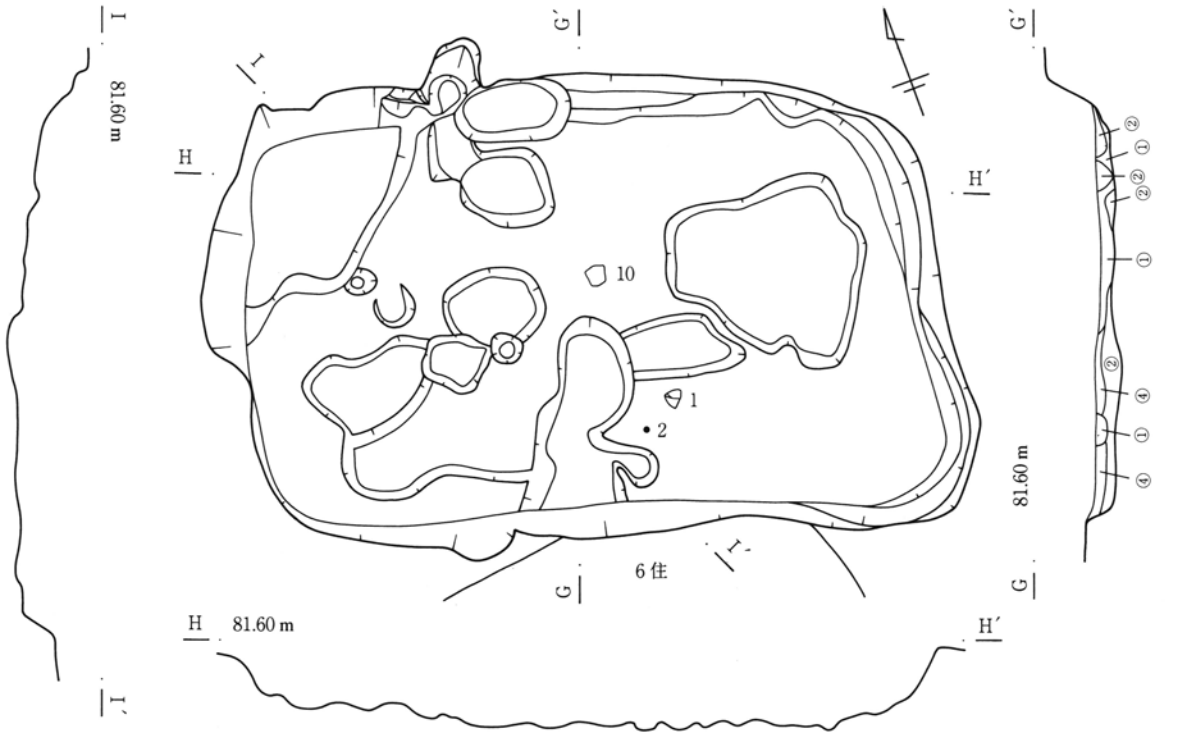
カマド



1　暗褐色粘質土　焼土粒10％、白色軽石粒５％、炭粒１％含む。
2　オリーブ褐色粘質土　黄褐色土小ブロック10％含む。
3　黒褐色粘質土　黄褐色土小ブロック10％含む。
①　にぶい黄褐色粘質土　黒色土小ブロック10％含む。
②　黄褐色粘質土　灰色粘質土小ブロック10％含む。
③　黒色粘質土　灰色粘質土小ブロック10％含む。
④　灰褐色粘質土　黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

0　1：30　1m

第32図　１区５Ｂ号住居跡・カマド



① 暗褐色粘質土　ややしまる。床土
② 黒褐色粘質土　黄褐色土小ブロック20％含む。
③ 黒色粘質土
④ 灰褐色粘質土　黄褐色土小ブロック20％含む。やや硬化する。

0　1：60　2m

第33図　１区５Ｂ号住居跡掘り方

遺構確認面では５Ａ号住居跡と同一の焼失住居跡と考えたが、掘り下げの結果別住居跡であることが判明した。埋土中からは多量の鉄滓（★）と羽口が出土することから小鍛冶の住居跡と考え、埋土全てを篩にかけた上で肉眼と磁石によって鍛冶関連遺物の検出を行った。また、床面から鍛冶に関連する住居内土坑２基を検出できた。

位置　74Ｆ－７グリッド

重複　６号住居跡より新しく、５Ａ号住居跡より古い。

形態　横長方形　**主軸方位**　Ｎ－17°－Ｅ

規模　南北3.64ｍ、東西5.96ｍ

壁　壁高は北辺４～35㎝、東辺11～32㎝、南辺29.5～42.5㎝、西辺26～40㎝で平均27.5㎝である。

カマド　残存状況が悪く、５Ａ号住居跡により破壊された可能性がある。規模は、焚口～煙道が0.63ｍ、袖焚口幅が0.29ｍである。掘り方は主軸0.60ｍ、幅0.46ｍである。

内部施設　中央部やや西寄りの住居内土坑１は円形を呈し、規模は径65×56㎝、深さ13㎝である。その東隣の住居内土坑２もほぼ円形を呈し、規模は径96×75㎝、深さ45㎝であり、埋土中から金床として使用された巨円礫が出土し、叩面を横にして土坑底面から浮いた状態であったことから原位置ではなく、住居跡廃棄時に投棄されたものと解される。また、その埋土中から鉄滓及び多量のチップが出土した。

床　西側半分及び南壁際中央部で黒色粘質土を踏み固め非常に硬化した床面を検出したが、中央部の住居内土坑１・２の周辺及び東側半分では硬化面はなく非常に軟弱であった。掘り方面より10㎝程黒～暗褐色粘質土を盛る。

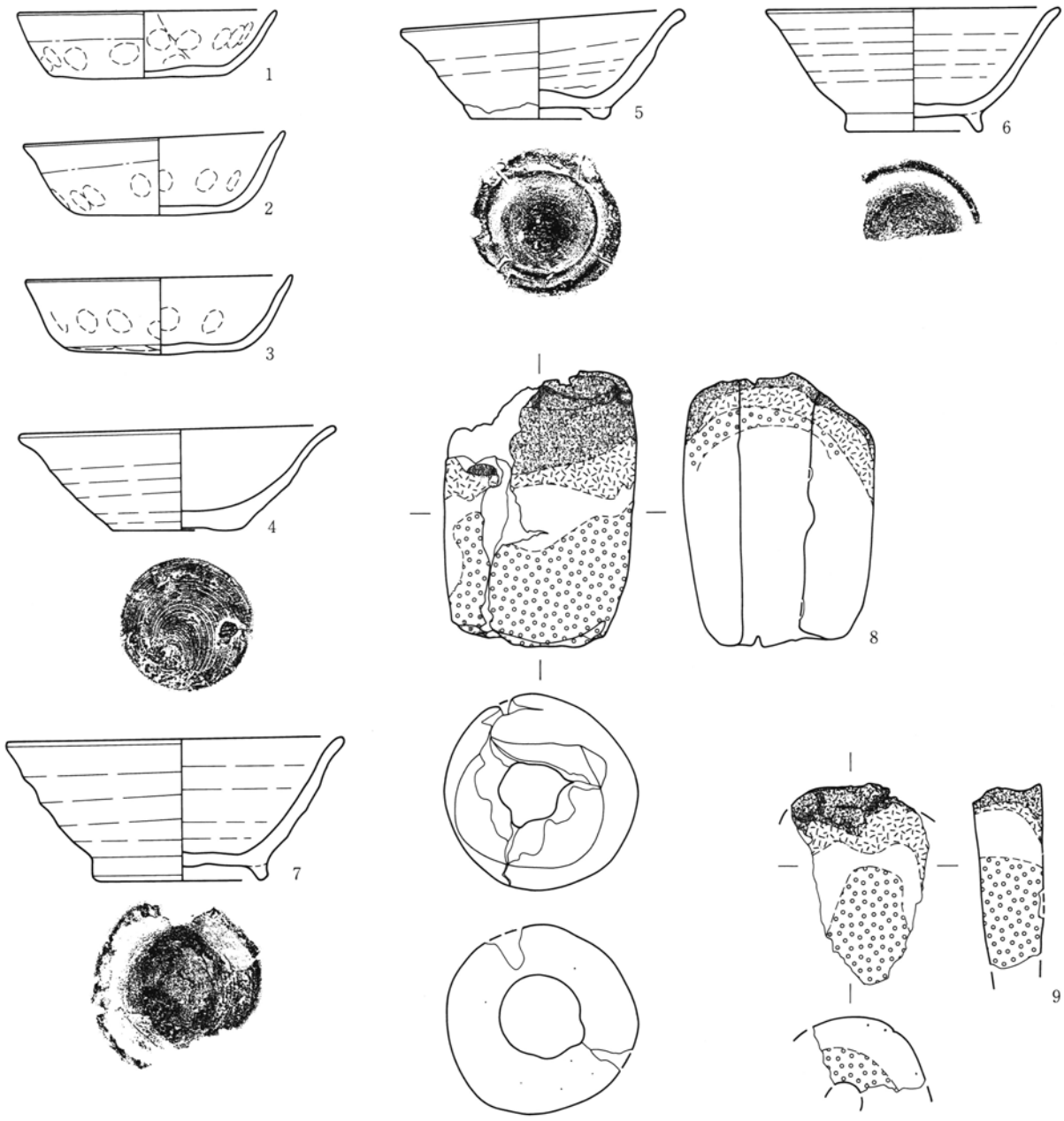
掘り方　明確な床下土坑などは存在しないが、浅い不整形な落ち込みが多く見られる。

埋没状況　壁際から三角堆積しており、自然埋没と考えられる。

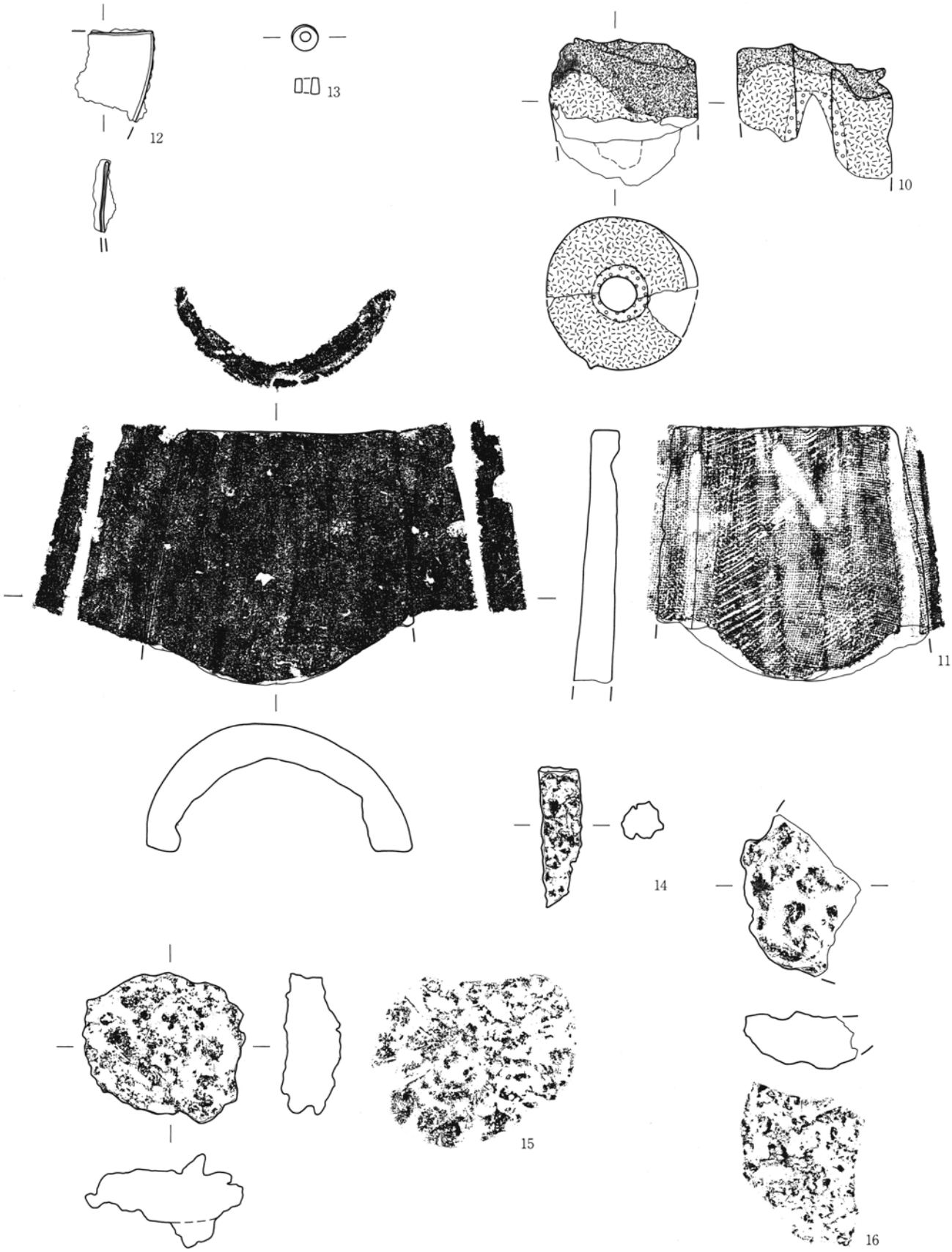
遺物出土状態　住居内土坑２ではほぼ完形の須恵器杯(４)・椀(７)が出土したが、投棄されていた金床の上面であることから同じく土坑内に投棄されたも

のと見られる。その他は土師器杯（１～３）等が住居北側に散在していたが、全体として土器類の出土量は少ない。鍛冶関連の遺物としては、羽口（８～10）が中央部東寄りで出土するが、炉等の関連する施設はなかった。鉄滓は掲載遺物のほか、椀形鉄滓片42個1.8㎏、重い鉄滓56個1.65㎏、やや重い鉄滓4.42㎏、軽い鉄滓8.95㎏合計16.82㎏と多量に出土しており、鋼精錬時のスラグ材として再利用されるものとして、北側に近接する３号鍛冶遺構との関連が濃厚となる。また、住居内土坑２及び埋土からチップ（微細な鉄滓も含まれる）268ｇが検出され、本遺構内で鍛造行為がなされていたものと考える。その他最大径7.6㎜の円球状の湯玉２ｇ、羽口片900ｇが出土した。以上の状況は鉄滓の分析結果とも符合している。

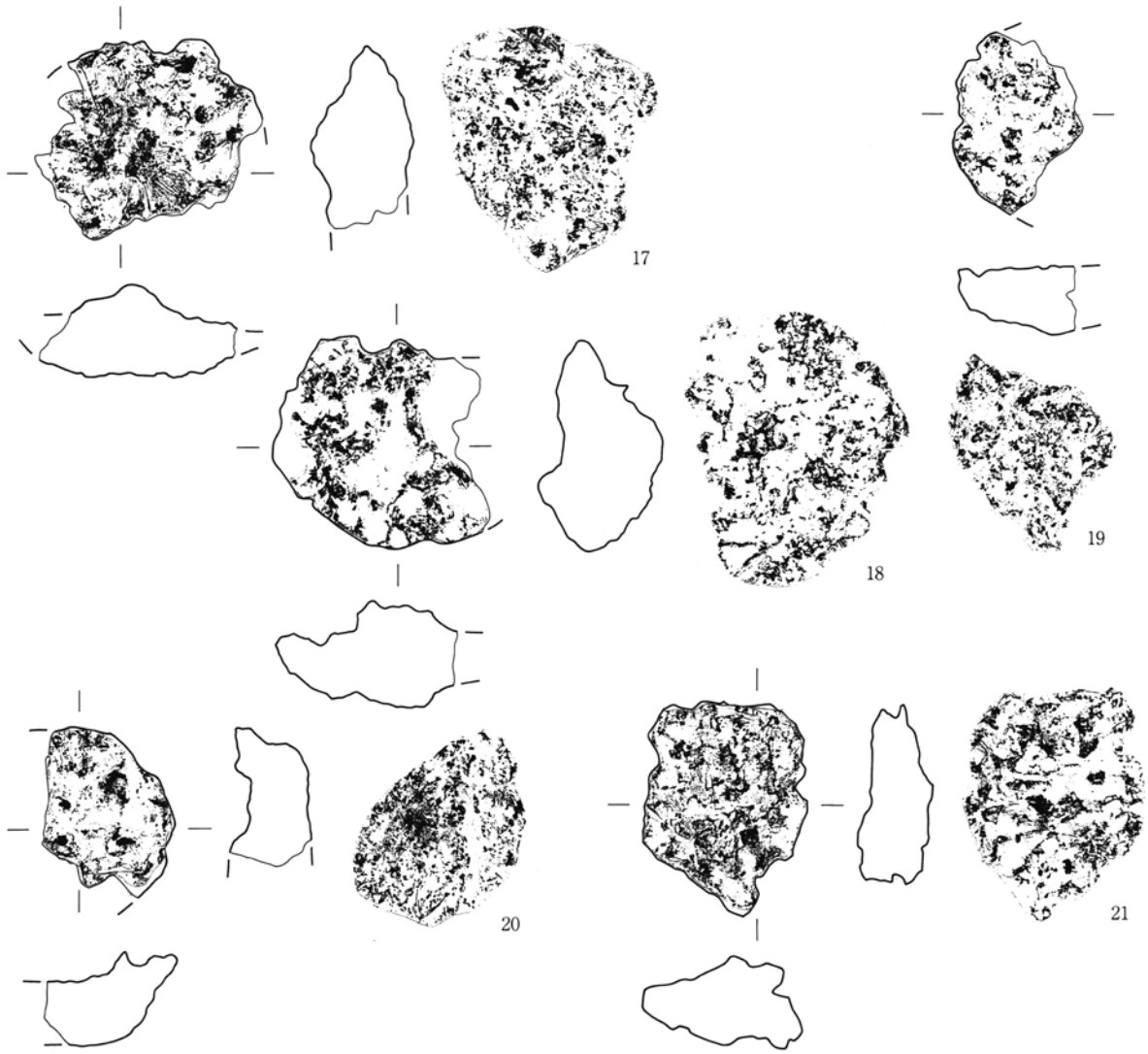
時期　出土遺物から９世紀後半に比定される。



第34図　１区５Ｂ号住居跡出土遺物（１）



第35図　１区５Ｂ号住居跡出土遺物（２）



第36図　１区５Ｂ号住居跡出土遺物（３）

１区８号住居跡（PL 11-1～5、42、43）

位置　74Ｆ－８グリッド

重複　55号土坑、２号溝より古い。

形態　残存面積が狭く詳細は不明だが、方形と見られる。

主軸方位　Ｎ－180°

規模　南北(3.14)ｍ、東西(1.64)ｍ

壁　壁高は北辺12㎝、東辺13～15㎝で平均13.3㎝である。

カマド　南辺やや東寄りに位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部・両袖部とも崩壊して残存しない。規模は、焚口～煙道が1.36ｍ、袖焚口幅が(0.53)ｍである。左袖は崩壊しているが構築材とする瓦片が残存し、貯蔵穴内でも40×25×23.5㎝の巨礫が出土しており、住居廃棄時にカマドを破壊した際、袖石または天井石が投棄されたものと解される。火床面は床面よりやや下がる。

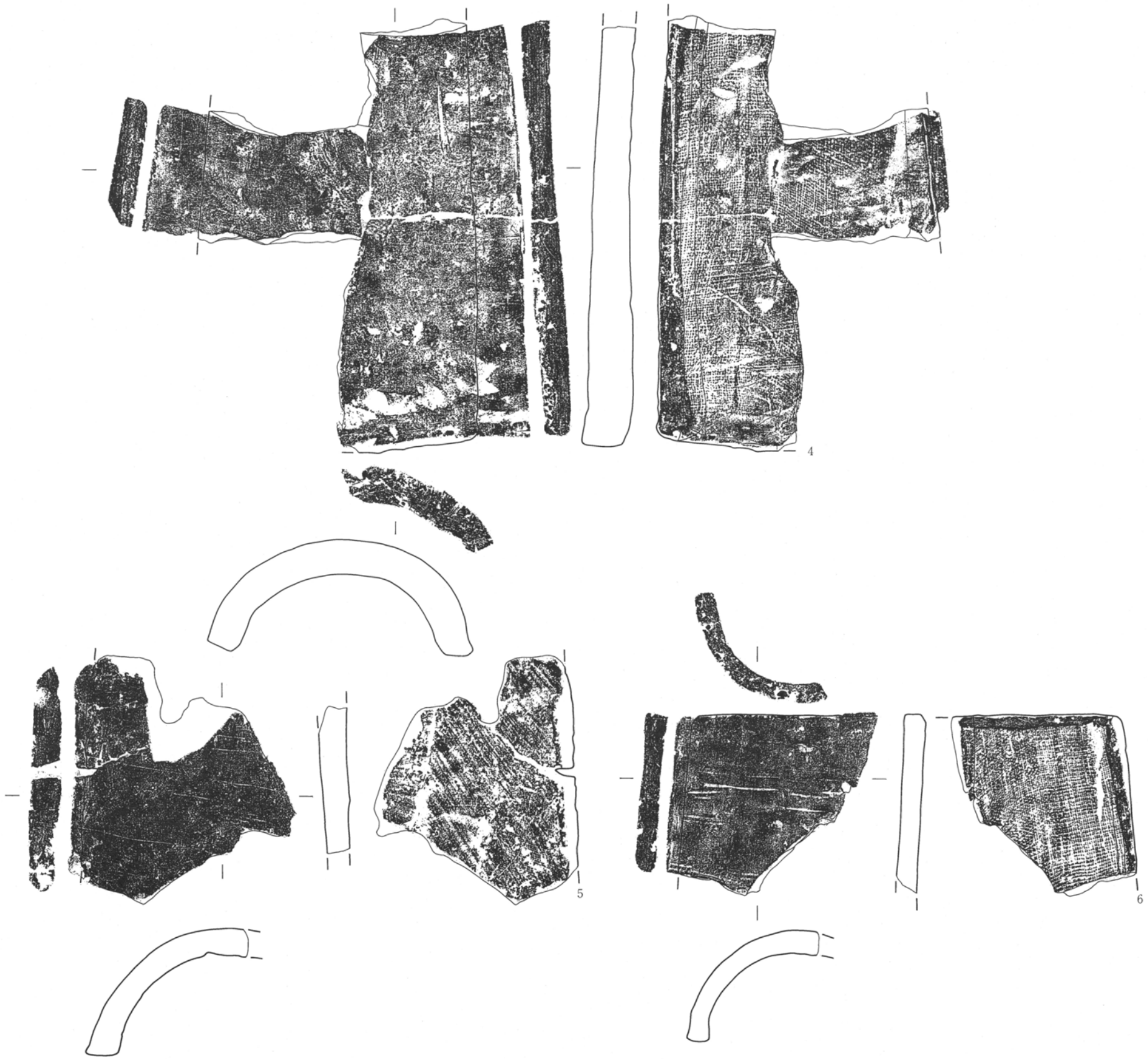
内部施設　貯蔵穴は南東隅に位置し、不整楕円形を呈する。規模は径120×73㎝、深さ29㎝である。その他、中央部に径62×53㎝、深さ７㎝の住居内土坑と、やや南寄りに径(68)×(38)㎝、深さ(８)㎝の落ち込みが検出された。

床　ほぼ平坦で、貼床及び硬化面は見られない。

掘り方　なし

埋没状況　ほぼ均質な埋土であり、人為埋填か。

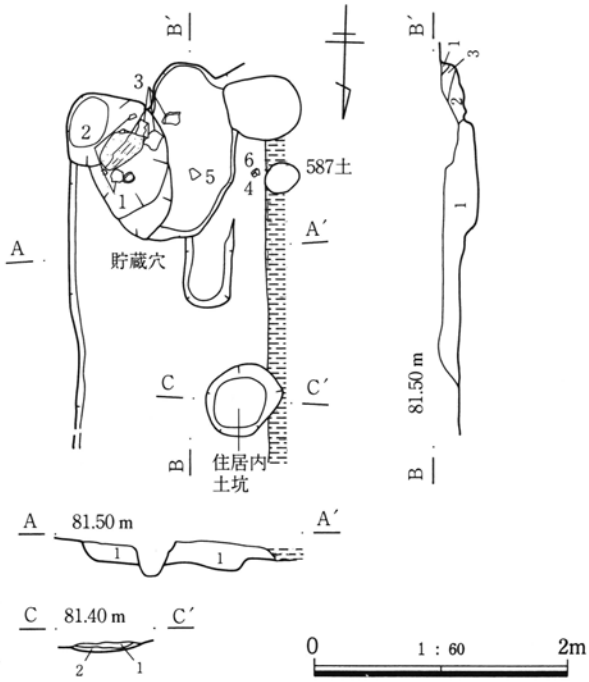
遺物出土状態　遺物はカマド及び貯蔵穴に集中しており、瓦(３～６)はカマドの袖等の構築材として使



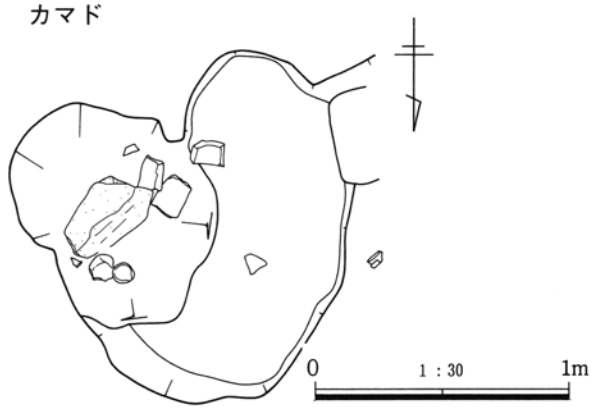
第37図　1区8号住居跡出土遺物（1）

われていたものと想定される。

時期　出土遺物から９世紀中葉に比定される。

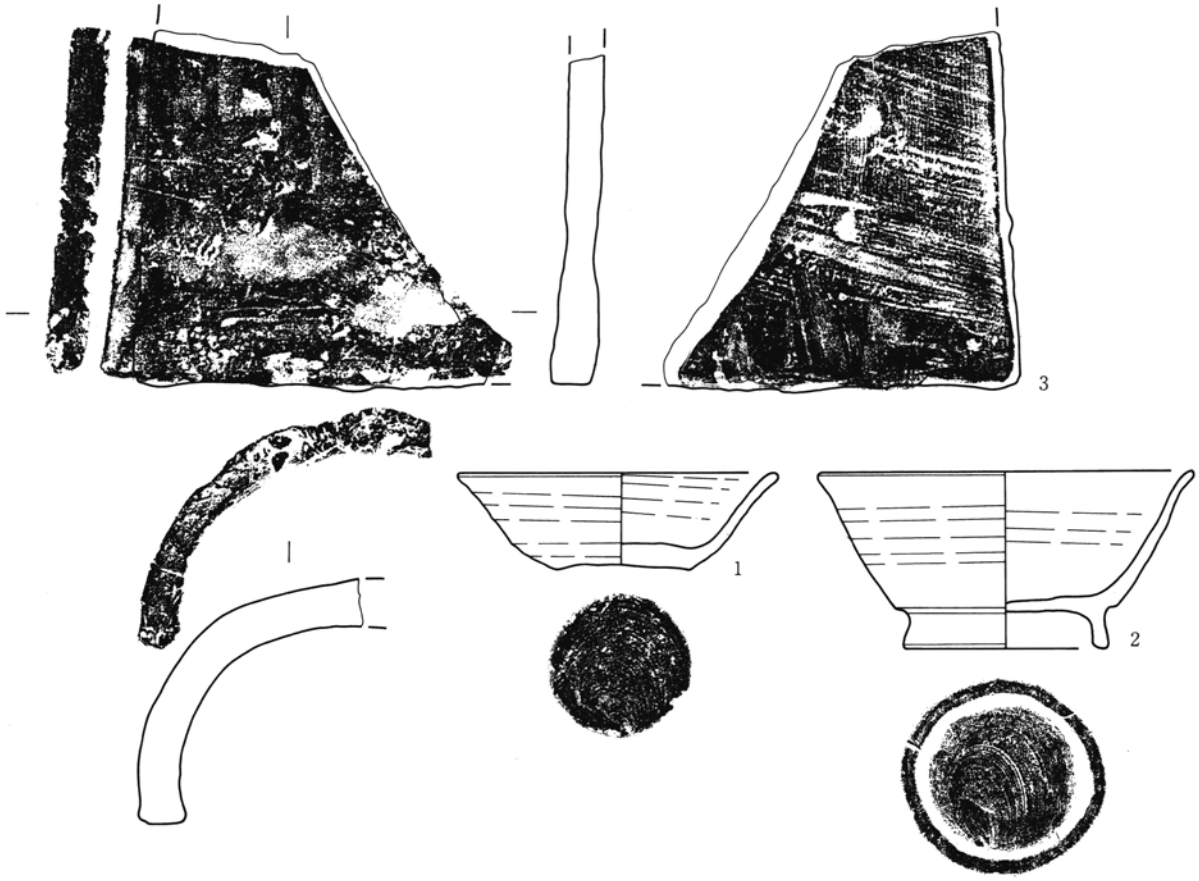


カマド



1　暗褐色粘質土　黄褐灰色粘質土小ブロック20％、炭粒、白色軽石粒を１％含む。
2　暗褐色粘質土　黄褐灰色粘質土小ブロック20％、焼土小ブロック10％含む。
3　暗褐色粘質土　焼土小ブロック、黄褐灰色粘質土小ブロックを20％含む。

住居内土坑
1　オリーブ褐色粘質土　炭粒40％含み、ややしまる。
2　黄褐色粘質土

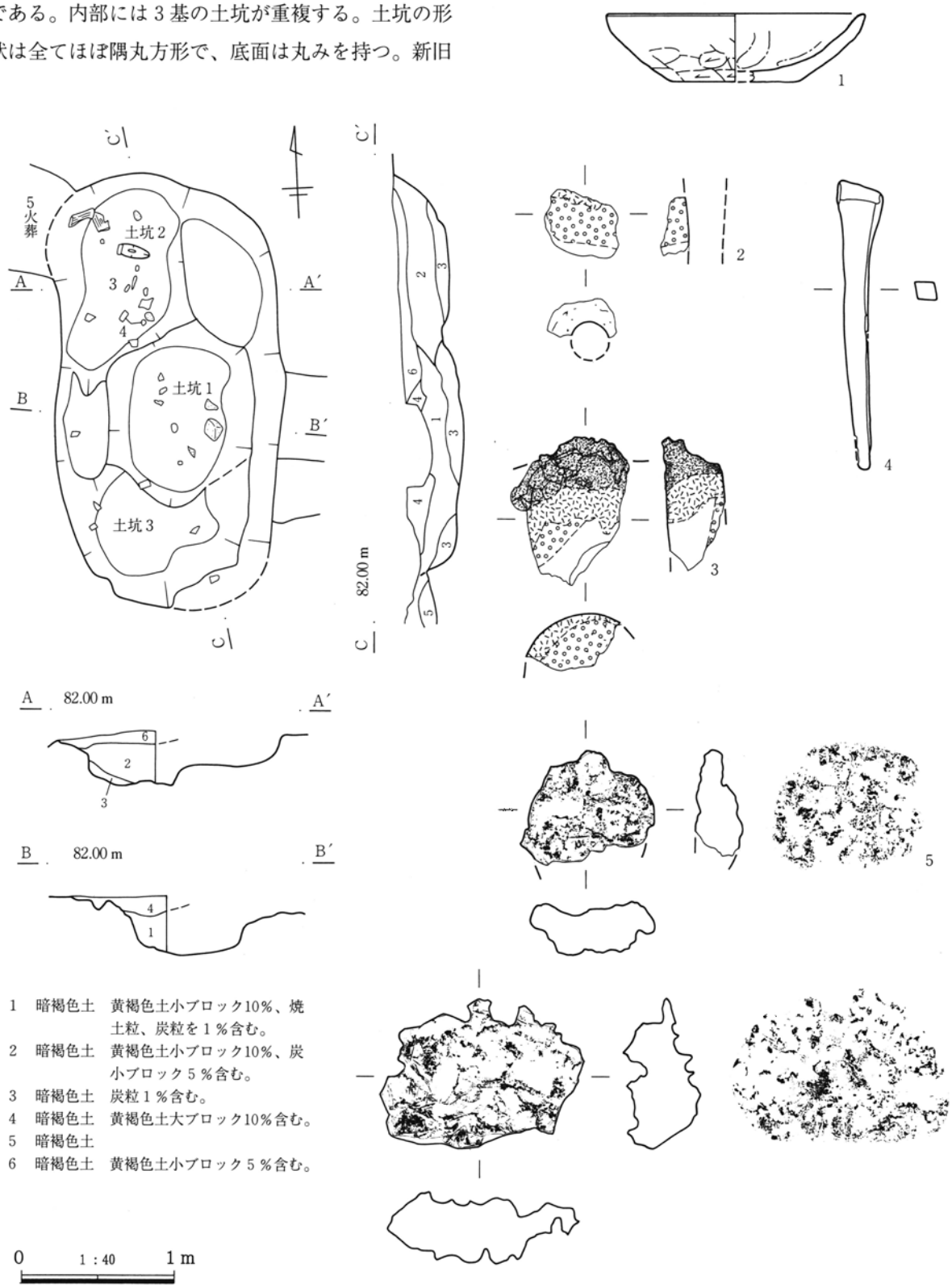


第38図　１区８号住居跡・カマド・出土遺物（２）

第２項　鍛冶遺構

１区１号鍛冶遺構（PL 12-1・2、43）

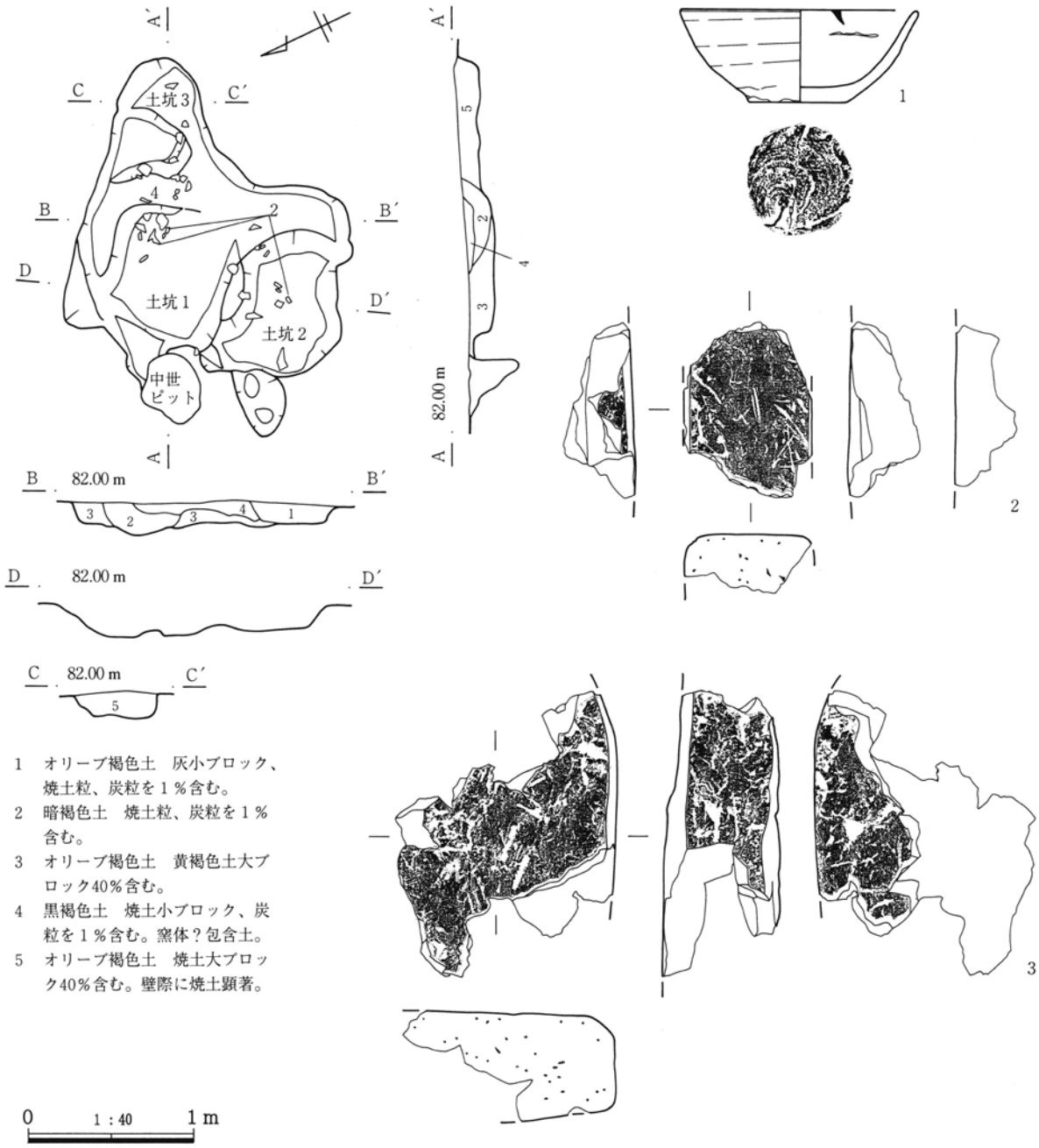
全体の形状は長楕円形で、東西1.48ｍ、南北2.84ｍである。内部には３基の土坑が重複する。土坑の形状は全てほぼ隅丸方形で、底面は丸みを持つ。新旧



第39図　１区１号鍛冶遺構・出土遺物

関係では中央部の土坑１が新しく、両端の土坑２・土坑３がそれより古い。規模は土坑１が長辺122㎝、短辺95㎝、深さ41㎝、土坑２が長辺140㎝、短辺110㎝、深さ36㎝、土坑３が長辺119㎝、短辺(97)㎝、深さ48㎝である。遺物は埋土中から土師器杯（１）、鉄釘（４）及び土師器・須恵器片がやや多く出土している。また鍛冶関連遺物としては掲載した羽口片（２・３）、鉄滓（５・６）のほか、椀形鉄滓80ｇ、重い鉄滓230ｇ、やや重い鉄滓105ｇ、軽い鉄滓92ｇ合計507ｇが出土し、埋土中にも焼土が少量混入することから、鋼精錬に関連する遺構である可能性が高く、鉄滓の分析結果とも符合している。本遺構は調査時に半裁した結果、鍛冶関連であることが判明したため、埋土の精査は半分しか行っておらず、鍛冶関連遺物の検出量が少ないのはそれに因るところも大きい。時期は出土遺物から10世紀前半に比定される。

１区２号鍛冶遺構（PL 12-3・4、44）



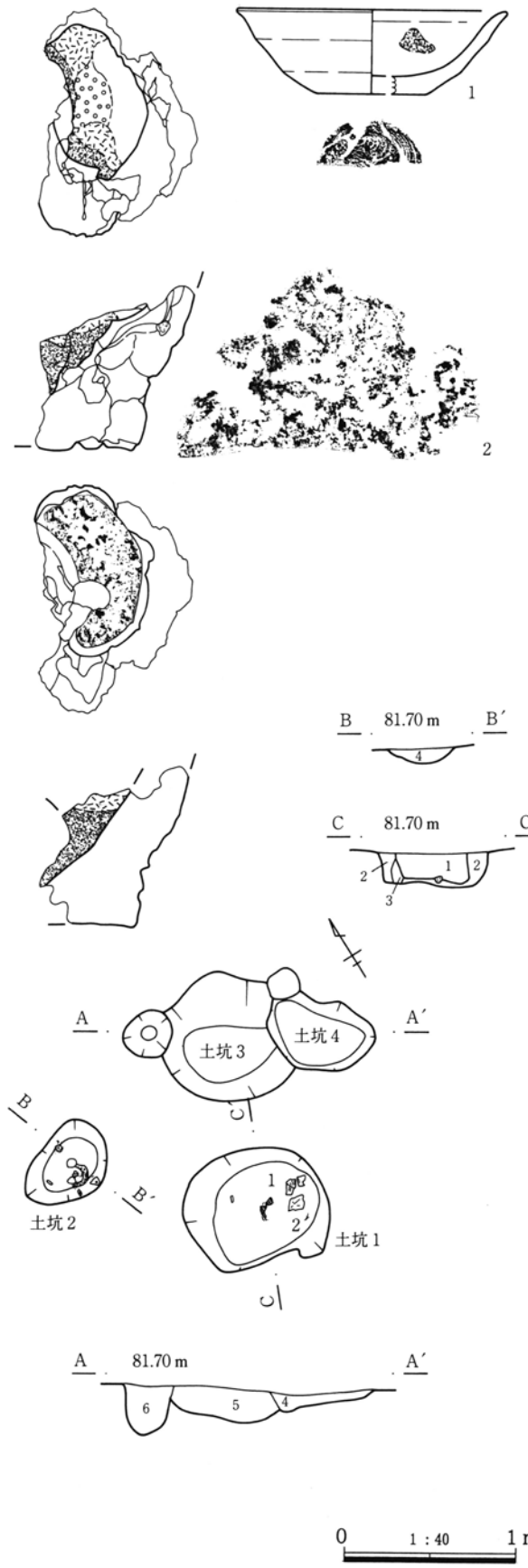
第40図　１区２号鍛冶遺構・出土遺物

全体としてＬ字状を呈し、規模は東西1.69ｍ、南北2.00ｍである。構造は３基の土坑よりなる。土坑１は隅丸方形で、規模は長辺106㎝、短辺75㎝、深さ20㎝である。底面は平坦だが、硬化面は見られない。土坑２は不整楕円形。規模は径88×73㎝、深さ16㎝である。土層観察断面に垂直の立ち上がりが見られることから、木枠等を伴う水槽であったと考える。土坑３は不整円形。規模は径71×65㎝、深さ16㎝である。平面確認段階では埋土中に多く焼土を含み、特に壁際に焼土が顕著に分布したことから、炉跡を想定して調査を行った。しかし掘り下げの結果、外形の輪郭は不鮮明となり、壁や底面の焼土化もないことから遺構の性格は特定できなかった。遺物は内側の口縁から底部にかけてケイ化物が付着する須恵器杯（１）、スサを多く混入するレンガに似た粘土塊（２・３）のほか土師器片がやや多く出土している。鍛冶関連遺物は掲載した椀形鉄滓（４）以外、埋土中を精査しても検出できず、鍛冶行程の性格は不明である。時期は出土遺物から10世紀前半に比定される。

１区３号鍛冶遺構（PL 12-5・6、44）

４基の土坑で構成され、東西2.24ｍ、南北1.73ｍの範囲に散在する。中心となる土坑１は隅丸方形で、規模は長辺83㎝、短辺68㎝、深さ21㎝である。土層観察断面に垂直の立ち上がりが見られることから、木枠等を伴う水槽であったと考える。土坑２・４ともに埋土に焼土を含むため、土坑３も含めて一連の遺構と考える。規模は土坑２が径56×39㎝、深さ９㎝、土坑３が径28×26㎝、深さ29㎝、土坑４が径64×41㎝、深さ12㎝である。遺物は土坑１から内側にケイ化物が付着した須恵器椀片（１）、羽口が入ったままで精錬した容器の底部の形態をそのまま留め

1　黒色砂質土　黄褐色土大ブロック５％、焼土粒、炭粒を１％含む。
2　オリーブ黒色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
3　黒色土　黄褐色土小ブロック10％含む。
4　暗褐色土　焼土大ブロック、黄色土大ブロック、炭粒を10％含む。
5　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
6　黒色土　黄褐色土大ブロック20％含む。

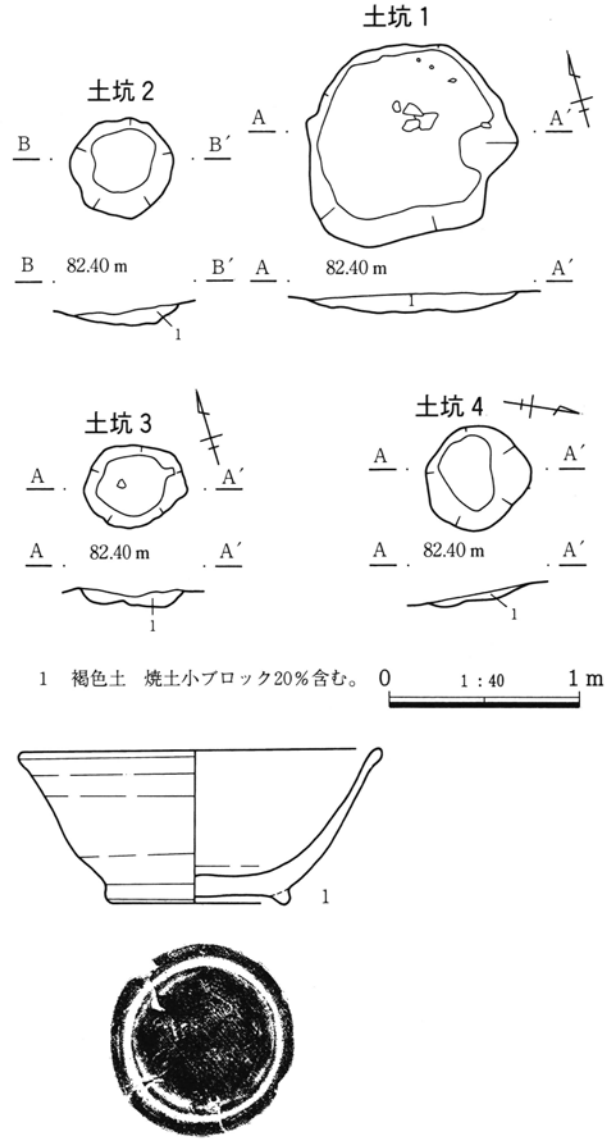


第41図　１区３号鍛冶遺構・出土遺物

る鉄滓(２)が出土したが、遺物出土量は土坑２も含めて極めて少ない。土坑１ではその他チップ等がわずか0.11ｇ検出できた。土坑２・４に焼土が混入する状況を考慮すれば、鋼精錬に関連する遺構である可能性が高い。時期は出土遺物から10世紀前半に比定される。

３区１号鍛冶遺構（PL 12-7・8、13-1・2、44）

４基の土坑で構成され、東西4.10ｍ、南北6.20ｍの範囲に散在する。中心となる土坑１は不整円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦。規模は径110×100㎝、深さ12㎝である。この土坑から西へ1.60ｍの間隔をとって土坑２があり、そこから北へ5.21ｍで土坑３、更にそこから東へ3.05ｍで土坑４が存する。これらの土坑は全て埋土中に多量の焼土大ブロックを含んでいた。規模は土坑２が径54×52㎝、深さ11㎝、土坑３が径55×44㎝、深さ10㎝、土坑４が径55×49㎝、深さ10㎝である。遺物は土坑１から須恵器椀(１)が出土したほか、土坑２・３から須恵器片がわずか出土している。鍛冶関連遺物としては、土坑１から重い鉄滓100ｇ、やや重い鉄滓340ｇ、軽い鉄滓35ｇ、羽口片60ｇ、チップ(微細な鉄滓を含む)が64ｇ、最大径3.8㎜の円球状の湯玉１ｇが検出されており、土坑２～４も含めて鋼精錬及び鍛造両方の行程に関連する遺構である可能性が高い。時期は出土遺物から９世紀後半に比定される。



第42図　３区１号鍛冶遺構・出土遺物

第３項　溝

４区４号溝（PL 13-3・4）

位置　調査区中央部から南壁に向かって走向する。

重複　なし

形態　ほぼ直線状で、南側がやや湾曲する。規模は長さ12.32ｍ、最大幅1.06ｍ、深さは断面観察部で15㎝である。走向方位はＮ－60°－Ｅである。断面は皿状で浅い。Ａｓ－Ｂの純堆積によって埋没するが用途は不明。

出土遺物　なし

第４項　Ａｓ－Ｂ下水田跡

３区Ａｓ－Ｂ下水田跡（付図４　PL 13-5～8）

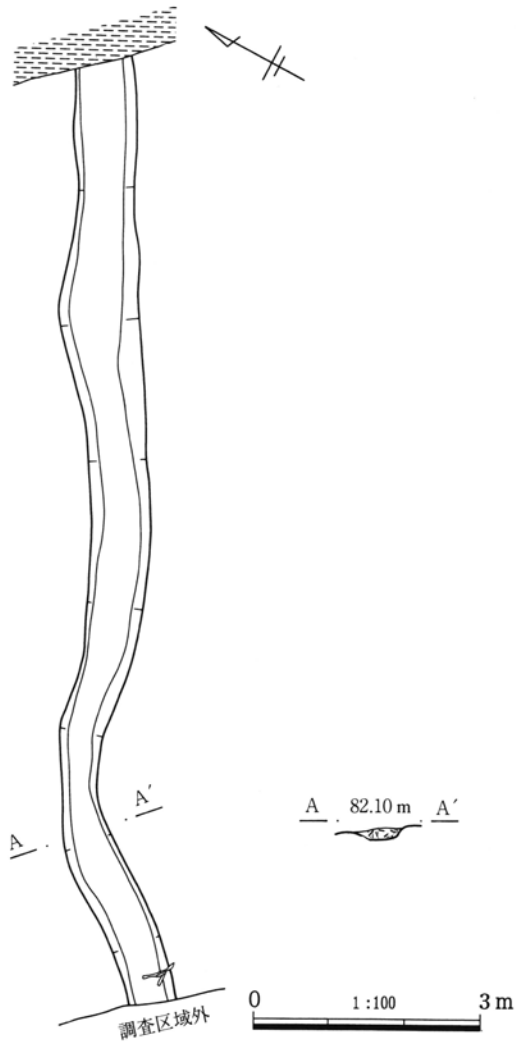
位置　62Ｊ・72Ｊグリッドライン以南、２グリッドライン以東の約南北120ｍ、東西30ｍの範囲に位置する。

地形　湧水点「大井戸」流域低地へ向かって緩やかに東南傾斜しており、その低地に向かってＡｓ－Ｂが厚く堆積する傾向にある。

形態　明確なアゼは未検出であり区画も不明。73Ｃ－１グリッドにはアゼの一部が残る。また、73Ｇ・Ｈ－０・１グリッドではコンタの状況から区画境が想定される。取配水の方法も全く不明であるが、用

水としては北東500ｍに位置する湧水点「大井戸」または北西400ｍの湧水点「角弥清水」水系からの導水が想定できる。

耕作土　黒色粘質土　　**出土遺物**　なし



第43図　４区４号溝

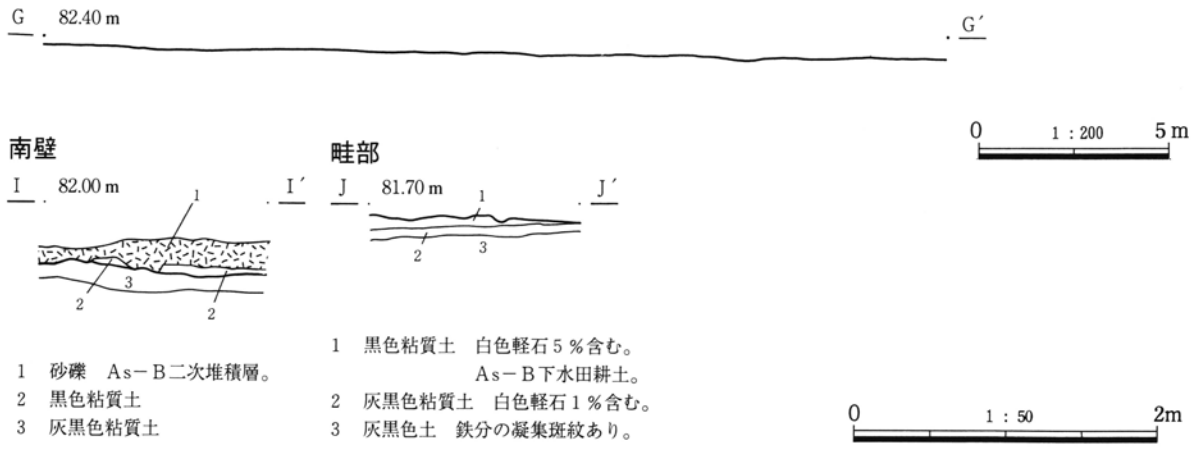
第５項　まとめ

(1) 竪穴住居跡の変遷

本遺跡検出の竪穴住居跡の年代は、９世紀中葉が８号住居跡、９世紀後半が５Ｂ号住居跡、10世紀前半が５Ａ号住居跡である。また「上植木調査区」でも、９世紀後半が２・４・５・６号住居跡、10世紀前半が８・11号住居跡と同様な状況を示しており、９世紀中葉に出現した竪穴住居跡は10世紀前半まで数件程度の集落を構成するが、10世紀後半には消滅したものと整理される。なお、３区東半分でＡｓ－Ｂ下水田（12世紀初頭）が検出されたことから、９・10世紀においても生産域と位置付けることが可能と考える。

(2) 鍛冶関連遺構

本遺跡検出の９世紀後半の５Ｂ号住居跡は鍛造跡を残す小鍛冶の住居跡であり、一部に鋼精錬用と見られる鉄滓を備蓄していたものと考える。また、５Ａ号住居跡は５Ｂ号住居跡埋没後の窪地を利用し10世紀前半に比定されるが、同時期の鋼精錬跡と見られる３号鍛冶遺構が近接しており関連性が高く、同様に鍛冶に関連する住居跡と位置付けられる。したがって、南北50ｍ内に分布する同時期の１・２号鍛冶遺構を含めた領域を設定することができる。なお、５Ｂ号住居跡と同時期の９世紀後半の屋外鍛冶遺構としては、やや離れるが３区１号鍛冶遺構がある。



第44図　３区Ａｓ－Ｂ下水田跡エレベーション・南壁・畦部土層断面

第4節　中世

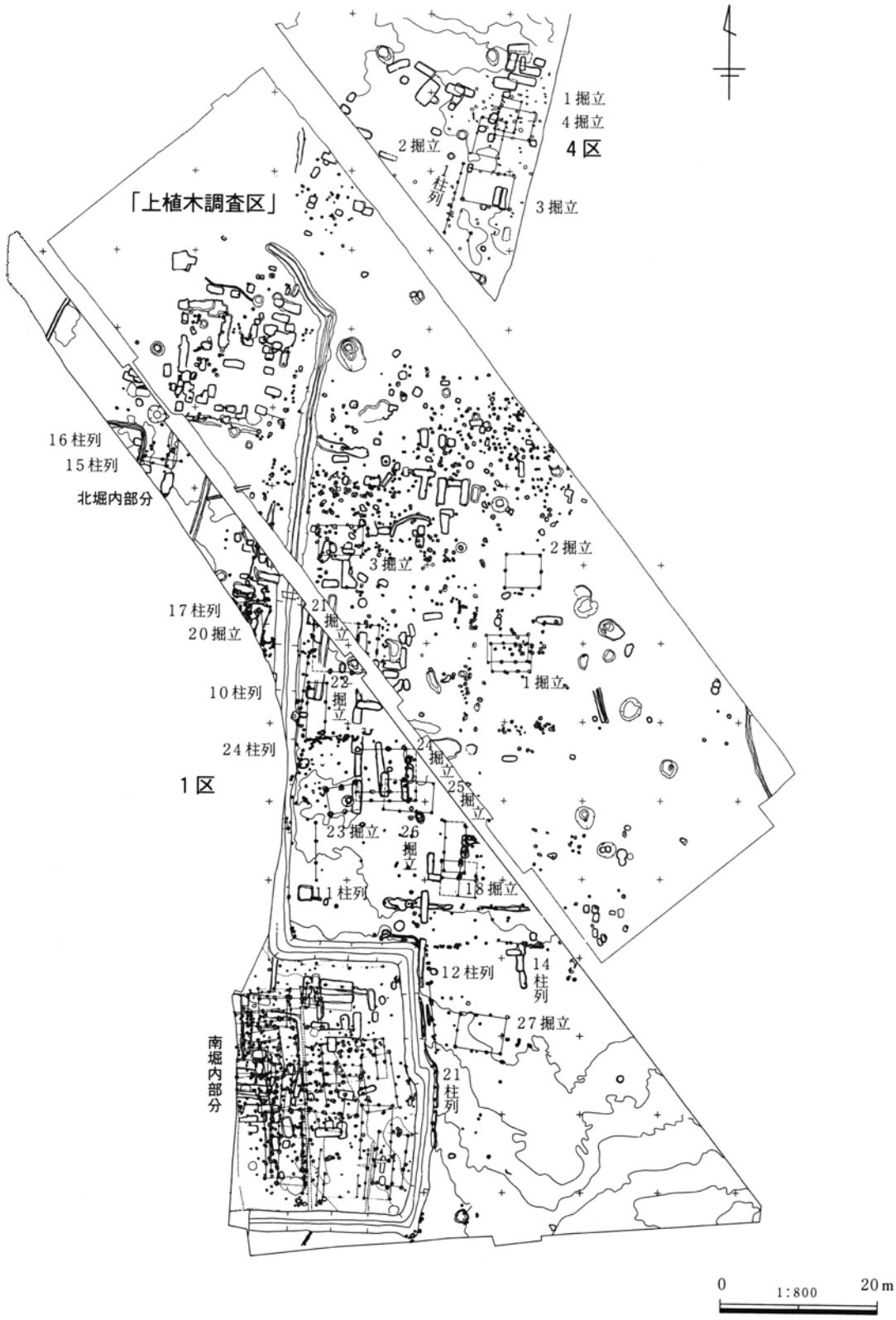
概要　中世遺構は、1区と4区で多数検出されたが、特に1区では1号堀に区画された館跡が発見され、3・4区や「上植木調査区」もその影響下にあることがわかった。1区では区画堀である1号堀が南北に走向しており、調査区をほぼ東西に分割している。中世遺構は特に西南部の方形の張り出し部分で顕著に分布していたため、1号堀より西側を館内部と結論づけ、西側を堀内部分、東側を堀外部分と称することとした。ただし、調査範囲の関係で堀内部分が南北に分断されるため、北側を北堀内部分、南側を南堀内部分と細分した。中でも数量が多い遺構として、掘立柱建物跡・柱穴列・土坑があり、掲載に当たっては遺構番号によらず堀内・外部分の順に行なった。また、南堀内部分ではそれらが顕著に重複しており、幾つかに時期区分されることが想定された。そこで主軸方位に着目したところ、第2表のとおり、その他を含めて5分類されることが判明したため、この分類を時期区分の指標として採用し掲載順を確定した。なお、分類は第1～3類の順で年代が新しくなるよう配慮したが、第4類は年代順によらない。また、同じ分類内においても重複があり細分が可能であったが、総括的な検討を加える意図をもって本節末のまとめで細分を示した。

土坑は掘立柱建物跡と相関関係が強く、主軸方位によって同様な分類が可能であるが、数量が多く混乱を避けるため、巻末の計測表にその分類を示すこととした。本節で扱う遺構は、相互に共存し一括性が非常に高いものと見られ、館跡とその周辺という景観として捉えることも可能である。

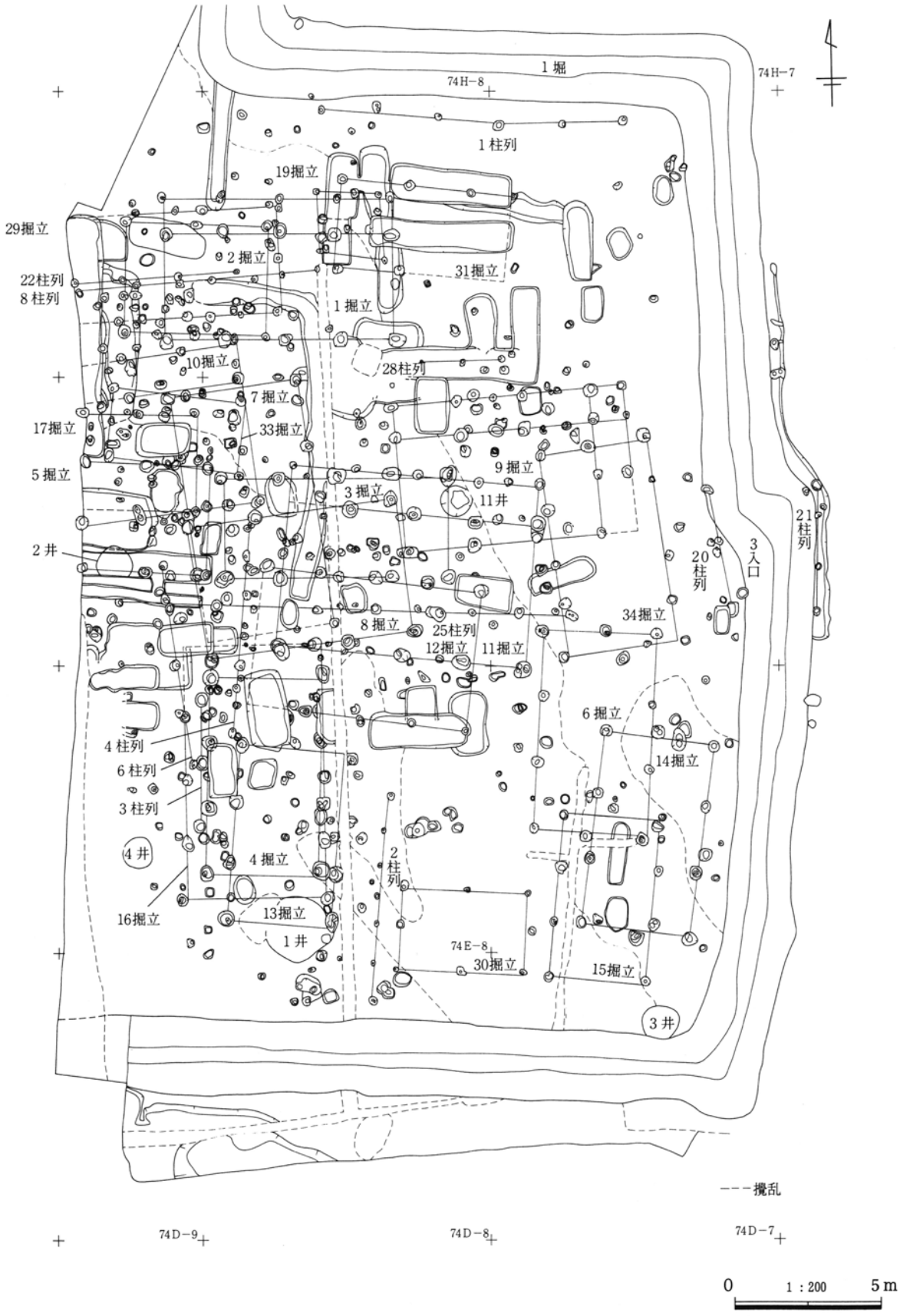
第2表　掘立柱建物跡・柱穴列主軸方位一覧表

	主軸方位	1区堀内部分	1区堀外部分	主軸方位	1区堀内部分	1区堀外部分
第1類	N－81°－W			N－9°－E		27掘立
	N－82°－W	33掘立	14柱列	N－8°－E		10柱列
	N－83°－W	12掘立・16柱列		N－7°－E	14掘立	
	N－84°－W	31掘立・28柱列	18掘立	N－6°－E	15掘立	
	N－85°－W	11掘立・30掘立・1柱列		N－5°－E	13掘立・2柱列・4柱列	
	N－86°－W		25掘立	N－4°－E		
第2類	N－4°－W			N－86°－E	22柱列	
	N－5°－W	20掘立	12柱列	N－85°－E	8柱列	
	N－6°－W			N－84°－E	9掘立・17柱列	
	N－8°－W	34掘立		N－82°－E	8掘立・10掘立	
	N－9°－W	7掘立・6柱列		N－81°－E		
	N－10°－W			N－80°－E		23掘立・24柱列
第3類	N－87°－W	5掘立		N－3°－E	6掘立	22掘立
	N－88°－W	2掘立・25柱列		N－2°－E	4掘立	26掘立
	N－89°－W	17掘立	21掘立	N－1°－E	3柱列	
	N－90°	1掘立		N－0°		
	N－89°－E	3掘立・29掘立	24掘立	N－1°－W	16掘立	
	N－88°－E		21柱列	N－2°－W		11柱列

	主軸方位	1区堀内	1区堀外	3・4区	主軸方位	1区堀内	1区堀外	3・4区
第4類	N－74°－W				N－16°－E			4区1柱列
	N－75°－W	15柱列			N－15°－E			
	N－77°－W				N－13°－E			4区1掘立
	N－78°－W	20柱列			N－12°－E			4区2掘立
	N－79°－W			4区4掘立	N－11°－E			
	N－80°－W			3区1掘立・4区3掘立	N－10°－E			
その他	N－82°－W ～ N－88°－W	19掘立						



第45図　１区・４区・「上植木調査区」中世面全体図



第46図　１区南堀内部分全体図

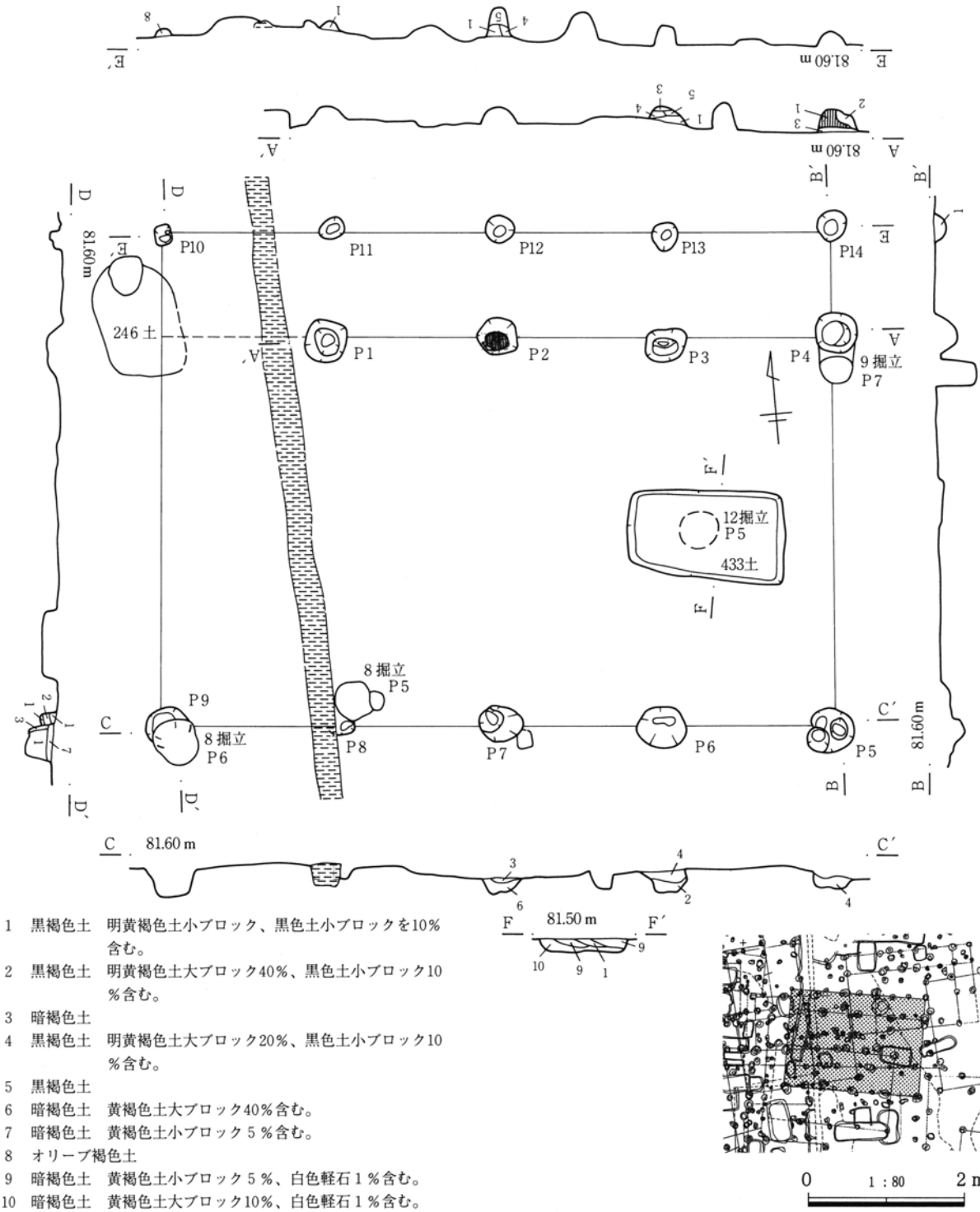
第１項　１区

１．掘立柱建物跡・柱穴列

(1) 堀内部分

ア．第１類

１区11号掘立柱建物跡（PL 16-1）



1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
3　暗褐色土
4　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
5　黒褐色土
6　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
7　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
8　オリーブ褐色土
9　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％、白色軽石１％含む。
10　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％、白色軽石１％含む。

0　1：80　2 m

第47図　１区11号掘立柱建物跡・433号土坑

位置　南堀内部分のほぼ中央部で、74E・F－7・8グリッドに位置する。

重複　P8・P9は各々8号掘立柱建物跡のP5・P6より古いため、建物跡としても同様に古い。また、内部施設433号土坑は12号掘立柱建物跡のP5より新しいため、同じく建物跡としても新しい。

主軸方位　N－85°－W

形態　身舎は1×4間（4.95×8.68m）の東西棟で、北側に幅1.40～1.45mの間隔を取って庇が付き、全体として6.30～6.40×8.68m、（16.5＋4.5）尺×29尺の規模である。桁行の柱間は7尺と7.5尺が多い。北辺の西角柱穴は246号土坑により欠損するが、他はほぼ等間隔である。南辺ではP8が攪乱により残存状態が悪いが、P6とP7、P8とP9の間隔をほぼ20cm広く取っており、その分P7とP8の間隔を狭くする。北庇はP10とP11の間隔がほぼ10cm程狭い以外はほぼ等間隔である。柱穴は柱軸に非常に良く載っている。柱痕跡はP1・P2・P4で見られ10～14cmを測る。身舎部分の柱穴は隅丸方形で、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。規模は長径52～64cm、短径43～56cm、深さ22～31cmでほぼ均整がとれている。庇部分の柱穴はP14を除き円形で、長径27～39cm、短径22～36cm、深さ13～38cmとやや数値にばらつきがあるが、総じて身舎部分よりも小さいことが分かる。

内部施設　身舎梁行中央部のP3とP6を結んだ線よりやや西寄りから東辺にかけて、主軸方位にほぼ平行な433号土坑があり、規模は長辺220cm、短辺117cm、深さ17cmで、主軸方位N－82°－Wである。形状は長方形で浅く、底面は平坦。本土坑は12号掘立柱建物跡のP5の埋土上面をよく締めて構築するが、底面全体として特に硬化面はない。また、埋土には焼土や灰・炭等は全く見られない。遺物は出土しなかった。

出土遺物　平安時代以前の遺物がP1・P4・P5・P10に混入するのみであった。

1区12号掘立柱建物跡（PL 16-1・2）

位置　南堀内部分の中央部やや南寄りで、74E・F－8グリッドに位置する。

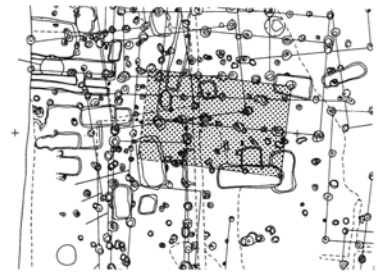
重複　P5は11号掘立柱建物跡の内部施設433号土坑構築時に明黄褐色土によって人為埋填されるため、建物跡としても同様に古い。P6は514号土坑より古く、P7は515号土坑と新旧関係不明。これらの土坑の主軸方位は第3類に属すことからP5とは状況が異なる。

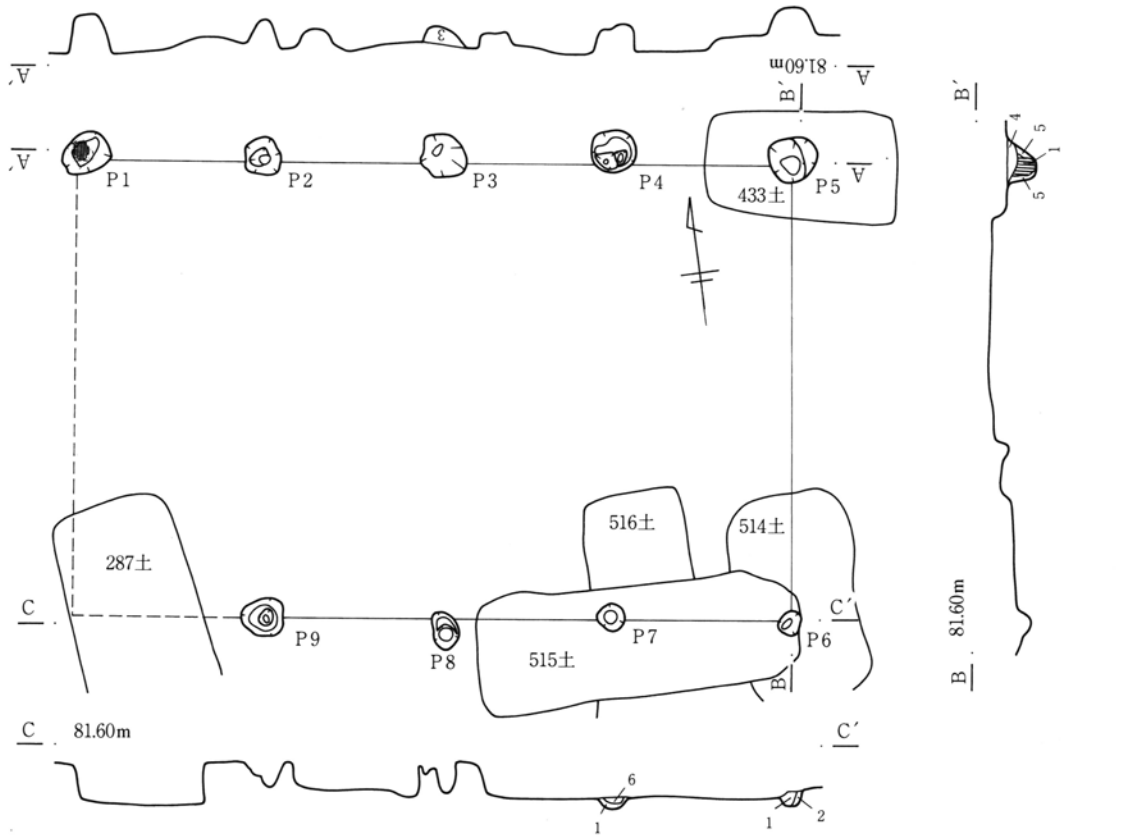
主軸方位　N－83°－W

形態　1×4間（4.80×7.50m・16尺×25.5尺）の東西棟。桁行の柱間は6尺または6.5尺。北辺のP2とP3の間隔は10cm程狭い。南辺の南西柱穴は287号土坑により欠損するが、その他はほぼ等間隔。柱穴はP8が柱軸からやや南側に外れる以外は非常に良く載っている。柱痕跡はP1・P5で見られ、17・13cmを測る。柱穴は円形のP2・P8を除き隅丸方形で、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。したがって、P6・P7は重複による欠損によって、下部の小穴のみが残存した可能性が高い。規模はやや小さなP2・P8を除いて長径44～51cm、短径40～44cmで、深さは18～39cmと数値にばらつきがある。

内部施設　なし

出土遺物　平安時代以前の遺物がP4・P6・P8に混入するのみであった。





1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
4　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含み、上面しまる。
5　灰白色粘土　黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを５％含み、しまらない。
6　黒褐色土

0　1：80　2m

第48図　１区12号掘立柱建物跡

１区13号掘立柱建物跡（PL 16-3・4、17-1）

位置　南堀内部分の南西部で、74Ｅ－８グリッドに位置する。１号堀南辺から北へ3.5ｍ程をとる。

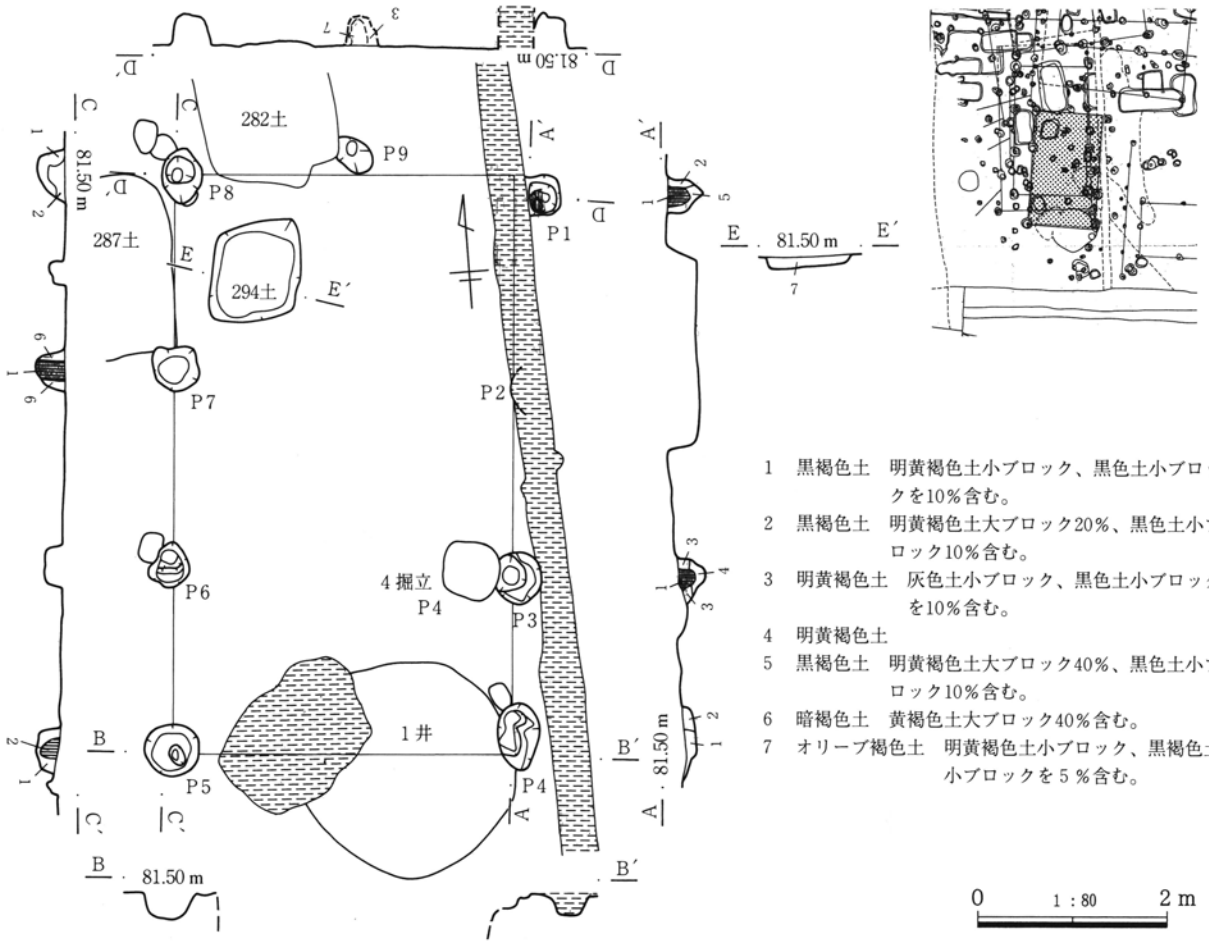
重複　Ｐ３は４号掘立柱建物跡のＰ４よりも古いため、建物跡としても同様に古い。また、１号井戸跡との新旧関係は平面観察上は不明だが、位置及び埋土から本遺構が古いと考える。

主軸方位　Ｎ－５°－Ｅ

形態　２×３間（3.60～3.85×5.70～6.10ｍ・12尺×20.5尺）の南北棟。桁行・梁間の柱間は6.5尺と７尺が多い。東辺のＰ２は大部分攪乱に壊され詳細は不明だが、Ｐ１・Ｐ２とも柱軸から20㎝程東へ外れる。南辺も北辺のＰ９と同様、中間に柱穴が存在したと思われるが、１号井戸跡と重複のため検出できなかった。西辺のＰ５・Ｐ６の間隔は20㎝程狭い。柱痕跡はＰ１・Ｐ３・Ｐ５～Ｐ７で見られ、12～17㎝を測る。柱穴は不整形なＰ２・Ｐ４を除きほぼ隅丸方形で、内部に更に小穴を有する２段構造のものも見られる。規模は長径42～57㎝、短径30～53㎝、深さ20～36㎝でほぼ均整がとれている。

内部施設　北西隅の柱間１間分のほぼ中央部に294号土坑があり、規模は長辺102㎝、短辺93㎝、深さ11㎝で、主軸方位Ｎ－55°－Ｅである。形状は正方形に近い方形で浅く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。遺物は出土しなかった。

出土遺物　なし



第49図　1区13号掘立柱建物跡・294号土坑

1区14号掘立柱建物跡（PL 17-2）

位置　南堀内部分の南東部で、74E－7グリッドに位置する。1号堀の東辺から西へ1m程、同南辺から北へ3.5m程をとる。

重複　なし　**主軸方位**　N－7°－E

形態　2×3間（3.80×6.75～6.80m・12.5尺×22.5尺）の南北棟。柱間は桁行7.5尺、梁間6尺か6.5尺。東辺・西辺ともに柱穴は等間隔で柱軸に良く載る。南辺のP5は20cm程東寄りで、北辺のP10は逆に20cm程西寄りで符合しないが、両者とも共通して柱軸より外側へ外れている。柱痕跡はP2・P3・P6～P9で見られ、10～19cmを測る。柱穴は隅丸方形で、規模は大小2つに分かれ、P3～P5・P10は長径46～56cm、短径43～51cm、深さ26～35cmで、残りは長径37～45cm、短径32～39cm、深さ23～35cmである。

内部施設　なし

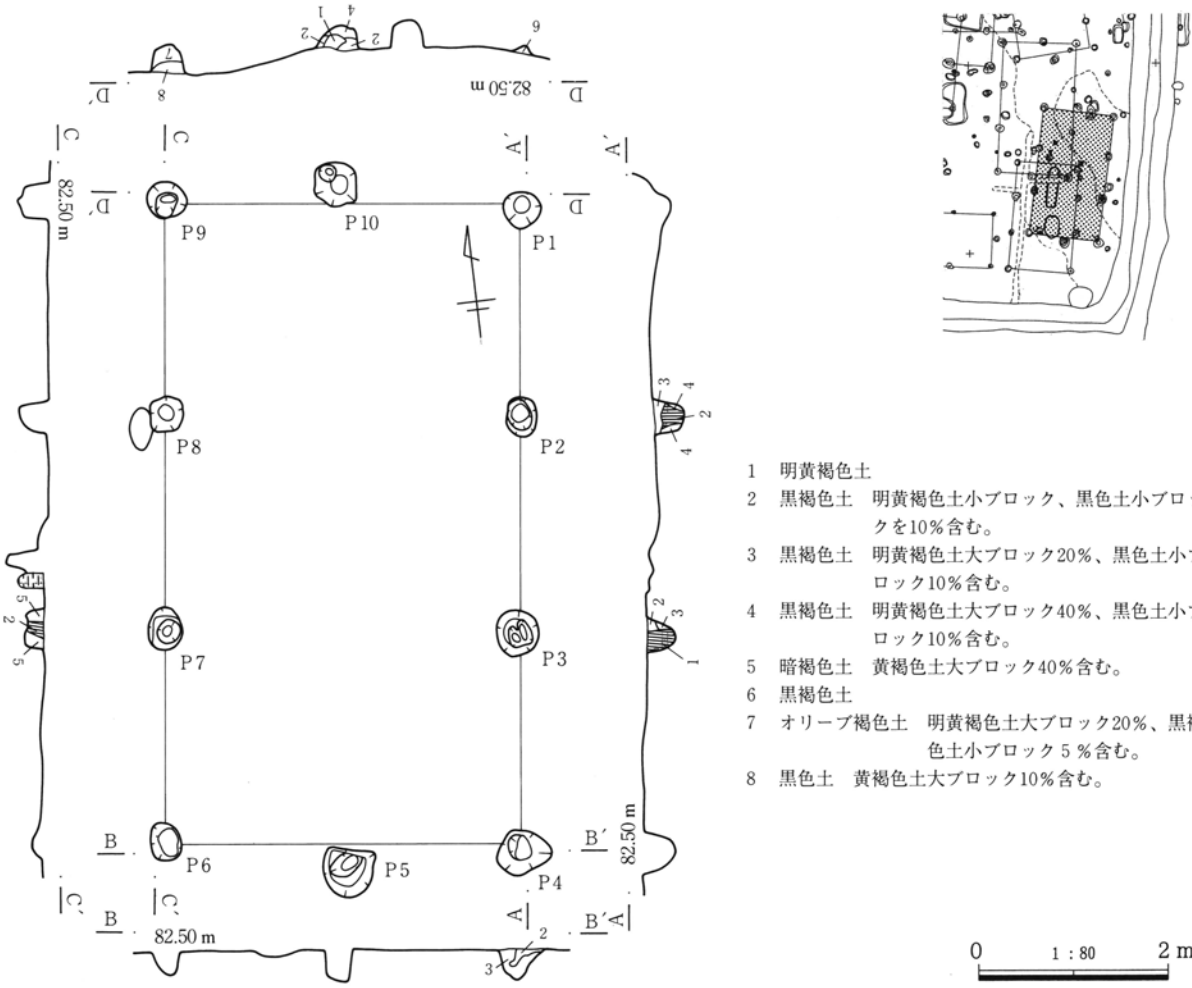
出土遺物　平安時代以前の遺物がP9に混入するのみであった。

1区15号掘立柱建物跡（PL 17-2）

位置　南堀内部分の南東部で、74D・E－7グリッドに位置する。1号堀の東辺から西へ2.5m程、同南辺から2m弱をとる。

重複　なし　**主軸方位**　N－6°－E

形態　2×3間（3.40×5.70～5.75m・11尺×19尺）の南北棟。柱間は桁行6尺か6.5尺で、梁間5.5尺。東辺の柱穴はほぼ等間隔に設けるが、P2・P3が柱軸よりやや東に外れる。南辺も北辺のP9と同様、中間に柱穴が存在したと思われるが、やや攪乱を受けていたため検出できなかったものと考える。北辺のP9はその中央部にあるが、柱軸から30cm程北へ外れる。柱痕跡はP2・P4で見られ、13・10cmを測る。柱穴は隅丸方形のP7・P9を除きほぼ円形



第50図　１区14号掘立柱建物跡

で、規模は大小２つに分かれ、Ｐ３・Ｐ７は長径43・45㎝、短径37・42㎝、深さ35・48㎝、残りは長径26～37㎝、短径24～32㎝で、深さは15～45㎝で数値にばらつきがある。

内部施設　Ｐ２とＰ７を結んだ線よりやや南寄りから北辺にかけて、主軸に西辺を接して主軸方位にほぼ平行な363号土坑があり、規模は長辺218㎝、短辺62㎝、深さ13㎝で、主軸方位Ｎ－７°－Ｅである。形状は隅丸細長方形で浅く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

出土遺物　なし

１区30号掘立柱建物跡（PL 18-1）

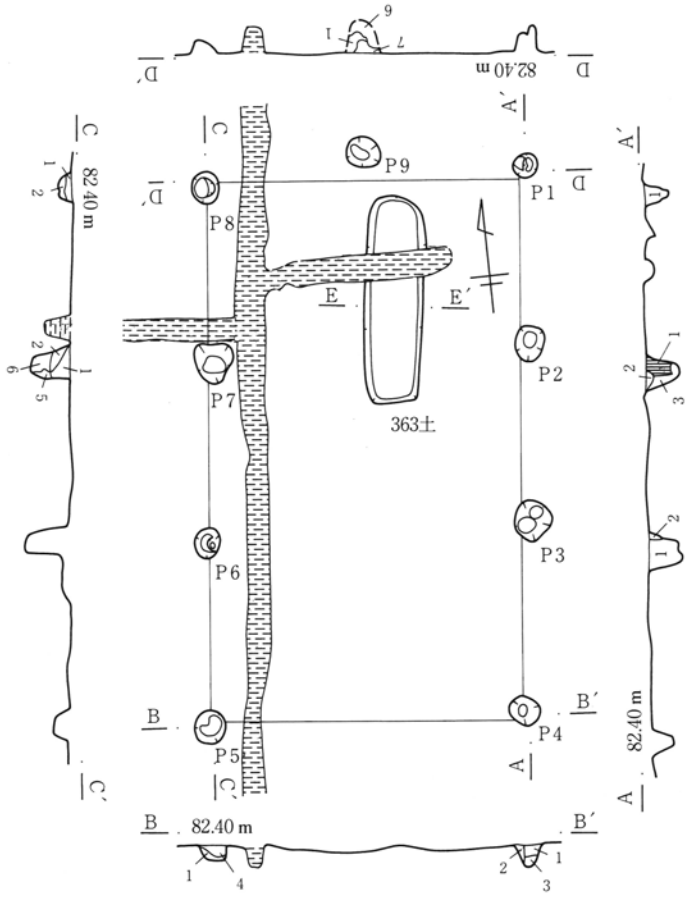
位置　南堀内部分の南端部中央で、74Ｄ・Ｅ－７・８グリッドに位置する。１号堀の南辺から北へ２ｍ弱をとる。

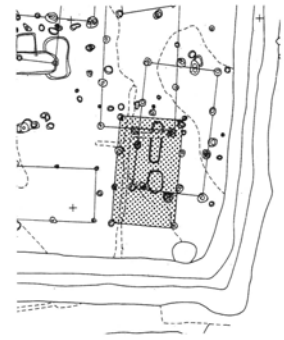
重複　なし　**主軸方位**　Ｎ－85°－Ｗ

形態　２×２間（2.75～2.90×4.28～4.42ｍ・9.5尺×14.5尺）の東西棟。柱間は桁行で７尺か7.5尺、梁間で4.5尺～5.5尺。東辺のＰ４は柱軸から20㎝程東へ外れる。南辺は柱軸から北東－南西方向に振れる。柱痕跡なし。柱穴は隅丸方形のＰ４・Ｐ８を除きほぼ円形で、規模は大小２つに分かれ、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８は長径27～35㎝、短径27～30㎝、深さ15～35㎝で、残りは長径18～27㎝、短径15～18㎝、深さ７～15㎝である。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし

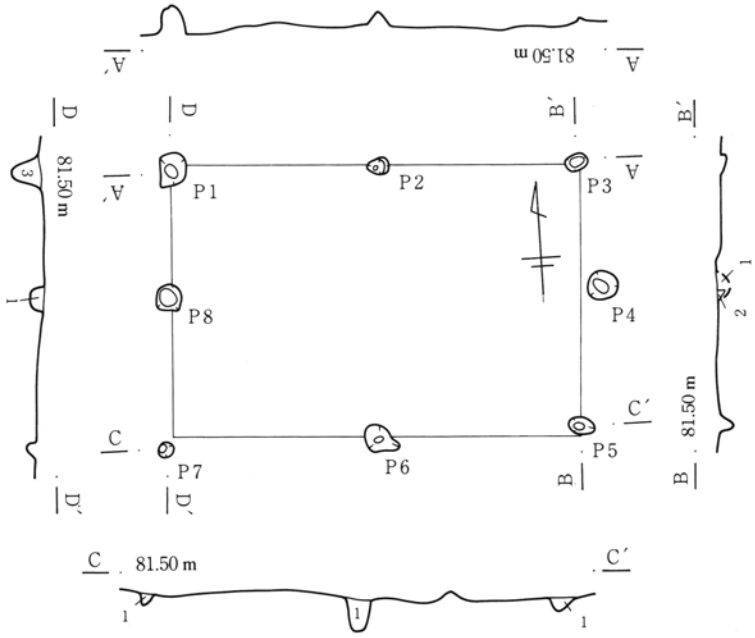
15号掘立柱建物跡・363号土坑

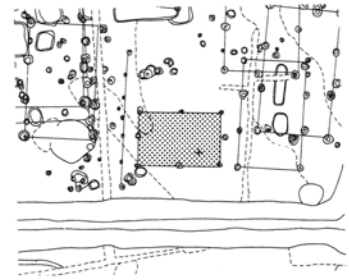




1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
3　明黄褐色土
4　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
5　黒褐色土
6　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
7　オリーブ褐色土

30号掘立柱建物跡





1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
3　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。

0　1：80　2 m

第51図　1区15号掘立柱建物跡・363号土坑・30号掘立柱建物跡

１区31号掘立柱建物跡

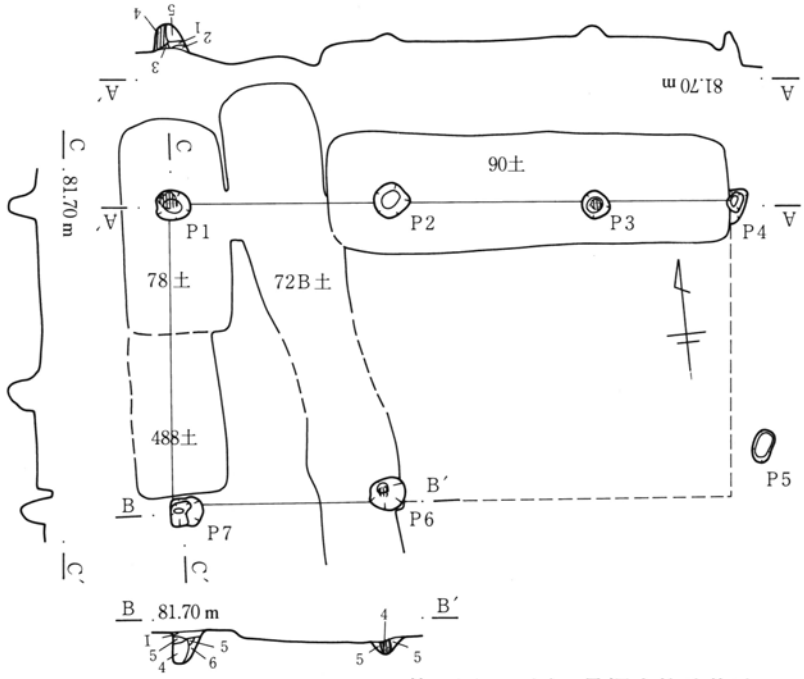
位置　南堀内部分の北端部中央で、74Ｇ－７・８グリッドに位置する。１号堀の北辺から南へ３ｍ程をとる。

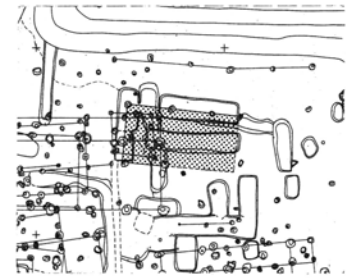
重複　Ｐ１は78号土坑構築時に人為埋填後明黄褐色土で被覆されるが、78号土坑の主軸方位は第３類に属しており、Ｐ１廃棄との時期差を想定する。Ｐ２・Ｐ３は90号土坑と重複し、90号土坑底面で初めて確認できたため、不確実ながらこの土坑より古く、建物跡としても同様に古い。なお、90号土坑の主軸方位も第１類に属しており、新旧関係は重要。Ｐ６は72Ｂ号土坑と新旧関係不明である。

主軸方位　Ｎ－84°－Ｗ

形態　１×２間（3.25×4.48ｍ・10.5尺×15尺）の東西棟で、東側に幅1.55ｍの間隔を取って庇が付き、全体として3.25×5.96ｍ（10.5尺×17＋５尺）の規模である。ただし、Ｐ３と対面する南辺の柱穴は検出できず、Ｐ５も柱軸から大きく外れるなど、東側半分は検討の余地を残す。桁行の柱間は７尺～８尺と数値にばらつきがある。北辺のＰ１～Ｐ３は等間隔に並ぶが、Ｐ２の残存状態は悪い。Ｐ５は東庇の南東柱と考えるが、60㎝程北東に外れる。柱痕跡はＰ１・Ｐ３で見られるが計測値なし。柱穴はＰ１・Ｐ６・Ｐ７がほぼ隅丸方形で、他は除外。規模は長径32～34㎝、短径29～31㎝、深さ11～32㎝でほぼ均整がとれている。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし





1　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　明黄褐色土　黒色土大ブロック20％含む。
3　明黄褐色土　黒色土大ブロック40％含む。
4　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
6　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。

0　1：80　2ｍ

第52図　１区31号掘立柱建物跡

１区33号掘立柱建物跡

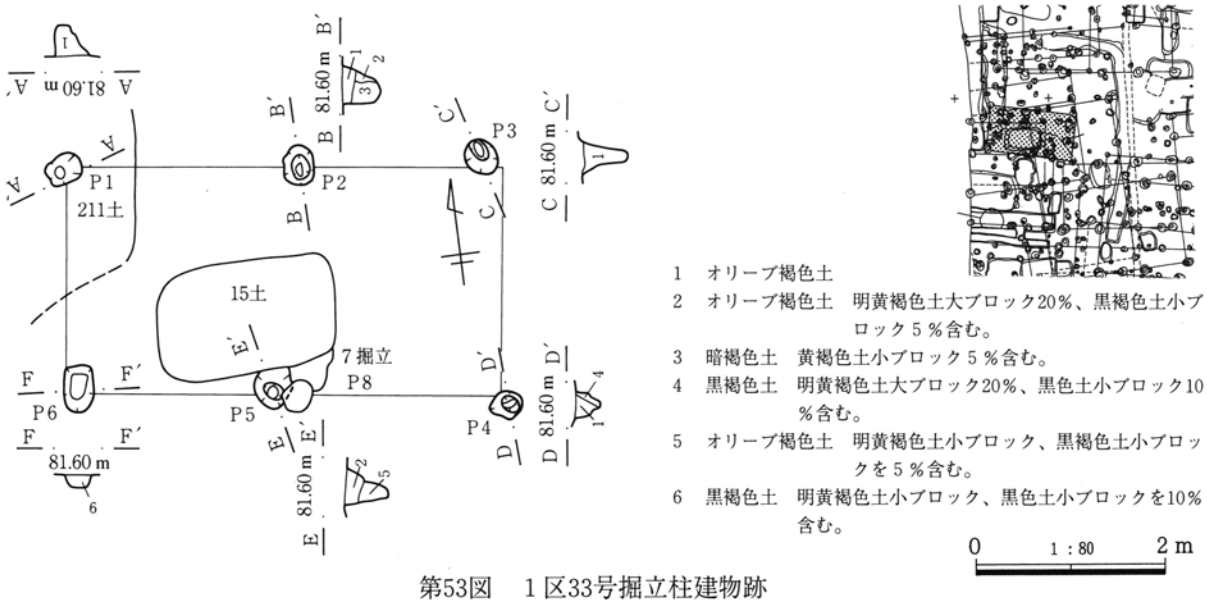
位置　南堀内部分の西端部中央で、74Ｆ－８・９グリッドに位置する。

重複　Ｐ１は211号土坑と新旧関係不明。Ｐ５は７号掘立柱建物跡のＰ８よりも古く、建物跡としても同様に古い。

主軸方位　Ｎ－82°－Ｗ

形態　１×２間（2.69×4.46～4.58ｍ・8.5尺×15尺）の東西棟で、更に西へ延びる可能性がある。桁行の柱間は6.5尺～8.5尺と数値にばらつきがある。北辺のＰ３は30㎝程西寄りであるため、Ｐ２・Ｐ３の間隔は狭く、東辺は柱軸から北西－南東方向へ振れる。柱痕跡なし。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模は長径35～50㎝、短径29～35㎝で、深さはＰ６が13㎝と浅い以外13～53㎝で、総じて均整がとれる。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし



第53図　1区33号掘立柱建物跡

1区1号柱穴列

位置　南堀内部分の北辺縁辺部で、74G－7・8グリッドに位置する。1号堀北辺から20～70cmをとる。

重複　なし

主軸方位　N－85°－W、N－88°－E

形態　全長10.52mで東西方向に走向する。柱間は1.97～2.25mで均整がとれる。P2は北側に古い段階の柱穴があり、1度据え直しされたものと考えられる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は大中小3つに分かれ、P4が最大で、次いでP6、残りが長径22～28cm、短径22～26cm、深さ33cmである。

出土遺物　なし

1区2号柱穴列

位置　南堀内部分の南半部中央で、74D・E－8グリッドに位置する。13号掘立柱建物跡と30号掘立柱建物跡の中間に存する。P7は1号堀南辺から50cmをとる。

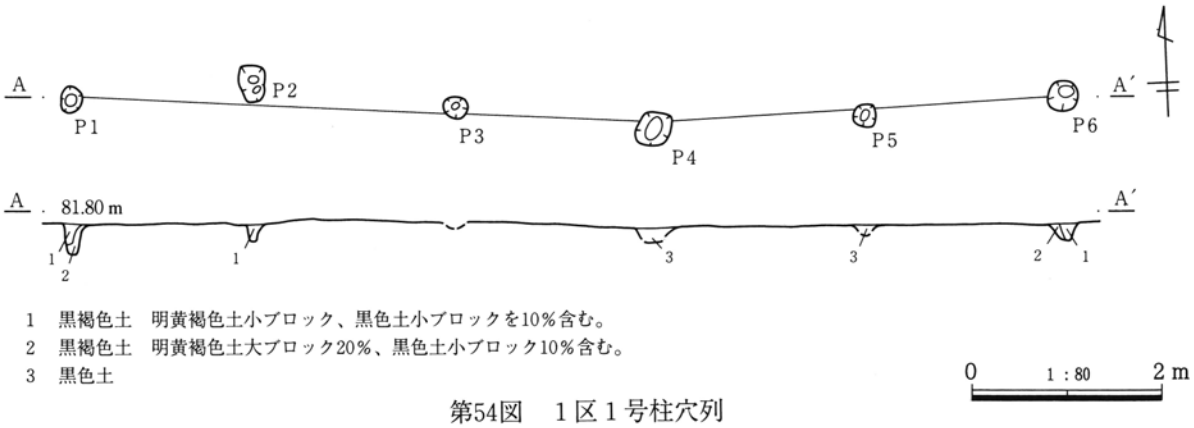
重複　なし　**主軸方位**　N－5°－E

形態　全長7.16mで南北に走向する。柱間は0.90～1.35mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴はP1・P7を除きほぼ円形で、規模は大小2つに分かれ、両端の柱穴であるP1・P7が長径29・30cm、短径26・27cm、深さ15cm以上・22cmで、残りが長径17～24cm、短径13～18cm、深さ5～12cmである。柱穴の規模から見て柵跡とするのが妥当と考える。

出土遺物　平安時代以前の遺物がP7に混入するのみであった。

1区4号柱穴列

位置　南堀内部分の中央部西寄りで、74E・F－8



第54図　1区1号柱穴列

グリッドに位置する。12号掘立柱建物跡の西脇に存する。

重複　Ｐ１は８号掘立柱建物跡のＰ２よりも古い。

主軸方位　Ｎ－５°－Ｅ

形態　全長7.18ｍで南北に走向する。柱間は0.60～1.41ｍで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴はやや大きいＰ２・Ｐ５を除いて、長径23～35㎝、短径24～26㎝、深さ７～29㎝である。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ５に混入するのみであった。

１区16号柱穴列（PL 20-4）

位置　北堀内部分の中央部で、83Ｃ－０グリッドに位置する。

重複　Ｐ１は６号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。　**主軸方位**　Ｎ－83°－Ｗ

形態　全長4.81ｍで東西に走向する。柱間は2.40～2.42ｍで均一。柱痕跡はＰ３で見られるが、計測値なし。柱穴は隅丸方形で長径41㎝、短径28～36㎝、深さ46～68㎝である。　**出土遺物**　なし

１区28号柱穴列

位置　南堀内部分の中央部北寄りで、74Ｇ－７・８グリッドに位置する。

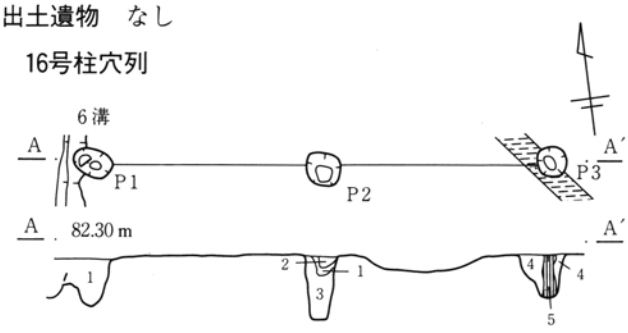
重複　64・68号土坑と重複するが新旧関係は確認できなかった。このうち68号土坑は第３類に属する。

主軸方位　Ｎ－84°－Ｗ

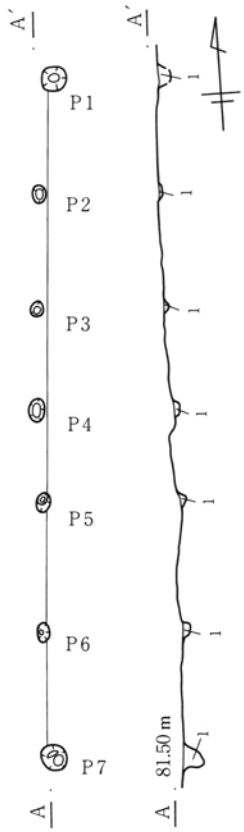
形態　全長2.85ｍで東西に走向する。柱間は1.38・1.48ｍとほぼ等しい。柱痕跡は見られない。Ｐ１・Ｐ２は重複により残存状態が悪いが、柱穴の形状は円形と隅丸方形が混在し、規模は長径25㎝程度である。

出土遺物　なし

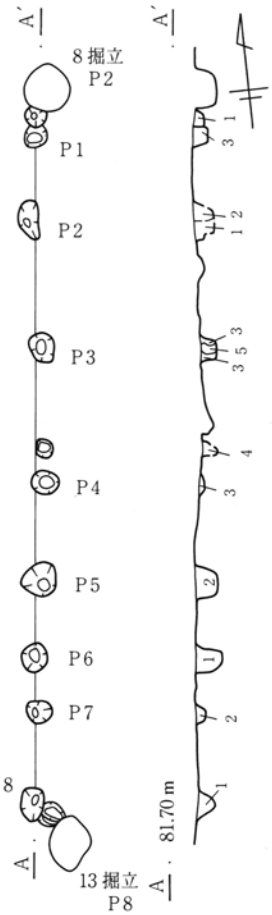
16号柱穴列



２号柱穴列



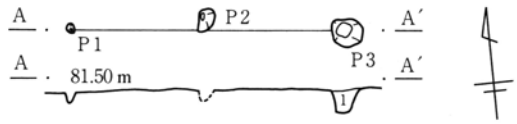
４号柱穴列



２号柱穴列
1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

４号柱穴列
1　オリーブ褐色土
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
4　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
5　黒褐色土

28号柱穴列



16号柱穴列
1　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
3　オリーブ褐色土
4　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
5　暗褐色土

28号柱穴列
1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％、白色軽石１％含む。

0　1：80　2 m

第55図　１区２・４・16・28号柱穴列

イ．第2類

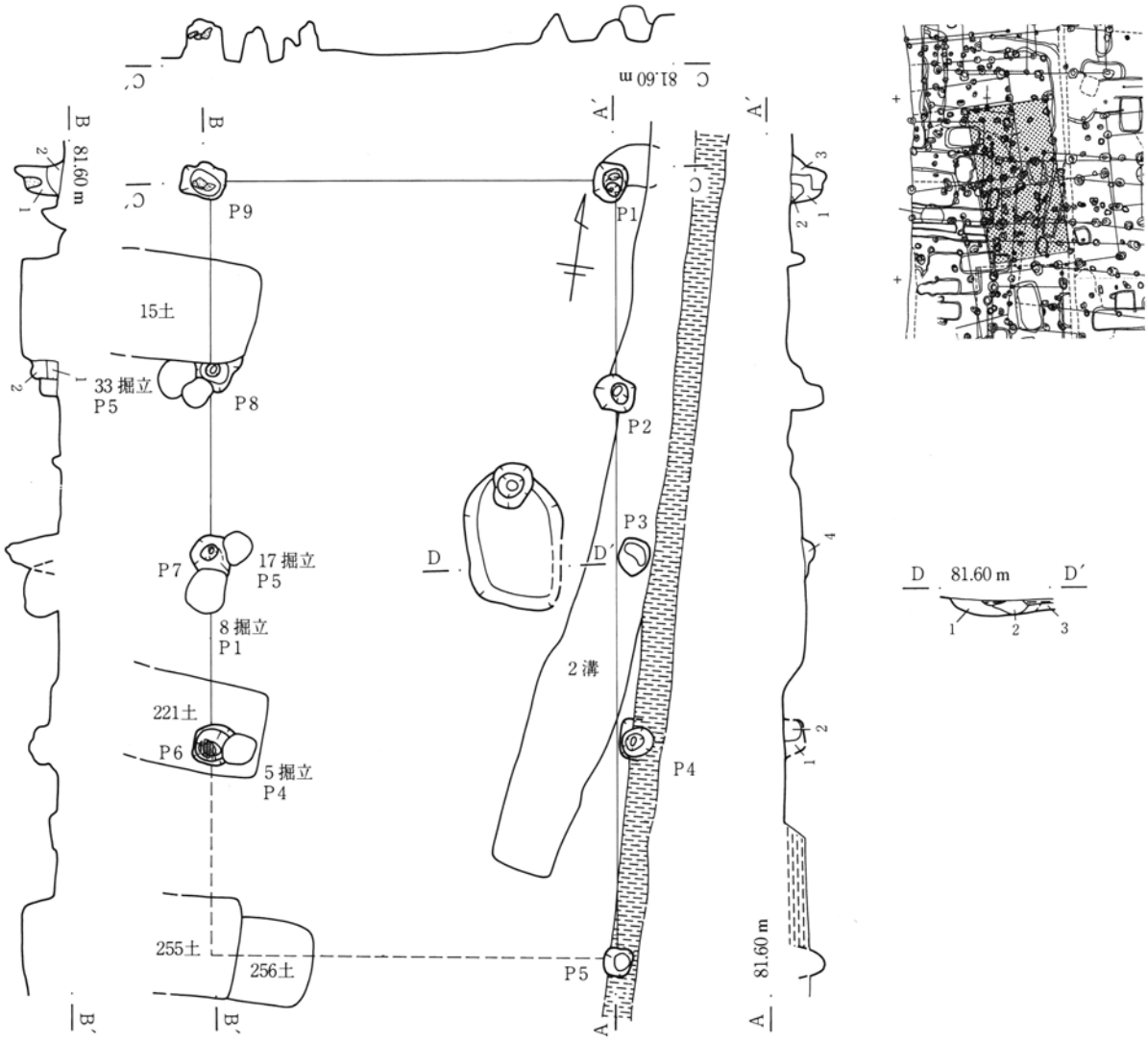
1区7号掘立柱建物跡（PL 18-4）

位置　南堀内部分の中央部西寄りで、74F－8・9グリッドに位置する。

重複　P 2は2号溝と重複し、土層断面観察では新しく見えるが、攪乱の影響もあり疑問残る。P 6は5号掘立柱建物跡P 4より古いため、建物跡としても同様に古いが、221号土坑との新旧関係不明で、この土坑は第1類に属する。P 7は8号掘立柱建物跡P 1、17号掘立柱建物跡P 5より古いため、建物跡としても同様に古い。P 8は33号掘立柱建物跡P 5よりも新しいため、建物跡としても同様に新しいが、15号土坑よりも古い。15号土坑は第3類に属する。

主軸方位　N－9°－W

形態　1×4間（4.60×8.44m・15尺×28.5尺）の南北棟。桁行の柱間は6尺～8尺で一定しないが、案分すればほぼ7尺となる。東辺のP 3は2号溝と



1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
3　黒褐色土
4　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
5　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
6　オリーブ褐色土
7　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5%含む。

0　1：80　2m

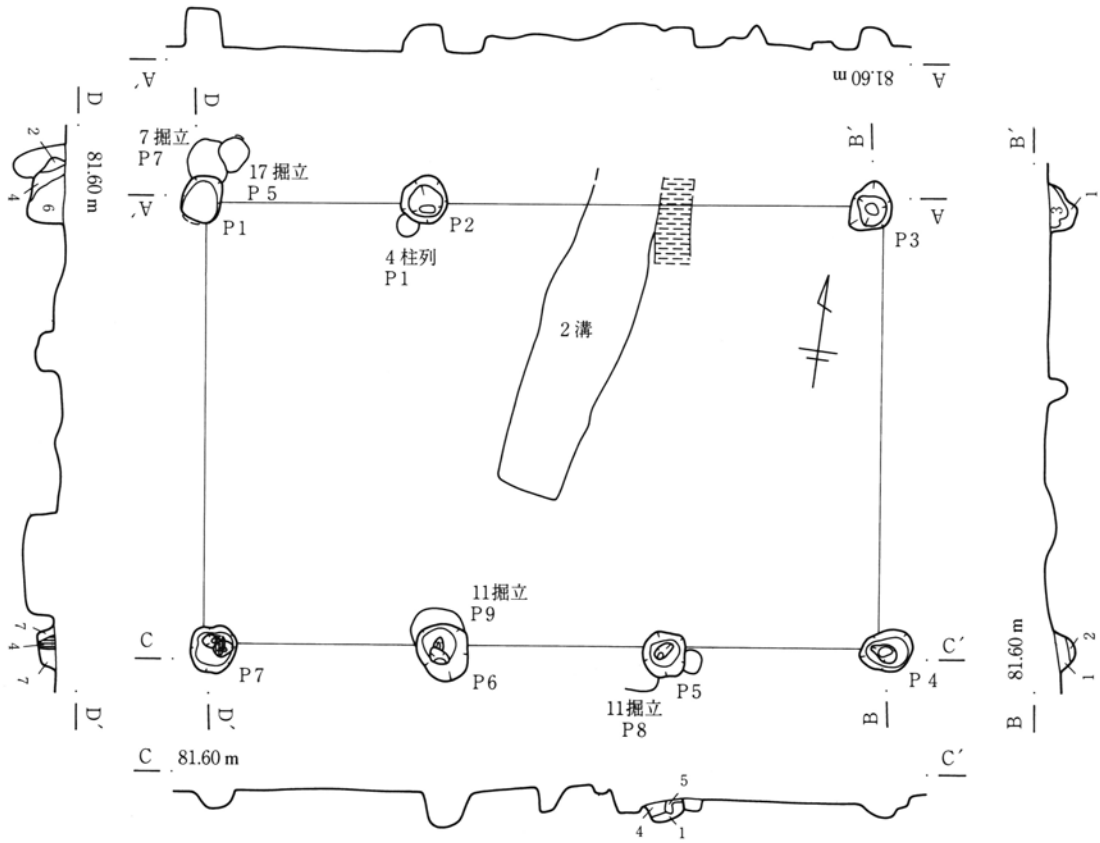
第56図　1区7号掘立柱建物跡・246号土坑

重複するため残存状況が悪く、Ｐ４・Ｐ５も攪乱に壊されるが、Ｐ２とＰ３の間隔は他よりも20㎝程狭く西辺とも符合する。Ｐ３・Ｐ４は柱軸から20㎝程東へ外れる。西辺の南西角柱穴は255号土坑との重複により検出できなかったが、この土坑は第１類に属する。西辺の柱穴は非常に良く柱軸に載る。柱痕跡はＰ２・Ｐ６で見られ、ともに16㎝を測る。柱穴は重複が多く残存状況は不良だがＰ７を除き隅丸方形で、内部に更に小穴を有する２段構造のものも見られる。規模は長径43～47㎝、短径37～40㎝で、深さは30～54㎝で数値にばらつきがある。

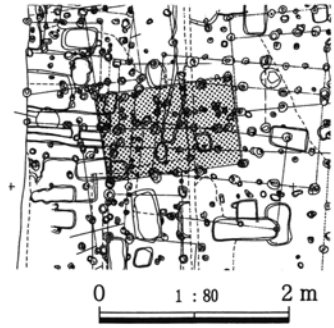
内部施設　中央部東寄りに主軸方位にほぼ平行する246号土坑があり、位置から内部施設の可能性が高い。規模は長辺159㎝、短辺104㎝、深さ17㎝で、主軸方位はＮ－８°－Ｗである。形状は隅丸長方形で浅く、底面はほぼ平坦だがやや丸みを持つ。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。遺物は出土しなかった。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ４・Ｐ９に混入するのみであった。

１区８号掘立柱建物跡（PL 18-4）



1　黒褐色土
2　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
4　オリーブ褐色土
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
6　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
7　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。



第57図　１区８号掘立柱建物跡

位置　南堀内部分の中央部西寄りで、74C－8・9グリッドに位置する。

重複　P1は7号掘立柱建物跡P7より新しいため、建物跡としても同様に新しい。P2は4号柱穴列のP1より新しいが、この柱穴列は第1類に属する。P5・P6はともに11号掘立柱建物跡P8・P9よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。P2とP3の間にも柱穴が存在したものと考えるが、2号溝と重複及び攪乱により検出できなかった。

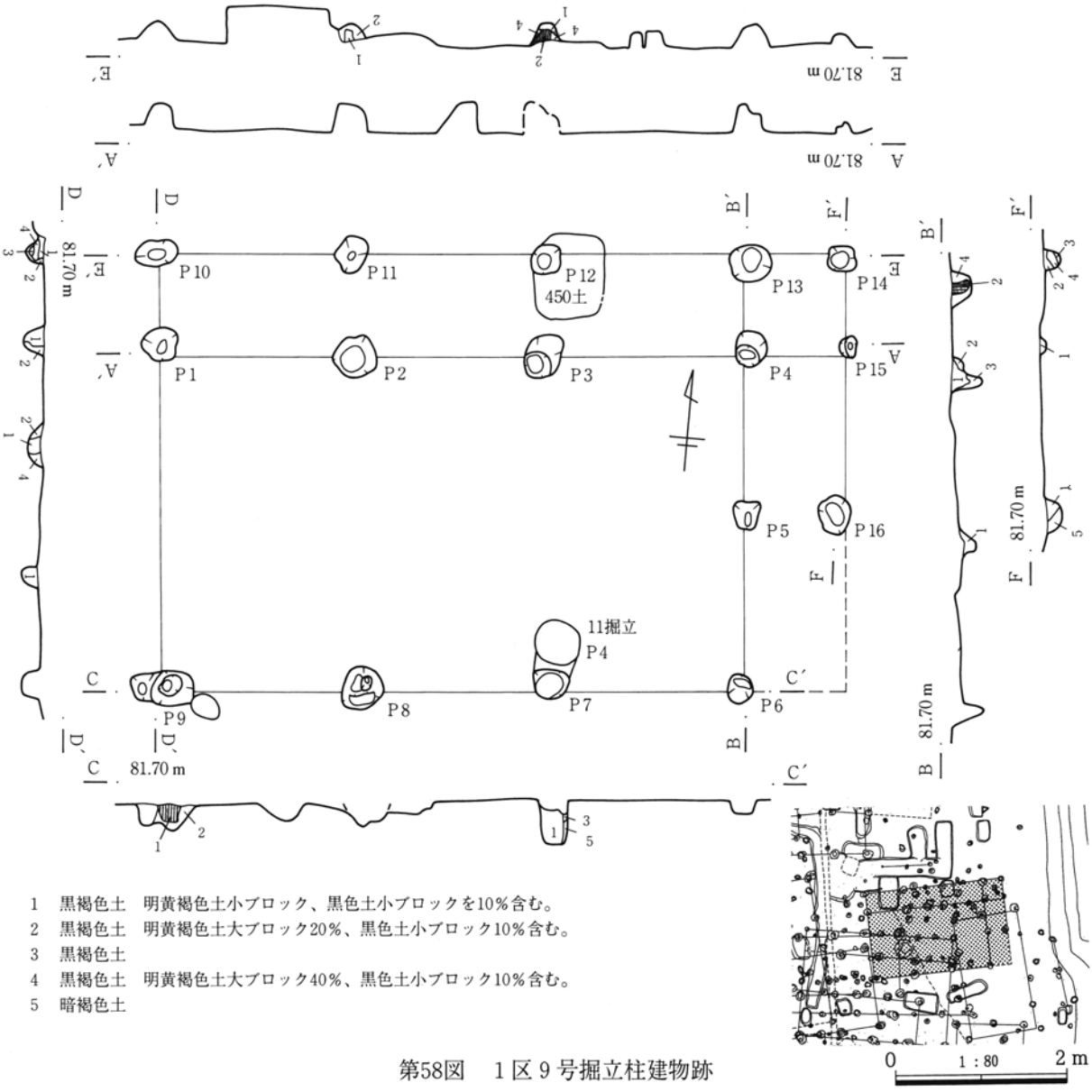
主軸方位　N－82°－E

形態　1×3間（4.70～4.80×7.10～7.20m・15.5尺×24尺）の東西棟。桁行の柱間は7.5尺～8.5尺で一定しないが、案分すればほぼ8尺である。各辺の柱穴は非常に良く柱軸に載る。柱痕跡はP2・P3・P7で見られ、10～15cmを測る。柱穴はほぼ隅丸方形で、長径50～58cm、短径38～52cmで、深さは20～40cmと数値にややばらつきがある。

内部施設　なし

出土遺物　平安時代以前の遺物がP4に混入するのみであった。

1区9号掘立柱建物跡（PL 18-3）



1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
3　黒褐色土
4　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。
5　暗褐色土

第58図　1区9号掘立柱建物跡

位置　南堀内部分の中央部東寄りで、74Ｆ－７・８グリッドに位置する。

重複　Ｐ12は450号土坑よりも古い。また、南東角付近は５Ａ・５Ｂ号住居跡と重複し、その埋土が黒色土のため柱穴の確認は困難で、Ｐ６は検出できたがその東にも柱穴が存在した可能性もあり、庇部の延長を想定した。

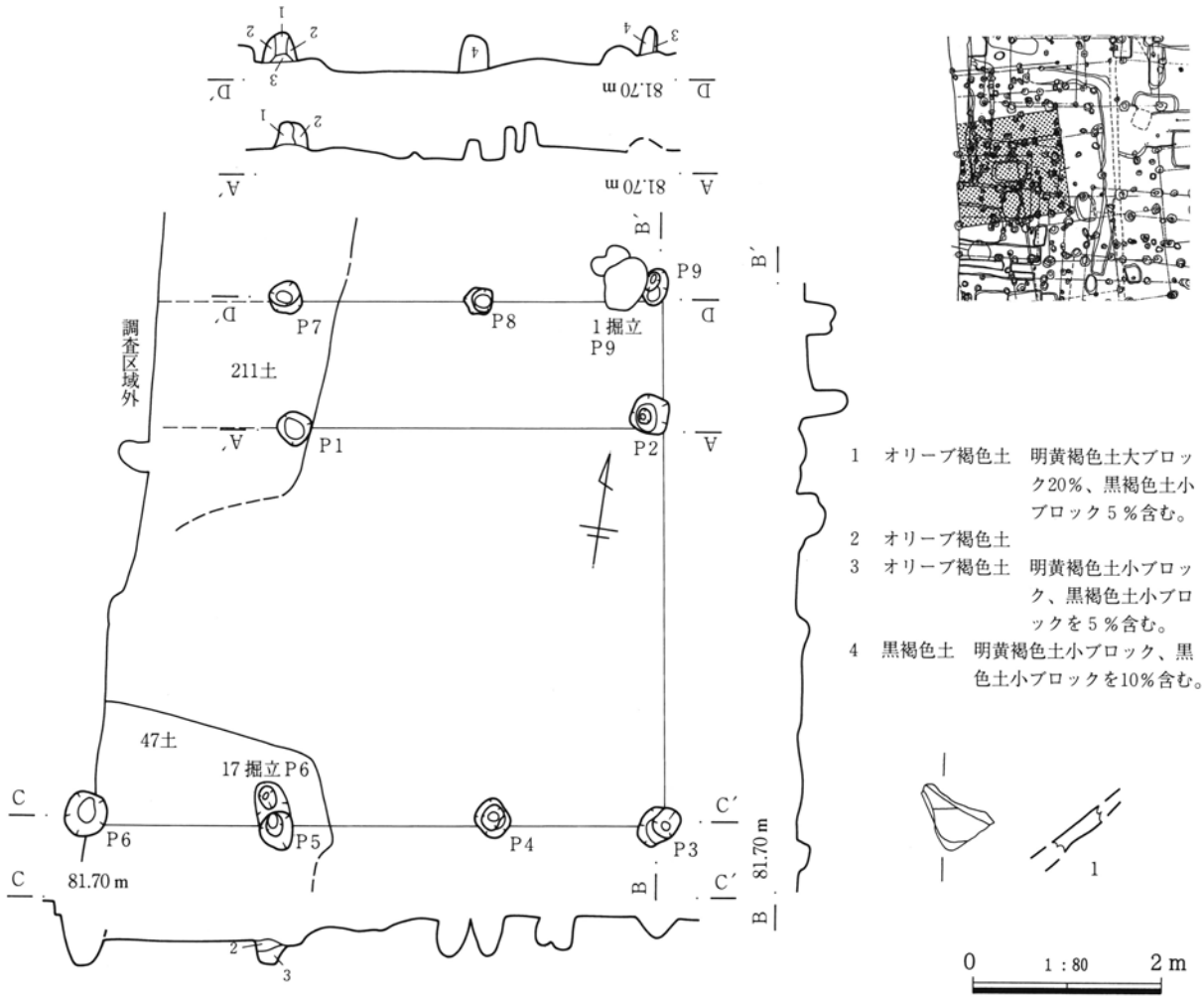
主軸方位　Ｎ－84°－Ｅ

形態　身舎は２×３間(3.90～3.95×6.90～7.08ｍ)の東西棟で、北側に幅1.00～1.05ｍの間隔を取って庇が付き、更に東側にも幅1.04～1.13ｍの間隔を取って庇が付き、全体として4.94～5.00×8.06～8.10ｍ、(13＋４）尺×（23＋４）尺の規模である。桁行の柱間は7.5尺と８尺である。東辺のＰ５はほぼその中間にあるが、対面する西辺では検出されなかった。柱穴は非常に良く柱軸に載る。柱痕跡はＰ１・Ｐ８～Ｐ10・Ｐ12・Ｐ13で見られ、９～13㎝を測る。身舎部分の柱穴は、Ｐ６が５Ａ・５Ｂ号住居跡と重複のため形状が不正確であるのを除けばほぼ隅丸方形で、庇部分では不整円形のＰ10と隅丸方形のその他に分かれる。柱穴の規模は大小２つに分かれ、Ｐ５・Ｐ６・Ｐ14・Ｐ15は長径25～35㎝、短径24～32㎝、深さ７～32㎝で、残りが長径41～58㎝、短径32～48㎝、深さ17～51㎝である。

内部施設　なし

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ９に混入するのみであった。

１区10号掘立柱建物跡（PL 18-4）



第59図　１区10号掘立柱建物跡・出土遺物

位置　南堀内部分の西端部中央北寄りで、74F・G－8・9グリッドに位置する。

重複　P6は47号土坑よりも新しく、この土坑は第1類に属する。P9は1号掘立柱建物跡のP9よりも古いため、建物跡としても同様に古い。P1・P7は211号土坑と、P5は17号掘立柱建物跡P6と重複するが新旧関係不明。

主軸方位　N－82°－E

形態　身舎は1×3間以上（5.80×6.20m以上）の東西棟で、北側に幅1.43mの間隔をとって庇がつき、全体として5.80×6.20m以上、（14＋4.5）尺×21尺以上の規模である。桁行の柱間は6尺～8尺で一定しない。西側は調査区域外となり、本遺構は更に西に延びている可能性がある。身舎部分北辺では、P1とP2の間に柱穴を検出できなかった。P2は柱軸からやや北西方向に外れるが、他はほぼ柱軸に載っている。南辺のP4とP5の間隔は他よりも40cm程広くとる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が不分明に混在しており、規模は大小2つに分かれ、P1・P7～P9が長径30～37cm、短径26cm、深さ38cmで、残りが長径40～46cm、短径36～45cm、深さ24～50cmである。総じて身舎部分よりも庇部分の柱穴の方が小さいことが分かる。

内部施設　なし　**出土遺物**　P9の埋土から古瀬戸大皿（1）のみが出土している。

1区20号掘立柱建物跡（PL 19-1）

位置　北堀内部分の1号堀近くで、73A・B－9グリッドに位置する。1号堀から西に1.5m程をとる。

重複　なし

主軸方位　N－5°－W（南北棟とした場合）

形態　1以上×2間以上（2.05以上×5.11m以上・7尺以上×17尺以上）で棟方向は判断出来ない。東辺のP3は20cm程北寄りである。柱痕跡は見られない。柱穴はP1を除き円形で、規模は大小2つに分かれ、P1・P4が長径48・52cm、短径36・42cm、深さ59・42cmで、P2・P3が長径36・38cm、短径28・26cm、深さ27・21cmである。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし

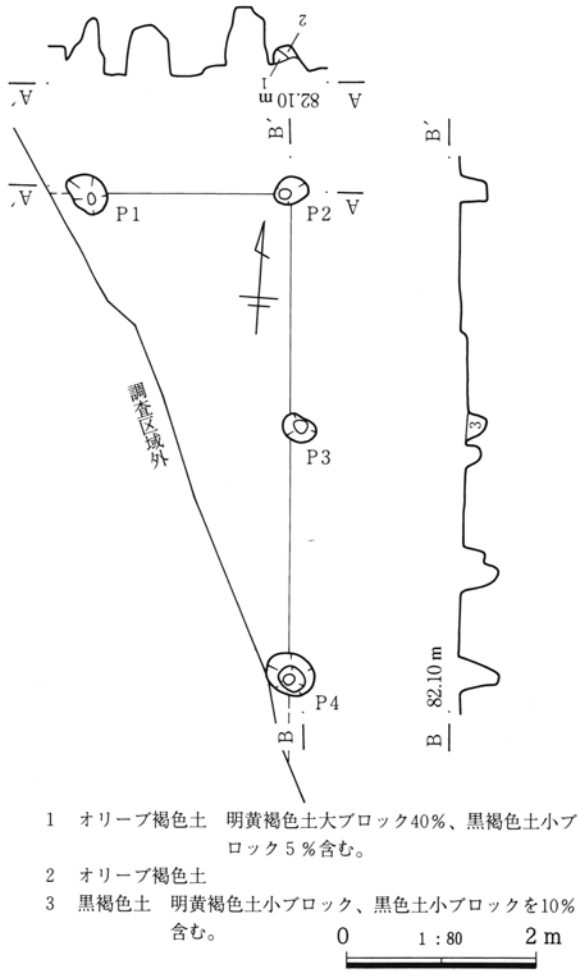
1区34号掘立柱建物跡

位置　南堀内部分の中央部東端で、74F－7グリッドに位置する。1号堀東辺の折れ部に正対しており、西へ2～3mの間隔をとる。また、この折れ部は3号入口遺構と名付けた部分であり、関連も想定される。

重複　P3～P9は5A・5B・6号住居跡と重複しており、埋土が黒色土であることから柱穴の確認作業は困難となり、最終的に掘立柱建物跡として認識できたのは上記住居跡調査段階となってしまった。したがって、本遺構の柱穴は個々に作図した土層断面を方位に関係なく掲載することとなった。

主軸方位　N－8°－W

形態　2×4間（3.64～4.18×7.00～7.20m・12.5尺×23.5尺）の南北棟。柱間は桁行・梁間ともに4.5尺～9尺で一定しない。東辺ではP2とP3の

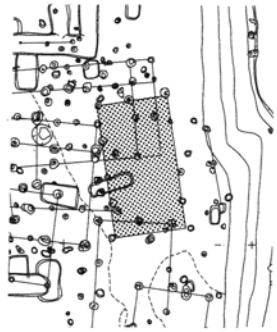


第60図　1区20号掘立柱建物跡

間隔が他よりも1.2ｍ程長く、他は1.48～1.53ｍと非常に均整がとれており、Ｐ２とＰ３の間隔のみが際立つ。南辺のＰ６は15㎝程西寄りであり、北辺と符合する。西辺ではＰ８とＰ９の間隔が他よりも45㎝程狭く、他は1.82～1.93ｍとほぼ均整がとれる。北辺のＰ12は30㎝程西寄りで、南辺と符合する。柱穴は北辺を除き柱軸から内外へやや外れるものが多い。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が不分明に混在しており、規模は大中小３つに分かれ、Ｐ２は特に小さく、次いでＰ３～Ｐ５・Ｐ７・Ｐ９が、長径31～37㎝、短径29～35㎝、深さ17～54㎝で、残りが長径40～50㎝、短径31～46㎝、深さ12～42㎝である。

内部施設　なし

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ４・Ｐ７に混入するのみであった。

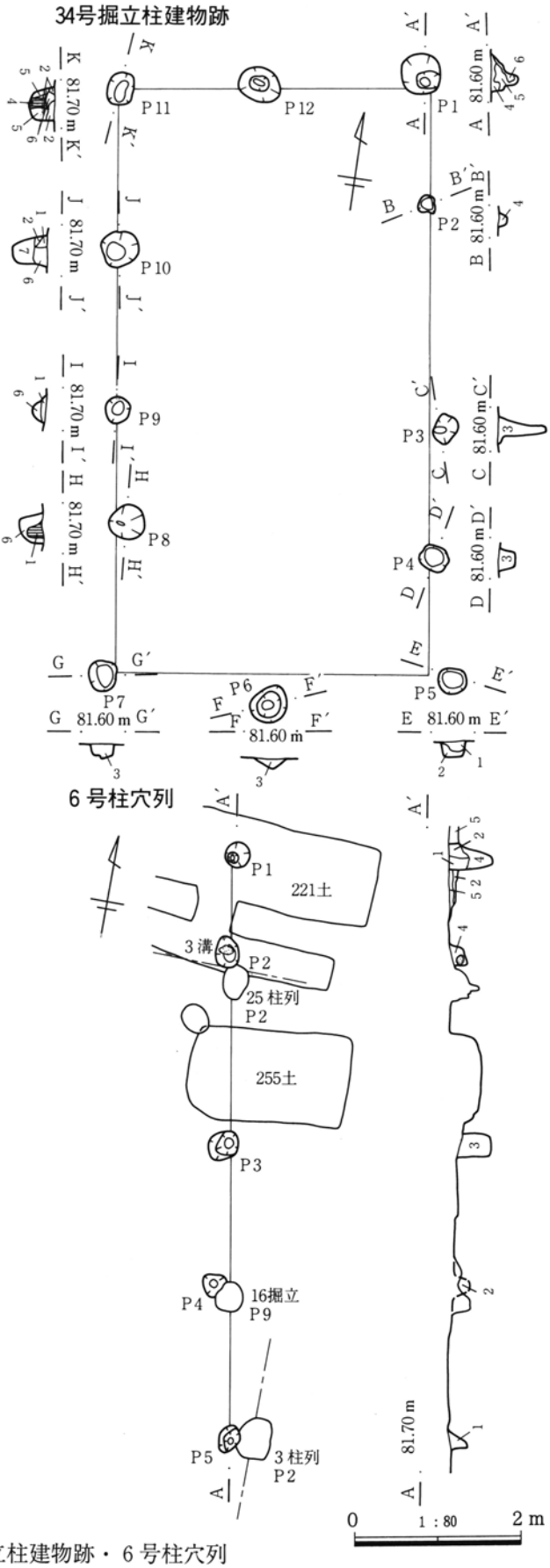


１区６号柱穴列

位置　南堀内部分の西端部中央で、74Ｅ・Ｆ－９グリッドに位置する。８号掘立柱建物跡の西脇に存する。

34号掘立柱建物跡
1　暗褐色土
2　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
3　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
4　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
6　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
7　黒褐色土

６号柱穴列
1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
3　オリーブ褐色土
4　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。



第61図　１区34号掘立柱建物跡・６号柱穴列

重複　Ｐ１は221号土坑より新しい。Ｐ２は３号溝と重複するが新旧関係不明。Ｐ４は16号掘立柱建物跡のＰ９よりも古く、建物としても同様に古い。Ｐ５は３号柱穴列のＰ２より新しいが、この柱穴列は第３類に属しており注意を要する。

主軸方位　Ｎ－９°－Ｗ

形態　全長6.98ｍで南北に走向する。柱間は1.17～2.25ｍで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、規模は長径29～40㎝、短径24～33㎝、深さ22～41㎝でほぼ均整がとれる。

出土遺物　なし

１区８号柱穴列

位置　南堀内部分の北西部で、74Ｇ－８・９グリッドに位置する。

重複　Ｐ１・Ｐ２は129・211号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。これら土坑は第３類に属する。　**主軸方位**　Ｎ－85°－Ｅ

形態　全長8.28ｍで東西に走向する。柱間は1.00～1.95ｍで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在しており、規模は長径22～31㎝、短径18～31㎝、深さ７～24㎝でやや数値にばらつきがある。柱穴の規模から見て柵跡とするのが妥当である。　**出土遺物**　なし

１区17号柱穴列

位置　北堀内部分の１号堀寄りで、73Ｂ－９グリッドに位置する。Ｐ４は１号堀から西へ１ｍ程をとる。

重複　なし　**主軸方位**　Ｎ－84°－Ｅ

形態　全長4.32ｍで東西に走向する。柱間は1.35～1.56ｍでほぼ均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、長径58㎝、短径26～33㎝、深さ39～46㎝である。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ３に混入するのみであった。　**出土遺物**　なし

１区22号柱穴列

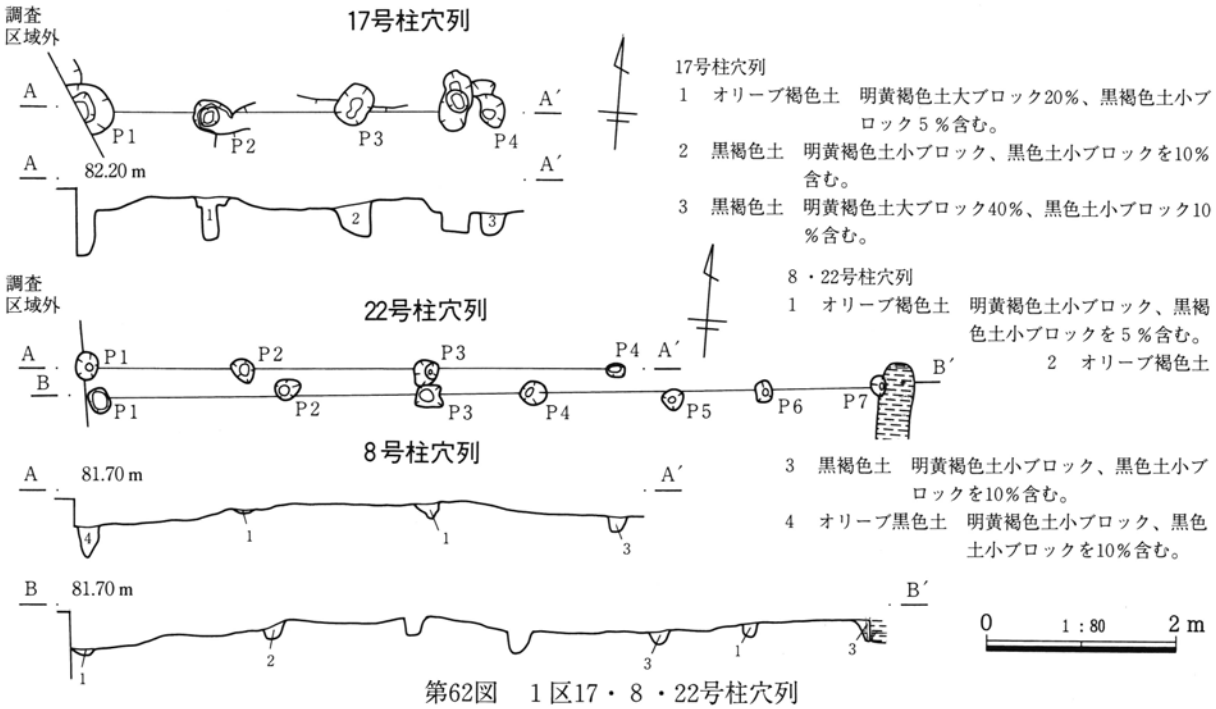
位置　南堀内部分の北西部で、74Ｇ－８・９グリッドに位置する。

重複　Ｐ１は129号土坑よりも新しいがこの土坑は第３類に属することから注意を要する。Ｐ２は211号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。この土坑も第３類に属する。

主軸方位　Ｎ－86°－Ｅ

形態　全長5.57ｍで東西に走向する。柱間は1.64～1.97ｍで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、長径19～29㎝、短径14～25㎝、深さ５～34㎝である。

出土遺物　なし



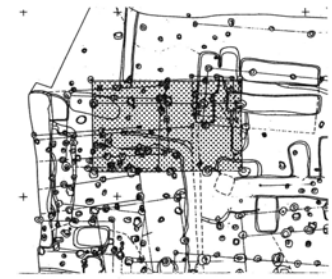
第62図　１区17・８・22号柱穴列

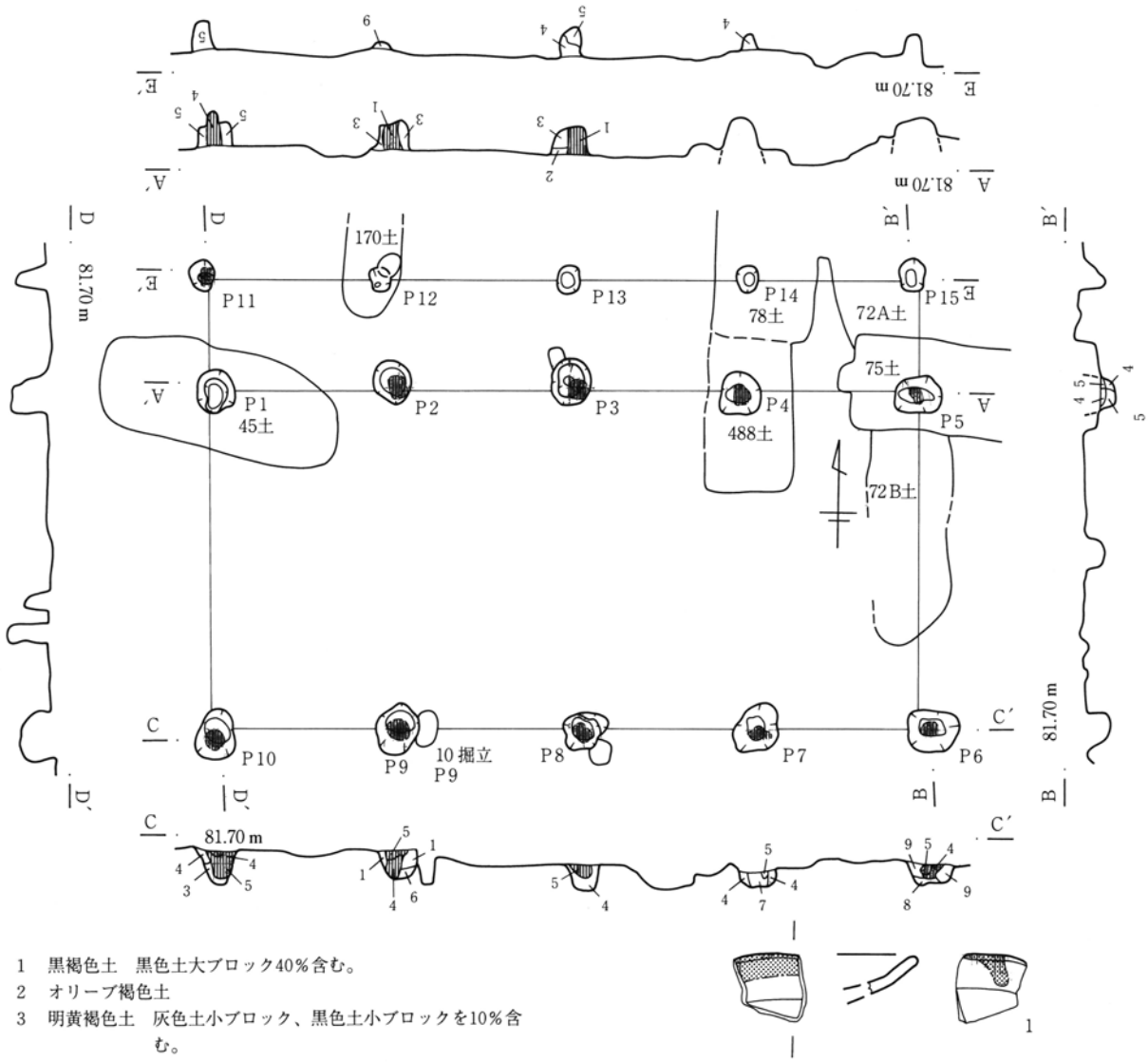
ウ．第３類

１区１号掘立柱建物跡（PL 19-2・4～7）

位置　南堀内部分の北端部西寄りで、74G－８・９グリッドに位置する。１号堀が北辺で北方向に直角に折れる部分から南へ３ｍ程をとる。

重複　Ｐ９は10号掘立柱建物跡のＰ９よりも新しく、建物跡としても同様に新しい。Ｐ14は78号土坑よりも古く、この土坑も第３類に属する。Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ12・Ｐ15も各々45・488・75・71・55・170・72Ａ号土坑と重複するが新





1　黒褐色土　黒色土大ブロック40％含む。
2　オリーブ褐色土
3　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
4　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
6　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
7　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
8　黒褐色土
9　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。

0　1：80　2 m

第63図　１区１号掘立柱建物跡・出土遺物

旧関係は確認できなかった。

主軸方位　N－90°

形態　身舎部分は1×4間（3.77～3.80×7.84～8.00m）の東西棟で、北側に1.30mの間隔をとって庇がつき、全体として5.00×7.84～8.00m、（12.5＋4）尺×26.5尺の規模である。桁行の柱間は6.5尺と7尺が多い。柱穴は非常に良く柱軸に載っている。柱痕跡はP2～P4・P6・P8～P10で見られ、13～18cmを測る。身舎部分の柱穴はほぼ隅丸方形で、長径49～61cm、短径40～46cm、深さ22～42cm、庇部分の柱穴はP12を除き隅丸方形で、長径32～34cm、短径24～25cm、深さ34～38cmである。庇部の柱穴は、身舎部分よりも明らかに小さいことが分かる。

内部施設　なし

出土遺物　P3で古瀬戸Ⅲ(1)が出土しているが、P4・P6では平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

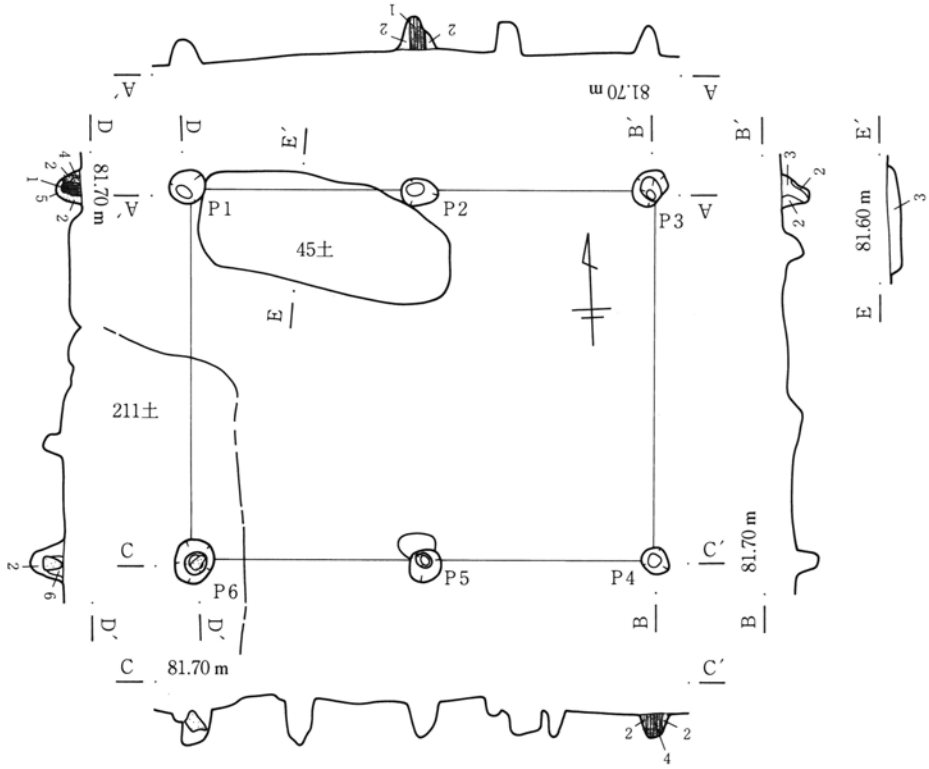
1区2号掘立柱建物跡（PL 19-2・3）

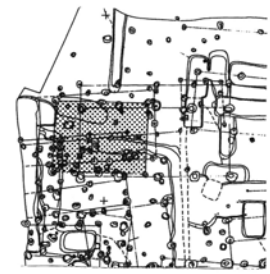
位置　南堀内部分の北西端で、74G－8・9グリッドに位置する。1号堀北辺西角から南へ3.5m程をとる。

重複　P6は211号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。

主軸方位　N－88°－W

形態　1×2間（3.90×4.95m・13尺×16.5尺）の東西棟で、西へ1.5m程で調査区域外となるため、柱穴が更に西へ延びる可能性もある。桁行の柱間は7.5尺～8.5尺だが、案分すれば8尺である。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はP1・P2・P





1　オリーブ褐色土
2　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
3　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
4　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
5　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
6　明黄褐色土

0　1:80　2m

第64図　1区2号掘立柱建物跡・45号土坑

４・Ｐ５で見られ、13～17㎝を測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模はＰ４がやや小さい以外、長径33～39㎝、短径28～35㎝、深さ28～36㎝である。

内部施設　Ｐ１とＰ２に沿って北西端部に45号土坑があり、規模は長辺274㎝、短辺114㎝、深さ14㎝である。**主軸方位**　Ｎ－76°－Ｗ。**形態**　攪乱によりやや残存状況が悪いが、位置から内部施設の可能性が高い。形状は隅丸長方形で浅く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。遺物は出土しなかった。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ５に混入するのみであった。

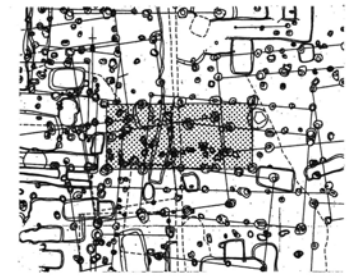
１区３号掘立柱建物跡（PL 18-3）

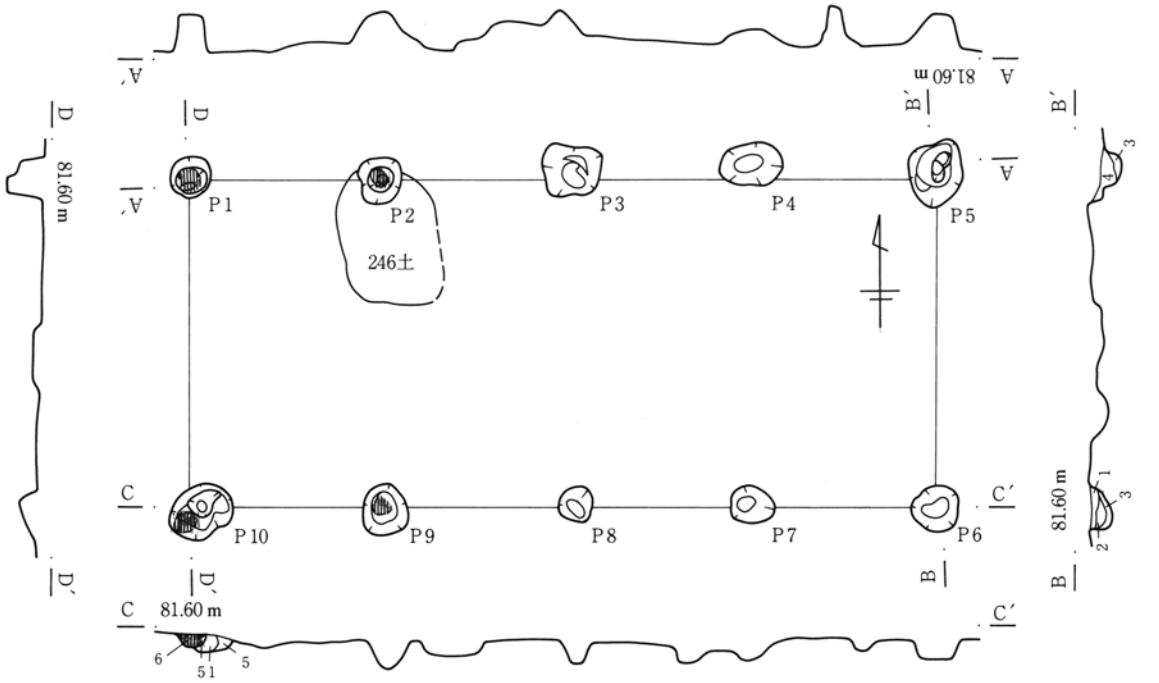
位置　南堀内部分の中央部で、74Ｆ－８グリッドに位置する。

重複　Ｐ２は246号土坑と重複し新旧関係は明確にできなかったが、この土坑は第２類に属し７号掘立柱建物跡の内部施設である可能性が高い。

主軸方位　Ｎ－89°－Ｅ

形態　１×４間（3.40～3.65×7.76～7.83ｍ・11.5尺×26.5尺）の東西棟。桁行の柱間は6.5尺が多い。北辺のＰ１とＰ２の間隔は他よりも10㎝程広くとっており南辺と符合する。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はＰ１・Ｐ３～Ｐ10で見られ、13～17㎝を測る。柱穴はほぼ隅丸方形で、規模は大中小３つに分かれ、Ｐ８が小さく、大きくはＰ３～Ｐ５・Ｐ10が長径64～72㎝、短径44～58㎝、深さ16～34㎝で、残りは長径44～54㎝、短径40～48㎝、深さ16～38㎝である。





1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土
3　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
4　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
6　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。

0　1：80　2ｍ

第65図　１区３号掘立柱建物跡

内部施設　なし

出土遺物　Ｐ７で天目茶碗細片が出土しているが、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ６・Ｐ８では平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

１区４号掘立柱建物跡（PL 16-3、17-1）

位置　南堀内部分の南西部で、74Ｅ－８グリッドに位置する。１号堀南辺から北へ5.5ｍ程をとる。

重複　Ｐ２は325号土坑よりも古いが、この土坑も第３類に属する。Ｐ３の南にはもう一つ古い段階の柱穴が接しており、一度据え直しが想定される。Ｐ４は13号掘立柱建物跡のＰ３よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。Ｐ７は287号土坑よりも古く、この土坑も第３類に属するが、位置から見て16号掘立柱建物跡の内部施設と思われる。

主軸方位　Ｎ－２°－Ｅ

形態　１×３間(3.82～4.10×6.85ｍ・13尺×23尺)の南北棟。桁行の柱間は7.5尺と８尺である。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はＰ１・Ｐ３・Ｐ７で見られ、14～16cmを測る。柱穴は隅丸方形で、規模は長径46～61cm、短径44～54cmで、深さは23～41cmで数値にばらつきがある。

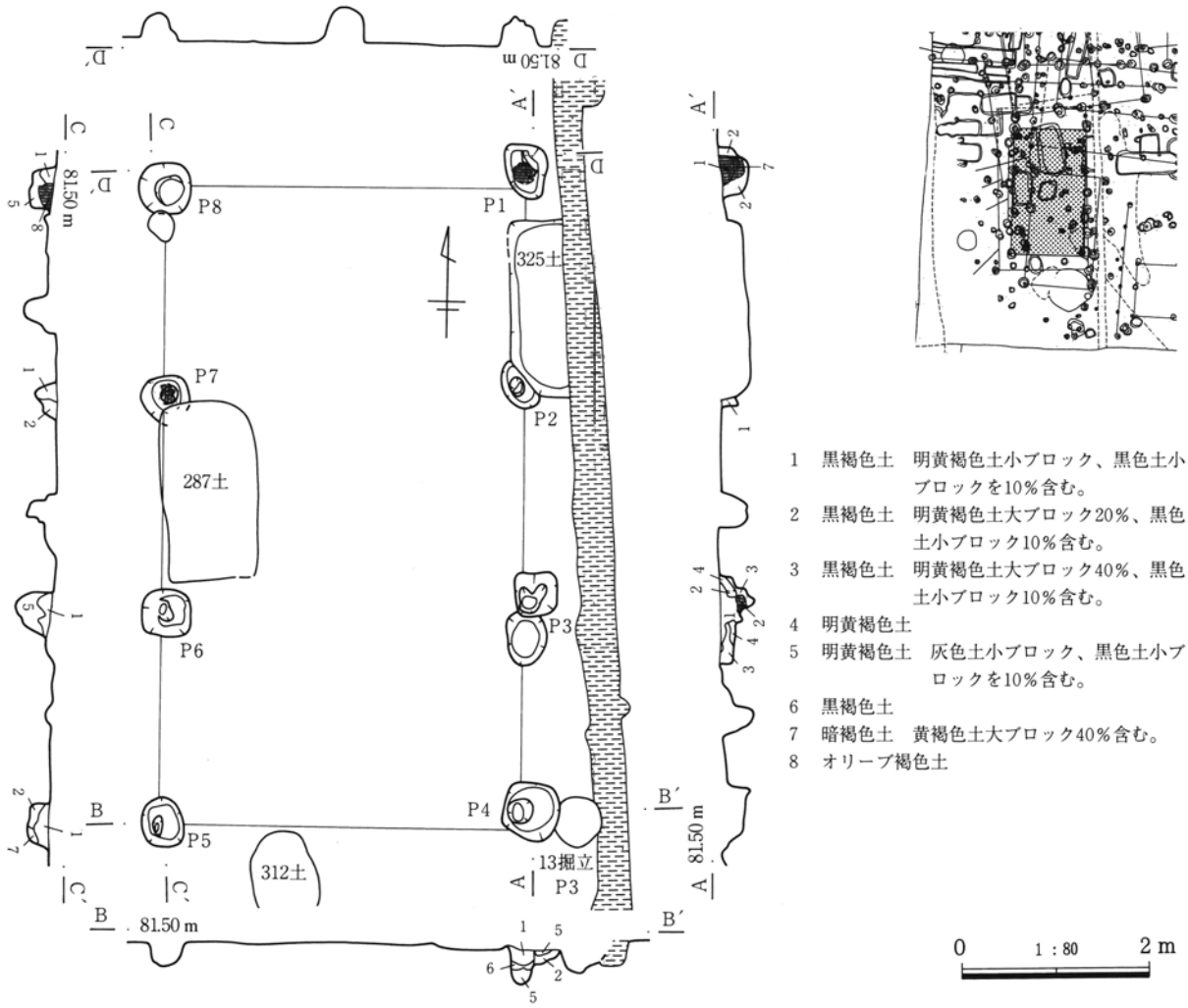
内部施設　なし

出土遺物　Ｐ５で在地土器鉢片？のほか平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

１区５号掘立柱建物跡（PL 18-4）

位置　南堀内部分の西端部中央で、74Ｆ－８・９グリッドに位置する。

重複　Ｐ４は７号掘立柱建物跡のＰ６よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。Ｐ５・Ｐ６は221号土坑と重複し、Ｐ５は不明でＰ６はそれより

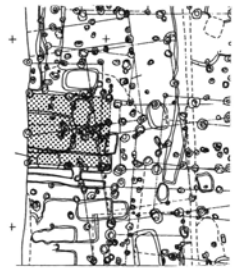


第66図　１区４号掘立柱建物跡

も新しいが、この土坑は第１類に属する。

主軸方位　Ｎ－87°－Ｗ

形態　１×２間（3.65×4.27～4.28ｍ・12.5尺×14.5尺）の東西棟で、西辺は調査区域境と接することから、柱穴が更に西へ延びる可能性もある。桁行の柱間は７尺が多い。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はＰ３～Ｐ５で見られ、13～16㎝を測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径44～50㎝、短径34～40㎝で、深さは38～54㎝で数値にばらつきがある。



内部施設　なし

出土遺物　なし

１区６号掘立柱建物跡（PL 17-2）

位置　南堀内部分の東南部で、74Ｅ・Ｆ－７グリッドに位置する。１号堀の東辺から西へ３ｍ程をとる。

重複　なし

主軸方位　Ｎ－３°－Ｅ

形態　２×３間（3.70～3.98×7.00～7.28ｍ・13尺×23.5尺）の南北棟。桁行の柱間は８尺が多い。東辺・西辺ともほぼ等間隔だが、Ｐ８の柱穴は柱軸からやや東へ外れる。南辺のＰ５は20㎝程西寄りで、柱軸から10㎝程南へ外れる。北辺のＰ10は南辺とは逆に40㎝程東寄りで、柱軸からわずか北へ外れる。柱痕跡はＰ３・Ｐ４・Ｐ９で見られ、11～14㎝を測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径30～47㎝、短径26～42㎝でほぼ均整がとれており、深さは18～52㎝で数値にばらつきがある。

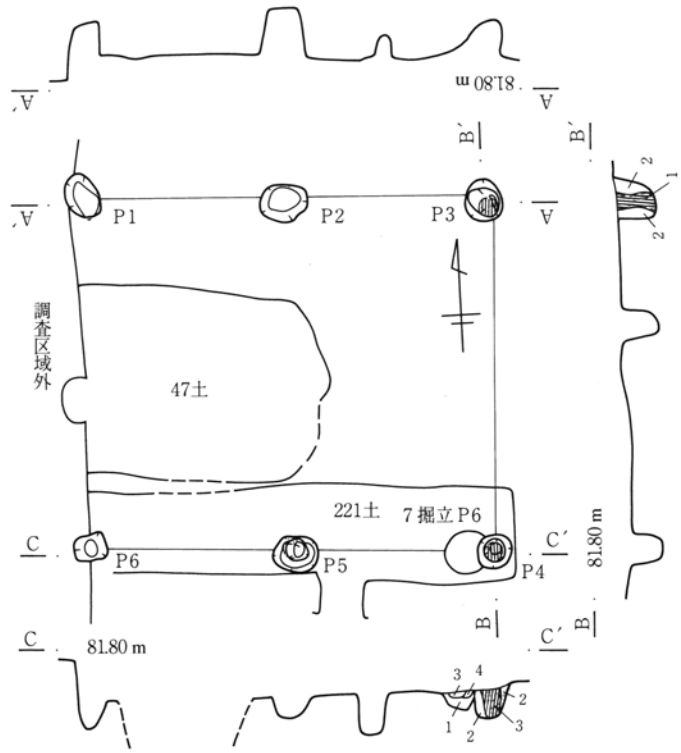
内部施設　なし

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ３・Ｐ７～９に混入するのみであった。

１区16号掘立柱建物跡（PL 16-3・5、17-1）

位置　南堀内部分の南西部で、74Ｅ・Ｆ－８・９グリッドに位置する。１号堀南辺から北へ4.5ｍ程をとる。

重複　Ｐ２は325号土坑よりも古いが、この土坑も第３類に属す。Ｐ９は６号柱穴列のＰ４より新しい



1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
3　オリーブ褐色土
4　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。

0　1：80　2ｍ

第67図　１区５号掘立柱建物跡

ため、建物跡としても同様に新しい。

主軸方位　Ｎ－１°－Ｗ

形態　１×４間（5.08×8.86ｍ・16尺×29.5尺）の南北棟。桁行の柱間は６尺～８尺で一定しないが、案分すれば7.5尺である。東辺のＰ４とＰ５の間隔は他よりも30㎝程狭く、西辺のＰ６・Ｐ７の間隔も符合して狭い。西辺の北西角柱穴は255～257号土坑と重複するため検出できなかったが、これらの土坑も第１類に属す。柱痕跡はＰ３～Ｐ５で見られ、11～15㎝を測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模はＰ８・Ｐ９がやや小さい以外、長径43～58㎝、短径39～43㎝、深さ20～35㎝でほぼ均整がとれている。

内部施設　西辺寄り中央部に主軸方向に平行な287号土坑があり、規模は長辺193㎝、短辺105㎝、深さ35㎝である。主軸方位Ｎ－０°。形状は長方形でや

や深く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。この土坑は４号掘立柱建物跡のＰ７よりも新しいため、建物跡としても同様に新しいこととなる。遺物は在地土器鍋片？のほか平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

出土遺物　なし

１区17号掘立柱建物跡（PL 18-2・4）

位置　南堀内部分の西端部中央で、74Ｆ－９グリッドに位置する。

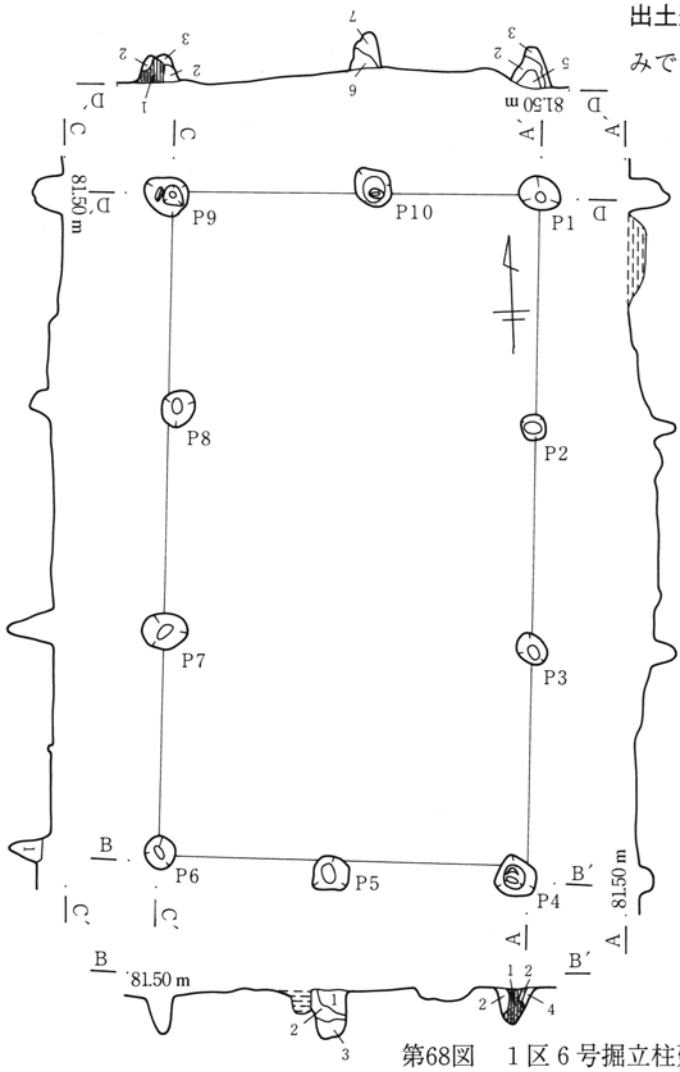
重複　Ｐ１は129号土坑より新しいが、この土坑も第３類に属す。Ｐ５は７号掘立柱建物跡のＰ７よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。Ｐ６と10号掘立柱建物跡Ｐ５、47号土坑は新旧関係不明。

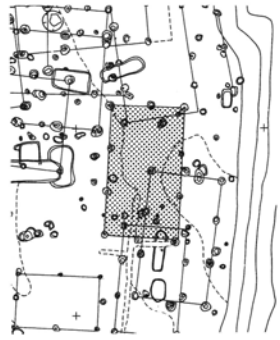
主軸方位　Ｎ－89°－Ｗ

形態　２×２間以上（3.40×3.86ｍ以上・11尺×13尺以上）の東西棟。桁行・梁間ともに柱間は５尺～７尺で一定しない。Ｐ３は柱軸から北西方向にやや外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径31～38㎝、短径29～32㎝、深さ41～54㎝でほぼ均整がとれる。

内部施設　東半部に主軸方向に直交及び平行する12号土坑及び15号土坑がある。12号土坑の規模は長辺172㎝、短辺103㎝、深さ15㎝で、主軸方位Ｎ－０°。15号土坑の規模は長辺192㎝、短辺117㎝、深さ44㎝で、主軸方位Ｎ－２°－Ｅ。この２つの土坑は形状に違いがあり機能的な差違が想定される。12号土坑の形状は不整隅丸長方形で浅く、底面はやや丸みを持つが平坦。遺物は出土しなかった。15号土坑の形状は長方形でやや深く、底面は平坦。平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ３に混入するのみであった。



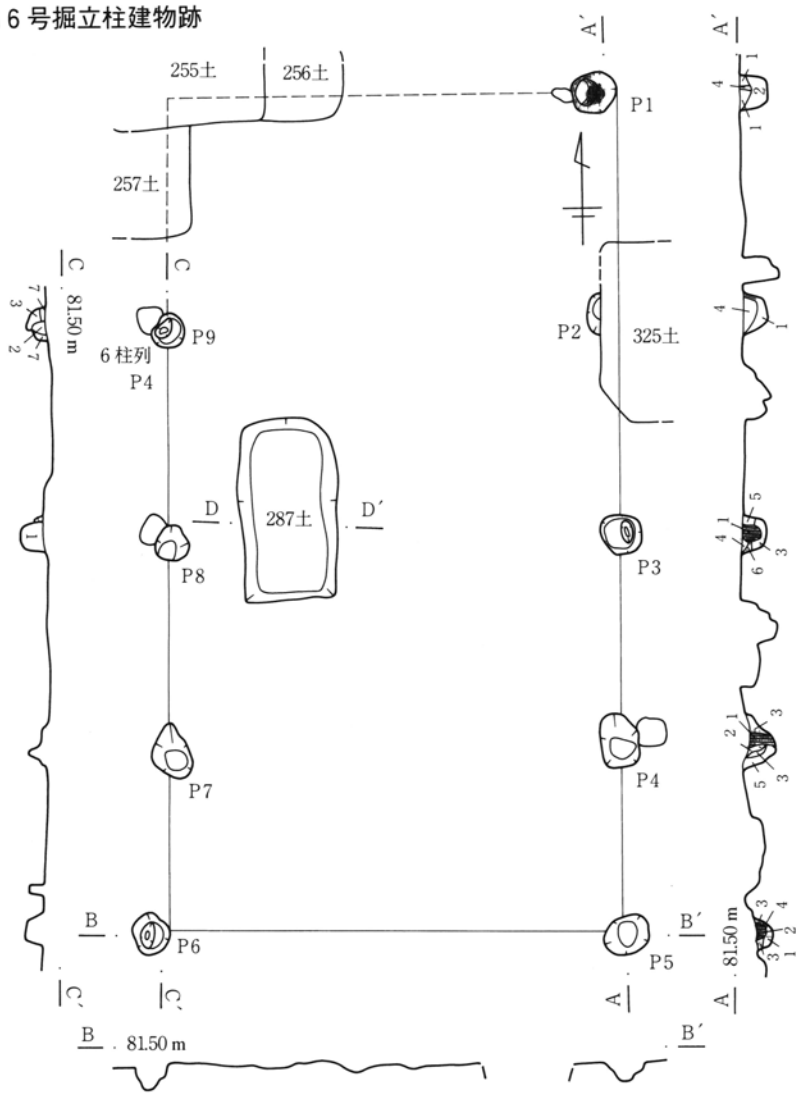


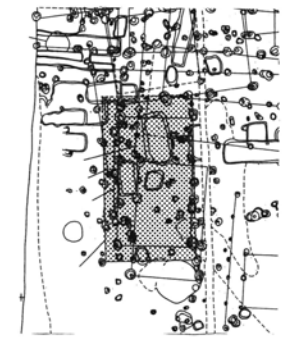
1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
3　黒褐色土
4　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
5　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
6　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
7　黒色土　黄褐色土大ブロック20％含む。

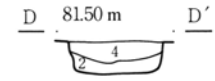
0　1：80　2ｍ

第68図　１区６号掘立柱建物跡

16号掘立柱建物跡

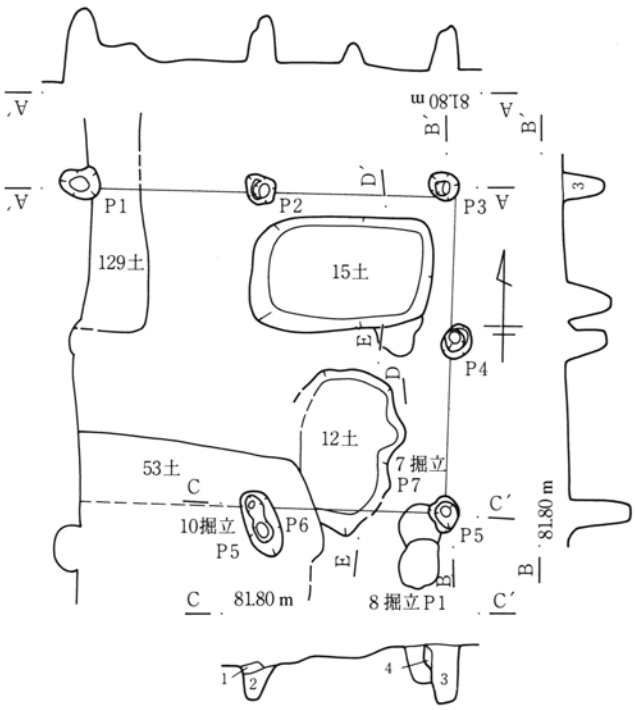


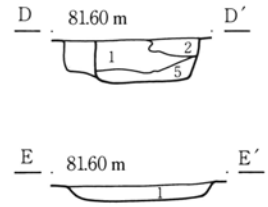


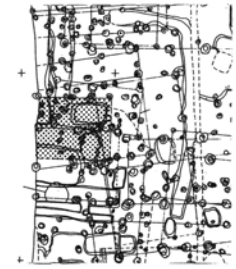


1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
4　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
5　明黄褐色土
6　黄褐色粘質土
7　黒色土

17号掘立柱建物跡







1　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック５％含む。
3　オリーブ褐色土
4　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
5　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。

0　1：80　2 m

第69図　１区16・17号掘立柱建物跡

1区29号掘立柱建物跡

位置　南堀内部分の北西端で、74G－8・9グリッドに位置する。1号堀北辺の折れ部から南へ4m程をとる。

重複　P5は2号溝よりも古い。

主軸方位　N－89°－E

形態　2×2間以上（3.66×4.68～5.00m・12.5尺×16尺以上）の東西棟で、西へ2m程で調査区域外となることから、柱穴が更に西へ延びる可能性もある。柱間は桁行は7.5尺と8尺、梁間は6尺。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径27～41cm、短径23～33cm、深さ20～54cmでほぼ均整がとれる。

内部施設　なし

出土遺物　P7から在地土器カワラケ(1)が出土しているが、P3・P7では平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

1区3号柱穴列

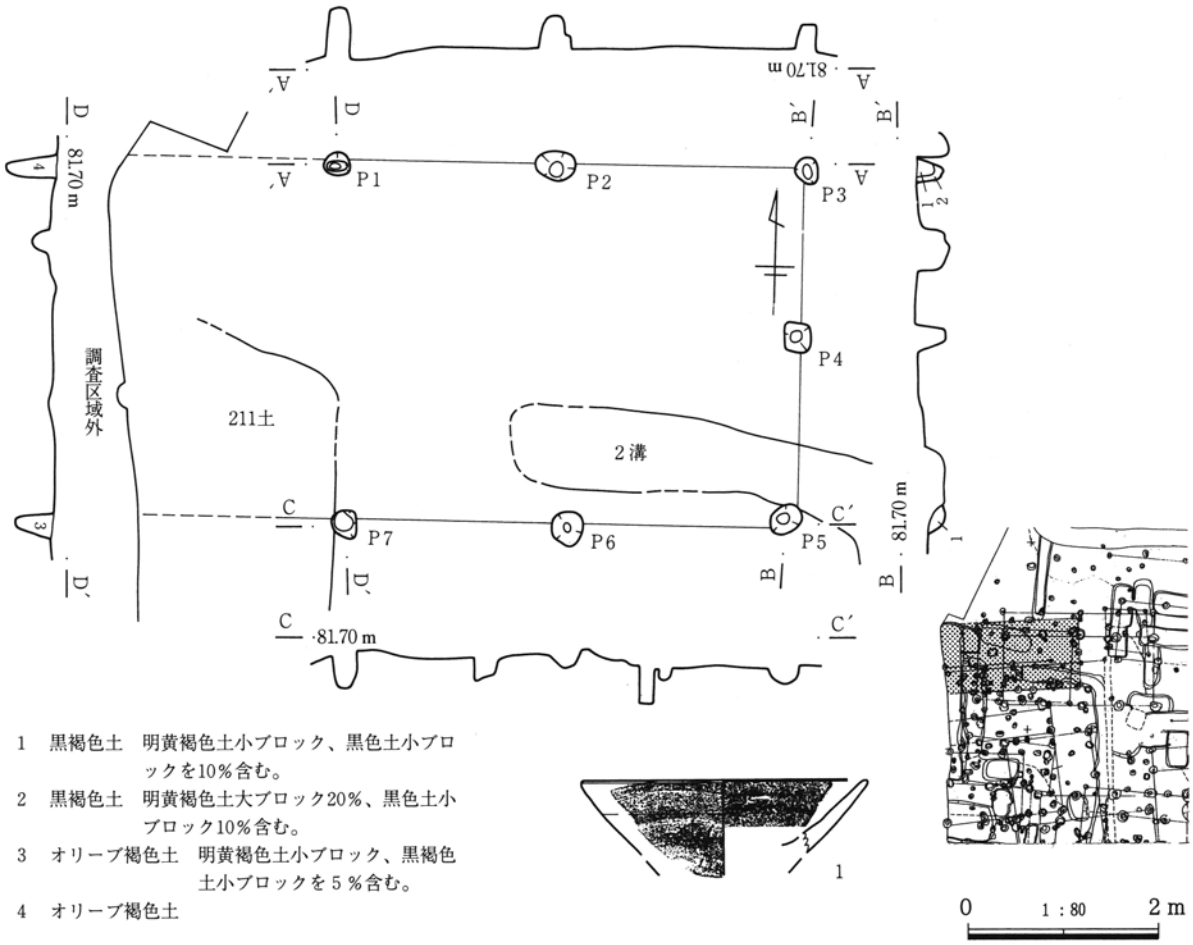
位置　南堀内部分の南西端で、74E－8・9グリッドに位置する。4号掘立柱建物跡と隣接するが柱軸が合致せず関連づけはできない。

重複　P2は6号柱穴列のP5より古いが、6号柱穴列は第2類に属しており注意を要する。

主軸方位　N－1°－E

形態　全長4.44mで南北に走向する。

柱間は2.22mで均一である。柱痕跡は柱穴全てに見られるが計測値はない。柱穴は隅丸方形で、長径48～51cm、短径39～41cm、深さ28～30cmで非常に均一であり、隣接する4号掘立柱建物跡の柱穴に類似する。柱穴の規模から見て掘立柱建物跡の一部とするのが妥当と考える。　**出土遺物**　なし



第70図　1区29号掘立柱建物跡・出土遺物

１区25号柱穴列

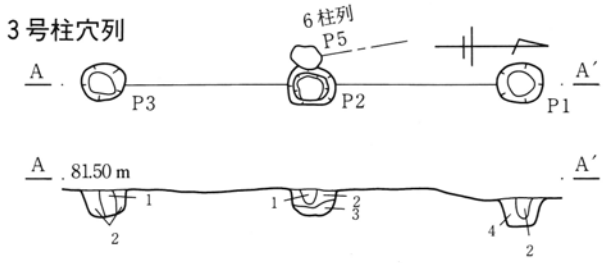
位置　南堀内部分の中央部で、74Ｆ－７～９グリッドに位置する。３号掘立柱建物跡の南面に存する。

重複　Ｐ６は10号住居跡の柱穴３よりも新しい。Ｐ11は３号溝よりも古い。

主軸方位　Ｎ－88°－Ｗ

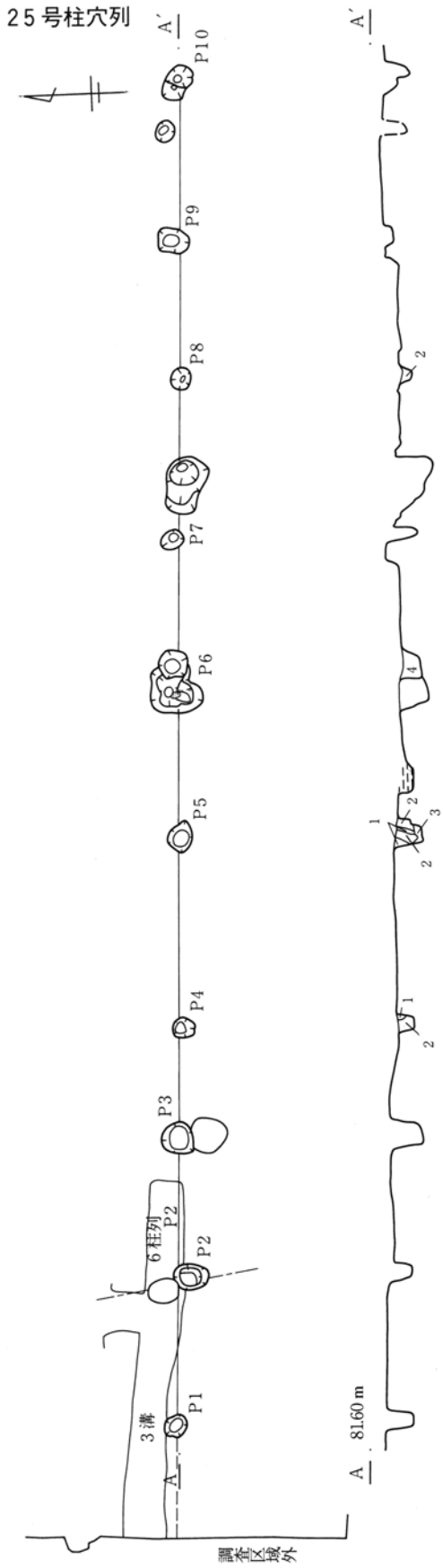
形態　全長15.79ｍで東西に走向する。柱間は1.30～2.21ｍで一定しないが、特にＰ４・Ｐ５の間隔が2.21ｍで際立って広い。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在しており、規模は大小２つに分かれ、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８が長径26～27㎝、短径21～24㎝、深さ16～37㎝で、残りが長径35～45㎝、短径27～38㎝、深さ12～40㎝である。

出土遺物　なし



３号柱穴列
1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
4　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。

25号柱穴列
1　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色土
4　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。



0　1：80　2 m

第71図　１区３・25号柱穴列

エ．第４類

１区15号柱穴列（PL 20-4）

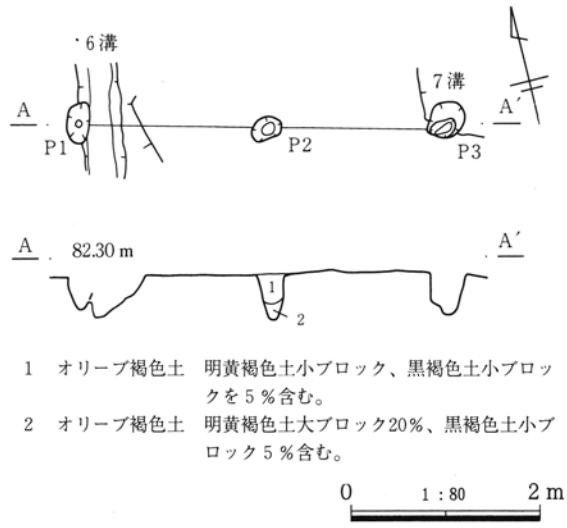
位置　北堀内部分の中央部で、83Ｄ－０グリッドに位置する。

重複　Ｐ１・Ｐ３は各々６・７号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位　Ｎ－75°－Ｗ

形態　全長3.88ｍで東西に走向する。柱間は1.86・2.02ｍでほぼ均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、規模はＰ２以外は重複して不明だが、Ｐ２より大きい。

出土遺物　なし



1　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。

第72図　１区15号柱穴列

オ．その他

１区19号掘立柱建物跡（PL 20-1）

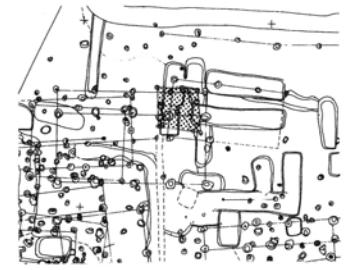
位置　南堀内部分の北端部中央で、74Ｇ－８グリッドに位置する。１号堀北辺から南へ３ｍ程をとる。

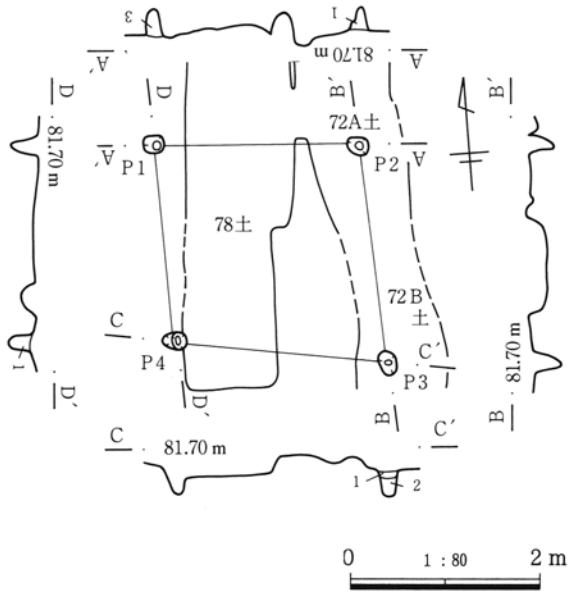
重複　Ｐ２・Ｐ３は各々72Ａ・72Ｂ号土坑と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。72Ａ号土坑は第２類、72Ｂ号土坑は第３類に属す。

主軸方位　Ｎ－82°～88°－Ｗ（南北棟と考えた場合）

形態　１×１間（南北2.10～2.29ｍ、東西2.15～2.21ｍ）のほぼ正方形で、柱間は７尺～８尺。棟方向は確定できない。各辺の柱軸は全て北西方向に振れており、平面形は菱形に歪む。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、長径21㎝、短径18㎝、深さ29㎝で非常に均一である。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし





1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％、白色軽石１％含む。
2　暗褐色土
3　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。

第73図　１区19号掘立柱建物跡

(2) 堀外部分

ア．第１類

１区18号掘立柱建物跡

位置　調査区の中央部東寄りで、74Ｈ・Ｉ－６グリッドに位置する。南堀内部分北辺から８ｍ弱をとる。

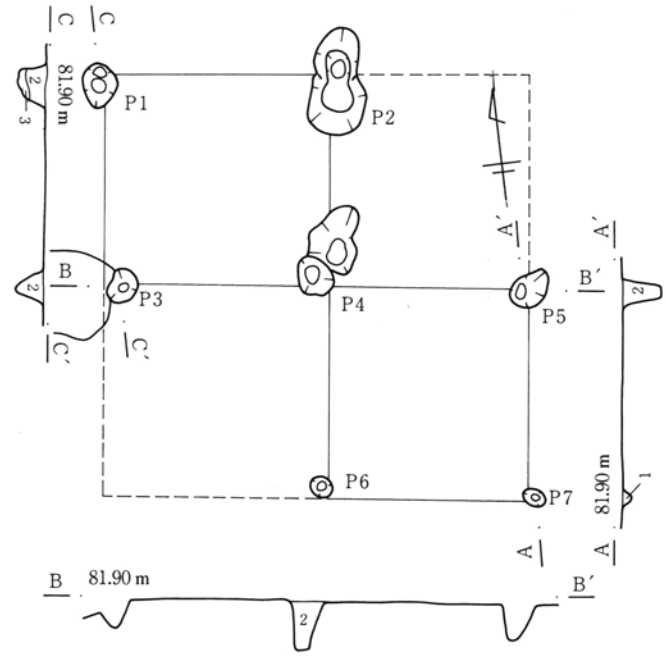
重複　Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５は３号住居跡と重複するが、埋土近似することからＰ２の確認が３号住居跡調査時となってしまい、掘立柱建物跡として認識したのは整理作業段階となってしまった。このため北東角柱穴の有無について確認作業がやや弱い。ただし、北西角柱穴は検出に努めたが確認できなかった。

主軸方位　Ｎ－84°－Ｗ

形態　２×２間（南北4.4ｍ、東西4.22ｍ）で１辺15尺の正方形。総柱建物跡か。棟方向は確定できない。柱間は6.5～8.5尺で一定ではない。柱穴は柱軸から外れるものが多い。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は大小２つに分かれ、Ｐ６・Ｐ７は長径25㎝、短径23・18㎝、深さ９㎝で、残りは長径37～47㎝、短径32～46㎝、深さ30～50㎝である。

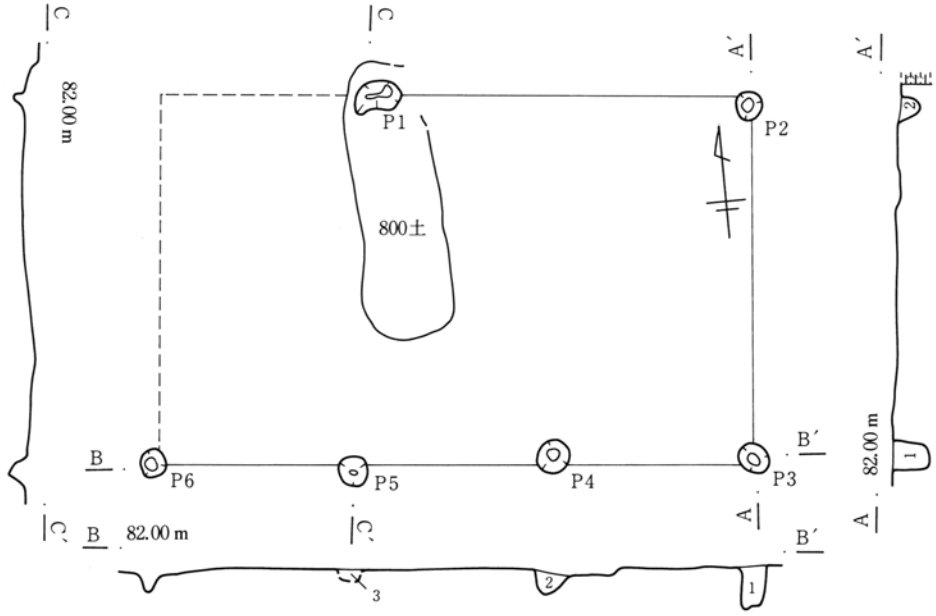
内部施設　なし　**出土遺物**　なし

18号掘立柱建物跡



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色土

25号掘立柱建物跡



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　オリーブ褐色土

0　1：80　2ｍ

第74図　１区18・25号掘立柱建物跡

1区25号掘立柱建物跡

位置　調査区の中央部で、74Ｉ・Ｊ－６・７グリッドに位置する。８号井戸跡に接する。

重複　Ｐ１は800号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかったが、この土坑も第１類に属する。

主軸方位　Ｎ－86°－Ｗ

形態　１×３間（3.72×6.36ｍ・13尺×21尺）の東西棟。桁行の柱間は７尺である。北西角の柱穴は855号土坑と重複するため検出できなかったものと見られるが、この土坑は第１類に属する。また、Ｐ１・Ｐ２の間にも柱穴が存するものとして検出に努めたが確認できなかった。南辺のＰ４・Ｐ５は柱軸からやや外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形のＰ１を除き円形である。規模はやや大きいＰ１以外、長径29～36㎝、短径28～32㎝、深さ20～39㎝である。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし

1区27号掘立柱建物跡（PL 20-2）

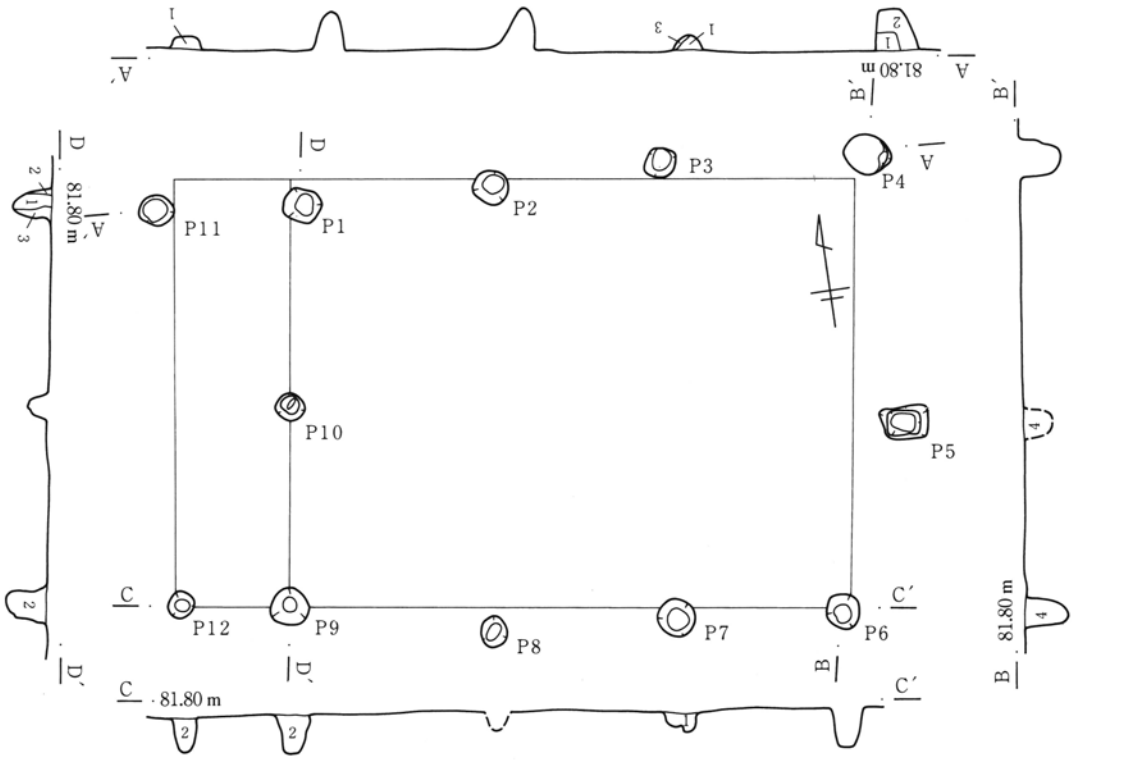
位置　南堀内部分の東面で、74Ｆ・Ｇ－５・６グリッドに位置する。１号堀東辺から５ｍ程をとる。

重複　なし

主軸方位　Ｎ－９°－Ｅ

形態　身舎は２×３間（4.22～4.84×5.88～5.97ｍ）の東西棟で、西側に幅1.13～1.57ｍの間隔をとって庇が付き、全体として4.15～4.84×6.98～7.54ｍ、15×（20＋４）尺である。桁行の柱間は６尺～７尺で一定しない。北辺は柱軸から北東－南西方向へ大きく振れる。東辺のＰ５は50㎝程南寄りで、柱軸から30㎝程東へ外れる。西辺のＰ10は中央に位置する。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模は大小２つに分かれ、Ｐ４・Ｐ５が長径50・51㎝、短径40・34㎝、深さ45・29㎝で、残りが長径29～42㎝、短径27～39㎝、深さ15～45㎝である。

内部施設　なし



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
4　黒色土

0　1：80　2ｍ

第75図　１区27号掘立柱建物跡

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ４・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ９に混入するのみであった。

１区10号柱穴列（PL 20-7）

位置　調査区中央部で、74Ｊ～73Ｂ－８グリッドに位置する。一部は１号堀の東に接して徐々に間隔を広げるが、最大でも60㎝程に過ぎない。

重複　なし

主軸方位　Ｎ－８°－Ｅ

形態　全長11.83ｍで南北に走向する。柱間は1.32～2.64ｍで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模はやや大きいＰ５を除き、長径27～35㎝、短径26～31㎝、深さ14～44㎝で、ほぼ均整がとれる。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ５に混入するのみであった。

１区14号柱穴列（PL 20-3）

位置　調査区南東部で、74Ｈ－５グリッドに位置する。１号堀北辺から東へ10ｍ程をとる。

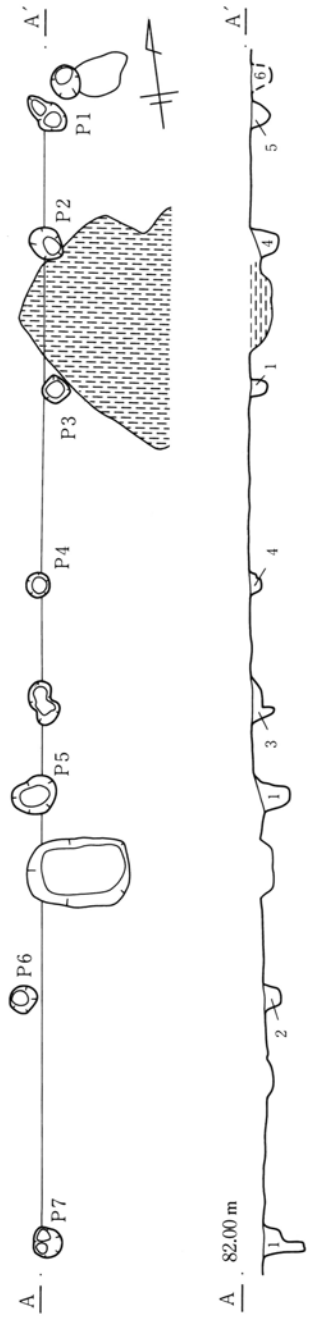
重複　Ｐ３・Ｐ５とも不整形な小穴と重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位　Ｎ－82°－Ｗ

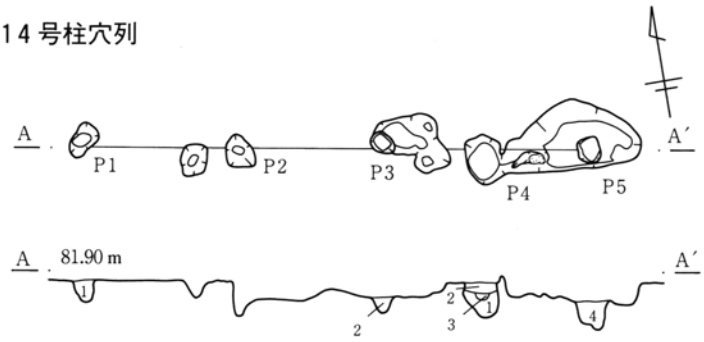
形態　全長5.38ｍで東西に走向する。柱間は1.10～1.66ｍで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形で、Ｐ４がやや大きい以外、径40㎝弱である。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ５に混入するのみであった。

10号柱穴列



14号柱穴列



1　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
3　暗褐色土
4　灰褐色粘質土　灰色土小ブロック20％含む。

0　1：80　2 m

第76図　１区10・14号柱穴列

イ．第2類

1区23号掘立柱建物跡（PL 20-5）

位置　調査区の中央部で、74Ｉ・Ｊ－７・８グリッドに位置する。１号堀から東へ５ｍ程をとる。

重複　Ｐ３は904号土坑と重複するが新旧関係は確認できなかった。この土坑は第３類に属する。

主軸方位　Ｎ－80°－Ｅ

形態　１×２間（3.06×3.97ｍ・11尺×13.5尺）の東西棟。桁行の柱間は6.5尺である。東南角柱穴は904号土坑と重複したものと見られ検出できなかった。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、内部に更に小穴を有する２段構造のものも見られる。規模はやや数値にばらつきがあるが、長径45～84㎝、短径40～63㎝、深さ24～38㎝である。

内部施設　中央部に９号井戸跡（134頁参照）が存することから、本遺構は井戸の上屋と見られる。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ１に混入するのみであった。

1区12号柱穴列（PL 20-6）

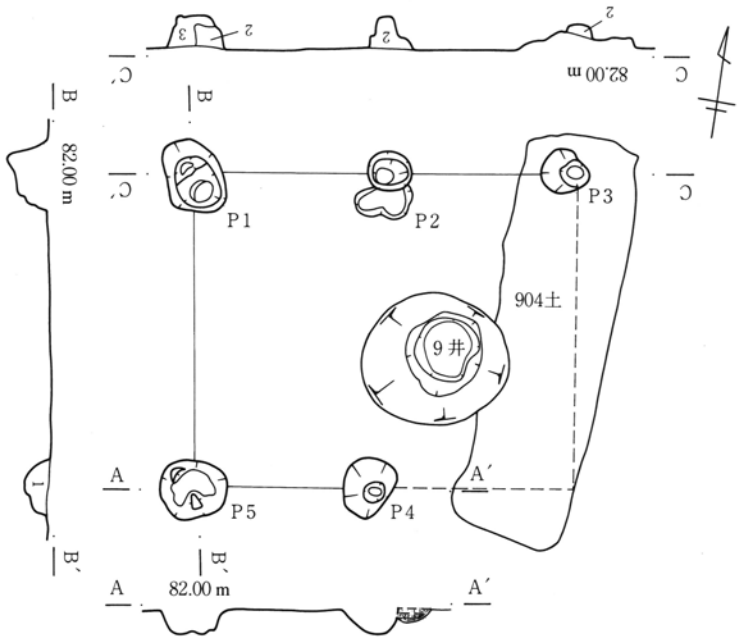
位置　南堀内部分の東面で、74Ｆ・Ｇ－６グリッドに位置する。１号堀から1.5ｍをとる。

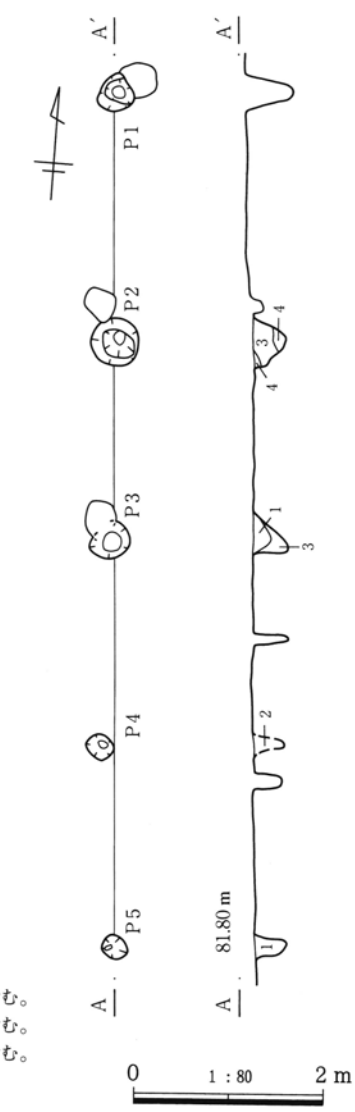
重複　なし

主軸方位　Ｎ－５°－Ｗ

形態　全長9.00ｍで南北に走向する。柱間はＰ１・Ｐ２が2.58ｍとやや長いが、他は2.13～2.15ｍで均一である。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は大小２つに分かれ、Ｐ４・Ｐ５が長径30・28㎝、短径26・23㎝、深さ34㎝で、残りが長径39～50㎝、短径35～50㎝、深さ35～52㎝である。

出土遺物　なし





23号掘立柱建物跡
1　黒色土
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。

12号柱穴列
1　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
4　暗褐色土

第77図　１区23号掘立柱建物跡・12号柱穴列

１区24号柱穴列（PL 21-2）

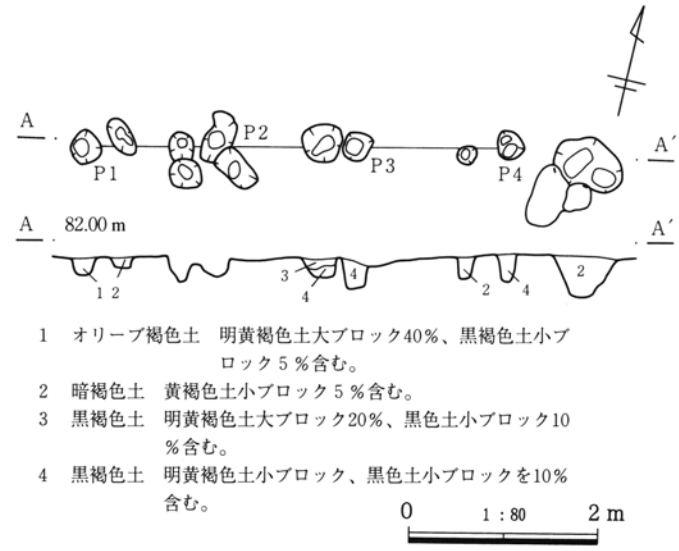
位置　調査区中央部で、74Ｊ－８グリッドに位置する。Ｐ１は１号堀から東へ1.5ｍ程をとる。

重複　重複はしないが同程度の柱穴が密集しており、数度の据え直しも想定される。

主軸方位　Ｎ－80°－Ｅ

形態　全長4.54ｍで東西に走向する。柱間は1.43～1.64ｍでほぼ均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で上面がやや乱れるＰ２を除けば、規模は長径31～36㎝、短径27～33㎝、深さ19～33㎝でほぼ均一である。

出土遺物　なし

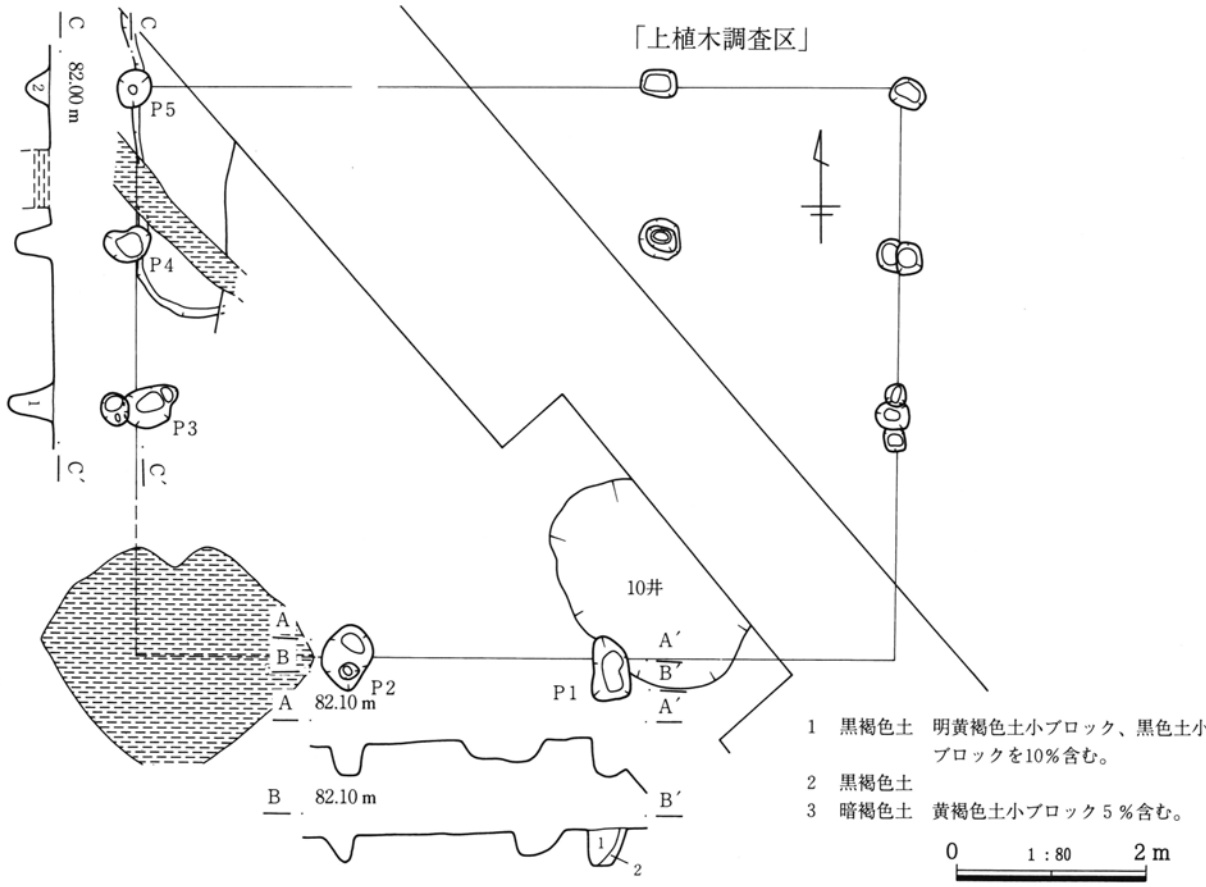


第78図　１区24号柱穴列

ウ．第３類

１区21号掘立柱建物跡（PL 20-7・8、21-1・2）

本遺構東半分の柱穴は、整理作業段階で「上植木調査区」の原図を使用して精査した結果抽出できたものである。したがって相応の誤差を含むものと判断し、１棟の掘立柱建物跡として扱うけれども、各柱穴の間隔など数値に係わるものについては検討から除外した。



第79図　１区21号掘立柱建物跡

位置　調査区中央部で、74A・B－7・8グリッドに位置する。東半分は「上植木調査区」に存する。1号堀から東へ1.5m程をとる。

重複　P1は10号井戸跡と重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位　N－89°－W

形態　3×3間（20尺×27尺）の東西棟。総柱建物跡か。本遺跡検出分は南北6m、東西7m程である。柱間は桁行で9尺、梁間で5.5尺か。南辺のP1・P2とも柱穴が2基重複しており、新旧関係は不明だが1度据え直されているものと考える。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模はややP5が小さい以外、径50～60cm程である。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし

1区22号掘立柱建物跡（PL 20-7）

位置　調査区中央部で、74J・73A－8グリッドに位置する。1号堀から東へ1.5mをとる。

重複　西辺の南側は1号鍛冶遺構と重複しており、埋土が近似していた結果検出できなかった可能性もある。

主軸方位　N－3°－E

形態　1×3間（2.32～2.60×6.98～7.54m・8尺×24尺）の南北棟。桁行の柱間は7尺～9尺で一定しない。柱穴は柱軸にほぼ載るが、南辺のP5は40cm程南西方向へ外れる。柱痕跡は見られない。柱穴はP5・P6を除き隅丸方形で、長径34～43cm、短径31～38cmで、深さは9～61cmと数値にばらつきがある。

内部施設　なし

出土遺物　平安時代以前の遺物がP4に混入するのみであった。

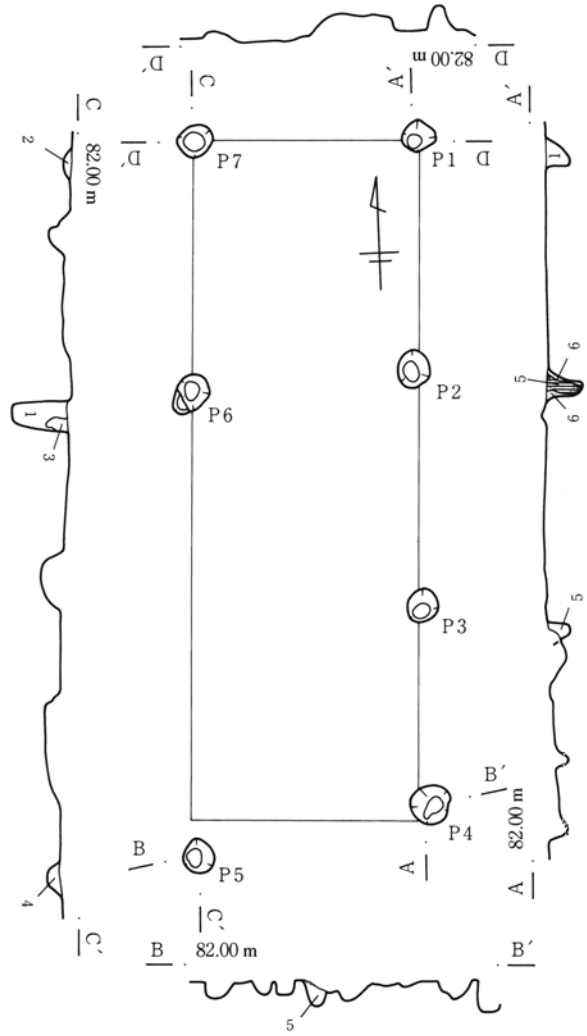
1区24号掘立柱建物跡

位置　調査区の中央部で、74I・J－7グリッドに位置する。

重複　P1・P6・P8は各々910・855・904号土坑と重複するが新旧関係は確認できなかった。また910号土坑の主軸方位は第2類に、残りは第3類に属する。

主軸方位　N－89°－E

形態　身舎は2×3間（5.45×6.80m）で、南側に1.24mの間隔をとって庇が付き、更に東側にも0.93mの間隔をとって張り出しが付き、全体として6.66×7.58m、（18＋4）尺×（22＋4）尺である。桁行の柱間は6.5尺～7.5尺で一定しない。P3から東へ1.2m程で調査区域外となることから、更に東側に柱穴列が延びて、東側も庇である可能性がある。



1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　オリーブ褐色土
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
4　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒褐色土小ブロック5％含む。
5　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
6　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。

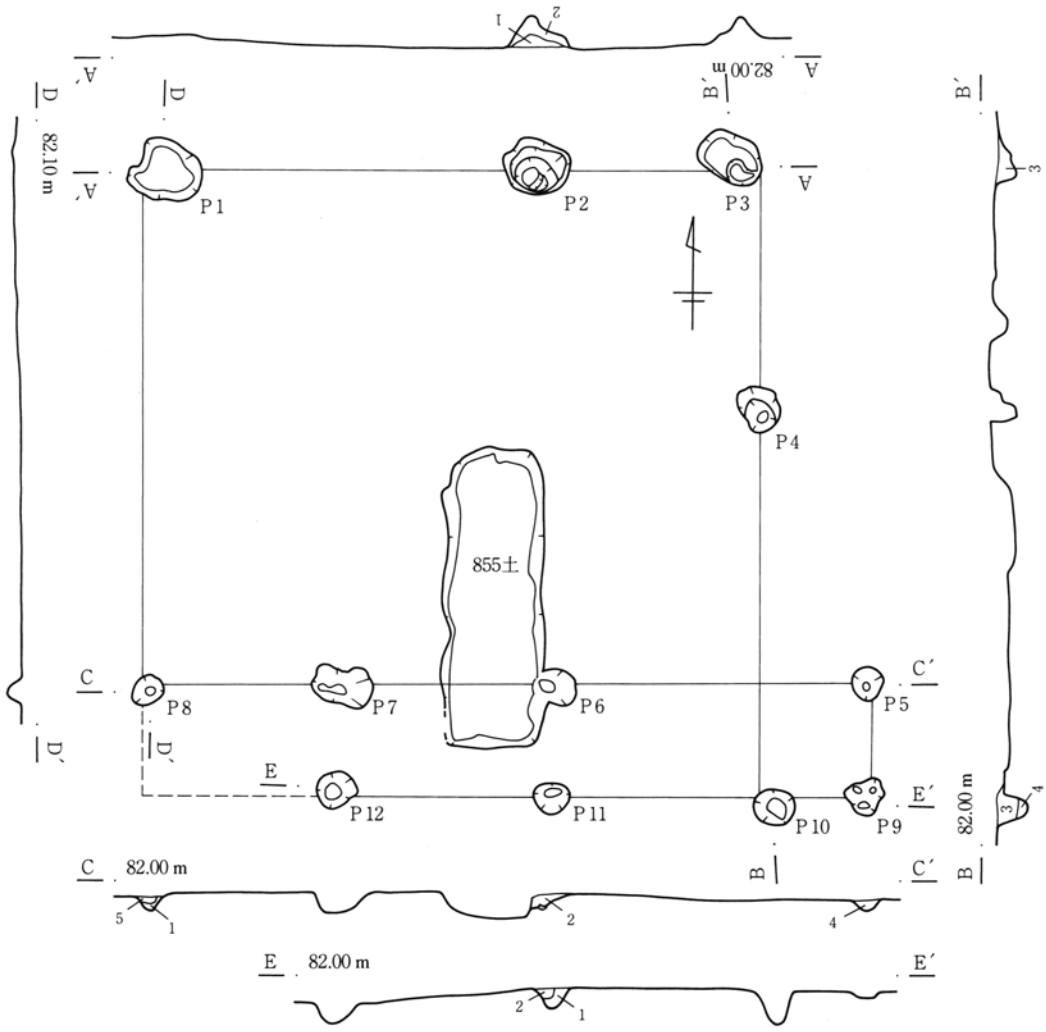
0　1：80　2m

第80図　1区22号掘立柱建物跡

北辺のＰ１・Ｐ２の間には柱穴は検出できなかったが、東辺のＰ４・Ｐ10の間と南辺の西角柱穴、西辺のＰ８・Ｐ１の間では、各々土坑と重複した結果柱穴が未検出となってしまった可能性がある。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と不整方形と円形が混在し、内部に更に小穴を有する２段構造のものも見られる。規模は大小２つに分かれ、Ｐ１～Ｐ３・Ｐ７が長径64～74㎝、短径43～65㎝、深さ４～33㎝で、残りが長径35～50㎝、短径28～40㎝、深さ６～32㎝であり、庇部分の柱穴が身舎部分の柱穴よりも小さいことが分かる。

内部施設　中央部に主軸方位と直角方向に主軸を持つ855号土坑があり、Ｐ６と重複するが位置から見て関連が想定される。規模は長辺318㎝、短辺105㎝、深さ33㎝で、主軸方位Ｎ－０°。形状は隅丸細長方形でやや深く、底面は平坦。埋土の底面に２㎝程暗褐色土が堆積し、一定期間開口していたものと思われる。遺物は青磁碗（１）のみが出土している。

出土遺物　なし



1　黒褐色土
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
4　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。

0　1：80　2 m

第81図　１区24号掘立柱建物跡

１区26号掘立柱建物跡（PL 21-3）

位置　調査区の中央部で、74Ｉ－６・７グリッドに位置する。

重複　Ｐ２・Ｐ３は不整円形の浅い落ち込みと重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位　Ｎ－２°－Ｅ

形態　１×３間（2.61～2.68×6.01～6.30ｍ・９尺×21.5尺）の南北棟。桁行の柱間は５尺～7.5尺で一定しない。東辺のＰ１は50㎝程南寄りである。西辺のＰ７は柱軸から東へやや外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模はＰ１が際だって大きい以外、長径29～42㎝、短径23～31㎝、深さ12～43㎝である。

内部施設　なし

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ４に混入するのみであった。

１区11号柱穴列（PL 21-4）

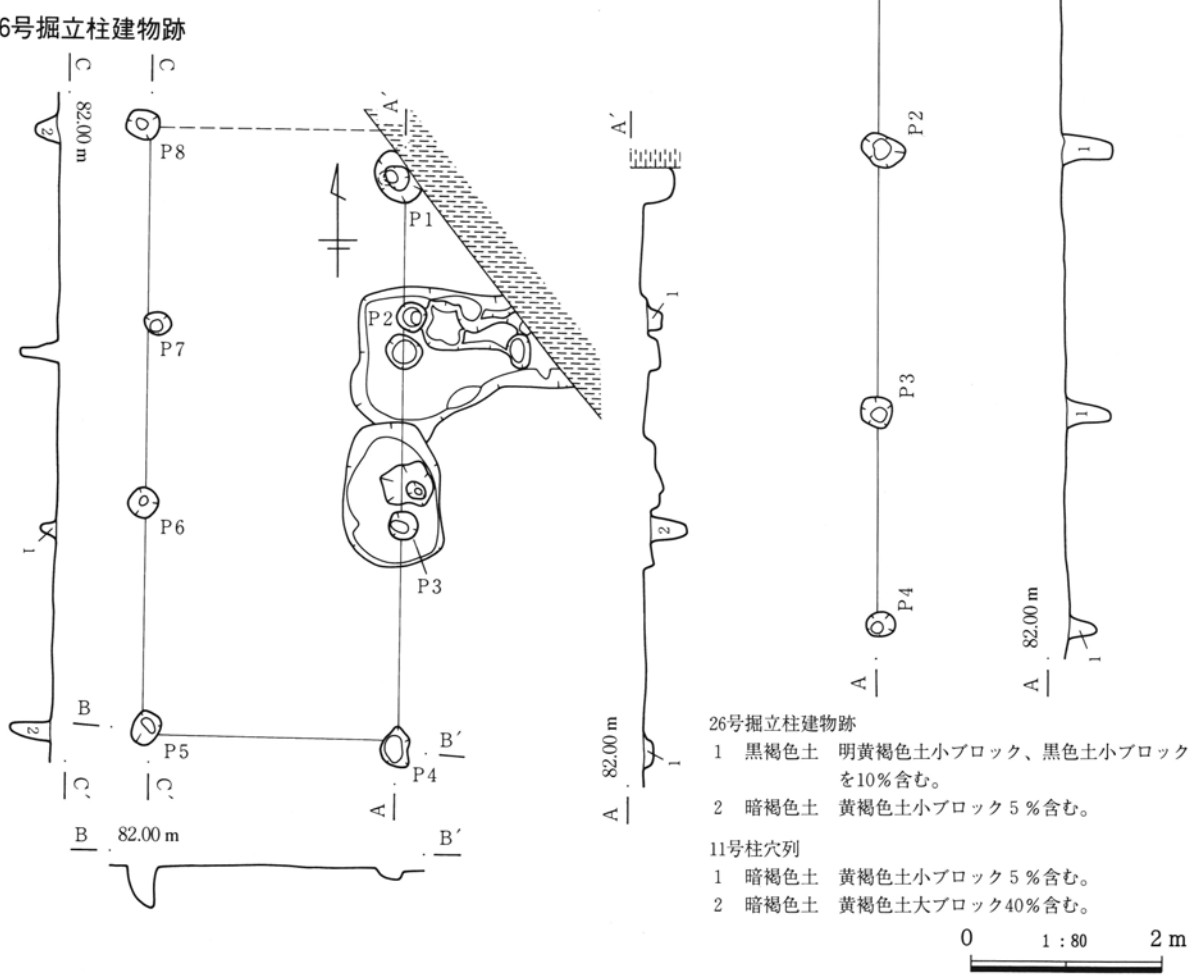
位置　調査区中央部西端で、74Ｈ・Ｉ－８グリッドに位置する。１号堀から東へ３～3.5ｍをとる。

重複　なし

主軸方位　Ｎ－２°－Ｗ

形態　全長7.42ｍで南北に走向する。柱間は2.25～2.80ｍで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は長径30～45㎝、短径26～39㎝、深さ30～53㎝とややばらつく。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ３に混入するのみであった。



第82図　１区26号掘立柱建物跡・11号柱穴列

２．方形竪穴建物跡

１区１号方形竪穴建物跡（PL 21-5～8）

位置　調査区中央部西端で、74Ｈ－８グリッドに位置する。南堀内部分北西角から北東へ５ｍをとる。

重複　なし　**形態**　ほぼ正方形

主軸方位　Ｎ－１°－Ｅ（東辺基準）

規模　南北2.00ｍ、東西1.91ｍ

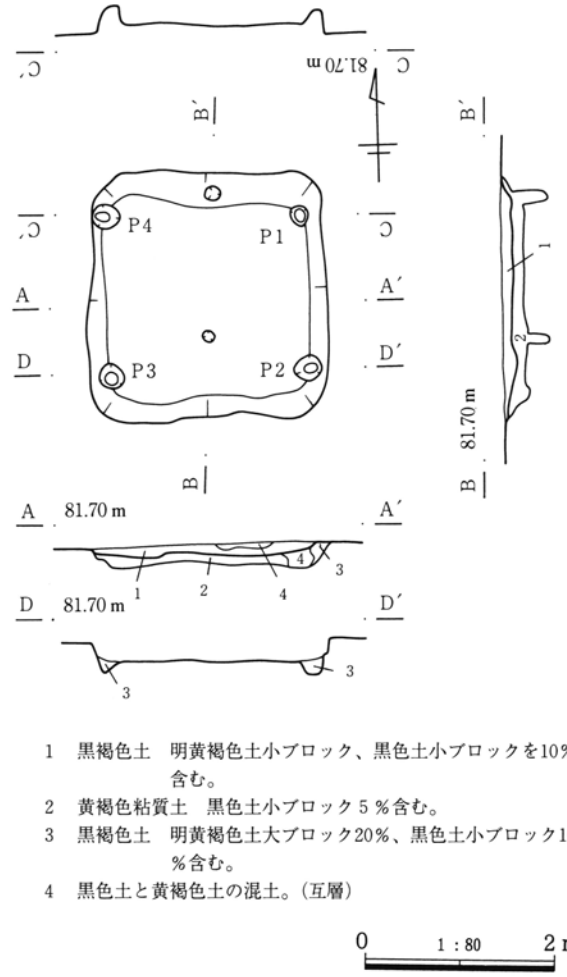
壁　壁高は北辺17.5～18㎝、東辺19.5㎝、南辺15.5～18㎝、西辺14～14.5㎝で、平均17.1㎝である。

内部施設　４隅に柱穴を持つ。柱穴１の規模は径16×13㎝、深さ11㎝、柱穴２の規模は径21×18㎝、深さ11㎝、柱穴３の規模は径19×18㎝、深さ９㎝、柱穴４の規模は径21×20㎝、深さ14㎝で、全て円形を呈する。

床　土層断面観察の結果、床面を想定できたが面的な調査はなく検証できていない。底面から20㎝程黄褐色粘質土を盛るが、上面は特に硬化していなかった。

埋没状況　残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

出土遺物　遺物は出土しなかった。



1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黄褐色粘質土　黒色土小ブロック５％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
4　黒色土と黄褐色土の混土。（互層）

第83図　１区１号方形竪穴建物跡

３．土坑・柱穴

(1) 堀内部分

１区44・129・211号土坑（PL 44）

形状から長方形の44号土坑と細長方形の129・211号土坑に類別され、後者は明確な重複関係にはないが、同様な機能を持って繰り返し付設されたと考える。

44号土坑　半分以上が129号土坑と重複して不明となってしまったが、西側は更に調査区域外に延び、長方形を呈すると見られる。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(137)㎝、短辺(100)㎝、深さ19㎝である。主軸方位Ｎ－89°－Ｅ。129号土坑よりも新しい。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

129号土坑　西側半分が調査区域外となるが、細長方形を呈すると見られる。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、南北に細長いが水平である。規模は長辺566㎝、短辺(79)㎝、深さ25㎝である。主軸方位Ｎ－０°。17号掘立柱建物跡Ｐ１・22号柱穴列Ｐ１・44号土坑よりも古い。８号柱穴列Ｐ１・211号土坑とは新旧関係不明。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

211号土坑　南端部へ向かって外形が不分明となるが、細長方形を呈する。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、南北に細長いが水平である。規模は長辺(340)㎝、短辺(85)㎝、深さ14㎝である。主軸

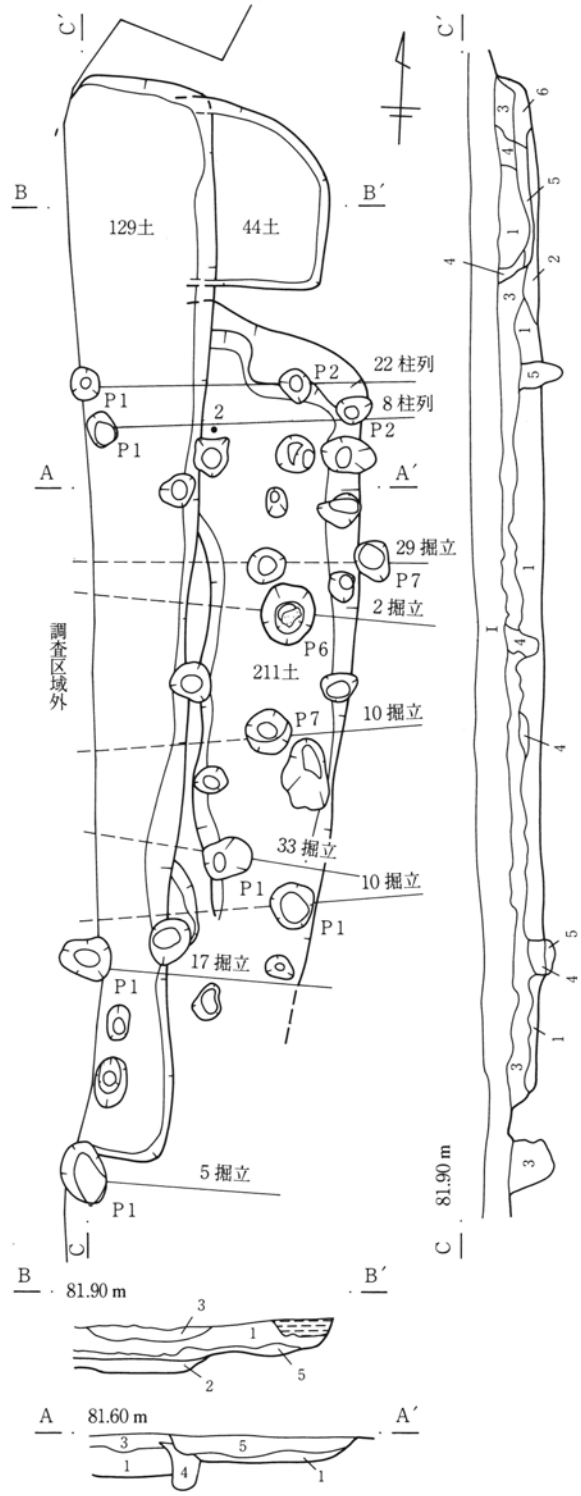
方位Ｎ－０°。２号掘立柱建物跡Ｐ６、10号掘立柱建物跡Ｐ１・Ｐ７、33号掘立柱建物跡Ｐ１・８号柱穴列Ｐ２、22号柱穴列Ｐ２、129号土坑と重複するが新旧関係不明。遺物は在地土器カワラケ（１）、砥石（２）のほか、在地土器カワラケ細片等が出土している。

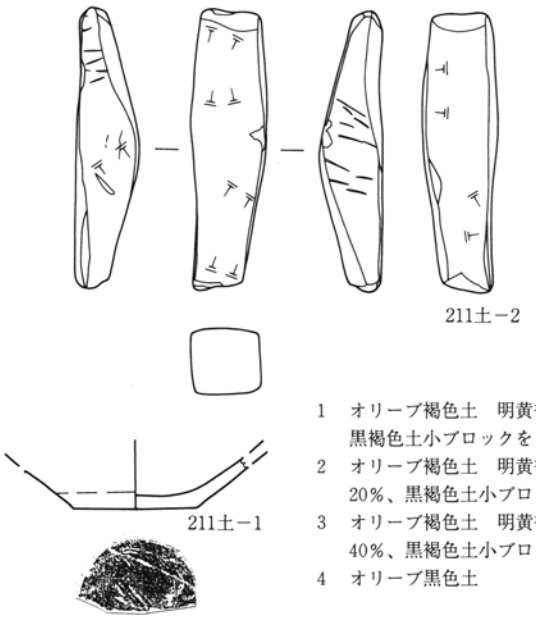
１区47号土坑

各辺ともに外側に湾曲して丸みを持ったやや大きい長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺（255）㎝、短辺203㎝、深さ15㎝である。主軸方位はＮ－84°－Ｗ。明確なピット・硬化面は見られない。埋土は均一であり人為埋填か。10号掘立柱建物跡Ｐ６より古く、２号井戸跡より新しい。17号掘立柱建物跡Ｐ６とは新旧関係不明。遺物は時期不明施釉陶器碗片のみが出土している。

１区55・64・65・66・67・68・70・71号土坑（PL 22-1・2）

形状から細長方形の65・68号土坑、隅丸長方形及び不整円形の64・70・71号土坑、やや大きい楕円形の55号土坑、隅丸長方形で深い66号土坑に類別できる（67号土坑は不明）。55・66号土坑を除けば平面形・深さともに大差ないことから、同じような機能を持って繰り返し付設されたものと考える。埋土は全て人為埋填である点も注意を要する。





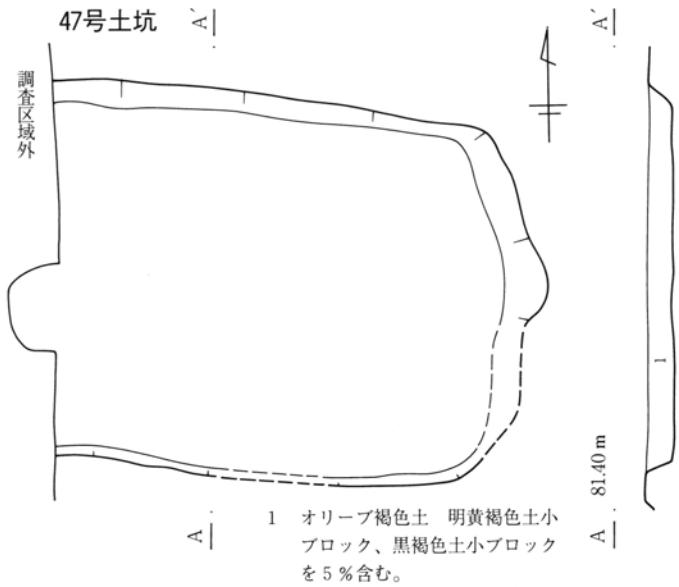
1　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。
3　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒褐色土小ブロック５％含む。
4　オリーブ黒色土
5　オリーブ黒色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
6　オリーブ黒色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。

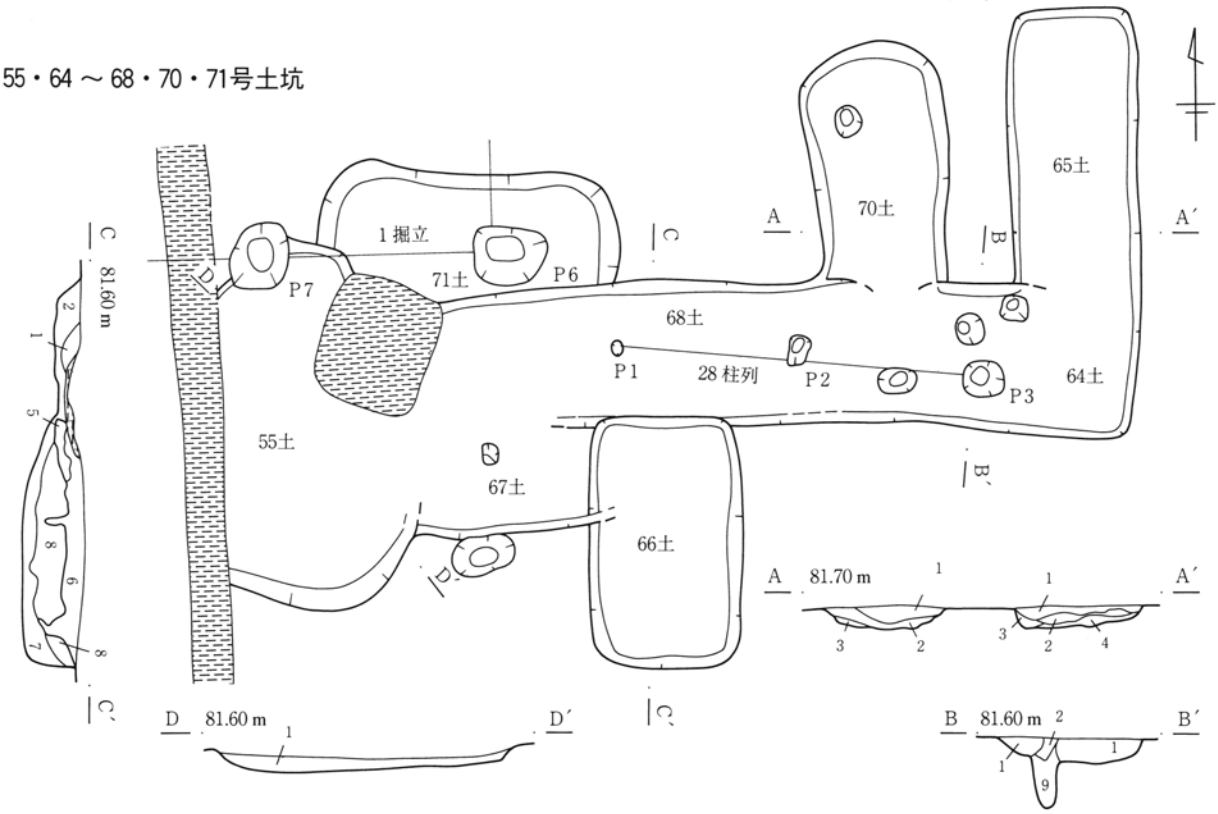
0　1：60　2m

第84図　１区44・129・211号土坑・出土遺物

55号土坑　67・68・71号土坑との重複や攪乱によって不明だが楕円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径276×(159)㎝、深さ12㎝である。主軸方位Ｎ－０°。１号掘立柱建物跡Ｐ７・67・68号土坑と重複するが新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器鍋口縁部片のほか、近世？鉄釉陶器片が出土している。

64号土坑　28号柱穴列Ｐ３・65・68号土坑と重複して不明となってしまったが、確認段階では不整円形を呈していた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径(200)×117㎝、深さ18㎝である。65・68・70号土坑よりも新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。





1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％、白色軽石１％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％、白色軽石１％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
4　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％、黒褐色土小ブロック５％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
6　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
7　オリーブ褐色土
8　オリーブ黒色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
9　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒褐色土小ブロック５％含む。
10　暗褐色土

0　1：60　2m

第85図　１区47・55・64～68・70・71号土坑

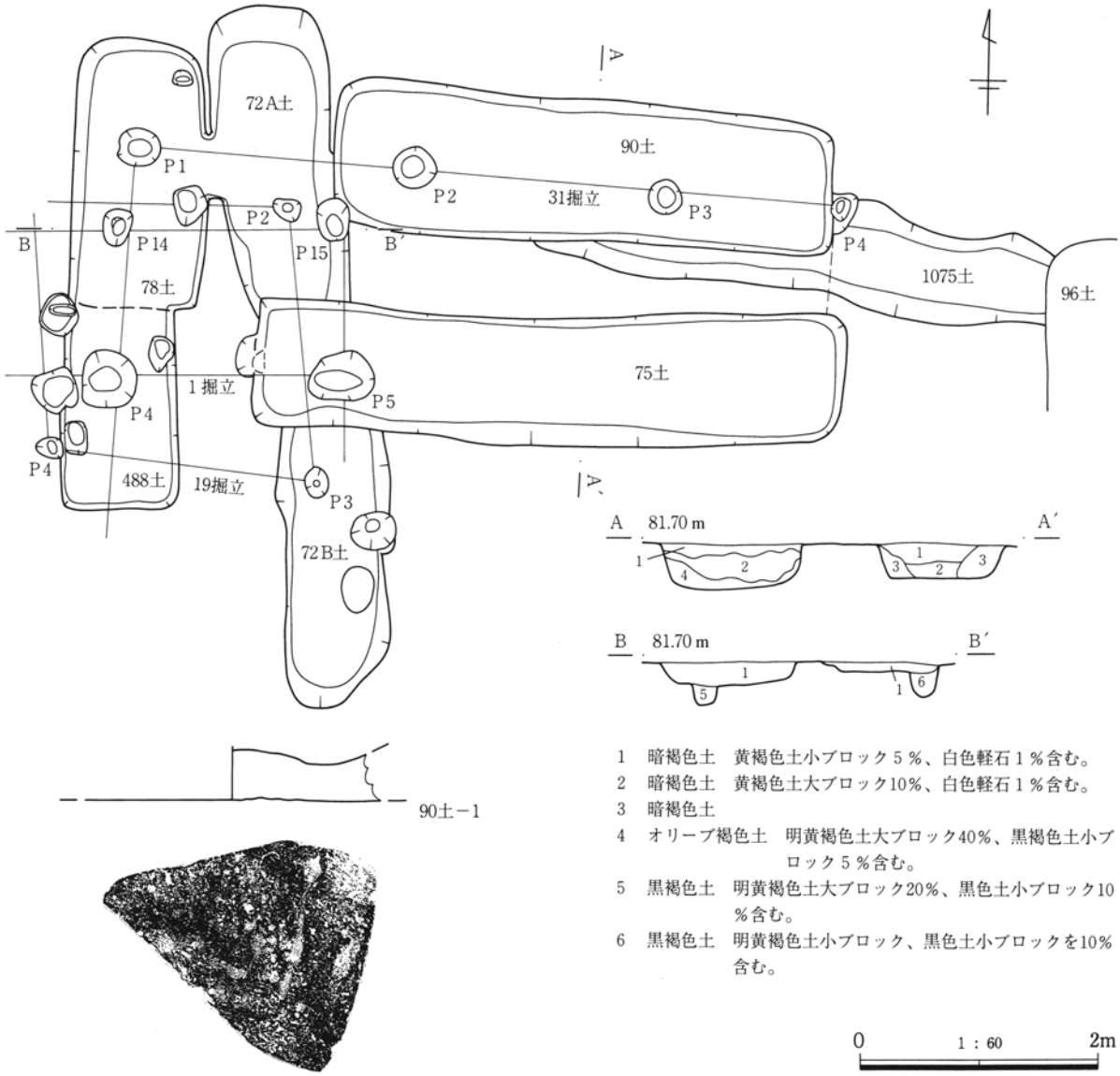
65号土坑　細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(225)㎝、短辺102㎝、深さ18㎝である。主軸方位N－0°。64号土坑より古い。埋土中に灰色土ブロックを多く含んでおり人為埋填か。遺物は近世？長石釉陶器片のみが出土している。

66号土坑　隅丸長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北に向かって徐々に立ち上がる。規模は長辺198㎝、短辺120㎝、深さ48㎝である。主軸方位N－0°。埋土中に明黄褐色土ブロックを多く含んでおり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

67号土坑　66・68号土坑と重複するため平面形・壁ともに不明。底面はほぼ平坦。規模は径(129)×(75)㎝、深さ10㎝である。土層断面観察の結果、66号土坑よりも新しいことが判明した。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

68号土坑　55・66・67号土坑との重複で不明だが細長方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺(360)㎝、短辺105㎝、深さ18㎝である。主軸方位N－90°。28号柱穴列と新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は平安時代以前の遺物がやや多く出土するが混入と見られる。

70号土坑　64・68号土坑との重複で不明だが隅丸長方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5％、白色軽石1％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％、白色軽石1％含む。
3　暗褐色土
4　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒褐色土小ブロック5％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
6　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

第86図　1区72A・72B・75・78・90・488・1075号土坑・出土遺物

規模は長辺(186)㎝、短辺105㎝、深さ18㎝である。主軸方位Ｎ－０°。64号土坑よりも古い。埋土中に灰色土ブロックを多く含んでおり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

71号土坑　55・68号土坑との重複や攪乱によって南半分が不明だが隅丸長方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺237㎝、短辺(90)㎝、深さ12㎝である。主軸方位Ｎ－０°。１号掘立柱建物跡Ｐ６、68号土坑と重複するが新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

１区72Ａ・72Ｂ・75・78・90・488・1075号土坑
(PL 22-2)

形状から細長方形の72Ｂ・75・90・1075号土坑、隅丸長方形及び長方形の72Ａ・78・488号土坑に類別できる。後者は平面形・深さともに大差ないことから、同じような機能を持って繰り返し付設されたものと考える。埋土は全て人為埋填である点も注意を要する。

72Ａ号土坑　隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、北へ向かって徐々に立ち上がる。規模は長辺(246)㎝、短辺102㎝、深さ９㎝である。主軸方位Ｎ－５°－Ｗ。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器片のほか、近世陶器片が出土している。

72Ｂ号土坑　細長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(238)㎝、短辺98㎝、深さ６㎝である。主軸方位Ｎ－１°－Ｗ。埋土は均一であり人為埋填か。出土遺物は72Ａ号土坑と不分明に混在。

75号土坑　細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺504㎝、短辺111㎝、深さ30㎝である。主軸方位Ｎ－88°－Ｗ。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は平安時代以前の遺物がやや多く出土するが混入と見られる。

78号土坑　隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、やや丸みを持つ。規模は長辺(225)㎝、短辺111㎝、深さ21㎝である。主軸方位Ｎ－０°。１号掘立柱建物跡Ｐ14より新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

90号土坑　細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺426㎝、短辺126㎝、深さ36㎝である。主軸方位Ｎ－84°－Ｗ。埋土中に黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。遺物は在地土器鉢(１)のほか在地土器片が出土している。

488号土坑　長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(174)㎝、短辺99㎝、深さ19㎝である。主軸方位Ｎ－０°。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1075号土坑　細長方形で、外形は波打つ。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は長辺(440)㎝、短辺88㎝、深さ７㎝である。主軸方位Ｎ－78°－Ｗ。90・96号土坑より古い。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

１区94号土坑

長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺125㎝、短辺78㎝、深さ22㎝である。主軸方位Ｎ－１°－Ｗ。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

１区96号土坑

細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、若干北へ向かって立ち上がる。規模は長辺287㎝、短辺120㎝、深さ32㎝である。主軸方位Ｎ－４°－Ｗ。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

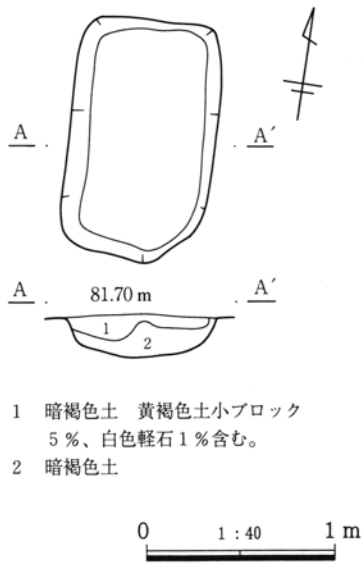
１区170号土坑

細長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(429)㎝、短辺69㎝、深さ９㎝である。主軸方位Ｎ－３°－Ｅ。南側に2.3ｍの間隔をとって２号溝があり、３号溝・221号土坑とともに１つの区画を囲い込んでいる可能性がある。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

１区193号土坑

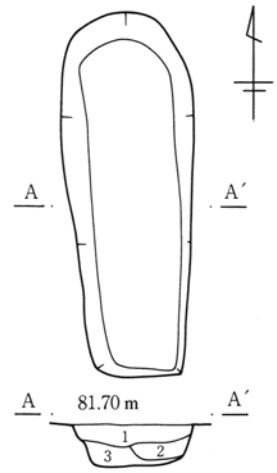
楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹

94号土坑



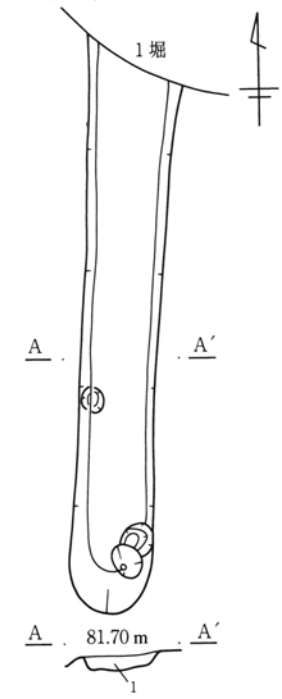
1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％、白色軽石１％含む。
2　暗褐色土

96号土坑



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％、白色軽石１％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％、白色軽石１％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％、黒褐色土小ブロック５％含む。

170号土坑

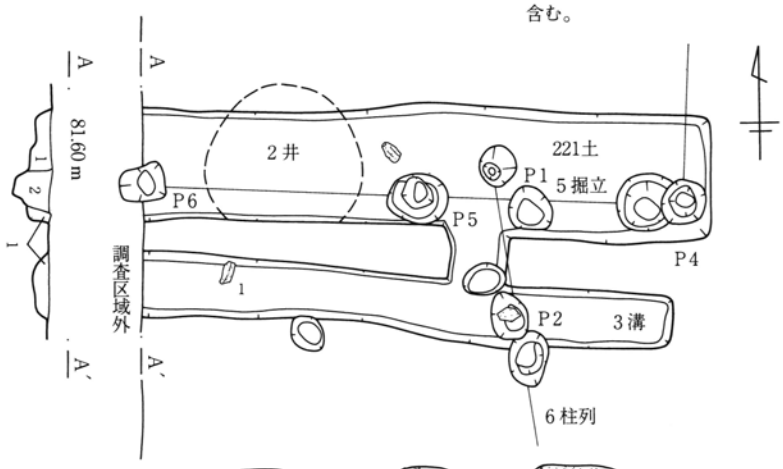


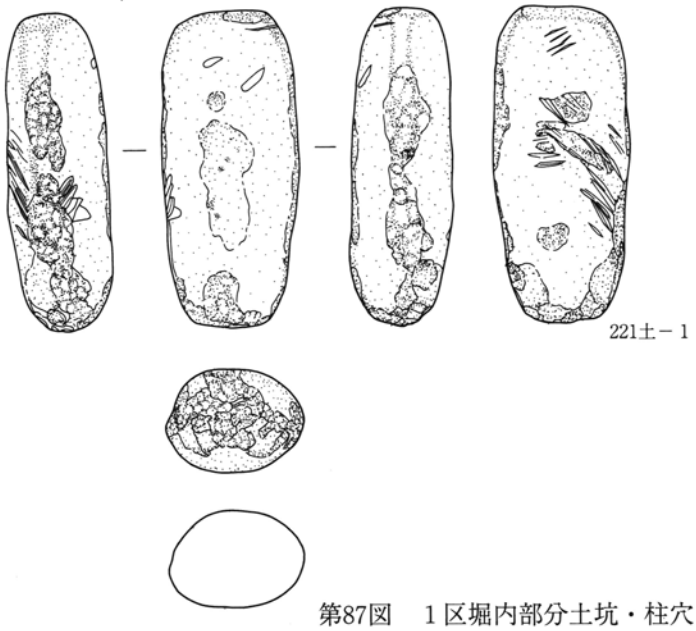
170号土坑
1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％、白色軽石１％含む。

221号土坑（３号溝を含む）
1　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
2　オリーブ黒色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

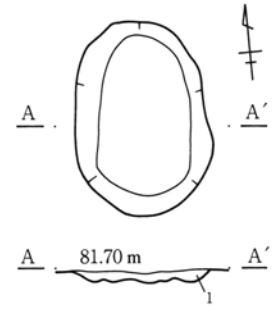
0　1：60　2m

221号土坑・３号溝





193号土坑



1　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。

0　1：40　1 m

第87図　１区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物（１）

する。規模は径101×70㎝、深さ６㎝である。主軸方位Ｎ－３°－Ｅ。埋土は残存する深さが浅く、自然埋没か人為埋填か不明。遺物は出土しなかった。

１区194号土坑

不整楕円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径100×80㎝、深さ11㎝である。主軸方位Ｎ－０°。埋土は残存する深さが浅く、自然埋没か人為埋填か不明。遺物は出土しなかった。

１区221号土坑（PL 44）

細長方形。壁は斜めに立ち上がる。東端は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(453)㎝、短辺99㎝、深さ６㎝である。主軸方位Ｎ－85°－Ｗ。東側に2.7ｍの間隔をとって２号溝があり、北側に１つの区画を囲い込んでいる可能性がある。６号柱穴列Ｐ１より古く、２号井戸跡より新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は敲石(１)のみが出土している。

１区234号土坑

やや北東方向に歪んだ長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺114㎝、短辺65㎝、深さ10㎝である。主軸方位Ｎ－６°－Ｅ。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

１区255・256・257・616・617号土坑・614号柱穴

形状から長方形・細長方形の255・256・616・617号土坑と、やや大きい方形の257号土坑に類別できる。前者は平面形・深さともに大差ないことから、同じような機能を持って繰り返し付設されたものと考える。新旧関係は古い順から616号土坑→255号土坑→256号土坑である。255号土坑は一定期間開口していた点で注目される。

255号土坑　長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺195㎝、短辺114㎝、深さ36㎝である。主軸方位Ｎ－90°。底面に１㎝程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。257号土坑よりも古い。埋土中に黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。遺物は古瀬戸大皿(１)のみが出土している。

256号土坑　255号土坑に壊されるが長方形か。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(84)㎝、短辺93㎝、深さ15㎝である。主軸方位Ｎ－90°。255号よりも古い。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は古瀬戸皿(１)のほか在地土器鍋片数片が出土している。

257号土坑　方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹するが平坦。規模は長辺300㎝、短辺225㎝、深さ15㎝である。主軸方位Ｎ－90°。616号土坑よりも古く、255号土坑よりも新しい。ピット・硬化面は見られない。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

616号土坑　西半分は調査年度が変わり、遺構確認面が深くなってしまったため不整方形となってしまったが、元来は東半分と合わせて細長方形を呈していたものと考える。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、やや丸みを持つ。規模は長辺240㎝、短辺88㎝、深さ36㎝である。主軸方位Ｎ－90°。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

617号土坑　西半分は調査年度が変わり、遺構確認面が深くなってしまったため未確認となってしまったが、元来は東半分と合わせて長方形を呈していたものと考える。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(114)㎝、短辺96㎝、深さ24㎝である。主軸方位Ｎ－90°。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

614号柱穴　規模は径(52)×(39)㎝、深さ13㎝である。柱痕跡は見られない。在地土器カワラケ(１)のみが出土している。

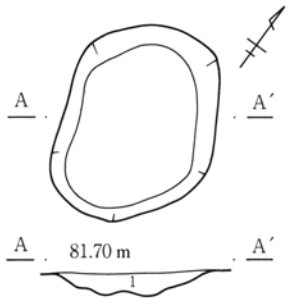
１区264号土坑

楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径99×62㎝、深さ21㎝である。主軸方位Ｎ－２°－Ｅ。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

１区282号土坑（PL 22-3）

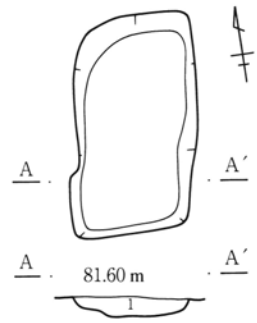
長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺280㎝、短辺140㎝、深さ46㎝である。主軸

194号土坑



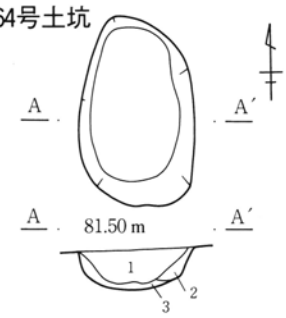
1　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。

234号土坑



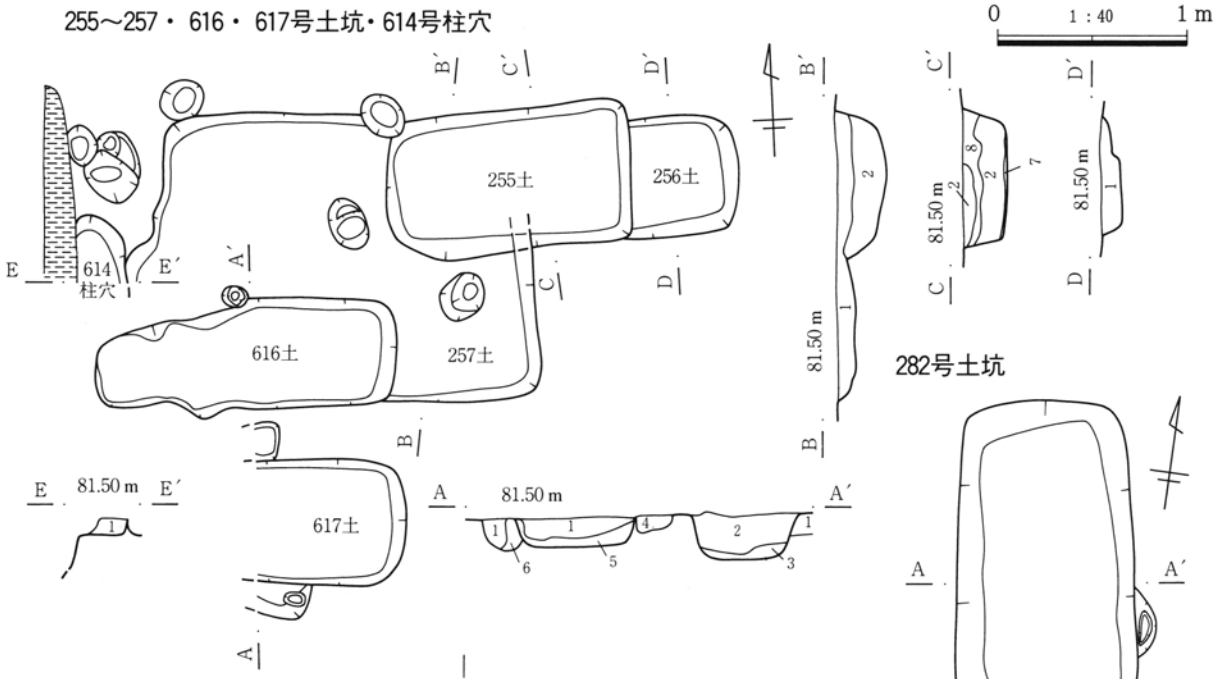
1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

264号土坑

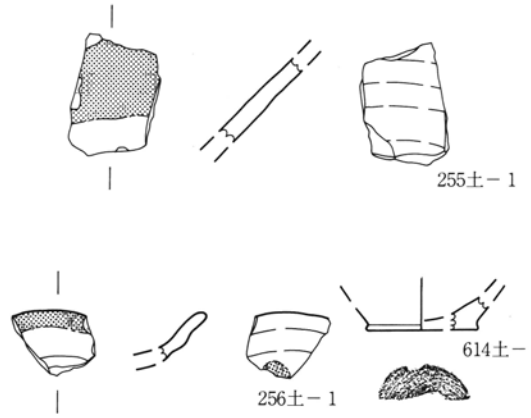


1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。

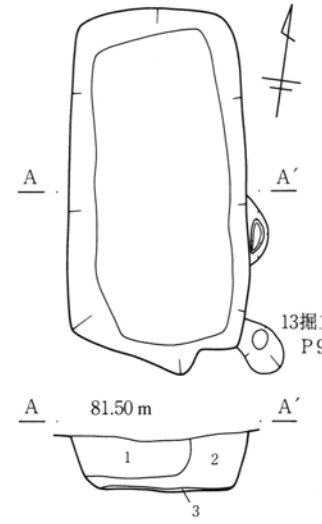
255～257・616・617号土坑・614号柱穴



1　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロック５％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
3　暗褐色土
4　オリーブ褐色土
5　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。
6　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
7　黒褐色土
8　明黄褐色土



282号土坑



1　暗褐色土
2　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
3　黒褐色土

0　1：60　2m

第88図　１区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物（２）

方位Ｎ－９°－Ｗ。底面に１㎝程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器片のほか、近世陶器片１片も出土している。

１区312号土坑

楕円形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、やや丸みを持つ。規模は径98×73㎝、深さ18㎝である。主軸方位Ｎ－18°－Ｗ。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

１区325号土坑（PL 22-4）

攪乱に東壁を壊されるが隅丸長方形か。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺190㎝、短辺(62)㎝、深さ31㎝である。主軸方位Ｎ－０°。４号掘立柱建物跡のＰ２、16号掘立柱建物跡のＰ２よりも新しく、しかも主軸方位も同じく第３類であることから注意を要する。遺物は在地土器鍋口縁部片（１）・古瀬戸四耳壺口縁部片（２）のみが出土している。

１区450号土坑

隅丸方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺100㎝、短辺85㎝、深さ11㎝である。主軸方位Ｎ－４°－Ｗ。９号掘立柱建物跡のＰ12よりも新しく、また主軸方位が同じく第２類である点で注意を要する。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

１区514・515・516号土坑（PL 22-5）

形状から隅丸細長方形の515号土坑、長方形・隅丸長方形の514・516号土坑に類別できるが、形態的には近似する。515号土坑は前出するが、埋土から一定期間開口して使用されていたと見られる。

514号土坑　隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺150㎝、短辺86㎝、深さ12㎝である。主軸方位Ｎ－０°。土層断面観察の結果、515号土坑の底面から黄褐色粘質土を充填して本遺構底面を構築していることが確認され、硬化面はないが底面を意識的に平坦にしていることが判明した。12号掘立柱建物跡Ｐ６・515号土坑より新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

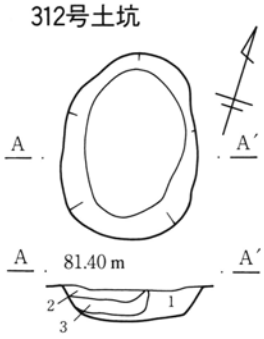
515号土坑　隅丸細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺235㎝、短辺78㎝、深さ21㎝である。主軸方位Ｎ－90°。底面に２㎝程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。514号土坑よりも古く、12号掘立柱建物跡Ｐ７とは新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は古瀬戸平碗（１）のほか在地土器内耳鍋片が出土している。

516号土坑　長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(142)㎝、短辺73㎝、深さ15㎝である。主軸方位Ｎ－０°。515号土坑より新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器鍋片のほかは平安時代以前の遺物で混入と見られる。

１区252号柱穴（PL 44）

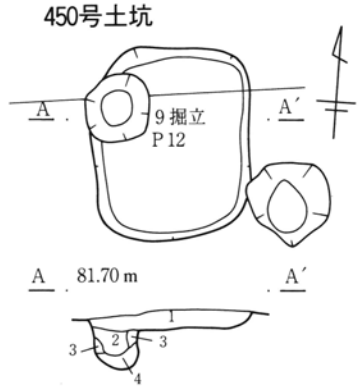
規模は径46×36㎝、深さ32㎝である。柱痕跡は見られない。遺物は在地土器香炉（１）のみが出土している。

312号土坑



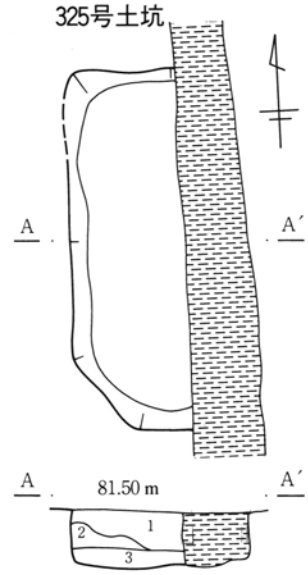
1　暗褐色土
2　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。

450号土坑



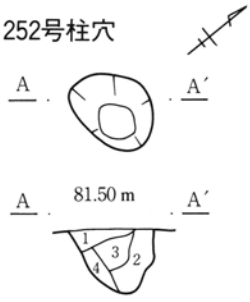
1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
4　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

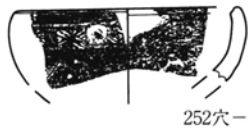
325号土坑



1　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
2　暗褐色土
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。

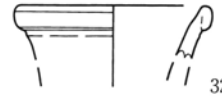
252号柱穴



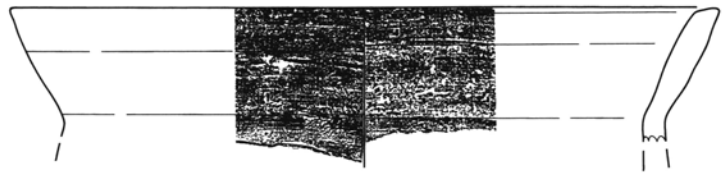


252穴－1

1　オリーブ褐色土
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロックを10％含む。
4　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。



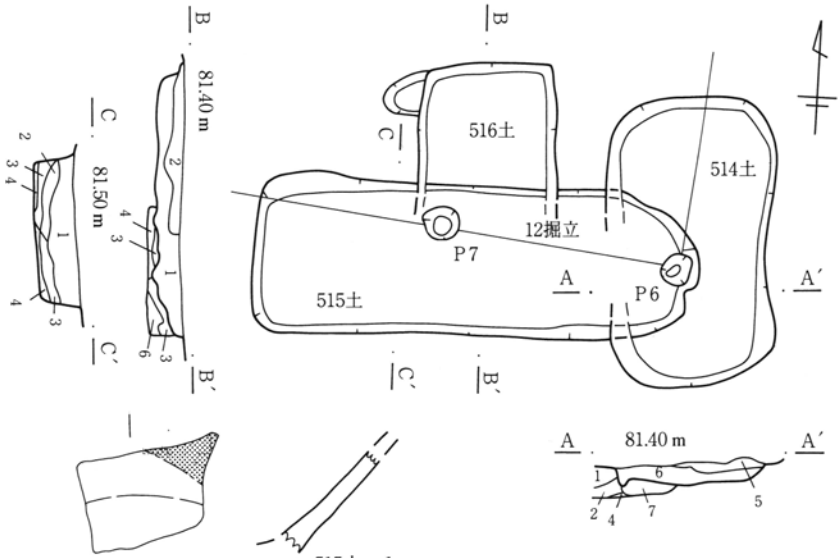
325土－2



325土－1

0　1：40　1 m

514・515・516号土坑



515土－1

1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
3　暗褐色土　黒褐色土大ブロック20％含む。
4　暗褐色土
5　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
6　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
7　黄褐色粘質土　人為充填土。

0　1：60　2m

第89図　1区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物（3）

(2) 堀外部分

１区655・656号土坑（PL 22-6、44）

両土坑とも近似しており、同様な機能を持って繰り返し付設されたものか。北側に50㎝程の間隔をとって７号溝と向き合っており関連が想定される。

655号土坑　656号土坑と重複するが隅丸長方形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(206)㎝、短辺126㎝、深さ56㎝である。主軸方位Ｎ－３°－Ｅ。東半部分では底面に１㎝程黒色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。656号土坑よりも古い。埋土中に褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。遺物は出土しなかった。

656号土坑　隅丸長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(188)㎝、短辺116㎝、深さ67㎝である。主軸方位Ｎ－３°－Ｅ。655号土坑よりも新しい。埋土中に明黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。遺物は在地土器内耳鍋(１)のほかは平安時代以前の遺物で混入と見られる。

１区671・672・673・674号土坑（PL 22-7）

形状は672号土坑がやや不整形以外全て長方形で、673号土坑→674号土坑、672号土坑→671号土坑の順で付設されるが、同様な機能を持って繰り返し付設されたものか。673号土坑は埋土から一定期間開口して使用されていたと見られる。

671号土坑　長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(135)㎝、短辺73㎝、深さ35㎝である。主軸方位Ｎ－82°－Ｗ。西側に前出の土坑が重複するが詳細不明。672号土坑よりも新しい。埋土は均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

672号土坑　不整長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹するが平坦。規模は長辺(124)㎝、短辺(100)㎝、深さ(21)㎝である。主軸方位Ｎ－27°－Ｅ。671号土坑より古い。埋土は均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

673号土坑　674号土坑と重複するが長方形か。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(145)㎝、短辺(74)㎝、深さ32㎝である。主軸方位Ｎ－73°－Ｗ。底面に１㎝程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。674号土坑より古い。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

674号土坑　北側は調査区域外へ延びるが長方形か。南に前出の土坑が重複するが詳細は不明。壁は垂直に立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。規模は長辺(87)㎝、短辺62㎝、深さ27㎝である。主軸方位Ｎ－76°－Ｗ。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

１区686号土坑

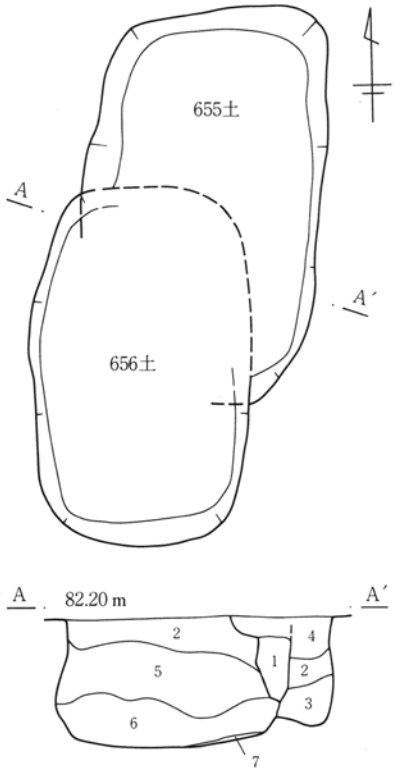
やや長辺が外側へ湾曲した長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(133)㎝、短辺110㎝、深さ37㎝である。主軸方位Ｎ－90°。埋土中に黒色土・黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。出土遺物は砥石(１)のみである。

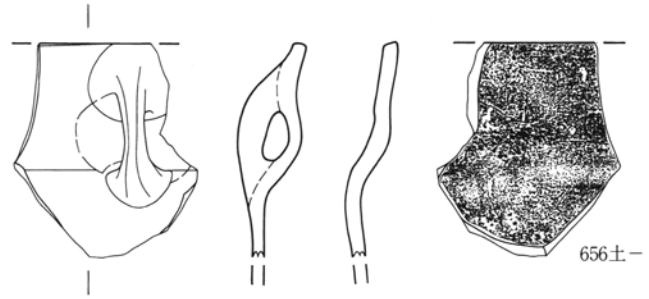
１区854・855号土坑（PL 22-8）

854号土坑　隅丸細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、南北に長いが水平。規模は長辺(702)㎝、短辺96㎝、深さ８㎝である。主軸方位Ｎ－８°－Ｗ。底面西半分に１㎝程黒褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。855号土坑よりも古い。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

855号土坑　隅丸細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦だが、中央部から両端部へ向かってやや丸みを持って立ち上がる。規模は長辺318㎝、短辺105㎝、深さ33㎝である。主軸方位Ｎ－０°。底面に２㎝程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。854号土坑よりも新しい。24号掘立柱建物跡Ｐ６と重複し新旧関係不明だが、位置から見て関連も考えられる。出土遺物は青磁碗(１)のみである。

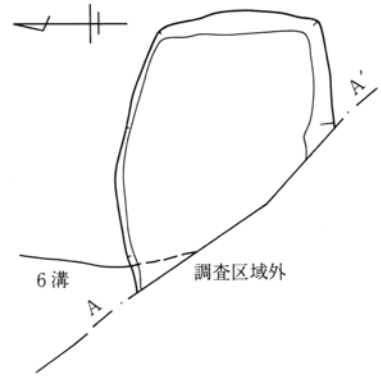
655・656号土坑

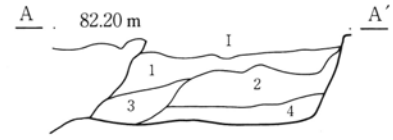




1　黄褐色土　褐色土小ブロック10％含む。
2　黄褐色土　黒色土大ブロック、褐色土小ブロックを5％含む。
3　にぶい黄褐色土　褐色土小ブロック10％含む。
4　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5％含む。
5　オリーブ褐色土　黄褐色土小ブロック10％含む。
6　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック5％含む。
7　黒色砂質土

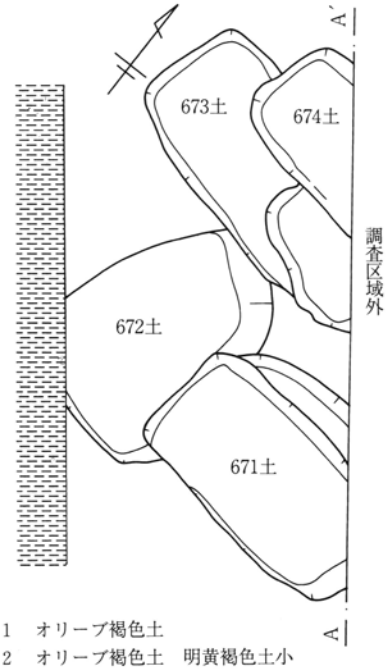
686号土坑

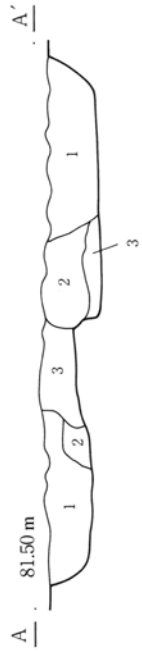




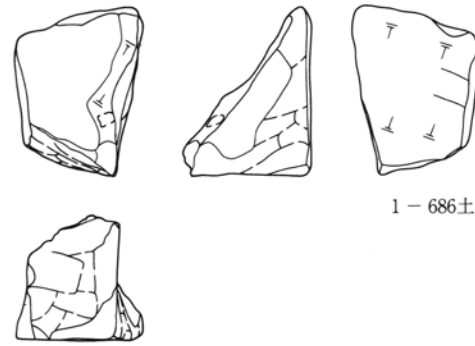
1　オリーブ褐色土
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロック5％含む。
3　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック5％含む。
4　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒褐色土小ブロック5％含む。

671～674号土坑





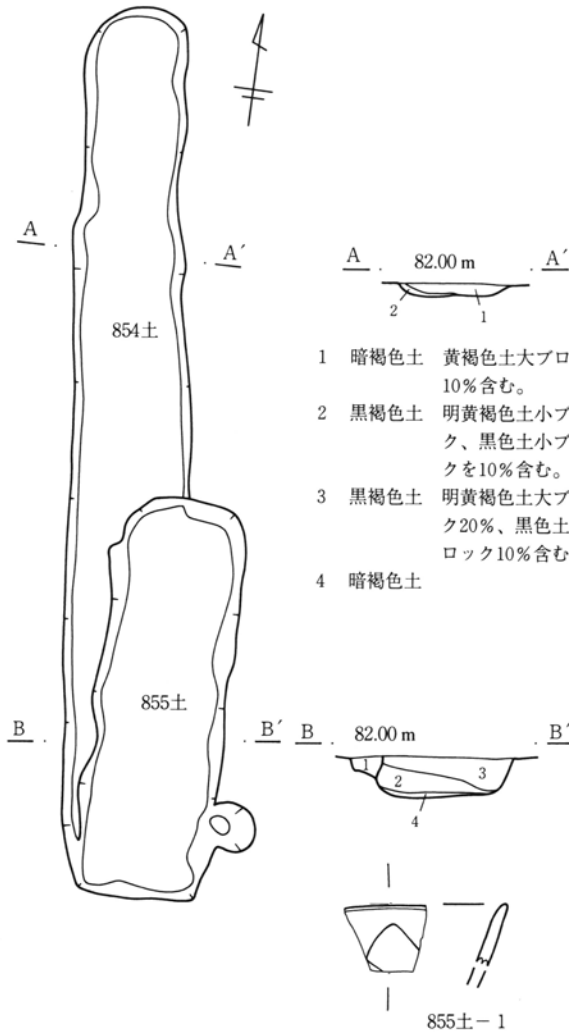
1　オリーブ褐色土
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5％含む。
3　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック5％含む。



0　1：40　1 m

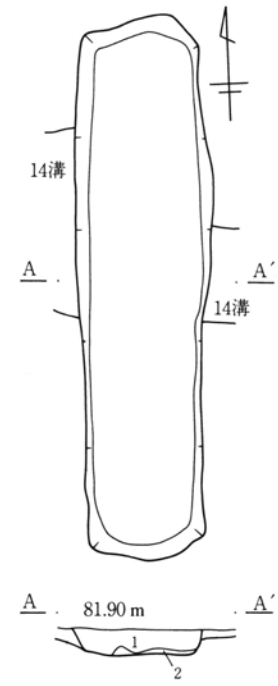
第90図　1区堀外部分土坑・出土遺物（1）

854・855号土坑



1　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
4　暗褐色土

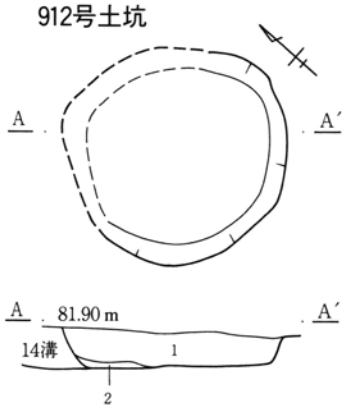
916号土坑



1　暗褐色土
2　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

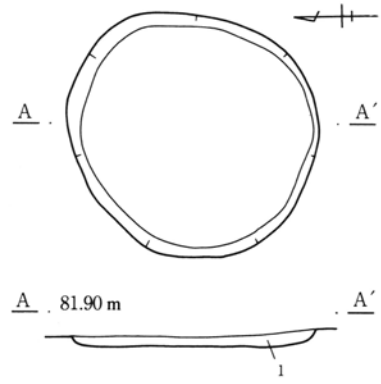
0　1：60　2m

912号土坑



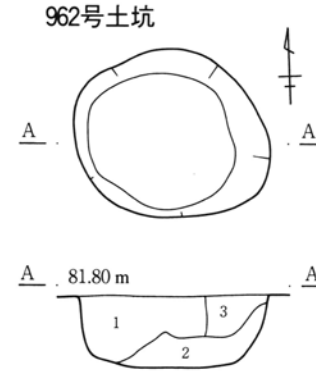
1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。

944号土坑



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。

962号土坑



1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
3　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒褐色土小ブロック５％含む。

0　1：40　1 m

第91図　１区堀外部分土坑・出土遺物（２）

1区912号土坑

北半分が14号溝と重複しており、外形は確定できなかったが、土層断面観察から南半分と合わせて整った円形を呈していたと見られる。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径(118)×(114)㎝、深さ18㎝である。14号溝より新しい。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区916号土坑

細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南端から北端へ向かって緩やかに立ち上がり、比高差は15㎝程を測る。規模は長辺429㎝、短辺111㎝、深さ18㎝である。主軸方位N－3°－E。底面に2㎝程黒褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。14号溝より新しい。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区944号土坑

円形。壁は浅く詳細は不明だが垂直か。底面は平坦。規模は径132×128㎝、深さ7㎝である。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区962号土坑（PL 23-1）

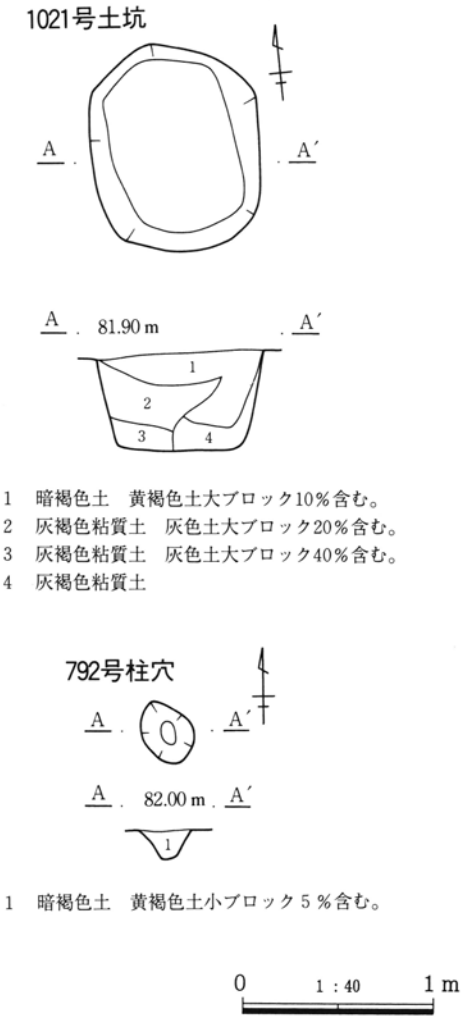
隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺102㎝、短辺86㎝、深さ38㎝である。主軸方位N－89°－W。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区1021号土坑（PL 23-2）

隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺106㎝、短辺88㎝、深さ52㎝である。主軸方位N－7°－E。埋土中に灰色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区792号柱穴（PL 44）

規模は径35×25㎝、深さ15㎝である。柱痕跡は見られない。出土遺物は祥符天寶(1)のみである。



1　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
2　灰褐色粘質土　灰色土大ブロック20％含む。
3　灰褐色粘質土　灰色土大ブロック40％含む。
4　灰褐色粘質土

1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5％含む。

792穴－1

第92図　1区1021号土坑・792号柱穴・出土遺物

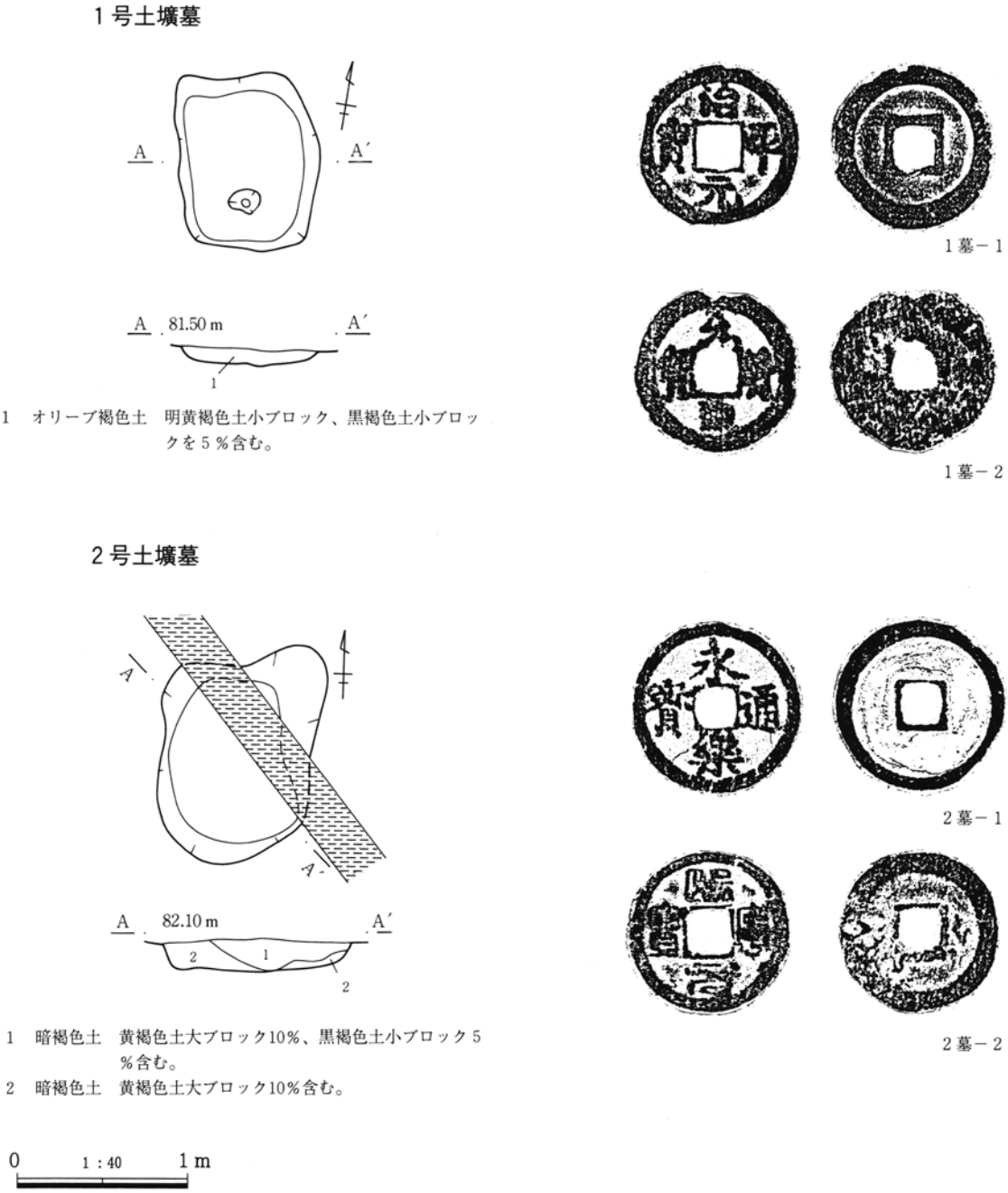
４．土壙墓

１区１号土壙墓（PL 44）

隅丸方形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺100㎝、短辺82㎝、深さ10㎝である。主軸方位Ｎ－10°－Ｗ。埋土は均一で人為埋填。小柱穴と重複するが新旧関係不明。出土遺物は治平元寶（１）と元符通寶（２）のみである。

１区２号土壙墓（PL 44）

隅丸方形を呈し浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺132㎝、短辺112㎝、深さ19㎝である。主軸方位Ｎ－48°－Ｅ。出土遺物は永楽通寶（１）と明道元寶（２）のみである。



第93図　１区１・２号土壙墓・出土遺物

5．火葬跡

1区1号火葬跡（PL 23-3・4、45）

隅丸長方形で西辺中央に小規模な張り出しを持つ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で植物攪乱等によりやや荒れる。規模は長辺119㎝、短辺72㎝、深さ12㎝で、張り出し部は長さ15㎝、幅24㎝である。主軸方位はN－90°－W。外形線に沿って壁はよく焼けて焼土化し、内側がやや黄白色を呈し火力は強いか。壁の焼けは下層へ向かって弱く、底面は全く焼けておらず、確認面近くが燃焼面か。確認面から10㎝程下面には概ね3㎝厚の炭層が全面に堆積しており、その下層にも若干の埋土が存在する。遺物は焼締陶器片1片が確認面に露呈していたが混入かもしれない。焼人骨は確認面から底面にわたって少量出土した。掲載骨を含めて総量は49.59ｇで、内訳は頭蓋骨2.07ｇ、上顎歯槽片0.19ｇ、腿肢骨37.06ｇ、その他10.27ｇである。頭蓋骨（1）は北側に集中することから頭部を北向きに置いた可能性があるが、骨の残存量から考えて収骨して別の場所に埋葬した可能性が高い。

1区2号火葬跡（PL 23-5・6）

不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径100×87㎝、深さ11㎝である。南側の壁がよく焼けるが、全体としては埋土中に焼土を含む以外、底面等の焼土化は見られない。炭も多く混入するが、炭層を形成するまでには至らない。遺物・焼人骨ともに出土しなかった。

1区3号火葬跡（PL 23-7・8、45）

隅丸長方形で西辺中央に小規模な張り出しを持つ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹するが平坦。規模は長辺117㎝、短辺68㎝、深さ27㎝で、張り出し部は長さ9㎝、幅23㎝である。主軸方位N－87°－W。外形線に沿って壁はよく焼けて焼土化し、壁の焼けは下層へ向かって弱く、底面は全く焼けていない。確認面近くが燃焼面か。確認面から10㎝程下面に炭を多く含んだ埋土が現れ底面まで堆積する。北半部中央には厚さ10㎝弱のクリの炭化材（第5章参照）が底面から10㎝程浮いて出土しており、燃料であるとともに燃焼台のような機能も想定される。出土した土器は平安時代以前の遺物で混入と見られる。焼人骨は埋土中から少量出土した。掲載骨を含めて総量は149.88ｇで、内訳は頭蓋骨0.50ｇ、椎骨4.02ｇ、腿肢骨77.92ｇ、その他67.44ｇである。骨の残存量から考えて収骨して別の場所に埋葬した可能性が高い。

1区4号火葬跡（PL 24-1）

削平により残存状況は悪くT字形を呈するが、元来は他の火葬跡同様隅丸長方形で南辺に小規模な張り出しを持っていたものと見られる。規模は長辺(75)㎝、短辺(47)㎝で、最深部は11㎝だがほとんどは浅く残存状況は極めて悪い。張り出し部は長さ26㎝、幅30㎝である。主軸方位N－180°。張り出し部の両側がよく焼けるが、主体部は壁もほとんど残っておらず底面も含め焼けは見られない。埋土は炭・炭粒を主体とする。出土した土器は平安時代以前の遺物で混入と見られる。焼人骨は埋土中からわずか0.05ｇ出土した。骨の残存量から考えて収骨して別の場所に埋葬した可能性が高い。

1区5号火葬跡（PL 24-2・3）

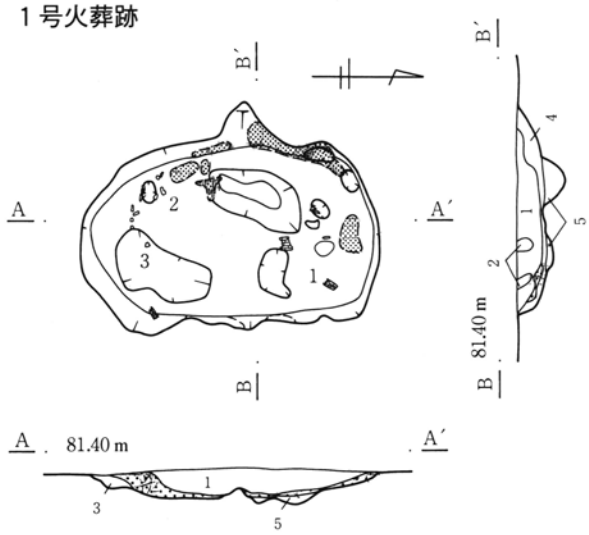
隅丸長方形で南辺中央に小規模な張り出しを持つ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で植物攪乱等によりやや荒れる。規模は長辺110㎝、短辺66㎝、深さ20㎝で、張り出し部は長さ24㎝、幅57㎝である。主軸方位N－176°－E。外形線に沿って壁は一部焼土化するが、底面は焼けていない。埋土に焼土はなく炭粒を少量含む。1号鍛冶遺構よりも新しい。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られ、焼人骨は出土しなかった。

1区6号火葬跡（PL 24-4）

ほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径90×87㎝、深さ11㎝である。埋土中に焼土と炭粒を多く含むが、壁・底面に焼土化は見

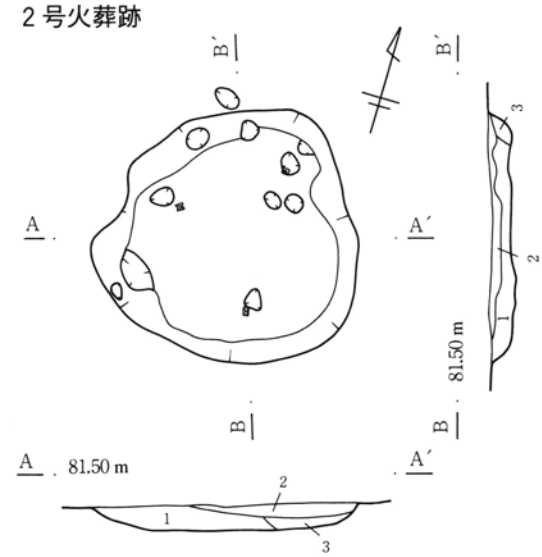
られない。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られ、焼人骨は出土しなかった。

１号火葬跡



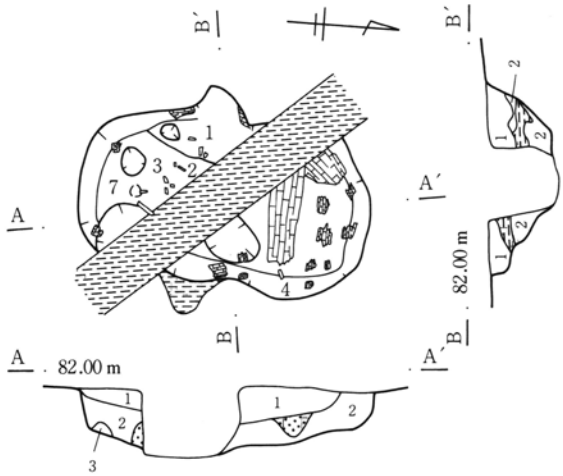
1　黒褐色土　黄褐色土小ブロック、炭粒を10％含む。
2　黒褐色土　炭粒40％、黄褐色土小ブロック10％含む。
3　オリーブ褐色土　焼土粒５％含む。
4　オリーブ褐色土　炭大ブロック40％、焼土大ブロック10％含む。
5　オリーブ褐色土　炭大ブロック５％含む。

２号火葬跡



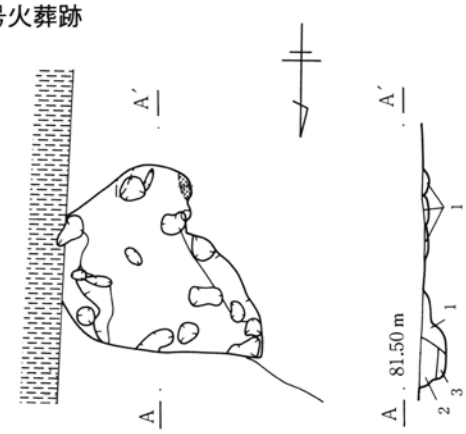
1　オリーブ褐色土　焼土大ブロック、炭大ブロックを40％含む。
2　オリーブ褐色土　炭大ブロック20％、黄褐色土大ブロック５％含む。
3　オリーブ褐色土　黄褐色土大ブロック10％、炭大ブロック５％含む。

３号火葬跡



1　にぶい黄褐色土　黄褐色土小ブロック20％、炭粒５％含む。
2　オリーブ褐色土　炭大ブロック40％、骨片、焼土粒を１％含む。
3　黄褐色土ブロック

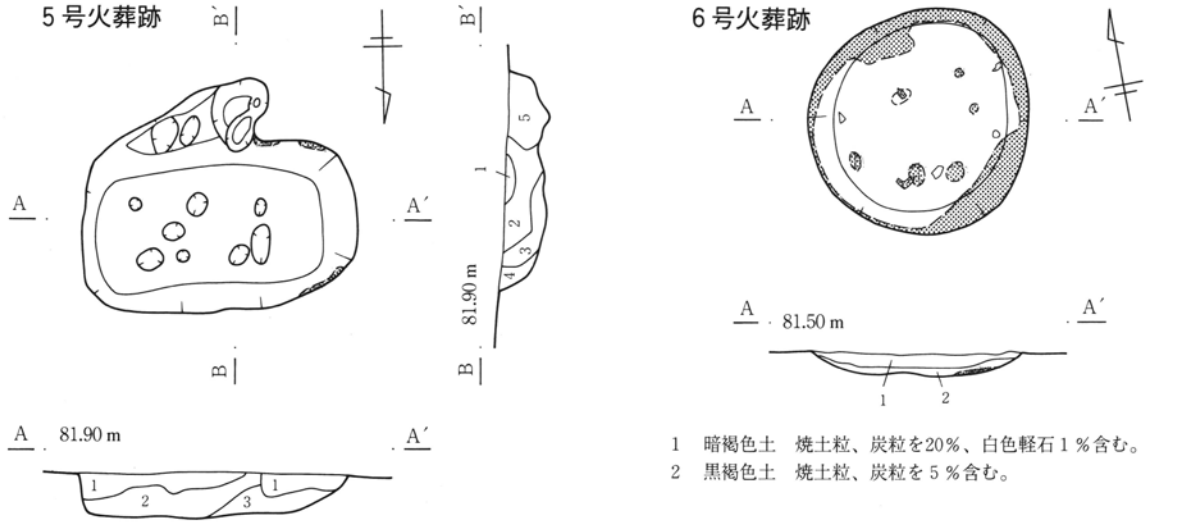
４号火葬跡



1　黒色土　炭主体。黄褐色粘土大ブロック20％含む。
2　暗褐色土
3　黒褐色土

0　1：30　1m

第94図　１区火葬跡（１）



1　オリーブ褐色土　炭粒1％含む。
2　黒褐色土　炭粒20％、灰色粘質土小ブロック5％含む。
3　黒褐色土　炭粒、灰色粘質土小ブロックを20％含む。
4　オリーブ褐色土　黄褐色土小ブロック40％含む。
5　灰褐色土　灰黄褐色土大ブロック20％、炭粒10％含む。

1　暗褐色土　焼土粒、炭粒を20％、白色軽石1％含む。
2　黒褐色土　焼土粒、炭粒を5％含む。

0　1：30　1m

第95図　1区火葬跡（2）

6．堀・溝

1区1号堀（付図2　PL 24-5～8、25-1～4、45、46）

「上植木調査区」の1号溝と同一の区画堀であり、ここでは関連づけて報告する。

位置　調査区中央部を横断し、74D～73C－6～8グリッドに位置する。

重複　北端で670号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。

形態　南北に走向するが南側3分の1程は20m程東へ張り出して、全体として柄杓形をなす。南端部は西走して調査区域外となるが、15m程で鯉沼の底面となるため、全体規模と大差ないものと考える。全体の長さは「上植木調査区」分を含めて南北距離125mである。詳細な規模は「上植木調査区」の北西端部から折れ部までが長さ12m程で、そこから32.5m程南進して1区に至る。1区では北側直線部（北端から張り出し部北西角まで）が、外側で長さ43.5m内側で46.3mで、「上植木調査区」の折れ部からは80.6mとなる。張り出し部は外側で北辺16m東辺37.8m南辺22m、内側では北辺16.6m東辺32.4m南辺19.5mを測る。また、東辺には北角から16m部分に折れ部があり、南側が更に1.5m程東側へ張り出す。張り出し部として区画された南堀内部分は、南北32m東西21.5～23.2mとなる。1号堀の幅は北端が最大で上幅3.20m下幅0.70m、また張り出し部は上幅2.0～2.7m程、下幅0.5m前後である。深さはA断面で0.80m、B断面で0.94m、C断面で0.84m、D断面で1.36mである。底面の標高を比較すると、北端D断面付近と南端A断面付近とは殆ど比高差はなく、かえって張り出し部の北辺と南辺とを比較すると50cm程北辺が高くなっている。走向方位は、北側直線部でN－1°－E、張り出し部で北辺N－89°－W、東辺N－5°－W～N－4°－E、南辺N－89°－Wである。断面形は逆台形で、最も深い北端部ではよりV字形に近い形状となる。

埋没状況　埋土は総じて底面から40cm程まで腐植に富んだ黒～暗褐色粘土或は砂質土が堆積し、その上面を黄褐色～灰褐色土が埋める。したがって、本遺構は多量な流水は無いにしても、常時湿潤な状況にあったに違いない。なお、上層と下層の層境は明確

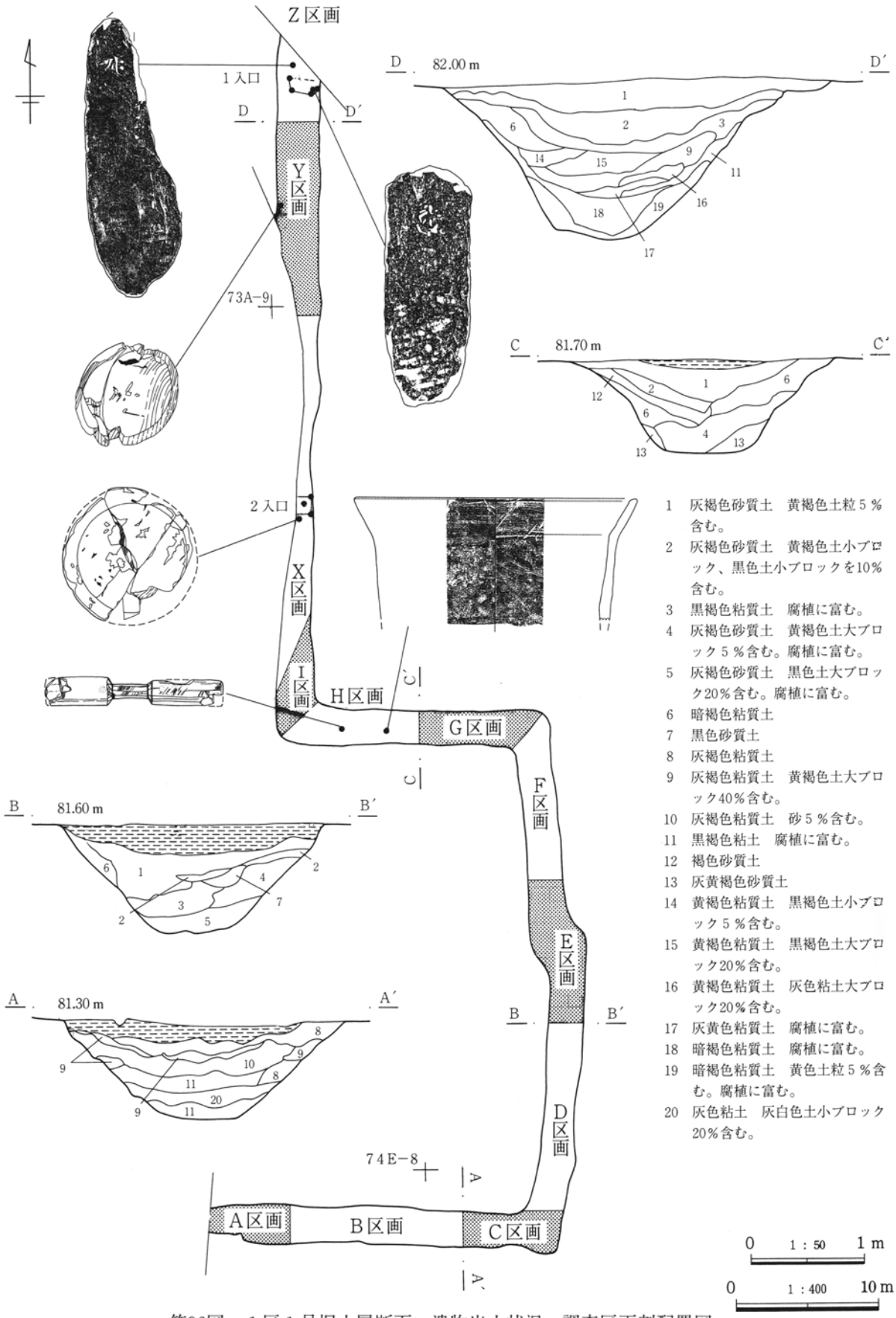
に分層できるため、掘り直しの可能性がある一方、自然埋没によって下層堆積後一時期に上層によって人為埋填された可能性もあることから、調査時において埋土をこの基準で上下に分け、遺物を分類して傾向を見ることとした。土層断面を観察すると、Ｃ断面は南堀内部分側（南側）から黄褐色土が流入し、Ｄ断面でも同じく北堀内部分側（西側）から黄褐色土が流入している。ただし、南堀内部分ではＣ断面以外でこの状況は見られず、一方南堀内部分の北西折れ部から北端にかけては、非常に顕著にこの状況が看取できた。したがって、北堀内部分から南堀内部分北辺までは縁辺に土塁が存在していた可能性が非常に高く、南堀内部分でもその可能性がある。

関連施設　４つの入口遺構が確認された。１号入口遺構は北端に位置し、３本の杭と１本の杭痕跡が残存する。この遺構から南へ28.5ｍ南堀内部分北辺から15ｍには２号入口遺構があり、２本の杭と１本の柱痕跡が残存する。３号入口遺構は南堀内部分の東辺折れ部に存するが、柱材等が出土したほか、１号堀の両肩部に20・21号柱穴列が検出され関連が想定される。また、南堀内部分南辺の東角から11～13ｍには４号入口遺構がある。

出土遺物　総量とその分布は第３表のとおりであり、特に１号入口遺構部分であるＹ・Ｚ区画は土器・石器のほか木器・木製品の出土量も多い。また３号入口遺構部分であるＥ・Ｆ区画でもその傾向は同じである（１・３号入口遺構の遺物は重複を避けるため、詳細についてはここでは触れない）。こうした中で、南堀内部分の北西角に位置するＨ・Ｉ区画では土器類がやや多く出土し、木器・木製品もＥ・Ｆ・Ｙ・Ｚ区画と同様な出土状況であった。これは堀の折れ部という性格に起因すると言える。堀の埋没状況では、この北西角から調査区北壁まで顕著に西側からの埋填土（土塁か）の流入があることか

第３表　１区１号堀出土土器・石器一覧表

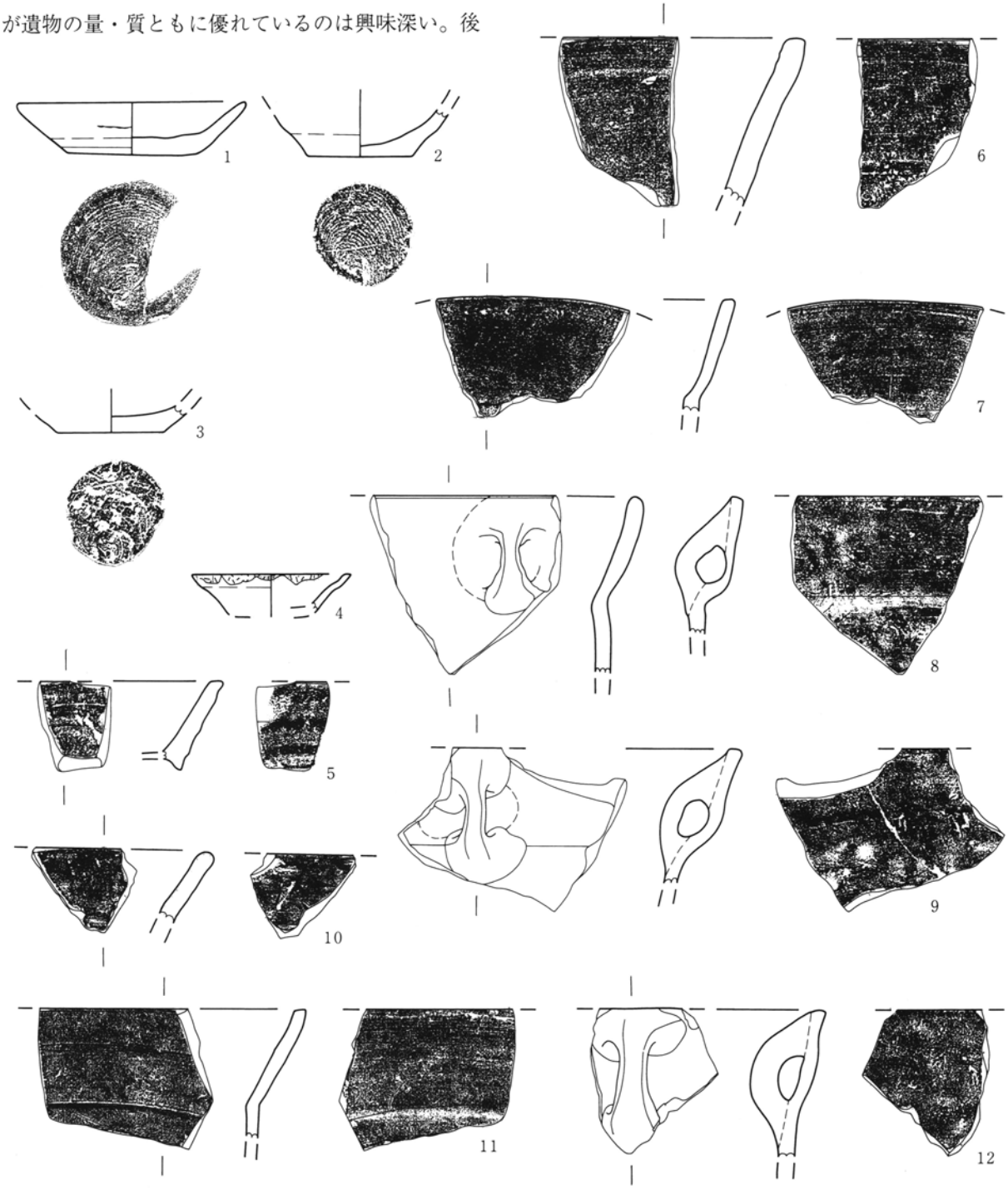
1区1号堀 区画・層	個体数 中世 中国陶磁	古瀬戸	その他施釉	焼締甕	在地土器 鉢	鍋	カワラケ	板碑	石臼	小計	個体数以外の（ ）は破片 奈良・平安	近世陶磁器	総計	掲載遺物数
Ａ区画上層				1						1	(1)		1 (1)	
Ａ区画下層				1	1					2			2	
Ｂ区画上層	青磁1			1	茶釜1					3	(11)	3	6 (11)	2
Ｂ区画下層						1	1			2			2	1
Ｃ区画上層						1				1	(4)		1 (4)	
Ｃ区画下層									1	1			1	1
Ｄ区画上層						1				1	(9)		1 (9)	
Ｄ区画下層	白磁1					1				2	(4)	1？	3 (4)	1
Ｅ区画上層		1		1	1	2(3)				5(3)	(37)		5 (40)	3
Ｅ区画下層					1	2(2)				3(2)	(7)		3 (9)	1
Ｆ区画上層						1				1	(13)		1 (13)	
Ｆ区画下層						1				1	(3)		1 (3)	
Ｇ区画上層									1	1	(20)		1 (20)	1
Ｇ区画下層						1				1	(7)		1 (7)	
Ｈ区画上層					1					1	(11)		1 (11)	
Ｈ区画下層					1	3(1)				4(1)			4 (1)	2
Ｉ区画上層						1(5)	1			2(5)	(17)		2 (22)	1
Ｉ区画下層	青磁2		1							3	(8)		3 (8)	3
Ｘ区画上層							1			1	(34)		1 (34)	1
Ｘ区画下層						1			茶臼1	2	(2)		2 (2)	2
Ｙ区画上層		1			1	1		1		4	(8)		4 (8)	2
Ｙ区画下層	青磁1	1				5(1)	1		1	9(1)	(5)		9 (6)	8
Ｚ区画上層			天目1			3(13)	3	1		8(13)	(36)	1	9 (49)	2
Ｚ区画下層		2		1		6(5)		5	2	16(5)	(27)		16 (32)	14
計	5	5	2	5	7	31(30)	7	7	6	75(30)	(264)	5	80(294)	45



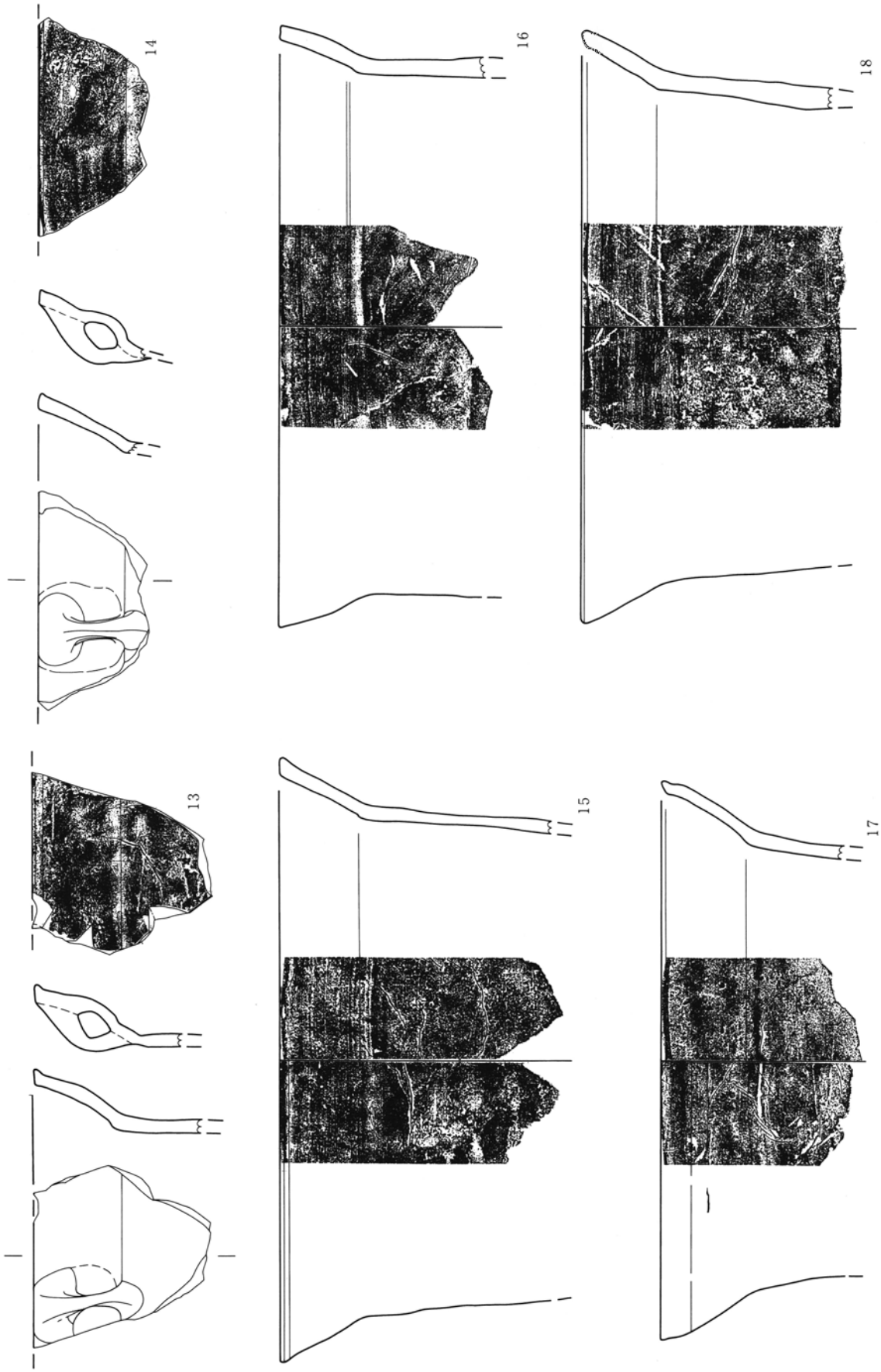
1　灰褐色砂質土　黄褐色土粒5％含む。
2　灰褐色砂質土　黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
3　黒褐色粘質土　腐植に富む。
4　灰褐色砂質土　黄褐色土大ブロック5％含む。腐植に富む。
5　灰褐色砂質土　黒色土大ブロック20％含む。腐植に富む。
6　暗褐色粘質土
7　黒色砂質土
8　灰褐色粘質土
9　灰褐色粘質土　黄褐色土大ブロック40％含む。
10　灰褐色粘質土　砂5％含む。
11　黒褐色粘土　腐植に富む。
12　褐色砂質土
13　灰黄褐色砂質土
14　黄褐色粘質土　黒褐色土小ブロック5％含む。
15　黄褐色粘質土　黒褐色土大ブロック20％含む。
16　黄褐色粘質土　灰色粘土大ブロック20％含む。
17　灰黄色粘質土　腐植に富む。
18　暗褐色粘質土　腐植に富む。
19　暗褐色粘質土　黄色土粒5％含む。腐植に富む。
20　灰色粘土　灰白色土小ブロック20％含む。

第96図　1区1号堀土層断面・遺物出土状況・調査区画割配置図

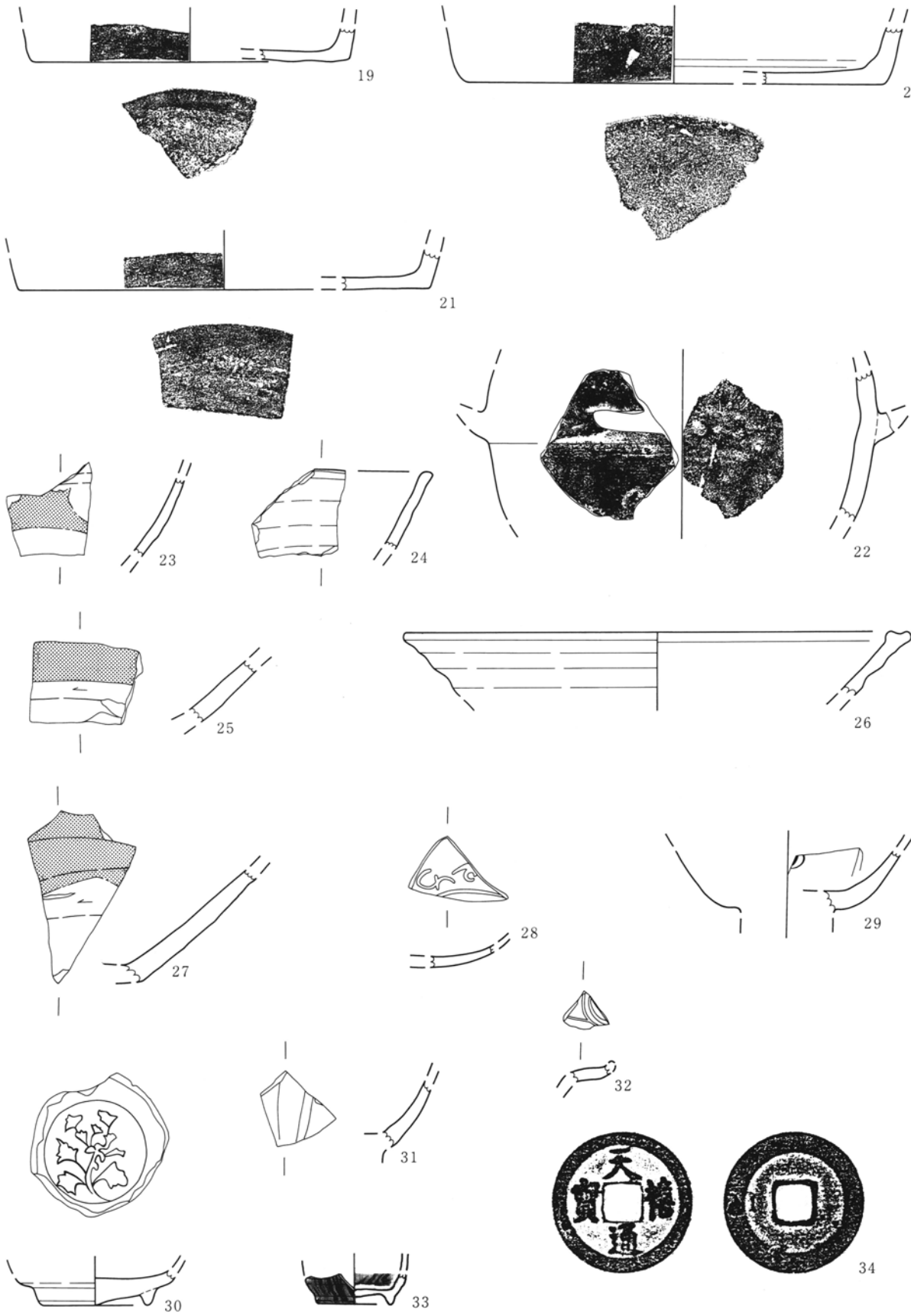
ら、１つの区画された領域の境界である可能性もあり、この角部にそうした性格があるとすれば、第５の入口の存在も想定でき、遺物の出土状況はこうしたことを示したものと想像できる。ところで、本館跡の主体部と言える南堀内部分を囲むＡ～Ｉ区画では、Ｈ区画の遺存状態の良い在地土器鍋(18)や手杵(50)が遺物として突出するだけで、Ｙ・Ｚ区画の方が遺物の量・質ともに優れているのは興味深い。後述のとおり本館跡は掘立柱建物跡の分析から、第３類段階では建物群の中心が北西方向に移動したと見られるのと符合するのである。なお、埋土上層全体の出土遺物の状況として、中世以降遺物の混入が極めて少ない点があり、こうした状況は堀が短期間に埋没したことを示唆し、土塁等の削平も含めて短期間で全面的に人為埋填した可能性が高い。



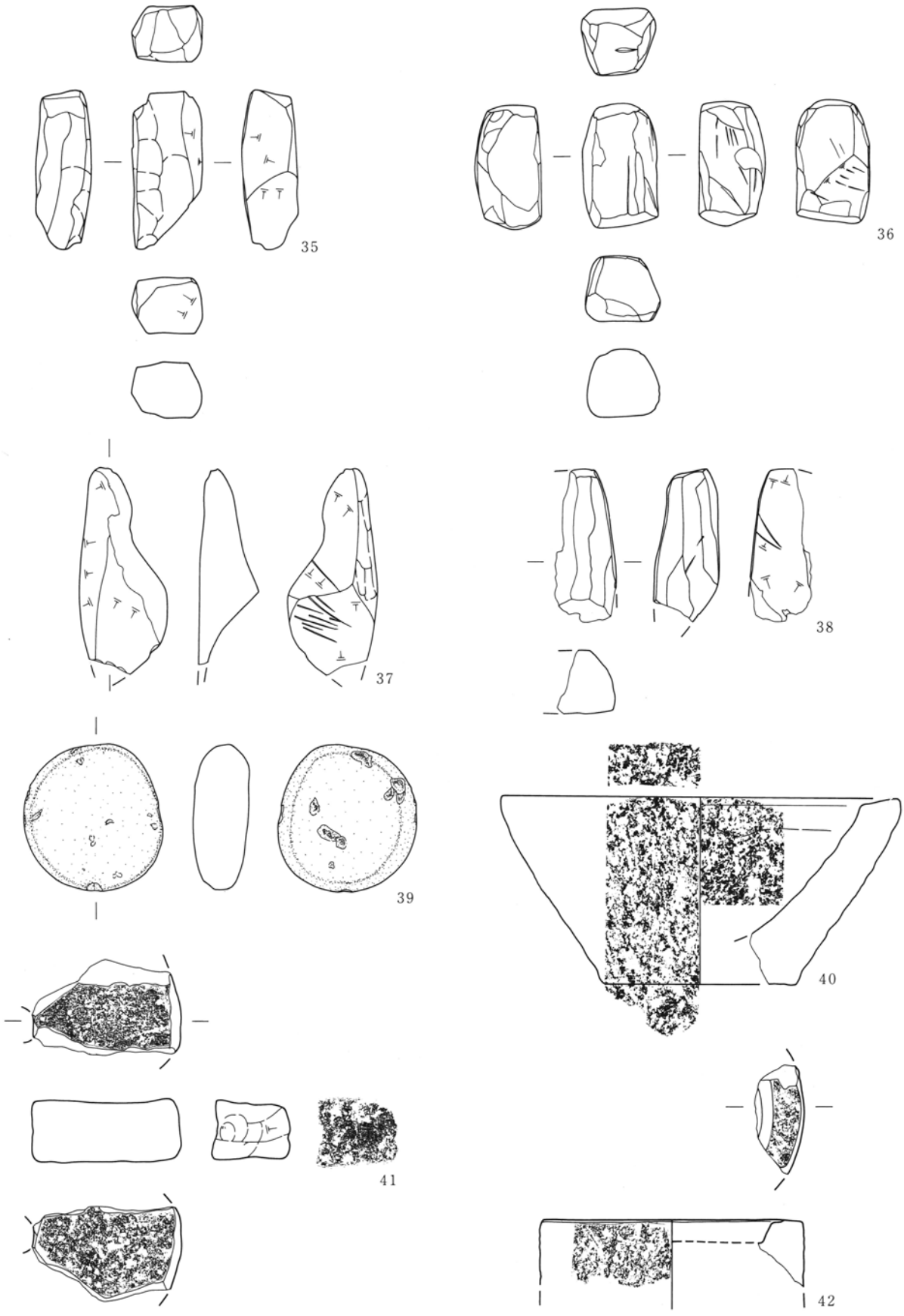
第97図　１区１号堀出土遺物（１）



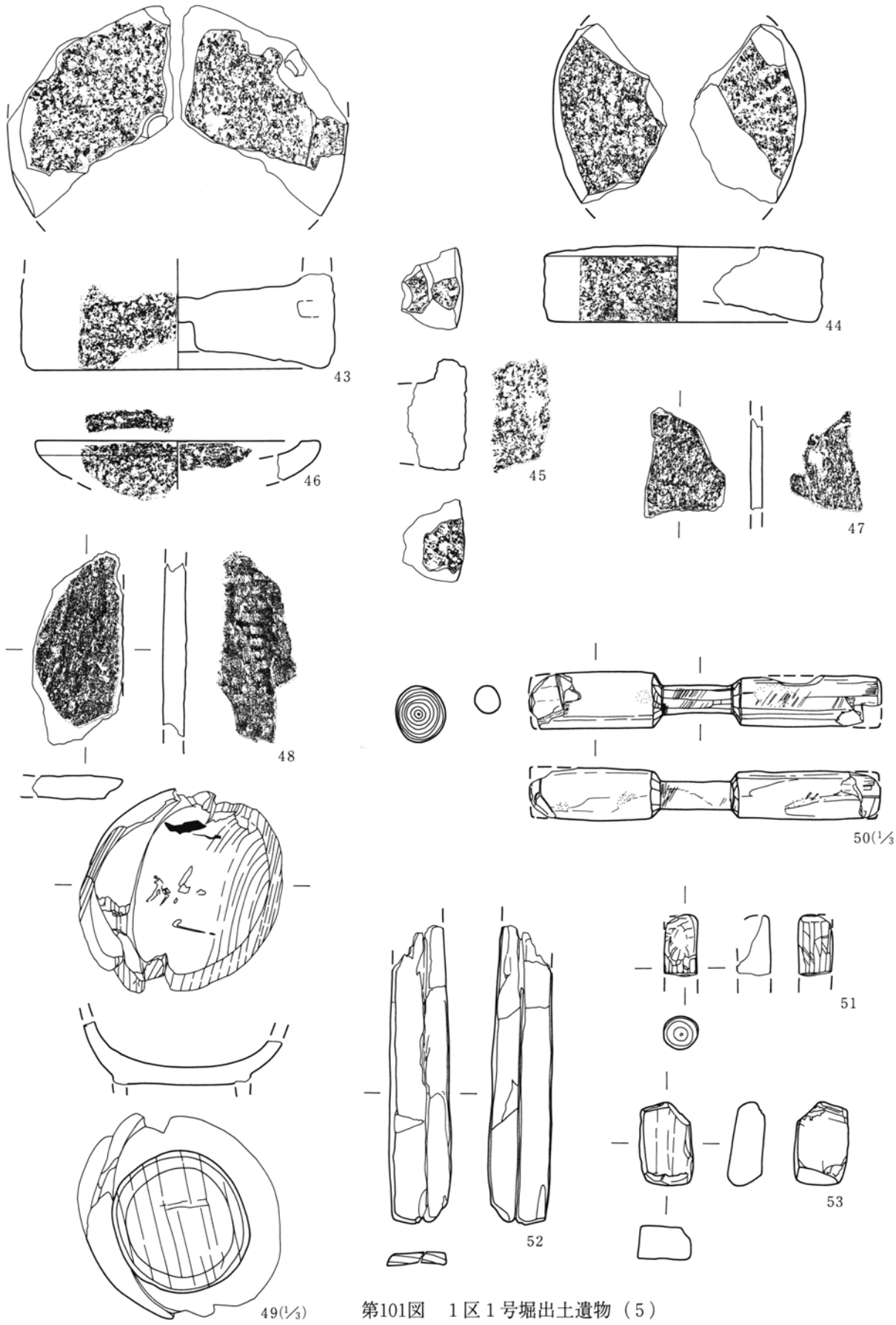
第98図　1区1号堀出土遺物（2）



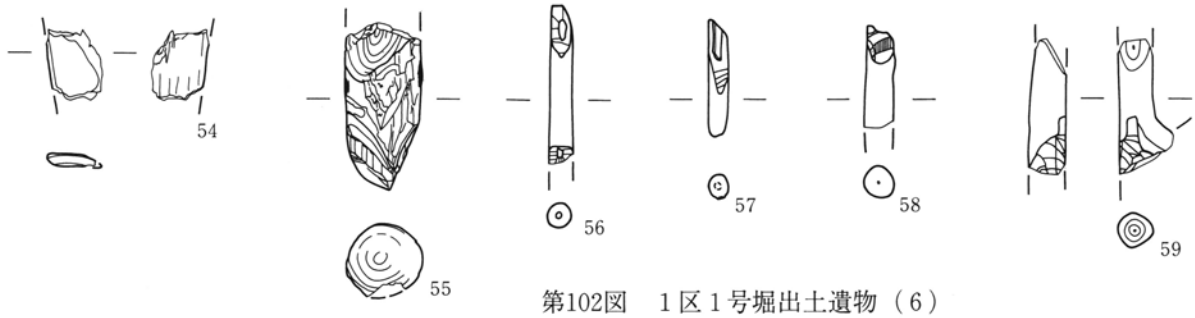
第99図　１区１号堀出土遺物（３）



第100図　1区1号堀出土遺物（4）



第101図　１区１号堀出土遺物（５）



第102図　1区1号堀出土遺物（6）

1区2号溝（PL 25-5、46）

位置　南堀内部分の中央部西寄りで、74F～H－8・9グリッドに位置する。北端部から北へ2.3mの間隔をとって170号土坑がある一方、南端部から西へ2.7mの間隔をとって221号土坑や3号溝が存しており、1つの区画を囲い込んでいる様相を示す。ただし主軸方位は221号土坑が第1類で、170号土坑と3号溝が第3類に属する点で注意を要する。

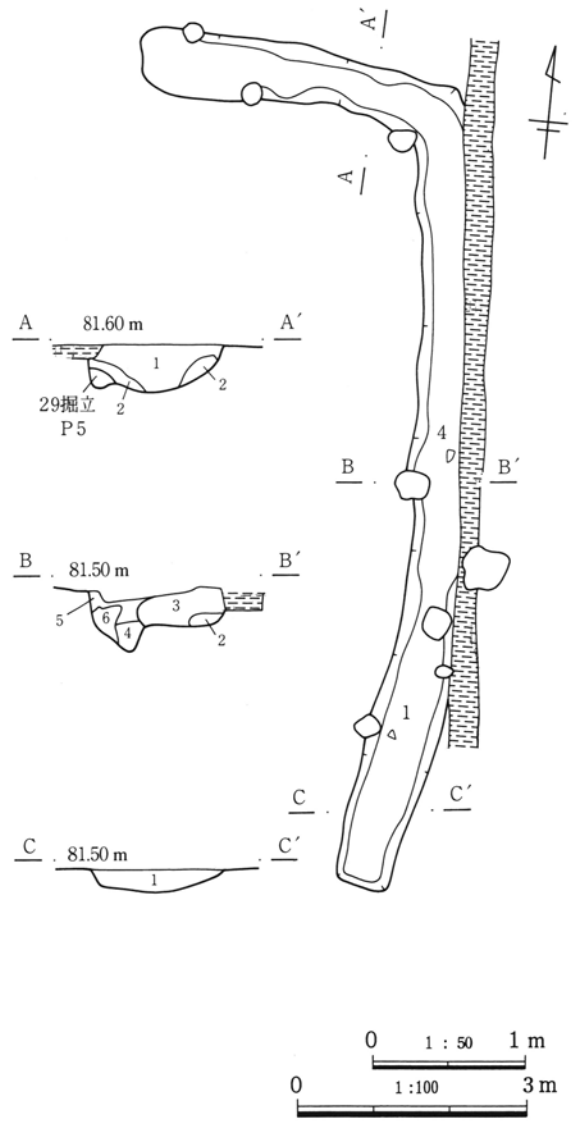
重複　29号掘立柱建物跡のP5より新しい。7号掘立柱建物跡のP2は土層断面観察では後出に見えるが、上面が攪乱を強く受けている影響下にあるため、やや確実さに欠ける。本遺構の新旧関係は、南堀内部分の建物配置を考える点で重要な要素であるため、注意を要する。

形態　南を上側にしたL字状を呈し、長辺は東側へ弓なりに張り出す。南端部は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がる。北端部は攪乱の影響で壁が壊され輪郭も不鮮明となる。規模は短辺（北辺）が長さ4.30m、長辺（東辺）10.52m、最大幅は上幅0.94m下幅0.64m、深さは中央部が一番深く30cmで、両端へ向かって徐々に底面が上がる。走向方位は短辺でN－85°－W、長辺N－5°－W～N－15°－E。

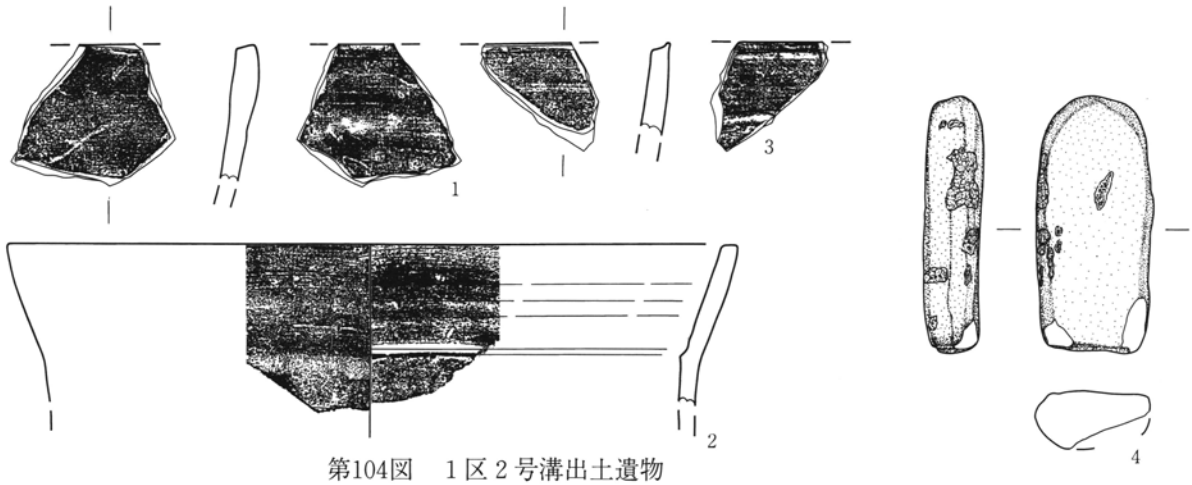
1　オリーブ褐色土　明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
2　オリーブ褐色土
3　暗褐色土
4　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
6　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40%含む。

断面は底面の広い逆台形で、底面はやや丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

出土遺物　埋土から在地土器鍋（1～3）、敲石（4）が出土している。



第103図　1区2号溝



第104図　１区２号溝出土遺物

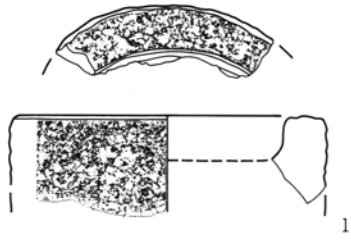
１区３号溝（PL 46）

位置　南堀内部分の西端部中央で、74Ｆ－９グリッドに位置する。25～40㎝の間隔をとって221号土坑の南側に隣接して規模・形態ともに近似する。東端は２号溝と3.0ｍの間隔をとる。

重複　25号柱穴列のＰ１よりも新しい。６号柱穴列のＰ２とは新旧関係不明。

形態　ほぼ直線状で、西側は調査区域外となるため、全体規模は不明である。東端は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がり、２号溝の南端に類似する。規模は長さ4.22ｍ以上、最大上幅0.52ｍ下幅0.37ｍ、深さは断面観察部で13㎝である。走向方位はＮ－84°－Ｗ。断面形はＵ字状。底面はやや丸みを持つ。

出土遺物　底面で石臼上臼（１）が、埋土から在地土器鍋片が出土している。



第105図　１区３号溝出土遺物

１区６号溝（PL 25-6）

位置　北堀内部分の中央部で、83Ｄ－０・１グリッドに位置する。

重複　15・16号柱穴列の各Ｐ１と重複するが新旧関係は明確にできなかった。651・686号土坑より新しい。

形態　北西部でほぼ直角に折れるＬ字状を呈し、両端とも南側調査区域外へ延びる。長さは東辺で(4.62)ｍ、北辺が(4.70)ｍで、最大幅0.62ｍ、深さは断面観察部で38㎝である。走向方位は東辺がＮ－６°－Ｅ、北辺がＮ－82°－Ｗ。断面はＵ字状を呈し、底面は丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

出土遺物　在地土器片が少量出土している。

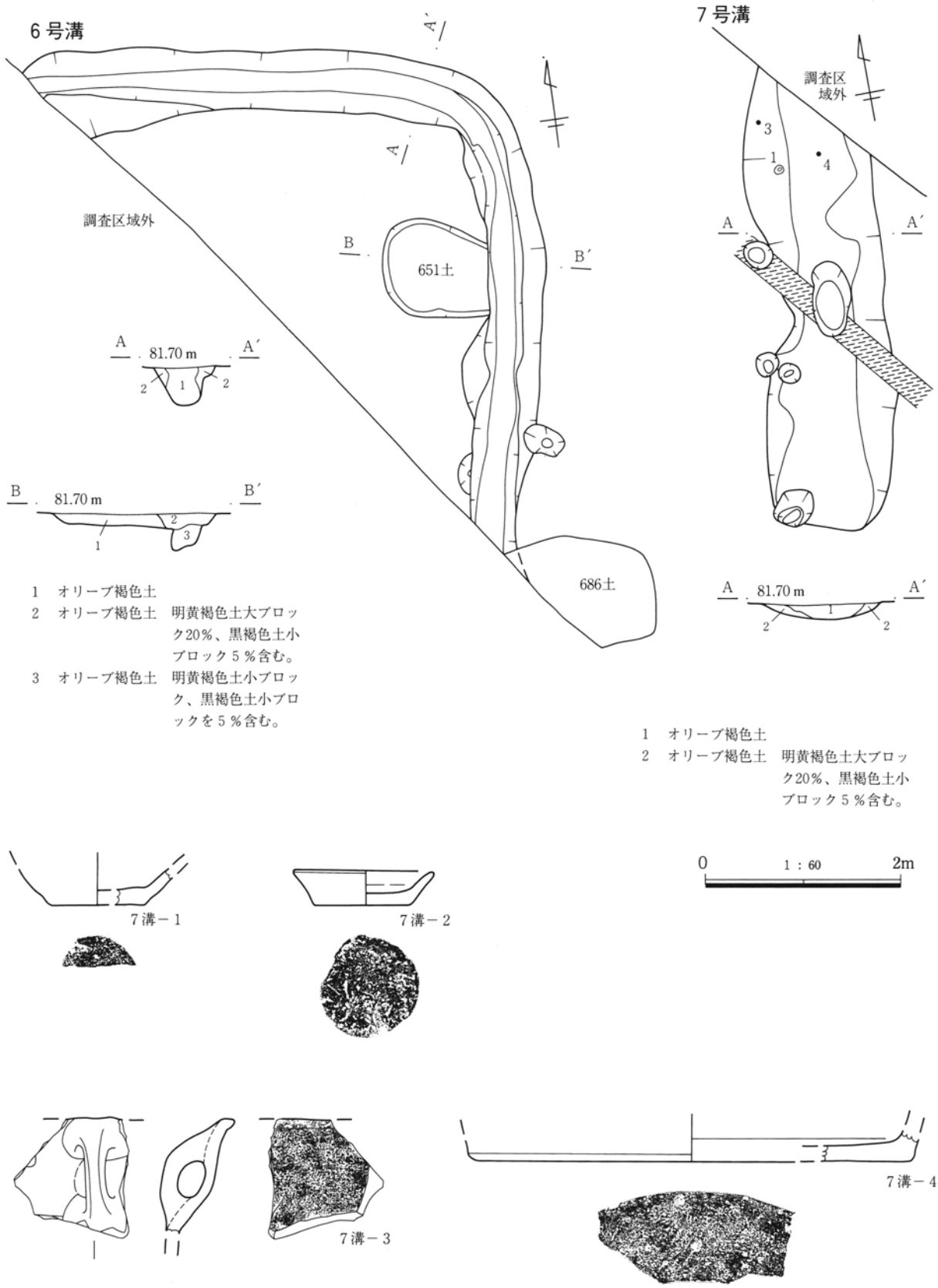
１区７号溝（PL 25-7、46）

位置　北堀内部分の中央部で、83Ｄ－０グリッドに位置する。

重複　15号柱穴列のＰ３と重複するが新旧関係は明確にできなかった。南側50㎝程には655・656号土坑が近接しており、これらの主軸方位は第３類に属する。

形態　ほぼ直線状。北端は北側調査区域外に延びるが、「上植木調査区」では符合するものとして東西方向に走向する溝状の遺構があり気にかかる。長さは4.28ｍ最大幅1.33ｍ、深さは断面観察部で16㎝である。走向方位Ｎ－９°－Ｅ。断面は皿状で、底面は丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

出土遺物　北壁底面近くから在地土器カワラケ（１・２）・鍋（３・４）が出土している。



第106図　1区6・7号溝・出土遺物

１区８号溝（PL 47）

位置　北堀内部分の中央部で、73Ｃ・Ｄ－９～83Ｃ・Ｄ－０グリッドに位置する。

重複　９号溝とは新旧関係不明だが、９号溝は本溝の西側へは延びていないため合流して並存か。

形態　ほぼ直線状。両端部とも調査区域外へ延びるが、北側は「上植木調査区」で未検出となる。長さは(7.70)ｍ、最大幅0.90ｍ、深さは断面観察部で21㎝である。走向方位はＮ－15°－Ｅ。断面はＵ字状で、底面は丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

出土遺物　埋土から１つは口縁部にススの付いた在地土器カワラケ（１・２）、石鉢（３）、時期不明の天目茶碗細片・施釉陶器片が出土している。

１区９号溝

位置　北堀内部分の中央部で、73Ｃ－９グリッドに位置する。

重複　８号溝とは新旧関係不明だが、本遺構は８号溝を越えて西側へは延びていないため合流して並存か。

形態　直線状で、南端は８号溝と合流。北端は「上植木調査区」へ連続する。長さは2.00ｍで、「上植木調査区」分を含めると6.5ｍ、最大幅は0.32ｍ、深さは断面観察部で16㎝である。走向方位はＮ－76°－Ｅ。断面はＵ字状で、底面は丸みを持つ。

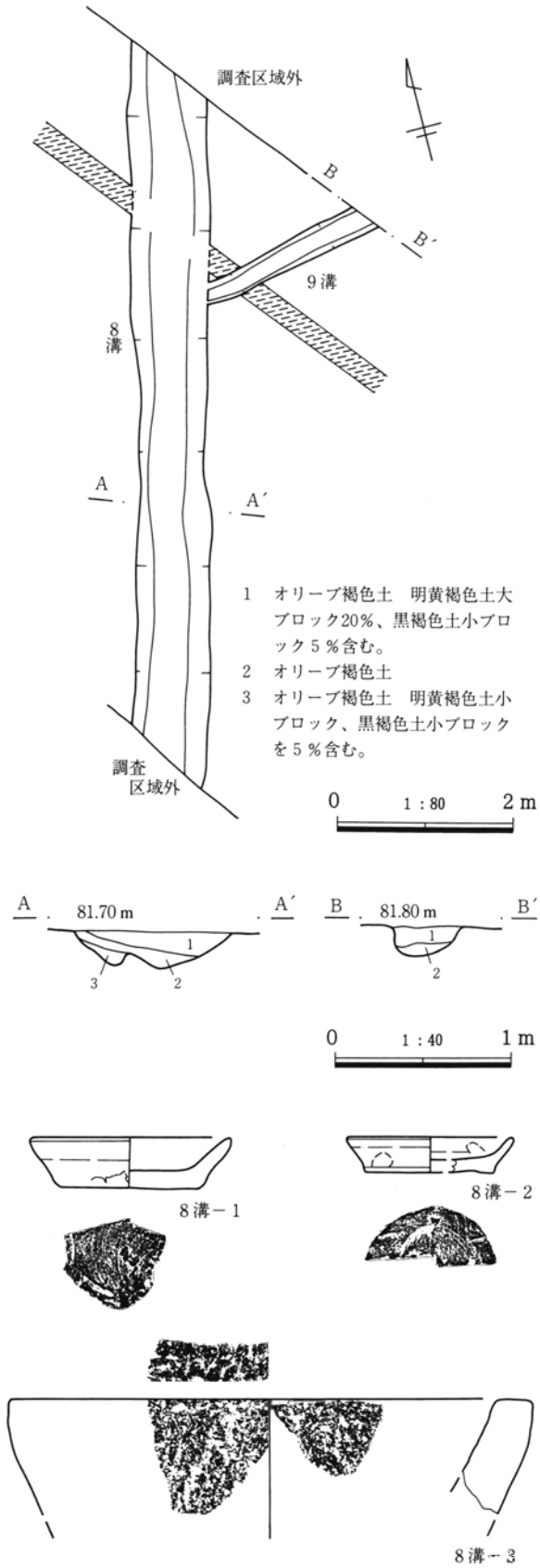
出土遺物　なし

１区10号溝（PL 25-8）

位置　調査区中央部で、73Ａ・Ｂ－８グリッドに位置する。

重複　753号土坑より新しく、４号落ち込みとは新旧関係不明。

形態　ほぼ直線状で、南端部は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がり、２号溝の南端部、３号溝の東端部の形状に類似する。北端は「上植木調査区」に連続するが立ち上がりも同様か不明。長さは(8.70)ｍで「上植木調査区」分を含めると13.5ｍ、最大幅は1.12ｍ、深さは断面観察部で24㎝である。走向方位はＮ－５°－Ｅ。断面は皿状で、底面はほぼ平坦。



第107図　１区８・９号溝・出土遺物

出土遺物　出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

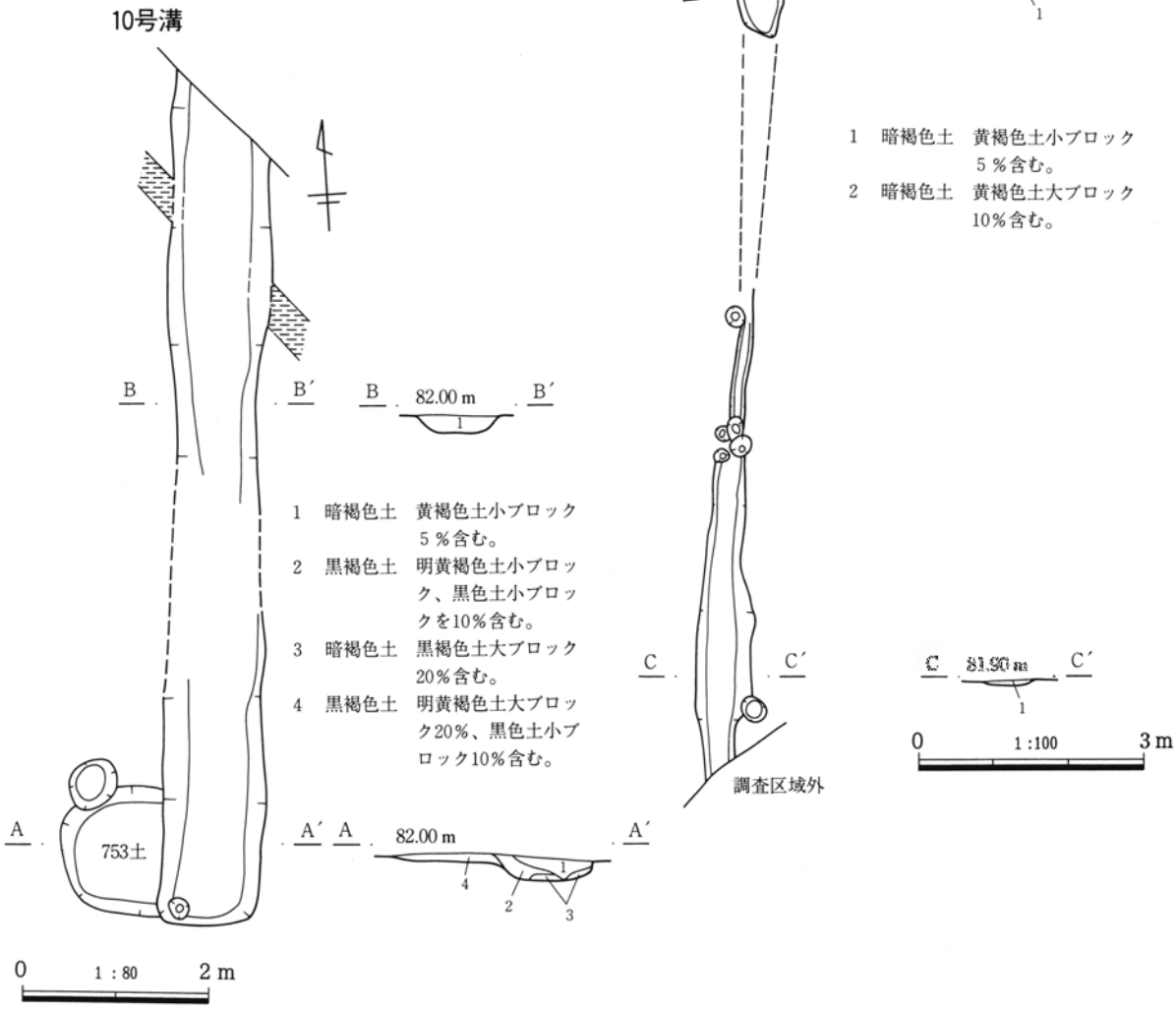
1区14号溝

位置　調査区中央部南寄りで、74H・I－7グリッドに位置する。

重複　912・916号土坑より古いが、後者は第3類に属する。また新旧関係は不明だが、柱穴と多く重複しており関連が想定される。

形態　ほぼ直線状だが、中央部で一度断裂するが同一溝。全体に削平によって残存状態が悪い。端部は東西ともに更に延びるが、西側は痕跡のみ。長さは東側が9.00m西側で(6.42)m、最大幅は1.40m、深さは断面観察部で17cmである。走向方位はN－86°－W。断面は皿状で、底面はやや凸凹する。

出土遺物　なし



第108図　1区10・14号溝

７．入口遺構

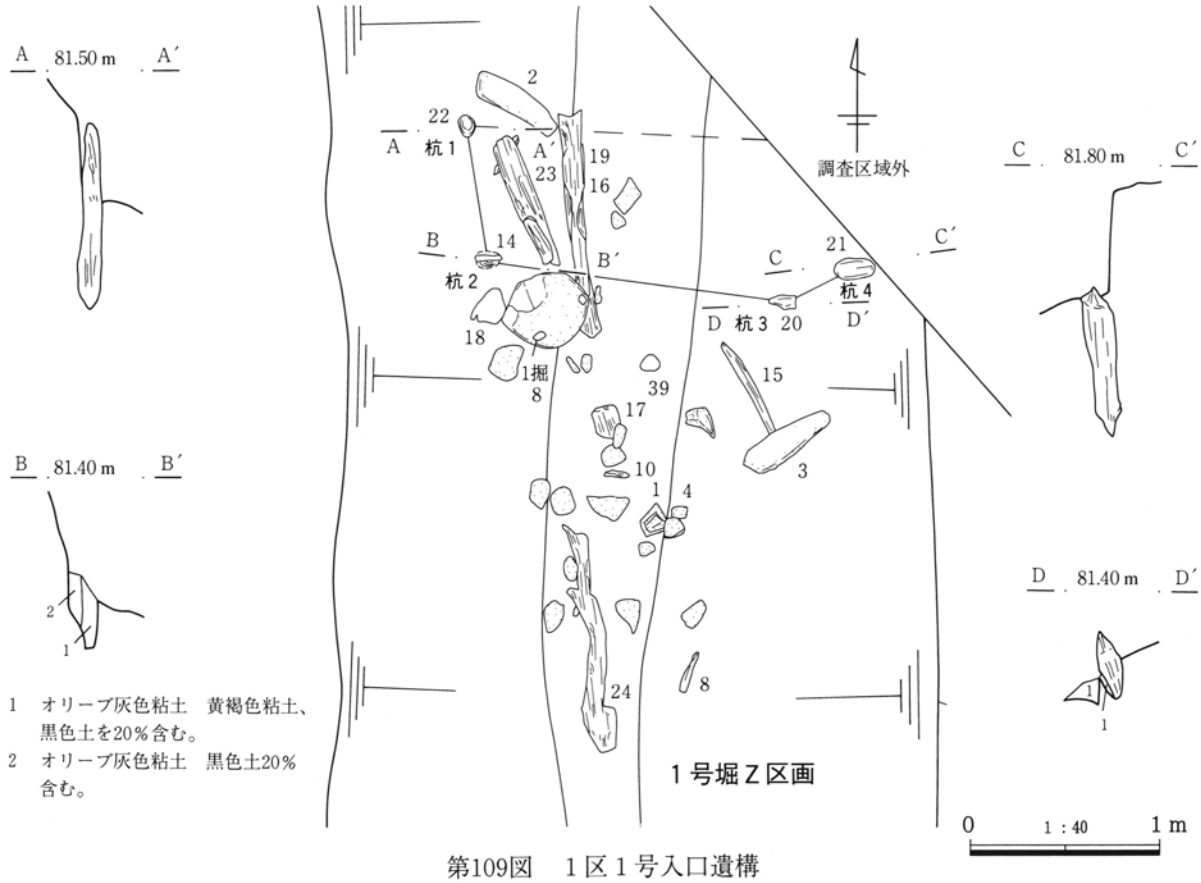
１区１号入口遺構（PL 26-1～4、27-1～3、47～49）

痕跡を含む４本の杭と柱材等の出土状況や出土遺物、また周辺の掘立柱建物跡の分布などを総合判断した結果、橋等の一部と考えて入口遺構と認定した。

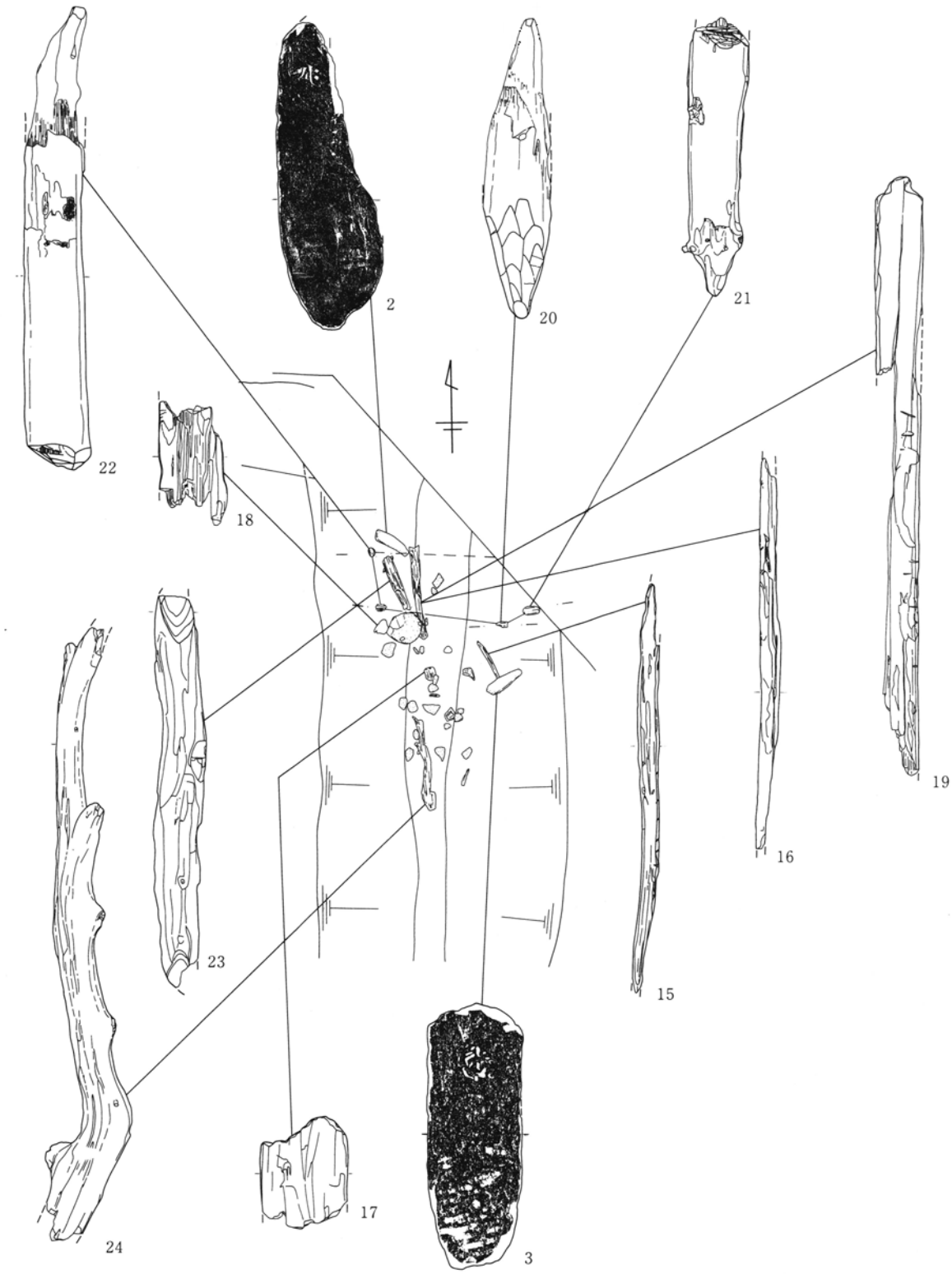
位置　１号堀の北端部で、73Ａ・Ｂ－６グリッドに位置する。

形態　この部分の１号堀の規模は、上幅3.08ｍ下幅0.72ｍ深さ1.20ｍである。この堀の西壁中位にクリ及びマツ属の丸太を使用した杭を伴う北から杭１・杭２（正確には杭痕跡）、同じく東壁中位に北から杭３・杭４が存する。杭１と杭２の間隔は60㎝で杭３と杭４の間隔は24㎝と符合しないことから、杭３の北側調査区域外に更に杭の存在を想定する。杭１は長さ88.3㎝と残存状況は良く、土中へ58㎝程打ち込まれている。また、杭２と杭３はともに掘り方を持っている。杭はすべて上端が鋭利で、入り口廃棄時に人為的に裁断した可能性がある。

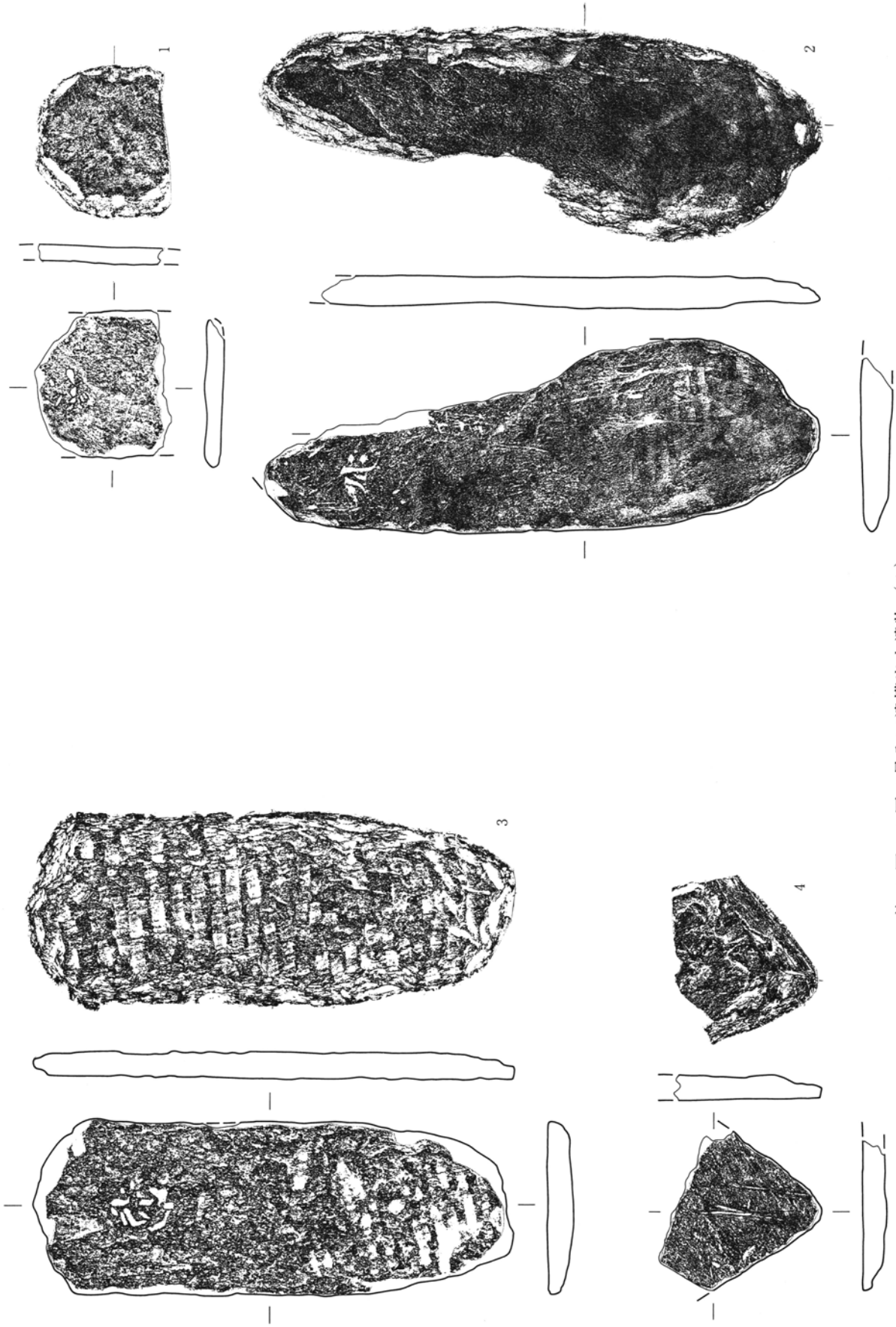
出土遺物　杭１～３のほか、木器・木製品が非常に多く出土している。柱材・角材にはホゾを持つもの(17～19)があり、角の整った角棒材もやや多く出土するが、未加工のものでも23・24のように十分部材として使用可能なものもある。これらの多くは杭の上部構造として橋等の部材であったものと想定される。その他、注目すべき遺物として板碑(１～４)があり、２は堀底面に３は堀肩部に投棄されることから、仮に１号入口遺構の橋部分が破却されたとすれば同時期に板碑も廃棄されたこととなり、板碑が本館跡と並存もしくは前出のものである傍証となる。また、前述のとおり本遺構が所在する１号堀Ｙ・Ｚ区画は土器・石器の出土量が多い部分であり、近くで漆器椀(１堀－49)が出土したとおり流木を含めて木器・木製品の出土量も多く、非常に生活に密着した領域であり、その点でも入口であることを証明する。



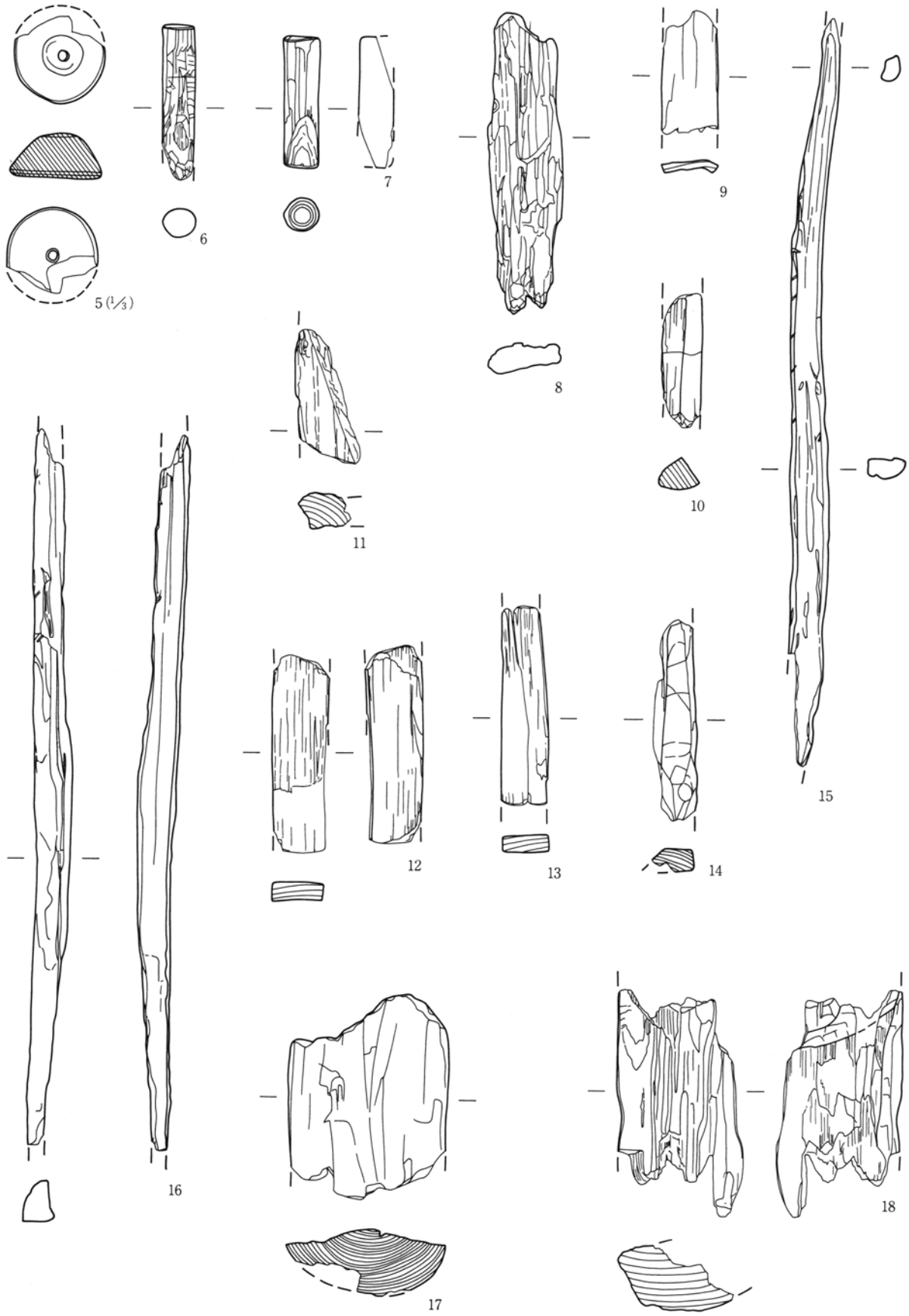
第109図　１区１号入口遺構



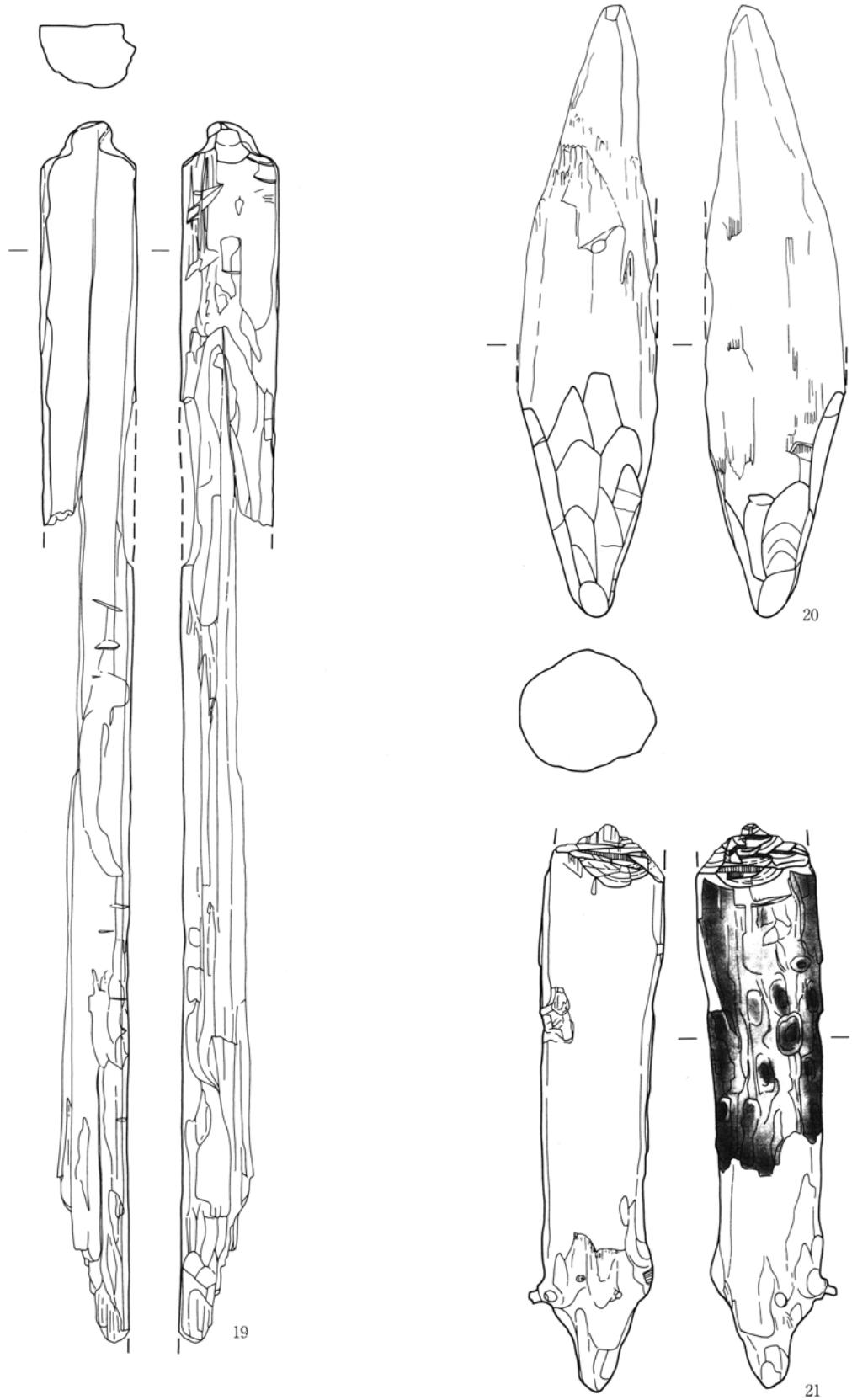
第110図　1区1号入口遺構遺物出土状況



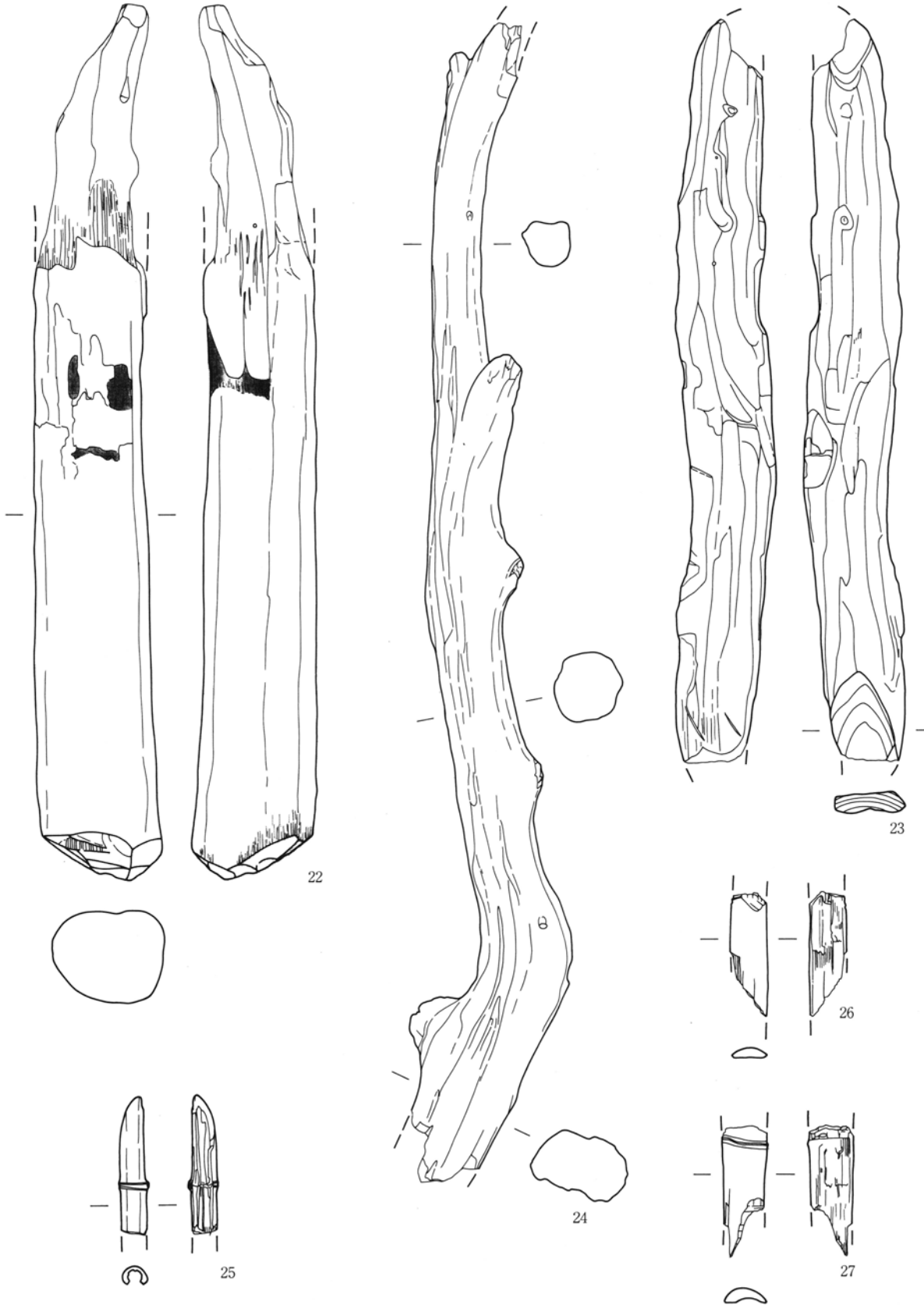
第111図　１区１号入口遺構出土遺物（１）



第112図　1区1号入口遺構出土遺物（2）



第113図　１区１号入口遺構出土遺物（３）



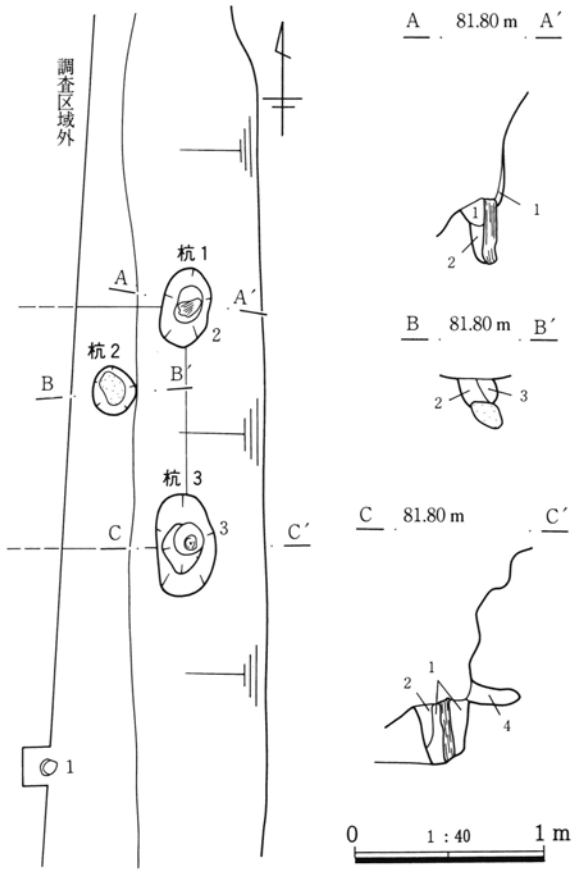
第114図　１区１号入口遺構出土遺物（４）

１区２号入口遺構（PL 27-4～8、49）

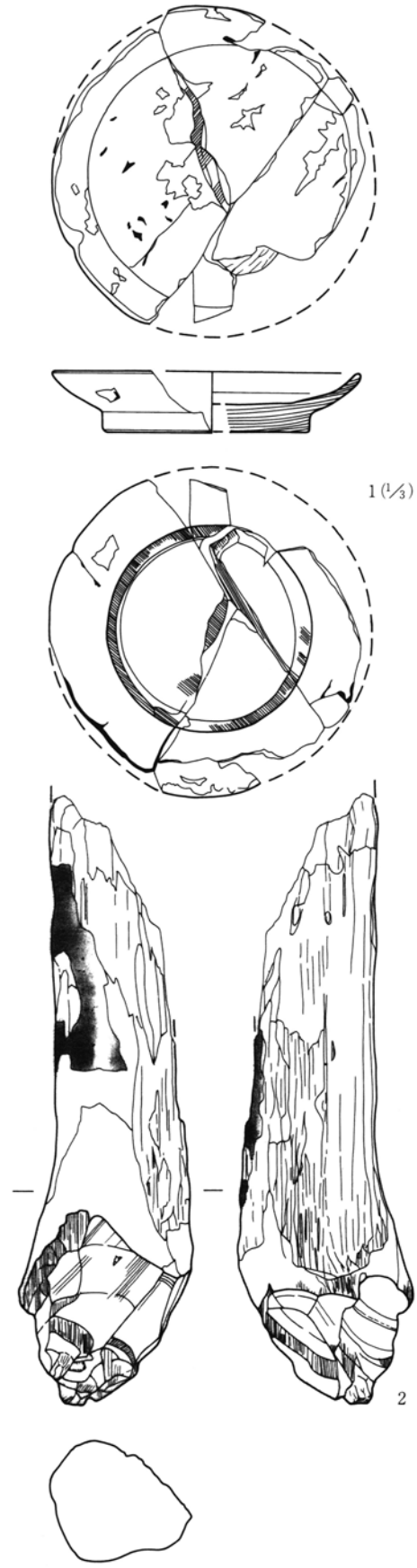
痕跡を含む３本の杭と周辺の柱穴列の分布などを加味して判断した結果、橋等の一部と考えて入口遺構と認定した。

位置　１号堀北側直線部の中央で、74Ⅰ－８グリッドに位置する。東側に隣接する11号柱穴列との関連が想起される。

形態　この部分では１号堀のほぼ西半分が調査区域外となっており、堀の規模は不明である。クリの丸太を使用した杭１と杭３はこの堀の東壁の中位に、杭２（正確には杭痕跡）はその底面壁際に存する。



1　灰色粘土　黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを５％含み、しまらない。
2　灰色粘土　しまらない。
3　黒灰色砂質土　しまらない。
4　黒灰色砂質土　黄褐色土小ブロック５％含み、しまらない。



第115図　１区２号入口遺構・出土遺物（１）

またこの堀の西壁にも対となる杭群が存在しているものと推測する。杭1と杭3の間隔は77㎝。杭1～3は全て掘り方を持ち、杭1と杭3はともに土中に34㎝程埋めるが、杭2は14㎝と浅く根石を置く。杭の上端は自然欠損。なお、杭1では水平方向にも支柱の存在を想起させる長さ28㎝程の掘り込みが検出された。

出土遺物　漆器皿(1)が堀底面で出土した以外、出土量は非常に少ない。

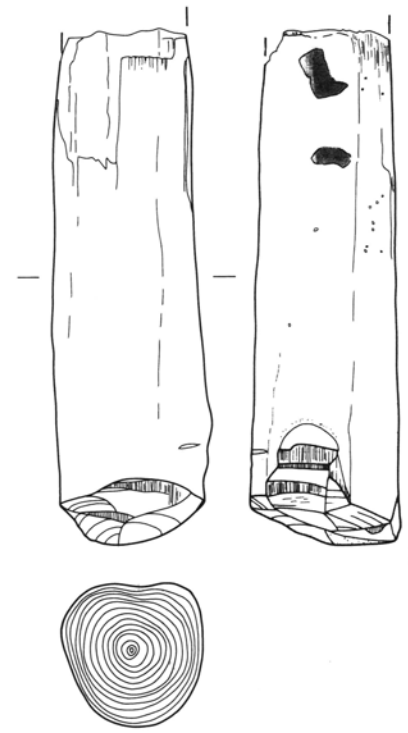
1区3号入口遺構と20・21号柱穴列（PL 28-1～4、49、50）

1号堀の折れ部であり、柱材等の出土状況と出土遺物や柱穴列の存在を総合判断した結果、橋等の存在を想定して入口遺構と認定した。

位置　南堀内部分の折れ部で、74F－6・7グリッドに位置する。

形態　1号堀折れ部の北と南では、1.5m程南側が東へ張り出す。北側の幅は上幅3.0m下幅0.84m深さ1.10m、南側は上幅2.38m下幅0.52m深さ0.76mである。堀内部分の20号柱穴列は全長4.27mで南北に走向し、P1は1号堀の西肩部に位置する。柱間は1.83～2.44mと一定しない。主軸方位はN－78°－W。柱穴はP1・P2が円形で、P3は方形。規模はP3が際立って大きく深いが、他は長径31㎝、短径23㎝、深さ36・32㎝とほぼ均一である。21号柱穴列は全長4.33mで南北に走向し、柱穴は全て1号堀東辺肩部に並行する溝状の落ち込み内に存するが、新旧関係不明。柱間は1.00～1.77mと一定しない。主軸方位はN－88°－E。柱穴はほぼ円形で、P1のみ根石を有する。規模はP1がやや大きいが、他は長径(26)～(29)㎝、短径(17)～(25)㎝、深さ18～32㎝でほぼ均一である。

出土遺物　出土量は少ないが、面取りされた角材・角棒材(2・6・8)が並んで出土している。なお、木材に並んで年齢7・8歳の壮齢馬の上顎のみの馬歯も出土しており、「下顎とは切り離された状態で埋存したか、堀内に埋存後水流等で上顎・下顎が分離したものと考えられ」(宮崎)、前者であるとすれば何らかの儀式的な側面も窺える遺物である。土器・石器の出土量は少ない。



第116図　1区2号入口遺構出土遺物（2）

1区4号入口遺構

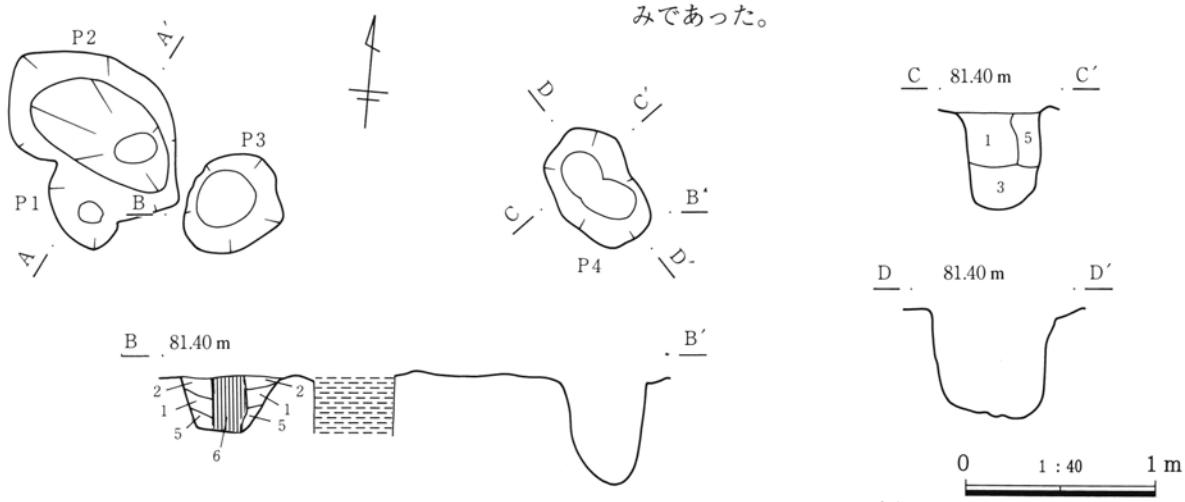
南堀内部分の南辺縁辺から北へほぼ160㎝の範囲は、非常に遺構の少ない空間（土塁の構築範囲か）であり、本遺構の部分だけが南へ突出した形状を示している。周辺の掘立柱建物跡の分布等も考慮した結果、土塁の開口部を想定して入口遺構と認定した。しかし他の入口遺構に比べ根拠が弱く、認定にやや無理があることも否定できない。

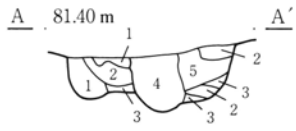
位置　南堀内部分の南辺縁辺部中央西寄りで、74D－8グリッドに位置する。

形態　本遺構はP1～P4の柱穴で構成されるが、P4は2基の柱穴の重複のため正確には5基の柱穴の集まりである。基本的にはP1～P3の一群とP4が対面して対をなす形態と考える。したがって2・3回の据え直しが想定される。P3とP4の間隔は2.04mを測る。柱穴はほぼ隅丸方形で、P2は際立って大きいが、他も長径56～66㎝、短径43～49㎝、深さ22～57㎝と柱穴としては大きい。本遺構と対応すべき遺構を、1号堀南面周辺で検出に努め

たが発見できなかった。本遺構は柱穴の規模や形態から門跡を想定するが、１号堀には簡便な板橋等を架けていたと想像する。

出土遺物　平安時代以前の遺物がＰ４に混入するのみであった。





1　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
2　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック40％、黒色土小ブロック10％含む。
3　明黄褐色土
4　オリーブ褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを５％含む。
5　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
6　明黄褐色土　灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。

第117図　１区４号入口遺構

８．井戸跡

１区１号井戸跡（PL 28-5、50）

位置　南堀内部分の南西端で、74Ｅ－８グリッドに位置する。４号掘立柱建物跡の南辺に隣接する。

重複　13号掘立柱建物跡のＰ４と重複するが新旧関係不明。16号掘立柱建物跡は直接柱穴の重複はないが、平面形が重なる。新旧関係不明。

確認面形状と規模　西側を著しく攪乱に壊されるがほぼ円形。径227×217㎝。

底面形状と規模　隅丸方形。径70×67㎝。

断面形　漏斗状　**深さ**　2.67ｍ

標高　上面81.35ｍ、底面78.68ｍ。

アグリ　最上部は深さ128㎝、標高80.04ｍで、底部まで不連続に数条見られる。深さ1.60ｍ付近が最大である。アグリの上下幅は139㎝を測る。

湧水　底面から相当量の湧水があり、Ⅺｃ層からも常時浸み出していた。

埋没状況　１ｍ強掘削した時点で湧水の影響で土層観察面が崩落してしまったため作図できず、また十分な観察もできなかった。目測では埋土は上面から下へ50㎝程までは暗褐色土で埋まるが、その下層を５㎝程灰色粘土が被覆し、以下橙色砂質土が堆積することから、人為埋填後灰色粘土で被覆したが更に沈下したため暗褐色土が堆積したものと解される。

出土遺物　埋土から漆器皿（１・２）、曲物の底板（３）、棒・丸棒材（４・５）が出土している。

１区２号井戸跡（PL 29-1・2、51、52）

位置　南堀内部分の西端で、74Ｆ－９グリッドに位置する。

重複　221号土坑よりも古い。

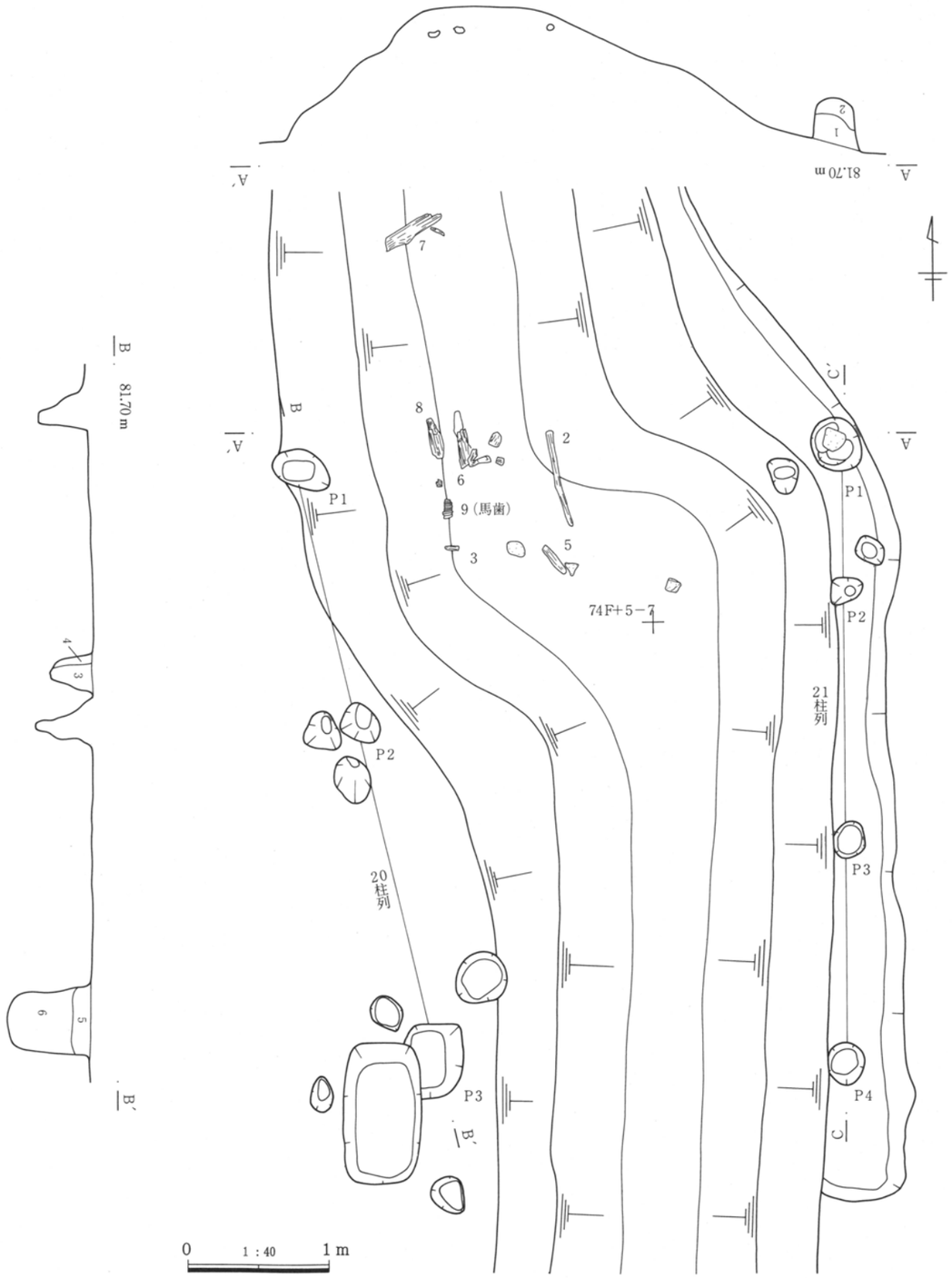
確認面形状と規模　ほぼ円形。径116×112㎝。

底面形状と規模　ほぼ円形。径92×85㎝。

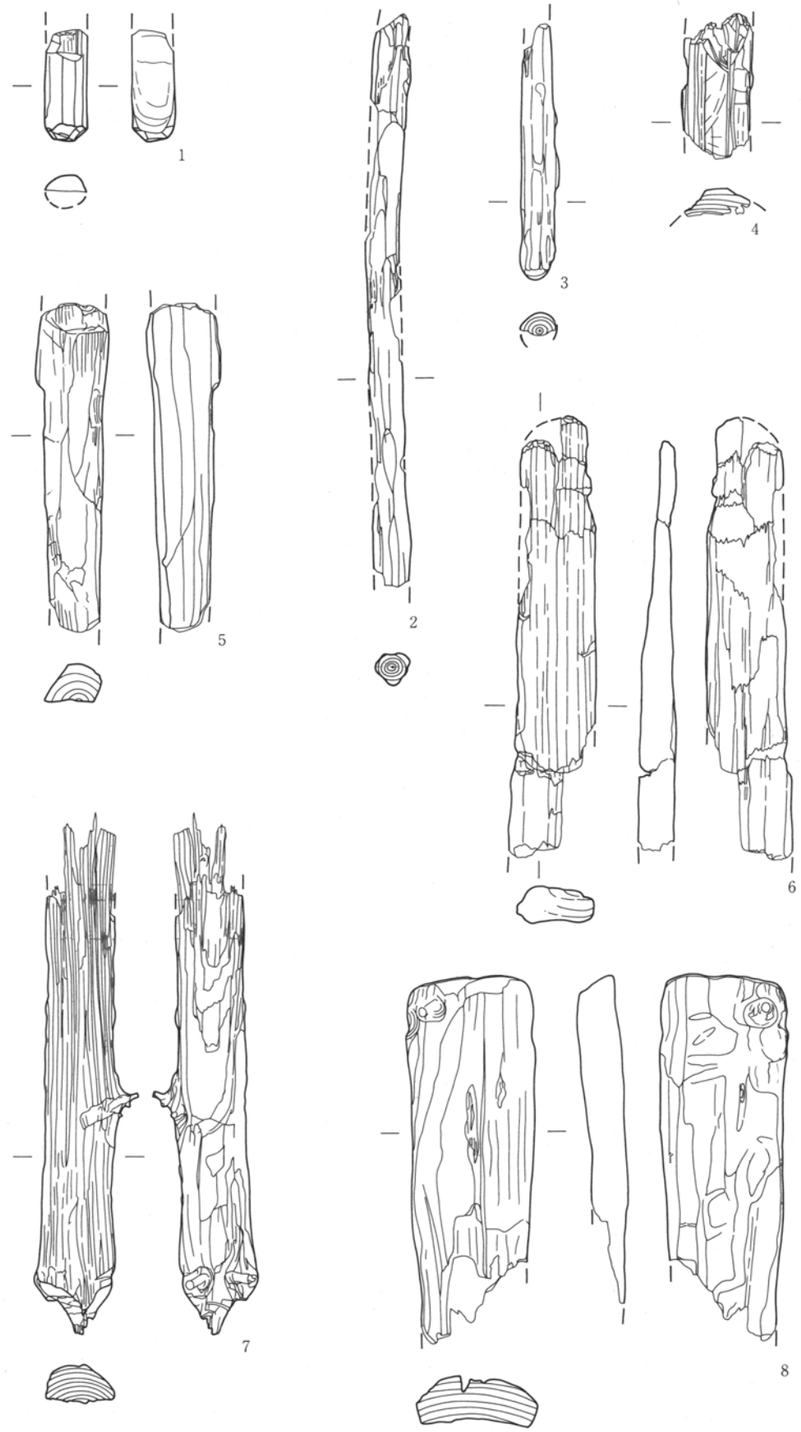
断面形　円筒形　**深さ**　2.95ｍ

標高　上面81.46ｍ、底面78.51ｍ。

アグリ　最上部は深さ94㎝（標高80.52ｍ）、以下底部まで不連続に見られる。３か所ほどやや大きくアグリが形成される。アグリの上下幅は201㎝を測る。



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
3　黒褐色土　明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10％含む。
4　黒褐色土　明黄褐色土大ブロック20％、黒色土小ブロック10％含む。
5　黒色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
6　黒色土



第118図　1区3号入口遺構・20・21号柱穴列・出土遺物

湧水　Ⅻ（砂礫層）から相当量の湧水があり、その上層ⅪbやⅨの砂質部分からも常時浸み出していた。

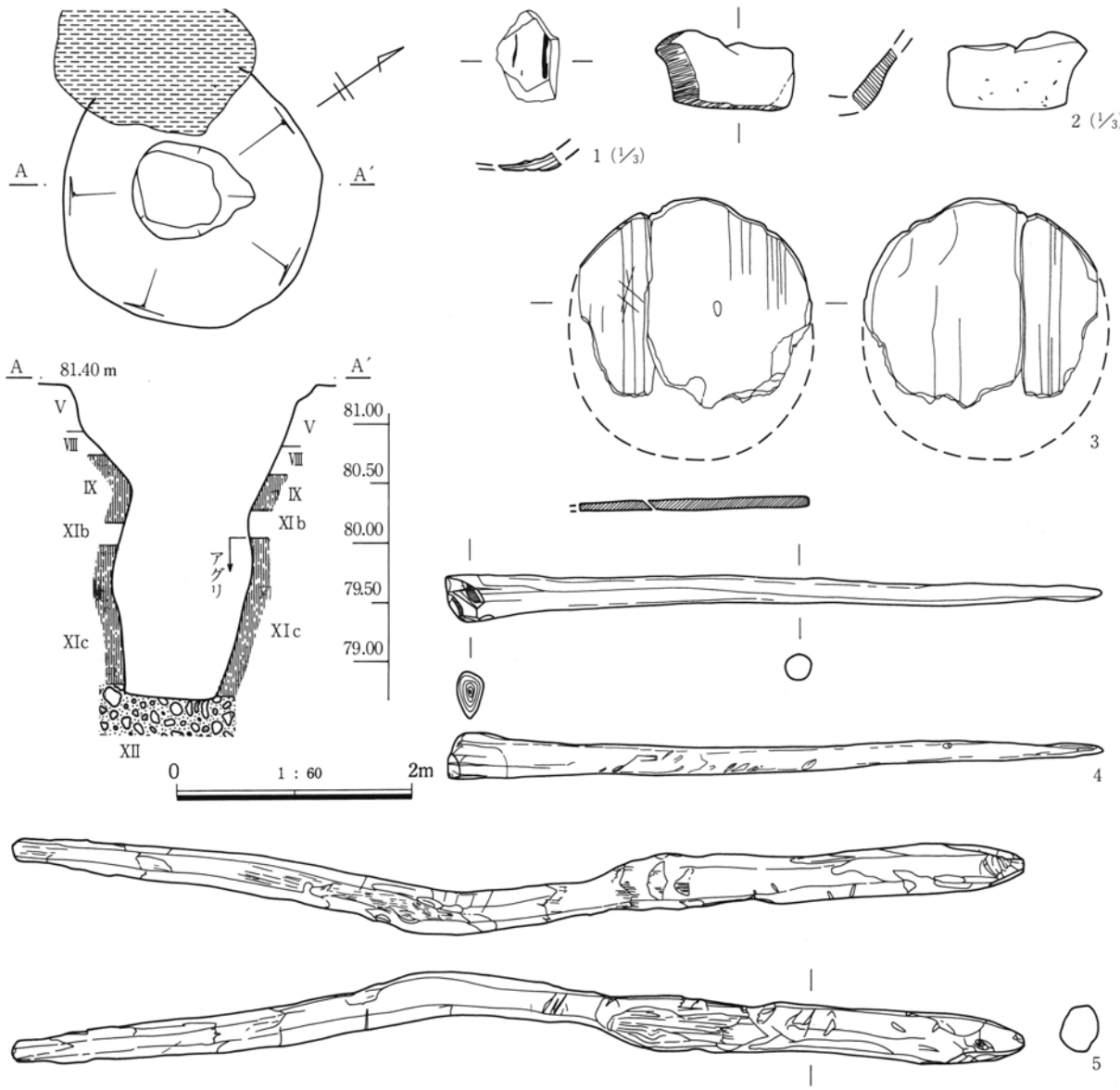
埋没状況　1m強掘削した時点で湧水の影響で土層観察面が崩落してしまったため作図できず、また十分な観察もできなかった。目測では埋土は上面から1m程までは灰～黄褐色粘土の大ブロックを主体としており、下から層厚70・15・20cmの3層に分層できる。また更に下層は黄褐色砂質土で埋まる。したがって黄褐色砂質土で人為的に埋填した後、灰～黄褐色粘土混土で埋めたが、埋土が更に沈下したため2度埋填したものと解される。これは結果として221号土坑の底面を意識的に平坦にしていることを意味する。

出土遺物　在地土器内耳鍋（1）、曲物の底板（2）、柱材（3）、角棒材（4）、未加工の又材・丸棒材（5～7）が出土している。

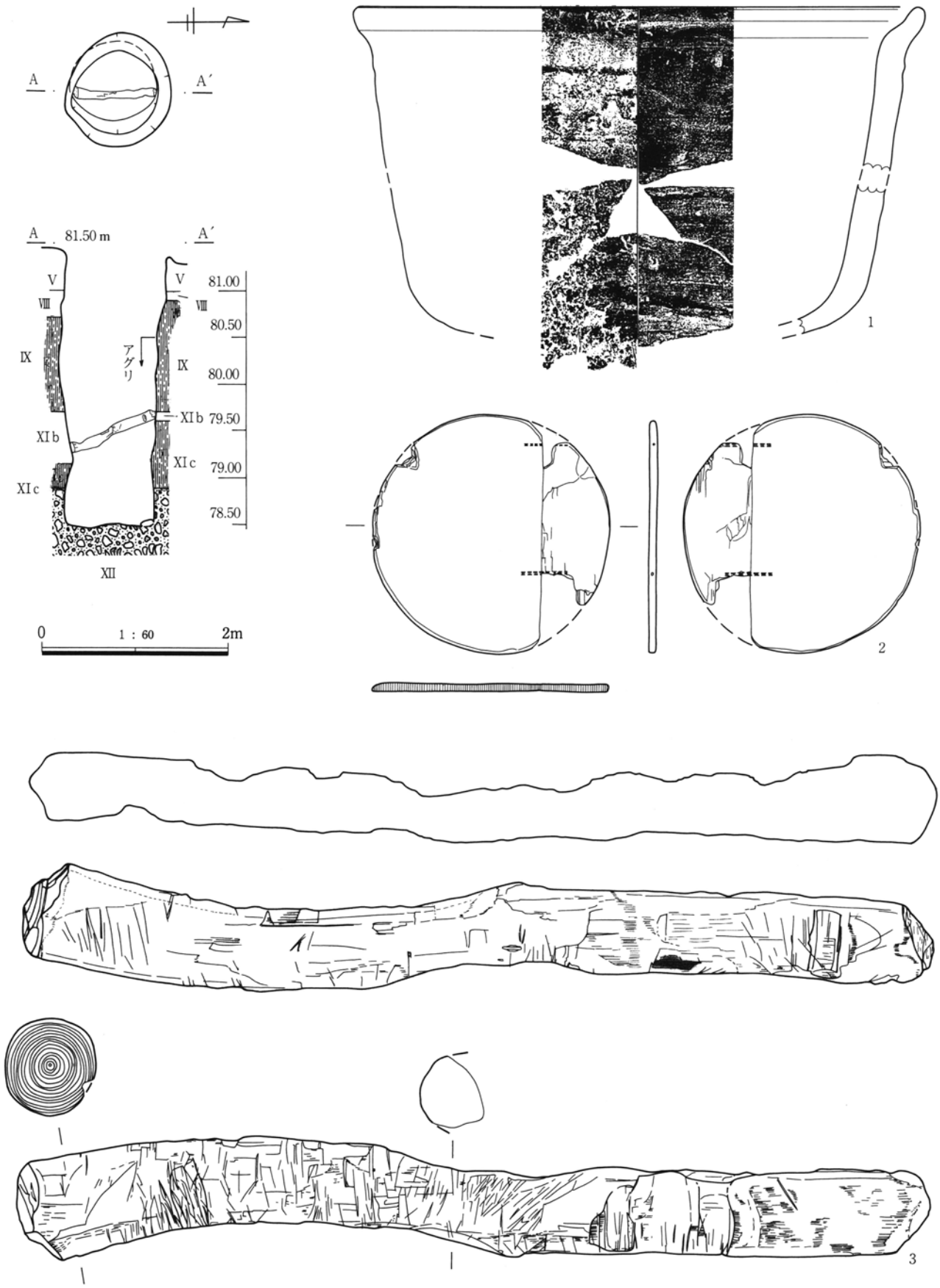
時期　出土遺物から14世紀後半に比定される。

1区3号井戸跡（PL 29-3・4、52）

位置　南堀内部分の南東端部で、74D－7グリッドに位置する。1号堀南東角部から西へ0.5m程をとる。1号堀南辺の北壁の上端20cm程を切り込んで付



第119図　1区1号井戸跡・出土遺物



第120図　１区２号井戸跡・出土遺物（１）

設される。

重複　1号堀と重複し、平面確認では1号堀の埋土が本遺構の重複部分を被覆していたが、それは1号堀埋土の最上部で新旧関係を示す証左にならない。ただし、本遺構が1号堀埋没後さく井されたものでないことはほぼ判明する。したがって、両遺構は並存していたとするのが妥当と考える。

確認面形状と規模　楕円形。径131×119㎝。

底面形状と規模　不整円形。径94×93㎝。

断面形　やや上面に向かって開く円筒形。

深さ　2.83m

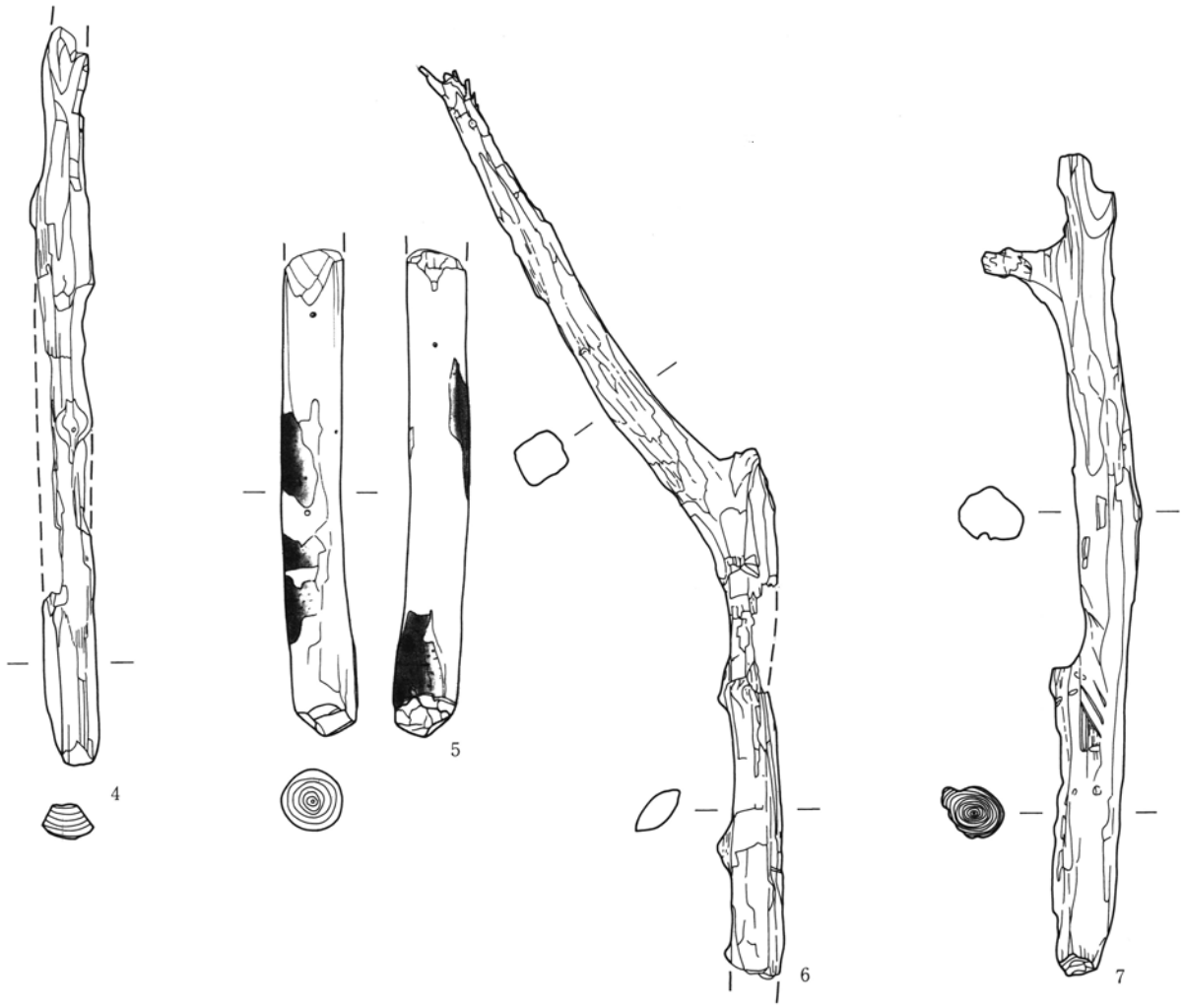
標高　上面81.27m、底面78.44m。

アグリ　最上部は深さ80㎝（標高80.38m）、以下底部まで不連続に見られる。2か所ほどやや大きくアグリが形成される。アグリの上下幅は203㎝を測る。

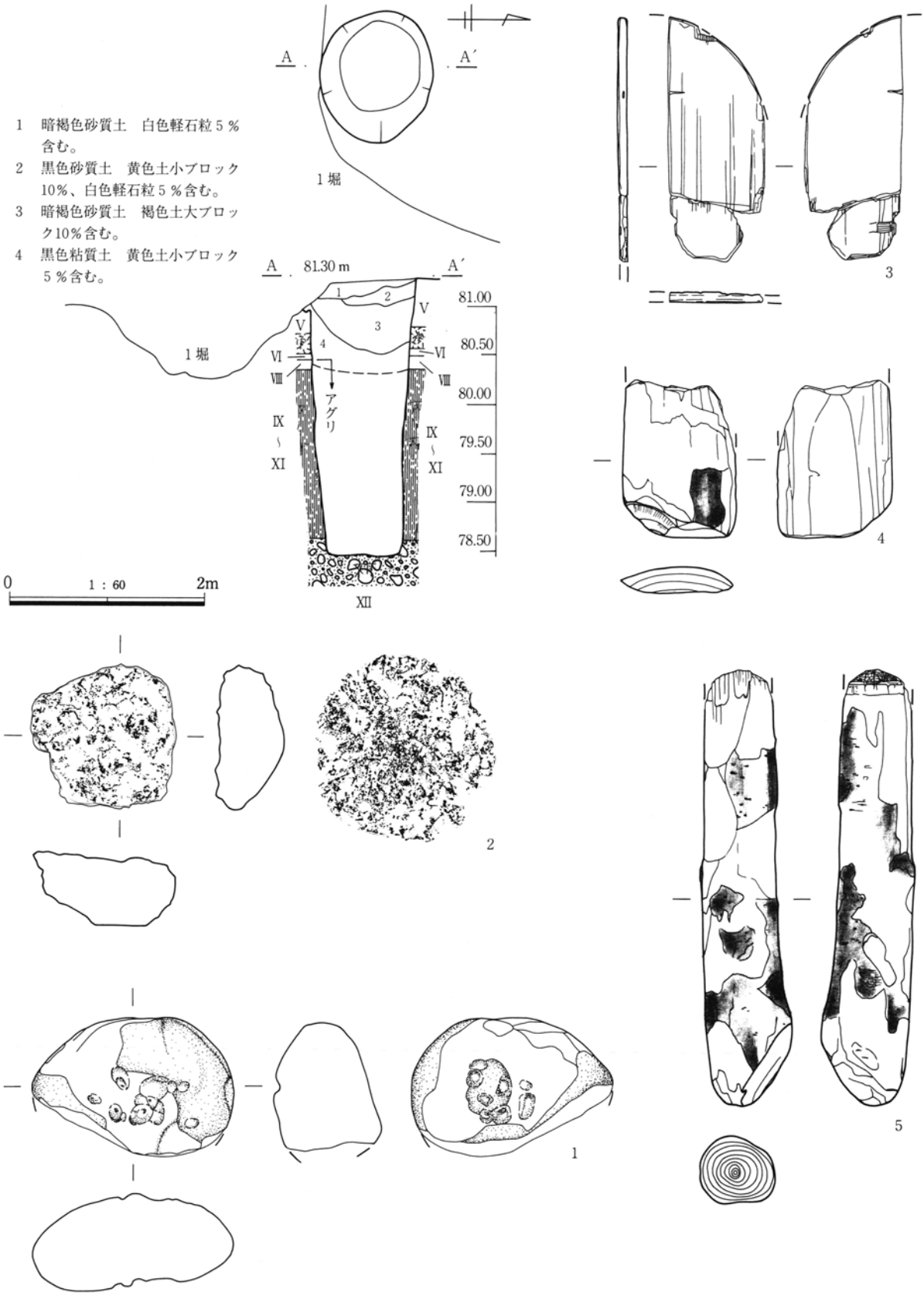
湧水　Ⅻ（砂礫層）から相当量の湧水があり、その上層Xの中位以下からも常時浸み出していた。

埋没状況　土層観察断面では周囲からほぼ均一に土砂が流れ込んだ自然埋没の様相を示すが、掘削の際深さ1m以下の埋土は橙色砂質土であったことから人為埋填された後、埋土の沈下も作用しながら徐々に自然埋没したと考える。

出土遺物　曲物の底板（3）、板材（4）、未加工の丸棒材（5）、凹み石（1）が出土している。椀形鉄滓（2）は混入か。



第121図　1区2号井戸跡出土遺物（2）



第122図　１区３号井戸跡・出土遺物

1区4号井戸跡（PL 29-5、52）

位置　南堀内部分の南西端で、74E－9グリッドに位置する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　ほぼ円形。径108×107㎝。

底面形状と規模　不整楕円形。径100×78㎝。

断面形　円筒形

深さ　2.49m。底面は砂礫面に達していないが、ピンポールで数度試したところ10㎝程下位が砂礫層であると見られる。

標高　上面81.34m、底面78.85m。

アグリ　最上部は深さ92㎝（標高80.40m）、以下底部まで不連続に見られる。アグリの上下幅は157㎝を測る。

湧水　Ⅸ以下から常時浸み出しがあるが、Ⅺbで顕著である。

埋没状況　1m強掘削した時点で湧水の影響で土層観察面が崩落してしまったため作図できず、また十分な観察もできなかった。目測では深さ約1m以上の埋土は、灰～黄褐色粘土の大ブロックを主体として東側から埋填され、その上に25㎝程暗褐色土を入れる。更に西側半分には黄褐色粘土が堆積する。また深さ1m以下の埋土は不明である。本遺構は東側からの人為埋填が良好に観察されるため、埋没後の埋土の沈下も殆どなく、非常に丁寧に人為埋填されたものと評価できる。

出土遺物　被熱して炭化した未加工の丸棒材（1）が出土している。

1区5号井戸跡（PL 29-6・7、52）

位置　北堀内部分の中央部で、83D・E－0グリッドに位置する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　不整円形。径246×(211)㎝。

底面形状と規模　不整円形。径72×70㎝。

断面形　漏斗状　**深さ**　2.76m

標高　上面82.15m、底面79.39m。

アグリ　最上部は深さ126㎝（標高80.90m）、以下底部まで不連続に見られる。底面近くに最大部がある。アグリの上下幅は150㎝を測る。

湧水　底面からの湧水はなく、底面から10㎝程高い部分（灰色砂）からの湧水多い。

埋没状況　底面から3分の2程までは黄色砂を多く含んだ暗褐色土で埋め、更に上層に均質な暗褐色土が堆積するが、最上部中央は黄褐色砂を入れて締め固める。

出土遺物　在地土器鉢（1）、香炉？（2）、鍋（3）、漆器椀（5）、丸棒材（6）、敲石（4）が出土している。

1区7号井戸跡（PL 29-8、52）

位置　北堀内部分の東端で、73B－9グリッドに位置する。1号堀から西へ7m程をとる。

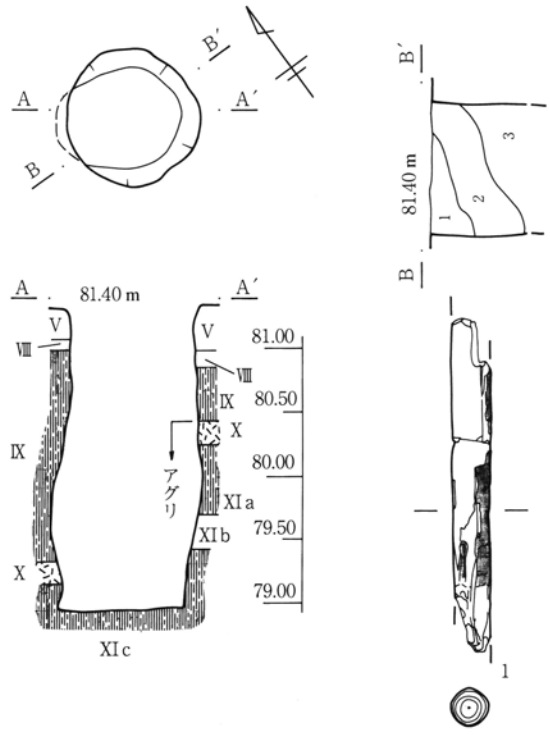
重複　なし

確認面形状と規模　南側3分の1程が調査区域外となるが、ほぼ円形。径151×130㎝。

底面形状と規模　隅丸方形。径62×62㎝。

断面形　漏斗状

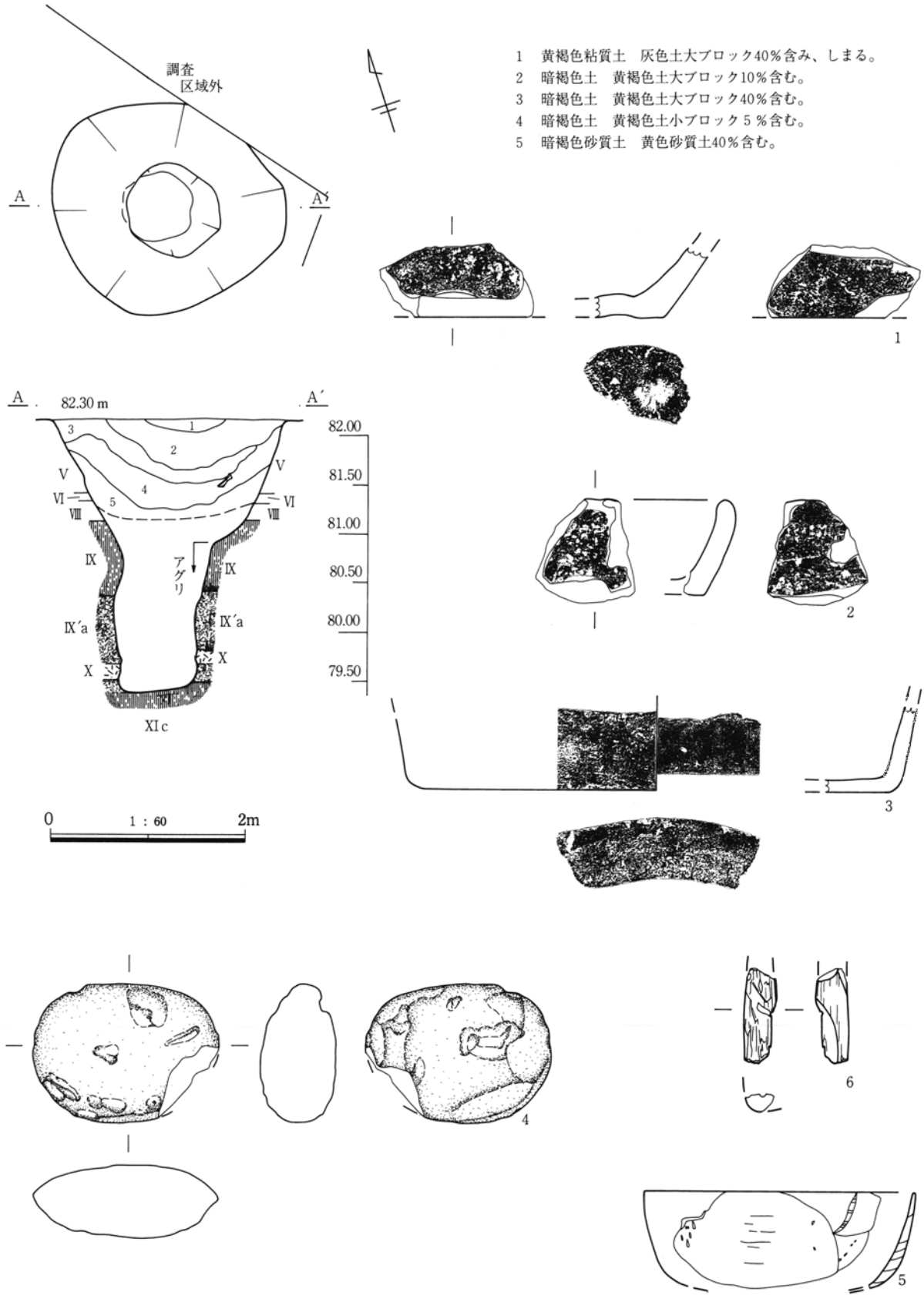
深さ　2.48m。底面は砂礫面に達していないが、ピンポールで数度試したところ70㎝程下位が砂礫層で



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック5％含む。
2　暗褐色土　黄褐色土大ブロック40％含む。
3　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。

0　1：60　2m

第123図　1区4号井戸跡・出土遺物



第124図　１区５号井戸跡・出土遺物

あると見られる。

標高　上面82.12m、底面79.64m。

アグリ　最上部は深さ86cm（標高81.24m）、最下部は深さ215cm（標高79.95m）で、その上下幅は129cmを測る。

湧水　底面から少量の湧水あり。

埋没状況　土層観察断面が中心から外れていたため詳細は不明で、自然埋没か人為埋填か確認できなかった。

出土遺物　在地土器内耳鍋（1）、石臼下臼（2）が出土している。

1区8号井戸跡（PL 30-1・2、52）

位置　調査区中央部で、74Ⅰ－7グリッドに位置する。25号掘立柱建物跡の南辺に接する。

重複　なし

確認面形状と規模　楕円形。径151×117cm。

底面形状と規模　楕円形。径65×48cm。

断面形　南北方向に開いた漏斗状。

深さ　1.95m。底面は砂礫面に達していないが、ピンポールで数度試したところ75cm程下位が砂礫層であると見られる。

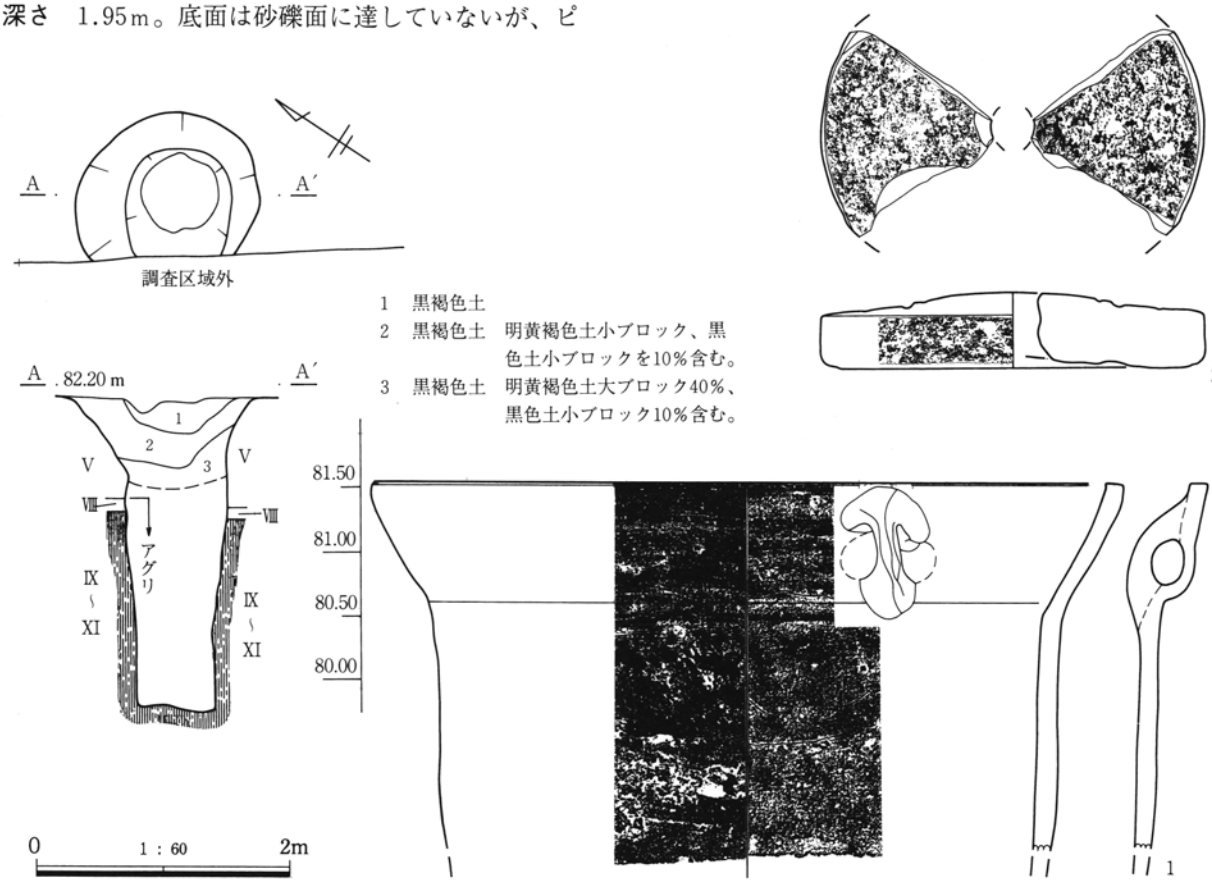
標高　上面81.86m、底面79.91m。

アグリ　最上部は深さ36cm（標高81.50m）、最下部は深さ167cm（標高80.19m）で、その上下幅は131cmを測る。

湧水　底面から上へ29cm以下から常時浸み出していた。

埋没状況　底面から30cm程上位に本遺構の内径とほぼ等しい巨円礫があり、廃棄時に投棄されたものと考える。埋土は黄褐～褐色土の大ブロックを含んだ黒～黒褐色砂質土で上面まで人為埋填される。また、西壁から15cm程離れた位置にほぼ垂直な立ち上がりが見られ、井戸枠の痕跡である可能性がある。

出土遺物　未加工の用材（1～4）が出土している。



第125図　1区7号井戸跡・出土遺物

１区９号井戸跡（PL 30-3・4）

位置　調査区中央部で、74Ｉ・Ｊ－７・８グリッドに位置する。23号掘立柱建物跡の内部ほぼ中央に存しており、これは上屋と考えられる。

重複　904号土坑と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模　楕円形。径156×137㎝。

底面形状と規模　不整円形。径58×50㎝。

断面形　上面に向かって開く円筒形。

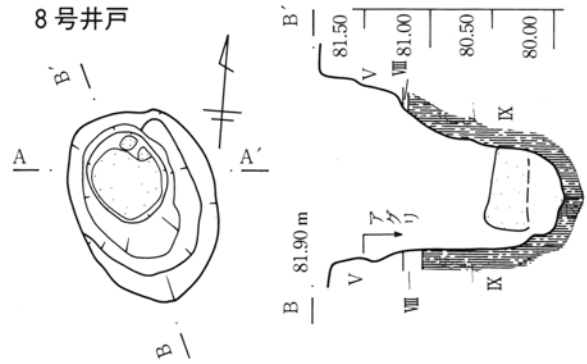
深さ　2.38ｍ。底面は砂礫面に達していないが、ピンポールで数度試したところ30㎝程下位が砂礫層であると見られる。

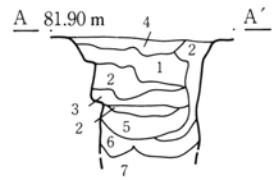
標高　上面81.94ｍ、底面79.56ｍ。

アグリ　最上部は深さ148㎝（標高80.44ｍ）、最下部は深さ212㎝（標高79.80ｍ）で、その上下幅は64㎝を測る。アグリはあまり顕著ではない。

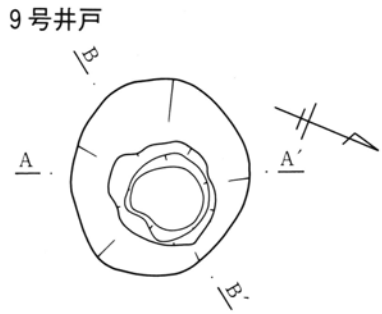
湧水　底面から上へ20㎝以下から少量浸み出していた。

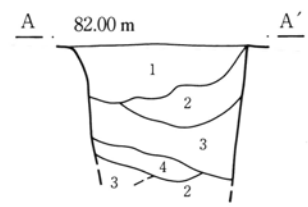
埋没状況　上面から約70㎝以下までは、南側から人為埋填される。　**出土遺物**　なし



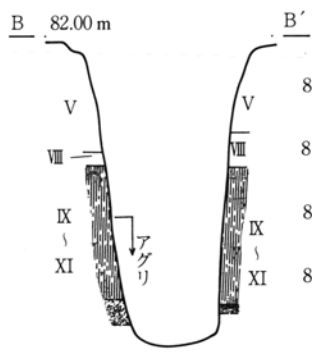


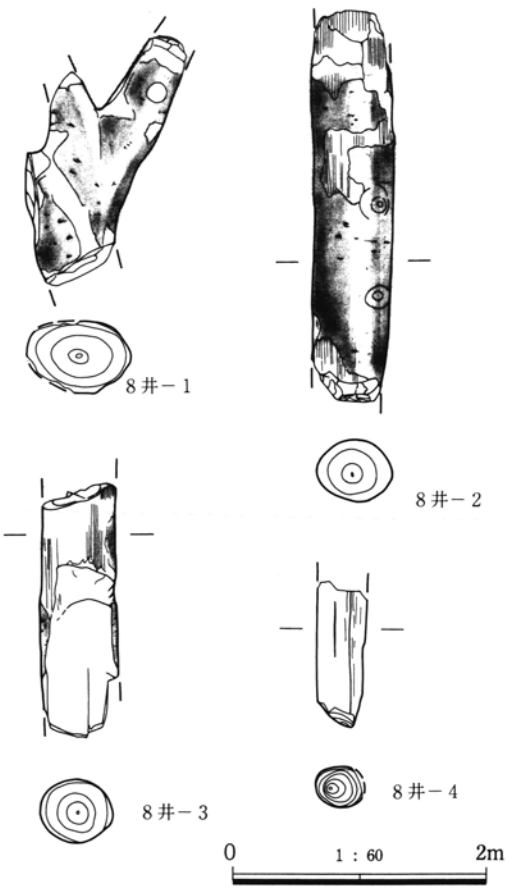
1　黒褐色砂質土　褐色土大ブロック、黄褐色土大ブロックを10％含む。
2　暗褐色砂質土　褐色土大ブロック、黄褐色土大ブロックを20％含む。
3　黒色砂質土
4　暗褐色土　黄褐色土小ブロック５％含む。
5　黒褐色砂質土
6　黒色砂質土　褐色土大ブロック、黄褐色土大ブロックを10％含む。
7　黒色粘質土　砂20％含む。腐植に富む。



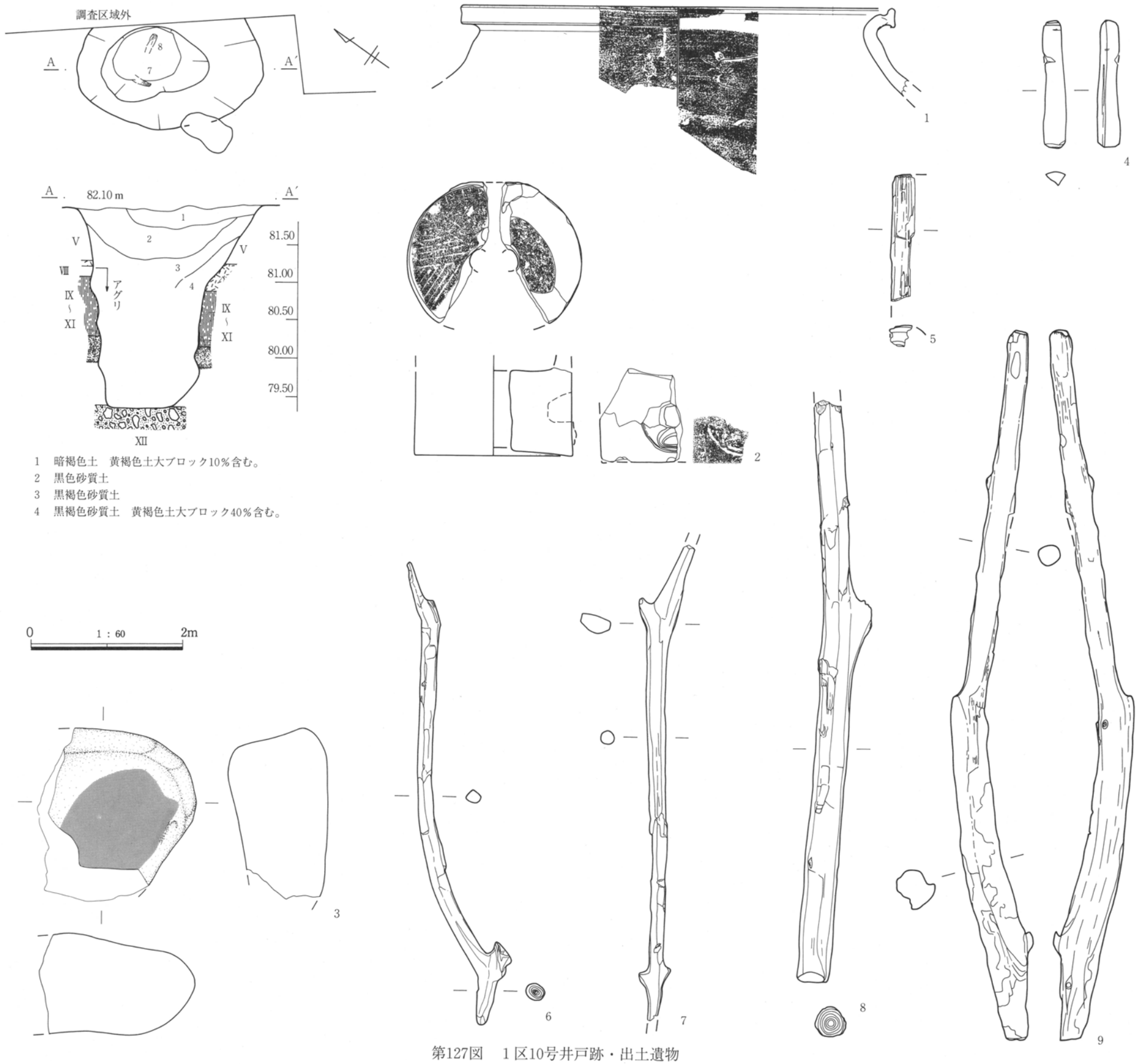


1　暗褐色砂質土　灰黄色土大ブロック10％含む。
2　暗褐色砂質土
3　暗褐色砂質土　灰黄色土大ブロック20％含む。
4　暗褐色砂質土と灰黄色土の混土。





第126図　１区８・９号井戸跡・出土遺物



1　暗褐色土　黄褐色土大ブロック10％含む。
2　黒色砂質土
3　黒褐色砂質土
4　黒褐色砂質土　黄褐色土大ブロック40％含む。

第127図　1区10号井戸跡・出土遺物

1区10号井戸跡（PL 30-5・6、53）

位置　調査区中央部で、73A－7・8グリッドに位置する。1号堀上面から東へ7m程をとる。

重複　21号掘立柱建物跡のP1と重複するが新旧関係は確認できなかった。

確認面形状と規模　北半分が調査区域外となるが楕円形か。径246×(141)cm。

底面形状と規模　不整円形。径90×68cm。

断面形　漏斗状　**深さ**　2.65m

標高　上面82.02m、底面79.37m。

アグリ　最上部は深さ82cm（標高81.16m）、以下底部まで不連続に見られる。3か所ほどやや大きくアグリが形成される。アグリの上下幅は183cmを測る。

湧水　底面から相当量の湧水があり、底面から上位約70cm以下からも常時浸み出していた。

埋没状況　上面から深さ1m程までは黄褐色土大ブロックを多く含んだ黒褐色土で人為埋填され、その後は均質な黒色砂質土が堆積する。

出土遺物　埋土から焼締陶器甕(1)、茶臼上臼(2)、磨石(3)、棒状木製品(4)、棒材(5・6)が出土し、底部近くで未加工の用材(8・9)が立置した状態で出土した。

1区11号井戸跡（PL 30-7・8）

位置　南堀内部分の中央部で、74F－8グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡の東辺に接する。

重複　なし

確認面形状と規模　整った円形。径108×106cm。

底面形状と規模　不整形。径59×54cm。

断面形　円筒形　**深さ**　2.69m

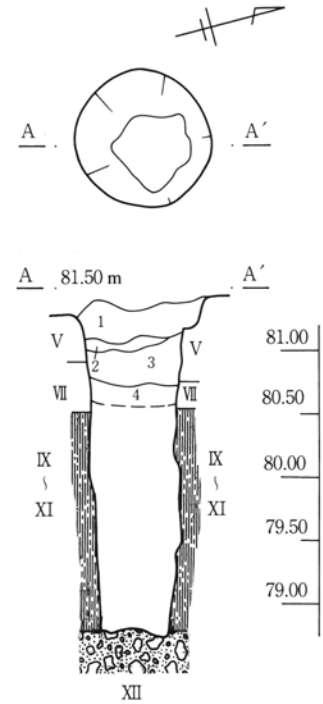
標高　上面81.45m、底面78.76m。

アグリ　最上部は深さ128cm（標高80.14m）、以下底部まで不連続に見られる。2か所ほどやや大きくアグリが形成される。アグリの上下幅は141cmを測る。

湧水　底面から少量の湧水があり、底面から上位約80cm以下からも常時浸み出していた。

埋没状況　上面から深さ60cm程までは黒色砂質土で人為埋填し、その後は暗褐色土→褐色土→黒色土の順で締め固める。これは埋土の沈下に対処して数度の埋填を行ったものと解される。

出土遺物　なし



1　黒褐色砂質土　黄褐色土小ブロック5％、白色軽石粒1％含み、しまる。
2　褐色粘質土　ややしまる。
3　暗褐色砂質土　黄褐色土小ブロック5％含み、ややしまる。
4　黒色砂質土　黄褐色土小ブロック1％含み、しまらない。

0　1：60　2m

第128図　1区11号井戸跡

第２項　２区～４区

１．掘立柱建物跡・柱穴列

３区１号掘立柱建物跡（PL 31-1）

位置　調査区の中央部で、72D－０・１グリッドに位置する。

重複　なし　**主軸方位**　N－80°－W

形態　身舎は２×３間（3.22×5.58～5.65ｍ）の東西棟で、北側に0.82ｍの間隔をとって庇が付き、全体として3.84×5.58～5.65ｍ、（11＋２）×19尺の規模である。桁行の柱間は６尺と6.5尺である。南辺の西南角柱穴は削平されて消滅した可能性があるが、Ｐ６とＰ７の間には柱穴は検出されなかった。Ｐ５・Ｐ８の存在から考えて総柱建物跡であったかもしれない。北辺及び庇部分の柱穴はほぼ等間隔である。柱穴は柱軸にほぼ載っている。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、Ｐ２が特に小さいが、他も長径26～42㎝、短径19～33㎝、深さ12～42㎝で数値にばらつきがある。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし

４区１号掘立柱建物跡（PL 31-2・3）

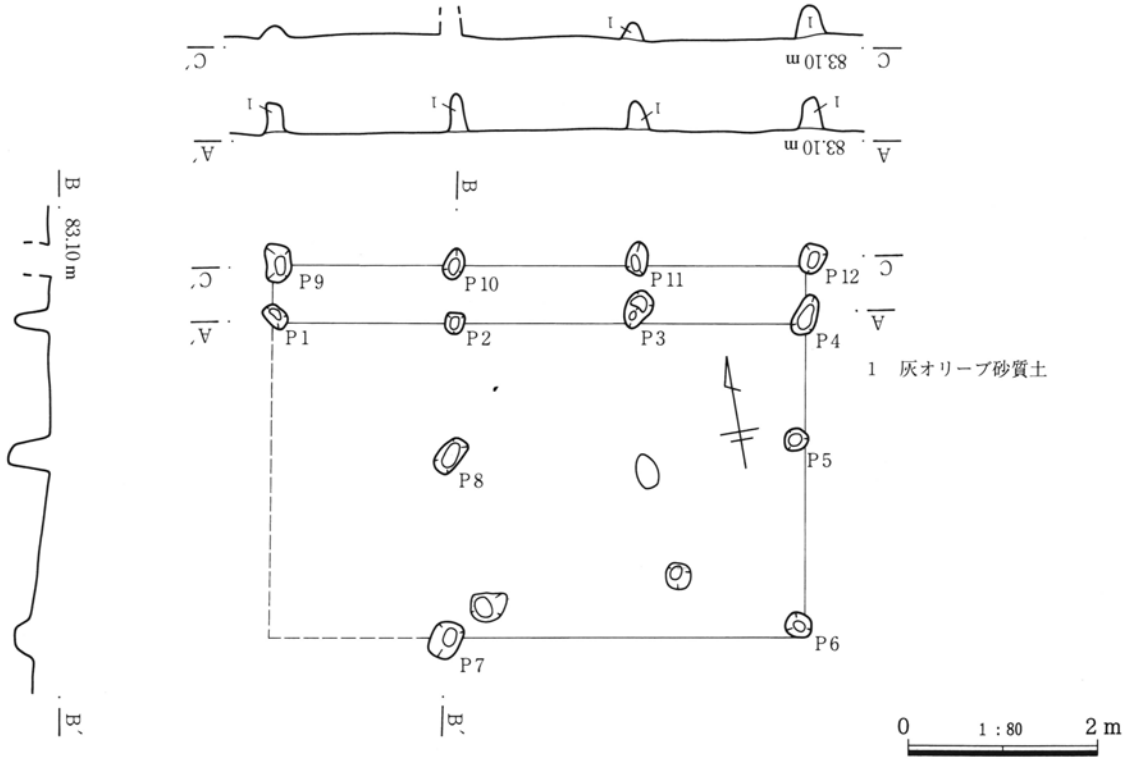
位置　調査区の東南部で、73H－５・６グリッドに位置する。

重複　Ｐ７は32号土坑と重複するが新旧関係不明。

主軸方位　N－13°－E

形態　２×２間（2.40～2.47×3.98～4.25ｍ、8.5尺×14尺）の南北棟。桁行の柱間は７尺が多い。東辺のＰ２、西辺のＰ６ともに各辺のほぼ中央部に設ける。南辺のＰ４は20㎝程西寄りで、北辺のＰ８も規模は不明となってしまったが、同じく西寄りで柱軸から30㎝程北へ外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、やや大きいＰ８を除き、規模は長径27～33㎝、短径24～29㎝、深さ13～33㎝で均整がとれる。

内部施設　なし　**出土遺物**　なし



第129図　３区１号掘立柱建物跡

4区2号掘立柱建物跡（PL 31-2・4・5）

位置　調査区の東南部で、73H－6グリッドに位置する。

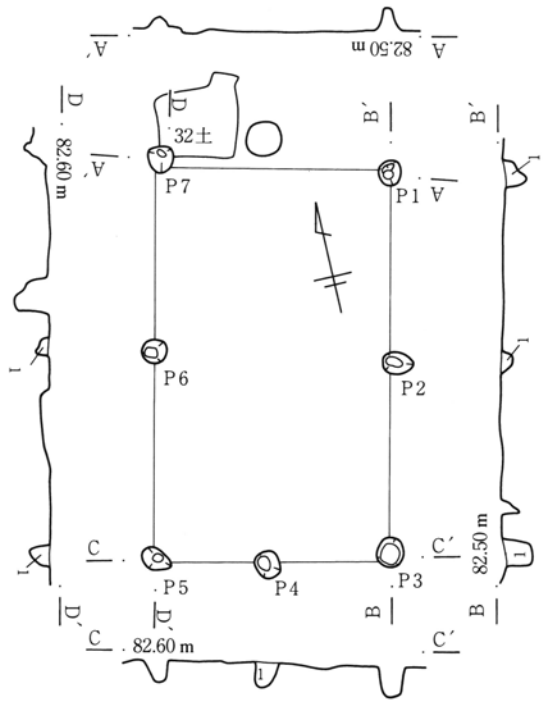
重複　なし　**主軸方位**　N－12°－E

形態　1×2間（3.07～3.58×4.17～4.78m、11尺×16尺）の南北棟。桁行は7尺～9尺で一定しない。東辺のP2は15cm程北寄りで、西辺のP5も50cm程北寄りである。西南角のP4は柱軸から南西方向に20cm程外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は大小2つに分かれ、P1・P6が長径35・38cm、短径33・36cm、深さ47・26cmで、残りが長径21～24cm、短径16～21cm、深さ17～40cmである。

内部施設　中央部に主軸方位と平行する6号土坑と、西辺に接して主軸方位とほぼ直交する10号土坑がある。6号土坑は方形で、規模は径104×80cm、深さ16cmで、主軸方位N－11°－E。10号土坑は隅丸方形で、径103×87cm、深さ22cmで、主軸方位N－80°－W。6号土坑は4号掘立柱建物跡P6と重複するが新旧関係不明。両土坑ともに埋土に焼土や灰・炭等全く見られず、硬化面もない。

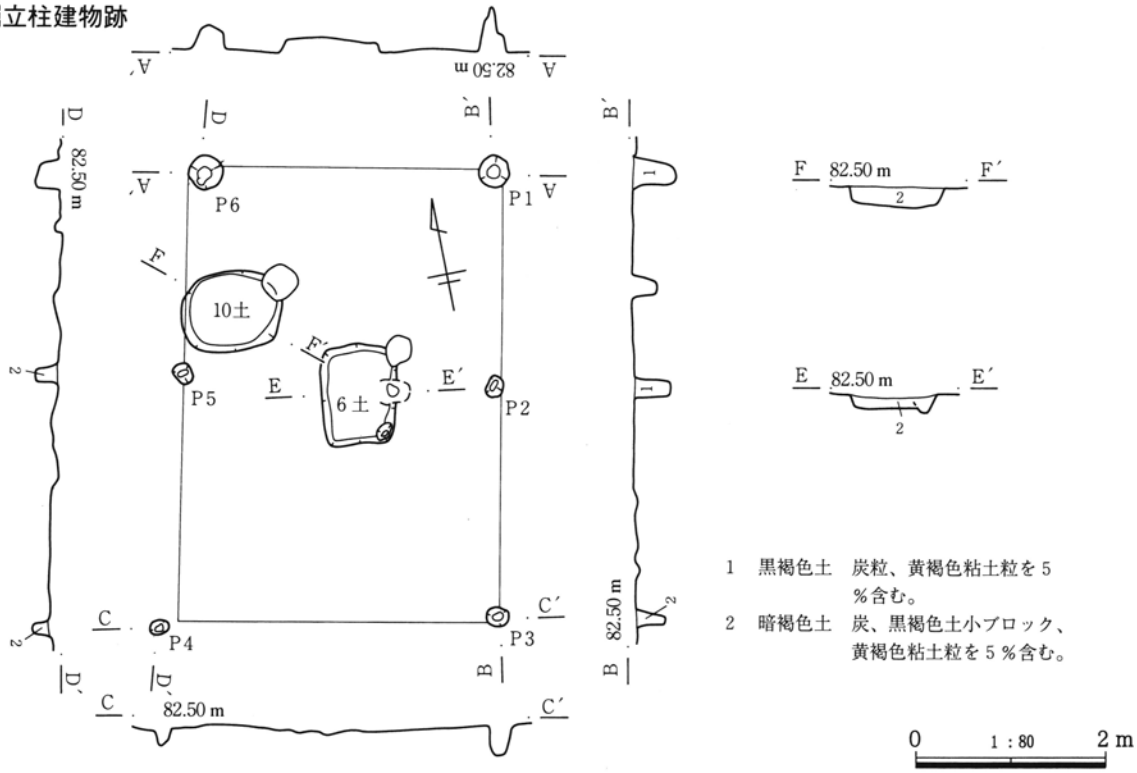
出土遺物　なし

1号掘立柱建物跡



1　黒褐色土　炭、黄褐色粘土粒を5％含む。

2号掘立柱建物跡

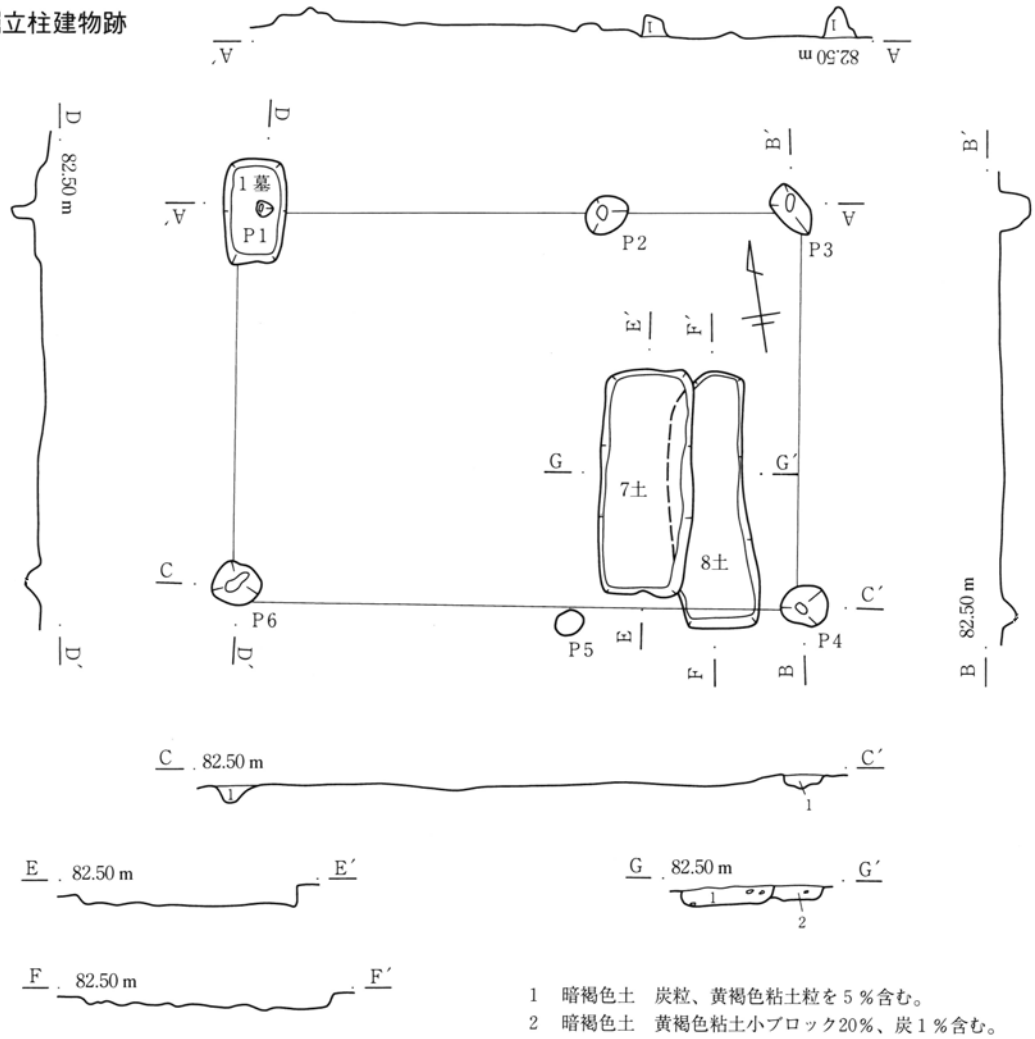


1　黒褐色土　炭粒、黄褐色粘土粒を5％含む。
2　暗褐色土　炭、黒褐色土小ブロック、黄褐色粘土粒を5％含む。

0　1：80　2m

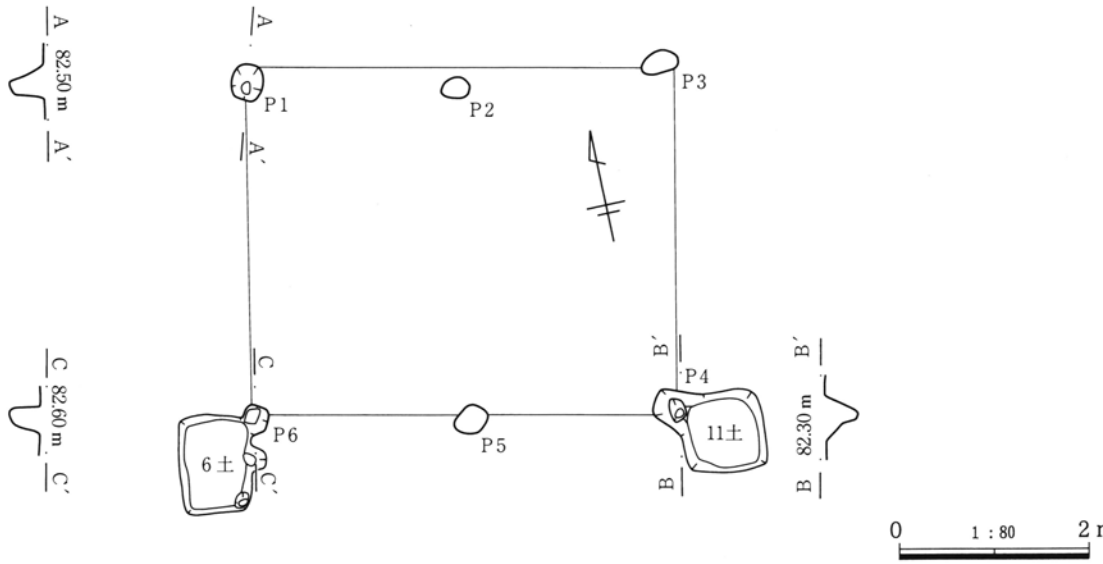
第130図　4区1・2号掘立柱建物跡・6・10号土坑

３号掘立柱建物跡



1　暗褐色土　炭粒、黄褐色粘土粒を５％含む。
2　暗褐色土　黄褐色粘土小ブロック20％、炭１％含む。

４号掘立柱建物跡



第131図　４区３号掘立柱建物跡・７・８号土坑・４号掘立柱建物跡

４区３号掘立柱建物跡（PL 31-2・6・7）

位置　調査区の東南部で、73G・H－５・６グリッドに位置する。

重複　Ｐ１は１号土壙墓と重複するが新旧関係不明。

主軸方位　N－80°－W

形態　１×（３）間（3.96～4.26×5.60～5.98ｍ、14尺×20尺）の東西棟。柱間は不明。北辺のＰ１とＰ２の間及び南辺のＰ５とＰ６の間に、柱穴を検出することに努めたが発見できなかった。またその間隔は等しい。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模はやや小さいＰ５を除いて、長径46～58㎝、短径33～45㎝、深さ16～33㎝である。

内部施設　東端１間分の中に主軸方位にほぼ平行な７・８号土坑がある。７号土坑の形状は長方形、８号土坑の形状は細長方形である。７号土坑の規模は径237×98㎝、深さ20㎝で、主軸方位N－11°－E。８号土坑の規模は径270×(84)㎝、深さ16㎝で、主軸方位N－７°－E。両土坑は重複しており、７号土坑が新しい。埋土にはともに焼土・硬化面は見られないが、炭を少量含む。

出土遺物　なし

４区４号掘立柱建物跡（PL 31-2）

位置　調査区の東南部で、73H－５・６グリッドに位置する。

重複　Ｐ４は11号土坑、Ｐ６は６号土坑と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。

主軸方位　N－79°－W

形態　１×２間（3.44～3.70×4.39～4.51ｍ、12.5尺×14.5尺）の東西棟。桁行の柱間は7.5尺。北辺のＰ２と南辺のＰ５はともに各辺のほぼ中央部に位置するが、Ｐ２は柱軸から20㎝程南へ外れる。柱痕跡は見られない。柱穴の形状は隅丸方形と円形が混在するが、規模は長径30～40㎝、短径23～35㎝、深さ34～37㎝でほぼ均整がとれる。

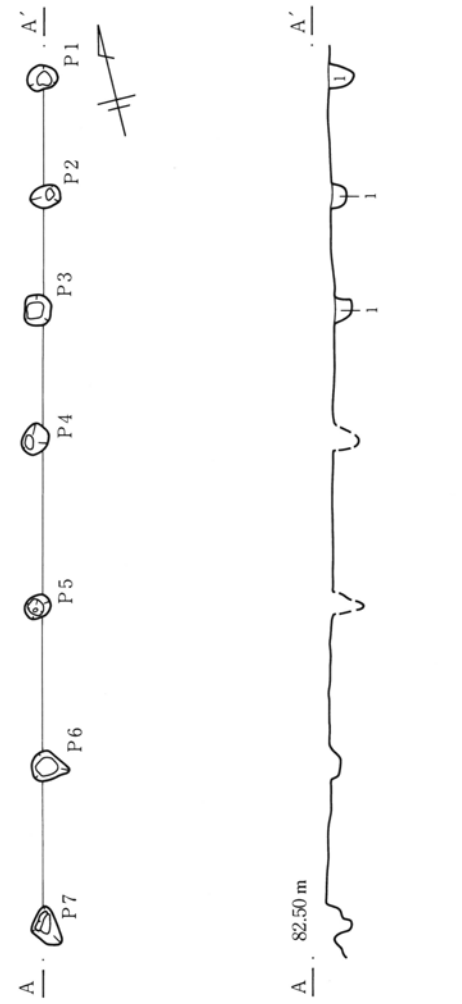
内部施設　なし　**出土遺物**　なし

４区１号柱穴列

位置　調査区の東南部で、73G・H－６グリッドに位置する。３号掘立柱建物跡の西側に隣接する。

重複　なし　**主軸方位**　N－16°－E

形態　全長8.91ｍで南北に走向する。柱間はＰ１～Ｐ４が1.22～1.39ｍ、Ｐ４～Ｐ７が1.65～1.77ｍで、Ｐ４を境に南北では均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在するが、規模は長径27～40㎝、短径23～30㎝、深さ12～28㎝とほぼ均整がとれている。　**出土遺物**　なし



1　黒褐色土　炭粒、黄褐色粘土粒を５％含む。

0　1：80　2 m

第132図　４区１号柱穴列

２．土坑・柱穴

４区２号土坑（PL 31-8）

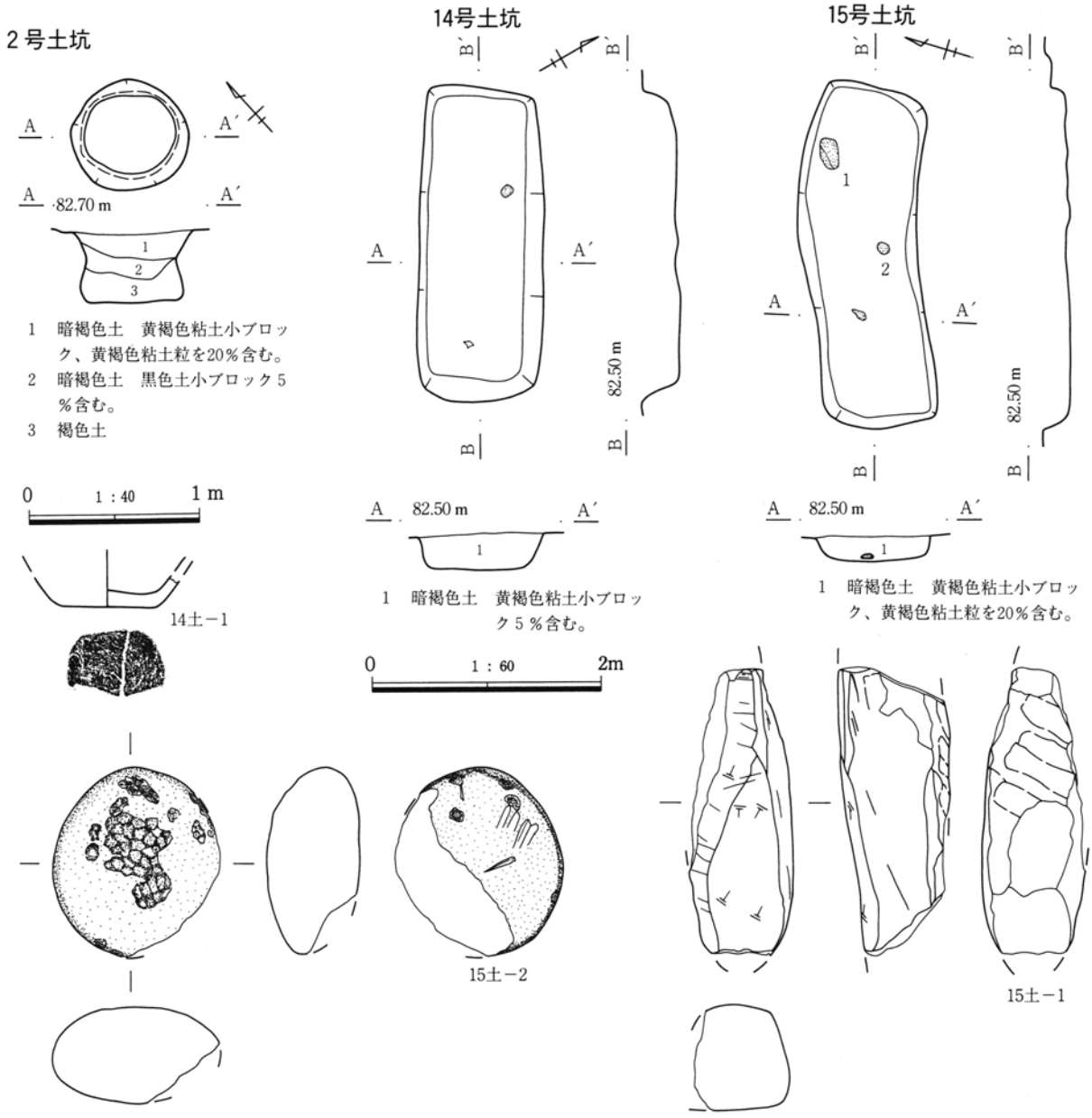
整った円形を呈し、壁は底近くでオーバーハングする。底面は平坦。規模は径65×65㎝、深さ44㎝である。主軸方位Ｎ－55°－Ｗ。遺物は出土しなかった。

４区14号土坑（PL 32-1）

細長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺277㎝、短辺110㎝、深さ37㎝である。主軸方位Ｎ－60°－Ｗ。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は在地土器カワラケ（１）のみである。土壙墓か。

４区15号土坑（PL 32-2、53）

北辺のやや湾曲した細長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺300㎝、短辺104㎝、深さ22㎝である。主軸方位Ｎ－71°－Ｅ。埋土は均一で人為埋填。砥石（１）・敲石（２）が出土している。



第133図　４区土坑・出土遺物（１）

4区17・18・19・20・21・22・23・39号土坑（PL 32-3）

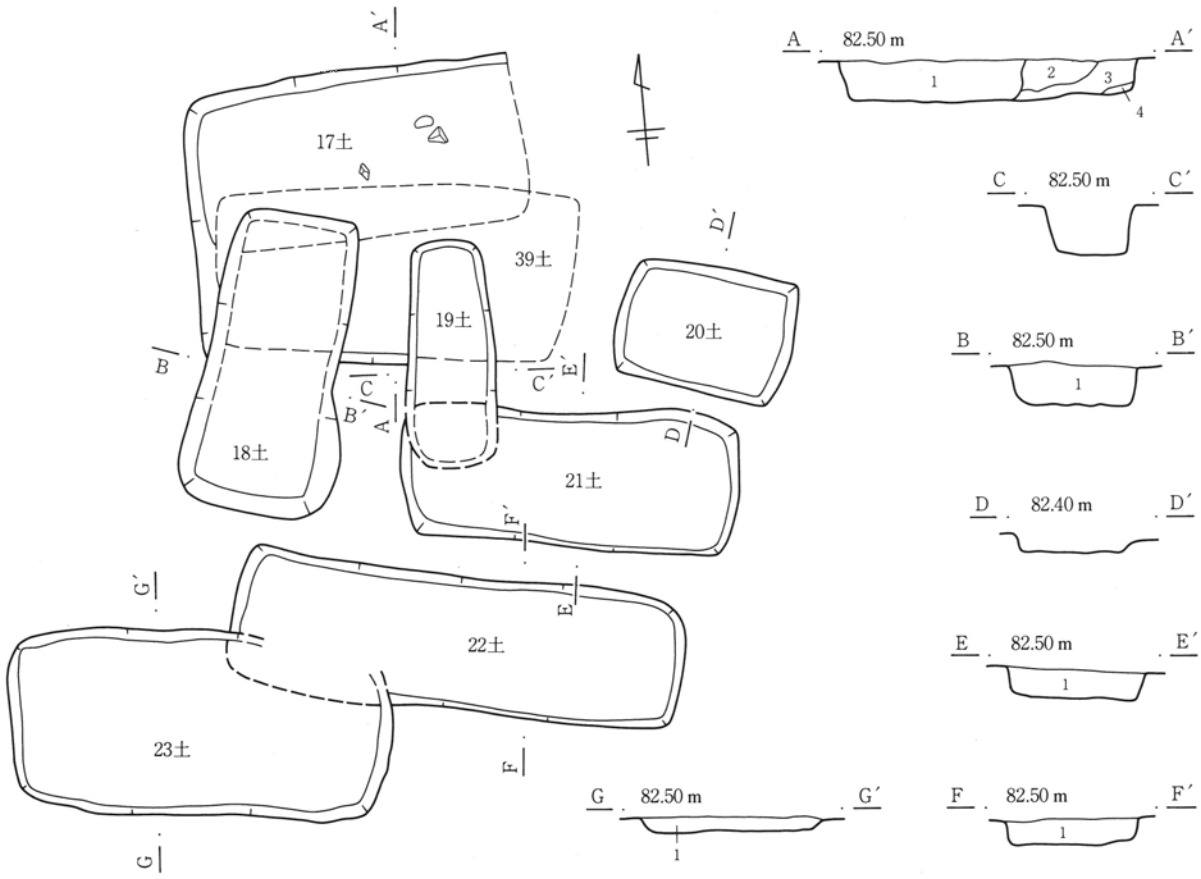
形状から長方形の17・18・19・21・23・39号土坑と細長方形の22号土坑、方形の20号土坑に類別できるが概して浅く、19・20号土坑が小さい以外規模も同程度であり、同様な機能を持って繰り返し付設された可能性が高い。

17号土坑　長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(270)㎝、短辺(134)㎝、深さ34㎝である。主軸方位N－89°－E。39号土坑より古い。埋土から自然埋没である。出土遺物は近世？施釉陶器のみである。

18号土坑　長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺240㎝、短辺124㎝、深さ33㎝である。主軸方位N－17°－E。39号土坑と重複するが、新旧関係不明。埋土は均一で人為埋填。遺物は出土しなかった。

19号土坑　長方形で南へ向かいやや広がり、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(180)㎝、短辺(74)㎝、深さ39㎝である。主軸方位N－4°－E。21・39号土坑と重複するが、新旧関係不明。遺物は出土しなかった。

20号土坑　方形を呈し浅く、壁は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺142㎝、短辺102㎝、深さ17㎝である。主軸方位N－73°－W。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。



1　暗褐色土　黄褐色粘土小ブロック40％含む。
2　褐色土　黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を40％含む。
3　暗褐色砂質土　黄褐色粘土粒５％含む。
4　黒褐色砂質土　黄褐色粘土粒５％含む。

0　1：60　2m

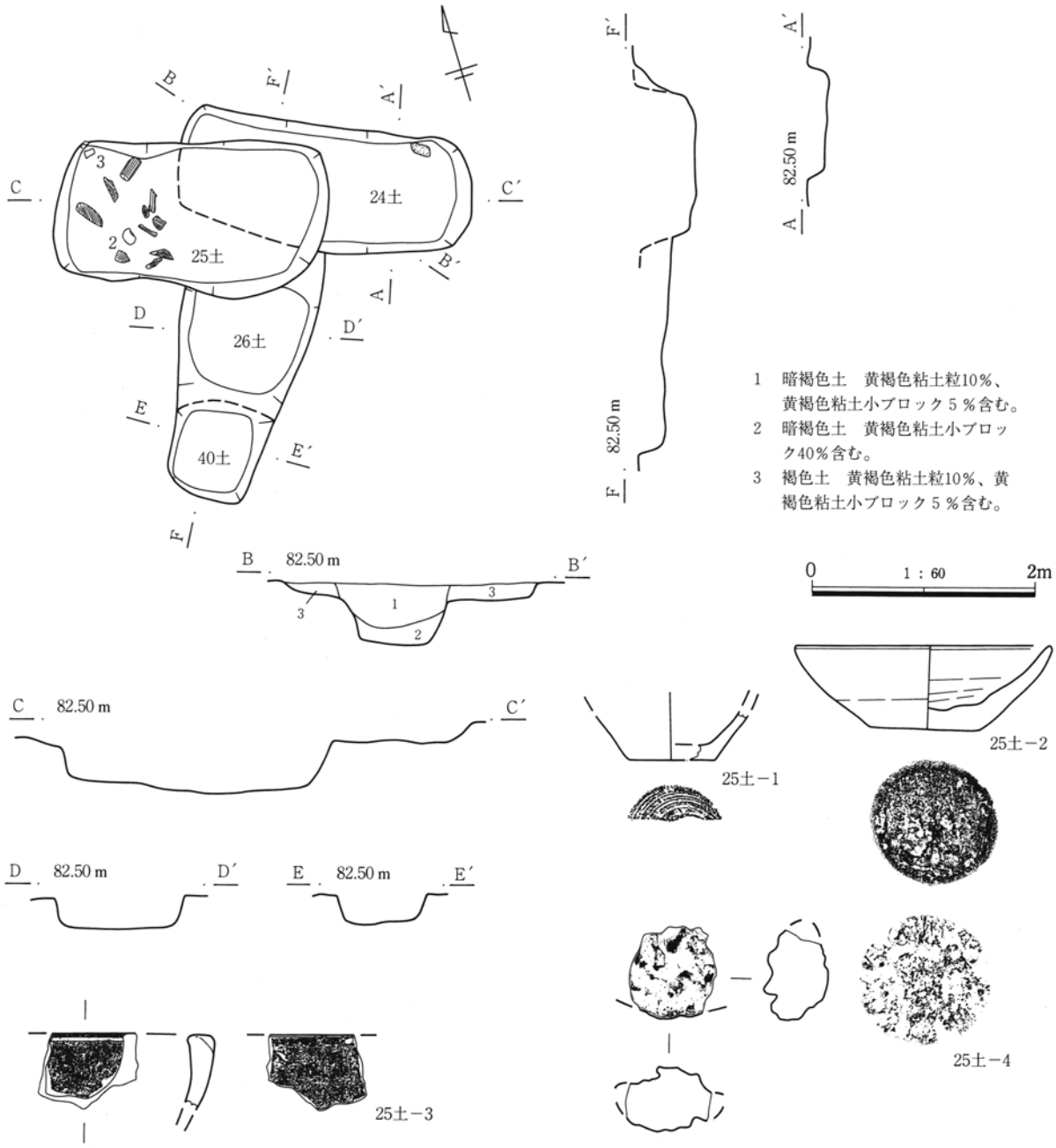
第134図　４区土坑・出土遺物（２）

21号土坑　長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺270㎝、短辺116㎝、深さ26㎝である。主軸方位Ｎ－82°－Ｗ。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は在地土器鍋片のみである。

22号土坑　細長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺358㎝、短辺107㎝、深さ22㎝である。主軸方位Ｎ－77°－Ｗ。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

23号土坑　長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺306㎝、短辺146㎝、深さ７㎝である。主軸方位Ｎ－83°－Ｗ。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

39号土坑　長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺(299)㎝、短辺(140)㎝、深さ34㎝である。主軸方位Ｎ－82°－Ｗ。断面観察の結果17号土坑より新しいことが判明した



第135図　４区土坑・出土遺物（３）

ため、上場は一部不明となってしまった。埋土は均一で人為埋填。遺物は出土しなかった。

4区24・25・26・40号土坑（PL 32-4、54）

形状から長方形の24・25号土坑と隅丸方形・正方形の26・40号土坑に類別されるが、後出である25号土坑は深く、炭化材の出土状況等特異なもので、他は浅く類似した性格であったものと考える。

24号土坑　長方形を呈し浅く、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(268)㎝、短辺112㎝、深さ(20)㎝である。主軸方位N－64°－W。25号土坑より古い。埋土は均一で人為埋填。遺物は出土しなかった。

25号土坑　長方形を呈し深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺240㎝、短辺144㎝、深さ54㎝である。主軸方位N－64°－W。24号土坑より新しい。埋土は均一で人為埋填。炭化材が底面近くに多く見られるが性格不明。遺物はほぼ完形の在地土器カワラケ(2)が炭化材に混じって出土したほか、在地土器鉢(3)、鉄滓(4)が出土している。出土遺物から14～15世紀前半に比定される。

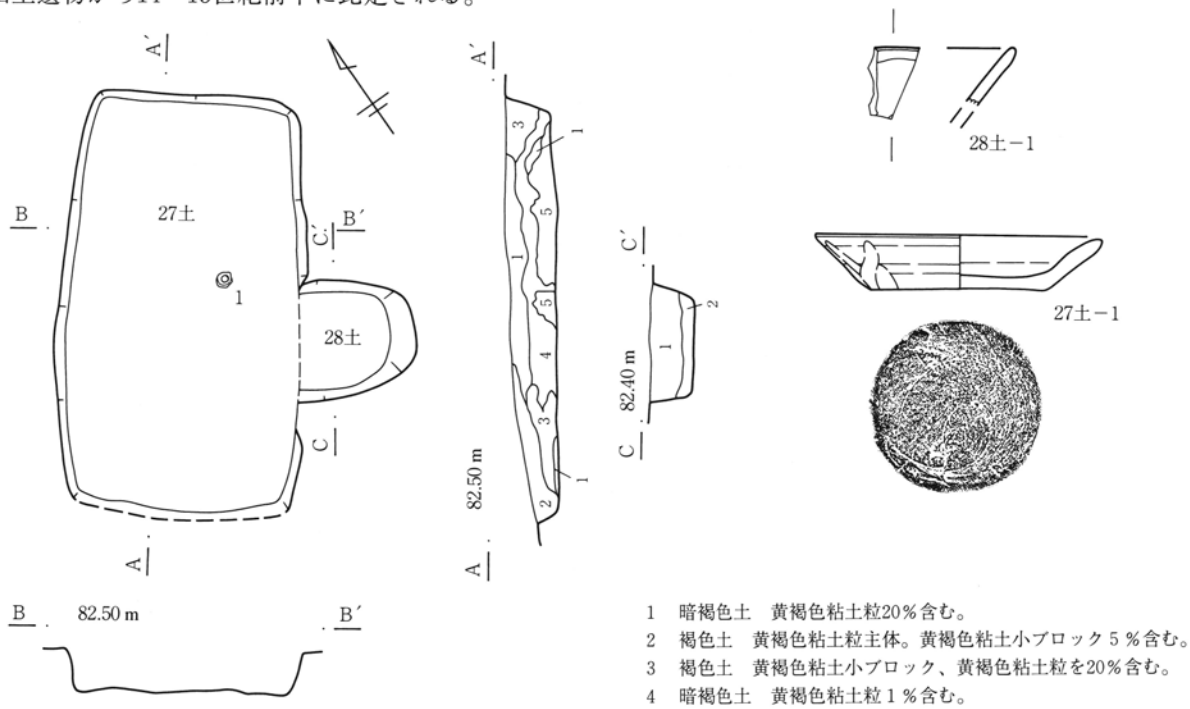
26号土坑　隅丸方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺123㎝、短辺(100)㎝、深さ30㎝である。主軸方位N－29°－E。25・40号土坑と重複するが、新旧関係不明。遺物は出土しなかった。

40号土坑　ほぼ正方形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(90)㎝、短辺81㎝、深さ27㎝である。主軸方位N－32°－E。25・26号土坑と重複するが、新旧関係不明。遺物は出土しなかった。

4区27・28号土坑（PL 32-5、54）

27号土坑　規模は長辺(334)㎝、短辺194㎝、深さ47㎝である。主軸方位N－38°－E。28号土坑との新旧関係不明。出土遺物は完形の在地土器カワラケ(1)のみで、15世紀後半に比定される。

28号土坑　規模は長辺(92)㎝、短辺94㎝、深さ35㎝である。主軸方位N－53°－W。27号土坑との新旧関係不明。出土遺物は青磁碗片(1)のみである。



1　暗褐色土　黄褐色粘土粒20％含む。
2　褐色土　黄褐色粘土粒主体。黄褐色粘土小ブロック5％含む。
3　褐色土　黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を20％含む。
4　暗褐色土　黄褐色粘土粒1％含む。
5　黄褐色粘質土　黄褐色粘土主体。

0　1：60　2m

第136図　4区土坑・出土遺物（4）

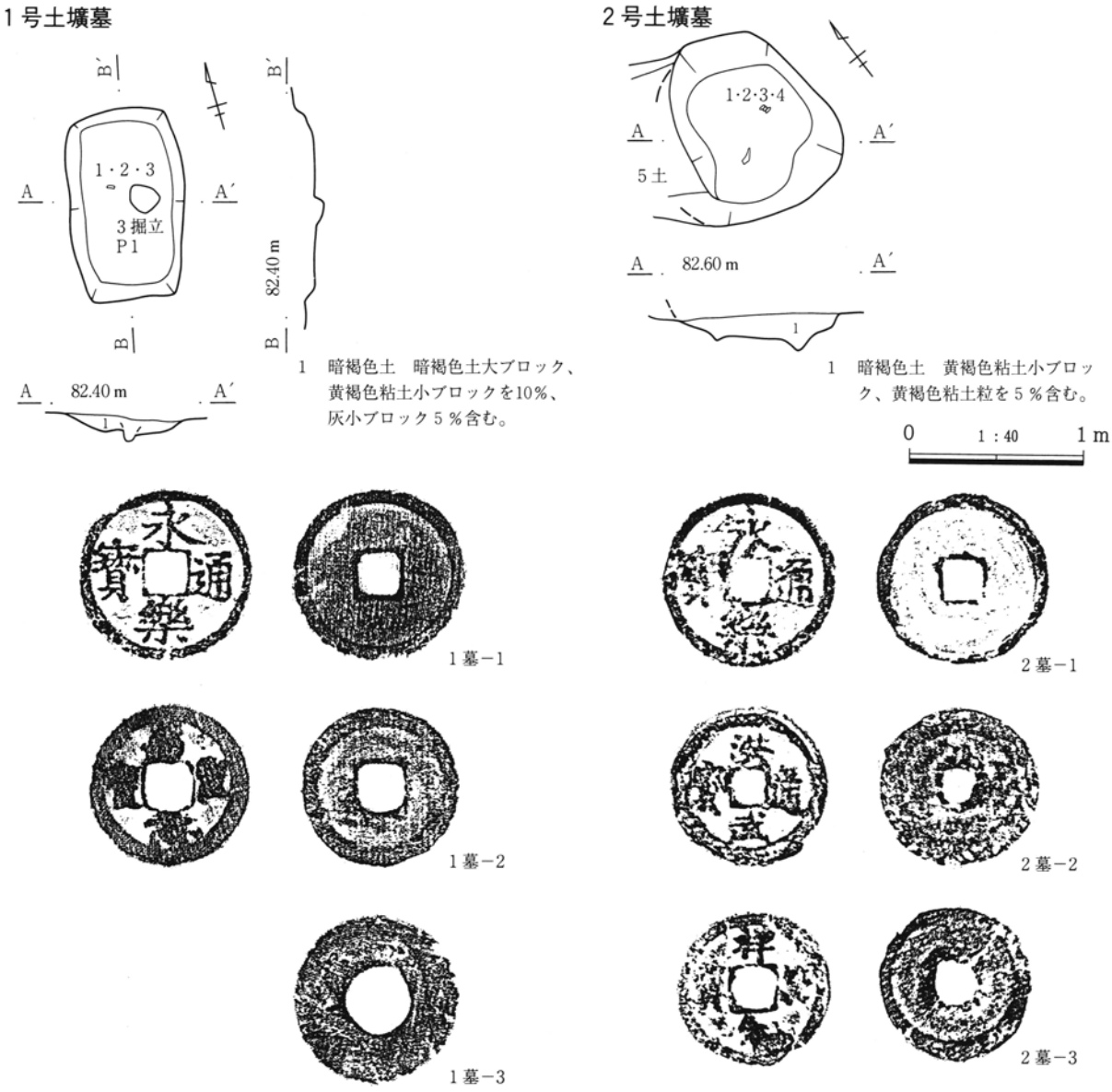
３．土壙墓

４区１号土壙墓（PL 33-1、54）

長方形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺109㎝、短辺67㎝、深さ14㎝である。主軸方位Ｎ－12°－Ｅ。３号掘立柱建物跡のＰ１と重複するが新旧関係不明。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は永楽通寶（１）、紹聖元寶（２）、皇宋通寶（３）の３枚が出土している。この内後者の２枚は共に文字面を内側にして付着し、布様の付着物がわずかに見られたが、文字判読のため分離した。なおうち１枚の拓本は残存状況が悪く、破砕する可能性が高いため分離前に採取した裏面のみに止めた。

４区２号土壙墓（PL 33-2、54）

隅丸方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺110㎝、短辺84㎝、深さ21㎝である。主軸方位Ｎ－０°。５号土坑と重複するが新旧関係不明。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は永楽通寶（１）、洪武通寶（２）、祥符□寶（３）、不明銅銭（４）



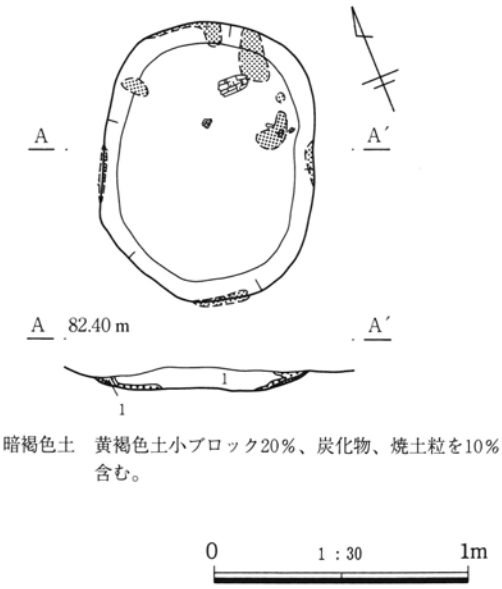
第137図　４区１・２号土壙墓・出土遺物

の４枚が出土している。うち１枚は残存状況が悪く、破砕する可能性が高いため拓本を採取しなかった。

４．火葬跡

３区１号火葬跡（PL33-3）

隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺111㎝、短辺85㎝、深さ９㎝である。主軸方位Ｎ－28°－Ｅ。外形線に沿って壁はよく焼けて焼土化するが、底面は焼けていない。底面には最大厚４㎝程の炭層が全面に堆積する。出土遺物は須恵器細片１点のみで混入と見られる。



1　暗褐色土　黄褐色土小ブロック20％、炭化物、焼土粒を10％含む。

第138図　３区１号火葬跡

５．井戸跡

２区４号井戸跡

やや浅く井戸跡でない可能性があるが、調査時の認定を採用しておく。

位置　調査区の東端で、61Ｂ－６グリッドに位置する。１号溝の東に隣接する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　円形。径93×86㎝。

底面形状と規模　ほぼ円形。径56×50㎝。

断面形　円筒形　**深さ**　0.78ｍ

標高　上面83.76ｍ、底面82.98ｍ。　**アグリ**　なし

湧水　不明　**埋没状況**　自然埋没か

出土遺物　なし

２区５号井戸跡（PL 33-4、54）

位置　調査区の東端で、61Ｂ－６・７グリッドに位置する。

重複　１号溝と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模　円形。径116×108㎝。

底面形状と規模　円形。径78×70㎝。

断面形　円筒形　**深さ**　2.16ｍ

標高　上面83.72ｍ、底面81.60ｍ。　**アグリ**　不明

湧水　湧水はあったが、湧水層等詳細は不明。

埋没状況　自然埋没か人為埋填か不明。

出土遺物　馬見岡凝灰岩製の台石？片（１）のみである。

２区６号井戸跡（PL 54、55）

位置　調査区の東端で、61Ｂ－７グリッドに位置する。１号溝の西に隣接する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　ほぼ円形。径100×90㎝。

底面形状と規模　円形。径64×61㎝。

断面形　上に向かって開く円筒形。　**深さ**　2.71ｍ

標高　上面83.66ｍ、底面80.95ｍ。　**アグリ**　不明

湧水　湧水はあったが、湧水層等詳細は不明。

埋没状況　自然埋没か人為埋填か不明。

出土遺物　埋土中から曲物の胴部（２）、板草履（１）、舟形木製品（３）、角材ほかの用材（６～14）等やや多くの木器・木製品が出土している。

備考　木器・木製品の出土量に符合する遺構が周辺にないが、東側に隣接する伊勢崎市調査分でも同時期の井戸跡が調査されていることから、本調査区では柱穴等の遺構は削平によって消滅している可能性もある。

２区７号井戸跡

やや浅く井戸跡でない可能性があるが、調査時の認定を採用しておく。

位置　調査区の西端で、71Ｂ－０グリッドに位置する。２・３号溝の西に隣接する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　隅丸方形。径92×88㎝。

底面形状と規模　円形。径50×49㎝。

断面形　上に向かって開く円筒形。　**深さ**　0.76ｍ

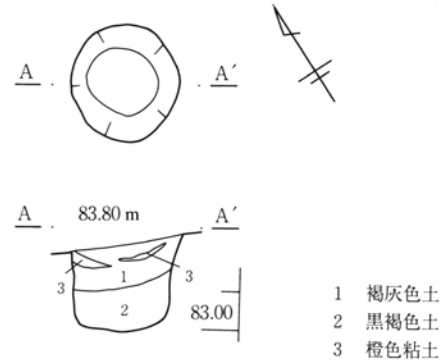
標高　上面83.51ｍ、底面82.75ｍ。　**アグリ**　なし

湧水　不明

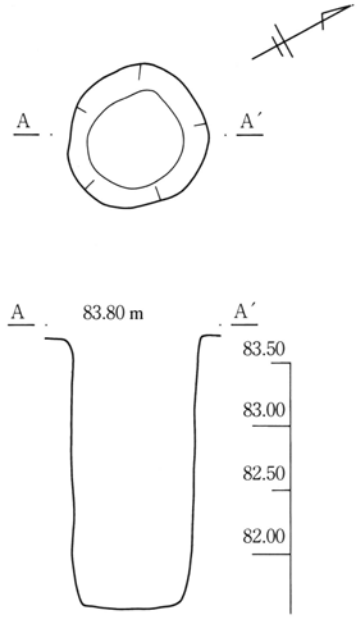
埋没状況　自然埋没か人為埋填か不明。

出土遺物　なし

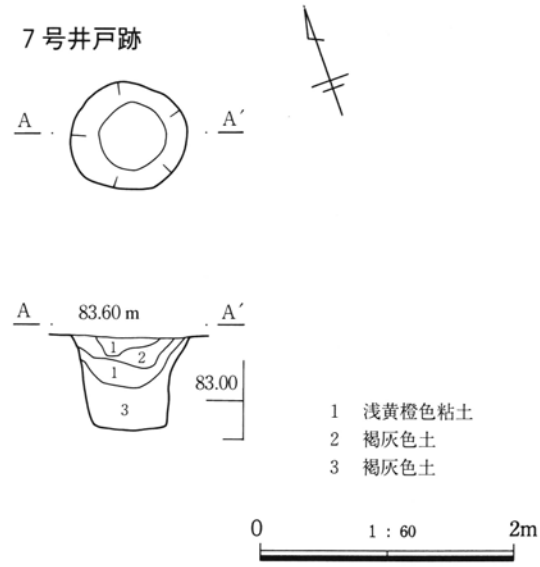
４号井戸跡

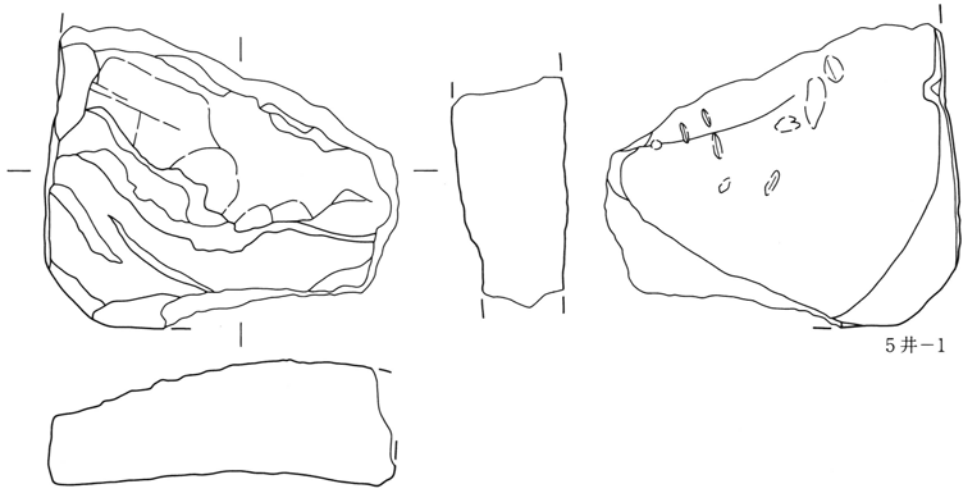


５号井戸跡

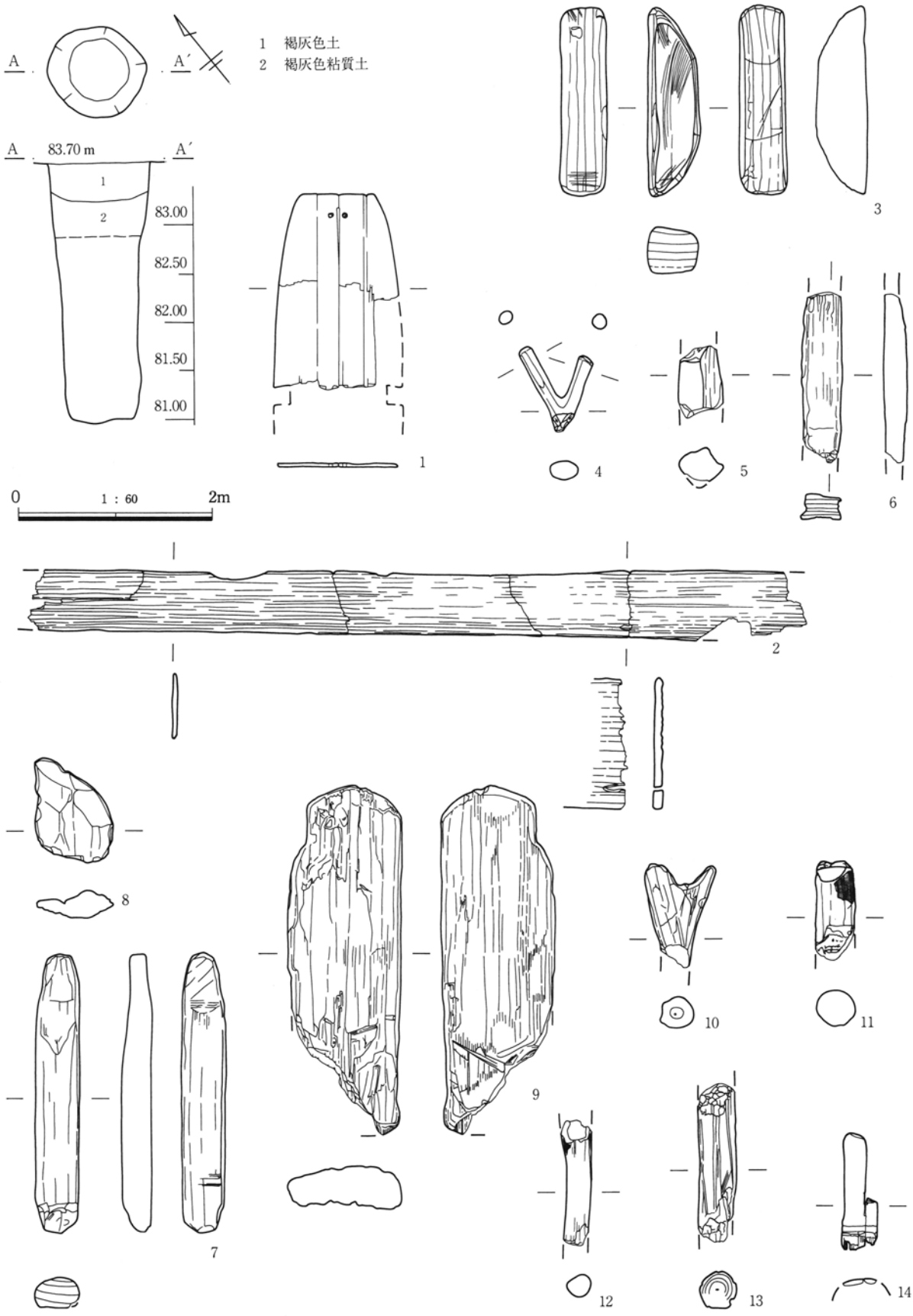


７号井戸跡





第139図　２区４・５・７号井戸跡・出土遺物



第140図　2区6号井戸跡・出土遺物

４区１号井戸跡（PL 33-5・6、55、56）

位置　調査区の東端で、73Ｉ－６グリッドに位置する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　不整楕円形。径219×65㎝。

底面形状と規模　不整楕円形。径64×59㎝。

断面形　漏斗状　**深さ**　2.76ｍ

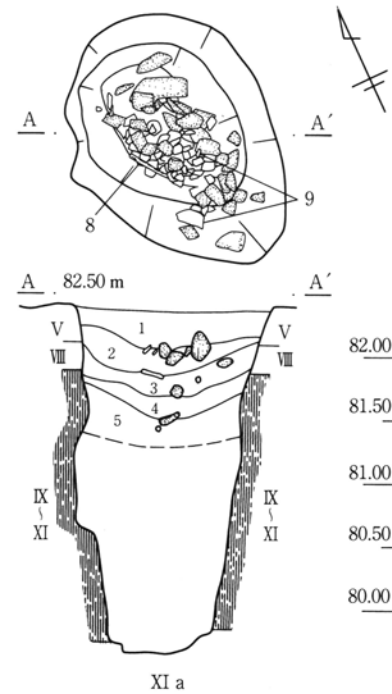
標高　上面82.43ｍ、底面79.67ｍ。

アグリ　最上部は深さ44㎝（標高81.98ｍ）、最下部は深さ44㎝（標高79.78ｍ）で、その上下幅は220㎝を測る。

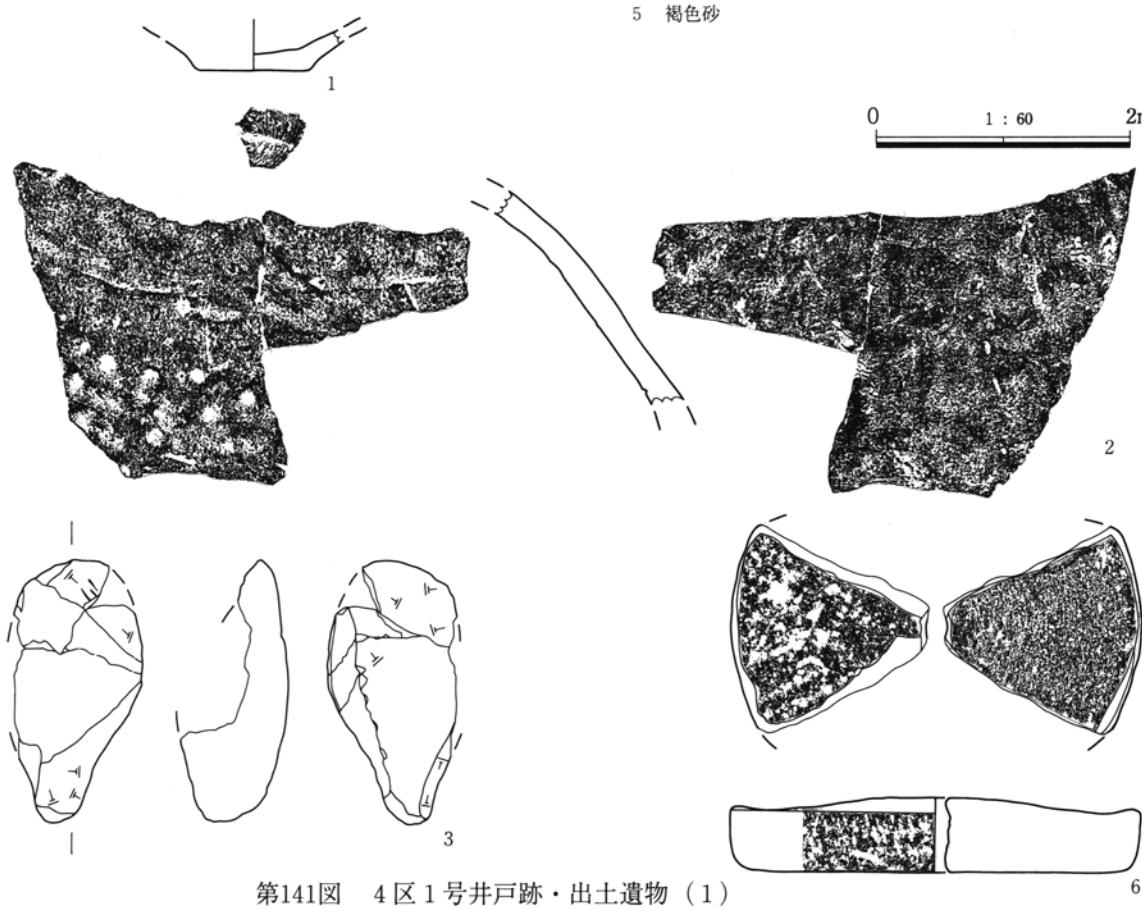
湧水　調査時は底面の砂層（Ⅻ）から相当量の湧水あり。Ⅸ以下で湧水。

埋没状況　深さ１ｍ程まで褐色砂・大中礫によって人為的に埋填し、その後は自然埋没で遺物も投棄される。

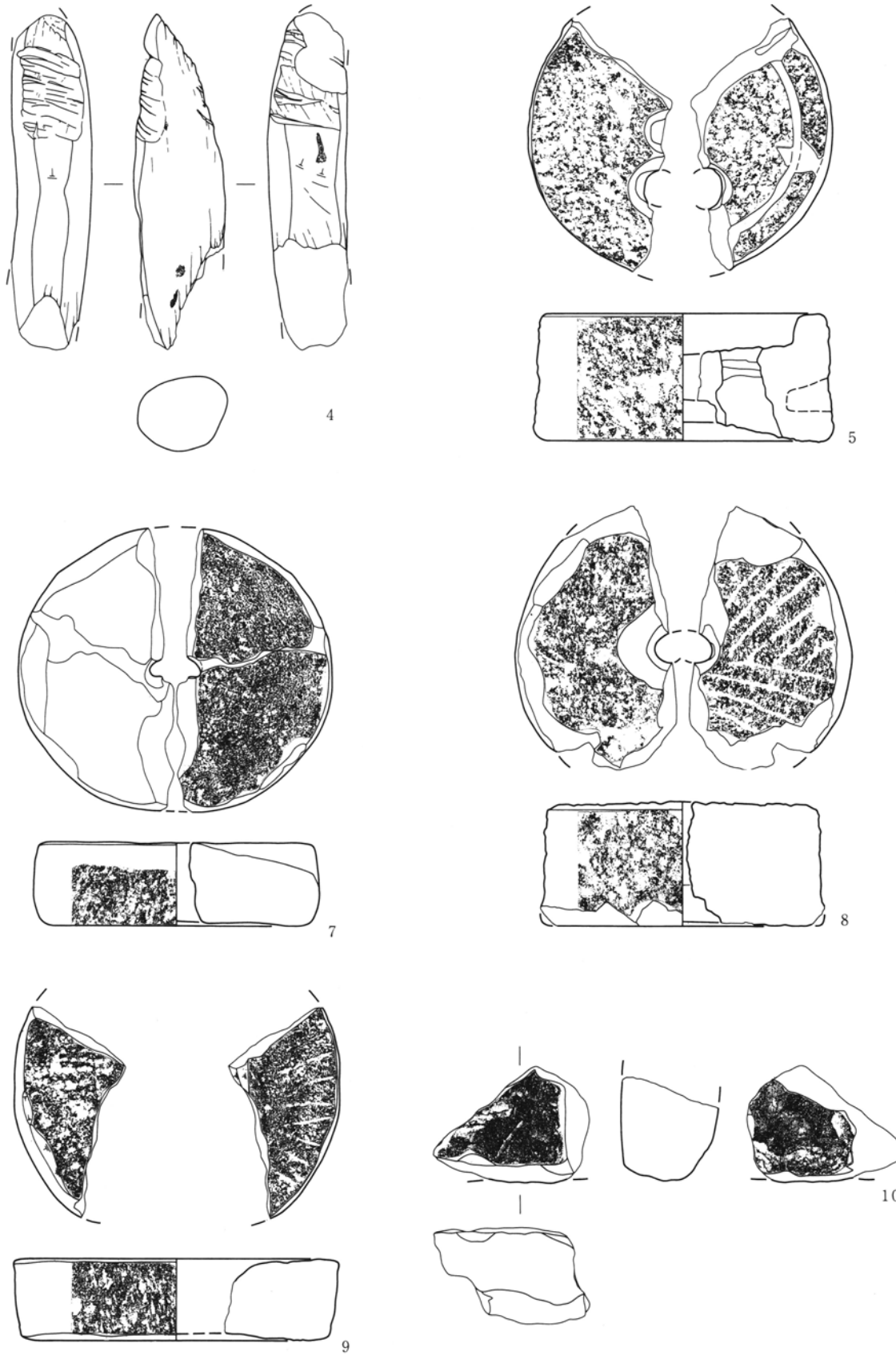
出土遺物　在地土器カワラケ（１）、焼締陶器甕（２）、砥石（３・４）、凹石（11・12）、石臼上・下臼（５～９）が出土している。



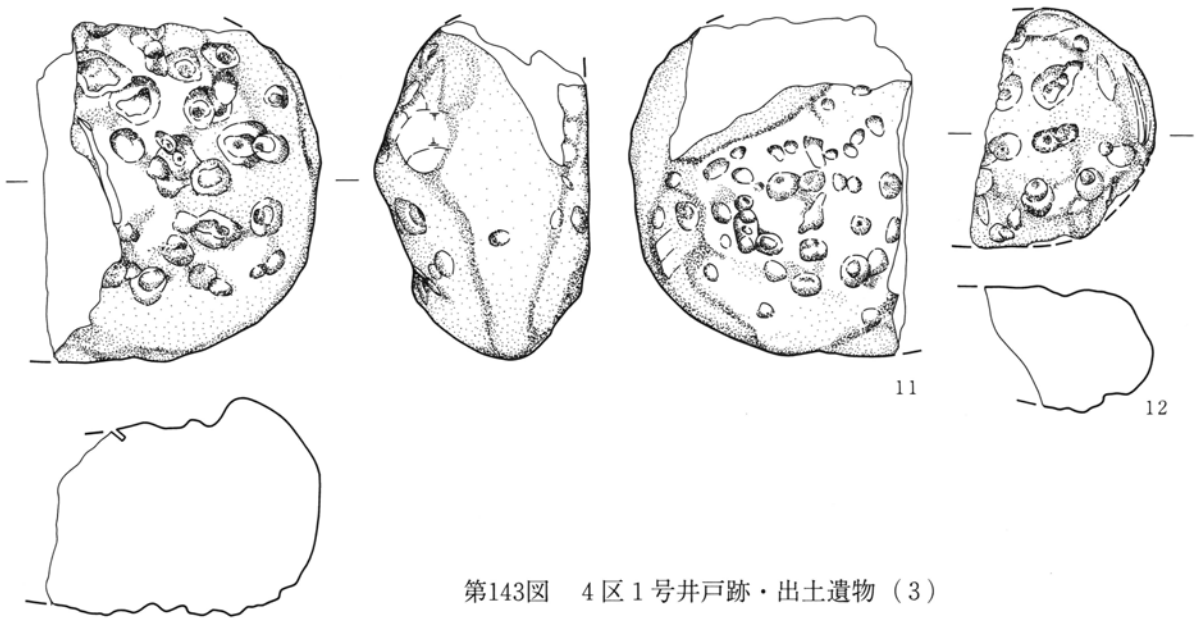
1　暗褐色土　白色軽石、黄褐色粘土粒を１％含む。
2　暗褐色粘質土
3　褐色土　黄褐色粘土大ブロック、黄褐色粘土粒を20％含む。
4　黒褐色砂質土　砂主体。黄褐色粘土粒５％含む。
5　褐色砂



第141図　４区１号井戸跡・出土遺物（１）



第142図　４区１号井戸跡・出土遺物（２）



第143図　４区１号井戸跡・出土遺物（３）

４区２号井戸跡（PL 33-7・8）

浅いがアグリも形成されており井戸跡として扱う。

位置　調査区の東南端で、73Ｈ－６グリッドに位置する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　ほぼ円形。径89×85㎝。

底面形状と規模　不整円形。径60×58㎝。

断面形　円筒形　**深さ**　1.15ｍ

標高　上面82.31ｍ、底面81.17ｍ。

アグリ　深さ50㎝（標高81.80ｍ）の１か所のみである。

湧水　底面から上へ40㎝以下から湧水あり。

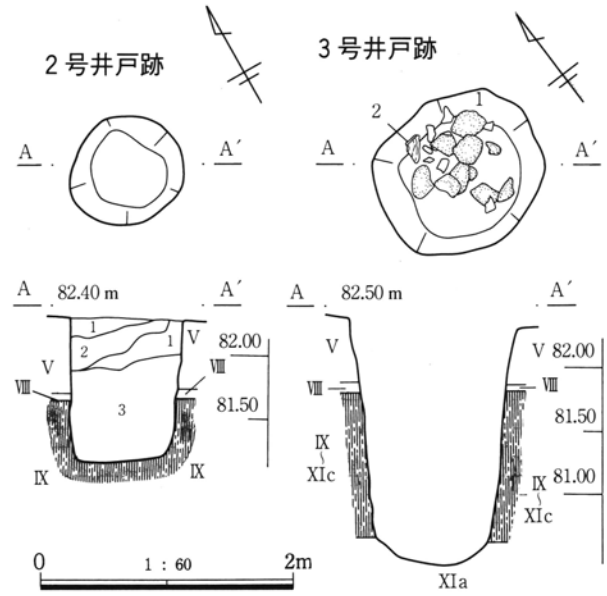
埋没状況　東側から人為的に埋填される。

出土遺物　なし

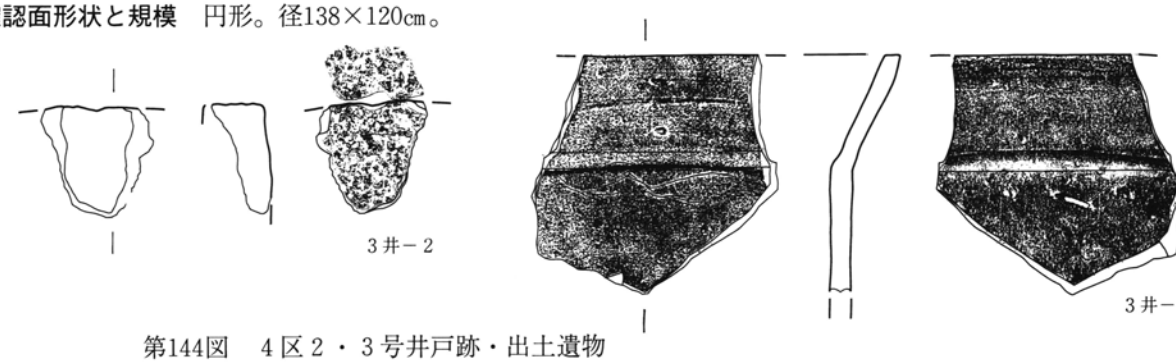
４区３号井戸跡（PL 34-1・2、56）

位置　調査区の東南端で、73Ｈ－６グリッドに位置する。　**重複**　なし

確認面形状と規模　円形。径138×120㎝。



２号井戸跡
1　暗褐色土　黄褐色粘土粒５％含む。
2　褐色土　黄褐色粘土小ブロック20％含む。
3　暗褐色土　黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を５％含む。



第144図　４区２・３号井戸跡・出土遺物

底面形状と規模　円形。径95×89㎝。

断面形　上へ向かって開く円筒形。　**深さ**　1.96m

標高　上面82.41m、底面80.46m。

アグリ　壁面の荒れが図面上で認められるが、観察は行っていない。

湧水　相当量の湧水があったが、湧水層は観察していない。

埋没状況　大中円礫が底面から多く混入しており人為埋填。

出土遺物　在地土器鍋(1)、石臼上臼(2)が出土している。

4区4号井戸跡（PL 34-3～5、56）

位置　調査区中央部南寄り、73Ⅰ－7グリッドに位置する。中世面では最も北側低湿地よりである。

重複　なし

確認面形状と規模　楕円形。径279×198㎝。

底面形状と規模　不整円形。径122×122㎝。

断面形　漏斗状　**深さ**　2.76m

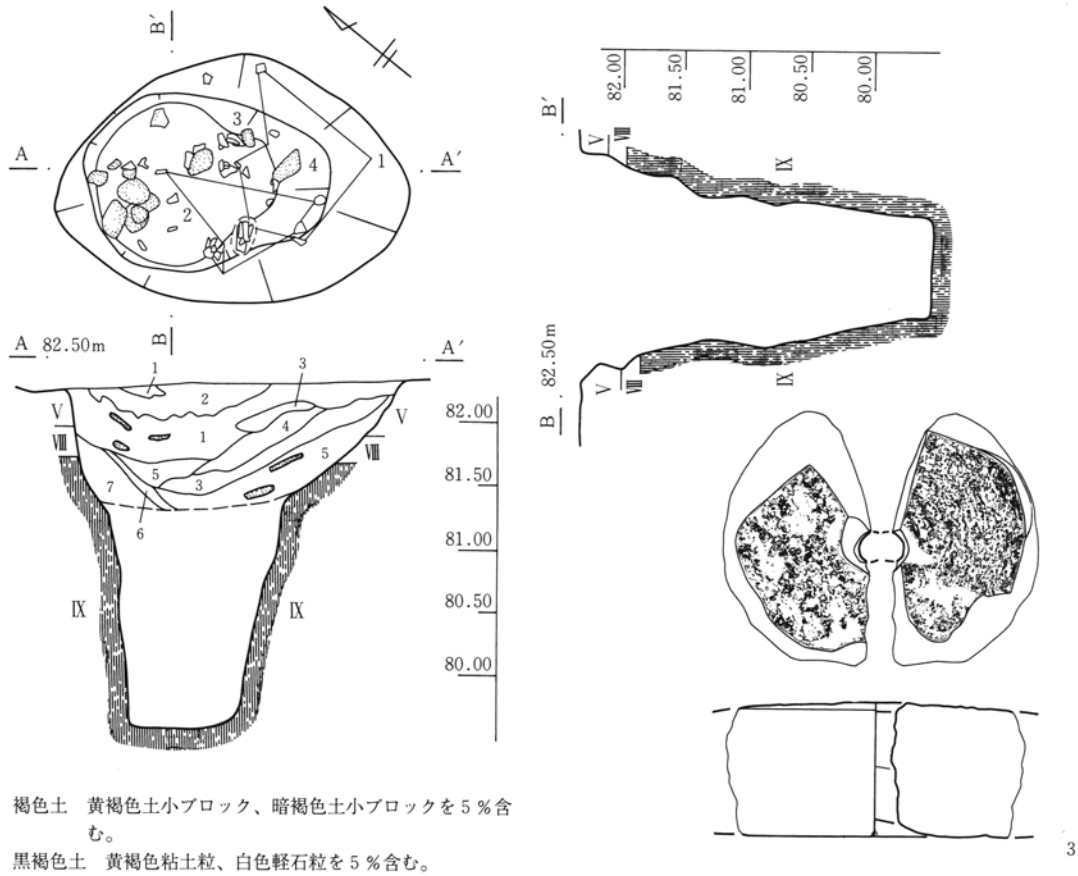
標高　上面82.35m、底面79.56m。

アグリ　観察は行っていないが、図面上では最上部は深さ116㎝（標高81.19m）で、底面まで不連続に形成されたものと考える。

湧水　相当量の湧水があったが、湧水層は観察していない。

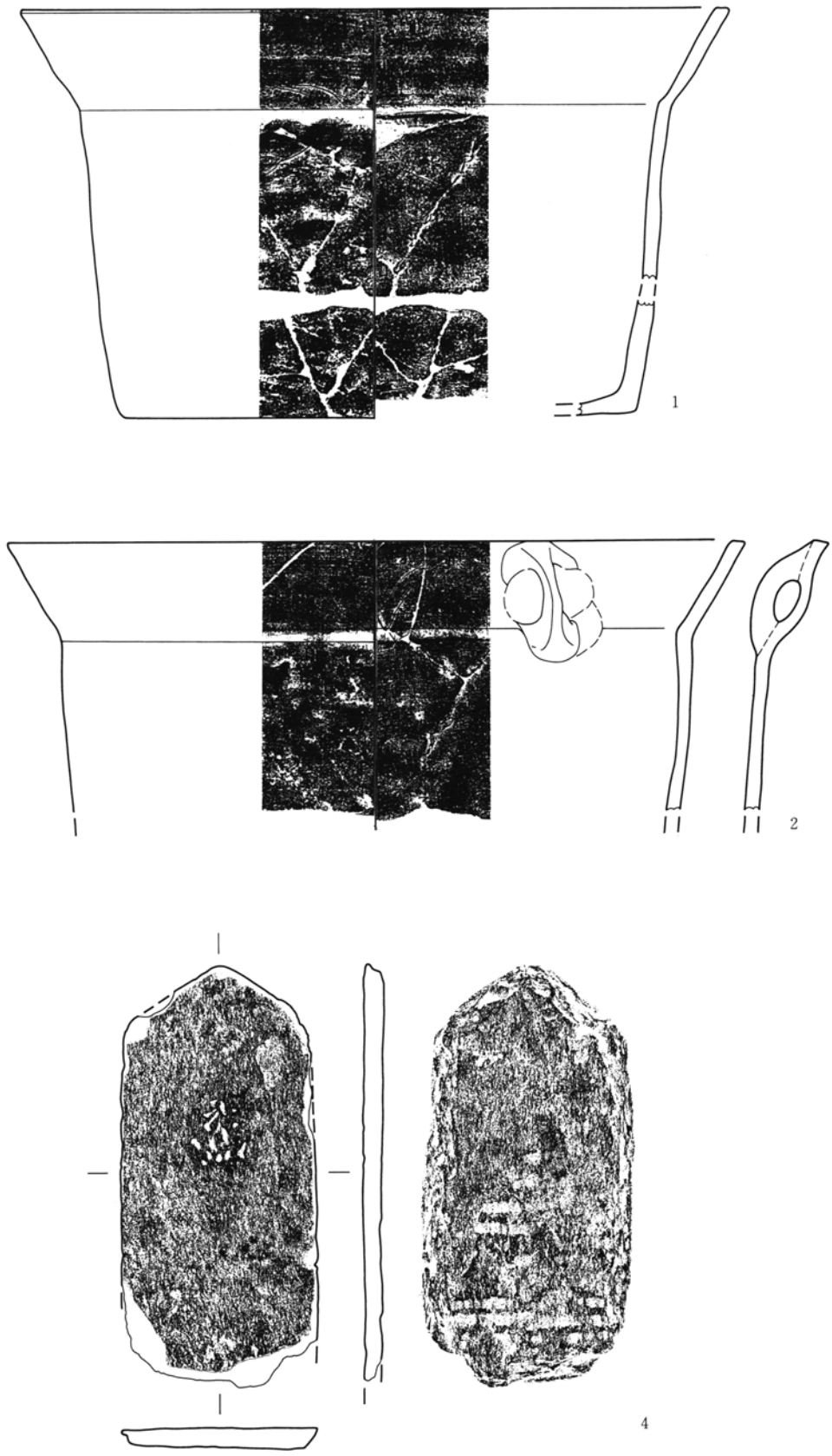
埋没状況　深さ1m程まで黒～褐色砂質土により人為埋填、その後は自然埋没で遺物も投棄される。

出土遺物　ほぼ完形の板碑(4)が東側から流れ込んだ状態で出土しており、土層断面観察から井戸を大部分人為埋填してから投棄されたものと考えられる。その他在地土器鍋(1・2)、石臼下臼(3)や石が多く出土している。



1　褐色土　黄褐色土小ブロック、暗褐色土小ブロックを5％含む。
2　黒褐色土　黄褐色粘土粒、白色軽石粒を5％含む。
3　暗褐色土　黄褐色粘土粒20％、灰色粘土小ブロック5％含む。
4　暗褐色土　黄褐色粘土小ブロック20％含む。
5　褐色土
6　黒色砂質土
7　褐色粘質土と黒色砂質土の互層

第145図　4区4号井戸跡・出土遺物（1）　0　1：60　2m



第146図　４区４号井戸跡・出土遺物（２）

第3項　まとめと問題点

1．遺構の変遷と特徴

(1) 館跡とその周辺

ア．堀内部分（1区）

掘立柱建物跡の主軸方位別の分類によれば、第1～3類とその他の4つに分類され、その他以外はそのまま時期区分の旧い順を示している。新旧関係の根拠は、第4表に示したとおりであるが、幾つか矛盾する部分もあり「？」を付した。ただし、多くはピット1基のみを柱穴列から除外すればいい程度に過ぎない。なお、2号溝は第1類だが状況から第3類段階と共伴すると見られ、第2類の7号掘立柱建物跡との新旧関係に矛盾を残している。

各分類における数量は、第1類で8棟、第2類で6棟、第3類で9棟であるが、堀外部分も含めた全体の数量も、第147図に示したとおり同じ割合である。また、同一分類内でも重複があり時期の違いがあるため、柱筋に着目して桁・梁側の面や柱が一致すること（第149図以下－－－で示した）を基準として区分し、A・B・C群に細分した。土坑も一致するものは抽出した。

(ア) 第1類A群

主屋である東西棟の12号掘立柱建物跡は南堀内部分のほぼ中央に配置され、その南面に所在する南北棟の13・14号掘立柱建物跡は付属屋であろうか。13号掘立柱建物跡は、4号入口遺構とよく一致している。また、北面に所在する東西棟の31号掘立柱建物跡は、12号掘立柱建物跡とやや距離をとって28号柱穴列で仕切っている。33号掘立柱建物跡はA・B群どちらに属するのか不明である。土坑のうち、47号土坑は規模から竪穴建物跡とも見られ、形状は隅丸方形で浅い。14号掘立柱建物跡や1号柱穴列の位置から見て、本段階では南堀内部分の縁辺に土塁は存在していなかったものと考える。

(イ) 第1類B群

主屋である東西棟の11号掘立柱建物跡は南堀内部分の中央部に配置される。南面に所在する南北棟の15号掘立柱建物跡と東西棟の30号掘立柱建物跡は、柱筋で11号掘立柱建物跡と一致する2号柱穴列との位置関係からB群と認められ、付属屋と見られる。建物構成はA群に近似するものとなっている。なお、15・30号掘立柱建物跡は共に、1号堀の上端から2.5m程度の間隔をとることから、この段階で南堀内部分の縁辺に垣根や塀、土塁などの障壁が設けられた可能性が高く、開口部である4号入口遺構とそれに連続する2号柱穴列がよく符合する。

(ウ) 第2類A群

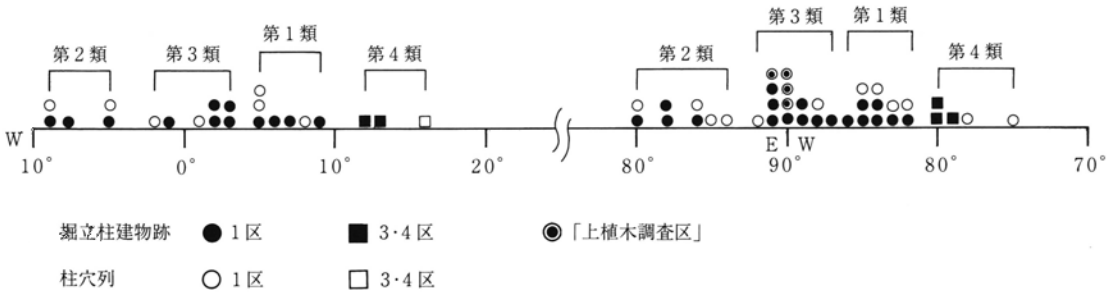
A群とB群の新旧関係は不明だが建物構成が近似することから継続するものと考え、一方C群はB群よりも新しいため、最も後出のものとする。

主屋である東西棟の10号掘立柱建物跡は南堀内部分の西端に偏る。また、南北棟の34号掘立柱建物跡は逆に東端に位置しており、両者の間隔はやや広い。3号入口遺構と建物配置との関係が気になるが、第4類に属する20号柱穴列は、位置的に34号掘立柱建物跡と関連する可能性が高い。282号土坑は規模から竪穴建物跡とも見られ、隅丸長方形で深い。10号掘立柱建物跡と282号土坑の東面が、4号入口遺構とよく符合している。

北堀内部分で唯一検出できた20号掘立柱建物跡は、A・B・C群のどれに属するか不明だが、1号入口遺構とよく符合する位置関係にある。第2類は全体として建物が少なく、各々が独立して分散している観がある。

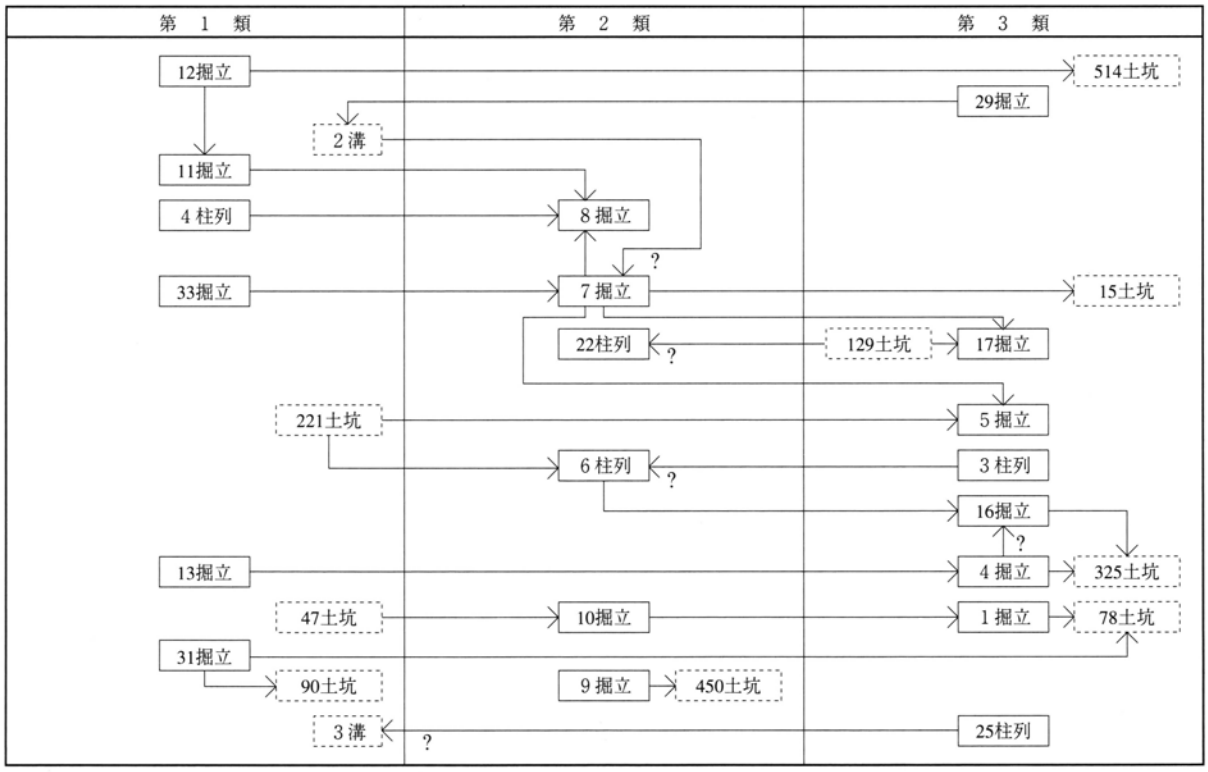
(エ) 第2類B群

主屋である東西棟の9号掘立柱建物跡は、東側（外側）に偏している。南北棟の7号掘立柱建物跡は規模も大きく、9号掘立柱建物跡と競合する印象もあるため、或いは時期が違うとした方が妥当かもしれない。第2類全体に言えることだが、建物構成及び



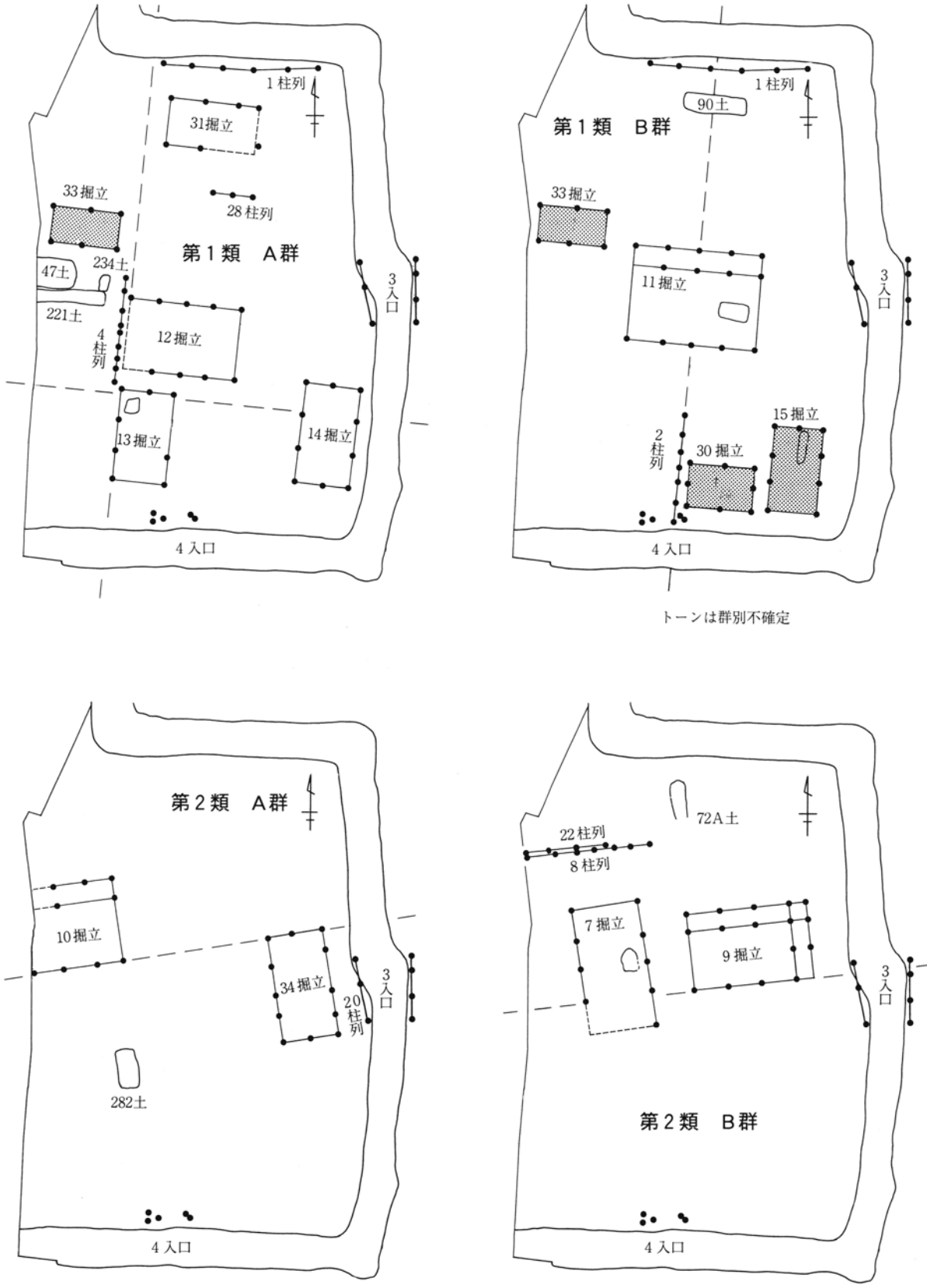
第147図　掘立柱建物跡・柱穴列主軸方位別分布グラフ

第148図　１区堀内部分遺構新旧関係模式図

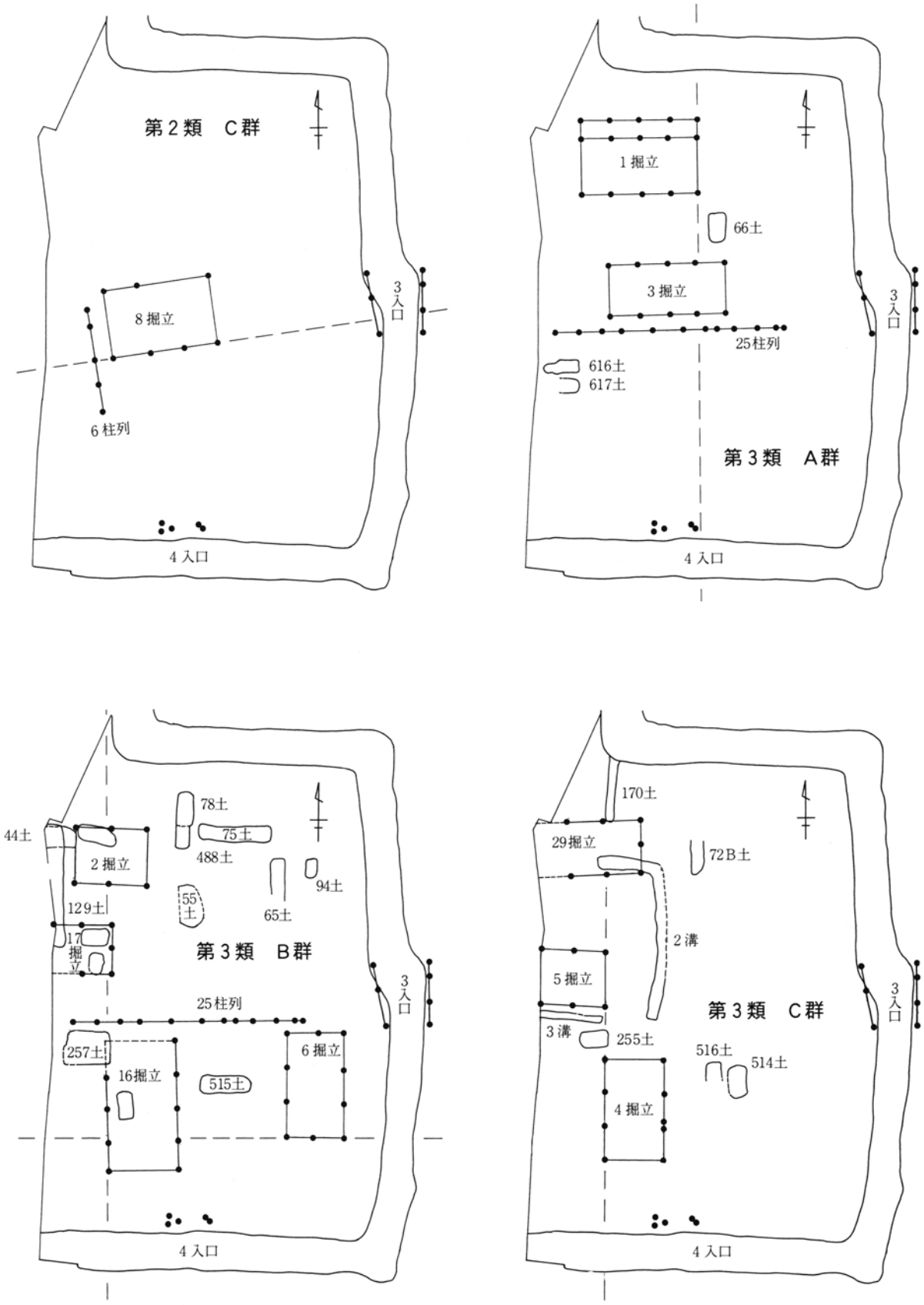


第４表　１区堀内部分遺構新旧関係基礎資料

旧	→	新	旧	→	新	旧	→	新
11掘立(Ｐ８・９)	→	８掘立(Ｐ５・６)	７掘立(Ｐ７)	→	８掘立(Ｐ１)	１掘立(Ｐ14)	→	78土坑
12掘立(Ｐ５)	→	11掘立内433土坑	７掘立(Ｐ７)	→	17掘立(Ｐ５)	４掘立(Ｐ２)	→	325土坑
12掘立(Ｐ６)	→	514土坑	７掘立(Ｐ８)	→	15土坑	４掘立(Ｐ７)	→	16掘立内287土坑
13掘立(Ｐ３)	→	４掘立(Ｐ４)	９掘立(Ｐ12)	→	450土坑	221土坑	→	５掘立(Ｐ６)
31掘立(Ｐ１)	→	78土坑	47土坑	→	10掘立(Ｐ６)	16掘立(Ｐ２)	→	325土坑
31掘立(Ｐ２・３)	→	90土坑	10掘立(Ｐ９)	→	１掘立(Ｐ９)	129土坑	→	17掘立(Ｐ１)
33掘立(Ｐ５)	→	７掘立(Ｐ８)	221土坑	→	６柱列(Ｐ１)	29掘立(Ｐ５)	→	２溝
４柱列(Ｐ１)	→	８掘立(Ｐ２)	６柱列(Ｐ４)	→	16掘立(Ｐ９)	25柱列(Ｐ11)	?→	３溝
２溝	?→	７掘立(Ｐ２)	３柱列(Ｐ２)	?→	６柱列(Ｐ５)			
７掘立(Ｐ６)	→	５掘立(Ｐ４)	129土坑	?→	22柱列(Ｐ１)			



第149図　1区堀内部分主軸分類別配置図（1）



第150図　１区堀内部分主軸分類別配置図（２）

配置の面で、南堀内部分全体に対する意識が、第1類に比べて明らかに薄れて来ており、1号堀を介して堀内・堀外とする位置付けも変更しなければならない段階と考える。こうして見ると、9号掘立柱建物跡が東端に偏していることも理解できる。

(オ)第2類C群

東西棟の8号掘立柱建物跡のみが、南堀内部分の中央部西寄りに配置される。

(カ)第3類A群

主屋である東西棟の1号掘立柱建物跡は、南堀内部分の北西端に配置され、その南面に所在する東西棟の3号掘立柱建物跡は付属屋であろうか。建物は南堀内部分の北半分のみにまとめ25号柱穴列で仕切り、南半分を広場的空間としている。この南側を空き地（建物のない空間）とする傾向は、第2類A群段階から始まっており、第1類の中庭的な空間とは異なる。また、第3類では建物周辺に土坑が顕著に分布するようになる。

(キ)第3類B群

B群とC群は建物構成が近似し継続性が高い。25号柱穴列と3号溝の新旧関係からC群をB群よりも後出としたが、4号掘立柱建物跡と16号掘立柱建物跡の新旧関係にやや疑問が残る。

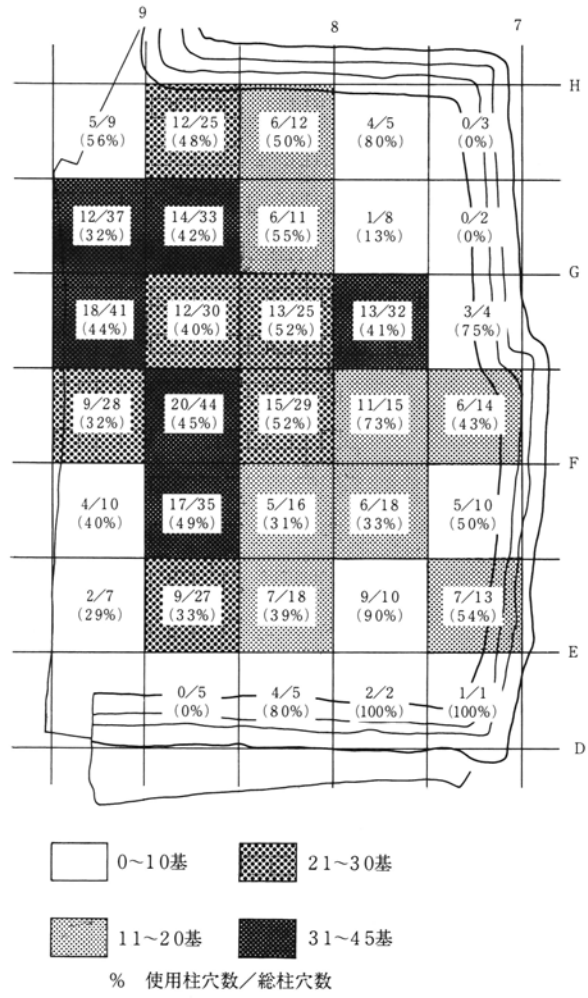
A群に引き続き、25号柱穴列によって南堀内部分を南北に仕切り、各々掘立柱建物跡2棟ずつを配置する。南半分では南北棟の6・16号掘立柱建物跡が所在し、A群北半分の建物構成に近似する。16号掘立柱建物跡の東面は、4号入口遺構とよく符合し、この入口の北側延長線を境に、6・16号掘立柱建物跡を各々独立した建物と考えることもできる。

北半分では西側に偏して東西棟の2・17号掘立柱建物跡が配置される。東側は土坑がやや多く分布するが、第2類段階南半分の空間と近似した性格を持つことも考えられる。2・17号掘立柱建物跡は規模から付属屋とすれば、西側調査区域外に主屋が所在する可能性もある。

(ク)第3類C群

4号掘立柱建物跡の西面、5号掘立柱建物跡の東面の延長線上に170号土坑・3号溝があることを根拠として設定したが、29号掘立柱建物跡よりも2号溝は後出しており、内部を2号溝などで区画する段階では29号掘立柱建物跡は共存しない。

南堀内部分北西端に所在する東西棟の5・29号掘立柱建物跡は、B群から継続するもので、その建て直しだろうか。南半分の西側に所在する4号掘立柱建物跡も、16号掘立柱建物跡からの継続であり（新旧関係に疑問はあるが）、同じくB群に一致して4号入口遺構によく符合するが、東側に6号掘立柱建物跡に続く掘立柱建物跡はない。南堀内部分を南北に区切っていた柱穴列は3号溝へと変わり、170号土坑・2号溝と共に北西部を再区画するようになる。したがって、B群でも想定したとおり西側調査



第151図　1区堀内部分柱穴分布図

区域外に主屋が存在する可能性がある。また、Ｂ群では北東部分のみであった広場的空間は、２号溝以東の南堀内部分東半へと拡大する。

第１類と第２類以降では、建物構成・配置に明らかな違いがあることは前述したが、本遺構が館跡として継続していた場合、第２類以降ではその主体部分が北西の調査区域外に移動していったと見るのが妥当と考える。また、館跡としての性格が第１類段階のみに該当するもので、その後突出した居住空間がなくなり、等質な集落構成へと変化したと考えるとしても、南堀内部分よりも北西の調査区域外に中核的な部分がある可能性もあると考える。

(ケ)その他と問題点

19号掘立柱建物跡は、規模・構造ともに他に比較できるものがなく、時期・性格ともに不明とならざるをえない。

これまで検討してきたとおり、掘立柱建物跡の主軸方位を基に分類することで、堀内部分における遺構の変遷を概ね捉えることができたと考える。ただし、問題となるのは掘立柱建物跡として抽出できた以外にも柱穴は存在することであり、これは調査上回避できない限界である。柱穴を掘立柱建物跡の柱穴として使用できた数量と分布は、第151図のとおりである。割合とすれば、40～50％が使用できた点で多い方かもしれない。また、柱穴総数の分布を見た時、堀内部分の北西部・南西部・中央部東寄りが顕著であるのは、第１～３類の状況を総合した状況と一致しており、この点からも第１～３類の分析結果が柱穴全体を分析できた場合と大差ないことを示していると判断する。

イ．堀外部分（１・３・４区・「上植木調査区」）

堀内部分と同様な基準によって分類を行ったところ、第１～４類の４つに分類された。堀外部分では第１～３類の重複はなかったが、堀内部分を援用して旧い順の新旧関係にあると考えたところ、矛盾はなかった。また、第４類は３・４区の掘立柱建物跡の全てであり、選択された平面配置となっており、３棟の重複があることから最低でも３期の時期差を想定できる。しかし、第１～３類に対して比較する根拠に欠けるため、両者を同じ時間軸の尺度として使用することはできなかった。また、土坑では第５類を加えた５つに分類可能であったが、詳細は後述することとして、ここでは掘立柱建物跡の遺構分布を中心に、遺構の変遷を見たい。

各分類における数量は、第１類が３棟、第２類が１棟、第３類が４棟（「上植木調査区」を含めれば６棟）、第４類が４棟であり、数量の増減は堀内部分と同じ傾向を示している。また、堀内部分と同様に柱筋に着目して、桁・梁側の面や柱が一致すること（第152図以下－－－で示した）を基準として区分し、Ａ・Ｂ・Ｃ群に細分することができた。

(ア)第１類Ａ群

南堀内部分の東側に立地する東西棟の27号掘立柱建物跡は、規模的に堀内部分の主屋12号掘立柱建物跡とほぼ同じである。堀内部分では各遺構との関連が不明瞭である３号入口遺構だが、ここでは堀内部分と27号掘立柱建物跡とを結ぶ通路としての機能が想定される。南堀内部分東面及び14号掘立柱建物跡東面の北延長線上には、東面を一致させた25号掘立柱建物跡がある。また、18号掘立柱建物跡はＡ・Ｂ群のどちらに属するか不明である。ただし、18・25号掘立柱建物跡の間に存在する空間は、多少の広さの差はあるとしても、第３類段階まで継承される状況であり、南堀内部分東面の延長線と一致して、何らかの境界を反映していたとも見られる。

(イ)第１類Ｂ群

北端の10号柱穴列が、唯一同じ群として捉えられるが性格は不明である。Ｂ群段階では、Ａ群の掘立柱建物跡がそのまま継続していたと見ることも可能であるが、南堀内部分の掘立柱建物跡配置の大幅な変化と対比して考えれば、この時期堀外部分では掘立柱建物跡が消滅していたとすることも不自然ではない。

(ウ)第２類Ａ群

23号掘立柱建物跡西面と南堀内部分の34号掘立柱

建物跡西面を揃えることがどのような意図を持つのか理解できないが、堀内部分でも触れたとおり、北堀内部分で唯一検出できた20号掘立柱建物跡が1号入口遺構と符合していたことと同様、23号掘立柱建物跡も2号入口遺構と符合していることが注目される。第2類段階では、堀内・堀外部分に共通して掘立柱建物跡が独立分散している傾向を読み取ることができる。

㈡第2類B・C群

この段階では、堀外部分に同じ群の遺構として捉えられるものはない。この時期は堀内・堀外部分とも一致して掘立柱建物跡が少ない傾向をよく示している。

㈠第3類A群

掘立柱建物跡の構成・配置は、第2類と近似しており、遺構の性格としての継続性が見られる。22号掘立柱建物跡は構造的に住居よりも廐舎などが想定され、21号掘立柱建物跡の付属家とも解される。

㈡第3類B・C群

本遺跡で最も掘立柱建物跡が多く、平面的な広がりを持つ時期である。南堀内部分を検討した時と同じく、掘立柱建物跡の構成・配置はA群段階とはかなり変化しており、堀外部分では非常に顕著な違いとして表れる。堀内・堀外部分全体として掘立柱建物跡は規則的に整然と配置され、各々独立した空間を持っているようである。既に第2類段階でも見えていたが、第1類段階が有していたような堀内部分の遺構構成が優位な状況は全くなく、むしろ21・24号掘立柱建物跡は堀内部分よりも大きな規模を備えている。ただし、西側調査区域外の堀内部分が不明な以上、堀外部分優位と断定はできない。

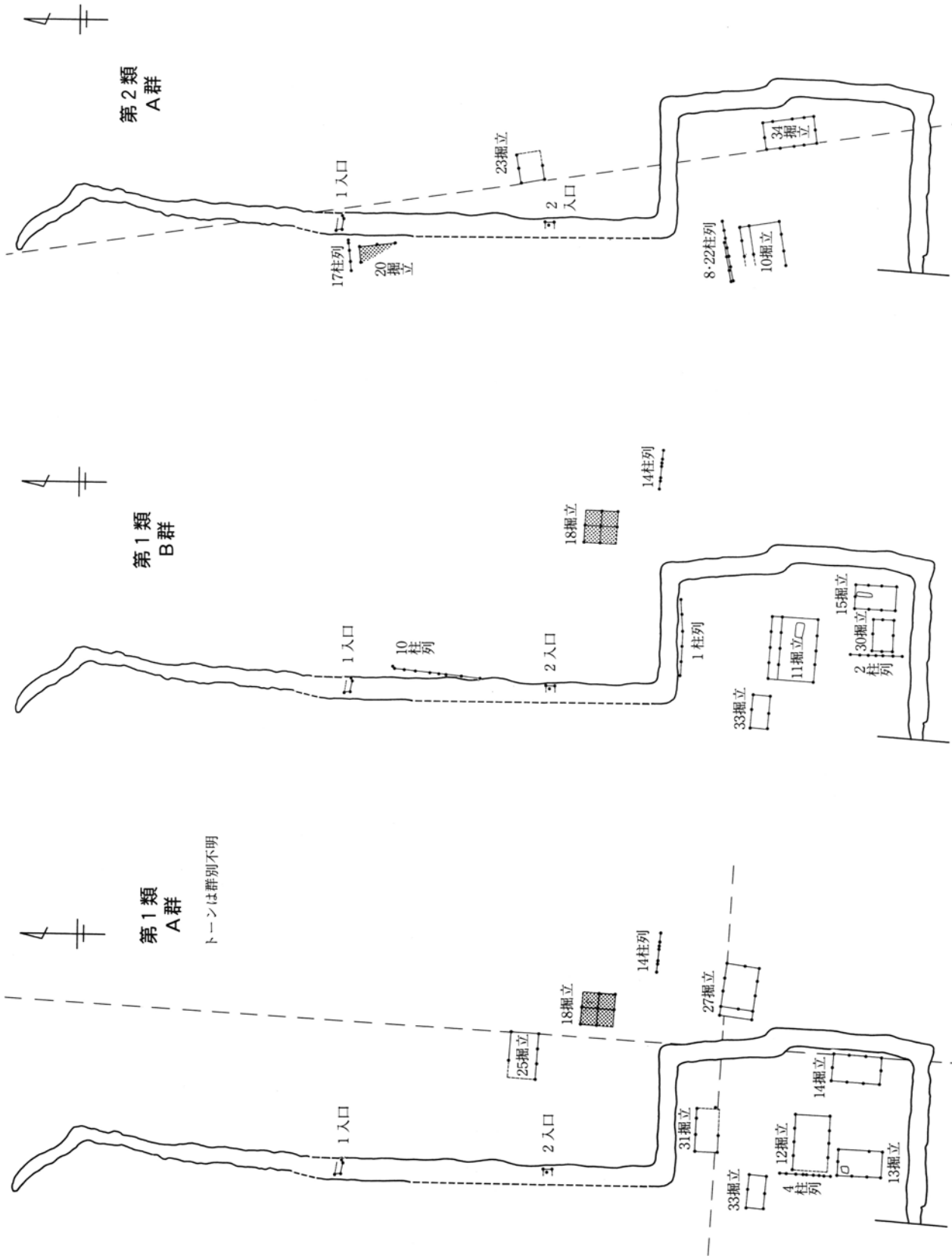
第2類段階と同じく、1・2号入口遺構と掘立柱建物跡との関連は強く、1号入口遺構の東延長線は21号掘立柱建物跡と「上植木調査区」3号掘立柱建物跡の間を通り、「上植木調査区」1・2号掘立柱建物跡の間を貫ける通路及び区画境として想定できる。2号入口遺構でも、11号柱穴列の北側を通り、24・26号掘立柱建物跡の間を貫ける通路及び区画境の存在が窺える。ただし、26号掘立柱建物跡を24号掘立柱建物跡の付属家とすることも可能である。なお、第1類A群段階で見たとおり、24・26号掘立柱建物跡の間には南北に貫ける通路の存在も窺え、北上して「上植木調査区」1・2号掘立柱建物跡の西側を通り、4区の東側へ貫けるルートも想定できる。しかも、「上植木調査区」2号掘立柱建物跡の北側には、「上植木調査区」報告書でも触れられているとおり、掘立柱建物跡数棟の存在が想定できる柱穴が密集しており、4区へと続く一連の掘立柱建物跡群を想定できる。

㈢第4類（第159図）

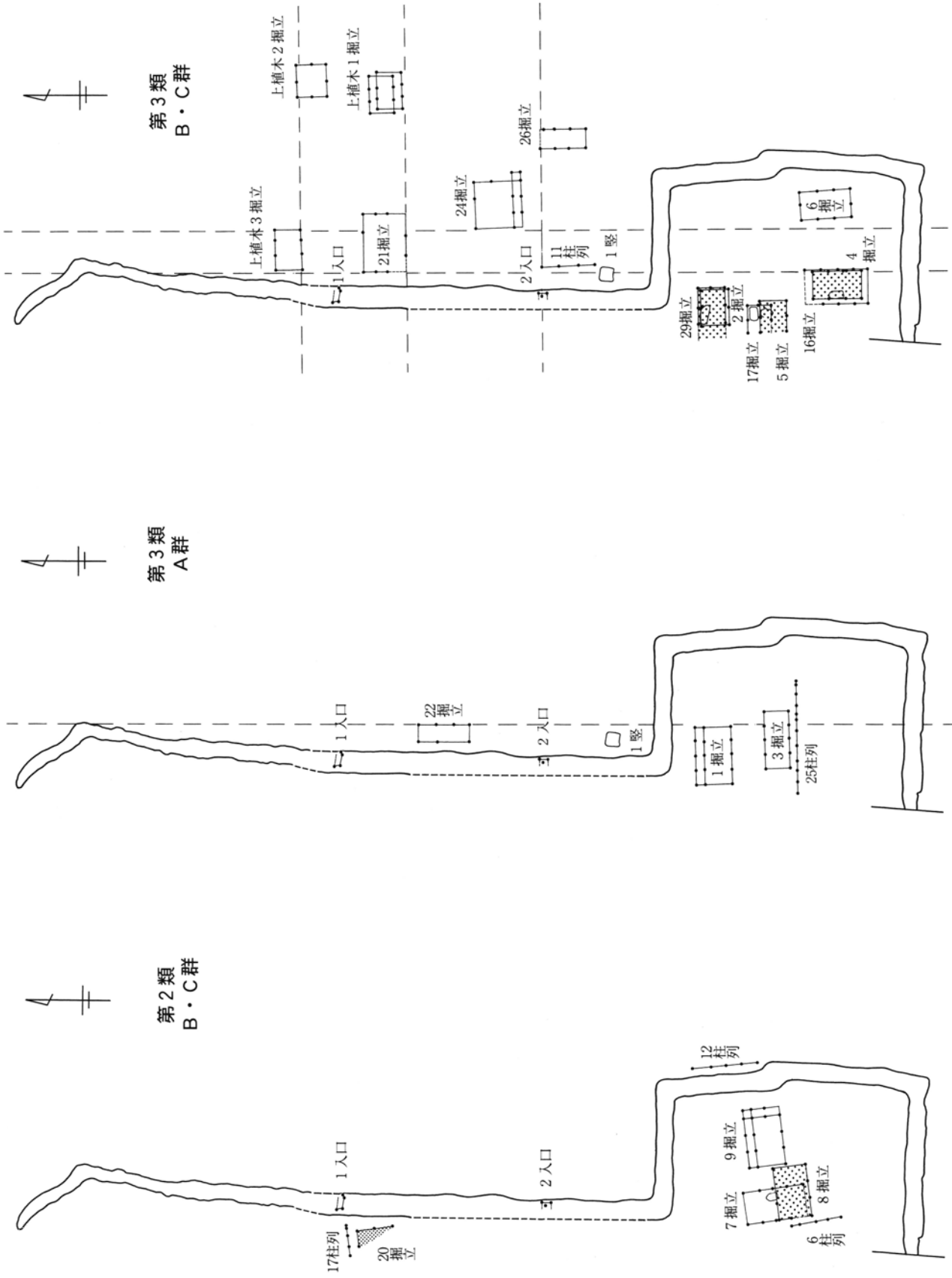
1・2・4号掘立柱建物跡は重複しており、最低でも3時期の存在が想定されるが新旧関係不明。西面が一致することに注目すれば、2・3号掘立柱建物跡が共伴すると位置付けることも可能であるが、規模から1・2・4号掘立柱建物跡が各々3号掘立柱建物跡の付属屋とすることも可能である。遺構配置を見ると、1号柱穴列を境に東側を居住域として区分していることが判明する。なお、時期としては第3類から続く南北通路との関係から、第3類に近づけることも可能であるが、土坑の分析結果も加味した上で後述する。

ウ．総括

以上見てきたとおり、掘立柱建物跡を基準に4類・1～3群　計9時期に分類して検討を行ってきたが、第4類を除いて年次比定を行うと、第1類A群の221号土坑に先行する2号井戸跡が14世紀後半であることを上限として、1号堀その他出土の在地土器鍋の下限が16世紀前半であることで、その全体の年代幅を押さえることが可能である。ただし、221号土坑は第3類の2・3号溝との関連も想定されるのだが、2号井戸跡自体が南堀内部分では最も古い点から大差ないものと考える。なお、搬入遺物である中国陶磁器や古瀬戸が概ね14世紀代であるのも、導入主体と想定される館跡の存続期間である第1類A・B群の時期とほぼ符合してくるものと言える。



第152図　１区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類別配置図（１）



第153図　1区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類別配置図（2）

(2) 掘立柱建物跡

ア．規模と構成

第154・155図は、梁側の長さを基準として掘立柱建物跡をＡ～Ｄ型に分類し、主軸方位別に並べたものである。本遺跡検出の掘立柱建物跡は、殆どが側柱建物でほぼ相似形となっていることから、梁行を基準とすることにした。ただし、面積を考慮すると、若干補正して考える必要があり、第１類Ｂ型の18号掘立柱建物跡はＣ型相当、Ｃ型のうち第２類の23号掘立柱建物跡、第３類の２・５号掘立柱建物跡、第４類の２・４号掘立柱建物跡は各々Ｄ型相当と考えた方が妥当である。また、南堀内部分検出の掘立柱建物跡の特徴として、庇は全て北側であることが注目される。以下、(1)で述べた内容と重複する面もあるが、検証するつもりで時期別に構成を検討する。

(ｱ)第１類Ａ群

堀内部分ではＢ型の12号掘立柱建物跡を主屋として、Ｃ型３棟、Ｄ型１棟が整然と配置される。堀外部分では、南堀内部分に東隣するＢ型の27号掘立柱建物跡が12号掘立柱建物跡と同規模を備えており、やや離れてＣ型相当２棟（18号掘立柱建物跡補正）が存在する。27号掘立柱建物跡は、南堀内部分北面の延長線上にある14号柱穴列によって、南北に仕切られることに注目すれば、その周辺は堀内部分に近い性格を持った空間として見ることも可能である。

(ｲ)第１類Ｂ群

堀内部分では、主屋である11号掘立柱建物跡の面積が55.55㎡と本遺跡最大規模を持ち、Ｂ型１棟、Ｃ型２棟が整然と配置される。11号掘立柱建物跡が傑出している点が示すとおり、堀内部分優位の段階で、１号堀に区画された館跡と位置付けられる。

(ｳ)第２類Ａ群

堀内部分では、Ｂ型の10号掘立柱建物跡が第１類の主屋に対比されるが、建物配置が全く変化しており、Ｃ型である34号掘立柱建物跡も面積的に10号掘立柱建物跡に近く、建物構成も違う。堀外部分の23号掘立柱建物跡はＤ型相当で、９号井戸跡に共伴する水屋と考えられる。

(ｴ)第２類Ｂ・Ｃ群

Ｂ・Ｃ群の掘立柱建物跡は全てＢ型であり、本遺跡で唯一２面庇を備えた９号掘立柱建物跡も、面積では同じＢ群内の７号掘立柱建物跡と変わらない。Ｃ群の８号掘立柱建物跡も、棟方向は違うが７・９号掘立柱建物跡と規模的には大差ないものである。したがって、前述したとおりこの３棟は共伴せず、１棟ずつが各々南堀内部分の中央部のみで、堀外部分にも掘立柱建物跡を持たないのである。

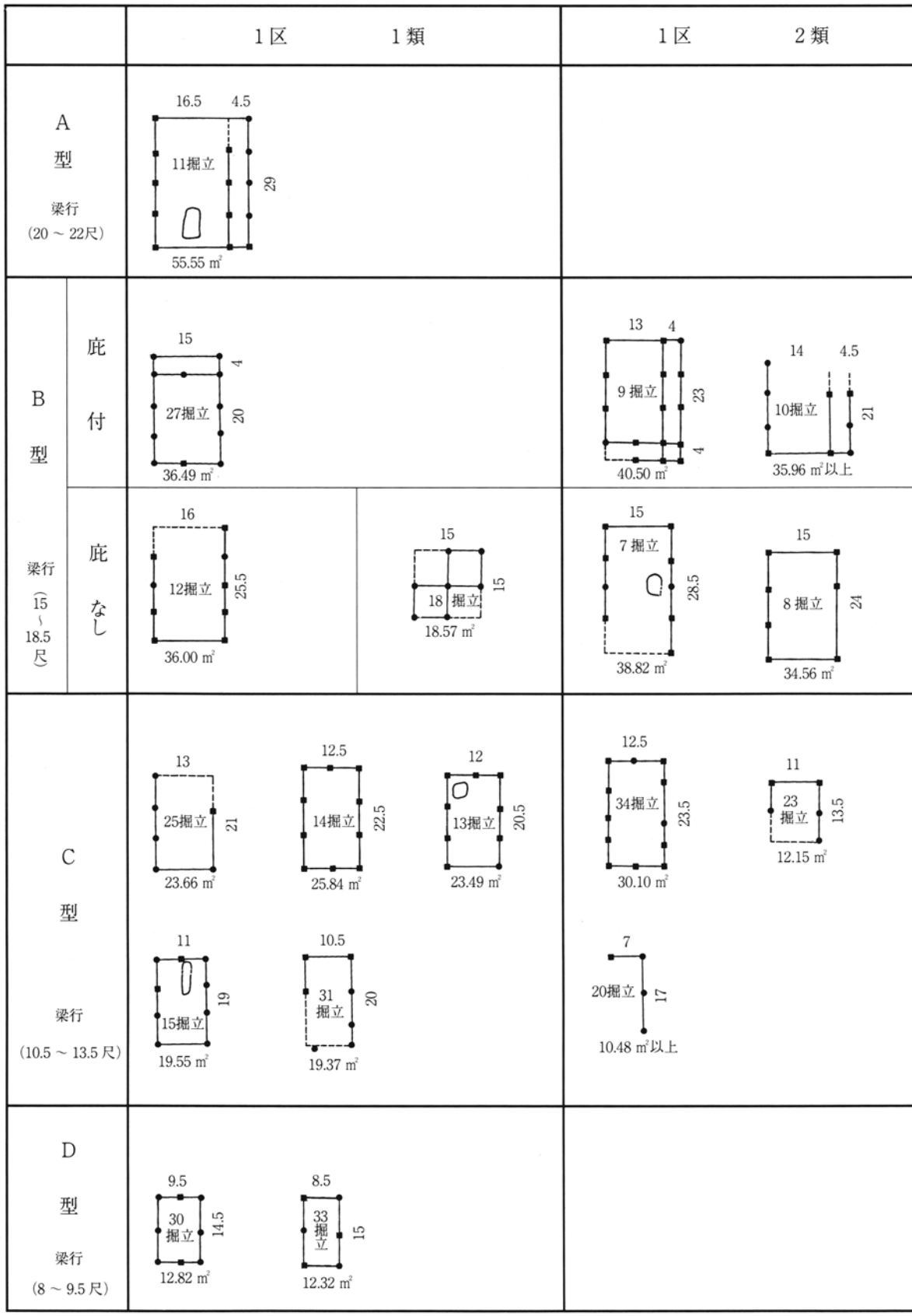
(ｵ)第３類Ａ群

南堀内部分の主屋である１号掘立柱建物跡は、北側に庇を持つ構造や規模から、第２類の９・10号掘立柱建物跡或いは多少大きいが第１類の11号掘立柱建物跡までもその系譜を引くものといえる。比較的面積の広いＣ型の付属屋３号掘立柱建物跡を配置するのは、第２類のＡ群に類似する。堀外部分の22号掘立柱建物跡は細長い構造で、廐舎などであろうか。

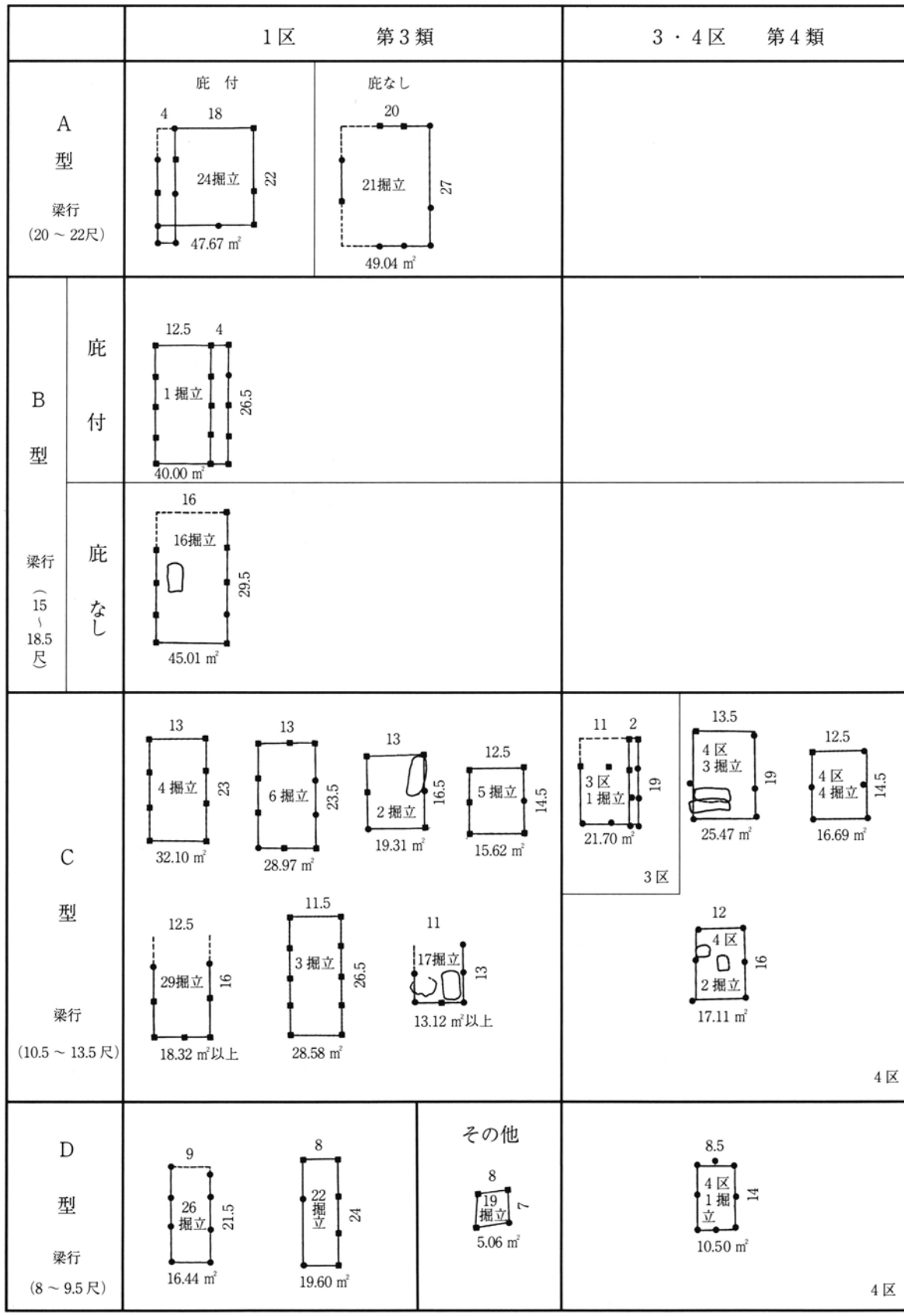
(ｶ)第３類Ｂ群

堀内部分の他類では、面積的に主屋に相当する16号掘立柱建物跡は、南堀内部分の南半に所在する南北棟で、位置的にはそれまでの主屋の系統ではない。ただし、東端Ｃ型の６号掘立柱建物跡が、Ａ群の３号掘立柱建物跡に相当する点では、Ａ群の建物構成に似ている。また、北半の２・17号掘立柱建物跡は面積的にＤ型相当であり、付属屋である可能性が高いことから、西側調査区域外に主屋の存在が想定される。

堀外部分では、堀内部分より規模の大きいＡ型の21・24号掘立柱建物跡が現われ、細長い26号掘立柱建物跡はＡ群の22号掘立柱建物跡に共通するものがある。また、Ｃ型である「上植木調査区」の１～３号掘立柱建物跡も含めて、堀外部分の建物は整然と配置されており、各々の間に通路が介在することは既に述べたが、堀内部分の建物配置にも同じ傾向が読み取れる。したがって、この段階では堀内・堀外部分が１号堀を挟んではいても、非常に均質な一連の建物群或いは集落を形成していたものと考える。



第154図　掘立柱建物跡規模別分類図（1）



第155図　掘立柱建物跡規模別分類図（２）

㈾第3類C群

堀内部分ではC型の5・29号掘立柱建物跡が、南堀内部分北半に所在しB群の建替えと見なされるが、南半では主屋級の建物であった16号掘立柱建物跡の位置に、やや小さいC型の4号掘立柱建物跡が現われ、南堀内部分東半は広場的空間へと変化する。また、B・C群は継続性が高く時期差が少ないと考えられるため、堀外部分はB群と大差ないと考える。

㈿第4類

4区では他に比して大きいC型の3号掘立柱建物跡に対して、D型相当で付属屋の3棟が重複しており、この点でC型も主屋となりうることが理解される。また、3区1号掘立柱建物跡はC型で唯一北庇を備えており、1区に対比すると第4類はC型を主屋とする一群であるという性格付けが可能となる。

イ．柱間

各柱穴間の柱間を個別に集計したのが、第5～7表である。分類はこれまで検討してきた主軸方位別と梁行規模別を使用することで、時期差をも見られるものと考えたが、結論として各類別を比較しても相違点は少なく、ほぼ同じ傾向であることが解った。

桁行を見ると、全体では6.5～8尺が大部分を占

第5表　1区掘立柱建物跡柱間尺数（桁行）

桁　柱間尺数 型　遺構名	4	4.5	5	6	6.5	7	7.5	8	8.5	9	12.5	13	13.5	16	16.5	18	計
第1類																	
A型 11掘立				1		2③	2①	2									7④
B型 27掘立	①		①	2	1	3											6②
12掘立				3	4												7
18掘立						1	3										4
C型 13掘立					3	2	1										6
14掘立							6										6
15掘立				2	4												6
25掘立						3							1				4
31掘立			1			1	1	1									4
D型 30掘立						1	3										4
33掘立					1	1		1	1								4
第2類																	
B型 9掘立	③						5②	1①									6⑥
10掘立				1	1①	①		1			1						4②
7掘立					2	2	2	1									7
8掘立							1	2	1					1			5
C型 20掘立								1		1							2
23掘立					3												3
34掘立		1	3	1	2					1							8
第3類																	
A型 24掘立	①				1		3	1				1					6①
21掘立										2						1	3
B型 1掘立				1①	3②	3①											7④
16掘立				1	1		4	1									7
C型 2掘立							1	1	2								4
3掘立					6	2											8
4掘立							4	2									6
5掘立						3	1										4
6掘立							1	5									6
17掘立				1		2											3
29掘立							2	2									4
D型 22掘立						1		1	1	1					1		5
26掘立			1		1	1	3										6
その他																	
D型 19掘立						1		1									2
計	⑤	1	5①	13①	33③	29⑤	43③	24①	5	5	1	1	1	1	1	1	164⑲

注：庇は○数字。

めており、ピークは7.5尺にあることが注目される。また、６尺が意外と少ない。一方梁行を見ると、梁行２間では5.5・６・７尺が、梁行１間では13尺の数量が突出している。したがって、桁・梁行では別々の柱間が採用されていたことが判明する。

ウ．柱穴

第156図は梁行別規模区分に従って、柱穴の規模・形状をグラフに作成したものである。Ａ型では規模のばらつきもあるが、径50㎝を超える大型のものも多く、形状は隅丸方形のものが卓越している。Ｂ型の規模は40～50㎝位に集中し、形状はやはり隅丸方形が多い。Ｃ型でも規模のばらつきはあるが、径30～50㎝が大半で、形状は隅丸方形と円形が等量となる。Ｄ型の規模は30～40㎝が多く、形状は円形が大半を占める。

第６表　１区掘立柱建物跡柱間尺数（梁行）

梁　柱間尺数 型　遺構名	4	4.5	5	5.5	6	6.5	7	7.5	8	8.5	9	9.5	10.5	11	11.5	12	12.5	13	14	14.5	15	15.5	16	16.5	18	計
第１類																										
Ａ型 11掘立		②																						2		2②
Ｂ型 27掘立							3					1							①							4①
12掘立																							1			1
18掘立					1			2		1																4
Ｃ型 13掘立					1		1									1										3
14掘立					2	2																				4
15掘立				2										1												3
25掘立																		1								1
31掘立													1													1
Ｄ型 30掘立		2	1	1																						4
33掘立									1	1																2
第２類																										
Ｂ型 ９掘立	③					2②												1								3⑤
10掘立		①																		1						1①
７掘立																					1					1
８掘立																						2				2
Ｃ型 20掘立							1																			1
23掘立														1												1
34掘立				1	1		1	1																		4
第３類																										
Ａ型 24掘立	①									1															1	2①
21掘立				4																						4
Ｂ型 １掘立	②																1	1								2②
16掘立																							1			1
Ｃ型 ２掘立																		2								2
３掘立															2											2
４掘立																		2								2
５掘立																	2									2
６掘立					2		2																			4
17掘立			1		1																					2
29掘立					2																					2
Ｄ型 22掘立									1	1																2
26掘立											1															1
その他																										
Ｄ型 19掘立							1	1																		2
計	⑥	2③	2	8	10	4②	9	4	2	4	1	1	1	2	2	1	3	7	①	1	1	2	2	2	1	72⑫

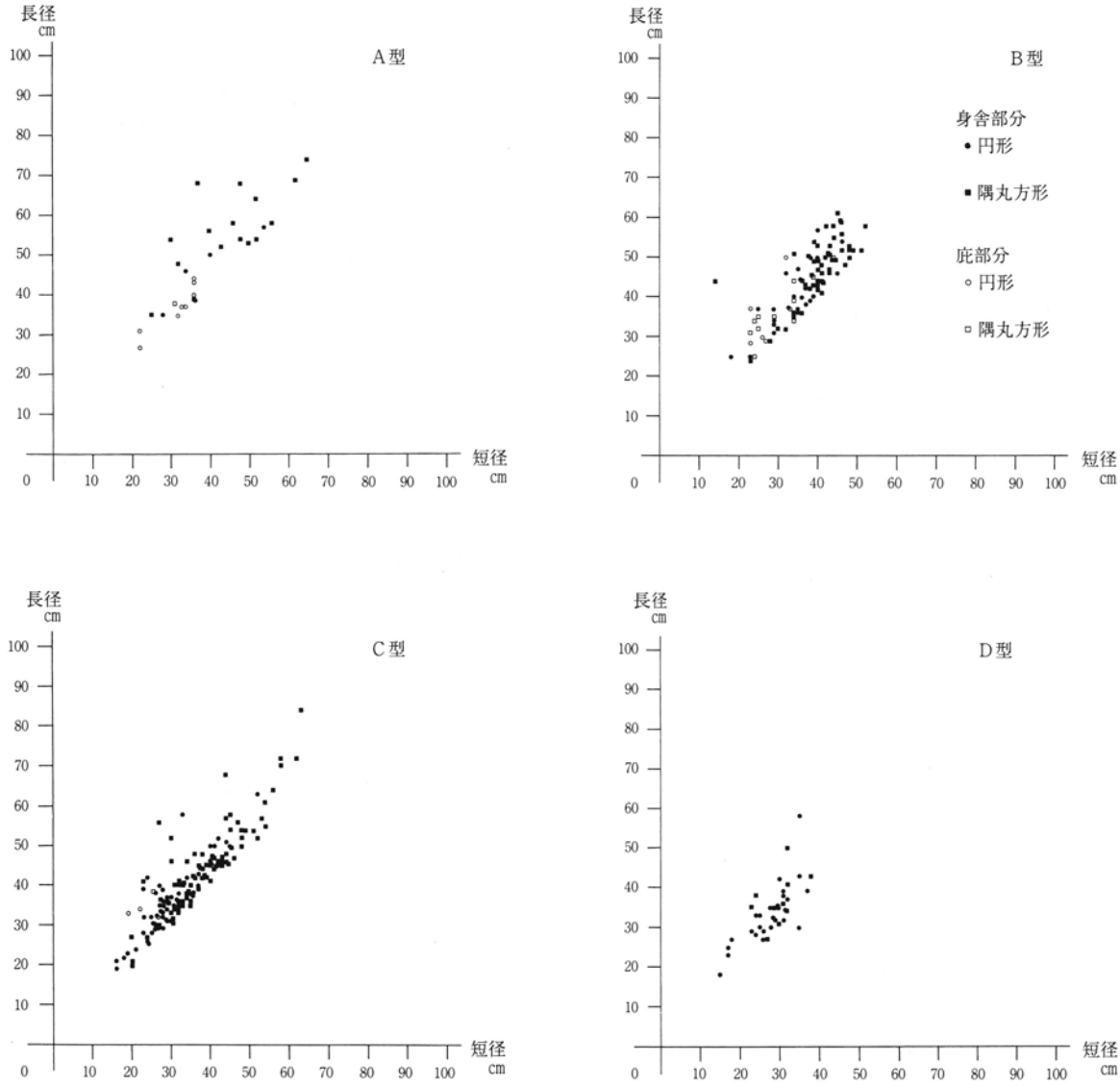
注：梁行１間のときはアンダーライン。庇は○数字。

第7表　3・4区掘立柱建物跡柱間尺数（桁行・梁行）

桁　柱間尺数 型　遺構名	6	6.5	7	7.5	8	8.5	9	12	12.5	計
第4類　（3区）										
C型　1掘立	1①	2②							1	4③
第4類　（4区）										
C型　2掘立			1	1		1	1			4
3掘立			1		1			2		4
4掘立				4						4
D型　1掘立			3	1						4
計	1①	2②	5	6	1	1	1	2	1	20③

梁　柱間尺数 型　遺構名	2	3.5	4	4.5	6.5	10	11.5	12	12.5	13.5	14	計
第4類　（3区）												
C型　1掘立	②		1		1							2②
第4類　（4区）												
C型　2掘立						1		1				2
3掘立										1	1	2
4掘立							1		1			2
D型　1掘立		1	1	2								4
計	②	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	12②

注：梁行1間のときはアンダーライン。庇は○数字。



第156図　掘立柱建物跡規模分類別柱穴規模一覧

(3) 土坑

ア．分布

土坑についても、掘立柱建物跡同様に主軸方位別に分類を行ったが、各分類における数量は第５→２→４→１→３類の順で増加しており、掘立柱建物跡の数量比に極めて符合する結果を示していた。

(ア)堀内部分（１区）

第１類は北堀内部分でわずか分布し、南堀内部分でも少量見られるが、性格付けとして①掘立柱建物跡の内部施設であるもの：363・433号土坑、②掘立柱建物跡と対置され、別個の機能を有すると考えられるもの：90・221・234号土坑、③竪穴建物跡と考えられるもの：47号土坑の３つに大別される。

第２類の数量は少ないが、第１類と同様①として246号土坑、②として72Ａ・96号土坑、③として282号土坑を充てることができる。

第３類の数量は一気に増加するが、①として287号土坑、③として257号土坑があり、その他多くは②に属している。ただし、170号土坑は２号溝と共に区画する機能を持つものと考える。第３類では②の数量が多いため、幾つかのまとまりが見られ、土坑の性格を知る手がかりとなる。それらは大きく４つに分かれており、北半の75号土坑ほかの９基、西端北寄りの44・127・211号土坑、西端南寄りの236号土坑ほか４基、中央部の514～516号土坑である。これらは各々重複し同時に存在していたものではなく、繰り返し付設されてきたことは本文中に述べたが、分類をＡ～Ｃ群に細分した際、一致するものとして抽出される土坑も少なからず存在した。こうして見ると、既に対置という言葉を使っているが、掘立柱建物跡と整合性を持った土坑配置が存在すると見て間違いない。

第４類では44・1075号土坑が存在するが、偶然主軸方位が一致した可能性も否定できない。

(イ)堀内部分（「上植木調査区」）

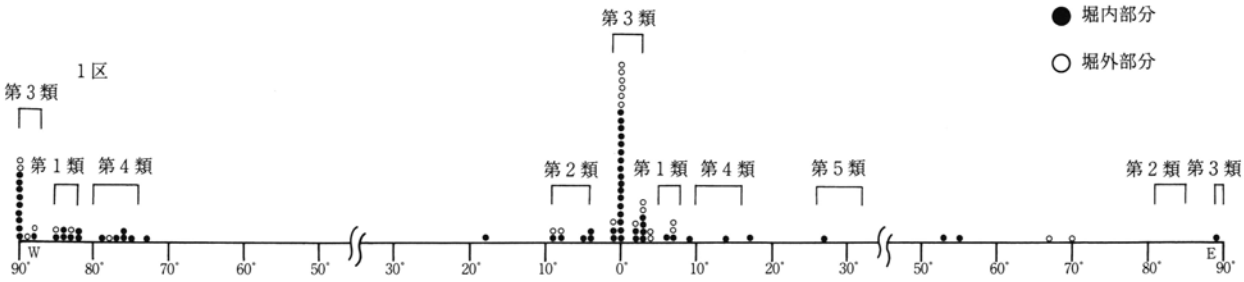
各分類における数量は、第３→１→４類の順で増加しており、特に第１・４類の分布は類似する。何か中心的なものを取り囲んで、方形に配置され、中心部分を欠損したように見える。また、掘立柱建物跡は見られない反面、地下式土壙や土壙墓が分布していることから、土壙墓も少なからず含まれているものと推測される。

(ウ)堀外部分（１区）

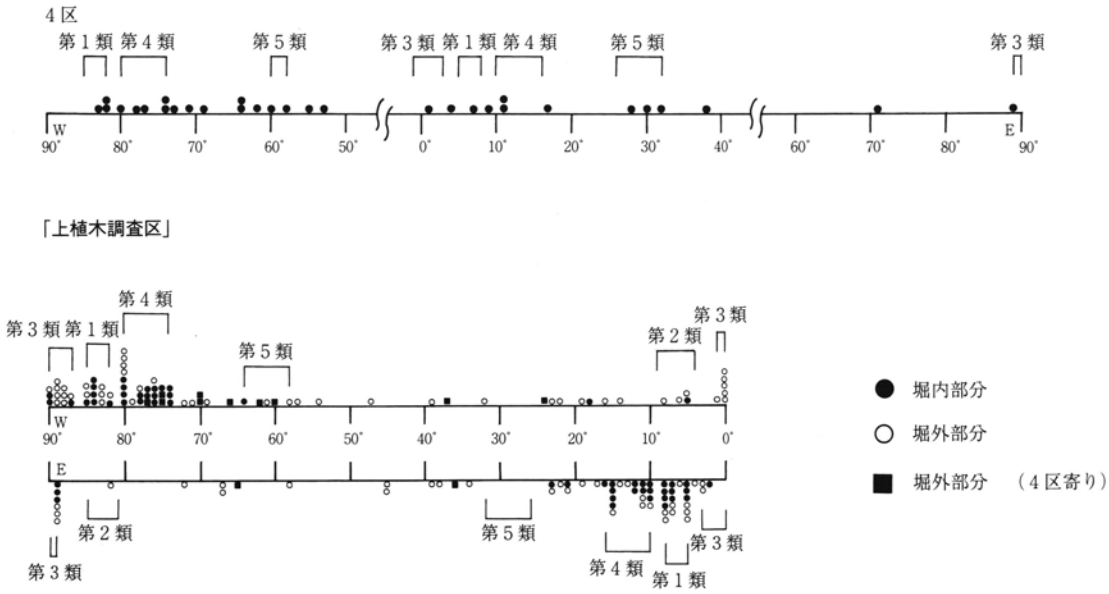
第１・２類は少なく、第３類がやや多く見られ、掘立柱建物跡周辺に集中する傾向がある。

(エ)堀外部分（「上植木調査区」）

各分類における数量は、第５→２→４→１→３類の順で増加しており、分類外の土坑は少ない。第１・３類の配置には規則性があるように見られることから、南堀内部分と同様、土坑に対置される掘立柱建物跡が存在していたが認定できなかった可能性が高い。なお、第１類の土坑は「上植木調査区」が最も多いが、主軸方位の近い第３類の混同も考慮される。また、第５類は「上植木調査区」４区寄りから４区にかけて偏在する。

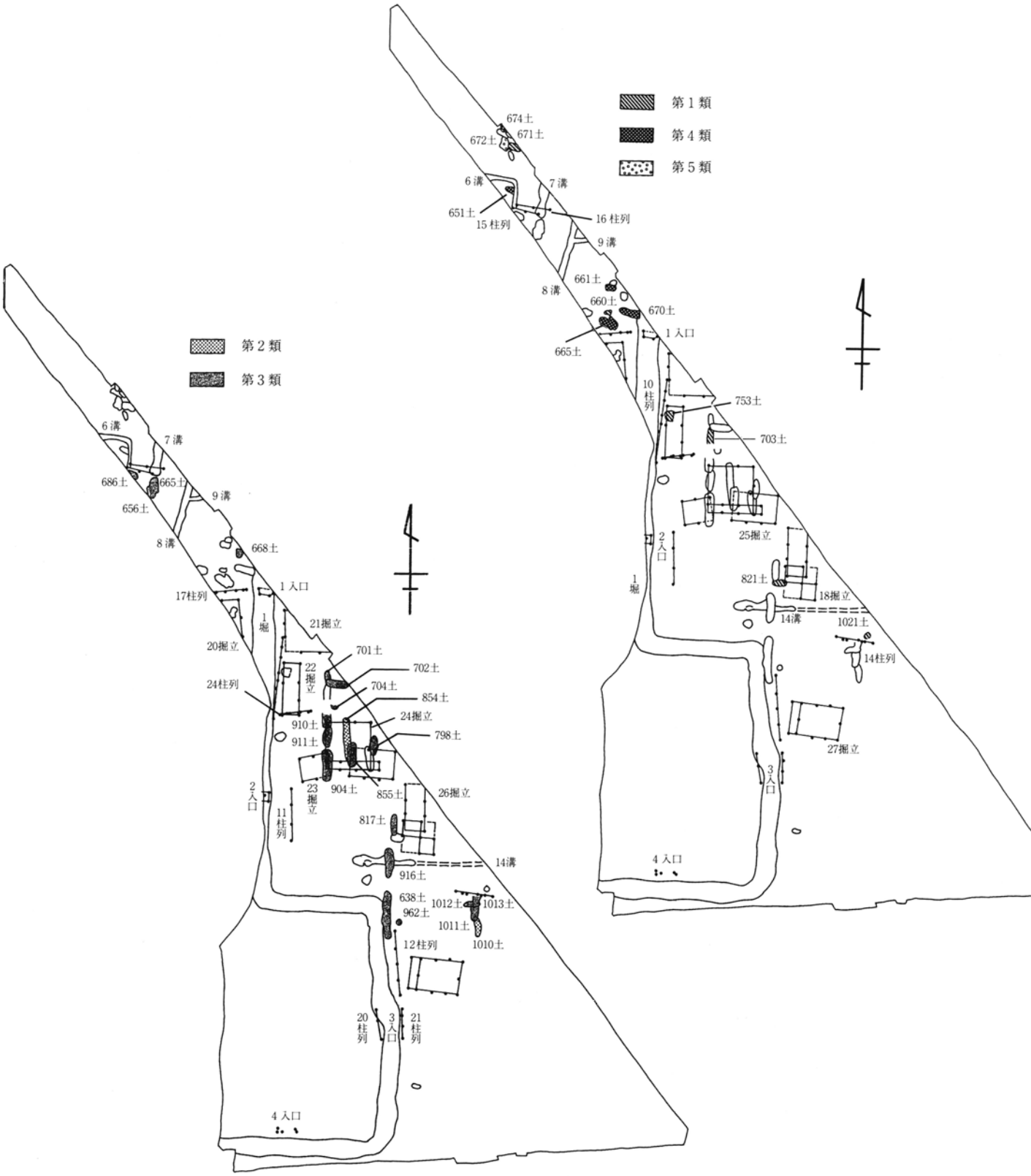


第157図　１区土坑主軸別分布グラフ

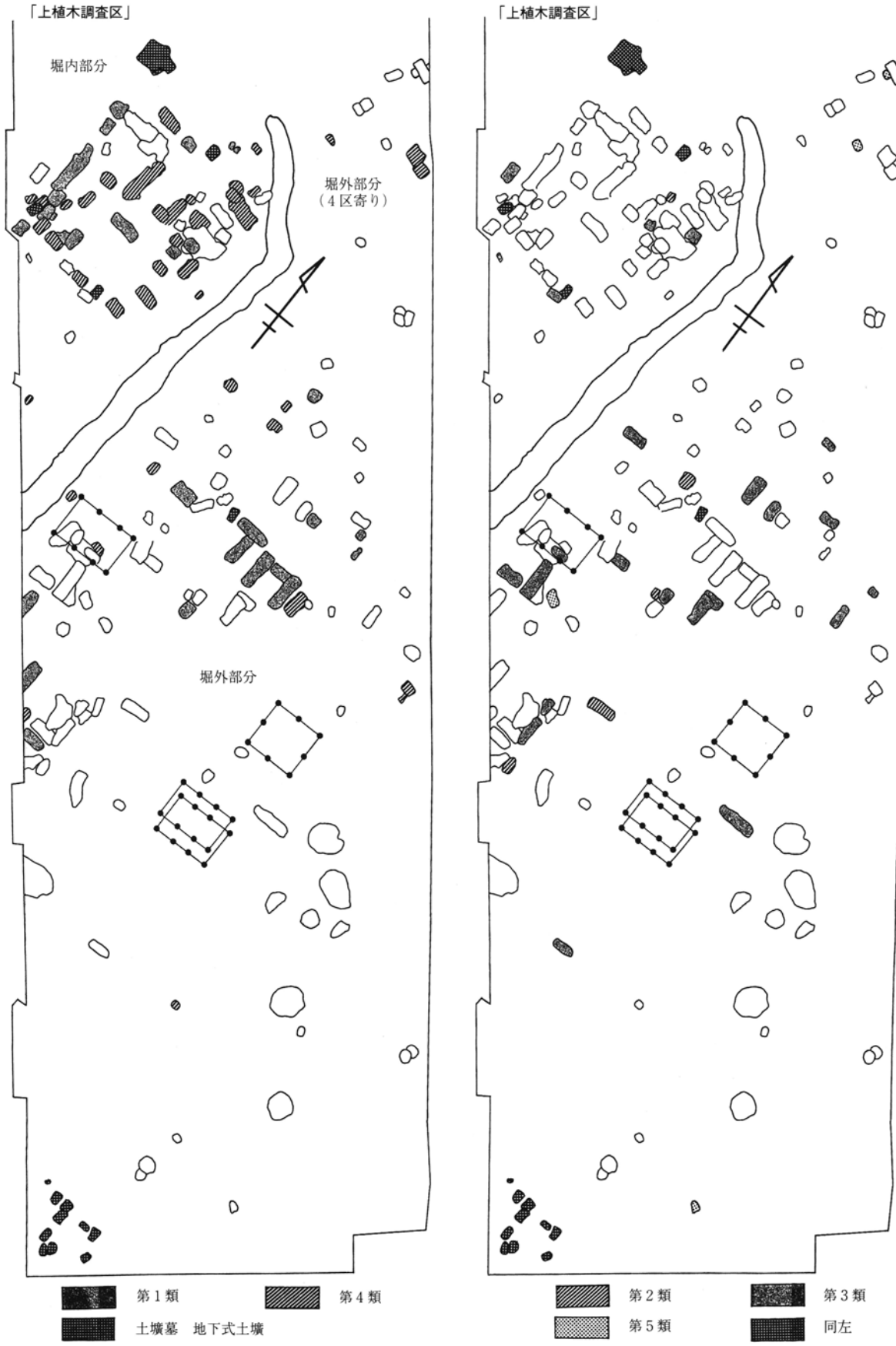


第158図　4区・「上植木調査区」土坑主軸方位別分布グラフ

第159図　1区堀内部分・4区土坑主軸方位別分布図



第160図　１区土坑主軸方位別分布図



第161図　「上植木調査区」土坑主軸別分布・土壙墓・地下式土壙分布図

(オ)堀外部分（４区）

各分類における数量は、第３→１→４→５類の順で増加しており、堀内・堀外部分を含む他の調査区と異なった構成を示すと共に、分類外の土坑も少なくない。第１・４類は共に掘立柱建物跡周辺に分布し、第４類では掘立柱建物跡の内部施設であるものもある。第５類は４区に集中し、居住空間である１号柱穴列より西側に分布する点が注目される。

イ．規模・形状

形状は長さ・幅を基準に、長短比1.00～1.50を方形・正方形、1.51～2.50を長方形、2.51以上を細長方形として分類した。

形状が方形・正方形及び隅丸方形・正方形のものは、１・４区では数量が少なく点在しており、「上植木調査区」では堀内・堀外部分ともに20基程度総計47基とやや多く、面積は３㎡以上のもの１基を除けば、殆どが１㎡前後である。その分布は「上植木調査区」堀内部分で方形に配置され、第１・４類段階で盛んに構築される。なお、規模・形状ともに類似する12～14号土壙墓が同じ主軸方位を持って分布している点から、この内の相当量が土壙墓であり、一辺17ｍ程の正方形を呈する整然とした墓域を形成していたと思われる。したがって、南に隣接して東西方向に走向する溝は、直角に曲がって７号溝と同一の区画溝を形成し、北側の墓域を画していたものと言える。

長方形・隅丸長方形のものは、１・４区で26基とやや多く、１区では南堀内部分に集中し第３類が殆どである。また、４区土坑の大半がこの形状である。深さは30㎝以上のものも半数近くあるが、分布からその機能を明確にすることはできない。「上植木調査区」では堀内・堀外部分ともに20基程度総計47基と、方形・正方形などと同様多く分布している。特に堀内部分は、土壙墓と規模・形状ともに同等であり、土壙墓も少なからず含まれているものと見られる。なお、この形状の土坑には、１区47・257号土坑や４区27号土坑のように規模が大きく竪穴建物跡と考えられるもの、１区433号土坑のように掘立柱建物跡の内部施設であるものなど、多様な機能を持つものが混在している。

細長方形・隅丸細長方形のものは、１・４区で総数16基、「上植木調査区」で11基とあまり多くないが、総じて掘立柱建物跡周辺に分布する傾向を見ることができる。特に１区23号掘立柱建物跡と854号土坑や、４区１・４号掘立柱建物跡と22号土坑の位置関係に見られるとおり、両者は少し間隔を空けて配置される傾向を示している。面積は３㎡を超えるものが大半であるが、短軸は他の形状のものと同様、１ｍを大きく越えるものは少なく、長軸だけが長くなった結果として細長い形状となったことが看取される。これは一方で、長方形・隅丸長方形の中に同種の機能を持つものが混在する可能性を示す。１区南堀内部分では、掘立柱建物跡が配置されなくなった空間に選地している傾向が見える。例えば、１号掘立柱建物跡消滅後、78号土坑が掘られていることが示すとおり、南掘内部分北東部に分布する75号土坑ほかの一群が空間を埋めている。こうして見ると、堀内・堀外部分ともに、掘立柱建物跡に沿うと見えた土坑が、建物と空き地（建物のない空間）の間に介在していることが読み取れ、むしろそうした空き地に属していると考えた方が、他の分布も併せて理解し易い。仮説として、そうした空き地は屋敷畠であり、土坑は芋類を貯えておく、いわゆる「芋穴」とする見方も成り立つ。

以上、土坑の分析を通じて得られた知見に、掘立柱建物跡の分析結果を加味して、時期区分の変遷を考えると、第４類は「上植木調査区」堀内部分で見たとおり第１類との継続性が認められる。また、第５類も、４区25号土坑が14～15世紀前半であることから、本遺構群でも古い段階に位置づけられ、４区西半から「上植木調査区」４区寄りに偏在する傾向は第１・４類に対比され、同種の遺構群であることが濃厚となる。したがって変遷としては、第１・４・５（順不明）→２→３類とするのが妥当と結論する。

第8表　下植木壱町田遺跡 形態別中世土坑 計測値分析表

方　形・正方形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	1	1.33	1.33				1	6.75	6.75
1区 その他	1	1.10	1.10	1	0.95	0.95			
4区 第3類	1	1.00	1.00	1	0.77	0.77			
4区 第4類	2	1.02～1.30	1.16	2	0.76～0.83	0.80			
4区 第5類	1	1.42	1.42	1	1.42	1.42			
4区 その他	1	1.39	1.39	1	1.45	1.45			
計	7	1.00～1.42	1.22	6	0.76～1.45	1.03	1	6.75	6.75
方　形・正方形（深さ30cm以上）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	1	1.17	1.17	1	1.27	1.27			
計	1	1.17	1.17	1	1.27	1.27			

隅丸方形・隅丸正方形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第2類	1	1.18	1.18	1	0.85	0.85			
4区 第4類	1	1.18	1.18	1	0.90	0.90			
4区 第5類	1	1.45	1.45	1	1.13	1.13			
4区 その他	1	1.06	1.06	1	1.00	1.00			
計	4	1.06～1.45	1.22	4	0.85～1.13	0.97			
隅丸方形・隅丸正方形（深さ30cm以上）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第1類	1	1.20	1.20	1	0.93	0.93			
1区 第3類	1	1.19	1.19	1	0.88	0.88			
1区 その他	1	1.33	1.33	1	0.75	0.75			
計	3	1.19～1.33	1.24	3	0.75～0.93	0.85			

不整方形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 その他	1	1.49	1.49	1	1.80	1.80			
4区 その他	1	1.37	1.37	1	1.16	1.16			
計	2	1.37～1.49	1.43	2	1.16～1.80	1.48			

長　方　形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第1類	3	1.75～1.88	1.82	3	0.74～2.57	1.60			
1区 第3類	4	1.60～2.46	1.91	4	0.53～1.58	0.99			
4区 第1類	2	2.10～2.33	2.22				2	3.13～4.47	3.80
4区 第4類	1	2.42	2.42	1	2.32	2.32			
計	10	1.60～2.46	2.00	8	0.53～2.57	1.39	2	3.13～4.47	3.80
長　方　形（深さ30cm以上）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第2類	1	2.00	2.00				1	3.92	3.92
1区 第3類	3	1.64～1.84	1.73	3	2.03～2.25	2.17			
4区 第5類	2	1.50～1.67	1.59	1	1.27	1.27	1	3.46	3.46
4区 その他	1	1.94	1.94	1	2.98	2.98			
計	7	1.50～2.00	1.76	5	1.27～2.98	2.15	2	3.46～3.92	3.69

隅丸長方形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第1類	1	1.53	1.53	1	0.75	0.75			
1区 第2類	1	1.53	1.53	1	1.65	1.65			
1区 第3類	2	1.74～1.88	1.81	2	1.29～2.35	1.82			
1区 第4類	1	2.40	2.40				1	3.12	3.12
1区 その他	1	1.60	1.60	1	1.44	1.44			
計	6	1.53～2.40	1.78	5	0.75～2.35	1.50	1	3.12	3.12
隅丸長方形（深さ30cm以上）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	1	1.65	1.65	1	2.38	2.38			
1区 第4類	1	2.34	2.34				1	3.65	3.65
計	2	1.65～2.34	2.00	1	2.38	2.38	1	3.65	3.65

不整隅丸長方形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	1	1.67	1.67	1	1.77	1.77			
計	1	1.67	1.67	1	1.77	1.77			

細長方形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	5	2.74～7.10	4.26				5	4.28～6.16	5.26
1区 その他	1	3.11	3.11	1	2.80	2.80			
4区 第4類	1	3.35	3.35				1	3.83	3.83
4区 その他	1	2.88	2.88				1	3.12	3.12
計	8	2.74～7.10	3.83	1	2.80	2.80	7	3.12～6.16	4.75
細長方形（深さ30cm以上）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第1類	1	3.38	3.38				1	5.37	5.37
1区 第2類	1	2.39	2.39				1	3.44	3.44
1区 第3類	1	2.73	2.73	1	2.11	2.11			
4区 第5類	1	2.52	2.52				1	3.05	3.05
計	4	2.39～3.38	2.76	1	2.11	2.11	3	3.05～5.37	3.95

隅丸細長方形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第1類	1	3.52	3.52	1	1.35	1.35			
1区 第3類	1	3.01	3.01	1	1.83	1.83			
1区 その他	1	3.26	3.26	1	1.98	1.98			
計	3	3.01～3.52	3.26	3	1.35～1.98	1.72			
隅丸細長方形（深さ30cm以上）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	1	3.03	3.03				1	3.34	3.34
計	1	3.03	3.03				1	3.34	3.34

円形（深さ30cm未満）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 その他	2	1.01～1.03	1.02	2	1.20～1.69	1.45			
計	2	1.01～1.03	1.02	2	1.20～1.69	1.45			
円形（深さ30cm以上）									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
4区 その他	1	1.00	1.00	1	0.42	0.42			
計	1	1.00	1.00	1	0.42	0.42			

楕　円　形　(深さ30cm未満)									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	2	1.44～1.60	1.52	2	0.61～0.71	0.66			
1区 その他	3	1.34～1.45	1.38	3	0.61～0.86	0.73			
計	5	1.34～1.60	1.44	5	0.61～0.86	0.70			

不整楕円形　(深さ30cm未満)									
主軸方位別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
1区 第3類	1	1.25	1.25	1	0.80	0.80			
計	1	1.25	1.25	1	0.80	0.80			

第9表　「上植木調査区」 形態別中世土坑 計測値分析表

方　形・正方形									
区　画　別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	11	1.00～1.44	1.24	11	0.27～2.25	1.22			
堀外部分	12	1.05～1.42	1.23	12	0.42～1.55	0.77			
堀外 4区寄	4	1.05～1.40	1.20	4	0.71～2.10	1.32			
計	27	1.00～1.44	1.23	27	0.27～2.25	1.03			

隅丸方形・隅丸正方形									
区　画　別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	8	1.07～1.45	1.28	8	0.27～2.38	1.11			
堀外部分	12	1.05～1.47	1.28	11	0.39～1.65	1.02	1	4.25	4.25
計	20	1.05～1.47	1.28	19	0.27～1.65	1.06	1	4.25	4.25

不整方形									
区　画　別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	1	1.00	1.00	1	0.81	0.81			
計	1	1.00	1.00	1	0.81	0.81			

長　方　形									
区　画　別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	9	1.53～2.00	1.77	9	0.50～2.42	1.48			
堀外部分	9	1.62～3.60	2.21	7	0.72～2.73	1.89	2	3.19～3.60	3.40
堀外 4区寄	1	2.16	2.16	1	1.95	1.95			
計	19	1.53～3.60	2.00	17	0.50～2.73	1.68	2	3.19～3.60	3.40

不整長方形									
区　画　別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀外部分	1	1.87	1.87	1	1.05	1.05			
計	1	1.87	1.87	1	1.05	1.05			

隅丸長方形									
区　画　別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分　類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	13	1.50～2.27	1.79	12	0.32～2.65	1.08	1	5.12	5.12
堀外部分	11	1.50～2.44	1.97	11	0.40～2.82	1.57			
堀外 4区寄	3	1.58～1.82	1.71	3	0.57～1.32	0.96			
計	27	1.50～2.44	1.84	26	0.32～2.82	1.27	1	5.12	5.12

細長方形									
区画別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	1	2.52	2.52	1	2.78	2.78			
堀外部分	3	2.88～3.18	2.99	2	2.30～2.90	2.60	1	4.14	4.14
計	4	2.52～3.18	2.87	3	2.30～2.90	2.66	1	4.14	4.14

隅丸細長方形									
区画別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	2	3.69～3.71	3.70				2	5.34～6.24	5.79
堀外部分	5	2.50～3.29	2.82	2	1.40～1.60	1.50	3	3.60～3.91	3.71
計	7	2.50～3.71	3.07	2	1.40～1.60	1.50	5	3.60～6.24	5.14

円形									
区画別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀外部分	8	1.00～1.19	1.09	5	0.56～2.48	1.23	3	4.62～8.06	6.88
堀外 4区寄	1	1.12	1.12	1	0.81	0.81			
計	9	1.00～1.19	1.09	6	0.56～2.48	1.16	3	4.62～8.06	6.88

楕円形									
区画別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀外部分	5	1.31～1.47	1.39	5	0.48～1.33	0.86			
計	5	1.31～1.47	1.39	5	0.48～1.33	0.86			

不整楕円形									
区画別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀外部分	4	1.38～1.79	1.54	3	1.62～2.60	1.99	1	7.92	7.92
計	4	1.38～1.79	1.54	3	1.62～2.60	1.99	1	7.92	7.92

不整形									
区画別	総	比率［長径÷短径］		面積［長径×短径］㎡（3.00㎡未満）			面積［長径×短径］㎡（3.00㎡以上）		
分類	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均	数	最小～最大	平均
堀内部分	1	1.38	1.38				1	9.36	9.36
堀外部分	6	1.09～2.82	1.63	4	0.63～1.50	1.03	2	3.41～4.93	4.17
計	7	1.09～2.82	1.59	4	0.63～1.50	1.03	3	3.41～9.36	5.90

(4) 土壙墓・火葬跡

ア．分布

土壙墓の分布は、「上植木調査区」でその特徴が捉えられており、以下のとおり報告がなされている。「墓域は、発掘区南隅と北西の二つに分けられ、明銭を有する5基は、全て南隅に位置しており、北西の墓域のほうが造墓終了時期が早かったと思われる。また、明銭を出土した5基は、南隅の墓域中でも北寄りに集中する傾向が認められ、南から北に墓域を拡大していったものと考えられる。また、その造墓終了時期は、1号土壙墓の年代から、16世紀代と考えられる」。「南方の土壙墓群一帯は、近世には11・12号井戸を中心とする屋敷地に変化したと考えられる」とされる。

1区土壙墓のうち、1号土壙墓は南堀内部分に所在し掘立柱建物跡群との新旧関係は不明だが、位置から見て時期差を与えたいところである。また、2号土壙墓は明銭を出土したことから、「上植木調査区」の検討に反して、北西の墓域が南隅の墓域と同様に存続していたことを示す結果となる。また、4区の土壙墓もともに明銭を出土していることから、墓域と掘立柱建物跡群との時期差は課題となるが、土壙墓相互の時期的な変遷を分布域別に捉えることは難しく、むしろ4区を除けば、掘立柱建物跡とはある程度離れた部分、つまり集落の縁辺部を選地して設定している点に注目したい。なお、(3)土坑で既に検討したとおり、「上植木調査区」堀内部分では、土壙墓に規模・形状ともに類似する土坑が多く分布しており、掘立柱建物跡或いは柱穴が極めて少ない状況を加味すれば、「上植木調査区」堀内部分が整然とした一つの墓域を構成している可能性が高く、周辺の館跡や掘立柱建物跡群といった居住域とは明確に区別する意識が働いていたものと見て過言ではない。

火葬跡の分布は、数量が少ないことからして特徴は捉えにくいが、1区の2・4・6号火葬跡が居住域に対してその縁辺に位置することは注目される。また、ばらつきはあるが1区中央部と「上植木調査区」の一群と、1区南東部の一群とに分けることも可能であるが、その所在理由までは明らかにできない。

ところで、遺構自体の直接の新旧関係が明確でないため、本遺跡検出の館跡及び掘立柱建物跡群との関係が不明のままとなってしまいそうだが、出土遺物から建物群の出現は14世紀後半には確実である一方、土壙墓に明銭が含まれていることから、両者は個別の新旧関係は別として、総体としては同時存在していた可能性が高い。この点で、1号堀の1号入口遺構部分の底面で、完形に近いものを含む2個体分の板碑が出土していることは重要で、少なくとも1号堀が廃棄される時点で、周辺に板碑を建立した墓地施設が存在していたことを示唆しており傍証となる。1区南堀内部分に所在する1号土壙墓・1号火葬跡は、第3類C群段階では2号溝を介して建物群とは別の空き地となっており、畠地の一画に墓地を配置したという仮説も成り立つのではないだろうか。

イ．規模・形状

本遺跡で検出された土壙墓（1・4区）の規模は、長径100～132㎝、平均113㎝で、短径67～112㎝、平均86㎝で、深さ10～21㎝、平均16㎝である。また、火葬跡（1・3区）の規模は、長径90～119㎝、平均108㎝で、短径66～87㎝、平均77㎝で、深さ9～27㎝、平均14㎝である。両者の規模は大差なく、その違いは、形状の違いと、土壙墓は銅銭を伴うこと、火葬跡は土器などの遺物はないが、焼骨を含み壁面が被熱して炭化材・炭化物を多く含むことによる。また、「上植木調査区」では、土壙墓の規模は長径73～126㎝、平均98㎝で、短径51～92㎝、平均66㎝で、深さ11～41㎝、平均26㎝で、火葬跡の規模は、長径116㎝短径66㎝深さ38㎝であり、同様な規模で大差ないことが解る。

形状は、本遺跡・「上植木調査区」ともに土壙墓は隅丸方形・長方形で、火葬跡では張り出しを持つ隅丸方形4基（うち「上植木調査区」1基）と、円形が3基あり、時期差も想定されるところである。

(5) １号堀

１号堀の詳細は前述したので省略することとして、ここでは埋没時期について若干考える。１号堀の埋土は上下２層に分層でき、上層は掘り直し或いは人為埋填を示すと考え、その出土遺物について構成を比較したところ、前述のとおり遺物の集中する地点があることや、上層でも近世以降の出土遺物が極めて少ないことが判明した。そこで、後者が意味するものとして、土塁などの削平を伴った短期的な人為埋填を想定した。ところが、１号堀と同一遺構である「上植木調査区」１号溝では近世後半の遺物が出土しており、近世の遺構として報告がなされている。ただし、その報告は埋土を上下に分層して出土遺物を検討したものでないことから、そのまま本遺跡との比較資料にはなりえず、埋没時期について矛盾する資料としてのみ尊重されよう。

しかし、以上を知った上で敢えて大胆な仮説を述べたい。文献史料では、鯉沼の構築は慶長18年(1613)とされ、大井戸から導水したことが知られる。したがって、３区41号溝がその導水路に相当するものと既に考えたところであるが、同じく３区55号溝は41号溝から南へ分流して数多の溝へと分岐し、それらの幾つかが土地改良以前の地割り線や用水路に一致することが確認されている。つまり、１区は鯉沼構築当時既に集落でなかった可能性が高いが、その構築時に一気に削平されて３区とともに水田化されることになったと考える。この事件を象徴する地名として、「壱町田」の名前が付されたものではないだろうか。

(6) 井戸跡

本遺跡検出の井戸跡について、最も突出した特徴として人為埋填後の地業がある。井戸跡は不明なものは別として、半数は深さ１ｍ近くまで人為埋填された後、ゴミ穴などに利用された可能性もあるが自然埋没したと思われる一方、残る１・２・４・５・11号井戸跡は上面近くまで完全に人為埋填した後、上面を灰～黄褐色粘土・砂で締め固めている（11号井戸跡のみ黒～暗褐色土）。なお、この事例は「上植木調査区」の10号井戸跡でも報告されている。この埋填行為の意図するものは、すなわち次の土地利用に先立つ地業である可能性が高く、最も明確な事例が２号井戸跡の場合である。２号井戸跡は埋填された後に上面に221号土坑が構築されるが、平坦にするために２度粘土を充填したことが認められる。しかも、221号土坑は第１類Ａ群に属しており、２号井戸跡も出土遺物（在地土器鍋）から14世紀後半に比定されることから、館跡の出現期に最も近い時期と考えられる。

井戸跡の深さは、極端に浅い深さ１ｍ前後のものを除けば、大体深さ2.5～３ｍである。１区の１～５号井戸跡では、12月末の鯉沼の水抜き時に出水量を計測した。方法は現場始業時に井戸水を水中ポンプで全て汲み上げ、翌朝水深を測るものとし、４日間連続で行なった。結果として、１・４号井戸跡は60㎝前後、２・３・５号井戸跡は115㎝前後と、毎日例外なく二分された。この数値から中世を考えるのは無理があるが、概して出水量は多いと言える。なお、北方の三和工業団地遺跡（伊勢崎市教委調査）では深さ５ｍ以上の井戸跡が調査されており、大井戸などの湧水点の等高線地域を境として、南北で井戸の設置条件が、かなり違うことが推測できる。

2．遺物

(1) 在地土器

ア．カワラケ

カワラケの出土量は少なく、覆土も含めて総数21点にすぎない。このうち、1/2以上残存し遺構に伴うもの16点は全て掲載したが、形態は以下のとおり5分類できる。

Ⅰ類　小型で底径が大きく厚いもの。

　a　口縁部はやや外反するもの。

　b　直線的なもの。

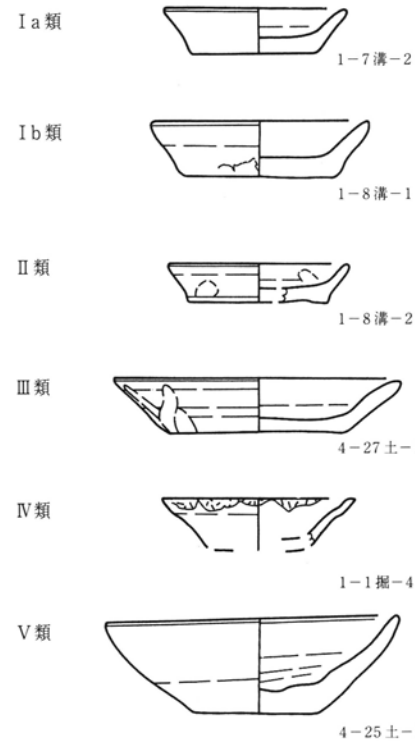
Ⅱ類　小型で器高が低く、底径が大きいもの。

Ⅲ類　底径が大きく、口縁部は直線的なもの。

Ⅳ類　小型で底径が小さく、口縁部は強く外反するもの。

Ⅴ類　底径が小さく器厚は厚く、口縁部は内湾するもの。

カワラケは地域色の強い遺物であり、形状の特徴自体に時期を与えるまでには至っていない現状で、口径・底径・器高の各比率が重要な指標となっている。各分類全ての年代比定を行うことは難しいが、Ⅲ類は器高が低くやや外反することから15世紀後半に、Ⅴ類は器高がやや深いことから14～15世紀前半に比定される。



第162図　在地土器カワラケ形態分類図

第10表　中世在地土器 カワラケ 遺物観察表

番　号	出土位置 遺存状態	法　量（cm）	①胎土　②焼成 ③色調	形　態	成・整形技法の特徴及び備考
1区29号掘立柱建物跡					
1	P 7 口縁部～体部1/6	口(11.4) 残存高2.9	①密②酸化焔普通 ③浅黄橙		ロクロ成形。
1区211号土坑					
1	1/3 口唇部欠	底5.0残存高2.0	①並②酸化焔普通 ③灰黄		ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。
1区614号柱穴					
1	底部1/3	底(4.4)残存高1.3	①並②酸化焔普通 ③淡黄		ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。
1区1号堀					
1	Ⅰ区画上層 2/3	口10.9底6.0高2.4	①黒色岩片含む②酸化焔普通③浅黄	Ⅲ類	ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。
2	Ⅹ区画上層 4/5 口唇部欠	底5.0残存高2.2	①並②酸化焔普通 ③浅黄		ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。
3	B区画下層 底部	底5.0残存高1.2	①並②酸化焔普通 ③浅黄橙		ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り後撫で。内面　底部撫で。
4	Y区画下層 口縁部～体部1/5	口(7.6)残存高1.8	①並②酸化焔普通 ③橙	Ⅳ類	ロクロ成形。口縁部油煙付着。灯火皿。

１区７号溝					
1	体部～底部 1/4	底(4.8)残存高1.8	①並②酸化焔普通 ③明赤褐		ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。
2	4/5	口7.2底5.0高1.8	①並②酸化焔普通 ③にぶい黄橙	Ⅰa類	ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。
１区８号溝					
1	1/4	口(8.6)底(5.8) 残存高2.1	①並②酸化焔普通 ③橙	Ⅰb類	ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。
2	1/2	口(7.2)底(5.6) 高1.5	①並②酸化焔普通 ③橙	Ⅱ類	ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。
４区14号土坑					
1	体部～底部 2/5	底4.2 残存高1.3	①並②酸化焔普通 ③灰褐		ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。
４区25号土坑					
1	1/3	底(3.8)残存高2.0	①並②酸化焔普通 ③浅黄	分類外	ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。
2	2/3	口11.4底5.1高3.7	①並②酸化焔普通 ③灰白	Ⅴ類	ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。
４区27号土坑					
1	完形	口11.3底6.8高2.1	①並②酸化焔普通 ③橙	Ⅲ類	ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。口縁部油煙付着。
４区１号井戸跡					
1	体部～底部 1/4	底4.6残存高1.6	①並②酸化焔普通 ③にぶい黄橙		ロクロ成形（右回転）。底部は回転糸切り未調整。板状圧痕あり。

イ．鍋類

鍋類は本遺跡の中世遺物では一番出土量の多い遺物であるが、新旧関係を明確に示す出土状況にあるものは極めて少なく、最も古いと見られる遺構である２号井戸－１（Ⅰ類）以外は多くが１号堀出土である。形態は以下のとおり６分類できる。

Ⅰ類　口縁部が短く、内側に一度稜を持って折れるもの（未掲載１片）。

Ⅱ類　口唇部外側端部と内側端部がほぼ水平か内側端部がやや高くなるもの（未掲載８片）。

Ⅲ類　口唇部内側に水平方向の突起があるもの（未掲載２片）。

Ⅳ類　口唇部外側がやや突き出すもの（未掲載５片）。

Ⅴ類　口唇部外側がやや突き出し、内側に水平方向の突起があるもの（未掲載２片）。

Ⅵ類　口唇部外側が丸みを帯びて突出するもの（未掲載４片）。

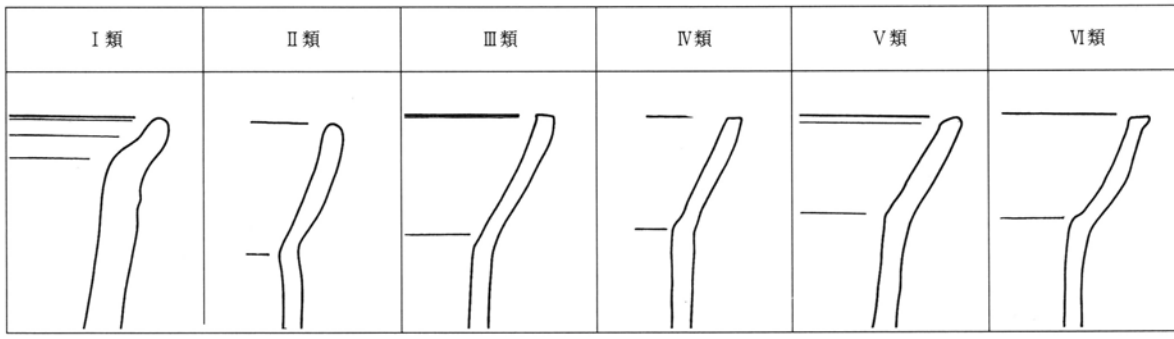
Ⅰ類は口縁部が短く器厚が厚く、丸底であることから14世紀後半に、Ⅱ～Ⅴ類は頸部の稜線が顕著となることから15世紀後半～16世紀前半に、Ⅵ類は口唇部が丸みを帯びて突出する特徴から16世紀前半に比定される。

胎土で最も注目されるのが、海綿骨針と結晶片岩の混入であり、県内では藤岡方面のみに存在する点から明らかに搬入遺物である。一方、１－１堀－７・11は、破片でありながら未使用の可能性があり（大西氏ご教授による）、近辺に焼成窯の存在も想起されるのである。

ウ．その他

特に注目されるものとして、１－１堀－22と外－５の茶釜がある。これらは胎土などから別個体と見られるが、ともに外面に鍔が回らず、耳部周辺のみを鍔状に引き出している。なお、外－４は羽釜または茶釜の蓋であろうか。

鉢の出土量は少なく14世紀後半に比定されるが、その後を補完するものとして石鉢があると考える。



第163図　在地土器鍋・内耳鍋形態分類図

第11表　中世在地土器 鍋・内耳鍋 遺物観察表

番号	器種	出土位置 遺存状態	法　量 (cm)	胎　土 海綿骨針	結晶片岩	その他	焼成	黒色処理	色調	口縁部形態	頸部外面稜	頸部内面段	底形	器厚	成・整形技法の特徴及び備考
1区325号土坑															
1	鍋	口縁部片	口(28.0) 残存高(5.2)	×	×	並	酸化焔 普通	内外	黒褐	Ⅳ	×	×	−	並	内面　口唇部は使用により擦れる。
1区656号土坑															
1	内耳鍋	口縁部～体部片	残存高8.4	×	×	密	還元焔 普通	×	灰	Ⅴ	—	○	−	薄	外面　内耳部に指頭圧痕あり。
1区1号堀															
7	鍋	H区画下層 口縁部～体部片	残存高5.2	×	×	並	還元焔 硬質	×	灰	Ⅱ	○	○	−	薄	未使用か。
8	内耳鍋	Z区画下層 口縁部片	残存高8.3	×	×	並	酸化焔 普通	外	灰	Ⅱ	○	×	−	薄	外面　内耳部に指頭圧痕あり。耳部は下方へ三角に広がる。
9	内耳鍋	Z区画上層 口縁部～体部片	残存高7.7	×	×	白色岩片含む	酸化焔 普通	×	灰	Ⅱ	×	○	−	薄	外面　内耳部に指頭圧痕あり。
10	内耳鍋	E区画下層 口縁部片	残存高3.8	×	×	並	還元焔 普通	×	灰	Ⅱ	—	—	−	並	
11	鍋	Y区画下層 口縁部～体部片	残存高6.0	×	×	並	還元焔 硬質	×	黒	Ⅳ	○	○	−	薄	未使用か。
12	内耳鍋	Z区画下層 口縁部片	残存高6.8	×	×	並	還元焔 普通	外	灰	Ⅳ	×	—	−	薄	外面　内耳部に指頭圧痕あり。
13	内耳鍋	下層・Z区画下層 口縁部～体部片	残存高8.6	○	×	並	還元焔 普通	外	灰	Ⅵ	×	○	−	薄	外面に煤付着。耳部は細い。
14	内耳鍋	E区画上層 口縁部～体部片	残存高5.7	○	×	並	酸化焔 普通	外	褐灰	Ⅵ	×	○	−	薄	外面　内耳部に指頭圧痕あり。
15	内耳鍋	Z区画下層 口縁部～体部片	口(30.6) 残存高13.9	○	○	並	還元焔 普通	外	黄灰	Ⅵ	×	○	−	並	
16	鍋	Y区画下層 口縁部～体部1/5	口(30.5) 残存高10.2	×	×	密	還元焔 普通	外	灰	Ⅴ	×	○	−	並	内面　体部は斜め方向の撫で。
17	鍋	Y区画下層 口縁部～体部片	口(28.4) 残存高9.9	○	×	並	還元焔 普通	×	灰	Ⅴ	×	×	−	薄	内面　体部は斜め方向の撫で。
18	鍋	H区画下層 口縁部～体部2/5	口(30.0) 残存高12.8	×	×	密	酸化焔 軟質	外	にぶい黄褐	Ⅵ	×	○	−	並	内面　体部は斜め方向の撫で。使用により擦れる。

19	鍋	Ｘ区画下層 底部片	底(16.6) 残存高1.7	×	×	並	酸化焰 普通	外	にぶい 褐	―	―	―	平	並	外面　底部周辺は平滑に撫でる。
20	鍋	Ｙ区画下層 底部片	底(22.0) 残存高2.9	×	○	並	還元焰 普通	外	灰	―	―	―	平	並	外面　体部は横方向の撫で。
21	鍋	Ｚ区画下層 底部片	底(21.4) 残存高2.0	×	×	並	酸化焰 普通	×	にぶい 橙	―	―	―	平	並	外面　底部周辺は平滑に撫でる。
１区２号溝															
1	鍋	口縁部片	残存高5.4	×	×	並	酸化焰 普通	外	オリーブ黒	Ⅵ	―	―	―	並	
2	鍋	口縁部片	口(29.0) 残存高6.3	×	×	並	酸化焰 普通	外	オリーブ褐	Ⅵ	×	○	―	並	
3	鍋	口縁部片	残存高3.6	○	×	並	還元焰 普通	×	灰	Ⅵ	―	―	―	並	
１区７号溝															
3	内耳鍋	口縁部片	残存高5.7	○	×	並	酸化焰 普通	×	オリーブ灰	Ⅵ	―	―	―	薄	
4	鍋	底部片	底(22.6) 残存高1.6	×	×	並	酸化焰 普通	×	暗灰黄	―	―	―	平	並	外面　底部周辺は平滑に撫でる。
１区２号井戸跡															
1	内耳鍋	口縁部～底部片	口(30.2) 底(19.8) 残存高17.0	○	×	並	酸化焰 軟質	内外	オリーブ灰	Ⅰ	×	×	丸	厚	外面　体部に煤付着。底部横方向の撫で。底部端部は被熱。
１区５号井戸跡															
3	鍋	体部下位～底部片	底(24.0) 残存高4.2	×	○	砂多く含む	酸化焰 普通	×	褐	―	―	―	平	薄	外面　底部端部は使用により擦れる。
１区７号井戸跡															
1	内耳鍋	口縁部～体部1/3	口(30.0) 残存高14.0	○	○	砂多く含む	還元焰 普通	内外	オリーブ黒	Ⅵ	×	○	―	薄	外面　内耳部に指頭圧痕。体部は斜め方向の撫で。煤付着。
４区３号井戸跡															
1	鍋	口縁部～体部片	残存高9.3	○	×	白色岩片含む	還元焰 普通	×	灰	Ⅳ	○	○	―	薄	
４区４号井戸跡															
1	鍋	口縁部～底部片	口(32.3) 底(23.5) 高(18.5)	○	○	並	還元焰 普通	×	灰	Ⅳ	○	○	―	薄	内外面　体部不定方向の撫で。
2	内耳鍋	口縁部～底部1/3	口(33.6) 残存高12.1	○	○	並	還元焰 普通	×	灰	Ⅳ	○	○	―	薄	外面　内耳部に指頭圧痕。
遺構外遺物															
1	鍋？	３区55溝 口縁部片	残存高4.9	×	×	白色岩片含む	還元焰 軟質	×	灰	―	×	×	―	厚	

第12表　中世在地土器 鉢・茶釜・火鉢 遺物観察表

番号	器　種	出土位置 遺存状態	法　量（cm）	①胎土　②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
１区90号土坑					
1	鉢	底部	残存高2.1	①並②酸化焰普通 ③にぶい褐	内面　底部は中央部を残し良く擦られる。
１区252号柱穴					
1	香炉	口縁部～体部片	口(9.0)残存高3.0	①並②酸化焰普通 ③明赤灰	外面　菊花文。
１区１号堀					
5	鉢	Ｙ区画上層 口縁部片	残存高4.2	①並②還元焰普通 ③灰	ロクロ成形。
6	鉢	Ｅ区画上層 口縁部片	残存高8.0	①結晶片岩含む②酸化焰普通③にぶい橙	

22	茶釜	B区画上層 体部片	残存高7.7	①並②酸化焔普通 ③黒	外面　黒色処理。
1区5号井戸跡					
1	鉢	体部下位～ 底部片	残存高3.6	①並②還元焔普通 ③灰	底部は一部円球状に押し上げる。内面　平滑に仕上げる。
2	香炉？	口縁部～底 部片	残存高4.9	①並②還元焔軟質 ③黒	外面　器面は荒れており外面の文様の有無は不明。体部横方向の撫で。
4区25号土坑					
3	鉢？	口縁部片	残存高3.4	①並②酸化焔普通 ③黒褐	外面　口唇部は使用によりよく擦れる。
遺構外出土遺物					
2	鉢	4区73I－8 口縁部片	口(27.0) 残存高4.2	①並②還元焔普通 ③灰	ロクロ成形。内面体部は斜め方向の撫で。
3	鉢	2区 体部～底部 片	底(18.0) 残存高6.4	①密。結晶片岩含む。 ②還元焔普通③灰	外面　体部平滑に撫でる。底部は使用により擦れる。
4	羽釜の蓋	3区62H－7 破片	径(12.0)高1.3	①並②還元焔普通 ③灰	外面　削りにより端部は角を作る。内面　突出部は使用により擦れる。
5	茶釜	1区74 口縁部片	残存高5.6	①並②還元焔普通 ③灰	耳部の貼り付けは穿孔する。内面　撫で。

(2) 国産施釉陶器

ア．古瀬戸

破片資料が多く年代比定できるものは少ないが、15世紀前半に比定される卸目付大皿などがあり、時期としては殆どがその辺りであろうか。器種は皿類が多いが、碗や四耳壺、花瓶などやや器種に富んでいる。

イ．焼締陶器

1区10号井戸跡から13世紀半ばに比定される常滑系甕（赤羽1995）が出土しているが、概して焼締陶器の出土量は少なく、他のものは器厚が厚く時代は下がる。

(3) 中国陶磁器

青磁では碗が多く、皿もわずか含まれる。年代は13～14世紀のものが殆どである。白磁皿は年代不明だが、染付皿は15世紀後半～16世紀前半と下がる。

(4) 石鉢・石臼・茶臼

石鉢は総数5個で、材質は全て粗粒輝石安山岩である。口径は推定径で24.1～30.0cmと少しばらつきがあり、用途を示す特徴として内側口縁部近くまでよく擦られていることが観察される。

石臼（粉挽き臼）上臼は片減りが著しく、高さは9.0～12.7cmで、径は24.0～32.6cmと数値はややばらつく。下臼も片減りが著しいことから、高さは6.6～12.0cmとばらつくが、径は22cmと小さい1点を除けば、27.8～32.4cmと近似している。石臼はよく使い込まれており片減りが著しい一方、欠損後も砥石として転用されている例が少なからず存在する。

茶上臼は高さ12.2cm、径20.2cmで、挽き手穴を側部中央に設けて飾りは円形である。茶下臼は受け皿部のみが残存しており、径31.0cmである。

第５節　近世以降

第１項　溝

３区溝群（付図４　PL 35-1～6）

本遺構は２方向の走向方向を基軸として構成される。一つは微高地と低地の境界部分を東西に走向する41号溝と、それに前出して並走する48号溝のほか重複が著しい溝群である。もう一つは41号溝の東壁から11.2ｍで南へ分岐する55号溝と、それに続く１・２号溝である。また、41・48号溝から分岐して南走するものとして36～39号溝があり、南半部では１・２号溝から分岐する62・64・86・95～98号溝がある。以上の溝は土地改良前までは水田に伴う用水路として機能していたものであり、殆どが近世まで遡る可能性が高い。特に41号溝を中心とする東西方向の溝群は、大井戸から鯉沼へ導水する水路の主流に比定できる。また、１・２・55号溝出土遺物は昭和期までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたもので、土地改良前には道路側溝として、水田区画の基本となる溝であった。

１号溝（PL 35-1）　直線状で南西流する。55号溝の延長線上にあり、同一流路の可能性高い。長さは54.60ｍ、最大幅1.40ｍ、深さは断面観察部で22㎝である。走向方位はＮ－36°－Ｅ。断面はＵ字状を呈し、底面はやや凸凹する。流水痕跡あり。西側に50㎝程の間隔をとって２号溝が存しており、この間に硬化面はないが道路面が想定できる。道路側溝と水田の用水路を兼ねていたものと見られる。出土遺物は昭和期までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

２号溝　直線状で南西流する。55号溝の延長線上にあり、同一流路の可能性高い。長さは54.70ｍ、最大幅1.00ｍ、深さは断面観察部で20㎝である。走向方位はＮ－32°－Ｅ。断面は皿状を呈し、底面はやや凸凹する。流水痕跡あり。東側に50㎝程の間隔をとって１号溝が存しており、この間に硬化面はないが道路面が想定できる。道路側溝と水田の用水路を兼ねていたものと見られる。出土遺物は近現代までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

41号溝（PL35-2～4）　調査区の北側を東西に走向し、西側３分の１程で南へ湾曲して南西流し、弓なりのＬ字状を呈する。長さは63.50ｍ、最大幅2.70ｍ、深さは断面観察部で35㎝である。走向方位はＮ－87°－Ｗ～Ｎ－41°－Ｅ。断面はＵ字状を呈し、底面はやや丸みを持つ。流水痕跡あり。Ｃ断面では北側70㎝程が最終部分であり、杭を南側に打ってそれに合わせて版築状に側壁を作ったものと見られる。また打ち込まれた杭の分布によって数度に及ぶ補修の痕跡を読みとることができる。本溝の南側に走向する48号溝は前出し規模も類似するが、人為埋填した後盛土されて高まりとなり、堤へと変化する。こうした点で相当量の流水量が想定できる。出土遺物は近現代までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

55号溝　直線状で南西流する。北端は41号溝から南へ分岐する。南半分では２条以上の溝で構成され、そのまま１・２号溝に連続する。長さは49.00ｍ、最大幅2.10ｍ、深さは断面観察部で44㎝である。走向方位はＮ－22°－Ｅ。断面はＵ字状を呈し、底面は丸みを持つ。流水痕跡あり。杭も随所に打たれており、41号溝と同様に相当量の流水量が想定できる。出土遺物は近現代までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

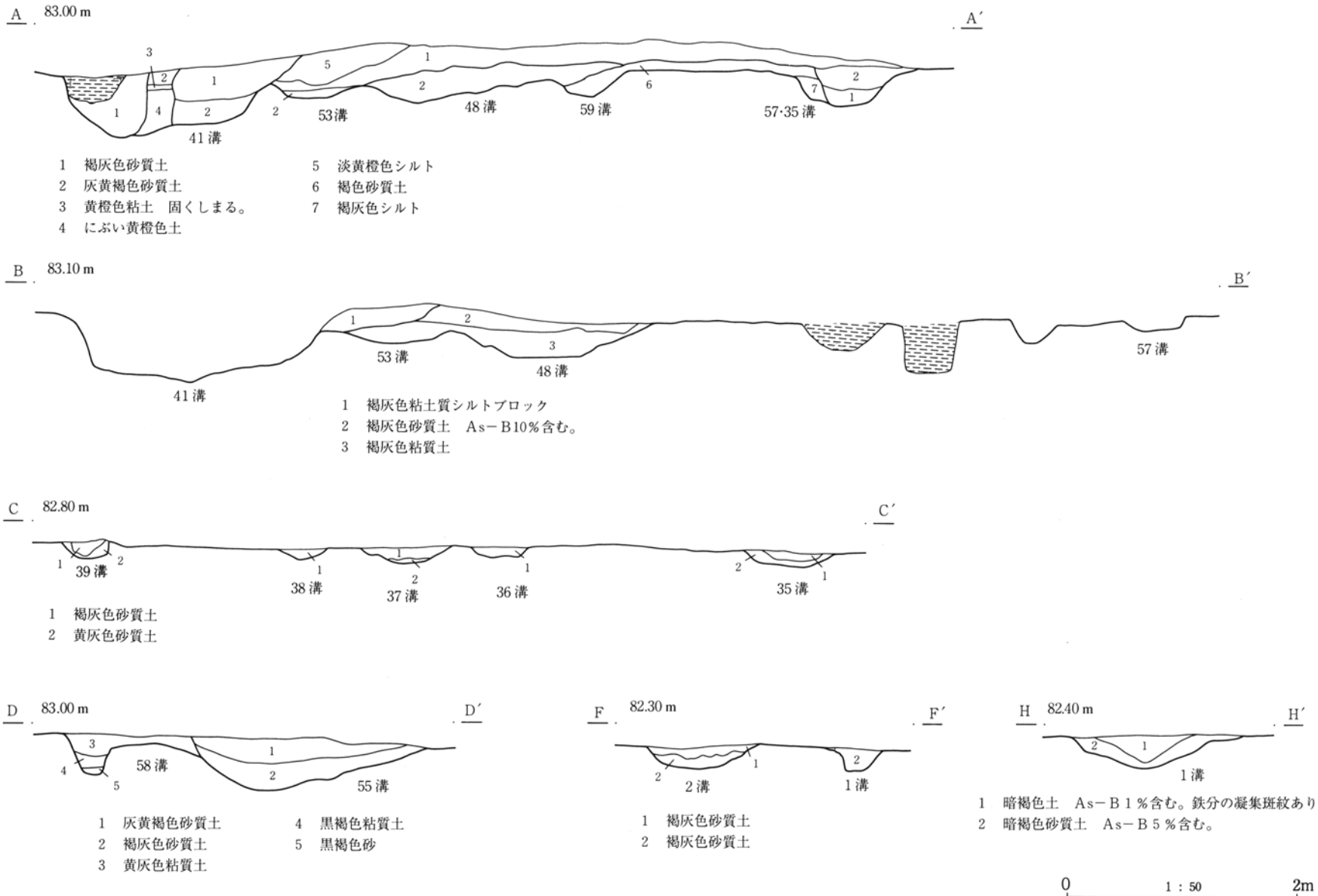
４区２号溝（PL 35-7）

位置　中央部やや東寄りを南北に縦走する。

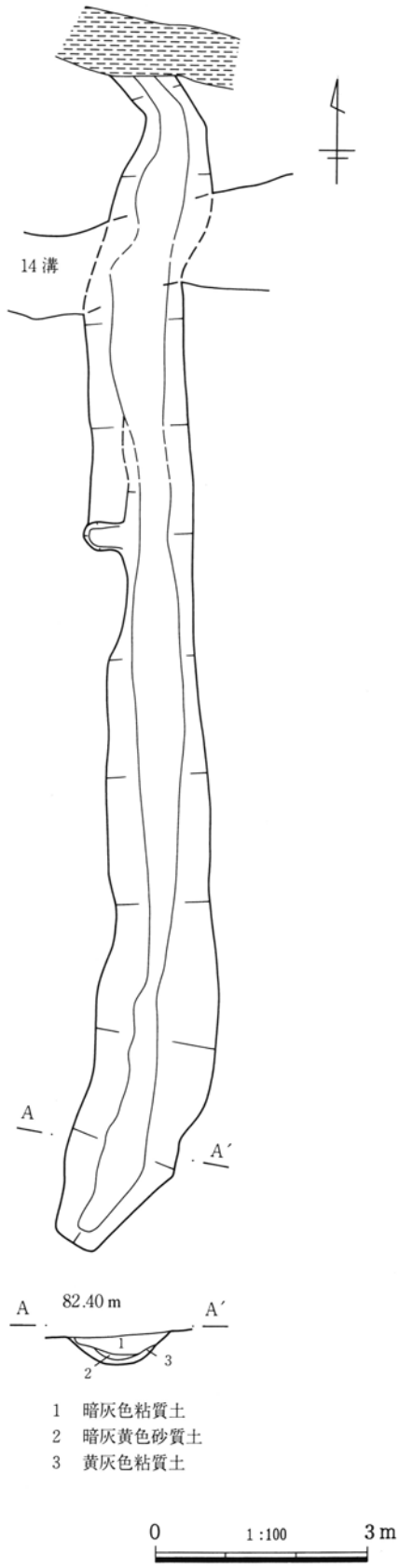
重複　14号溝より新しい。

形態　直線に近いが西側にやや湾曲する。規模は1.70×0.67ｍ、深さは断面観察部で55㎝である。走向方位はＮ－４°－Ｗ程である。断面はＵ字状。埋土中位にやや厚く砂質土が堆積しており、流水の存在を認める。

出土遺物　出土遺物は近現代までのものがあり、土



第164図　３区溝群土層断面



第165図　４区２号溝

地改良前まで継続して機能していたものと認める。

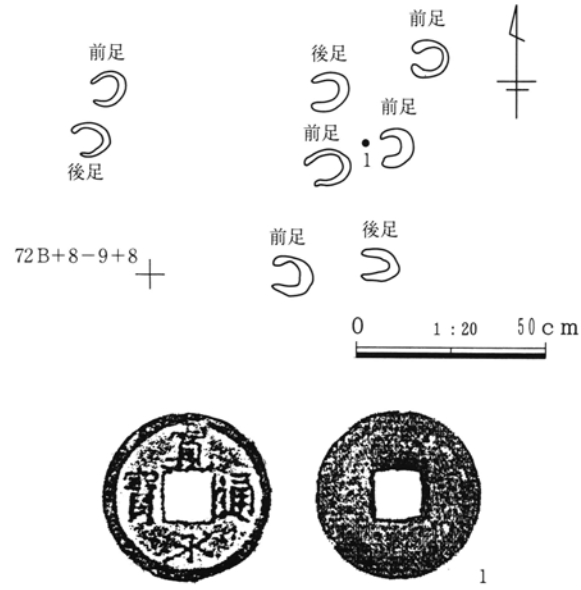
備考　耕地図では農道となっており、側溝であった可能性が高い。

第２項　馬蹄痕

３区馬蹄痕（PL 35-8、56）

位置　３区の中央部で、62Ｂ－９グリッドに位置する。１・２号溝の上端部東側に隣接する。

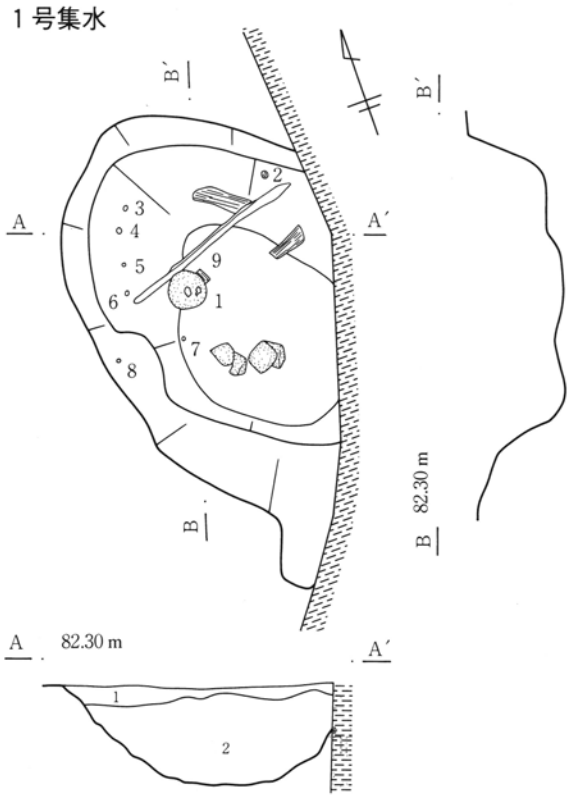
形態　前足が５か所、後ろ足が３か所で、全て東方向を前にする。検出面は黒褐色粘質土（Ⅳ）上面であり、灰色砂に被覆される。出土遺物は寛永通寶（１）１枚のみである。周辺の溝と同様に、近世以降の水田に伴っていたものとして偶然依存したものと考える。



第166図　３区馬蹄痕・出土遺物

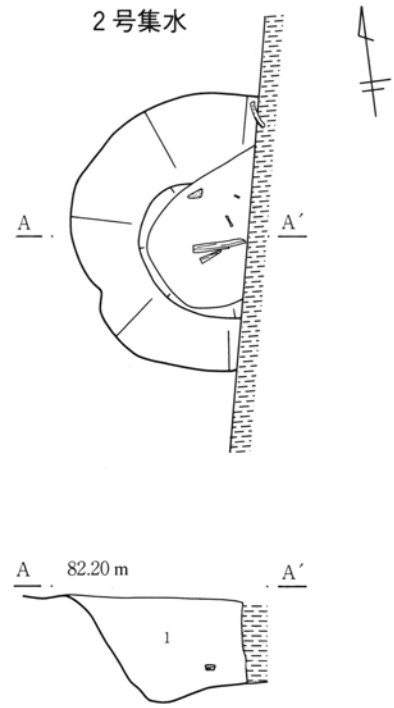
第３項　集水遺構

１号集水



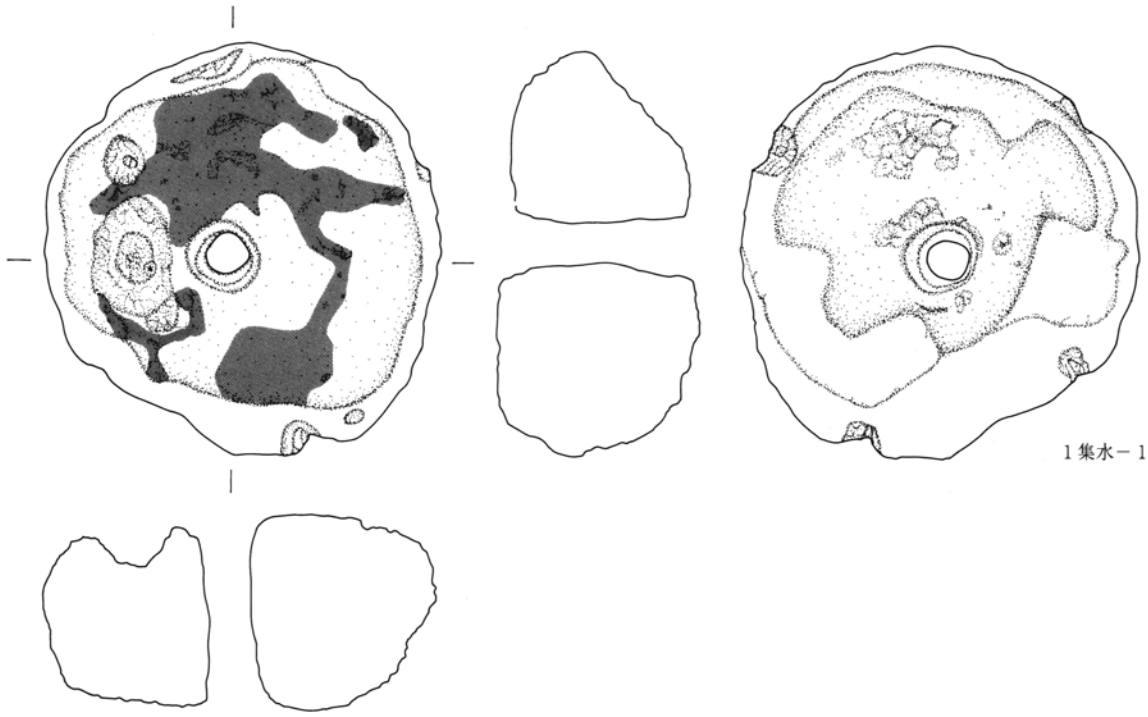
1　黒褐色土　径１㎜大の白色軽石５％含む。
2　黒褐色土

２号集水



1　黒褐色砂質土　植物の根茎と貝殻を10％含む。

0　1：60　2m



第167図　４区１・２号集水遺構・出土遺物

４区１号集水遺構（PL 36-1・2、56）

位置　調査区の西端で、72Ｂ－９グリッドに位置する。低湿地に存する。　**重複**　なし

形態　上下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は上面で径270×250㎝、下面で径143×135㎝、深さは79㎝である。埋土は砂質だが腐植に富んでおり、悪臭が著しかった。詳細は不明だが、導水して溜め枡或いは沈殿槽に類似した性格を持っていた可能性がある。

出土遺物　掲載遺物である不明石器（１）のほか、壁の中位に外形に沿って円形に杭が打ち込まれていた。杭は８本残存しており、最大で長さ110㎝を測るが、元来外形に沿って全周していたものと想定される。

４区２号集水遺構（PL 36-3）

位置　調査区の北端で、72Ｂ－７グリッドに位置する。低湿地に存する。　**重複**　なし

形態　ほぼ半分が攪乱によって壊されるが、上下面ともにほぼ円形と考える。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は上面で径218×174㎝以上、下面で径98×70㎝以上、深さは84㎝である。埋土は砂質だが腐植に富んでおり、悪臭が著しかった。詳細は不明だが、導水して溜め枡或いは沈殿槽に類似した性格を持っていた可能性がある。

出土遺物　底面近くに板片２片が出土したが、杭は出土しなかった。

第４項　まとめ

近世以降の遺構とした41号溝或いはそれに前出する48・53号溝は、近世まで遡る可能性が高いものであり、規模から見ても慶長18年（1613）伊勢崎藩主稲垣長茂が構築させた鯉沼へ大井戸から導水した用水路である可能性が極めて濃厚である。その形状を見ると、48号溝から北へ向かって掘り直してゆく際、徐々に底面の標高が下がってゆく傾向が認められ、少しずつでも流水量を増やしてゆく努力の跡を読みとることができる。なお、41号溝から分水して南流する55号溝は更に数条の溝へと分岐して用水系を形成し、それらの多くは土地改良前の用水路と一致することから、近世初期に大井戸から導水する過程で、その流域ではその都度分水が行われ、新田開発が適宜なされたものと判断する。３区馬蹄痕はわずかではあるが、江戸期の水田耕作の物的証拠と成りうるものと考える。

さて、「上植木調査区」の報告段階では近世の遺構として、１号溝、９・11・12号井戸跡が認知され、近世の屋敷地の存在が想定されている。こうした中で、本書が導いた結論とは齟齬を来す結果となってしまった。しかし、本書で扱った居住域では近世遺物は埋土を含めて極めて少なく、対称的に２・３区の近世以降の溝群では近現代遺物に混じって多く見られたのである。したがって、「上植木調査区」の根拠とする溝や井戸跡が遺構の性格上、後世まで存続しやすいこと、特に井戸跡は灌漑用として転用されたり、古井戸として放置される傾向があることを考えれば、近世屋敷地の存在はやや疑問を感じる。１区１号堀が近世の早い段階で一気に埋填されていることなどを考慮しても、新田開発による本地域の水田化は鯉沼の構築とほぼ同じ時期になされたものと結論したい。

第６節　時期不明及び遺構外遺物

第１項　土坑・土坑群・粘土採掘坑

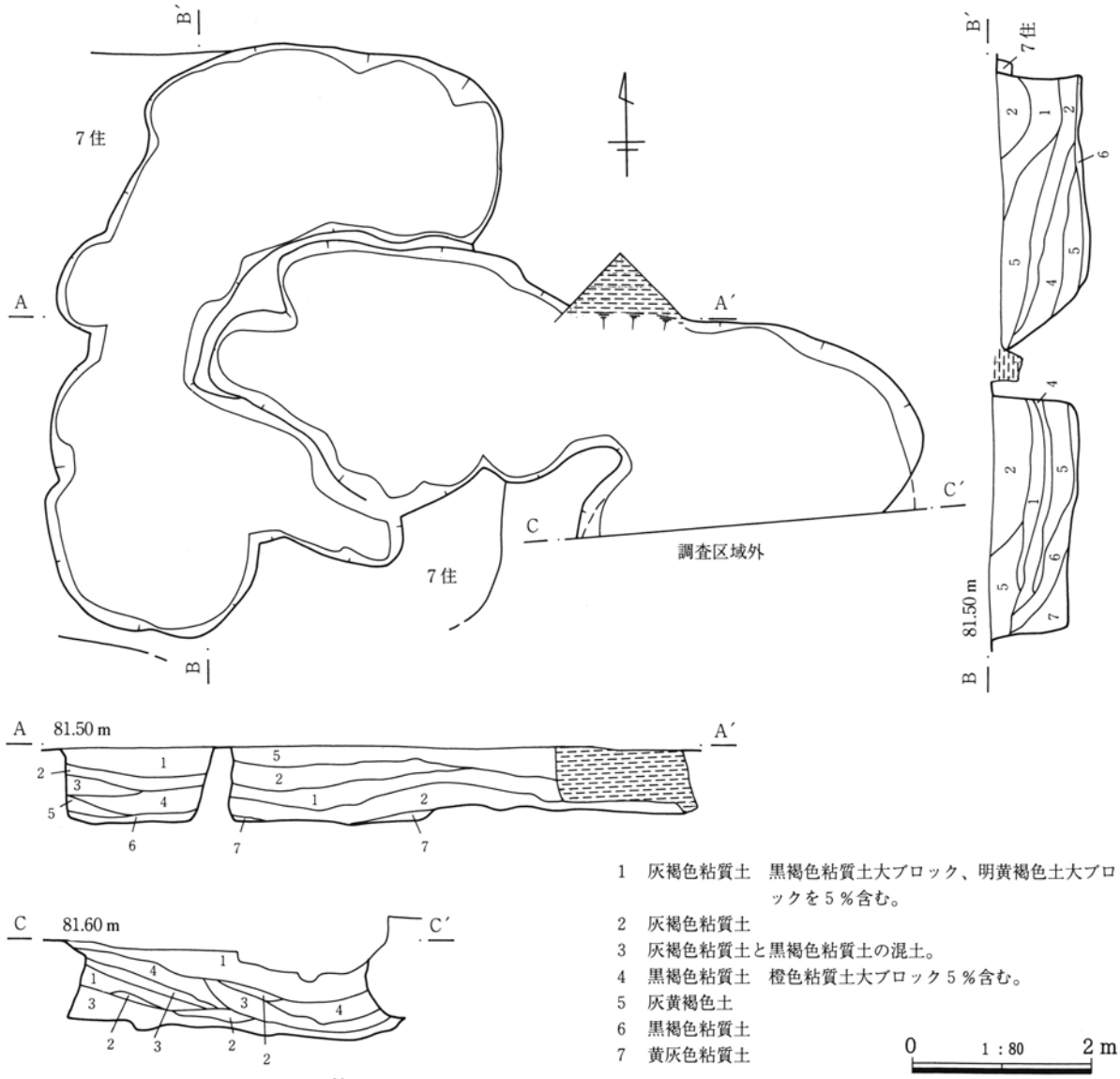
１区１号粘土採掘坑（PL 36-4）

位置　調査区南端で、74Ｄ－５グリッドに位置する。東側に１ｍ弱の間隔をとって２号粘土採掘坑と隣接する。

重複　７号住居跡より新しく、1147・1148号土坑より古い。４号火葬跡とは新旧関係不明。本遺構の年代は、大枠で古墳時代前期以降近世以前である。

形態　東西9.96ｍ、南北6.48ｍの範囲に４基以上の土坑が重複し、東南部は更に調査区域外に延びる。壁はオーバーハングしており、黒褐色粘土（暗色帯）を彫り込んだものと見られる。深さは最大で112㎝である。底面はほぼ平坦。埋土は黒褐色土と黄橙色土が互層となる部分が多く見られ、壁や天井部を落としながら横穴状に掘り進めた結果と解される。ただし、天井部として地山が存在していたことを示す崩落土は埋土中になく、随時天井部を落として開口状態にしていたものと想像する。

出土遺物　なし



第168図　１区１号粘土採掘坑

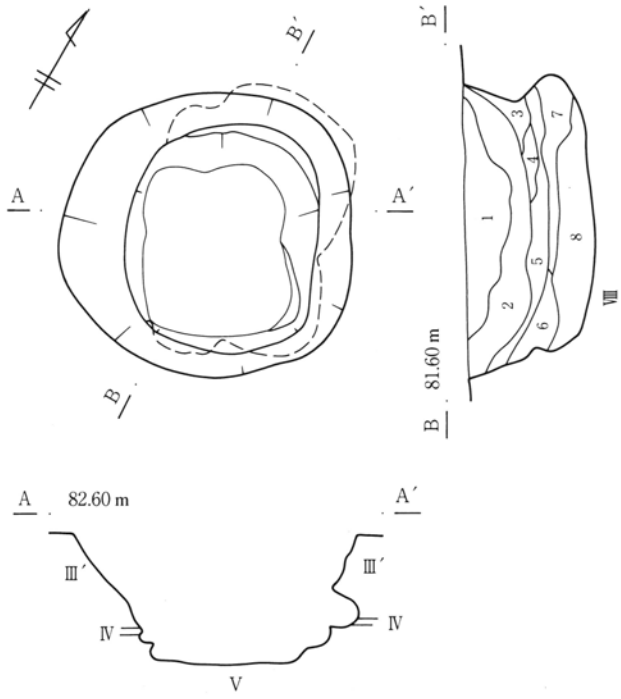
１区２号粘土採掘坑（PL 36-5）

位置　調査区南端で、74Ｄ－４・５グリッドに位置する。西側に１ｍ弱の間隔をとって１号粘土採掘坑と隣接する。

重複　なし

形態　上・下面ともに隅丸方形。壁は中位部分が大きく掘り込まれてオーバーハングする。底面は平坦。規模は径2.28×2.23ｍ、深さ1.03ｍである。オーバーハング部分は黒褐色粘土（暗色帯）を中心に掘り込んでいる。埋土は中位に灰白色粘質土が入り、壁部分を崩して人為埋填した可能性が高い。それより上層は自然埋没と見られる。　**出土遺物**　なし

２号粘土採掘坑



1　黒褐色砂質土　白色軽石５％含む。
2　黒褐色粘質土　灰褐色土大ブロック10％含む。
3　黒褐色粘質土　灰褐色土大ブロック40％含む。
4　黒褐色粘質土　灰褐色土大ブロック20％含む。
5　灰白色粘質土　よくしまる。
6　灰白色粘質土　しまらない。
7　黒褐色粘質土　灰色土大ブロック20％含む。
8　黒褐色粘質土　灰黄色土大ブロック40％含む。

0　1：60　2m

１区1147・1148号土坑（PL 36-6）

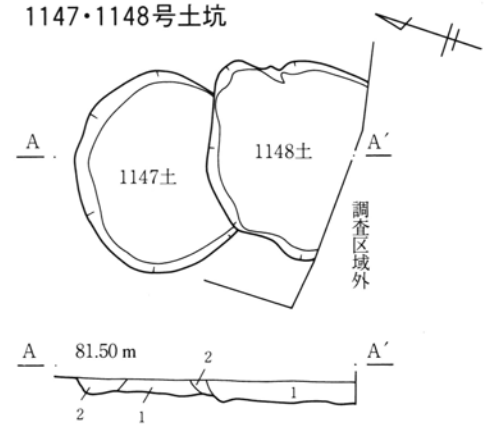
1147号土坑　後出の1148号土坑に壊されるが円形か。壁は浅いが垂直か。底面は平坦。規模は径98×(72)㎝、深さ９㎝である。1148号土坑より古いが、同様に桶を埋設したものと考える。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1148号土坑　南側一部は調査区域外となるが長円形。壁は浅いが垂直か。底面はほぼ平坦。規模は径96×(86)㎝、深さ11㎝である。1147号土坑より新しい。壁際に一部灰褐色粘土を巡らせた部分があり、桶を埋設したものと見られる。遺物は出土しなかった。

３区１号土坑群（PL 36-7）

62Ｅ・Ｆ－７・８グリッドにかけて南北10ｍ東西13ｍに分布する数十基の不整円形を呈する土坑の集まりである。また、同様な土坑群の分布は72Ｅ・Ｆ－１グリッドに見られるほか、３区の北半分に分布する不整円形の土坑（後掲７・８号土坑も含む）の内の多くも同類と思われる。遺構の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は全体として非常に凸凹するが、

1147・1148号土坑



1　黒色砂質土　白色軽石細粒20％、黄色土粒１％含む。
2　灰褐色粘質土　黒色土大ブロック10％含む。

0　1：40　1 m

第169図　１区２号粘土採掘坑・1147・1148号土坑

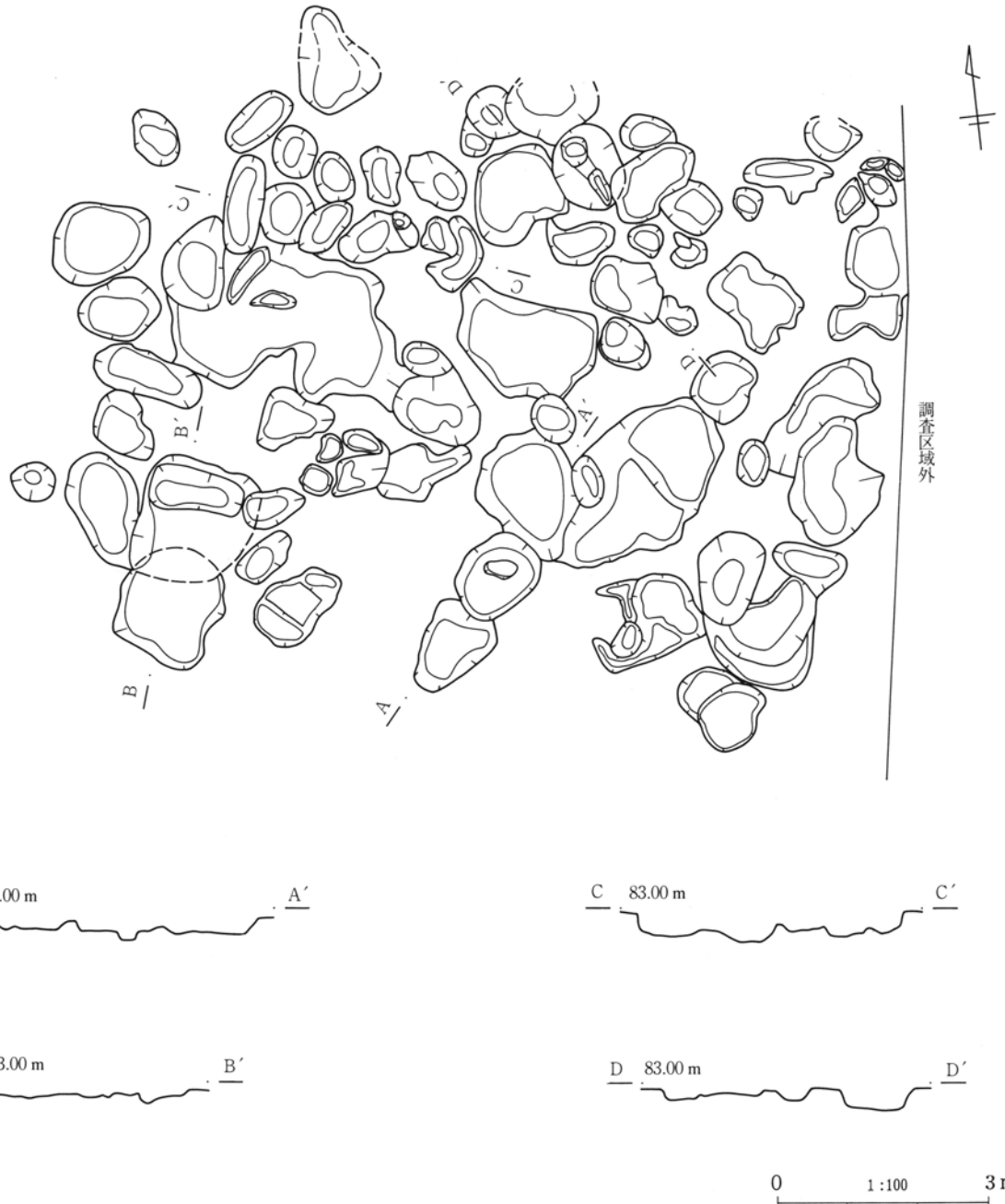
個々の土坑としては丸みを持ち、深さは確認面から40～50㎝程度である。なお、本遺構は調査当初は土坑群として把握できず適切な土層観察が行えなかったため、各土坑の新旧関係は不明となってしまった。完掘状況はいわゆる粘土採掘坑に類似する。遺物は遺構量に比して極めて少なく平安時代以前の遺物が大部分であり、中世・近世の遺物が１点ずつ出土するが重複による混入の可能性があり、時期は特定できない。

３区７号土坑

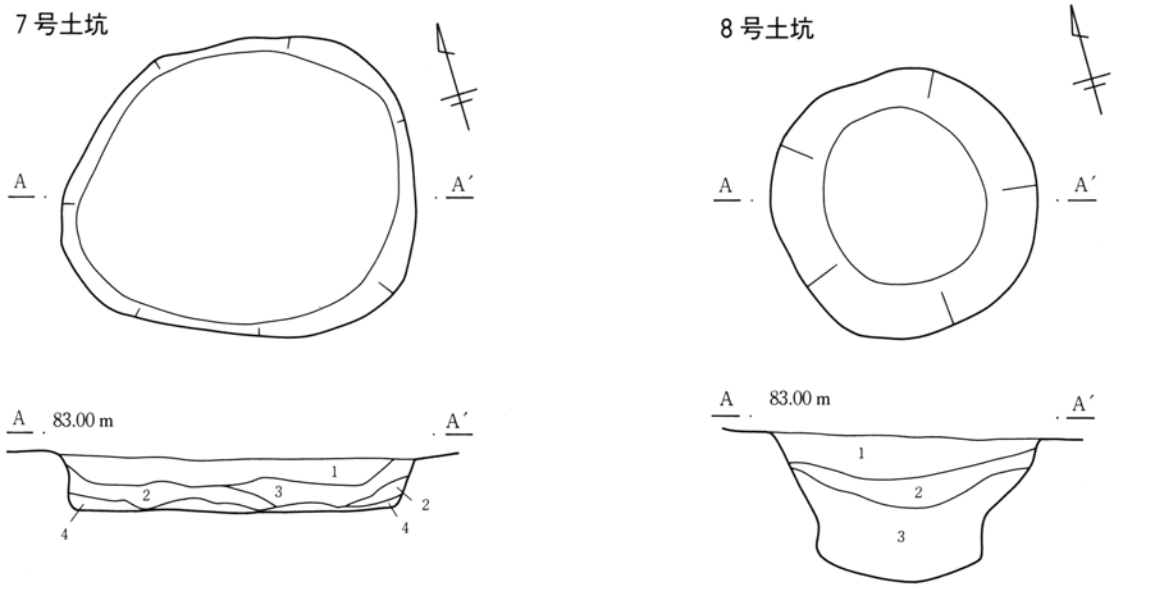
円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径186×158㎝、深さ31㎝である。主軸方位Ｎ－16°－Ｅ。遺物は出土しなかった。

３区８号土坑（PL 36-8）

整った円形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径151×142㎝、深さ79㎝である。主軸方位Ｎ－16°－Ｅ。遺物は出土しなかった。



第170図　３区１号土坑群



1　にぶい黄褐色砂質土　黄褐色粘土小ブロック10％含む。
2　褐灰色砂質土
3　灰黄褐色シルトと褐灰色砂質土の混土。
4　にぶい黄橙色シルト

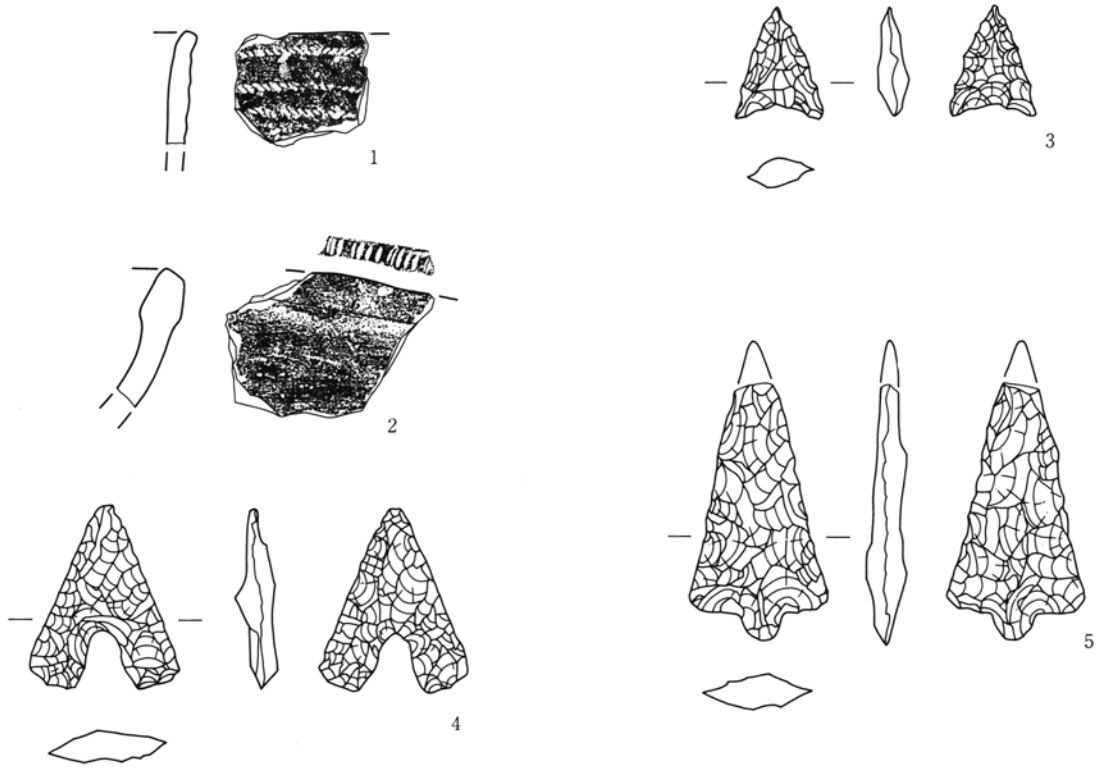
1　暗灰黄色砂質土
2　黄灰色粘質土と灰白色シルトの混土。
3　黒褐色粘質土

0　1：40　1 m

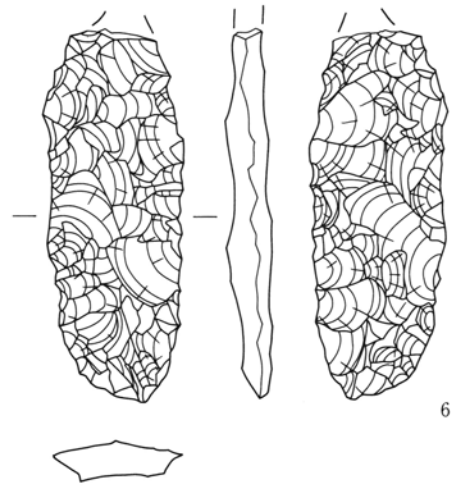
第171図　３区７・８号土坑

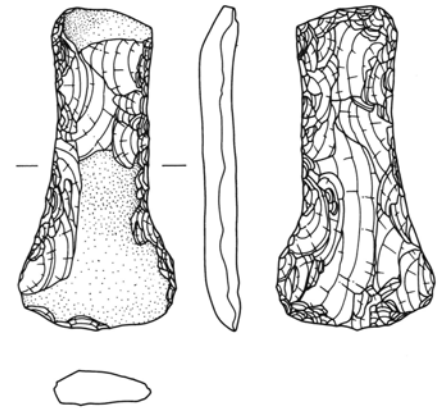
第２項　遺構外遺物

１．縄文時代



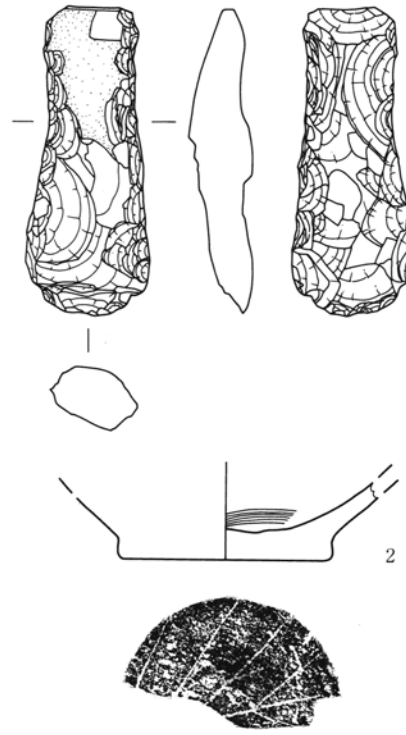
第172図　遺構外出土　縄文時代遺物（１）

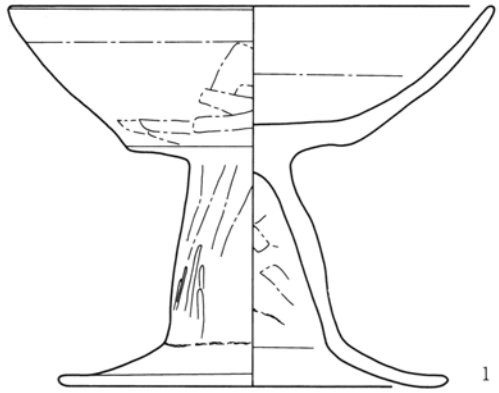




第173図　遺構外出土　縄文時代遺物（２）

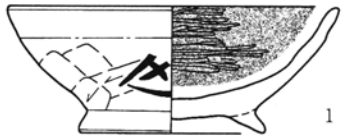
２．古墳時代

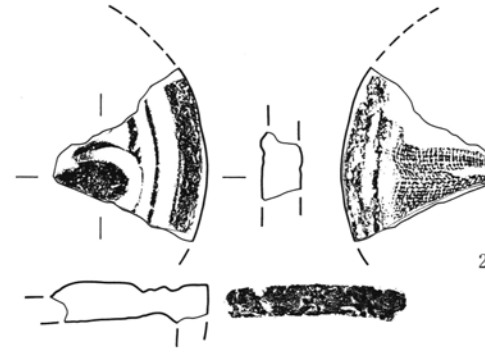




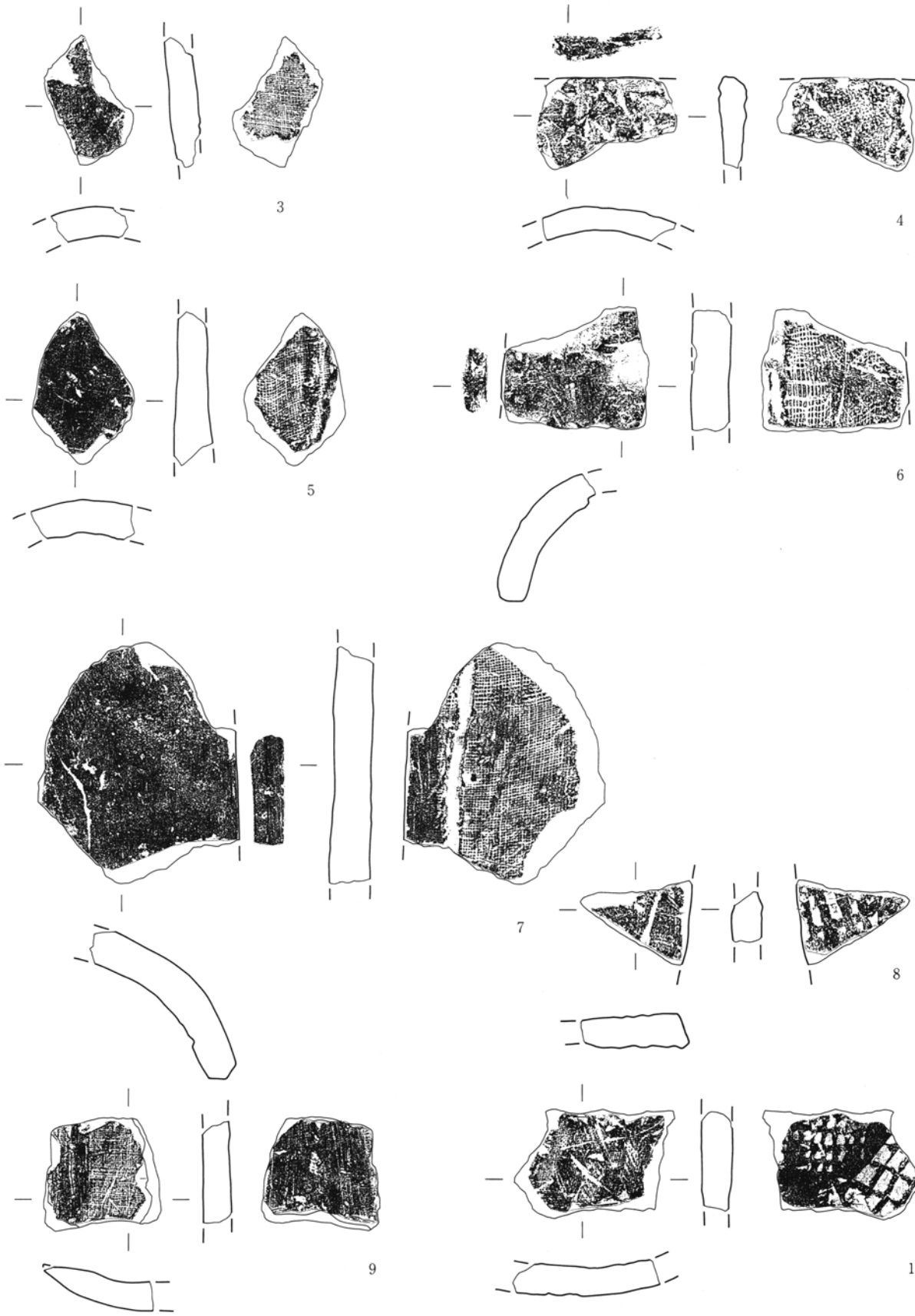
第174図　遺構外出土　古墳時代遺物

３．古代

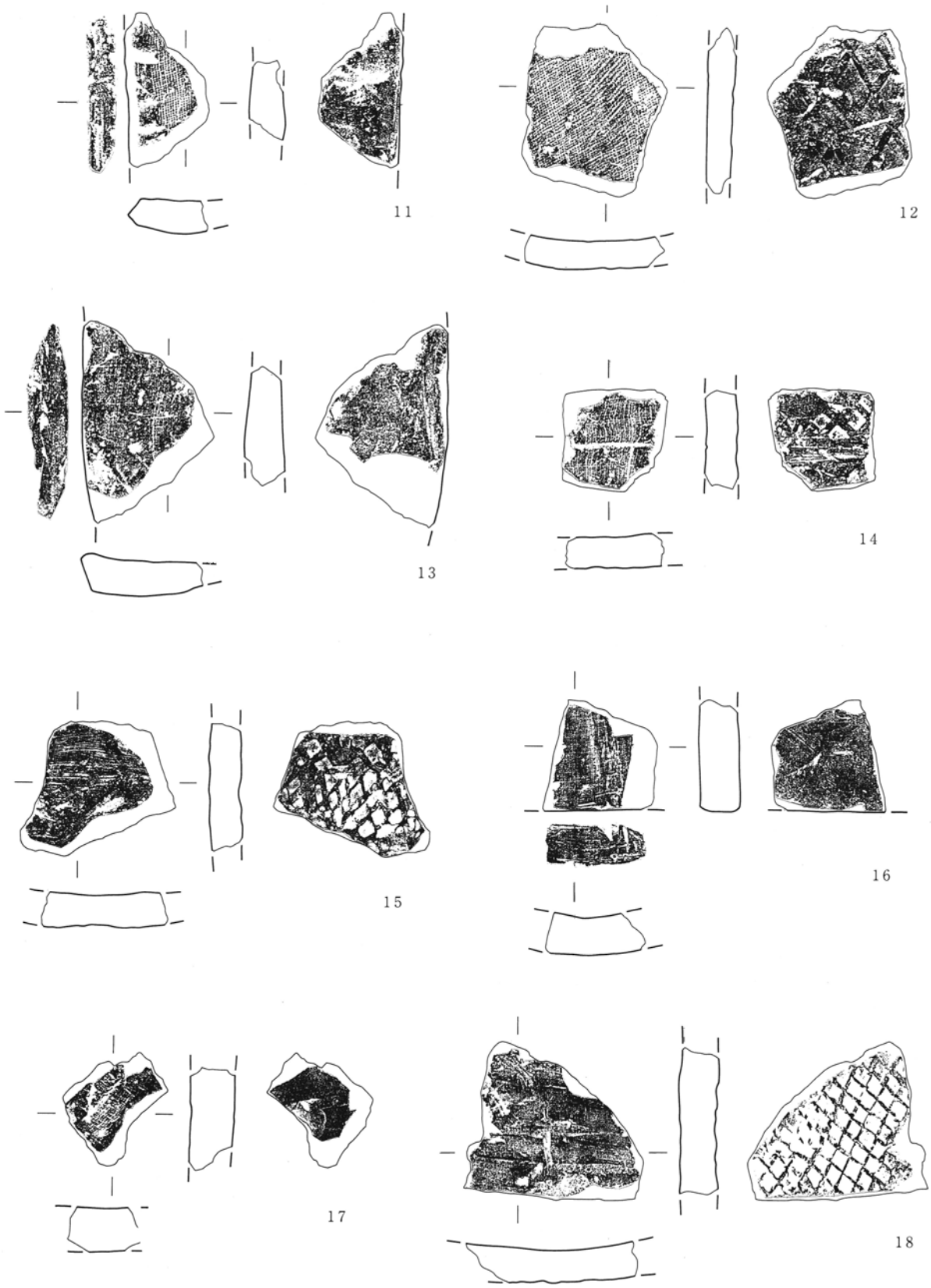




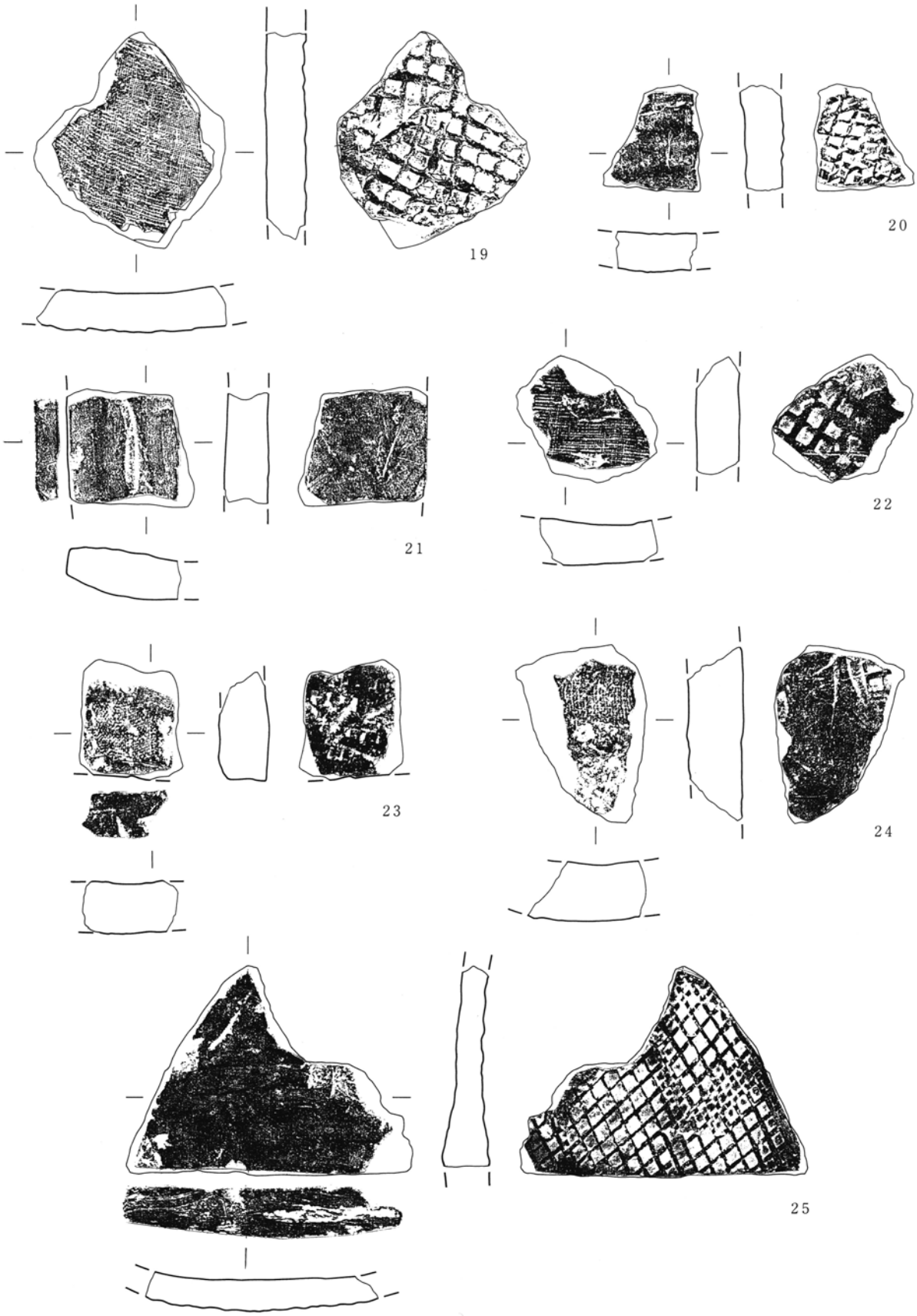
第175図　遺構外出土　古代土器・瓦（１）



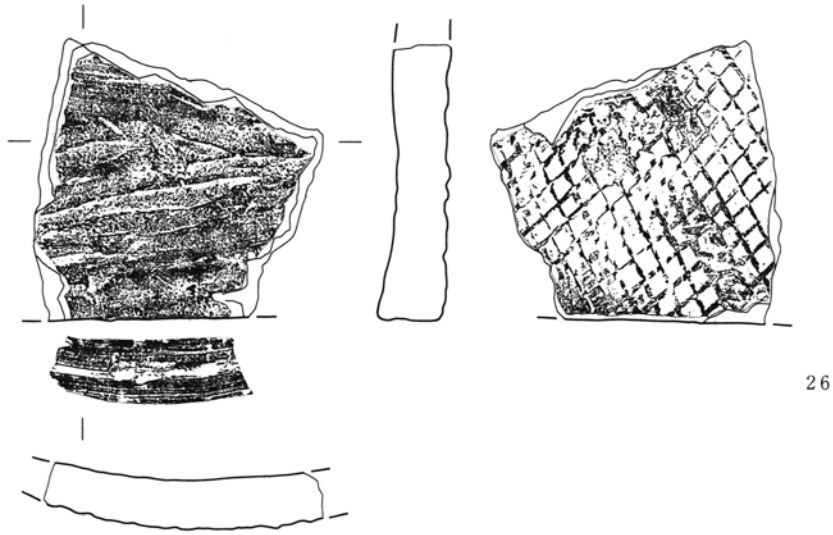
第176図　遺構外出土　古代瓦（２）



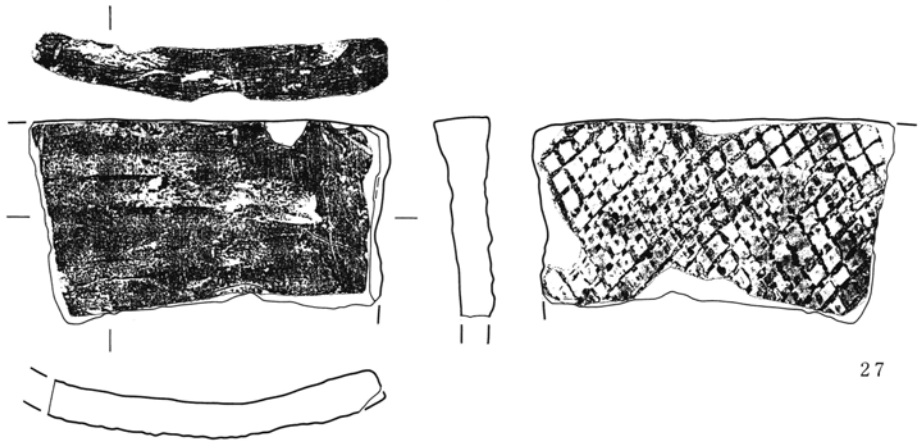
第177図　遺構外出土　古代瓦（３）



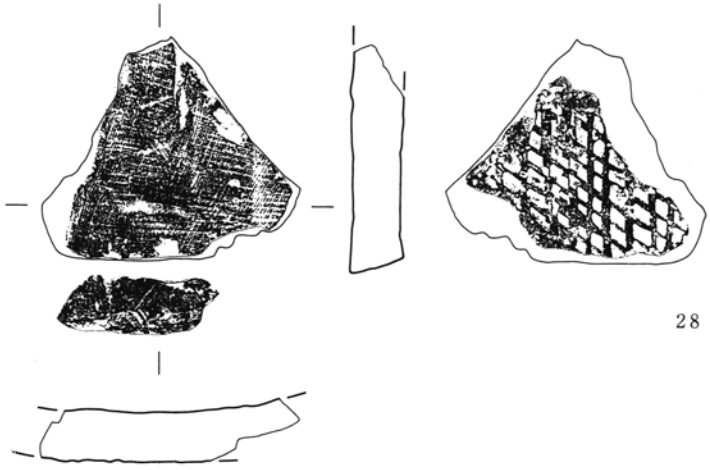
第178図　遺構外出土　古代瓦（４）



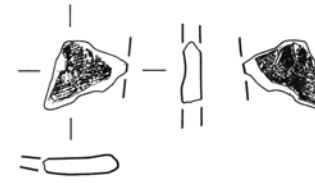
26



27



28

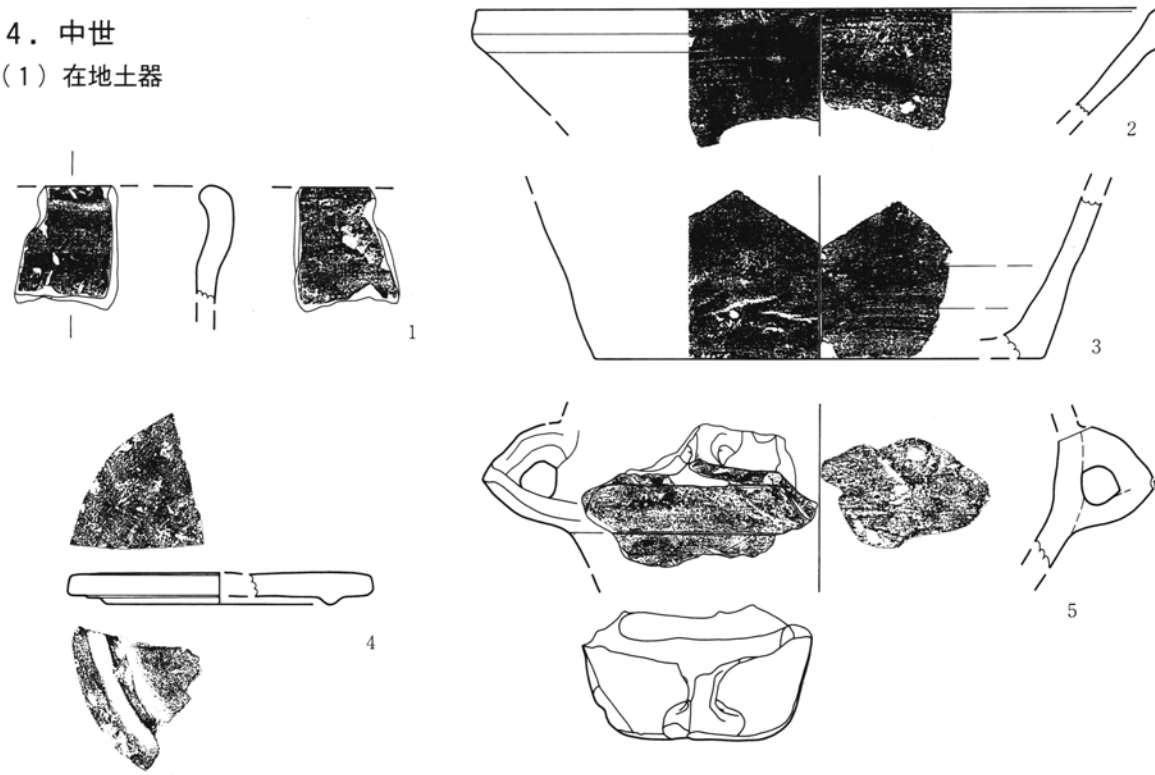


29

第179図　遺構外出土　古代瓦（５）

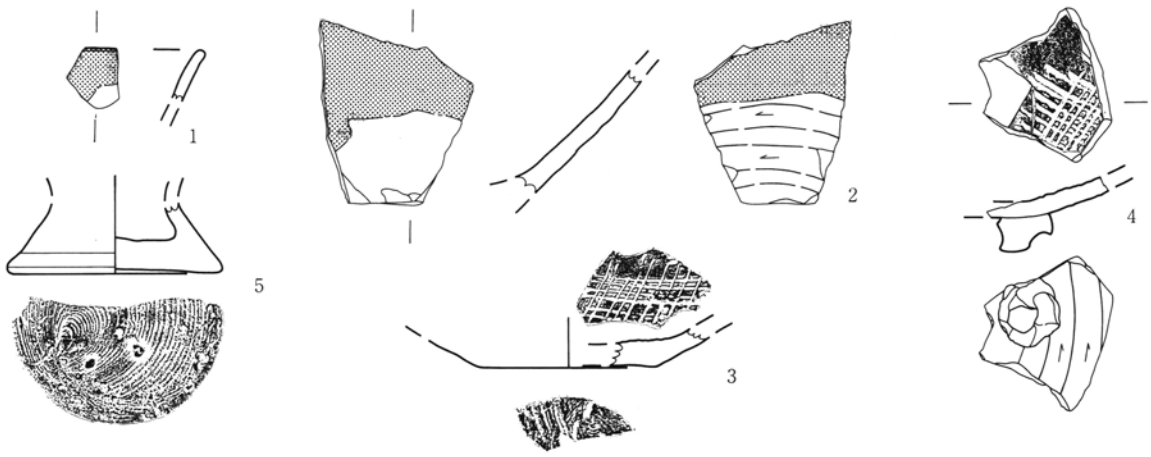
４．中世

（１）在地土器



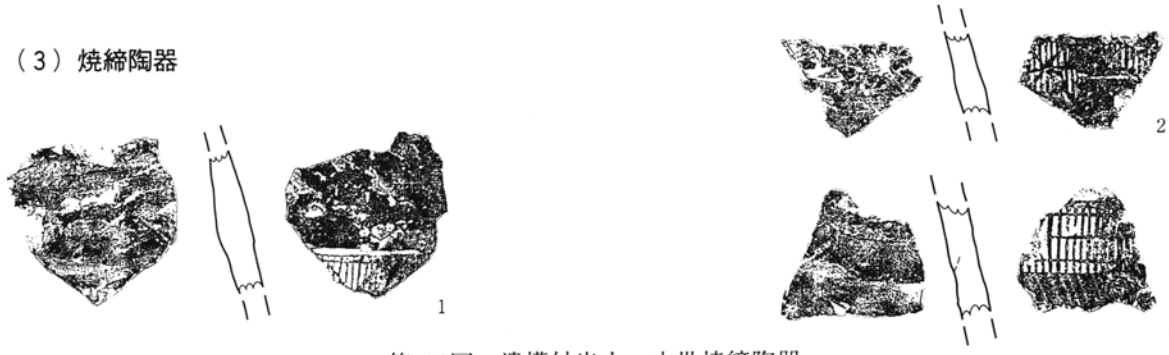
第180図　遺構外出土　中世在地土器

（２）国産施釉陶器



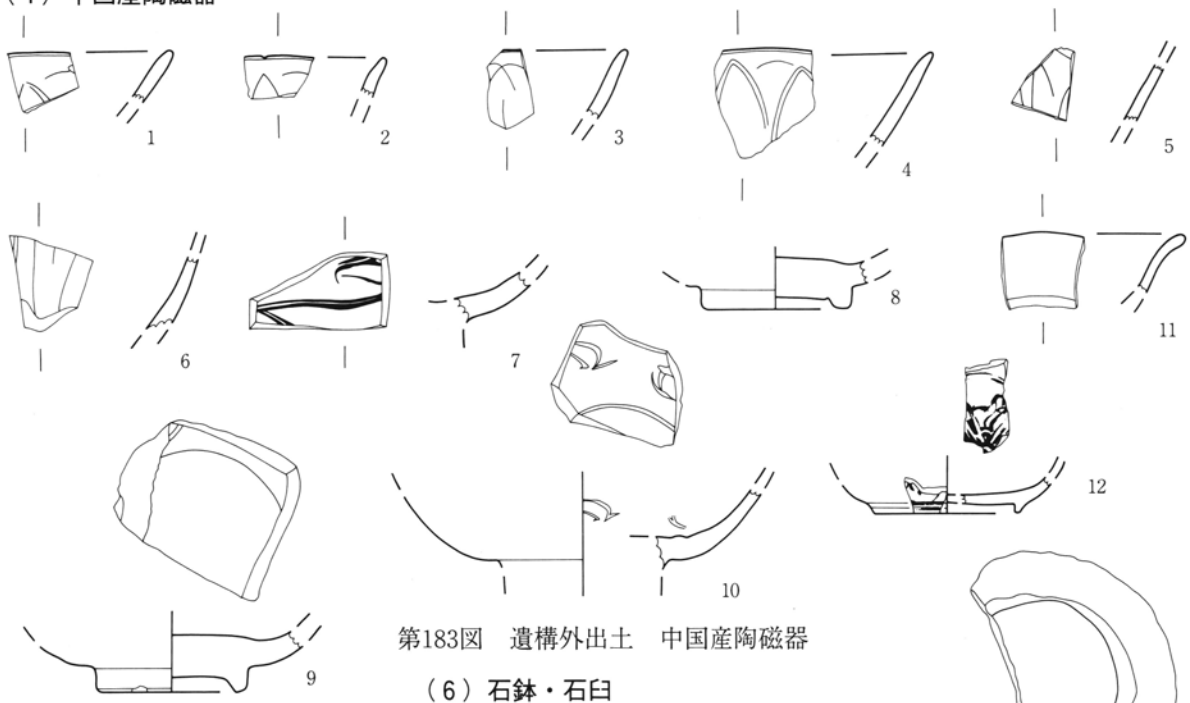
第181図　遺構外出土　中世国産施釉陶器

（３）焼締陶器



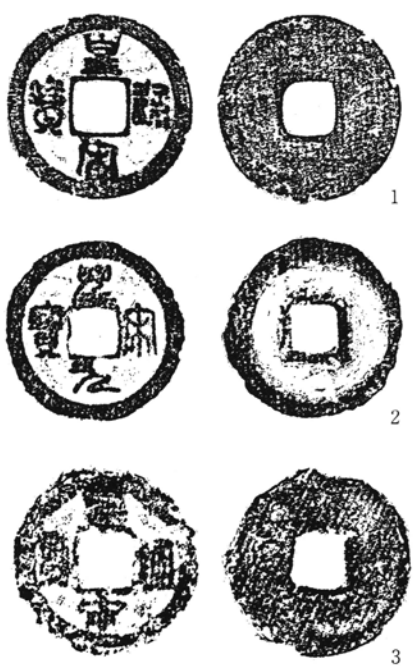
第182図　遺構外出土　中世焼締陶器

（４）中国産陶磁器



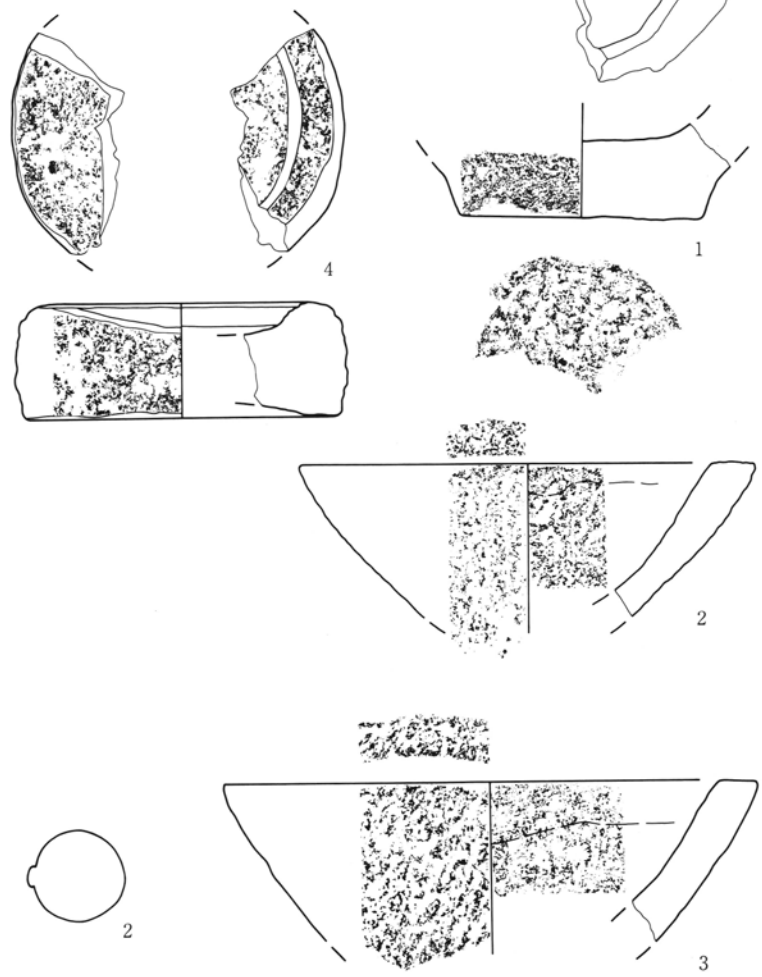
第183図　遺構外出土　中国産陶磁器

（５）銅銭



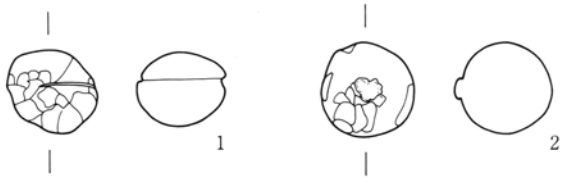
第184図　遺構外出土　銅銭

（６）石鉢・石臼



第185図　遺構外出土　石鉢・石臼

（７）鉄砲玉



第186図　遺構外出土　鉄砲玉

第５章　自然科学分析

１．群馬県、下植木壱町田遺跡の自然科学分析（１）　　株式会社 古環境研究所

Ⅰ．下植木壱町田遺跡の土層とテフラ

１．はじめに

群馬県域には、赤城火山や榛名火山さらに浅間火山など多くの火山から噴出したテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を求めることによって、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。そこで良好な土層断面が認められた下植木壱町田遺跡においても、地質調査とテフラ検出分析を合わせて行って示標テフラの層位を明らかにし、土層の堆積年代に関する資料を得ることになった。

２．土層の層序

調査分析の対象となった地点は、３区72Ａ-3グリッドトレンチ、３区62Ｂ-7グリッドトレンチ、５区75Ｊ-1グリッドトレンチ、１区74Ｆ-4グリッドトレンチ、１区74Ｈ-5グリッドトレンチ、５区75Ｇ-0グリッドトレンチの６地点である。以下、地点ごとに土層の層序について記載する。

（１）３区72Ａ-3グリッドトレンチ

この地点では、下位より黒褐色土（層厚15㎝以上）、白色細粒火山灰層（層厚４㎝）、褐色土（層厚16㎝）、灰色砂質土（層厚23㎝）、褐色土（層厚14㎝）、表土（層厚24㎝）が認められる（図Ａ）。

（２）３区62Ｂ-7グリッドトレンチ

ここでは、下位より木片を多く含む黒褐色泥炭層（層厚５㎝以上）、灰褐色砂質土（層厚13㎝）、暗褐色泥炭層（層厚２㎝）、灰褐色砂質土（層厚13㎝）、褐色泥炭層（層厚７㎝）、青灰色粘質土（層厚５㎝）、成層したテフラ層、暗灰色土（層厚13㎝）、白色軽石（最大径５㎜）および灰色軽石（最大径４㎜）混じり黒色粘質土（層厚７㎝）、白色軽石混じり暗灰色土（層厚13㎝，軽石の最大径３㎜）、黒褐色土（層厚４㎝）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚４㎝）、灰色砂質土（層厚４㎝）、黄褐色砂質土（層厚５㎝）、灰色砂質土（層厚７㎝）、白色軽石混じり灰色土（層厚５㎝，軽石の最大径３㎜）、灰色土（層厚23㎝）が認められる（図Ｂ）。

これらのうち、成層したテフラ層の下位の２層準に認められる灰色砂質土は、約1.8-2.2万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（Ａｓ－ＢＰ Group，新井，1962，早田，1994）に同定される。また成層したテフラ層は、下部の桃灰色粗粒火山灰層（層厚12㎝）と上部の白色細粒火山灰層（層厚２㎝）から構成されている。このテフラ層は、層相から1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（Ａｓ－ＹＰ，新井，1962，町田・新井，1992）に同定される。

（3） 5区75J-1グリッドトレンチ

ここでは、下位より黒褐色泥炭層（層厚3㎝以上）、褐灰色細粒軽石層（層厚9㎝，軽石の最大径4㎜）、暗灰色泥炭層（層厚2㎝）、灰色粗粒火山灰混じり褐色泥炭層（層厚2㎝）、黒灰色泥炭層（層厚5㎝）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚11㎝）、灰色砂質土（層厚8㎝）、灰色粘土層（層厚2㎝）、成層したテフラ層、灰白色軽石混じり灰色土（層厚12㎝，軽石の最大径2㎜）、黒褐色粘質土（層厚11㎝）、灰色軽石に富む黒褐色粘質土（層厚8㎝，軽石の最大径3㎜）、灰褐色土（層厚9㎝）、暗褐色表土（層厚15㎝）が認められる（図E）。

これらのうち、成層したテフラ層の下位の2層準に認められるテフラ層は、As－BP Groupに同定される。また成層したテフラ層は、下位より桃灰色粗粒火山灰層（層厚13㎝）、青灰色細粒火山灰層（層厚2㎝）、桃灰色粗粒火山灰層（層厚4㎝）、青灰色細粒火山灰層（層厚3㎝）から構成されている。このテフラ層は、層相からAs－YPに同定される。

（4） 1区74F-4グリッドトレンチ

ここでは、下位より青灰色粘土層（層厚8㎝）、成層したテフラ層、青灰色砂質シルト（層厚13㎝）、黒褐色泥炭層（層厚13㎝）、黒泥層（層厚12㎝）、黒褐色土（層厚11㎝）、灰色軽石に富む黒褐色土（層厚8㎝）、黒色土（層厚4㎝）、白色軽石混じり暗褐色土（層厚11㎝，軽石の最大径5㎜）、黒褐色土（層厚6㎝）、褐灰色粗粒火山灰層（層厚4㎝）、砂混じり黒褐色土（層厚7㎝）、褐色砂質土（層厚4㎝）、黄褐色砂質土（層厚3㎝）、灰褐色土（層厚27㎝）が認められる（図D）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より桃灰色粗粒火山灰層（層厚10㎝）、成層した白色細粒火山灰層（層厚6㎝）から構成されている。このテフラ層は、層相からAs－YPに同定される。また褐灰色粗粒火山灰層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As－B，新井，1979）に同定される。

（5） 1区74H-5グリッドトレンチ

ここでは、下位より灰色粘質土（層厚31㎝）、白色細粒軽石混じり暗褐色泥炭層（層厚17㎝）、灰色火山灰質土（層厚8㎝）、黄白色細粒軽石混じり灰褐色土（層厚5㎝）、灰褐色土（層厚7㎝）、褐色砂質土（層厚6㎝）、灰色粗粒火山灰層（層厚13㎝）、褐色土（層厚13㎝）、白色細粒軽石混じり褐色土（層厚5㎝）、黄色細粒軽石混じり黄褐色土（層厚8㎝）、灰褐色土（層厚5㎝）、灰褐色表土（層厚17㎝）が認められる（図C）。

これらのうち、灰色火山灰質土の上位で、白色細粒軽石混じり褐色土の間の2層準のテフラ層は、As－BP Groupに同定される。また褐色土の中の白色細粒軽石は、岩相からや層位などから、約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石（As－Ok1，中沢ほか，1985，町田・新井，1992，早田，1994）に由来すると考えられる。その上位の土層に多く含まれる黄色細粒軽石は、岩相からAs－YPに由来すると考えられる。

（6） 5区75G-0グリッドトレンチ

この地点では、亜角礫混じり灰色泥層（層厚3㎝以上）の上位に、下位より黒褐色泥炭層（層厚5㎝以上）、白色細粒軽石層（層厚2㎝，軽石の最大径2㎜）、暗褐色泥炭層（層厚15㎝）、黄色がかった灰色粗粒火山灰層（層厚8㎝）、暗褐色泥炭層（層厚5㎝）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚1㎝）、暗褐色泥炭層（層厚9㎝）、黄色がかった灰色細粒軽石層（層厚5㎝）、暗褐色泥炭層（層厚1㎝）、黄色がかった灰色細粒軽石層（層厚3㎝，

軽石の最大径３㎜)、暗褐色泥炭層（層厚２㎝)、灰色粗粒火山灰層（層厚３㎝)、褐灰色砂質土（層厚４㎝)、暗褐色泥炭層（層厚８㎝)、灰色粗粒火山灰に富む黒灰色砂質土（層厚３㎝)、黒灰色砂質土（層厚２㎝)、成層したテフラ層、青色がかった灰色砂質シルト層（層厚７㎝)、黒灰色土（層厚２㎝)、灰色軽石混じり黒灰色土（層厚１㎝)、黒灰色土（層厚３㎝)、暗灰色砂質土（層厚８㎝)、灰色粗粒火山灰混じり黒灰色土（層厚３㎝)、白色粗粒火山灰および灰色粗粒火山灰に富む灰色砂質土（層厚８㎝)、暗褐色表土（層厚14㎝）が認められる（図Ｆ)。

これらのうち層厚３㎝の灰色粗粒火山灰層以下のテフラ層は、層相からＡｓ－ＢＰ Groupに同定されると考えられる。また成層したテフラ層は、下位より桃灰色粗粒火山灰層（層厚４㎝)、白色細粒火山灰層（層厚0.8㎝)、桃灰色粗粒火山灰層（層厚２㎝)、白色細粒火山灰層（層厚0.2㎝)、桃灰色粗粒火山灰層（層厚0.3㎝）から構成されている。このテフラ層は、層相からＡｓ－ＹＰに同定される。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

示標テフラ層の層位を明らかにするため、テフラ検出分析を行い示標テフラの降灰層準の把握を試みた。分析試料は３区72Ａ-3グリッドトレンチ、５区75Ｊ-1グリッドトレンチ、１区74Ｆ-4グリッドトレンチ、１区74Ｈ-5グリッドトレンチ、５区75Ｇ-0グリッドトレンチの５地点で採取された８試料である。

１）試料10ｇを秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析結果を、表Ａに示す。３区72Ａ-3グリッドトレンチでは、試料番号７に多くの灰白色軽石（最大径1.9㎜）が認められた。この軽石はスポンジ状によく発泡しており、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相からＡｓ－Ｃに由来すると考えられる。したがって、試料番号７付近にＡｓ－Ｃの降灰層準があると考えられる。また試料番号５に多くの白色軽石（最大径2.1㎜）が認められた。この軽石はあまりよく発泡しておらず、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からＨｒ－ＦＡに由来すると考えられる。なお、試料番号１には、Ｈｒ－ＦＡのほかＡｓ－Ｃに由来する軽石が少量含まれている。

５区75Ｊ-1グリッドトレンチ試料番号１には、灰白色軽石（最大径1.3㎜）が少量含まれている。この軽石の発泡の程度はよくない。したがってＡｓ－Ｃとは異なるテフラに由来すると考えられる。おそらく縄文時代に降灰した浅間火山起源の軽石の可能性が考えられる。１区74Ｆ-4グリッドトレンチ試料番号３には、灰白色軽石（最大径1.3㎜）が比較的多く含まれている。この軽石はスポンジ状によく発泡しており、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相からＡｓ－Ｃに由来すると考えられる。また試料番号２には、白色軽石（最大径1.8㎜）が認められた。この軽石はあまりよく発泡しておらず、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からＨｒ－ＦＡに由来すると考えられる。したがって、試料番号３および２付近に各々Ａｓ－ＣとＨｒ－ＦＡの降灰層準のある可能性が考えられる。

１区74Ｈ-5グリッドトレンチ試料番号１には、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが比較的多く含まれている。この火山ガラスは、その特徴から約2.2-2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Ｔｎ火

山灰（ＡＴ，町田・新井，1976，1992）に由来すると考えられる。層相を合わせて考えると、この試料はＡＴに同定される可能性が大きい。

５区75Ｇ-0グリッドトレンチでは、試料番号１に灰白色軽石（最大径1.8㎜）のほか白色軽石（最大径3.6㎜）が多く含まれている。前者はスポンジ状によく発泡しており、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相からＡｓ－Ｃに由来すると考えられる。また後者はあまりよく発泡しておらず、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からＨｒ－ＦＡに由来すると考えられる。したがってこの地点では、層相を合わせて考えると試料番号１にＡｓ－ＣとＨｒ－ＦＡの降灰層準があると考えられる。

４．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

５区75Ｇ-0グリッドトレンチ試料番号４および試料番号２の２試料について、示標テフラとの同定の精度を向上させるために、屈折率の測定を行った。測定は、位相差法（新井，1972）による。

（２）測定結果

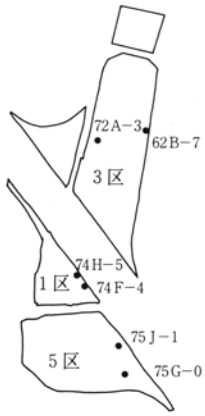
測定結果を表Ｂに示す。５区75Ｇ-0グリッドトレンチ試料番号４には、斜方輝石のほかに単斜輝石が少量認められた。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.705-1.710である。このテフラ粒子は、Ａｓ－ＹＰのすぐ下位にあること、また斜方輝石の屈折率から、Ａｓ－Ｏｋ１に由来すると考えられる。一方、５区75Ｇ-0グリッドトレンチ試料番号２にも、斜方輝石のほかに単斜輝石が少量認められた。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.707-1.711である。このテフラ粒子は、Ａｓ－ＹＰのすぐ上位にあることや斜方輝石の屈折率から、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石（Ａｓ－Ｓｊ，早田，1991，1994，1995）に由来すると考えられる。

５．小結

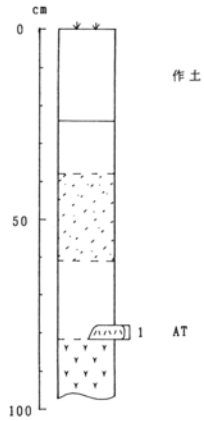
下植木壱町田遺跡において地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ，約2.2-2.5万年前）、浅間板鼻褐色軽石群（Ａｓ－ＢＰ Group，約1.8-2.2万年前）、浅間大窪沢第１軽石（Ａｓ－Ｏｋ１，約1.7万年前）、浅間板鼻黄色軽石（Ａｓ－ＹＰ，約1.3-1.4万年前）、浅間総社軽石（Ａｓ－Ｓｊ，約1.1万年前）、浅間Ｃ軽石（Ａｓ－Ｃ，４世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Ｈｒ－ＦＡ，６世紀初頭）、浅間Ｂテフラ（Ａｓ－Ｂ，1108年）、浅間粕川テフラ（Ａｓ－Ｋｋ，1128年）を検出することができた。

文献

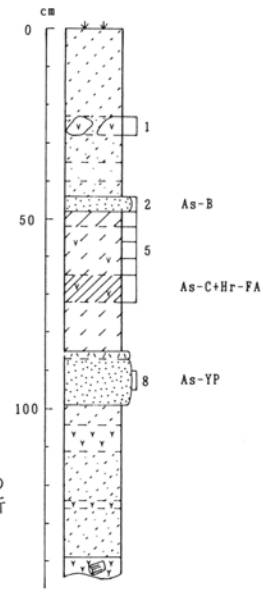
新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒班～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.35，p.2-7.
早田　勉（1994）群馬の示標テフラと自然環境．笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色」，p.20-24.
早田　勉（1995）テフラからさぐる浅間火山の活動史．御代田町誌自然編，p.22-43.



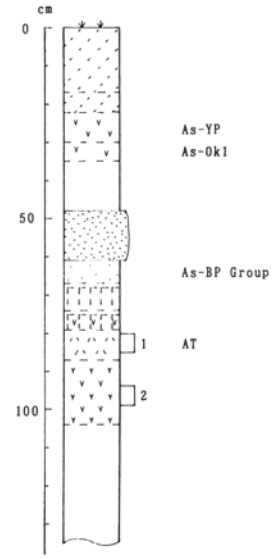
分析地点位置図



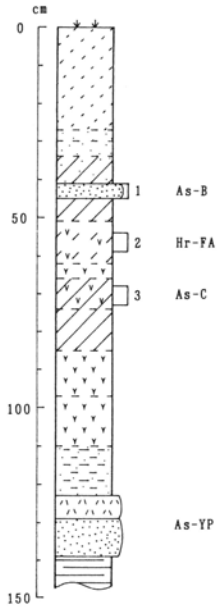
図Ａ　３区 72A−3 グリッドトレンチの土層柱状図　数字はテフラ分析の試料番号



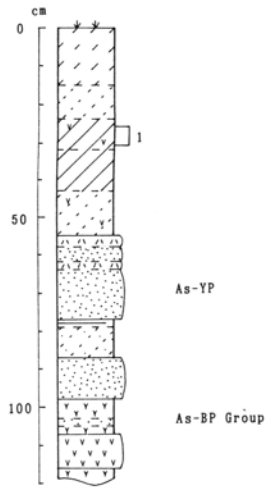
図Ｂ　３区 62B−7 グリッドトレンチの土層柱状図　数字はテフラ分析の試料番号



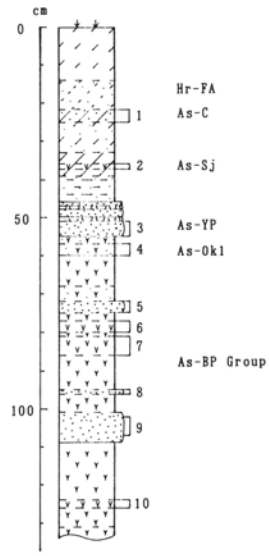
図Ｃ　１区 74H−5 グリッドトレンチの土層柱状図　数字はテフラ分析の試料番号



図Ｄ　１区 74F−4 グリッドトレンチの土層柱状図　数字はテフラ分析の試料番号



図Ｅ　５区 75J−1 グリッドトレンチの土層柱状図　数字はテフラ分析の試料番号



図Ｆ　５区 75G−0 グリッドトレンチの土層柱状図　数字はテフラ分析の試料番号

第187図　自然科学分析図（１）

表A　下植木壱町田遺跡のテフラ検出分析結果

グリッド	試料	軽　石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
3区72A-3	1	＋	白＞灰白	1.8,1.3	＋＋	pm	白＞灰白
	5	＋＋	白＞灰白	2.1,2.2	＋＋＋	pm	白＞灰白
	7	＋＋	灰白＞白	1.9,1.8	＋＋＋	pm	灰白＞白
5区75J-1	1	＋	灰白	1.3	＋＋	pm	灰白
1区74F-4	2	＋＋	白＞灰白	1.8,1.4	＋＋＋	pm	白＞灰白
	3	＋＋	灰白	1.3	＋＋＋	pm	灰白
1区74H-5	1	－	－	－	＋＋	bw	透明
5区75G-0	1	＋＋＋＋	灰白	3.3	＋＋＋	pm	灰白

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．
最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表B　下植木壱町田遺跡の屈折率測定結果

グリッド	試料	重鉱物	斜方輝石の屈折率（γ）
5区75G-0	2	opx＞cpx	1.707-1.711
5区75G-0	4	opx＞cpx	1.705-1.710

位相差法（新井，1972）による．

Ⅱ．下植木壱町田遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析　PL 60－A

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試料

試料は、1区74F-4グリッドトレンチで7点、3区62B-7グリッドトレンチで7点、3区63I-8グリッドトレンチで1点の計15点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間）
2）試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm・約0.02g）
　※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヒエ属型（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

４．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。なお、３区62B-7グリッドトレンチと３区63Ｉ-8グリッドトレンチについては、水田跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表Ａ、表Ｂおよび図Ａ、図Ｂに示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族、ウシクサ族（大型）、Ｂタイプ、Ｃタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）

５．考察

（１）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、関東周辺では密度が3,000個/ｇ程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/ｇとして検討を行った。

１）１区74Ｆ-4グリッドトレンチ（図Ｂ）

Ａs－Ｂ直下層（試料１）からＡs－Ｃの下層（試料７）までの層準について分析を行った。その結果、Ａs－Ｂ直下層（試料１）、Ｈr－ＦＡ混層（試料２）、Ａs－Ｃ混層（試料４）の各層からイネが検出された。このうち、Ｈr－ＦＡ混層（試料２）では密度が2,900個/ｇと高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Ａs－Ｂ直下層（試料１）およびＡs－Ｃ混層（試料４）では密度が1,500個/ｇと比較的低い値であるが、前者は直上をテフラ層で覆われており、後者も直上層（試料３）で検出されていないことから、それぞれ上層か

ら後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、これらの層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2） 3区62B-7グリッドトレンチ（図A）

As－Bの上層（試料1）からAs－Cの下層（試料7）までの層準について分析を行った。その結果、As－Bの上層（試料1～3）、As－B直下層（試料4）、As－Bの下層（試料5）、As－C混層（試料6）からイネが検出された。このうち、As－Bの下層（試料5）では密度が7,500個/g、As－Bの上層（試料1）でも6,000個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As－B直下層（試料4）では密度が1,500個/gと比較的低い値であるが、直上をテフラ層で覆われていることから上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。また、As－C混層（試料6）では密度が2,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

3） 3区63I-8グリッドトレンチ

As－B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが3,100個/gと高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

6．イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。このうち、本遺跡の試料からはオオムギ族とヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

（1）オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、3区62B-7グリッドトレンチのAs－Bの上層（試料1）から検出された。オオムギ族については標本の検討が十分とは言えないが、ここで検出されたのはムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井，1989）である。定量を行っていないことから密度は不明であるが、穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

（2）ヒエ属型

ヒエ属型が検出されたのは、1区74F-4グリッドトレンチのHr－FA混層（試料2）である。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確に識別するには至っていない（杉山ほか，1988）。これは、植物分類上でも両者の差異が不明確なためである。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

表Ａ　群馬県下植木壱町田遺跡の植物珪酸体分析結果

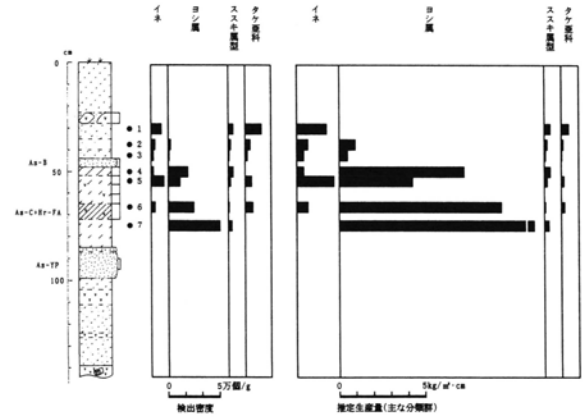
検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試料	1区74F−4グリッドトレンチ 1	2	3	4	5	6	7
イネ科							
イネ	15	29		15			
ヒエ属型		7					
キビ族型	22	15	45	22	59	29	43
ヨシ属	29	51	23	7	74	66	427
ススキ属型	131	66	165	215	133	212	71
ウシクサ族	255	328	399	341	496	498	398
ウシクサ族(大型)	7		15	15		7	
Bタイプ		15	23	7	15	22	
Cタイプ							28
タケ亜科							
ネザサ節型	102	109	90	222	178	212	14
クマザサ属型	15	22	15			15	7
未分類等	306	401	474	400	534	484	235
その他のイネ科							
表皮毛起源	15	15	23	15	7	7	14
棒状珪酸体	830	816	1165	1090	1215	1224	1024
茎部起源	7	15	30	7		15	64
未分類等	648	729	902	778	867	755	861
樹木起源							
多角形板状(コナラ属など)				7			14
植物珪酸体総数	2381	2615	3368	3144	3579	3546	3201

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	0.43	0.86		0.44			
ヒエ属型		0.61					
ヨシ属	1.84	3.22	1.42	0.47	4.68	4.16	26.93
ススキ属型	1.63	0.81	2.05	2.67	1.65	2.63	0.88
ネザサ節型	0.49	0.52	0.43	1.07	0.85	1.02	0.07
クマザサ属型	0.11	0.16	0.11			0.11	0.05

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



図Ａ　下植木壱町田遺跡３区
62Ｂ−７グリッドトレンチのプラント・オパール分析結果

表Ｂ　下植木壱町田遺跡のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について計数

検出密度（単位：×100個/g）

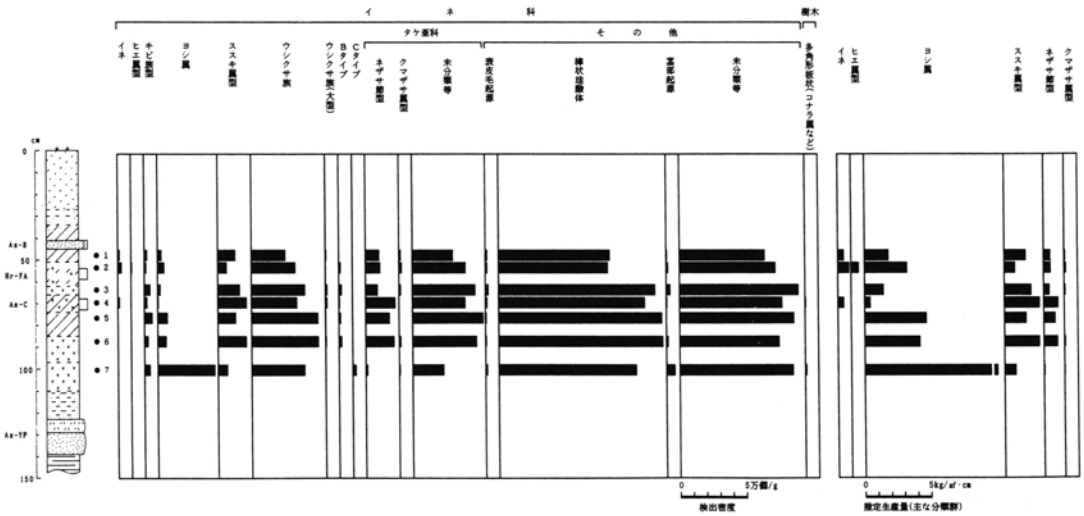
分類群＼試料	① 1	2	3	4	5	6	7	② 1
イネ	60	23	15	15	75	23		31
ヨシ属		15	8	115	68	150	303	221
ススキ属型	30	15	8	31	15	8	23	8
タケ亜科	97	31	15		38	45		

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	1.76	0.67	0.45	0.45	2.21	0.66		0.90
ヨシ属		0.96	0.48	7.29	4.27	9.49	19.14	13.96
ススキ属型	0.37	0.19	0.09	0.38	0.19	0.09	0.28	0.09
タケ亜科	0.47	0.15	0.07		0.18	0.22		

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

①３区62Ｂ−７グリッドトレンチ　②３区63Ｉ−８グリッドトレンチ



図Ｂ　群馬県下植木壱町田遺跡１区74Ｆ−４グリッドトレンチの植物珪酸体分析結果

第188図　自然科学分析図（２）

7．植生と環境の推定

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、As－Cより下層では各地点ともヨシ属が卓越していることが分かる。As－C混層からAs－B直下層にかけてもおおむねヨシ属が優勢であり、1区74F-4グリッドトレンチではススキ属型も比較的多くなっている。

以上のことから、遺跡周辺は稲作が開始される以前はヨシ属が多く生育する湿地的な状況であったと考えられ、As－C混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも考えられる。なお、1区74F-4グリッドトレンチの周辺ではススキやチガヤなどが生育する比較的乾燥したところも見られたものと推定される。

8．まとめ

以上のように、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA，6世紀初頭）混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、浅間Bテフラ（As－B，1108年）直下層や浅間C軽石（As－C，4世紀中葉）混層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属が繁茂する湿地的な状況であったと考えられ、浅間C軽石混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

参考文献
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.
杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27-37.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.
杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、FP直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19，p.94-95.

Ⅲ．下植木壱町田遺跡における花粉分析　PL 60－B

1．試料

試料は、1区74F-4グリッドトレンチのAs－C直下層（試料5）である。同層では縄文時代後期の土器が検出されている。

2．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500 rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

３．結果

同定された分類群は、樹木花粉１、草本花粉４、シダ植物胞子１形態の計６である。これらの学名と和名および粒数を表Ａに示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、カラマツソウ属、アブラナ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子

表Ａ　下植木壱町田遺跡における花粉分析結果

分類群		1区 74F－4 グリッド トレンチ　試料５ (縄文後期包含層)
学名	和名	
Arboreal pollen	樹木花粉	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	2
Thalictrum	カラマツソウ属	1
Cruciferae	アブラナ科	1
Artemisia	ヨモギ属	14
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	2
Arboreal pollen	樹木花粉	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	18
Total pollen	花粉総数	19
Fern spore	シダ植物胞子	2

分析の結果、Ａs－Ｃ直下層（試料５）からは花粉粒があまり検出されず、検出された花粉粒も分解を受けている。草本花粉のヨモギ属が他より多いのが特徴であり、樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属がわずかに検出された。

４．花粉分析から推定される植生と環境

浅間Ｃ軽石（Ａs－Ｃ，４世紀中葉）直下層の堆積当時は、ヨモギ属などが生育する日当たりの良い乾燥地が分布していたと推定される。植物珪酸体分析（第Ⅱ章）でも、この時期にはヨシ属が減少してススキ属が増加しており、堆積環境の乾燥化が進んだことが分かる。樹木は孤立木かやや遠方に分布していたと考えられる。

参考文献
中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

2．群馬県、下植木壱町田遺跡の自然科学分析（2）

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．下植木壱町田遺跡の土層とテフラ

1．はじめに

群馬県域には、浅間火山や榛名火山をはじめとする多くの火山から噴出したテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を遺跡で求めることによって、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。良好な土層断面が認められた下植木壱町田遺跡においても、地質調査を行って土層を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行って、示標テフラの層位の把握を試みた。調査分析の対象となった地点は、３区62G-9グリッドトレンチである。

2．土層の層序

下植木壱町田遺跡の台地部を構成する地層をよく観察できた３区62G-9グリッドトレンチでは、下位より亜円礫層（層厚20㎝以上，礫の最大径185㎜）の上位に、下位より灰色砂層（層厚５㎝）、暗褐色泥炭層（層厚23㎝）、灰褐色シルト層（層厚18㎝）、白色軽石混じり灰色シルト層（層厚16㎝，最大径４㎜）、灰褐色シルト層（層厚４㎝）、暗褐色泥炭層（層厚２㎝）、灰褐色シルト層（層厚11㎝）、暗灰褐色腐植質シルト層（層厚７㎝）、白色軽石層（層厚15㎝，軽石の最大径13㎜）、白色軽石混じり青灰色シルト層（層厚15㎝）、青灰色シルト層（層厚52㎝）、白色軽石混じり暗灰色砂質シルト層（層厚７㎝，軽石の最大径12㎜）、黒泥層（層厚11㎝）、葉理の発達した白色細粒火山灰層（層厚４㎝）、白色風化軽石層（層厚４㎝）、暗灰色腐植質泥層（層厚２㎝）、灰色粗粒火山灰層（層厚17㎝）、黄白色粘土層（層厚２㎝）、灰色粗粒火山灰層（層厚６㎝）、黄白色粘土層（層厚18㎝）、灰色粗粒火山灰層（層厚８㎝）、灰色土（層厚５㎝）、暗灰色土（層厚９㎝）、灰色軽石に富む暗灰色土（層厚４㎝）が認められる（図Ａ）。

これらのうち、白色軽石層は、その層相から約4.1-4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石（Ｈｒ－ＨＰ，新井，1962，鈴木，1976，大島，1986）に同定される。また葉理の発達した白色細粒火山灰層の上位の３層のテフラ層は、層相から約1.8-2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（Ａｓ－ＢＰ Group，新井，1962，早田，1992）に同定される。その上位の灰色粗粒火山灰層は、層相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（Ａｓ－ＹＰ，新井，1962，町田・新井，1992）に同定される。さらに最上位の灰色軽石については、層位や岩相から４世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（Ａｓ－Ｃ，新井，1979）に由来すると考えられる。

3．テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

白色軽石層の下位の土層について、テフラの混入の有無を調べるために、基本的に５㎝ごとに採取された試料のうち５㎝おきの試料10点、さらに白色細粒火山灰層と示標テフラとの同定を行うために白色細粒火山灰層の合計11点について、テフラ検出分析を行うことになった。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

１）試料10ｇを秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を表Ａに示す。試料番号21から11にかけては、白色軽石（最大径5.2㎜）が比較的多く含まれている。軽石の班晶としては、斜方輝石と単斜輝石が含まれている。ただしその顕著な降灰層準は不明である。試料番号５には、白色軽石（最大径2.6㎜）が少量含まれている。班晶としては、角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相から上位の白色軽石に由来するものと考えられる。試料番号２には、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスがとくに多く含まれている。この火山ガラスは、その特徴から約2.4-2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ，町田・新井，1976，1992）に由来すると考えられる。葉理があることから、完全な一次堆積層とは考えられないが、その純度が高いことからほぼＡＴの降灰層準を示していると思われる。

４．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

試料番号11および試料番号３に含まれるテフラ粒子について屈折率測定を行い、示標テフラとの同定精度を向上させることにした。測定は、位相差法（新井，1972）による。

（２）測定結果

試料番号11には、重鉱物として、量の多い順に斜方輝石、単斜輝石、普通角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は1.704-1.714である。また普通角閃石の屈折率（ｎ２）は、各々1.676-1.687である。これらの値は、これまで知られている赤城火山起源のテフラとは完全に一致しない。このことから、これらのテフラ粒子は大胡火砕流堆積物（新井，1962）など多くのテフラから２次的に混入したものと考えられる。

また試料番号３には、重鉱物として量の多い順に、普通角閃石、斜方輝石、カミングトン閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は1.708-1.712である。また普通角閃石とカミングトン閃石の屈折率（ｎ２）は、各々1.671-1.677および1.664-1.668である。重鉱物の組成や斜方輝石、普通角閃石さらにカミングトン閃石の屈折率などから、このテフラは約３万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎火山灰（Ｈｒ－ＨＡ，早田，1990）に同定される。

５．小結

下植木壱町田遺跡３区62Ｇ-9グリッドトレンチにおいて地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より榛名八崎軽石（Ｈｒ－ＨＰ，約4.1-4.4万年前）、榛名八崎火山灰（Ｈｒ－ＨＡ，約３万年前）、姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ，約2.4-2.5万年前）、浅間板鼻褐色軽石群（Ａｓ－ＢＰ Group，約1.8-2.1万年前，３層）、浅間板鼻黄色軽石（Ａｓ－ＹＰ，約1.3-1.4万年前）、浅間Ｃ軽石（Ａｓ－Ｃ，４世紀中葉）が検出された。

文献
新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒班～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.
大島　治（1986）榛名火山の地質．日本の地質関東地方編集委員会編「関東地方」，p.222-224.
早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.37-129.
早田　勉（1994）群馬の示標テフラと自然環境．笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色予稿集」，p.20-24.
早田　勉（1995）テフラからさぐる浅間山の活動史．御代田町誌編纂委員会編「御代田町誌自然編」，p.22-43.
鈴木正男（1976）過去をさぐる科学．講談社，234p.

表A　3区62G-9グリッドトレンチにおけるテフラ検出分析結果

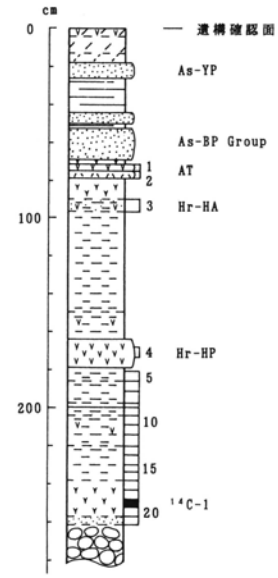
試料	軽　石			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	形態	色調
2	−	−	−	++++	bw	透明
5	+	白	2.6	−	−	−
7	−	−	−	−	−	−
8	−	−	−	−	−	−
9	−	−	−	−	−	−
11	++	白	4.4	−	−	−
13	++	白	2.1	−	−	−
15	++	白	5.2	−	−	−
17	++	白	3.2	−	−	−
19	++	白	3.9	−	−	−
21	++	白	2.8	−	−	−

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，−：認められない．
最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

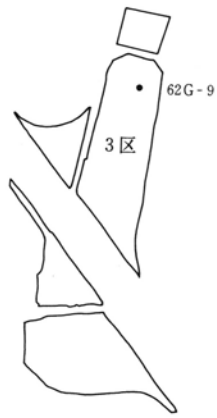
表B　3区62G-9グリッドトレンチにおける屈折率測定結果

試料	重鉱物	斜方輝石（γ）	角閃石（n2）
3	ho>opx>cum	1.708-1.712	ho：1.671-1.677 cum：1.664-1.668
11	opx>cpx>ho	1.704-1.714	ho：1.676-1.687

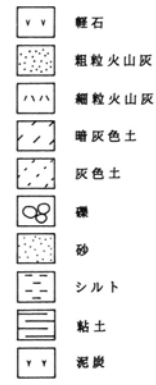
opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：普通角閃石，cum：カミングトン閃石．屈折率の測定は位相差法（新井，1972）による．



図A　3区62G−9グリッドトレンチの土層柱状図と年代測定試料の層位　数字はテフラ分析の試料番号



分析地点位置図



第189図　自然科学分析図（3）

Ⅱ．下植木壱町田遺跡における放射性炭素年代測定結果

１．試料と方法

調査地点	試料	種類	前処理・調整	測定法
３区62G-9	^{14}C-１	腐植	酸-アルカリ-酸洗浄・石墨調整	AMS法

２．測定結果

調査地点	試料	^{14}C年代（年ＢＰ）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代	測定No. beta-
３区62G-9	^{14}C-１	16380±90	-27.2	16350±90	－	98819(Gr)

１）^{14}Ｃ年代測定値

試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から、単純に現在（1950年ＡＤ）から何年前（ＢＰ）かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は5,568年を用いた。

２）δ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ／^{12}Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ／^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正^{14}Ｃ年代値と歴年代補正曲線との交点の歴年代値を意味する。1σは補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ値が表記される場合もある。

５）測定No.

Grはオランダのグローニンゲン（Groningen）大学の加速器を使用したことを示す。

３．コメント

今回測定を行った試料は、約4.1-4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石層（新井, 1962, 鈴木, 1976, 大島, 1986）の下位にあるにも関わらず、かなり新しい年代値が得られた。本遺跡と同一流域にある遺跡においても、約３万年前の榛名八崎火山灰（早田, 1990）の下位の泥炭層より明らかに新しすぎる年代値が得られている（古環境研究所, 未公表資料）。これらのことから、本遺跡とその周辺に関しては、少なくとも約３万年前以前の地層において、地下水による汚染作用などを受けて、新しい年代測定値の得られる傾向があるように思える。

文献
新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
大島　治（1986）榛名火山の地質．日本の地質関東地方編集委員会編「関東地方」，p.222-224.
早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，１，p.37-129.
鈴木正男（1976）過去をさぐる科学．講談社，234p.

Ⅲ．下植木壱町田遺跡における植物珪酸体分析　PL 61

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

2．試料

試料は、3区62G-9グリッドトレンチで採取された試料1～11の11点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間）
2）試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm・約0.02g）
　※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4．分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表Aおよび図Aに示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族、Bタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）

（２）植物珪酸体の検出状況

礫層直上の泥炭層（試料11）からＡＴ直下層（試料１）までの層準について分析を行った。その結果、泥炭層（試料11）ではタケ亜科（未分類等）や棒状珪酸体が比較的多く検出され、ヨシ属やネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。その上層（試料10）ではイネ科Ｂタイプや樹木（ブナ科コナラ属など）が出現している。イネ科Ｂタイプの給源植物は不明であるが、泥炭層などの湿地性堆積物から一般的に検出されている。

表Ａ　群馬県下植木壱町田遺跡における植物珪酸体分析結果

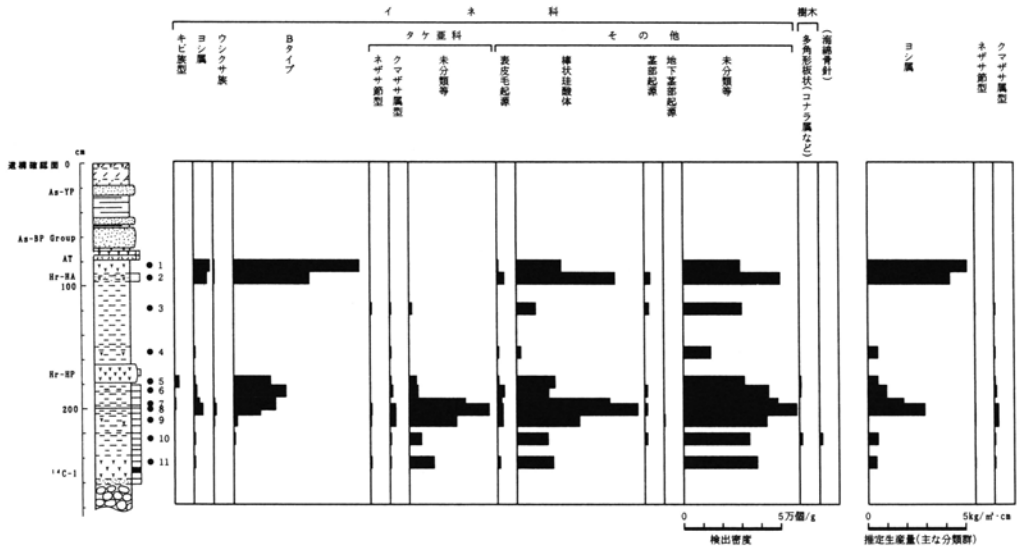
検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試料	3区62G−9グリッドトレンチ										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
イネ科											
キビ族型					23		7				
ヨシ属	81	67		8	8	15	29	46		8	7
ウシクサ族	7	7					7	15	6		
Ｂタイプ	643	388			189	269	214	137	18	8	
タケ亜科											
ネザサ節型			8					8	6		7
クマザサ属型			8	8	8	15		30	30	8	7
未分類等			15		38	45	287	410	242	61	127
その他のイネ科											
表皮毛起源	7	37		8	8	37	22	30	30		15
棒状珪酸体	229	501	99	23	196	164	472	616	319	159	187
茎部起源		30	23			15		15		15	
地下茎部起源									6		
未分類等	296	501	303	143	317	441	487	585	431	342	382
樹木起源											
多角形板状(コナラ属など)					8	7				15	
(海綿骨針)										15	
植物珪酸体総数	1264	1531	455	188	792	1008	1526	1893	1087	615	735

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡·cm）

ヨシ属	5.13	4.24		0.47	0.48	0.94	1.86	2.88		0.48	0.47
ネザサ節型			0.04					0.04	0.03		0.04
クマザサ属型			0.06	0.06	0.06	0.11		0.23	0.22	0.06	0.06

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



図Ａ　下植木壱町田遺跡３区62G−９グリッドトレンチにおける植物珪酸体分析結果

第190図　自然科学分析図（４）